KAIZO

改造

新年號

1926

糖尿病治療ホルモン劑

ランゲリン

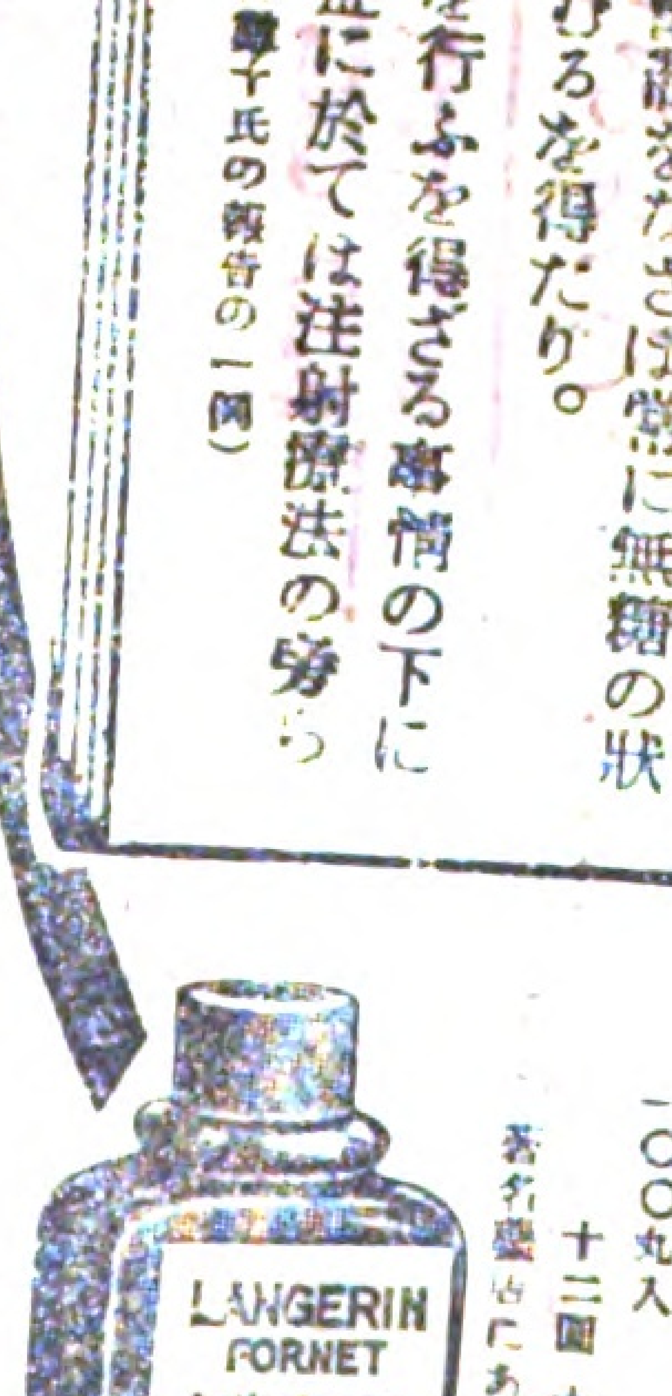
獨逸ザールブルッケン發生物研究所長
フオルネット博士創製

糖尿病の大部分を占むる輕症及び中等症に最も適應し、その內服は糖尿を減退又は無糖となし、煩渇、多食慾その他合併症を治癒し、心身を著しく爽快ならしむ、然も應用簡便にして何等の副作用なきを特長とす。

プロフエッソル　**エスクッヘン氏**　（伯林、一九二四年十二月）　曰く

『吾が病院にては從來糖尿病の治療にインシュリン注射療法を行ひ來りしが、今回ランゲリンの內服療法を系統的に實施觀察せるに、全然同樣の作用あることを知りたるが故に入院患者は勿論、退院後に於ても之を持用せしむることゝせり。今その成績を總括して述べんに、重症にありては、尿中の糖排泄量常に二〇％以上の減退を示し、自覺症狀著しく輕快せり。輕症にありては、一方に於て相當に食餌の節制をなさば常に無糖の狀態を持續し、一日の糖排泄量を僅に二〇—四〇瓦位減退せしむるを得たり。

要するに輕症患者にして嚴重なる食餌療法を忌み、又これを行ふを得ざる事情の下にある者にとりては實に有用缺くべからざるものにして、又重症に於ては注射療法の傍ら之を連續服用せしむるときは一層有効なり。』（世界各地の醫學者二百數十氏の報告の一例）



二〇丸入　四圓五十錢
一〇〇丸入　十二圓十五錢
著名藥店にあり

（實驗報告書進呈）

日本總代理店
株式會社 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町



改造新年號目次

別附録


Onoto
the Pen
¥ 6.50 以上（カタログ進呈）
ATHENA THE PEN ¥ 3.50
東京
丸善株式會社
ONOTO

室伏高信著

最新刊

日本論

定價壹圓八十錢
送料十八錢

先づ日本を知れ！

『私は「文明の沒落」を出版してから一年に凡そ一册位ひの割で書物を書き且つ出版する事が專業である。『土に還る』は此意味で第二の主著『日本論』は第三のものとして漸く書きあげました。私は西洋の知識を追ふことに汲々としてこゝに何年、あまりに長く日本を忘れてゐました。私たちの心が日本に歸るの時が來ました。寂しい私たちの自由精神が熱烈にも日本を、故鄕を戀ひもとめるの時が來ました。私は西洋の學問に入りこむ時の何倍か知らないほどの吸ひこまれるような心持ちで日本について探しもとめるようになりました。その第一の紀念がこの日本論であります』＝著者。

文明の沒落

增訂第四十版！

定價壹圓八十錢
送料十八錢

土に還る

再訂第一萬部

定價壹圓六十錢
送料十八錢

女性の創造

定價壹圓六十錢
送料十八錢

自由人は斯く語る

定價貳圓
送料廿錢

東京府大森不入斗四七一

批評社

振替東京四五三四六番

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ
煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて吳れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は巻煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつゝ之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね!、驚いたと仰有いました、此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね!」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞贊下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸に近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷」を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上**ニコチン**の中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見恰も巻煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を離れて斷じて再び願みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし

日、英、米、專賣特許出願中

東京府大森不入斗四五一

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

送料（内地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（内地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

榮川堂

振替東京五二九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 天下堂

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引替小包にて送品可仕候

現代碩學校訂頭註

模範覆刻 漢文大系

第一期刊行十二冊
各巻八百乃至千頁

天金布装
薄形美本

定價各六圓
特價各五圓五十錢
（但各冊發行後六十日間）
送料各二十七錢
（詳細内容見本進呈）

□□漢文註釋全書、漢文珍本文庫の冠冕□□
□□不朽の世界的寶典、精神教育の絶好資料□□

震災後久しく品切のところ
いよいよ復興改版出來

漢文大叢書

復興第二十三版愈々出來

□四書 全一冊 既刊
□古文眞寶・唐詩選・三體詩 全一冊 既刊
□唐宋家文 全二冊 一月出來
（以下毎月一冊宛出來）

□十八史略・小學・孝經 弟子職 全一冊
□史記列傳 全二冊
□韓非子 全一冊

□老子・莊子 全一冊
□春秋左氏會箋 全二冊
□詩經・書經 全一冊

新刊圖書目錄進呈

東京神田通神保町
合資會社 冨山房
振替東京五〇一番

末弘嚴太郎著

法窓閑話

（四六判）

定價貳圓五拾錢
送料二十三錢

法治國民の必讀すべき國民讀本!!

斯らしき法學の權威末弘氏の快著。「法律は民衆自らのものである」との基本思想の下に、自由法論法律社會化論の立場に據つて該博な蘊蓄を傾けたもの。法律に對し民衆がいかなる態度であらねばならぬか、法の前には平等であらねばならぬ筈の民衆が果して、そうであるかを考察して、我等が國家として、社會人として、生存して行くに必要である法律思想の原則、形式、運用に對し誰にも解かるやうに說いたもの。「普選」が實施されて法律思想に向つても革新的の刺戟を要求して居る時、本書の公刊は時宜を得たものである。本書は著者の獨創的法律思想に成る、理は深遂に及んでいるが語の平易なるため萬人均しく理解し得べく、そして著者の氣魄と、行文の流暢には多大の趣味を覺ゆ。法治國民の必讀すべき國民讀本である。

末弘嚴太郎著

噓の効用

四六判上製
定價二圓六十錢
送料二十二錢

末弘嚴太郎著

農村法律問題

四六判上製
定價二圓五十錢
送料二十二錢

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

賀川豐彥著

死線を越えて　下巻
壁の聲きく時

五十版

愛の感激であり、靈の生活であり、人格主義を體驗づけた本書が、此の不景氣の空に唯だ一書、飛ぶやうな賣行きを示すはそれは當然の事である。

凡百の讀みものの總てが淫蕩を對象として書かれたるに拘らず、本書は實に一夫一婦家庭道德の純愛を基調とし、三角戀愛を排し、陰慘なる修羅場―貧民窟―誘惑多きゴロツキの群―にも感激の生活を徹底せしめた大男子の凱歌である。殊に彼が死を誓つて勞働爭議の陣頭に立ち、震災劈頭救護の最前線に立つた勇氣ある涙ぐましい血の記錄を讀むものは、唯一人として首を上げ得ない。特に彼が唯物主義の弟の爲に捧げた熱烈な唯神主義は讀者の心臟を強く鼓動させせではおかない。眞に人格主義の勝利に共鳴する人々、純聖愛の一生に強く生きんとする人々の爲に本書を捧ぐ。

四六判 上製　定價貳圓八拾錢　送料貳拾四錢

（上巻）死線を越えて　二百八十四版　定價參圓　送料貳拾貳錢

（中巻）太陽を射るもの　百七十六版　定價貳圓八拾錢　送料貳拾貳錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

故アルフレッド・マーシアル著 大塚金之助譯

經濟學原理

（全四册）

菊判上製

定價各冊參圓五拾錢

送料廿六錢

『國民所得の平等分配は多くの熟練職工の所得を減少するであらう。……不熟練職工の賃銀を高める最善の手段は社會民衆の一切階級の性格・才能の徹底的教育である。……併し人間が餘暇の善用を修得せぬ間は眞に高い生活程度に到達するを得ない。人類の性格更新に伴はぬ暴力的經濟變革が害毒を流す所以は一に茲にある。人類は利己と爭鬪との長い時代からその性格を傳承したのであつてその性格更新は緩慢だからである。』

（分冊四結論の一節）

分冊四 發賣

分冊三 第五編 需要・供給・價値の一般關係 既刊

分冊四 第六編 國民所得の分配

分冊一及び二 續刊

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二一番 改造社

着手以來十年を要したる
本邦未曾有の大飜譯文庫

世界名作大觀

再版豫約募集

西歐文藝の名著を茲に盡くしたとは固より云はない。併し乍ら本集收むる所は、いづれも皆各國古來の國寶的、世界的の名篇傑作ばかりで、苟も文藝を口にする人の必ず先づ繙かざる可らざる西歐文藝の精粹中の精粹である、云はゞ文藝愛好家の基礎的讀物である。しかも如何なる語學者でも一人にして此等各國の名著を悉く原文で讀み得るといふ人は有り得ない。これ卽ち本集が如何なる學者識者の間にも歡迎愛重せられ、又去る六月第一冊を發行して以來彌々益々、大方の驚喜と歎賞とを博し來つて、期に後れたる購讀希望の申込が我等の机上に堆き所以であらうと思ふ。本邦飜譯界の巨匠が星霜十年に亙る努力の結晶たる本集の價値如何については天下既に定評がある。茲に再版の讀者募集を敢てして遍く江湖の清鑑を仰ぐ次第である。

◎**計五十冊** 四六判總クロース天金美本 九ポイント組一冊約七百頁

◎**申込締切 一月三十一日限**

詳細規定及見本（四十餘頁）は御申越次第送呈

略規

● 各部共、附錄丈切りはなしても御購讀隨意である
● 會費は各部一ヶ月金三圓六十錢（外に送料を要す）
但一時拂は廿五冊（附錄共）金八十四圓五十錢、十六冊金五十四圓、附錄（九冊）金三十圓五十錢
● 申込金は各部金三圓六十錢 但最終の會費に充つ
● 送本は來三月から各部每月一冊宛廿五ヶ月にて完結

東京市神田區小川町一番地
電話大手三八八番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

新村出著　平福百穗裝幀

續南蠻廣記

四六判五〇〇頁　總布表裝函入
定價參圓　送料書留廿七錢

島木赤彦著

萬葉集の鑑賞及び其批評

四六判四二〇頁　總布表裝函入
定價貳圓　送料書留拾八錢

長與善郎著

竹澤先生と云ふ人

四六判五〇〇頁　紙裝函入
定價貳圓五拾錢　送料書留拾八錢

後藤慶二著

日本劇場史

菊判三二四頁　總布表裝函入
定價四圓　送料書留廿七錢

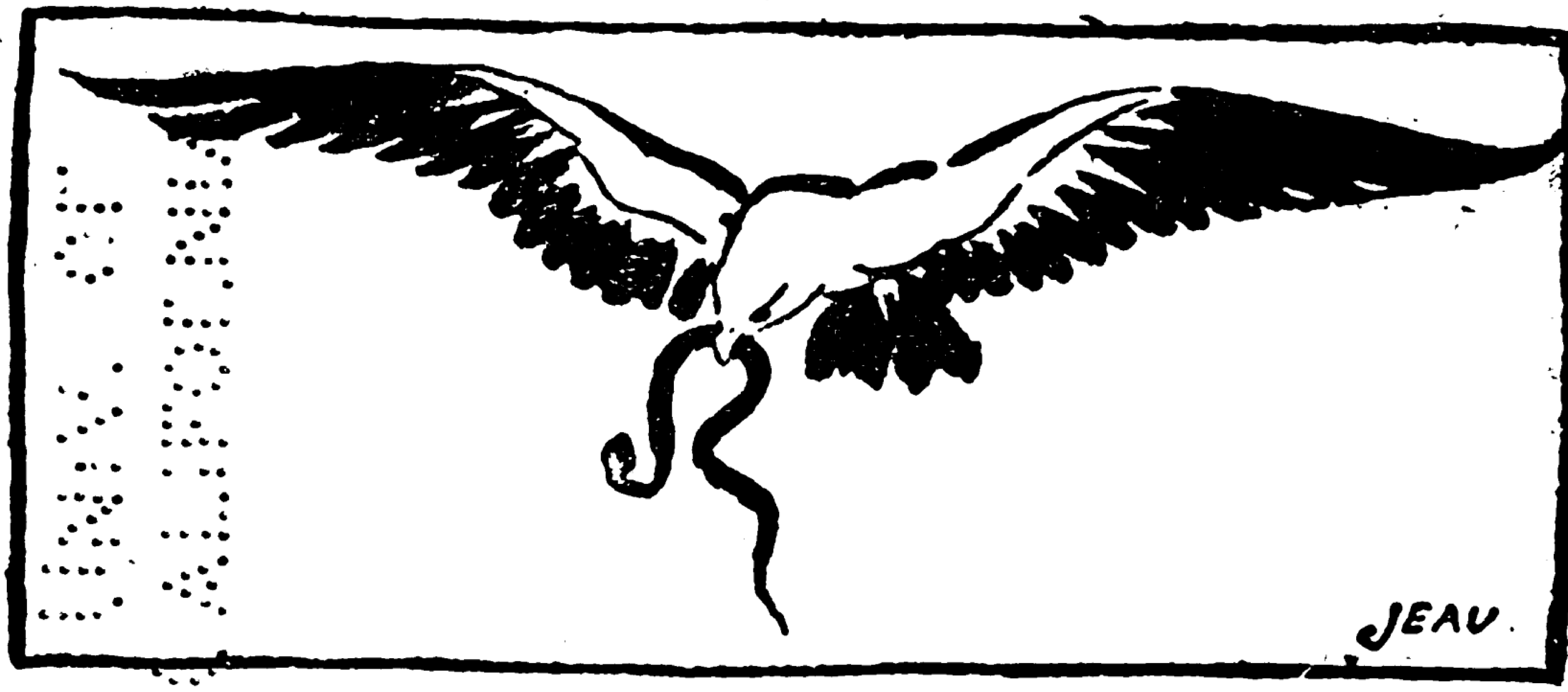
「感興より研究に入り、研究より感興が湧く。私にとつては感興がむしろ生命である」と著者は云ふ。まことにこの著者の豐かな想像力と强き探求心とは、過去の世界の種々なる姿に對する燃ゆるが如き 著より生れ、纖鋭なる美感を通して、匂高き藝術的表現のうちに渾然と融け合つてゐる。この書收むる所四篇二十八章、確實なる考證 基きても、讀者の心をして生き生きとあの鎖された國の内外に花咲いた南蠻文化相の内に蘇いらしめぬはない。隙洩る光の如く忍び入る西國の文化が堅く閉ざされたる扉の内にいかに興趣深き光景を展開したか。或はまたこの扉の外に出た日本人のさまざまの生活の姿、さてはこの遙かなる極 の島が西國詩人の想像のうちに美しくも結晶させた神仙郷。讀者はこの濃き雰圍氣の内に恍惚として身の廿世紀にあるを忘るゝであらう

眞に歌人としての立場より萬葉集の歌を解釋し、萬葉集の歌を批判し鑑賞し得るものは、現代歌壇の重鎭にして萬葉を宗とする島木赤彦氏を措きて他に幾人かあるべき。本書は正に島木氏二十年の歲月を閱して成れるもの。該博の識、獨創の見、精到雋鋭の批評は選出せる萬葉短歌五百餘首の一々につきて餘すところなし。附するに「萬葉集雜記」「寫生雜記」を以てす。盡く、歌に遊ぶもの羅針盤たるべきもの、大方君子の淸鑒を冀ふ。（齋藤茂吉）

混沌として喧噪と雜音に滿ちてゐる現代にあつては藝術と銘うてるものすら世俗に毒されて吾等の深き慰安となるべき何物をも持たない。かゝる折吾等は此類ひ稀なる美しき書を世に送り出す事を喜ぶものである。著者は此書に於て「竹澤先生」なる、地位も名譽も財産も持たずして而も悠々として世にも美しき――それは吾等を淨め慰め人間の最も美しき生き方の一つを示せる――生活を送れる一人物とそれを圍繞する人々の生活を叙する事によつてその深き人生觀を最も藝術的に表現した。讀者は必ずや「竹澤先生」の澄みて高き生活と眞に人間らしきそれ等の美しき人々に愛を抱き教えられ慰めらるるであらう。吾等は此書の一人にても多く味讀愛誦される事を切に望むものである。

日本の歌舞伎芝居は、これを愛し深入りして來るものを溺れさせずには措かない不思議な又怖るべき妖氣を持つた藝術である。これまでその本質を明らめやうとして近づいて行つた人々は大抵その妖氣によつて木乃伊取りの木乃伊にしてしまつた。然るに著者は歌舞伎劇を愛し乍らそれに溺るゝ事なく、あらゆる材料をあつめ、多くの繪畫の助けを得、困難なる仕事を建築の方面よりし、歌舞伎全般に亘る纒つた研究の最初にして唯一なる立派な基礎を置いた。今後日本の劇場の歴史を研究する人は一度は必ず本書の門を潜らなければならない。若くして逝いた優れたる建築家にして藝術家たる著者を記念すると同時に本書の出現は世の演劇研究家及び演劇愛好者に取つて意味深きものなるを信ずる。

發兌　東京神田南神保町　岩波書店　振替東京二六二四〇番　電話四谷｛五八七〇番 七一六七番



（新 年 號）

滿洲出兵と我國の態度

軍閥及び滿蒙に特殊利益を有する一部の徒によりて叫ばれる我出兵說は斷じて不可。我々は郭軍が勞農政府の手先きであるか否やは勿論知らない。それと同樣に我が陸軍は斷じて張作霖の手先きであつてはならぬ。張作霖を援助することが帝國の利益とでも勘違ひする徒は彼の中支、南支に頻發する不買同盟が何が故に年中行事として繰返さるるかに鑑みるがよい。若し偏狹なる帝國主義者の强要によりて假りに出兵するとせんか、我國が現下の關稅會議に對し示した自主權の聲明その他寬宏なる態度は一朝にして蹂躪し盡され支那の大衆は戟を逆にして我國に當るであらう。加之、現下滿洲の在住邦民の財產、生命が郭、張兩軍の爲に脅迫、侵害されておるとはどうしても受取りがたい。我々は隣邦の兵亂にのぞむには彼の西比利出兵の苦い經驗をも回想せねばならぬ。內政不干涉を天下に聲明したことを忘れてはならぬ。勿論西比利と滿洲とは我國の關與する利益に於て、又、國際關係に於て同日の比ではないが、その內亂たるに於て軌を一にする。我政府は租借地域其他に於ける我國民の生命と財產とを保護する目的以外に兵を動かすことの斷じて不可なるを思ふ。我々は支那の完全なる獨立のために最近幾多の友好を示した。今後もし其態度を變改することあらば、東洋は一朝にして禍亂の源泉となり、英、米、露は忽にして鋭牙を支那本土にさしむけることであらうことを恐れる。諸列强の憂懼は滿洲保有が我國の支那本土に伸張すべき帝國主義的橋梁だと誤解するにある。又覺醒支那の憂も此處に存する。此憂懼より離脫して永遠に支那の友好たり、且つ經濟的同盟者となりて東洋の平和と權威を支持するに努力すべきだ。此際は斷乎として一張の腐れ緣を排除することにある。殊に張軍敗退せば我國に重大なる影響を齎らし、滿洲が赤化するなぞほざくものあるも一笑に附して可。



階級鬪爭の必然性とその必然的轉化

河上肇

或る實業家が、或る學校の講堂で、多勢の學生を前にして、次のやうな話をした。——今日は諸君に、諸君が學校を出てからの成功の秘訣を教へる。それは外でもない、諸君が例へば或る會社に就職し、最初七十圓の月給を貰うたとするならば、諸君は必ずそこで百五十圓分の仕事をするやうに骨折らねばならぬ。また月給が上がつて百圓になつたらば今度は二百圓分の仕事をせねばならぬ。月給が更に上がつて、百五十圓になり、二百圓になつても、要領はいつも同じ

ことである。いつでも會社から貰ふ月給の倍だけの仕事をするつもりで、傍目をふらず、始終自分の會社の利益のために專心努力してゐたならば、自然、會社の方でも君達を重寶なものに思ひ、段々月給も上げてくれるやうになる。働くにつれて月給が上がるから、働く方でも面白くなつて、愈々熱心に働くから、月給もまた段々上がるやうになる。そこで會社も儲かるが、君達もまた仕合せ者になる。ところで會社が儲かれば、事業は益々擴張される。それは即ち國家の富强を致す所以である。つまり君達の心掛け一つで、君達の生涯が幸福になるばかりでなく、會社もまた盛になり、國家もまた盛になる。——この實業家の講話を、讀者諸君は如何に考へられるか？

件の實業家の話を傾聽した時、私自身はどう感じたかといふならば、私は、さすがに有名な實業家の話だけあつて、まことに平明な言葉でよく現代社會の實相を說明してゐる、と思つた。資本家社會の利潤は——剩餘價値は賃勞働者の剩餘勞働から生まれるといふマルクスの經濟學說と、それは全く符節を合する。マルクスは、資本家に雇はれて一定の仕事に從事しつゝある勞働者の一日の勞働時間を、必要勞働時間と剩餘勞働時間とに分つた。玆に必要勞働時間とは彼が資本家から受取る勞賃（月給制ならば一日當りの給料）を再生產するために必要な勞働時間のことであり、剩餘勞働時間とは、それ以上の、——つまり彼が資本家の爲めロハで働くところの、——餘分の勞働時間である。先きの實業家の話に當てはめて言へば、例へば百圓の月給を貰ふものが二百圓分の仕事をするのだから、この月給取りの勞働時間は、——假に一日十時間とすれば、——五時間分は必要勞働時間であり殘りの五時間分が剩餘勞働時間なのである。だから彼れの勞働は、實は、支拂はれた勞働と、支拂はれない勞働との、二つの部分から成り立つてゐる。この事實は、ブルヂョア經濟學者によつて否認されまたは看過さるゝに拘らず、ブルヂョア自身は——先きの一例が示すやうに——しば

無意識のうちに意識してゐる事實である。

マルクスが言つたやうに、「現象形態と事物の本質とが直接に一致してゐるならば、一切の科學は贅物であらう。」(資本論、第三卷、第二部、三五二頁。高畠氏日本譯、三の四、三一〇頁)。吾々の眼には、太陽が地球の周りを廻ると見える。しかし天體運動の科學的研究の結果は、地球が太陽の周りを廻りつゝあることを教へる。それと同じやうに、吾々の眼には、總ての勞働が支拂はれた勞働であるかの如く見ゆる。しかし實際には、それが支拂勞働と不拂勞働とに分れてゐるのであり、さうしてそれを理解するためには、吾々は、商品運動の——即ち現代社會の運動の——科學的分析の鍵たる、マルクスの價値法則を必要とするのである。

被搾取階級の勞働が、必要勞働と剩餘勞働とから成るといふ事實は、勞働力が商品となつてから——即ち資本家的生産が行はるゝやうになつてから——始めて表面の現象として露出しなくなつた。商品は現代社會の有ゆる方面においてくせものたる役割を演ずる。だからマルクスの資本論は、このくせものたる「商品の分析から始まる。」

被搾取階級の勞働が、必要勞働と剩餘勞働とから成るといふ事實は、あらゆる階級社會に共通の事實であるが、その現象形態は一樣でない。

試に最も古い搾取制の形態たる奴隷制について見よ。そこでは、奴隷の生産するものが盡く奴隷の主人に歸するかの如く、從つて奴隷の勞働は全部が剩餘勞働であるかの如く、見ゆる。けれども、奴隷もまた生物である以上、生きて行かねばならぬから、彼れの生産物の一部は、必ず彼れ自身の生活のために消費されるのであり、從つて彼れの勞働も、實は、彼れ自身の生活資料を生産するために必要とさるゝ勞働と、それ以上の剩餘勞働との、二つの部分から成り立つ

てゐるのである。だから、勞働の生產力の最も幼稚な社會——一人の勞働の生產力が一人の生存を維持する以上の餘力を有たなかつた時代——には、敵を捕虜としても、これを殺すの外はなかつた。奴隷制の發生、——被搾取階級の發生、——敵のいのちを助けるといふ『道德』の成立は、勞働の生產力が、一人の勞働を、必要勞働と剩餘勞働とに分割せしむる程度にまで發展したことを、その物質的條件となすものである。

中世に行はれた搾取制の形態は農奴制である。昔し日本にて百姓、作人、田堵といひ、唐にて庄客、寄庄戶、客戶といひ、イギリスでヴィラニといつたものは、みな農奴の一種である。これを十二世紀末のイギリスについて言へば、村の耕地の五分の二または三分の一は、デミーンと言つて、領主の自由地に屬し、その殘りが村のヴィラニ（農奴）だちに分配されてゐた。普通のヴィラニは約三十エーカアの土地を受け、これを自分のために耕作することを許されてゐた。しかし一週間のうち三日は、領主の自由地たるデミーンで無償の勞働に服した。細かいことは不必要だから玆に略するが要するに彼等は、領主から一定の土地を借りうけ、これを耕作して得たるものは、自分および家族の生活資料に充て、これと同時に、一週間のうち三日は、ロハで領主の土地を耕作し、その土地の生產物は盡く領主に取られたのである。だから、この場合には、時間の上から見ても、場所の上から見ても、農奴の勞働が、彼等自身の生活資料を生產するために必要な勞働と、領主のためにロハで提供する剩餘勞働と、この二つの部分から成り立つてゐるといふことが、外見上にも露出されてゐる。（このことは、封建制の遺物として今日に殘存せる、小規模の——賃勞働者を使用せざる——小作農にも、ほゞ當てはまる。これらの小作農は、地主より借入れたる土地を耕作し、その土地より得たる收穫——又はその收穫の代價——の一部を、地代として地主に收める。それは、彼等が地主より借入たる土地の或る部分を彼等自身のために耕作し、殘りの部分をロハで地主のために耕作するのと、事實においては同じことである）。

資本家が勞賃を支拂つて賃勞働者を雇傭するやうになつてからでも、勞働者の勞働は依然、必要勞働と剩餘勞働との二つの部分から成り立つのであるが、たゞこの場合には、勞働力そのものが商品として賣買さるゝがゆへに、すべての勞働が支拂はれたる勞働であるかの如き外觀を呈する。この場合、勞賃なる「現象形態」は、勞働者の勞働が支拂はれる部分と支拂はれない部分との二つから成るといふ「事物の本質」と、直接に一致しない。こゝにおいてか科學の必要がある。即ち、この現象形態とその本質との外見的矛盾の統一は、商品の科學的分析により、吾々の始めて把握し得るところのものである。

商品とは何か？ 商品は第一に、人間の何等かの欲望を充たすものである。言ひ換ふれば、それは何等かの効用を有つたもの、何等かの使用價値物である。しかし總ての使用價値物が商品なのではない。それは何等か他のものと交換され得る關係に置かれて、始めて商品となり、商品價値を有する。だからロビンソン・クルーソーの島には、使用價値物——財——は存在するけれども、商品——商品價値——は存在しない。人と物が對立し、その人がその物を有用視すれば、その物はその人に對して使用價値を有する。けれども物と物とが交換され得るためには、即ちそれらの物が商品となり商品としての價値を有するためには、Aなる物の所有者と、Bなる物の所有者とが、對立しなければならぬ。そこでは物と物とが人を媒介として對立し、人と人とが物を媒介として對立する。ロビンソン・クルーソーは一個の孤立人であるが、彼は孤立人として尚ほ外物に對立し得るがゆへに、樣々の物が彼にとつても使用價値物たり得る。けれども孤立人たる彼は、他人と對立することが出來ぬ。彼れの物と他人の物とを交換關係に置くことが出來ぬ。だから彼は、彼れの財を商品たらしむることが出來ぬ。既に彼れの島には、商品があり得ない、だからまた彼れの島には、商品流通の必然

的産物たる貨幣――商品價値の凝結物たる貨幣――も在り得ない、彼が離船した時、彼は彼れのポケットに何ポンドかを有つてゐたかも知れない。これらのポンド貨は、海水に浸された後も、依然として金である。しかし彼が孤島に這ひ上がつた時、即ち彼がこの金をして貨幣たらしめし一切の社會關係から隔離された時、彼は、昨日まで彼にとつて貨幣たりしこの金が、今はたゞ單なる金として横はることを發見したであらう。それ以來彼は、彼れの手にある物を、何ポンド何シリングと値段づけることを斷念したであらう。かくて彼れの島には、樣々の使用價値物が存在してゐるにしても、それらの物を何千何百ポンドといふ一樣な單位の價値量に合計することは、不可能となるであらう。

これによつて見れば、商品は孤立して存在し得ない。xAW＝yBW (Aなる商品のx量がBなる商品のy量と交換される關係にあるといふこと)、簡單に現せばW―W'(或る商品が他の商品と交換され得る關係にあるといふこと)が、商品が商品として存在し得る最も簡單な形態(細胞形態)である。この細胞にはWおよびW'なる二つの核が含まれる。帽子と靴、米と釜などいふが如き、全く使用價値を異にした二つの物が、價値としては互に相等しいといふ關係に置かるゝことにより相反撥せる二個の核が不可分的に連絡されて、一個の細胞を形成する。これが商品存在の初端の形態である。ところで問題は、かゝる細胞の核を形成する實質は何かである。生物學者のいふところによれば、あらゆる細胞は原形質と稱する半流動體なる一種の膠質物から成るといふ。今マルクスは、商品世界の――人間の社會的活動が商品なる物を通じて行はれ、從つて總社會の生命活動が『どえらい商品集大成』の運動として現はれつゝある、資本主義社會の――細胞を分析することにより、その核は『無差別なる人間勞働の、即ちその支出の形態に頓着なき人間勞働力の支出の、單なるギャレルテ(膠質物)』に外ならぬことを、發見したのである。(資本論第一卷、カウツキー版、六頁。高畠氏改譯本、九頁)。一つの細胞に含まれるWなる商品核とW'なる商品核とは、その自然的物理的性質(使用價値としての性質)

に於ては、全く相異れるものであり、相異れるがゆへにこそ、WとW'とはAとBとの間に交換されるのであるが、しかし、既にそれらのものが社會的に互に取りかへられ得る關係におかれるならば、それは即ちそれらのものに含める異種の具體的勞働が、社會關係においてはその具體性を抽象され、『無差別なる人間勞働』として等位に置かれるのである。即ちWとW'は、かゝる『無差別なる人間勞働』の等量を含むがゆへに、價値相等しとされるのである。

既に述べたやうに、一つの商品は或る他の商品と對立するでなければ、互に價値關係を結ぶことは出來ぬ。だから、以上述べたるが如きW―W'は、商品の價値形態につき考へられ得るかぎりの、最も簡單な形態、即ちその細胞形態である。ところで此の單細胞動物は、次第に分裂し次第に增殖して、極めて複雜なる生物に成長する。譬へていへば、大きな野原の或る地點に落された煙草の吹殼が、遂には燎原の火となつて天をこがすに至れるが如く、何千年かの昔、この地球上に始めて發生したWとW'との交換關係は、その後次第に發展して、遂に今日においては、殆ど總ての生產物を斯かる交換關係のうちに包括するに至つたのである。今日の社會においては、殆ど總ての生產物が商品として生產され、商品として交換され、從つて有ゆる種類の生產物が價値として互に關係せしめられ、かくてx量の帽子、y量の靴、z量の米、等、等、それ〴〵の分量における何億かの種類の生產物が、社會的には互に等位におかれ、價値としては盡く何圓または何百圓に等しいとされる。即ち、互に勞働の生產物を交換してその生活を營みつゝある人間は、異れる種類の具體的な勞働の交換そのものによつて、それら總てを無差別なる抽象的勞働に約元し、一切のものを價値の熔鑛爐に投げ込むのである。かくて吾々が現に棲める社會――現代における人間相互の社會關係――は、前に述べたるが如き細胞の數億數百億のものによつて構成さるゝところの、巨大なる一大生物である。

吾々が今、かゝる生物體の運動を理解しやうとするならば、吾々は先づ、この生物を構成する細胞の核たる商品が、

使用價値および價値の統一體であるといふこと、ならびに是等商品の價値の實體を成すものは、無差別なる人間勞働の膠質物であるといふこと、從つて個々の商品の價値の大きさは、これが生産のため社會的に必要とされる勞働の分量によつて定まるといふことを、理解せねばならぬ。私は今これらの問題を玆に逐一説明することは出來ぬ。本論文において私の問題とするところは、商品に關する斯かる理解を前提として、商品としての勞働力を考察せんとするにある。

既に述べたやうに、商品の發生は、何千年かの昔に遡ることが出來る。それ以來、あちらこちらで、次第に生産物の商品化が行はれた。かくて商品の流通が或る程度に達すると、如何なる社會でも、――そこでは國民性の特徴などいふものは全く問題にならぬ――商品の世界は、普通の商品と貨幣とに分裂した。商品は或る特定の商品を貨幣とすることなくしては、廣く流通し得ないからである。ところで、商品生産の結果として發生した貨幣が、更に反作用的に、商品生産の發展を助けたることは、言ふまでもない。だから貨幣の發生は、商品生産の歴史における一つの大きなエポックである。しかし、それよりも猶ほより大きなエポックは、人間の勞働力が、遂に商品としての扱ひを受けるやうになつた時に、始めて劃された。（人間の勞働力が商品として市場に現はれるといふことは、商品交換の發展に伴ひ特種の商品が必然的に貨幣に轉化するといふと異り、商品交換それ自體の性質から流れ出たものではない。私は今これらの問題に立ち入るつもりはないが、たゞ、性質の違つたものを順序に列擧したから、念のためにこのことを一言しておくのである。）これによつて貨幣は更に生産資本たる機能を有つやうになり、社會的生産は資本の支配の下に從へられ、かくて今日の如き、資本家的生産方法の支配する社會、殆ど總ての生産物が商品化さるゝ時代を現出した。人間の勞働力が商品の一種となつたといふことは、商品領域の一大擴張である。しかし、それがまた反作用的に商品生産の急激なる發展を助け、

遂に殆ど總ての生産物を商品化するに至つたのである、中世の商人は如何なる物をも買ひ得たけれども、ひとり勞働力のみはこれを商品として買ひ入れ得なかつたために、——勞働がなければ生産は行はれ得ない——彼等はたゞ他人の生産した商品を賣買し得たのみである。彼等が賣らんがための商品をみづから生産するところの、生産者としての商人——生産的資本家——となり得たのは、商品としての勞働力が發生してからのことである。

商品としての勞働力は、資本家的生産の前提である。資本家的生産方法の下に生産されつゝある、剩餘價値——資本家階級の獲得しつゝある利潤——の泉源は、たゞ、商品としての勞働力を分析することによつてのみ、始めて理解され得る。

商品としての勞働力は、他の種類の商品と同じやうに、價値と使用價値とを有する。しからば勞働力の價値は如何にして定まるか？　曰く、勞働力の價値もまた、他の一般商品のそれと同じやうに、その生産のため社會的に必要とさるゝ勞働の分量によつて定まる。言ひ換へれば、それは勞働者自身ならびに家族の生活資料を生産するために必要とされる勞働時間に等しい。私は後の話の便宜のため、假にそれを六時間だとしておく。そこで純金二分を一圓と名づけ、且つそれだけの金を生産するために要する勞働時間を三時間だとするならば、(それは勿論鑛山によつてそれ〳〵相違する、吾々にとつて問題となるのは、いつでも社會的平均的の現象である)、六時間分の勞働は二圓で現はすことが出來るから勞働力の價値——商品としての價値——は、一日二圓だといふことになる。これは一個の商品としての帽子の價値が金二圓であるといふのと同じで、何等特別の事柄ではない。商品としての勞働力が特種の性質を有するは、その使用價値についてである。勿論、如何なる物の使用價値(效用)も、その使用消費によつて實現されるといふ點は、すべて

同じである。例へば、食物の使用價値はこれを食用に供することによつて實現され、衣服の使用價値はこれを着用することによつて實現され、勞働力の使用價値もまた之を消費することによつて實現される。たゞその相違するところは、勞働力の消費は即ち勞働の發揮であり、さうして此の勞働は、それが商品の生産のために用ひらるゝ限り、新たなる價値の泉源となる、といふ點である。それゆへ、資本家は勞働者の勞働力をばその價値通りに買入れたとしても、もしその勞働力の使用をば或る時間以上に延長するならば、次に委しく述べるであらうやうに、彼は彼が勞働者に向つて支拂ひたる價値以上の價値を獲得し得ることゝなるのである。

商品交換の世界においては、何人でも他人の所有してゐる商品を手に入れやうと思へば、その代價を支拂はねばならぬ。しかし既にその代價を支拂うたならば、彼はその商品の所有權を獲得するのであり、從つて自由にその使用價値を利用するの權利を有する。例へば私が一個の帽子を二圓で買うたとする、さうしてその二圓なる代價が丁度その帽子の價値に相當してゐるとするならば、前からの假定によると、その帽子の生産のために六時間分の人間的勞働が費されてゐるのである。今私はその六時間分の勞働に向つて金二圓を支拂ひ、これによつて件の帽子を私の所有物とすることが出來た。そこで私は自由にこの帽子を利用する權利を有つ。しかし私が如何に自由にこれを利用したからと言つて、私は其帽子をして何等かの人間的勞働を發揮せしむることは出來ない。だから、その使用價値消費は、即ち價値の消費である。しかるに、これと異り、私が一個の帽子を買ふ代りに、一人一日分の勞働力を買ひ入れたとする、即ち一人の勞働者を一日間雇ひ入れたとする。この場合に、私がもしその勞働力の代價(即ち勞賃)として金二圓を支拂つたならば、私はその勞働力を價値通りに買うたのである。さうして既に相當の代價を支拂うて他人の勞働力を私の所有に移したならば、その勞働力の使用價値は最早や私のものなのだから、私は自由にこれを使用することが出來る。そこで、假に私が一個

の商品生産者として、或る商品の生産のため、件の勞働者に十二時間分の勞働を課したとするならば、勞働力の使用價値は十二時間分の勞働として實現され、それだけの勞働が商品に體化されて、商品價値を構成することになる。前からの假定によれば、この新たなる價値は四圓に相當する。そこで私は、六時間分の價値（即ち二圓）を支拂うて一人一日分の勞働力を買ひ入れ、これを生産費に消費することによつて、十二時間分の價値（即ち四圓）を得ることになる。かくて一日十二時間に亘る勞働のうち、六時間分は支拂はれた勞働であり、殘りの六時間分はロハの勞働であるといふことになり、さうして勞働者から彼等の勞働力をば商品として買ひ取りつゝある資本家は、たとひそれを價値通りに買ひ入れたとしても、彼等をば一定の時間ロハで勞働せしむることにより、一定の剩餘勞働——一定の剩餘價値——を搾取することとなるのである。

勞働者は一日十二時間勞働して二圓の勞賃を貰ふ。彼はこの二圓を以て、彼等自身および彼等の家族の生活に必要とさるる消費資料を買ひ入れる。ところで此等の消費資料の生産のためには、六時間分の勞働が費されてゐるに過ぎない。だから彼等は、十二時間のうち六時間は彼等自身のために勞働してゐるのだけれども、殘りの六時間は資本家のためにロハで勞働してゐるのである。それは恰も中世の農奴が、一週間のうち三日は、領主から自分に貸付けられた土地で勞働し、殘りの三日は領主直轄の土地をロハで耕作するといふのと、實質において變りはない。ただ農奴の場合には、彼等が預つてゐる土地も領主直轄の土地も、共に彼等の勞働によつて耕作さるるに拘らず、その收穫物は、彼等の預つてゐる土地から生ずるもののみが彼等の所有に歸し、領主直轄の土地から生ずるものは、全部がロハで領主に取り上げられるのだから、——且つまた、彼等の勞働によつて生産された收穫物は、そのまゝ彼等の生活資料に充當されるのだから——彼等の勞働が、彼等の生活のために必要とされる勞働と、それ以上の剩餘勞働との、二つの部分に分れてゐるとい

ふことが現象の表面に露出されて居る。しかるに賃勞働者の場合には、彼等の勞働の全部に向つて勞賃が支拂はれるかに見える。金二圓は一日分の勞働力の價値——即ち一日分の勞働者の生活のため必要とされる消費資料の價値——に相當するのだが、それが十二時間分の勞働の代價であるかの如く見ゆる。彼等は十二時間の勞働に從事しながら、六時間の勞働によつて生産された價値しか受取らぬのだけれども、彼等の受取るものは彼等自身の生産物でなく、——例へば紡績工は彼等の生産する糸を勞賃として受取るのでなく、——金二圓を貨幣の形で受取り、それで彼等の生活に必要な衣食を調達するのであり、社會的分業の行はるゝ結果、事態は貨幣の媒介により複雜な過程を經て運ばるるゆへに、事の眞相は表面から消え失せ、問題は科學的分析によるでなければ、正當に理解され得なくなる。本當は地球が太陽の周りを廻るのだけれども、現象としては太陽が地球の周りを廻るかの如く見えてくるのである。今の世の中の仕組自體が複雜であるから、これが科學的分析もまた面倒である。吾等の正しとする理論は、おのづから理解しにくくなる。しかし平明簡單な學説はそれが平明簡單であるといふこと其れ自身によつて、自己の誤謬を證明すると言つても、敢て過言でない。分り易い學説が欲しいのなら、諸君はその好むところに趨れば可い。吾々は、ひとりマルクスの價値説のみよく當代商品世界の運動を説明し得ると認むるがゆへに、これを固執して動かぬのである。

この際注意を要することは、あらゆる商品のうち、ただ勞働力のみが、生産的に消費さるることによつて、それ自身の價値以上の價値を生産するといふことである。

・いふまでもなく、物の生産には、人的生産要素としての勞働の外に、物的生産要素としての生産手段を必要とする。勞働は外界の對象に働きかけることによつて、始めて生産的となる。赤手空拳を空中で振り廻はしたのでは、何物もそ

こに生産されはしない。しかし斯く言ひ得るのは、ただ使用價値の生産についてであり、生産物の價値には、人間の勞働のみが入り込むのである。或る生産物の商品としての價値は、これが生産のため社會的平均的に必要とされる勞働の分量によつて定まる。

勿論、生産物の價値のうちには、これが生産のため直接に費さるゝ現在の生ける勞働が入り込むのみでなく、これが生産のため間接に必要とさるゝ過去の蓄積された勞働もまた之に入り込む。既に述べたやうに、物の生産には、勞働の外に生産手段が必要とされる。さうして是等の生産手段は、多くは過去における勞働の生産物であり、しかる限りにおいて、その過去の勞働――生産手段に對象化されてゐる勞働――もまた、當該生産物の生産のため必要とさるゝ勞働のうちに含まれる。だから生産手段の價値は、これによつて生産せらるゝ生産物の價値の上に、そのまゝ移轉するのである。

今假に十ポンドの綿絲が生産されるものとなし、それに必要な生産手段をば、二十一時間分の勞働を含める(それだけの勞働を費して生産されたる)棉花と、三時間分の勞働を含める紡錘とによつて、代表せしむるならば、(紡績機械は棉花の如き原料と異り、幾回もの生産過程に役立つ、玆では假に十ポンドの綿絲の生産のために必要とされる紡績機械の消耗分を、紡錘一個によつて代表せしむるのである)、これら生産手段のうちに含まるゝ勞働の總量は二十四時間分であり、前からの假定によれば、それは八圓に相當する。ところで是等の生産手段は、十ポンドの綿絲を生産するために必要とさるゝものなのだから、これが生産のため必要とされる勞働時間は、同時に綿絲を生産するため必要とされる勞働時間であり、從つてこれら生産手段の價値は、そのまゝ(それ以下にでもなく、それ以上にでもなく)生産物たる綿絲の上に移る。ところで、棉花があり紡錘があるといふだけでは、綿絲は生産され得ない。これらの生産手段によつて

綿絲が生産され得るためには、これらの生産手段に勞働が加へられねばならぬ。今假に、これに必要とさるゝ勞働を十二時間分だとする。さうしたならば、十ポンドの綿絲の生産のため必要とさるる勞働時間は、綿花 21時間＋紡錘 3時間＋生ずる勞働 12時間＝36時間 になり、十ポンドの綿絲の價値は十二圓だといふことになる。

ところで、この十二圓の價値を有する綿絲には、果してどれだけの生産費が掛かつたであらうか？ それには二十一時間分の勞働を含める棉花（七圓）が費され、三時間分の勞働を含める紡錘（一圓）が費され、更に一日分の勞働力（二圓）が費された。それらを合計すれば十圓になる。十二圓のものが十圓で出來た。しからば差引き二圓の剩餘價値は何處から生れたか？ 生産手段は單に自身の價値を生産物の上に移轉しただけである。そこから剩餘價値の生まるべき筈はない。ただ勞働力に至つては、そのものゝ價値は六時間分の勞働に相當するに拘らず、その使用價値は十二時間分の勞働として發揮された。さうして是等の勞働は、生産物の上に對象化されてその價値を形成する。二圓で買はれた勞働力は、四圓の價値を生産物の上に附け加へる。剩餘價値は即ちこの商品としての勞働力の特性に——それ自身の價値よりもより多くの價値を作り出すといふ特性に——その唯一の泉源を有つ。

勞働力のみが以上の如き特性を有つといふことは、不思議のやうで不思議でない。何故なれば、人間の勞働を發揮し得るものは、人間の外に在り得ないからである。生産物の生産のためには、機械は大なる働きをなすであらう。しかしながら、機械の勞働は人間の勞働ではなく、如何に機械が勞働しても、そのために人間の勞働が作り出されることはない。だから機械は、それ自身の生産のために費された以上の人間勞働を、生産物の上に移すことは出來ぬ。ひとり機械に限らず、あらゆる生産手段がみなさうである。ところで、商品としての生産物の價値は、これが生産のため必要とさ

る丶人間勞働の分量によつて決まるのだから、あらゆる生産手段は、それ自身の價値以上のものを、生産物の上に移すことが出來ぬのである。

與へられたる對象の上に、新たなる勞働を、從つて新たなる價値を、附け加へ得るものは、ただ人間のみである。しかも一人の人間（および彼れの家族）が生きてゆくための生活資料の生産に要する勞働時間が、一日につき六時間であるといふことは、彼が一日十二時間づ丶の勞働に從事することを妨げるものではない。否な、勞働の生産力が最も幼稚であつた太初の時代を除くならば、奴隷制の成立以來、人間の勞働の生産力は、つねに彼れ自身の生活を支持する以上の餘力を有ち、且つその餘力は常に益々增加しつ丶ある。この餘力は即ち搾取制の物質的基礎であり、現代の資本家的生産もまた此の基礎の上に立つものである。

かくて吾々は、資本家的生産方法の下に生産されつ丶ある剩餘價値が、――それは産業利潤、商業利潤、利子、地代等の形態に分裂して、資本家階級、地主階級の所得に歸する、――全く勞働者階級の搾取から、言ひ換ふれば、勞働者が一日のうち何時間かはロハの勞働に從事せしめらる丶ことから、發生するものなることを知る。

玆に最も注意すべきことは、一たび勞働力が商品となり、資本家的生産が行はる丶ことになれば、商品流通の世界においては等價と等價との交換が行はれ、商品は――從ひて商品としての勞働力は――その價値通りに賣買されると假定しても、勞働時間が必要勞働時間以上に延長さる限り、資本家階級の手には必ず剩餘價値が殘るといふことである。

二十一時間分の勞働を含める棉花、三時間分の勞働を含める紡錘、それらは價値通り合計八圓で買はれた。一日分の勞働力、それも價値通り二圓で買はれた。また生産された綿絲は三十六時間分の勞働を含み、それも價値通り十二圓に賣

られた。資本家は商品を價値通りに買ひ、また價値通りに賣ることによつて、一定の剩餘價値を領有し得るのである。（その剩餘價値を各種の資本家ならびに地主が如何に分け取りするかは、玆で問題外におく）。商品交換の世界にあつて、考へ得らるゝ最高の正義は、諸商品が價値通りに賣買されることである。Aなる商品所有者とBなる商品所有者とが互に平等の關係において對立し、詐僞なく強制なく、自由契約の下に、相互の商品をその價値通りに交換するならば、商品法則はそこに完全に樹立せらるる。吾々は今、勞働者と資本家との間に行はるゝ勞働力の賣買が、實際上いつも此の如き條件のもとに行はるゝといふのでは、決してない。吾々が強調せんとするところは、勞働力の賣買がたとひ等價と等價との交換であるとしても、それは必然的に資本家による勞働者の搾取に轉化するといふ事實である。一たび勞働力が商品となつたならば、此の如き結果は、商品交換そのものゝ性質から必然的に生まれ出る。商品交換の世界にあつては、一定の商品に對し相當の價値を支拂ひたるものは、その商品に含まるゝ使用價値を我がものとすることが出來る。私は二圓の價値ある帽子を、二圓の代價で買ひ取つた。さうしたならば、帽子の使用價値は私のものである。私はそれを利用して如何なる利益を得やうとも、人から非難さるべき筈はない。それと同じやうに、資本家は勞働者からその勞働力を價値通りに買うて、（必ずしも價値通りには買はぬけれども、假に價値通りに買うたとしても、）その使用價値を利用することにより、剩餘價値を獲得するのである。私は今、かゝる剩餘價値の搾取を道德論で非難しやうとするのではない。私の明かにせんとするところは、むしろその逆である。一たび勞働力が商品となつたならば、資本家は、商品世界の正義と自由と平等とのもとに、商品世界の法律の保護のもとに、商品世界の道德の肯定のもとに、敢て他人の勞働を搾取し得るといふこと、これが私の明かにせんとするところである。他人の財物をロハで取るためには、謂ゆる泥坊となつて、夜間ひそかに出沒せねばならぬ。かゝる泥坊は今に至るも尙ほ世に絕えずと見え、夜分はみな家々の

戸締りを嚴重にして寢に就く。大都會の中央にあつて、人の畏るゝものは豺狼にあらずして、同じ人間の仲間だといふことは、文明を誇る人間の生活として聊か不思議であるが、それは玆には問題外だ。玆での問題は謂ゆる泥坊は夜間ひそかに他人の財物をロハで取るに反し、賃勞働者は青天白日のもと公々然その勞働をロハで他人に取られるといふことである。

以上述ぶるが如く、勞働力が一たび商品となれば、たとひ等價と等價との交換を前提するも、資本は商品の生產過程を支配することにより、みづから剩餘價値を生產し得るのであるが、これと異り、もし資本にして勞働力なる商品を買ひ得ざるならば、しかるかぎり、資本はただ商品流通の世界において、等價と等價との交換を否認することによつてのみ、――即ち商品を或は價値以下に買ひ、或は價値以上に賣ることによつてのみ、――剩餘價値を占取し得るに止まるのである。

商品を或は價値以下に買ひ、或は價値以上に賣ることは、商品法則の破壞である。それは强制、詐僞、ごまかしである。資本主義的社會以前の商業資本は、かゝるごまかしによつてのみ、剩餘價値を占取し、それ自身を膨脹せしむることを得た。(資本家的生產以前の商人が輕蔑された所以はそこにある)。私はその一例として、東蒙古における支那の行商「撥子」に關する記事を、左に引用するであらう。

「撥子は……準備整ふや愈々行商の途にと上ぼり、每日單調なる原野の旅を續けながら、……一たび勢力圈内に達するや、……比較的繁榮地にして且つ村落の中心をなすの地に轅を下ろし、天幕を張り、本店屋號或は自己屋號をして、その來りしことを宣傳せしめ、交易を開始す。……かくして附近蒙古民は、自己の信ずる撥子の留轅開業せ

るを知るや、唯一の財産財貨たる牧畜および毛皮類を合せ携え、陸續として撥子滞在地に赴き、各々その欲するところに從ひ交易する樣は、忽出せる市場とも喩ふべく、該撥子の掌櫃的（支配人のこと）および夥計（手代のこと）等はこれを迎え、辭令巧に厚遇を粧ひ、先づ彼等の携ふる牧畜および毛皮を眼識にて觀察したる後、その缺點を指示し、巧に實價以下に評價し取引を肯ぜしめ、しかる後、彼等の要求する貨物を交附するを常とす。』（『滿鐵調査資料』第四十五編『東蒙における撥子』六八、六九頁）。

かゝる交易の利益はどんなものであらう？　前記の調査書の一節（六四頁）に『今その實際の取引價格を見るに、吾人をして驚倒せしむるものがある。……或る一撥子の如き豪語して曰く、蒙古人と交易し十割以上の純利を見ざる者は暗冥濛昧の徒にあらざれば愚人痴漢なり云々』とあるによつても、その一斑を知ることが出來る。此の如きは、近代的資本以前の商業資本である。かゝる資本はみづから商品を生産しないで、ただ他人の生産物を賣買し、その間に利を射んとするのであるから、その取引する商品を或は價値以下に買ひ或は價値以上に賣るの外なく、いづれにしても等價と等價との交換を前提としては存立し得ないのである。

等價と等價との交換を前提とするも尚ほ資本が成立し得るのは、資本がみづから生産を營み得るやうになつてからであり、それはまた商品としての勞働力の存在を前提とする。だから近代的資本は、資本家的生産方法は、無產者階級——賃勞働者階級——の發生を待つて始めて成立する。それは何人も打消すことの出來ない近世史上の『事實』である。資本家的生産方法の支配する社會——即ち資本主義の社會——において、如何にして資本みづからが剩餘價値を生産するか、社會總資本の上に生ずる剩餘價値は何處に淵源するか、を知らうとするならば、吾々はこれを商品としての勞働力の性質に求むるの外ないのである。

この場合吾々が、流通過程における等價と等價との交換を假定するは、かゝる假定の下においてのみ、如何にして資本の生産過程が剩餘價値を生むかの問題が、始めて明白となるからである。

商品の交換は、ただ價値の轉形であり、所有權の移轉である。商品そのものの價値は、此の如き異なる法律行爲に基づく所有權の移轉によつて、その總量を增加するものではない。例へばAの所有せる商品をBが買うたとするならば、Aの所有に屬せる價値が商品形態から貨幣形態に轉化し、Bの所有に屬せる價値が貨幣形態から商品形態に轉化したまでのことである。勿論かゝる取引に際し、AまたはBの何れかがより多く利益することはあらう。けれども、それがために、AおよびBの双方に屬する價値そのものの總量が增減するのではない。このことは、取引所の取引について見たら、よく分かる。總じて商品の取引には勞力と時間とを要するが、殊に取引の當事者が相手方よりもより多くの利益を獲得しやうとして互に競爭すればするほど、益々多くの勞働と時間とを要する。だから取引所においても、多勢の人々が商品の取引のため、引續き時間を費し勞働を費してゐるだらう。しかし、それらの勞働は、取引せらるゝ商品自體——それはただ倉庫の内に眠つて居る——の上に、何等の物理的變化を加ふるものでなく、從つてそれら商品の價値を增加するものではない。それらの勞働は、商品の生産のために必要とさるゝ勞働でなく、ただその取引のために必要とさるゝ勞働であるから、例へば訴訟手續に關して行はるゝ勞働が、係爭物の價値を增加しないと同じやうに、何等の價値をも造り出すものではない。だから賣買の結果、假にAの所有に屬せる價値は減少し、Bの所有に屬せる價値は增加したとしても、この場合、一方のためにマイナスたるものは、他方のためにプラスである。變化したものは價値の分配であつて、價値そのものゝ總量は、これがため一分子だに增減しないのである。

資本家的生産の起れる以前には、生産界は資本の支配の外に獨立してゐた。だから古代的資本は、非資本家的生産方

法の行はるゝ社會と社會との間隙に棲息しつゝ、その生産物の交換を媒介するに際し、『高く賣るために安く買ふ』といふことを其の原則とせざるを得なかつた。『だから、生産物がその價値において賣らるゝかぎり、純粹な獨立した商業は、一見して不可能だといふことが分かる』（資本論、第三卷、第一部、四一三頁、高畠氏譯本、三の二、一二五〇頁）。かゝる場合における商人の利潤は、Veräusserungsprofit, profit upon alination であり、それは資本みづからが生産した剩餘價値から成るのでなく、資本の領域外において生産された價値が移轉されて資本の所屬物となるに過ぎない。ところで資本主義の社會――資本家的生産方法の支配せる社會――にあつては、資本が生産界をその支配のもとに置き、その支配のもとにおいて自己の領有に歸すべき剩餘價値をみづから生産する。そこで、資本は諸商品を價値通りに賣買しても尚ほ剩餘價値を獲得し得ることとなるのであり、また吾々にとつては、――資本主義社會の本質を理解せんとする吾々にとつては、――等價と等價との交換を前提とするも、資本はなほ如何にしてその生産過程において剩餘價値を生産し得るかが、根本の問題となるのである。

かくて商品としての勞働力の發生は、資本をして商品法則――等價と等價との交換――に從ふことを可能ならしめた。しかし同時にまた、商品としての勞働力の賣買は、その買手たる資本家が等價を提供することなしに一定の剩餘價値を領有することを必然ならしめる。勞働力なる商品がその價値通りに賣買さるゝかぎり、かゝる商品を所有せる賃勞働者と、かゝる商品を購買するための貨幣を所有せる資本家とは、等價物と等價物とを交換するところの、『法律上平等な人と人』（資本論、第一卷、カウツキー版、一二三頁）として對立する。そこには、フランス革命によつて一般化されたる、私法上の萬民平等が現はれる。しかし、勞働力が商品として提供されるといふこと其れ自身のうちには、勞働者が自己の勞働力のほか賣るべき何物をも有たず、從つて彼等が或る意味において契約の自由を失へることが包含さ

れてゐる。彼等がその勞働力を價値において賣ることにより、その使用價値を資本家の利用に委ねるといふことと共に自身のうちに、先きの平等をその反對物たる不平等に轉化すべき必然的契機が横はる。たとひそれは、等價と等價との交換といへる、何等の强制、何等の錯誤をも含まざる、平等の契約關係であるにしても、もしそれが勞働者と資本家との間における勞働力なる商品の賣買であるならば、それは生產過程において必然的にその反對物に轉化し、後者による前者からの勞働搾取といへる、一の階級關係に成長する。商品はくせものである。一たび勞働力が商品となれば、商品交換の世界――所有權の移轉が行はるる法律の世界――には、完全な四民平等が行はれるとしても、それは商品生產の世界――價値の生產が行はるる勞働の世界――のからくりによつて、現に吾々の眼前に展開されつゝあるが如き、極端なる貧富の懸隔を齎す、この法律上における完全なる平等の、經濟上における極端なる不平等への轉化は、一に商品なるくせものの仕業である。

旣に平等の關係は階級の關係に轉化した。階級鬪爭は行はれざるを得ない。しからばその鬪爭は如何なる形において起るか？　それは第一に勞働時間および勞賃の問題に關して起る。

吾々は先づ勞働時間の問題について考察するであらう。旣に述べたやうに、剩餘價値の生產は、勞働者がその必要勞働以上の勞働に從事することを前提とするのだから、彼等の勞働時間がその必要勞働（勞賃に相當する價値を再生するための勞働、七十圓の月給を貰ふものに取つて言へば七十圓分の勞働）に相當する時間以上に延長せらるゝことは、資本家的生產にとつて絕對に必要なことであり、從つてそれは、資本家的生產が成立した最初の時から行はれ、且ついつまでも其の一般的基礎を成すものである。かゝる方法に基づく剩餘價値の生產は、勞働過程の上に何等の質的變化を加へずとも、たゞ勞働時間の分量の增加によつて行はれる。自然、資本家的生產の發展の初期にあつては、この方法に主

力が用ひられた。明治三十六年農商務省の編纂したる『織物職工事情』を見るに、例へば淺野工場(美濃)、森嘉七工場(尾張)、山本工場(尾張)、山森工場(米澤)、香野機業場(川俣)等の諸工場においては、始業時間は午前五時、終業時間は午後十時、實に前後十七時間に亙る勞働が强制されてゐたのである。織物作業そのものは手工業時代に行はれた舊式のまゝであつても、かゝる長時間に亙る勞働は、資本家のために剩餘價値の生産を可能ならしめたのであり、(單なる商品生産たる手工業は、これによつて資本家的なる商品生産に轉化する)、また作業過程が舊式のまゝであればあるほど、資本家は剩餘價値の生産のため、勞働者に對し出來うるかぎり長時間の勞働を課する必要があつたのである。

明治三十五年八月五日の日附を以て、埼玉縣知事木下周一が農商務大臣男爵平田東助に宛てたる『機織工女虐待事件報告書』、ならびに右報告書に現はれたる機業者金子初五郎以下三名に對して、明治三十六年三月十四日東京控訴院において下されし判決文は、我國の資本家的生産の初期における勞働者虐待の一事例として、或は歴史的の價値を有つであらう。私は次に判決文における理由書の一節を抄錄するであらう。

『被告初五郎はその邸内に二棟の工場を有し、工女二十七八名を使役し、機業に從事するものにて、工場の周圍には堅牢なる柵を設け、その間、表門および裏木戸の設けあるも晝夜の別なく常に之を鎖し、少しも工女の外出を許さず、また外部より工場の模樣を窺ふことを得ざらしめ、工女を使役する極めて苛酷にして、日々その織るべき過度の定尺を課し、被告マンと共に、雇人たる被告誠治、字吉、および元次郎、周三郎を指揮して工場を監視せしめ、定尺を織る能はざる工女に對しては、夜間深更に至るも强ゐて就業せしめ、且つ或はその食を減じ、或は全くその食を屛去し、或はその衣服を屛去し、或は寒中裸體となして毆打し若しくは冷水を注ぎ、或は制縛して毆打し若しくは衣服を屛去する等、頗る苛酷を極めたるものにして、明治三十三年以後自宅において左の行爲をなしたり。

第一、工女藤澤カノが定尺を織り得ざるため、(一)明治三十三年中……被告初五郎は自らカノを縛し、被告マン、周三郎と共に之を毆打し、(二)明治三十四年一月頃、被告初五郎は、被告元次郎に命じ、カノを裸體となして縛し、雪中邸内を引廻さしめ、(三)明治三十三年十二月より明治三十四年八月に至る間において、被告初五郎、周三郎相謀り、カノを裸體となし、股より肩に掛けて之を縛し、居宅鴨居に釣上げおき毆打し、

第二、工女岡田セキが(一)虐待に堪へずして逃亡したるも、その居所を覺知せられ、明治三十三年十二月頃、被告初五郎方に連戻さるゝや、初五郎、マン、周三郎相謀り、セキを裸體となし、その股間に小枠を挾みたるまゝ、縄を以て兩足を縛し、……セキの臀部を毆打し、なほセキが定尺を織り得ざるため、(二)明治三十四年中、……セキを裸體となし、股より肩に掛けて之を縛し、居宅鴨居に釣上げ、數十分間放置し、(三)同年中……セキを裸體となし、その片足を他の工女の片足に縛せしめ、セキに命じ板の間に起立せしめ、同人が苦痛に堪へずして腰を屈する毎に、共に箒を以て臀部を毆打し、

第三、工女横田タカが定尺を織り得ざるため、明治三十四年四月より明治三十五年六月までの間において、被告初五郎、マン相謀り、タカを裸體となし共に之を毆打し、

第四、工女田畑ツヤが(一)虐待に堪へずして逃亡したるも、その居所を覺知せられ、明治三十四年十二月頃、被告初五郎方に連戻さるゝや、被告初五郎、マン、守吉相謀りツヤを裸體となして縛し共に之を毆打し、なほツヤが定尺を織り得ざるため、(二)明治三十五年中……ツヤを裸體となして縛し、之を仰向に倒しおき、竹箆を以て……に差入れ之を掻廻し、(三)明治三十五年一月より四月までの間において、……土藏内においてツヤを縛し之を毆打せしめ……(以下第五、工女岡田キク、第六、工女佐野キヨ、第七、工女姫野ミヨ、第八、工女堀下ミナ、第九、工女

高御サト、第十、工女柿木ノサ、第十一、工女鈴木イネに關する記事を省略す。)

この判決が資本家を罰したのは(尤もこれは被告初五郎を重禁錮二年罰金三十圓に處したに止まる)、彼が勞働時間を延長したからではない、勞働時間を延長するために、商品法則の許容する以上の虐待を勞働者に加へたからである。工場法制定以前の立法は、勞働力なる商品の購買者に對しその使用價値の利用を無制限に許容した。既に述べたやうに、商品の購買者は、その價値を支拂ふことによつて其の使用價値を我がものとする。さうして既に我がものならば、彼は自由にこれを利用することが出來る。例へば私が一個の帽子を價値通り二圓で買うたとする。この場合、私は相手方をごまかしたのではない、價値相當の代價を支拂つたのである。ところで既に價値相當の代價を支拂つて其の帽子を我がものとする以上、私は如何にその使用價値を利用しても、他人の權利を侵害するものではない。だから私は去年買うた帽子を、今年も用ふることが出來る。今年中用ひたならば、形はくづれ緣も傷んでくるであらうが、しかし私はこの帽子の所有者であるから、來年も引續きこれを使用することが出來る。かくて私はその帽子が遂にボロ／＼になつて全く用を成さぬやうになるまで、その使用價値を搾取し竭くすであらう。それは帽子の虐待であるかも知れない。しかしローマの法諺にいふが如く、『自己の權利を行使する者は何人に對しても不法を加ふることなし』(qui iure suo utitur nemini facit iniuriam)。私は私の帽子をいくら虐待したからと言つて、帽子の販賣者から抗議を持ち込まれるわけはないのである。それと同じやうに、勞働力なる商品を購買したる資本家は、その勞働力の使用價値を十二分に利用する權利を有つ。ところで勞働力の使用價値は勞働から成り、勞働は時間のうちに存在する。即ち資本家は彼れの雇入れた勞働者をして出來得るかぎり長時間の勞働に服せしむることを、商品購買者の權利において主張し得るのである。

けれども、勞働力なる商品は、生きた人間たる勞働者のからだに宿る。帽子なれば、そのもの自體が販賣者の手を離れ

切つて、購買者の手に移り得るが、勞働力はそれが賣られた後も、依然としてその販賣者たる勞働者自身のからだに宿つてゐる。こゝに勞働力なる商品の更に新たなる特徴が存する。既に勞働力は生きた人間に宿れる力であるから、これを或る限度以上過度に使用することは、勞働者自身の生命を害することになる。さうして、かゝる生命の傷害に對しては、勞働者は商品の販賣者たる立場から、等しく商品交換の法則に立脚しつゝ、これに抗議を持ち込む權利を有つ。何故といふに、過度なる勞働時間に服せしめらるゝため、例へば三十年間勞働し得るものが十年間しか勞働し得なくなるとするならば、その結果からいふと、資本家は勞働者に一日分の勞働力の價値を支拂ひながら、實は三日分の勞働力を使用したことになるからである。一日に三日分の勞働力を使用するならば、一日に向つて三日分の勞賃を支拂はねばならぬ。一日分の勞賃を支拂つておきながら、事實において三日分の勞働力を消費するといふことは、明かに商品法則の侵害である。だから勞働者は、同じ商品法則に立脚しつゝ、その勞働時間をば一定のノルマルな大きさに制限しやうと主張する權利を有つ。

そこで同じ商品法則によつて裏書された權利と權利との對抗が起る。さうして平等な權利と權利との間における衝突は、たゞ力がこれを裁決する。それゆへに、資本主義的生産の歴史においては、勞働時間の標準化が、勞働者階級と資本家階級との間における闘爭——階級闘爭——となつて現はれる。それは eine Machtfrage である。

勿論或る程度における勞働時間の短縮は、資本家階級の要求としても起り得る。けだし資本家的生産は、必ず賃勞働者の存在を前提とする。勞働力を商品として賣る賃勞働者がゐなければ、資本家的生産は成り立ち得ないのであり、賃勞働者と對立することによつてのみ、資本家は始めて資本家となり得るのである。だから賃勞働者階級の存續は、——

その擴張再生産は、——資本家階級にとつて甚だ大切なことである。ところで個々の資本家の利害は、必ずしも資本家階級全體の利害と一致しない。そこで個々の資本家の貪慾を制限して、勞働者階級のノルマルな生存を維持することが、資本家階級自體の全體的利益のために、——謂ゆる國家の利益のために、——必要とされてくる。それは一定の季節に、河川の漁撈、山野の狩獵が禁ぜらるゝと同じことである。それは魚類や鳥類やの利益のために禁ぜられるのでなく、人間の窮極的利益のために禁ぜられるのである。日本における工場法の制定が、極めて不十分なものでありながら、無産階級の甚だしき悪戰苦闘なくして、割合に早く實現され得たのは、ヨーロッパにおける多年に亙る經驗の賜物であらう。

ところで、たとひ工場法が制定されたからとて、勞働時間を問題とする勞資間の階級闘爭が、鎭定さるるわけではない何故といふに、十七時間が十五時間に制限さるれば、更に之を十二時間とする要求が現はれ、それが遂に十二時間となれば、更に之を十時間とする要求が現はれ、それが遂にまた十時間となれば、更に進んで之を八時間とする要求が、現はれ、さうして其の度毎に激しき闘爭が演ぜられねばならぬからである。既に述べたやうに、賣買されるものが例へば一個の帽子であれば、賣買された後は、賣手と買手との間には何等の交渉もなく、そこに悶着の起るべき餘地はない。ところが勞働力なる商品は、賣られた後も賣手のからだに宿つて居り、さうして其の使用價値——一人の勞働者が一日のうちに勞働し得る時間——は極めてエラスティック(伸縮自在)であり、何時間を限度とすべきかについては、何等客觀的の規準がない。しかも勞働時間を成るべく長くすることは、資本家の利益であり從つてその要求であり、それと同時に勞働時間を成るべく短くすることは、勞働者の利益であり從つてその要求であり、この相容れざる要求と要求とが、同じ商品法則の裏書を得て正面からぶつかる。闘爭は演出されざるを得ない。

それは演ぜられざるを得ざる闘爭である。それゆへに私はこれを資本主義の社會における必然的の闘爭といふ。この

鬪爭は、勞働力が商品となつた刹那にその可能性を具へ、勞働者階級の勃興と共に、年一年現實性を加へる。

或は勞働と資本との利害は一致すると說く者がある。私も或る場合に斯かる關係あることを認める。しかし或る點に利害の一致があるといふ位のことならば、互に塹壕にもぐり込んで相戰ひつゝある敵と敵との間にも、例へば互に雨の降らざらんことを祈る點において利害が一致するといふが如く、或る程度の利害の一致は存在するであらう。

或は階級鬪爭を否認する者があり、或はこれを非難する者がある。しかし否認しても非難しても、事實そのものは消えない。善かれ惡かれ、吾々は日々に激化されゆく階級鬪爭の渦中に住むではないか？　或人が氣違ひになつた時、おれは氣違ひではないと主張したところで、彼は依然として狂人である。大地震が起る、地が破れ家が倒れる、その眞只中にゐて、地震が起るとは怪しからぬと非難して見たところで、地は破れ家は倒れる。

吾々はたゞ眼前の『事實』を見る。事實としての階級鬪爭を見る。さうして吾々は、何故に斯かる鬪爭が起るかを科學的に說明せんとする者である。科學的にその可能性、その現實性を說明するがゆへに、階級鬪爭は必然的なる階級鬪爭となつて現はれるのである。

さて以上の論述において、吾々は勞働力なる商品がその價値通りに賣買されると假定した。しかし事實においては、それは殆ど常に資本家によつて價値以下に買ひ取られる。そのことは、勞働者の受取る勞賃が必ずしも常に彼れ自身および彼れの家族を養ふに足らざるの事實に徵して分かる。殊に資本家的生產が發展すればするほど、周期的に襲來する不景氣の打擊は益々ひどくなり、その度毎に業を失ふ者の數もまた次第に增加する。これらの勞働者は、その失業の期

間を何とかして自ら喰ひつなぎ、來るべき好景氣における資本家の需要を待たねばならぬ。もしその期間を平均すれば彼等が平生得るところの勞賃は、實は遙により少き計算となる。

ところで勞働力の價値が如何程であるかといふことは、その使用價値の問題と同じやうに、極めてエラスティックな（伸縮自在な）、何等客觀的規準なき問題である。けだし勞働力の價値は、他の商品のそれと同じく、これが生産のため社會的に必要とされる勞働の分量によつて定まるのであり、結局勞働者自身および彼れの家族の生活に必要とされる消費資料の分量によつて定まるのだが、しかし、その必要とされる生活資料の分量は彼等の生活程度に依存するのであり、さうして其の生活程度なるものには實は何等はつきりしたきまりがないのである。もし問題が道具の生産費に係はるのであつたならば、道具は自存の目的を有するものでないから、これが生産費も、その道具が生産に役立つ限度を目安として打ち切ることが出來、もし價格が生産費を償はなければ、更にその生産を中止することも出來る。しかるに勞働者の場合は人が道具になるのであり、さうして人そのものは別に自存の目的を有つて居り、資本家のための生産的道具として製造されたものでないから、彼れ自身獨立の生活要求を有つ。從つて彼等の生活程度を資本家のため都合の好い程度に押へ付けておくといふことは出來ない。ところで、彼等の生活の資源は一に勞賃にあるのだから、一方、勞賃の標準は勞働力の價値にあるとしても、他方、勞働力の價値そのものが逆にまた勞賃に依存するのである。

要するに、問題は決して簡單でない。吾々は先きに、勞働力の賣買は價値通りに行はれるとしても、資本家は、勞働者の勞働時間を或る限度以上に延長することによつて、剩餘價値を獲得し得ることを述べたが、かゝる剩餘價値は、勞働力をその價値以下に買ひ取るに從うて益々增加するのであるから、資本家は勿論出來得るかぎり勞賃を引下ぐることを利益とする。しかし之と正に逆に、勞働者は出來得るかぎり勞賃を引上ぐることを利益とする。一方の利益は正に他

方の不利であり、一方の不利は正に他方の利益である。利害は恰も正面衝突をなす。階級闘爭は行はれざるを得ない。かくて資本家的生産方法の下においては、平和なる等價と等價との交換それ自體のうちに、必然的に階級闘爭を含まれる。

今この闘爭において勞働者が無慘なる壓迫を免れんがために、或は組合を組織し、或は政黨を組織し、多數團結の力に頼らんとするは、當然の歸趨である。無産者は無産者である。彼等には資力がない。彼等の唯一の强味はその同類の多數にある。資本家的生産が發展すればするほど、彼等の陣營に屬する大衆は、絶對的にもまた相對的にも、益々増大する。團結の力に頼らんとする希望、計畫、運動は澎湃として起る。ところで是等の運動は、それが勞働時間または勞賃の問題を問題とするに止まるかぎり、それは畢竟、勞働力なる商品を價値において賣らんとするの努力に過ぎない。言ひ換ふれば、それは等價と等價との交換といへる商品世界の基本法則を、勞働力なる商品の賣買の上に實現せんとするの努力に外ならぬ。だからその運動は、商品世界の基礎を――謂ゆる國家社會の基礎を――少したりとも動揺せしめやうとする運動ではない。たとひ勞働力は價値通りに賣らるゝことになつても、賃勞働者は依然として賃勞働者であり、資本家は依然として資本家であり、前者は依然として後者により搾取され、社會は依然として賃勞働者および資本家の階級に分立するところの、元とのまゝの資本主義的社會である。

大正十四年十二月一日午後三時より結黨式を擧げ、間もなく政府當局より結黨禁止の命令を受けたる農民勞働黨の綱領を見るに、その綱領の表面に現はれたる範圍内においては、私は少しも商品法則の破壞を目的とする條項あることを發見し得ぬ。その第十七條『八時間勞働（一週四十四時間）の確立、但し鑛山勞働者は六時間（一週三十三時間）』およびその第二十條『最低賃銀法の制定』、等、等は、正に私が以上論述した項目に該當するものであるが、これらは勿論、たゞ

商品法則に立脚する主張であつて、それは一定の生産費をかけた帽子を二圓でなければ賣らないと主張するのと、同じことである。

農民勞働黨は結社を禁止された。先きは何うなることか分らない。しかし私は今少し議論を進めたく思ふ。そこで勞働組合は愈々强くなり、勞働黨も愈々大きくなり、その結果、勞働力なる商品もやつと價値通りに賣買されるやうになつたと假定する。ところで、この場合に吾々の注意すべきことは、勞働の生産力が資本家的生産方法のもとにおいて絕えず急激なる發展をなしつゝある、といふことである。しかも此の勞働の生産力の增加は、取りも直さず同じ分量の勞働によつてより多くの使用價値物が（米ならばより多くの分量の米が）生産されるといふこと、言ひ換ふれば、同じ分量の使用價値物の生産のために必要とされる勞働の分量がより少くなるといふことを、意味するに外ならぬ。さうして、それはまた、それゆへに勞働力の價値を低落せしむるのである。

今、一定分量の使用價値物の生産のため必要とされる勞働の分量がより少くなれば、それらのものの價値は低落する。何故なれば、既にしば〲言ふ如く、商品としての物の價値はこれが生産のため必要とされる勞働の分量に依存するのだから。例へば一人の職工が、以前は十二時間分の勞働を以て一足の足袋を生産してゐたのに、今では同じ時間の勞働を以て二足の足袋を生産し得るに至つたとするならば、彼れの勞働の生産力は二倍に增加したのである。さうして、假にその職工の勞働を以て、足袋の生産のため必要とさるゝ總ての勞働を代表せしむるならば、彼れの勞働の生産力が二倍に增加したといふことは、即ち一足の足袋の生産のため必要とさるゝ勞働時間が二分の一に減じたといふと同じであり從つて足袋一足分の價値は以前に比しその二分の一に低落するのである。

ところで、私が今問題としやうとするところは、かゝる勞働の生産力の増加が、生活必要品の生産に關して實現されるかぎり、それは即ち勞働力そのものの價値を低減し、從つて資本家階級のため剩餘價値を増加するの結果を齎す、といふことである。

それは何故か？　假に一日の勞働時間を十二時間とするならば、これは既に述べたやうに、必要勞働時間と剩餘勞働時間とから成り立つ。假に各々を六時間づゝだとする。ところで前者は、勞働力に向つて支拂はれた價値を再生産するため必要とされる勞働時間であるから、それは勞働力の價値の低落に伴うて減少する。しかるに勞働力の價値は、勞働者およびその家族の生活必要品を生産するため必要とされる勞働時間によつて決まるのだから、以前六時間で生産されたと同じ分量の生活必要品が、今は三時間で生産されるやうになつたとすれば、勞働力の價値は二分の一に減少し、それにつれて、必要勞働時間は六時間から三時間に減少することになる。それゆへ、もし一日の勞働時間が元とのまゝであるとすれば、剩餘勞働時間は六時間から九時間に増加するのであり、それと同時に、それと同じ比において、資本家のためには剩餘價値の生産増加が行はれるのである。

そこで如何なる結果が生ずるか？　勞働組合は愈々強くなり、勞働黨も愈々大きくなり、その團結の壓力によつて勞働力なる商品もやつと價値通りに賣買されるやうになつたとしても、勞働力の價値そのものが年々に減少するのであり、それにつれて資本家階級の所屬に歸する剩餘價値の總量は年々増大するのであり、社會總生産物のうち比較的には益々より少き割前が勞働者階級に歸し、益々より多くの割前が資本家階級に歸し、貧富の懸隔は益々甚しくなるのである。

資本家階級および勞働者階級の間における斯かる貧富の懸隔は、勞働の生産力の發展に基づくのだから、それは當然

に、歩一歩、勞働の生産力の發展に順應して定まる。マルクスがその唯物史觀の公式の劈頭において、『人類は、彼等の生活の社會的生産において、一定の、必然的の、彼等の意志から獨立した關係に、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展階段に順應するところの生産關係に、入り込むものである、云々』と言つてゐることは、この場合、極めて嚴密に當てはまる。現代社會において年々甚しくなりつゝある貧富の懸隔、勞働者階級と資本家階級との間における斯かる懸隔的關係、それは何人の意志に基づくものでもなく、全く吾々の『意志から獨立した關係』であり、それは與へられたる勞働力の價値の下においては、或る『一定の、必然的の』關係であり、且つまた、勞働力の價値の變動に順應して、年々に移りゆく。しかも勞働力の價値の變動は、勞働の生産力の變動を反映せるものに外ならぬ。かくて勞働者階級對資本家階級の關係は、歩一歩、『物質的生産力の一定の發展階段に順應する』のである。なほマルクスの言ふところによれば、この生産關係は、『社會的の意識形態がこれに順應するところの、現實の土臺である』吾々は後に至つて、更にこの點を明かにするであらう。

資本家的生産の發展に伴ひ貧富の懸隔が益甚しくなるといふ事實は、苟くも現代社會に生きて生活しつゝある者の身に感じ得るところであらう。假に資本家階級を天となし、勞働者階級を地となせば、天も地も共に上ぼる。しかし勞働者階級の生活を代表せる地は極めて徐々に上ほるに反し、資本家階級の富を代表せる天は跳躍しつゝ上ほる。天と地とは年一年その懸隔を甚しくする。

かゝる貧富の懸隔は、資本家的生産そのものゝ內在的性質が結果するのだから、それは必然に、資本家的生産の發展してゐる國であればあるほど益甚しい。私は大正五年の秋『貧乏物語』において、既にそのことを指摘した。材料は非常

に古いが、事の本質において變りはないから、その折揭げた英、佛、獨、米の四ケ國についての富の分配表（一九一四年刊、キング『米國人の富および所得』九六頁所載）の要領を、再び玆に述ぶるであらう。それによれば、全人口中の僅に二パアセントを占むるに過ぎざる最富者の階級によつて領有せらるゝ富は、全國の富に對して、イギリスにおいては實に七一・七パアセント、フランスにおいては六〇・七パアセント、プロシヤにおいては五九・〇パアセント、アメリカ（ウィスコンシン州）においては五七・〇パアセントの割合を占める。これに反し、全人口中の實に六五パアセントを占むる貧民階級によつて領有せらるゝ富は、全國の富に對してイギリスにおいては僅に一・七パアセント、フランスにおいては四・三パアセント、プロシアにおいては四・九パアセント、アメリカ（ウィスコンシン州）においては五・二パアセントである。（調査材料の年代は、プロシヤ一九〇八年、その他は一九〇九年）。イギリスは最も早く且つ最も多く資本主義的に發展した國であるが、前記の表によれば、この國にあつては、全人口中の僅に二分を占むるに過ぎざる者が、全國の富の七割一分餘を領有するに反し、他方、人口數において六割五分の多數を占むる者が、富においては僅に一分餘を所有し得るに過ぎない。如何にして此の如き事態が必然的に生ずるか？　それはただ價値法則に基づき商品としての勞働力の價値を考察することによつて、始めて科學的に說明され得る。しからば此の如き事態は永續するであらうか？　價値法則はそれに答ふるに、資本家的生産方法が維持せらるゝかぎり、人間の勞働力が商品として賣買せらるゝかぎり、かゝる事態はただに永續するばかりでなく、益極端化せらるゝことを以てする。しからば重ねて問ふ、人類は果して斯かる事態のもとに猶ほ久しく耐へ得るであらう？　それには近き將來の――または遠からざる將來の――歷史が答へるであらう。

何れにしても、勞働の生産力が增加すればするほど、勞働者階級は相對的に貧乏になる。この際、問題は相對的の問題であることを忘れてはならぬ。吾々は勞働者階級が絕對的に益貧乏になるといふのではない。明治二十年代に比ぶれば、明治四十年代の勞働者の生活程度は向上してゐるであらうし、明治四十年代に比ぶれば、大正十年代の彼等の生活程度は更に向上してゐるであらうし、今後もなほ次第に向上するであらう。ただ吾々の强調するところは、彼等が資本家階級との比較において益貧乏となり、社會總生産物に對する彼等の分前が割合において益減少するといふ事實である。さうして此の比較の問題が、吾々の社會生活にとつては極めて重大なのである。『家は大きくとも小さくとも、これを圍繞する他の家々が一樣に小さければ、それは住居としての總ての社會的要求を充たす。けれども、小さな家の傍に一個の宮殿が建てられ、その小さな家が小屋のやうになつたとする。さうなると、その小さな家は、これに居住してゐる者が、何等の權利をも主張し得ない者か、または極めて僅かな權利しか主張し得ない者だといふことを、證明するわけだ。さうして文明の進步に伴ひ、その家はなほ如何に高くなるとも、もしこれに隣する宮殿が、同じ程度または遙にそれ以上の程度において高くなるならば、比較的に小さな家に住む人は、いつもその四壁の內で、益不快に、益不滿に、益不景氣に感ずるであらう。』（マルクス『賃勞働と資本』、拙譯本、一九二四年版、三六頁）。

ところで、勞働者が此の如く次第に相對的に貧乏になつて來るといふことは、前に述べたやうに、勞働の生産力の增加が齎す必然の結果である。即ち勞働者は益多くの富を生産するがゆへに、相對的には益貧乏となるのである。吾々が世界最富國の一たるイギリスにおいて、最も多くの貧民を見出し得るは、これがためである。古歌にいふ、『身のほどをしりからけして稼ぎなば、貧乏神のつくもひもなし』と。これは單なる商品生産時代の歌である。故啄木氏の歌にいふ、『はたらけどはたらけど猶わがくらし樂にならざり、ぢつと手を見る』。これは資本家的なる商品生産時代の歌であ

る。

『働けど働けど、わがくらし楽にならざり、』それは何故か？　勞働の生産力が高まるにつれて、勞働者の賣りうる唯一の商品たる、勞働力そのものゝ價値が下落するからである。それゆへ勞働者は、或は勞働組合の力により、或は勞働黨の力により、幾多の階級鬪爭を經て、漸くその勞働力を價値通りに賣り得るやうになつたとしても、鬪爭の舞臺自體が鬪爭當事者の意識せざるうちに、徐々に回轉して、資本家のためには益有利に、勞働者のためには益不利に轉化するのである。譬へば、Aは永く春を停めんとし、Bは早く夏を迎へんとして、互に相鬪爭してゐる場合に、彼等の共に立脚せる地球自體が、太陽の引力により徐々に回轉し、春を見棄てゝ夏に入るが如くである。何人の眼にも見えざる引力の法則——商品價値の法則——の作用によつて、かゝる結果が生まれるのである。それはアダム・スミスの謂ゆる『或る見えざる手』の働きである。『ぢつと手を見る』といふその手が、この見えざる手である場合に、階級鬪爭は必然的に轉化する。

　勞働の生産力が益發展する時、商品法則の基礎の上にあつては、勞働組合も勞働黨も、商品としての勞働力の價値の下落を如何ともすることが出來ない。そこで遂には商品法則の基礎そのものを改造せんとするの意圖が起る。與へられた舞臺の上で爭つてゐた者が、舞臺そのものを問題とすることになる。かくて、最初のうちは、ただ勞働力に關する商品法則の樹立運動たるに過ぎざりし階級鬪爭が後には、必然的にその反對物たる、商品法則の否定運動に轉化する。それは賃勞働者の自己否定の運動である。賃勞働者の自己否定は、人間の勞働力を商品として賣買することの否定である。ところで賣買は双方行爲である。だから賣ることの否定は、即ち買ふことの否定である。『資本は賃勞働を前提とし、賃

勞働は資本を前提とする。兩者は相互に條件づける、兩者は相俟つて發生する。……一が他を條件とするのは、恰も高利貸と放蕩者とが相俟つて立ち行くやうなものである。』（マルクス『賃勞働と資本』、前掲拙譯本、三三、三五頁）。放蕩者が自己を否定して放蕩者でなくなれば、高利貸は相手を失ふ。相手がなければ、高利の金は貸せない。一方の自己否定は同時にその相手方の否定である。それは、これまで兩人の間に行はれてゐた利子歩合の爭ひと違つて、社會關係の根本的變革である。放蕩者の生活改造は、その相手方たる高利貸にとつて、謂ゆる危險思想である。彼れの生活の基礎を危くするものである。今、勞働運動の社會主義化は、正にこれに當る。

勞働運動の社會主義化、これもまた吾々の眼前に横はる諸國共通の事實である。最近新聞紙の報道するところによれば、新たに成立すべかりし農民勞働黨は、二十萬に近き黨員を有する筈なりしといふ。しかるに內務當局の說明によれば、これは『共産主義の實行を企圖する』政黨なるが故に、その結社を禁止したりといふ。（大正十四年十二月三日の『大阪每日』による）。しからば、日本にも共産主義に贊成し得るものが二十萬近くゐるといふ事實が認められたことになる。この事實は非難しても憤慨しても、事實としては消え失せない。今、吾々は、ただその事實を問題とする。しかるに科學の任務は、事實を必然の關係において說明するに在る、だから階級鬪爭の斯かる轉化もまた、科學の前には一の必然的轉化として現はれる。思ふに社會主義運動は、今後なほ日を追うて益盛んとなるであらう。人もし之を以て、單なる海外思想の傳染となすならば、全く觀察の方針を過まるであらう。すべて『人間の意識がその存在を規定するのでなくむしろ逆に、彼等の社會的存在がその意識を規定するのである』。社會主義ならびに社會主義運動は、勞働力の商品性のうちに含まるゝ矛盾の必然的展開である。その運動の動因は、商品世界——資本主義社會——そのものに內在する。乞ふ、局に當るもの地を掘つて青天を覓むることなかれ。

論理的と對象論的

山内得立

一

認識と意識とは一方から考へれば同意義のやうにも思はれるが又他方から見れば其間に劃然たる區別が存するやうに思はれる。此兩者が密接なる關係に置かれてゐることは明白であるがそれは如何なる關係に於てゞあるか、我々は此關係を如何に考ふべきであるかは現今哲學界に於て一の重要なる問題であり、少くとも私にとつては主要にして且つ至難なる問題として常に關心の中心事をなしてゐる。玆には此關係を根本的に考へてみるといふよりも寧ろこの問題が問題として如何なる意義を有するか、此兩者が如何なる立場に立つて互に他を區別してゐるか、即ち兩者の內面的關係といふよりも其區別の點に重きを置いて此問題が現今の哲學界に於て如何なる位置を占むべきかといふ事をできるだけ簡單に述べて見たいと思ふのである。

或物を認識する又は認識したといふとき先づ普通に考へて其物が意識され又は意識されてをらねばならぬ。我々の意識にのぼらない事物は勿論之を認識することもできぬ事は明かであらう。從て認識されたものは必ず意識されたもの又は意識さるべきものでなければならない。此意味に於て認識と意識とは同一義と考へらるゝであらう。併し之を逆にし

で意識されたものは同時に認識されたものであると云ひ得るかどうか。

認識に於ては單に或對象が我々の意識によつて意識されるといふことのみでなく、意識された事柄が果して眞であるか僞であるかゞ問題となる。或はそれが善であるか惡であるか、美か醜かゞ問題となる、即ちそこでは常に價値の對立が問題となり、價値の判斷が、主要なる仕事となつてゐる。何等かの意味に於て價値に關係のない認識は認識とすら云ふを得ない。認識とは價値判斷であるといはるゝのも此理由からであらう。從て認識に於ては意識の事實がではなく、何等かの價値に對しての取るべき態度が問題となる。意識から認識に移るためには意識の上に何ものかゞ加らねばならぬ、或は意識から認識の領域を區分すべき何ものかゞ存在せねばならぬと考へらるゝであらう。此意味に於て認識は意識と同一ではない、少くとも其範圍に於て廣狹の差別があるといはねばならぬ。意識でない認識はないが認識に非る意識があり得ると考へねばなるまい。リッケルトなどが表象と判斷とを峻別して認識を專ら判斷の世界に限らうとするのも此の理由によるのであらう。表象もたしかに一の意識作用ではあるが、併しそれは對象をたゞ現前する作用であつて其價値を判斷する働きではない、價値に關係のない作用は判斷又は認識ではなくして單なる意識作用に過ぎない。從て表象と判斷とはリッケルトにとつて啻に區別せられた二の精神作用であるのみならず、兩者は本質的に異つたもの、又は異るべきものであつた。即ち此二者は精神作用の二種類といふよりもその意義に於て、其重要さに於て、格段の差別を擠ふ。認識が專ら判斷中にあつて表象裡に伏在しないといふのは、表象が認識にとつて殆ど無に等しいといふに外ならぬ。この事から更に進んでは判斷のみが認識であつて表象は單なる意識作用にすぎぬと主張せらるゝとき、我々はそこに何を言ふべきであるか。

認識はたしかに判斷であり、判斷に於て成立するであらう。表象は意識作用として判斷とは本質的に異つたものであ

ることも許して見よう。併しこの理由から第一に表象のみが意識作用であつて判斷は意識でないと言ひ得るか。第二に判斷のみが認識であつて表象は認識に與る所がないといひ得るであらうか。判斷は確に表象と異つてゐるが併し其理由から判斷が意識作用でないとは斷じ得まい。表象が一の意識作用であるならば判斷も精神作用の一種であるべきである。勿論認識としては判斷がその凡てゞあつて表象はそれに何の係はる所もないと考へられるかもしれない。然しながら表象が認識に無關係なのはそれが意識作用であるからでなくしてたゞ價値に係はる虞なきが爲である。判斷も一の作用として亦意識の一種でなければならぬ。其故に此等の關係は次の如く考ふるを至當とすべきであらう。判斷と表象とが相並んで夫々認識と意識との世界が成立するのではなく判斷も表象も共に意識作用である。此意識の世界の中にあつて我々は一方に表象と他方に判斷――玆に判斷とは單に知的判斷をのみ指すのではない、情的及び意的判斷も亦其の中に含まれる――とを區別する。リツケルトが認識を判斷に限つたのも勿論この意味に於てゞあらう。かく考へれば認識は明かに意識の根底の上にたつ、意識は認識に比しより廣き領域を有つ、認識ならざる意識はあるが意識ならざる認識はあり得ないと言ふことができる。リツケルトにとつては判斷としての意識が認識の圏内に入つて表象としての意識は此領分から驅逐せられた。即ち彼によつて斥けらるべきは表象としての意識であつて、意識の全體ではない。全體としての意識は表象と共に判斷をも含むべきであるからである。

是に於て意識とは何であるかゞ問題となつて來るであらう。意識には種々の意義があり、心理學的には種々なる解釋も考へらるゝが玆には主としてブレンタノの精神現象、又はフツセルの純粹意識を考への中に置いてゐるのである。ブレンタノの精神現象とフツセルの純粹意識とは嚴密に論ずれは決して同一視すべきではないかもしれぬ。ブレンタノの心理學は自らも明言する如く經驗的立場に立つてゐる。併し彼のいふ「經驗的」とは例へは實證論者又は經驗論者のそ

れとはまるで異つたものであることは特に注意すべきである。フッセルの純粹意識はいふまでもなく意識の心理的事實を意味したものではない。純粹意識は決して經驗的意識ではなかつた。純粹とは凡ゆる點に於て經驗的事實からの獨立を意味するからである。此等の人々の研究せんとしたのは意識の心理學的過程でなくして其本質であつた。さうして意識の本質は何等かの對象を指示するにある、對象の志向的內在が精神現象を物理現象から區別せしむる所以のものである。作用と對象とが志向的關係にあることが意識の本質であることなどは既に周知の事柄であらう。併し志向的關係とは何をいふのであるか。作用が對象を指示するとは心的存在が何等かの意味をもつことである。對象が作用によつて志向せらるゝのは作用が對象を意味することに外ならぬ。物質として考へられたとき、凡ての物は何の意味をも有つてゐない。即ち物質は無意味である。物質も物質といふ意味をもつてゐるといふならば、それは既に物質でなく精神である。心的存在もそれが何かの意味を表出してゐない限り物質であつて精神とはいへない。意識が何物かの意識であるといはるゝのもそれが何等かの意味を意味するからである。對象が意識せらるゝとはフッセルも明晰に論じたやうに外的に實在する（reale）事物が心界に入り込むことでもなく、又意識と呼ばるゝ心的世界の中に存在する（reelle）二の要素間の關係でもない。それ等は凡て意識の過程であつて意識の本質を示さぬ。意識の本質は意味の表現である。意識が意識として存立するのはそれが何等かの對象を指示するからである。此場合或はフッセルの區別した如く志向的本質と合意味的本質とを意識に就て區別せねばならぬかもしれない。對象を指示することゝ之を意味することゝは直に同一でないと論ぜらるゝかもしれない。併し意識が物理的存在では勿論、單なる心理的存在でもないと考へらるゝならば意識が何等かの對象を指示することは究極に於て之を意味することに外ならぬといへないであらうか、意識する作用も意識さるゝ對象も共に意味を中心として旋回し、指示する作用は意味作用であり、志向された對象はやがて意味的對象であ

ると考へ得ぬであらうか。

意識の本質を右の如く解釋するならば精神現象は凡て此特質を具備したもの、又は具備すべきものであることは明かであらう。リツケルトによつて認識の埒外に放逐せられ、判斷に比して殆んど無價値に貶しめられた表象も、それが一つの精神現象であるからには、矢張此の本質を具有したものでなければならぬ。否表象こそは却て純粹に此の本質の具現せらるべき最も惠まれたる意識現象であるといふべきである。何となれば表象は對象を指示する最初の段階であり志向的關係の最も純なる表相であるからである。物を表象するとは何等の私意をも挾まず、一筋に之を意味すること、凡ゆる商慮の前に對象を所有すること、何等かの態度以前にひたすら之を思念することに外ならぬからである。對象の一向的指示が即ち表象であるとすれば、表象は第一に最初の精神作用であるのみならず第二に凡ゆる意識作用の根底ででもあると云はねばならぬ。何故なら他の意識作用例へば判斷作用の場合にも先づ對象が何等かの意味に於て所有せられてゐることが必要である。判斷は對象の取捨であるとしても取捨すべき對象を先つ所有することが判斷の必要にして缺くべからざる前件となるからである。判斷は認識であるとしても其故にそれが意識現象でないとは言ひ得まい。認識も精神作用として一つの意識現象である。意識作用は意味の表現として第一に表象作用でなければならない。かく考へれば判斷の根柢にも表象があると言ふべきである。表象はリツケルトの論ずる如く判斷と異つたもの、判斷と相容れぬもの、更には判斷には何の係りもないものでなく、却つて判斷の根柢にあるもの、判斷の前提をなすもの、更には判斷にはかくべからざるものとなる。ブレンタノが凡ゆる精神作用は表象を根柢とすると云つたのも此意味である。ブレンタノにとつては表象は二つの意味を有つてゐた。第一には他の精神作用例へば判斷とか感情、意志とかに對立した一の精神作用であり、第二は凡ゆる精神現象の根柢に横はるものである。表象が意識と同一視せらるゝのは第二の意味に於

てでなければならぬ。第一の表象は意識其物でなく、たゞその一種にすぎぬ。此意味の表象を意識として考へそれに對立して判斷を認識と想ひ定め、そこから意識と認識との對立を論じようとするのは表象の此二の區別に想ひ到らぬ謬論である。意識と認識との對立は第二の意味に於ける表象と判斷との對照の中に求められねばならない。そして此點から見ても意識が認識の根柢をなし、少くとも其前件をなすことは明かであるであらう。何故ならば第二義の表象は凡ゆる精神現象の根柢に横はり、しかも此意味の表象が意識現象に外ならぬからである。もつとも此表象を直に意識と同一視することは失當と難ぜらるべきであるかもしれない。ブレンタノは判斷をも一の意識作用として取扱つてゐる、或は意識の分類として判斷を一の部門として論じてゐる。併し此判斷は意識そのものでなくたゞ其の一種にすぎぬことは第一義の表象が判斷と對立して意識の一種にすぎぬことと同斷であると見るべきであらう。此意味の判斷を意識として見るのはリツケルトの立場から言へば矛盾である。判斷は認識として見るべきであつて意識として考ふべきでない、意識としての判斷は認識としての判斷とは別種の立場に立つものであつてリツケルトからは認め得ぬものである。是に於てリツケルトとブレンタノとの立場の相違を明確に見ることができる。兩者は共に表象と判斷を區別し前者は判斷をとつて專らその中に認識の問題を見、後者は表象を重んじて其中に意識の研究を企てたといふよりも寧ろその出發點に於て既に異つた立場に立つてゐた。ブレンタノが表象と判斷とを區別したのは意識の分類からであつたがリツケルトの此區別は專ら認識の論理的要求に出づるものと云はねばならぬ。リツケルトにとつて判斷が表象と異るのはそれが認識の論理的範域を構成せんがためであつた。故に彼にとつては認識としての判斷がその全てゞあつて意識としての判斷は問題になり得ない。併し此のことは意識としての判斷が認識論にとつて無意味であるといふ論斷にはならぬと思ふ。判斷も亦ブレンタノの考ふる如く意識作用の一種であるからである。

要約して論ずればリッケルトとブレンタノとの差異はカント學派と現象學派との根本的なる立場の相違に基く。兩者は夫々の立場に於て立つ限り各々の立場に於て共に正しいものであるであらう。リッケルトが判斷を重視したのは認識論的立場に立つて精神現象を見たからである。ブレンタノが之に反して表象を凡ゆる精神現象の根柢と考へたのは現象學的立場に於て意識の本質を明かにせんとしたためであつた。此の兩者が二の立場として何の交渉もないと考へらるゝ限りそこに煩はしき如何なる問題も起り得ぬであらう。併し翻つて此二の立場が學的立場として如何なるものであるか、此等はそれが究極の立場として守らるれば、果して如何なる結果に終らざるを得ないかを考ふとき、人々はそこに古くして常に新しき哲學の問題を見出すに躊躇しないであらう。兩者は異つた立場に立つてゐることは明かであるが併し之等は共に精神現象についての研究である。意識の問題も認識の問題も共に精神科學の分野に屬する。認識論は意識の問題を無視して果して完全に論じ得らるゝかどうか。價値といひ判斷といふも等しく意識の土台の上に立つと考ふることは必しも直ちに心理主義的立論に墮するものと斷し能はぬ。意識の問題は單なる心理的研究に非ずして精神科學の根本問題である。カント學派と現象學派とが夫々の立場に於て正しさを守ることは同時に此等の立場を外にしては其の正しさを失ふ所以であるといはねばならない。此二派は立場として如何なる區別に於て置かれてゐるか、之を明かにすることはやがて兩者の根本的關係を究明すべき準備となるであらう。

二

上來述ぶる如く意識は何等かの對象を指示すると、即ち之を意味することを本質とするならば、意識の研究は意味に就ての、又は意味に於いての、意味の表現を研究するとゝなる。意識については無論意識するものと意識せらるゝものと

を區別せねばならぬであらう。兩者は意識の兩面としく或人々のいふ如く別の領域に屬する。一の對象について種々なる意識作用が附屬し、又逆に一の意識作用に對して種々なる對象が對應し得る。此點からして對象と作用とを別種の存在に置いて此間に沒すべからざる溝渠が穿たれる。併しそれと同時に對象は作用と別れて成立し得ず、作用は對象を離れて存在し得ぬことも明白である。一の對象に種々なる意識作用が附屬し得るが意識の對象は意識の作用と共に一つの具體的全體をなす。對象は即ち意識の對象でなければならない。意識せられた對象は同時に判斷せられた對象ではあり能はぬ。一の對象は時に意識せられ、時に認識し得られるといふが意識せられた對象は認識せられた對象と決して同一ではない。我々は色を見ることができるが色を聞くとが出來ない。音を聞くとはできるが色を聞くことができない。見る作用には必ず色の世界が對應し、聞く作用には音の對象が呼應すべきである。見られたる色と聞かれたる音とは對象として同一ではない、之を同一と考へるのは具體的對象を見ずして、抽象的對象を考へるからである。同一の對象が時に見られ時に聞かれるのではなく、見られたる對象と聞かれたる對象とは具象的には別のものである。此例からして我々は意識せられたる對象と認識せられたる對象とも決して同一のものでないと考へねばならぬ。意識することゝ認識することとは作用として同一でないと言ひ得るならば兩者の對象もそれが意識せらるゝ限り、又はそれが認識の對象である以上決して同一とは言ひ得ぬことも明かである。然らば意識の對象とは何か、認識の對象とは何であるか。リッケルトによれば認識の對象とは價値である。之に對して意識の對象とは何であるか。現象學派の人々は對象として一定したものを考へない、對象とは此派の人々にとつて表象し得るもの、感じ得るもの、考へ得る凡てのものを指す。實在するものは勿論、架空的なるもの、想像的なるもの、更には背理的なるもの、有り得べからざるものも一樣に對象の世界に屬する。庭前の樹木も意識の對象であるが黄金の山も、圓い四角も一の對象たるを失はない。フッセルも言つた如く對象

はその性質の不定なる所以を唯一の定性とする。如何なる對象も一様に對象となり得るとが對象の唯一の定性である。この定性とは何であるか。それは此等の對象が一様に「意味」であるといふことである。意識の對象はそれがあらゆるものを含む點に於て不定であるが、あらゆるものは均しく「意味」であることに於て一定してゐる。有るもの、あり得るものは勿論、あり得ぬもの、あり能はぬものも等しく何ものかを意味する。無意味すら一の意味を意味する。何となれば無意味とはそれが無意味なることを意味する一の意味であるからである。故に意識の對象とは何であるかといふ問はそれが「意味」であることによつて一義的に答へらるゝであらう。現象學派の人は此意味を又内容とも名けた。内容とは單に對象と作用とを連絡するために此二者の間に想定された中間物ではない。それは對象の定性である、種々なる對象が意味に於て一義的に規定せらるゝとき意味は内容となるのである。我々は意識の對象を求めて徒に雜多なる不定性を得た。我々は意識の内容を求むることによつて却つて對象の定性を得ることができる。故に意識の對象として顧みてその内容を拾ひ「意味」を此世界に充當することは敢て不當ではないであらう。

是に於て認識の對象として價値を考へ意識の内容として意味を對置することができる。併し意味と價値とは如何なる關係を有するのであるか。

意味と價値とは一方に於て同一義と考へられるであらう。價値も一種の意味である。第一に兩者はその存在様式に於て同じ地盤の上に立つてゐる。多くの人々によつて論ぜらるゝやうに意味又は價値は所謂實在の世界に屬しない。其等は物的事物の如く外界に實在するものでもなく心的事物の如く内界に存在するものでもない、それは一般に實在物でなく觀念である、觀念も一種の存在と考へらるゝとき意味又は價値のもつ存在は物的又は心的事物の夫れとはまるで異つたものでなければならぬ。觀念的存在は一方からいへば妥當性である。價値が妥當することは明白であるが意味も亦妥

實する。赤き花は綻び開き凋落する。併し赤き花の意味は始まり終ることはない、意味も價値と同じく超時間的超空間的存在である。意味の意識は人によつて異り時所によつて變化すると考へられるが意味そのものは此等によつて動搖しない。此點から見ても意味と價値とは同じ世界に屬することは明白であらう。

併し他方から考へると意味は直に價値と同じものではない。認識が意識と同一視せられ得ぬ如く、價値は意味から自らを區別すべき何物かを有つ。此の或物とは何であるか。

價値は本質上判斷の對象である。價値判斷は自らを對立の形に導いてそこから一を選び他を捨つべき擇一的關係に於て立つ。此對立は言ふまでもなく論理的である。そこには思惟の三法則が支配する。論理的對立に於て對置せしめらるゝものは常に二者であつて其以上ではあり得ない。二者の外に第三の中間項を容れることは論理の第三法則によつて禁ぜられてゐるからである。加之對立する二項は互に他を排し兩立せざる運命に置かれてゐる。即ち甲が眞ならば乙は僞でなければならぬ。そして眞は取らるべく僞は捨てらるべきである。僞なる判斷も一の判斷として許さるゝといふときそれは既に價値の立場を去つて意味の立場に立つてゐるのである。意味に於ては不正なる意味も又一の意味である。否無意味すら意味の一種として受容れられねばならぬ。そこには矛盾律が行はれ得ぬのみでなく不容間律すら支配し能はぬ。正しき意味と間違つた意味の外に此等孰れにもあらざる意味が無限に存立し得るからである。從つて價値に於ては判斷は常に斷乎として諾か又は否かである。其の間に程度の差異を許さぬ。反之意味の世界に於ては無限の段階がある。意味の Hierarchie は無始にして又無終である。種概念と類概念が無限の階級を形成する如く意味の上位は意味の下位に段階的に連る。價値は常に對立に生き、判斷は例外なく肯定か否定かの孰れかに就く。意味には此對立が存在しない。尤も意味にも積極的と消極的との區別はある。併し意味の世界に於ては此等は均しく意味であつてその間に價値の

區別がない、消極的意味も意味の一種として優に存立し得るからである。積極的と消極的とも一の對立であるがそれは價値的對立と全く性質を異にする。價値的對立に於て一が成立すれば他は成立し得ない。即此對立は論理的に兩立し得ぬ關係に置かれてゐる。反之意味の對立は同時に兩立する關係を含み、消極的意味も積極的と同じく意味の一種として此世界の中に並るのである。前者に於ては論理の法則が支配し、後者はその支配から免れてゐる。即ち前者に於ては論理的關係が研究の主眼となるが、後者に於ては意味をたゞ對象として一の意味と他の意味との本質的關係が論ぜらるゝのみである。故に價値の世界を論理的立場と名けるならば後者の立場を對象論的と呼ぶことができるであらう。勿論價値も判斷に於ては是認せらるべき對象である。此點に於て價値の研究も一の對象的研究であると考へらるゝであらう。併し對象的といふのは對象論的と同一でない。對象論的とは單に意味を對象として研究するの謂でなく、意味を規範としてゞはなく一の存在（觀念的）として考へる立場をいふのである。認識の對象としてではなく意識の對象として取扱ふ立場を指すのである。意識の對象は一種の存在の世界であるが、認識の對象は如何なる意味に於ても存在ではない、それは價値又は規範である。兩者は共に意味の世界に屬するが、存在としての意味は規範としての意味と同一ではない。否寧ろこの二を區別する點にカント學派と現象學派の根本的相違があるといふべきである。

規範としての意味は論理的價値である。對象としての意味は觀念的存在にすぎない。現象學的立場に於ては意味は一種の存在である。勿論意味的存在は物的又は心的實在ではない、又はカント以前に於て考へられたる如く現象の背後に現象とは區別せられたる超越的實在でもない。現象學が古來の形而上學と同一視すべからざる事は論を待たぬであらう。にも係らず對象論的立場に於ては一の存在が考へられる。此存在は意味的存在として一の形相の世界である。形相としての意味は形式としての意味ではない。形式は論理の規範として價値判斷の規準となるが、形相としの意味はたゞ

意識の對象として一の存在界を形成するのみである。對象論的立場に於ては此の形相が其れ自らとして或は他との關係に於て如何なる表相を有するかゞ研究せらるゝのである。反之價値は凡ゆる點に於て存在から放たれてゐる。價値は妥當性を有ち、妥當性は一種の存在であるとも考へ得らるゝであらう。併し價値の妥當性はそれ自ら存在ではない。寧ろそれは一般に存在に對するもの、又は存在の目的とすべきものであつて其自ら存在を有たぬ。妥當性はあるべきものであつても決して有るもの、又はあつたものではない。價値と存在とは常に乖離的關係に置かれてゐる。價値は一の規範として實在の到達すべき理想である。理想は現實と直ちに同一でない。理想は現實にあらざるの故を以てよく理想たり得るのであらう。之に對して對象論的立場に於ては意味は同時に存在である。そこに意味と存在とが同一であるのは價値關係に於ての如く意味が妥當性として働かないからである。即ち意味と存在とが隔離せずして意味的存在として意識の對象となるからである。

三

右の如く論理的立場に於ては價値と存在とが乖離し、對象論的立場に於ては意味は直ちに一の存在と考へらるが、併しこのことは前者の立場に於て價値が如何なる存在とも無關係であるといふのではない。逆說的にいへば論理的立場に於て價値は存在と隔絶するが故に、恰もその理由からして實在と最も密接なる關係に置かれてゐる。何となれば價値は一の妥當性である。妥當とは他に對して妥當すべきである。價値は一の理想である。理想とは之に則るものに對してのみ理想たり得るからである。價値が規範として又は理想として妥當するのは實在に對してのみよくその然る所以を保するであらう。價値は其自ら存在ではないが存在との關係を離れて價値として生くる道を知らない。價値は存在に非る故

に存在を要求する。意味は其自ら存在なるが故にもはや他に存在を必要としないであらう。故に論理的立場に於て價値が存在から隔離せられたとき必然的に存在への要求を含む、この要求が即ち價値の妥當に外ならない。意味は其自ら存在であるが價値は存在への關係を待つて初めて妥當する。此の關係から切離されたとき價値はもはや規範たるを得ない。却つて一の存在として意味の世界に隨してしまふ。價値は其故に其自ら存在に非ずしてしかも存在への關係を含むことをその本性とするのである。此側面から論理的立場と對象論的立場との區別を明かにしてみよう。

論理的とは所謂形式論理の立場をさすのではなくカント學派の認識論又はその先驗的立場をいふことは斷るまでもないであらう。此立場に立つとき、價値は一種の先驗的形式となる。リツケルトの如く認識の問題をひたすら形式の問題に限ることによつて價値は認識論の全問題となつた。併しながら先驗的形式はカントにとつても內容(存在)から離れて意味をなさぬものであつた。アプリオリにはバウフの言ふ如く二の意味がある。それを經驗から離れたものとみるはアプリオリの一面の意味にすぎない。經驗に先だつことは却つて經驗の根柢にあつて之を構成する所以のものでなければならぬ。アプリオリの積極的意味は經驗の構成に於て初めてあらはれ得るといふべきである。故に價値は單なるイデーでなくしてイデアールでなければならぬ。單なる觀念的存在でなくして理想價値でなければならない。價値は實在に對して一の極限概念として働く。極限が其系列を無視して考へられぬごとく價値は實在から離れて、價値たるの意義を沒する。價値は常に內面的に系列としての實在を擔ふ。存在は價値の存在であり、價値は存在に係る限りに於て價値たるを得るのである。然るに對象論的立場に於ては意味は全く存在への關係を含まない。そこには意味はたゞ理念としてうごき理想として働かない。意味は經驗を構成するアプリオリでなくたゞ意識の指示する或物であるにすぎない。意味は認識の形式ではなく意識の對象である。對象は論理的立場に於て却つて認識の形式に外ならなかつた、併し對象論的立場

に於てはそれは文字通りに對象である、即ち意識に對立した或物である。勿論意識に於ても意識するものとせらるゝものとは離すべからざる關係に於て立つ。併し此場合對象が作用に不離の關係をもつのは價値が實在のアプリオリとなるごとゝまるで異つてゐる。アプリオリとして の價値 は實在の構成的要素であるが對象としての意味は單に意識の層面(Schicht)にすぎない。前者は認識の sine qua non として實在の構成に與るが後者は意識の對象としてたゞ或物の意味を意味するのみである。論理的立場に於ては存在の意味が問題となり、對象論的立場に於ては意味の存在が問題となる。

カントの仕事は其目圖する所專ら知識の先驗的吟味にあつた。彼にとつては形而上學的吟味にたゞ豫備的研究にすぎぬ。範疇の先驗的演繹は形而上學的演繹に比して勿論カント哲學の核心と見なければなるまい。しかも對象論的立場の試みる處は此の形而上學的吟味又は究明であつたのである。先驗的演繹の問題は價値（範疇）が如何にして經驗の先驗的形式となり得るかに答へんとする、形而上學的究明は之に反して範疇が如何にして見出さるゝか、即ちそれが如何にして意識の對象となるかを問題とする。此二の問題はカントの哲學に於ても存在し、又互に無關係なものではなかつたが、併し問題として兩者は全くその性質を異にするとも爭はれぬ事實であらう。先驗的問題は常に經驗の構成に腐心するが、形而上學的究明はたゞ意味の當體に注目する。カントの哲學は一般に學的知識が如何にして可能であるかゞ問題であつた。對象論の立場に於ても意味は實在に比して可能の世界に屬する。併し兩者の立場に於て可能の意義が全然異るとに注目しなければならない。前者に於ては、可能の可能性が問題となるが後者に於てはたゞ可能の意味が問題となるのみである。可能性が知識として如何に可能であるかを問ふことは單に可能の意味を尋ねることゝ同一でない。カントによつて數學的、自然科學的乃至形而上學知識の可能性が認識論の主題とせられたのも常に實在の論理的根據として知識の構成に與る先驗的形式の可能性が問題とせられたのであつた。價値が必然的に實在に連ることも此論理的根據によつてゞ

ある。故に價値を存在から離脱せしめて完了的存在と考へることは價値自らの意義を沒するものといはざるを得ない。實在の構成機能を離れた價値はもはや價値たるの資格を失つたものである。それは、價値でなくして意味である。かゝる價値も尙一種の妥當性をもつことは承認せらるゝが妥當とは果して何に對して妥當なのであるか。實在の中に又は實在に對して妥當しない價値は實をいへば妥當性をもたぬと同樣である。價値を意味から區別する時、價値の妥當性ば意味のそれとも區別せらるべきであらう。意味も一種の妥當性をもつ、しかし意味の妥當性は實在の構成に與らず、又與るを得ない。意味は又一の觀念性（Idealität）を有つ。しかし意味の觀念性は規範性のそれではない。それは實在によつて實現せらるべき規範に非ずして單なる理念にすぎぬ。イデーがイデアルになるためには意味から價値に移らねばならぬ。論理の立場に於て目的概念が嚮導原理となるのも此理由によるのである。目的概念が範疇の範疇であると考へらるゝのも此理由によるのであらう。

此點から見てリッケルトが價値を純粹に規定せんが爲に當爲から超越的價値に移つたのは却つて價値の本領を沒したものと難ぜらるべきである。リッケルトはかくしてカントの立場から却つてボルツアノの對象論的論理學に近づいたしかしカントの認識論とボルツアノの論理學との間には無雜作に飛躍しがたき溝渠が穿たれてゐる。此區別を明識することは即ち論理的と對象論的との根本的異別に思ひ及ぶ所以であらう。ボルツアノにも「眞理自體」の概念があるが、しかしそれは命題自體の一種にすぎず、命題自體は表象自體の複合にすぎない。カントによつて先驗的綜合判斷が如何にして可能なるかが問題とされたとき、ボルツアノに於てはたゞ命題と表象とが如何に關係すべきかゞ問題となつた。命題は表象からなりたつてゐる。併し表象が命題の成素をなすのは先驗的形式が經驗の成立條件となることゝは意義を異にする。命題と表象との關係は Fundierung の關係であつて Begründung の關係ではない。表象は命題を形成する土

台となるが決してその論理的根據とはならぬ、カントも判斷の成立を問題としたがそれは要するに綜合的（Synthetisch）の概念に盡きてゐる。ボルツァノの命題は綜合によつて成立せずしてたゞ複合（Syntaktisch）によつて組立てられるのである。前者は判斷の論理的成立を問題としたが後者に於てはたゞその意味的複合が問題となつた。分析判斷と綜合判斷との區別はカントにとつて先驗的意義をもち或はもつべきものであつたが、ボルツァノにとつて其はたゞ命題と表象との相互關係を表すものにすぎなかつた。命題と表象との關係は二樣に考へることができる。一は表象が命題に含れると考へ、二は命題が表象の中に含れると考へる。表象は命題の要素となるのみでなく逆に命題も表象の成素となり得るからである。前者の場合命題は綜合的といはれ、後者の場合分析的關係が成立すると考へられる。何となれば前者に於ては與へられた表象を組成して命題をなすが、後者に於ては表象の中に含まれたる命題をたゞ明晰に展開するにすぎぬからである。この關係は決して認識論的意義に解するを許さぬ。それはたゞ意味の世界に於て全體と部分との Hierarchie を記載したものにすぎない。カントの分析と綜合との區別は決してかゝるものでなかつたことは詳論するまでもないであらう。パラギーの言ふ如くボルツァノの論理學は意味のアトミズムである。複雜なる意味が如何にして單純なる意味から成立するか、下位の意味が如何にして上位の意味を組成するかを研究することが彼にとつて重なる仕事であつた。即ち意味を純客觀的に一の觀念的存在と見てそれ等相互の關係を闡明することが彼の研究要目であつたのである。意味は價値の住家である、價値判斷も意味の世界を外にして安住する土地を知らぬ。併し意味を對象として純客觀的に取扱ふことゝ意味を判斷の則るべき規範としてその構成的機能を研究することゝは學問の態度として全然別の立場でなければならぬ。判斷の特質として普通に普遍性と必然性とがあげられる。そしてこの二は共に判斷の妥當性の概念の下に包攝せらるゝを常とするが判斷の妥當にはボサンケットなども主張する如く更にその構成的要素が考へられねばならぬ。判

斷の構成的機能とはカントの所謂先驗的綜合作用である。判斷が雜多の統一として定義せらるゝとき統一が如何にして雜多の中に構成せられ得るか、範疇がいかにして經驗の世界に妥當し得るか。價値が何によつて判斷の規範となり得るか。此等の問題を解くこと——此等の問題を問題とすることがカントの批評主義哲學の核心であつた。故にそこには意味は單に意味としてゞはなく常に一の規範として、又は何等かのとるべき態度として取扱はれねばならぬ。價値の存在の仕方は常に妥當の夫であり、意味も又一の觀念的存在をもつ、しかし嚴密にいへば意味の存在方法は觀念的であつても妥當的ではない。プラトンのイデアをロッツエの妥當に轉釋することは勿論自由であるが我々は寧ろ其間に微にして且つ嚴なる異別を見出さんと欲するものである。妥當の方式は常に認識のアプリオリとして働く。意味の存在は遂に形相の對象論關係を脫するに由ない。價値も意味も共に觀念的或ものとして普遍性をもつことに於て等しい。併し價値の普遍性は妥當のそれであり、意味の普通性は單なる一般性にすぎない。我々は玆にフッセルの用語をかりて——たゞ用語のみをかりて——形式化 Formalisierung と一般化（Generalisierung）とを區別しなければならぬであらう。フッセルの立場に於ても無論形相的還元が現象學の凡てゞはない。それはむしろ一の豫備的階段であつて更には現象學的還元に歸入すべきものであるのであらう。併し現象學的還元に於てもその論ぜらるゝ處は意識の事實ではなくして其の本質である。形相は意識に還元せらるゝことによつて我々の體驗に密接なるものとなつたが、純粹意識の分析は依然として意識の形相の記述たるを脫しない。此意味に於て形相的立場は現象學的還元の後にも何殘留するといはねばなるまい。フッセルの現象學は意味の意識の學であると共に意識の意味の學である。意味の意識として其は現象學的還元の上にたち、意識の意味として其れは形相的立場の上に立つ。孰れにしても現象學は意味と意識との二概念を樞軸として旋回してゐるといふべきであらう。現象學は一言にしていへば意味の學であり同時に意識の學である。形相はその本質に

於て形式とは全く別のものである。形相としての意味は形式としての價値と劃然たる區別に於て置かれてゐる。

意味の學としての現象學は此形相を分析し記述することを以て任務とするであらう。併し形相とは意味の世界に外ならぬと知らるゝとき現象學は近時或一派の人々のいふ如く寧ろ解釋學としてその存在權を新に主張すべきであらう。何となれば意味は理解せられ、解釋せらるゝ所に意味が意味としての存在を保ち得るからである。

四

右に述べた點は主として先驗論理的立場と對象論的立場との相違であつた。此の二の立場が學的方法として混同すべからざる區別に置かれてゐることは略明白となつたと思はれる。カントの認識論は價値の研究であるが現象學は一種の存在の學である。價値はたゞ妥當するのみであるが意味は subsist する。當爲が超越的價値として夫自らに安住する當體と考へらるゝとき、それもはや規範に非ずして一種の存在とならざるを得ぬ。此存在は無論形而上學的實在でもなく、心理的存在でもない。併しそれが其自らとして自足完了する限りに於て一種の存在――意味的又は觀念的存在でなければならぬことも明白であらう。此意味に於て現象學は一の存在學又は本體學(Ontologie)と名けらるべきである。本體學は決して形而上學ではない。カント以前の形而上學者は現象と本體、假象と眞實在とを區別してこの眞實在の何たるかを問ふた。現象學は現象其物の中に、或は體驗其物に於て存在の何たるかを探らんとする。否體驗其物、意識そのものゝ純相、或は本質を研究せんとするのが、現象學的方法の課題であるといへるであらう。現象學は此意味に於て一の存在學であり、形相的本體學であるが、之に反して認識論は價値の規範學、價値の先驗論理學である。此點に於て兩者が截然として異れる立場に立つた二の學的方法であることは明白であるであらう。

併しながら——かくして我々は兩者の結合問題に入らんとする——價値の妥當性も形相の本體性も共に意味の世界に隸屬する。我々は價値の住家は意味の世界であるといつた。論理的と對象論的とは世界として二の領域を區分するといふよりも、立場として二の異れる觀點を形成すると考ふべきである。價値も一種の意味である。意味もそれが何物かを意味する限り其の意味する所の承認せられんとする要求を有つ。意味は勿論夫自らに安住する存在界ではあらう。併し意味の存在は意味の妥當又は意味の解釋を待たずして存立し得るかどうか。無意味も又一種の意味であるといはるゝとき、その意味の無意味なることが是認せられねばならない。然らざれば無意味が一の意味であることすら分らないであらう。意味が形相として、意識の對象となることは如何にして可能であるか。此の可能性が問題とせらるゝとき先驗論理的立場は對象論にとつて無關係ならざるものとなるであらう。意味を一の存在界として考ふるとき、かく考へ、斯く云ひ得べき根據は何處にあるか。此を問題とする以上カントの認識論は學術方法として不朽の生命を持し來るであらう。

勿論意味の意識についてその論據を問ふことは問題の錯誤であり、對象論的と論理的との立場の混同であると難ぜらるゝかしれない。現象學に於て意味と意識との關係は先驗論理的方法とは異つた見方に於て問はれそして答へられねばならぬであらう。意味が意識せらるゝことは雜多の中に統一が構成せらるゝことでもなく、事物が意識の中に入込むことでもない。意味と意識とは意識作用そのもの中に融合し、純粹意識は意味の意識であり、同時に意識の意味である。意味そのもの﹅働きが意識と考へられ、意識そのもの﹅保持者として意味の世界が考へられる。保持者としても意味は意識を外にして存在し得ない。兩者は共に Cogito の中にあつて純粹意識の二の側面を代表するに過ぎぬ。從て意味が意識せらるゝといつても例へばカントの哲學に於ての如く經驗の可能の條件を經驗の對象について考へる必要はないであ

らう。現象學者が對象と作用との關係を研究するのは純粹意識について ideativ にその形相を直觀することによるのである。其故に意味と意識との關係について論理的立場からそこに問題を見、解決を求むることは立場の混同として斥けらるべきであらう。併しながら對象論的立場が一の立場としてその存在權を主張するとき、かゝる立場がいかにして可能なるかはこの立場をのみ守る人々にとつて答へ得ぬ問題である。此立場が例へば論理的立場から如何にして自らを區別し得るか、此立場が一の立場として成立する根據を問ふことはたゞ批評的精神のみのよくする所であらう。論理的立場と對象論的立場とを比較し商量するものは此等の立場の外に出でた高次の立場でなければならぬ。我々は此の如き高次の立場として批評的精神を想ひ起すことが出來る。そして批評的精神とは廣義の論理的立場に外ならぬとすれば對象論的立場も此意味に於て論理的立場の基礎の上に立たねばならぬと言ひ得るであらう。

　併しながら他方から見れば認識が意識の上に立つ如く論理的立場も對象論を土台とせねばならぬ。我々はさきに價値は意味の世界を宿とすると言つた。リッケルトの主張によれば對象を認識するのは實在を模寫することでなく、價値を是認することである。認識の對象は價値であつて實在ではない。或命題の眞なるはそれが實在を模寫すをことによつてゞはなく、かく判斷せざるを得ぬ當爲を承認することによつてのみ可能であるといふ。併しリッケルトのいふ當爲とは何であるか。かくなければならぬことの意識は如何にして可能であるか。かくあることの論據を求めてリッケルトは當爲の意識に達したが併し我々は更に當爲の意識の論據を問ふてその可能性をたづねなければならない。リッケルトは此問ひに對して恐らく、たゞかくなければならぬから斯くなければならぬのであるとしか答へ得ぬであらう。論理主義的立場を守るときこの答は單なる言語の繰返にすぎぬか、或は更にその論據を求めて徒らなる無限の逆行を誘致するより外はないであらう。論理的必然性の根據は果して何處にあるか、此問は問として意味を有たぬといへばそれまでゞあ

るが論理主義的立場に於てはたゞ判斷の論據が問題となる。認識論に於て形式が唯一の問題と考へらるゝ限り論理の論理を求むることは無意味ならざるのみならず、そこに許されたる唯一の問題でなければなるまい。併し其を玆に追及することによつてたゞ徒らなる逆行の外何物をも得能はぬことも明白であらう。論理の法則も却て直觀の根底に立つ。かくなければからぬことの論據は逆にかくあることの中に伏在する。勿論玆にかくあることとは經驗的實在をいふのではなく、意味的存在をいふのである。價値の妥當性が意味の存在性に基くのは意味が意味として其自らに「眞理の王國」を形成するが故である。論理的必然性も之を意識に於て見ればかく考へざるを得ない當爲の意識である。此意識の論據は價値そのものに於てゞはなく意識の本質に於て横はる。同一律も矛盾律もその論理的必然性は却て意味の意識、眞理自體の直觀に基く。リッケルトが當爲から價値概念に移らざるを得なかつたのも此理由によるのであらう。勿論論理的必然性は對象論的必然性と同一視することができぬ。色と延長とは相關的關係をもち、延長のない色を考へ得ぬごとく色のない延長を見得ないといふとき、兩者は必然性關係に立つと考へることができる。併し此必然性は無論論理的必然性と同一でない。現象學に於て所謂 Identitätoperation により事實をすて偶然を斥けて形相の世界に迫るとき、我々はそこに一種の必然的普遍的世界に出會ふ。そして此の必然性が論理的必然でなくして Ideation の上に立つた直觀的必然であることも明白であるが併し我々の問はんとする所は論理的必然もかくの如き直觀的必然を無視して完全に論じ得らるゝか否かといふことである。カントの先驗的究明には常に形而上學的究明が先立つてゐた。形而上學的究明とは演繹の前に先づ形式の發見を以て任務とする。即ち形式が經驗の先驗的條件として働く前に形式が形式として如何に見出さるゝかを研究せんとする。いはゞ形式の論理的効果をではなく、其の對象論的存在を吟味せんとする。形而上學的究明に於ては形式は規範としてゞはなく、意味的形相として存在してゐた。固よりカントにとつては形而上學的究明は

先驗的究明の準備として單なる provisorisch な意義をしか有つてゐないであらう。併したとへそれが豫備的段階であるにせよ、先驗的究明の前に形而上學的究明が常に行はれてゐた、或は行はれざるを得なかつたことは我々にとつて意義深い。カントの哲學は嚴密にいへば單なる論理的立場のみでない。否カントに於て我々は論理的立場と對象論的立場との意義深き結合を到處に見出すと言ふべきであらう。

論理的と對象論的とは立場として異れる觀點の上に立つ。我々は此兩者を對象の區別に置かずして飽くまでも立場の相違に置かんと欲するものである。併し立場の差異はやがて對象の區別をも誘致するであらう。等しく意味の世界に係りながら論理的立場に於て考へられた意味は對象論的立場に於て眺められた意味の世界とは異らざるを得ぬであらう。併しながら此二の世界が立場として又は對象として互に異りながら均しく意味の世界に根をおろし、意味の土壤に於て培はれてゐることも爭ひ難い。然らば此意味の世界に於て兩者は如何に關係し如何なる區別を有するのであるか。私は此問題を解決することによつてゞはなく、問題を問題とすることによつて此の貧しき敍述を打切らうと思ふ。

資本主義崩壞の理論的根據

猪俣津南雄

一

こゝ數年のあひだに日本人が經驗したところの全く新奇な、ひどく『世間を騷がした』いくつかの大事件――米騷動、大罷工、ロシア革命、未曾有の產業恐慌、軍縮問題、農村階級鬪爭、共產黨事件、震災騷動、普選、失業、底を知らない不景氣、青島上海の總ストライキに發した凄じい民族運動、軍教運動と反軍教運動、無產政黨の樹立とその解散、等、等、等か、打重つて來るうちに何時とはなく人々の心に刻み込まれてしまつたのは、資本主義の行詰りといふ考である。行詰つたのだと信ずると否とは別として、その信念に立つて動くと否とは別として――それは別としても、「行詰り」といふ考その物に力強く働きかけられて來たことだけは拒めない。肯定するか否定するか、それとも出來るだけ問題を回避するか、何れかの態度に出づべく強ひられることは事實である。『思想界の混亂』とか、『人心歸趨を知らず』とかいふ言葉の表はすものの底を叩くと、それになる。ひろく無產階級の運動は、多かれ少かれ其の肯定に基礎づけられてゐるだけに、それの否定を目指す「思想善導」の運動と強權を振かざしての威嚇とは、有產者階級側の退つ引ならぬ必要となつて來た。そして、ラヂオや、「體育」や、シネマやか、意識的無意識的な多數の回避派の心の糧として役立つてゐることは多くの思想家達がしばしば指摘した所でもある。この三樣の事態は、互ひに作用し反作用しつつ、いよいよ展開して行くであらう。その展開の各段階の意義を見、その理論を有つの必要は、それだけで、一つの充分なる研究を要求する。か、私が此の小論文に於ける考察の發足點として特に注意を喚び起したいのは、『資本主義の行詰り』といふ思想それ自體か、無產階級の陣營の內部に於て乃至はその外廓に於て、どのや

うに受取られ、如何に作用し、發展するかの點である。無產階級運動を日に日に大衆化して行くものは、大衆のその日その日の生活上の促迫であるか、全運動の指導的精神を決定する大なる一要素は、資本主義の命數と健康とに關する見解である。資本主義は必然的に行詰るかどうか？　その必然的行詰りの時代は未だ來ないのか、既に來てゐるのか？　來て居るとすれば、何を以て行詰りであるとするのか？　さうしてそれは如何に打開されるといふのか？　これらの一々に對する解答の如何によつて、運動の形態と方向と實質とに多大の變化を來たすべきことは多く語らずとも明かであらう。近來の謂はゆる『右傾』か『左傾』かの問題が何よりも雄辯にそれを物語る。そして、此の問題にからまる右翼と左翼との激しい爭ひは、個人的感情の要素は之れを除外するとして、究極何の爭ひを意味するであらうか？　すくなくとも私にはそれは、資本主義的發達が到達せる現階段の性質に關する見解の爭ひに歸着すると見られる。が、私はそれが單なる爭ひで終るとは信じられない。否な、私は既に、此の思想的鬪爭のうちから正しき『行詰りの理論』が展開し出でつつのを見るものである。(例へば、しばしば雜誌『マルクス主義』に現はれる福本和夫氏の諸論文の如き。)

二

が、一方に於て、一つの組織としての資本主義は理論上永久に行詰らぬものだと論ずる學者のある事も亦た忘れてはならぬ。日本に於て此の種の理論が最も大仕掛けに最も能辯に紹介されたのは福田博士に依つてゞある。博士の論文は、さきに『改造』にあらはれ、今は著書『社會政策と階級鬪爭』に收められてゐる所の『資本增殖の理法と資本主義の崩壞』と題するものであつて、當時すくなからざる反響を喚起した。小泉教授はそれを評して近來の我が經濟界で最も注意すべき產物であるとされたが(河上博士の誌す所による)、河上博士はそれを批評する爲に長大な論文を草して、福田博士と正反對の立場に立つ理論を發表された。『福田博士の新說』は露西亞の經濟學者ツガン・バラノウスキーが二十年前に唱へ出した舊說と全く符合するものであるとは、河上博士の指摘される所であるが、いづれにせよ、福田博士乃至はツガンとによれば、『唯物史觀の立場から云へば、資本主義崩壞の必然性、社會主義經濟成立の不可避性を立證する爲には、資本の擴張再生產(補註、資本の蓄積または累積と同義)に立脚する現在の資本主義經濟組織が、或る發展階段に達する時、經濟上その存續が最早不可能となることを

十分に説明せねばならぬ。』（「社會政策と階級鬪爭」四五九頁）しかるにマルクスの資本蓄積の理論に立脚してツガン・バラノウスキが作つた數字表は、『資本制生產に於ける資本の形成と生產の擴張とは、直接消費の大小とは獨立に行はれ得』ることを示すものであり、又その事こそは資本制生產の本質なのであつて、マルクスの蓄積理論は、『バラノフスキーの下した推論に於て論理上其の當然の歸結を見出すものである。』（五〇一頁）かくて資本家階級は、各產業部門間の生產の權衡さへ保たれる限り、無產大衆の消費力が賃銀制度の爲めに如何に限定され低下されてゐやうとも、毫も其れに依て販路の拘束を受けることなく自由に無限に其の生產を擴張し其の資本を增殖して行けるのである。即ち、理論上、資本主義生產は永久に行詰らぬとになる。マルクスは、他方に於て資本制生產の下に於ける社會の生產力と社會の消費との間の矛盾を認め、特に資本論第三卷に於て資本主義內在矛盾論を立て、此の矛盾は資本主義の發達と共にます〳〵展開して遂に組織を崩壞に導くと說いてゐる。が、これは彼の蓄積の理論と兩立せざるのみならず、後者をばその正しき結論に導く前に『俄かに論步を間道に踏入れ』たものに過ぎないといふのである。（同上、五〇〇―五一四）

三

河上博士は之れに對して『私から見ると、それは實に隙だらけの議論で何處からでも切り込める』のであるし、『ツガンの數字表による論證なるものは、一つの兒戲に外ならない』とされる。それは、福田博士の言ふが如く『マルクスの再生產理論に立脚し』た推算ではなくて、實は『マルクスの再生產理論』の誤解『に立脚し』た推算に過ぎない。』（「社會組織と社會革命」一〇三―四頁）何故といふに、マルクスによれば資本蓄積の前提たる剩餘價値の實現は、各種生產業間の權衡によつても制限されるのみならず、同時に又た社會の消費力によつても制限されるのであるが、ツガンは其の數字表の組立に於て此の第二の條件を無視してゐるからである。之を無視して、そして唯だ計算上都合よいやうに數字の辻褄を合はせたものに過ぎぬ。之に反して『マルクスの擴張再生產の表式そのものは、實は生產物が社會の消費力の不足のため、必ず「一部分しか賣られぬ」狀態にあることを明瞭に指示するものである。』（同上一七六頁）擴張複生產即ち資本の蓄積が行はれる爲めには、他の條件は暫くおくも、資本家階級はすくなくともその剩餘價値の一部分を自身の消費の爲めに費すことを止め、該部分を代表する生產物を賣

つて貨幣に換へ、之れを賃銀に充てゝヨリ多くの勞働者を雇入れねばならぬ。で、擴張と共に新らたに雇傭さるべき勞働者に依つて消費される生活資料分の生產に從事する資本家等は、脫け出すことの出來ぬディレンマに陷らざるを得ない。彼等は、賃銀に充つべき貨幣を得んが爲めに自己の剩餘生產物を賣らうとする。が、その買手たる勞働者は未だ賃銀を得てをらない。マルクスの表式に剩餘價値實現の二條件を適用して解釋する時には、該表式が斯くの如く解決し難い『問題を含んでゐるといふ點に、(私は正に、)資本家的擴張複生產――資本の增殖――それ自體に內在するところの本來的、根本的の矛盾を見出すのである。』しからば 此の如き根本的矛盾があるに拘らず、事實に於て資本の增殖が次第に行はれて今日に及んだのは何故であるか?』(同上一八四頁)マルクスは、複生產の研究、從て複生產の表式に於て、研究の必要上、最も抽象的な、純粹な資本主義の社會(資本家階級と賃勞働者階級のみから成る社會)を假定してゐるが、かかる社會は未だ曾て存在したことがない。實際の社會には、資本家階級(又はその附屬物)にも屬せず、勞働者階級(又はその附屬物)にも屬せざるところの「單なる商品生產者」(補註、例へば小農や獨立手工業者)がゐて、その商品を賣ると同時に……純粹な資本主義社會では(擴張複生產に際して)到底賣れずして殘るべき筈のものを買ひ取るのである。』(同上一八八頁)かくして、資本家階級は先づ自己の剩餘生產物を貨幣化し、之を賃銀として支拂ふことが出來る。そして、資本主義的組織の外にゐる單なる商品生產者等は、組織內にある賃勞働者の需要に應ずべき實質を具へた消費資料を生產し、賃勞働者等がそれを買ひ取るといふ關係になつてゐる。かやうに『その組織の外圍と一定分量の消費資料の交換をなすといふこと、この事は、資本主義的組織の下に於て擴張複生產が圓滑に行はれて行くための必須條件である。』(同上一九五頁)言ひ換へれば、此の資本主義發展の必須の條件たる取引を可能ならしめる所の『外圍』乃至は『領外の顧客』は、一國內に於ける單なる商品生產者のみならず又た海外に於ける同種の生產者をも含む。即ち未だ資本主義化せざる未開國半開國をも含む。ところで資本主義は、『その領外と交通を始めると、間もなく其の領域を資本主義化して、之をその領內に引き入れる。資本主義はその觸るるところのものを皆なおのれに同化し、「自己の影象にかたどつて」全世界を資本主義化する。かくて資本主義の領內はその發展に應じて日日擴張せられ、領外の顧客を要することは益々甚しくなるけれども、之と同時に、その要求の增進と正に逆比例して、領外の地域は日々にせばまる。地球の面積に

限りがあり、世界の住民に限りがあるからである。斯様にして資本主義は、益々發展するにつれて、益々その内在的矛盾を彌縫するの手段を失ふ。限りなき資本の増殖、限りなき生産の擴張、これを實現し得て、全世界を資本主義の領域内に包含しつくす時、その時資本主義の發展は極度に達すると同時に、その領外に屬する外被を全く失ふことによつて、資本の複生産は絕對に行き詰つて仕まふ。』同上二二〇頁）『之を要するに、マルクスの資本複生産の表式は、資本主義的生産が到底行き詰らざるを得ざる必然性を有する所以を、數學的の確さを以て吾々に指示するものである』（二二二頁）

此の河上博士の批評に對して福田博士が如何に答へられたか少くとも私の知る限りでは未だそれらしいものを見ない。ただ僅かに博士が、『改造』所載の論文『リープクネヒト獄中遺稿、マルクス價値論批評』の初めに於て、リープクネヒトの無二の同志ローザ・ルクセンブルクのことに言及し、彼女の『學問上の遺業としては「資本の蓄積」一巻がある。此書は一九一三年に刊行され、一九二一年には同じくルクセンブルグが獄中にあつて起草した、同書の批評に對する反駁書……を遺稿から編纂して附錄として添えた重刷本が出てゐる。此の附錄は、河上博士が私の『資本増殖の理法と資本主義の崩壞』とを批評せられるに方りて右書の第二巻なりと稱して引いて居られるもの其れである。同博士がトウガン・バラノフスキー説を攻擊せられた論旨は殆ど皆な此の附錄と本文とから取られたもので、其惡口雜言に至るまでルクセンブルグから借用せられた……云々』といふ言葉が見當るだけである。かく福田博士は比較的沈默を守られたやうであるが、吾々は河上博士の所論に對する部分的批評をば、福本和夫氏（『マルクス主義』第一巻第八號『經濟批判のうちに於けるマルクス資本論の範圍を論ず』）と、高田保馬博士（『改造』一三年一二月號『剩餘價格第三論』の後半）とから聞くことが出來た。が、河上博士は、『社會問題研究』（第五十八冊）に於て、『擴張再生産の必然的行詰り……に就ての私の見解の大體は、嘗つて福田博士の論爭を批評するため、既に本誌に掲載したところで』あり、『私には今、あれ以上の見解を陳述する用意が出來てゐない。』と述べ、且つ高田博士及び福本氏の批評に言及して『私は是等の批評をよく吟味して、自分の考の未熟な點は之を訂正發展せしめて行き度いと思ふ』と言はれたに止まるやうである。かくして、『資本主義の行詰り』の理論に關する論爭は未解決のまゝに殘されてある。

四

私が此の論文に於ける問題の範圍たらしめやうとする所は、大體、右に引用し紹介した福田、河上兩博士の論爭に於て問題とされてゐる諸點に外ならない。福田博士と河上博士との論ずる所は、いづれも資本主義の行詰りに關するもので、理論上その必然性を立證し得るか否かの點にある。私も問題の重點の一つをそれに置くであらう。次ぎに、其の行詰りとは、畢竟、資本家階級の資本累積――擴張複生産――の過程に於いて生ずる或る事態であると見る點に於て兩氏は一致する。マルクスは、『資本家的生産の直接に關する所は、使用價値ではなくて、交換價値わけても剩餘價値の增殖である』といひ(『剩余價値說史』第二卷第二分冊、二六六頁、)また、『此の剩余價値の生産こそは、資本家的生産の直接の目的であり、その强制的な動機である。そして剩余價値の一部分を資本に再轉化すること、即ち蓄積は、此の剩余價値の生産の必要缺く可からざる部分をなすものである。』(『資本論』第三卷第十五章、二二五頁――ハンブルク一九一九年版――意譯)資本家による生産の擴張、從つて謂はゆる資本主義的發展は、資本蓄積に俟つ外はないのであるから、資本主義の行詰りなるものが資本の蓄積に關しての何等かの否定的狀態を意味すると見る限りに於ては私も兩氏に異存はない。但し、私がそれを如何なる、特定の、否定的狀態と見るかは自づから別問題である。福田博士と河上博士とが一致するいま一つの點は、マルクスの崩壞必然論に關する或る周知の一點――即ちその理論が資本制生産に内在する矛盾に出發し、資本蓄積過程の進行につれて生ずる矛盾の展開に崩壞の原因を見出してゐる事を認むる所にある。河上博士は、行詰りの必然を主張され、その主張はマルクスの蓄積理論――乃至はその正しき解釋に基づくものとされる。此の河上博士の解釋と論證とを吟味し、そのいづれもが遺憾ながら誤謬に過ぎないことを示し、そして博士の崩壞論はマルクスの崩壞論でないことを明かにするのが、私の仕事の一つに屬する。福田博士は河上博士と反對に崩壞の必然性を、否定される。博士の議論を一口に言へば斯うである――。マルクスの、内在矛盾の展開によつて崩壞するといふ理論は、成立たない。何故なら、ツガン、バラノフスキーが矛盾のないことを證明した。ツガンの證明は間違つておらぬばかりか、また實にマルクスの蓄積理論そのものに立脚する推論である。ツガンの推論の方が正しいのだから、之れと相容れない内在矛盾崩壞論は誤りである。で、福田博士はつまりツガンによつてマルクスを修正し、此の修正に依てマルクスの崩壞論を否定することになる。河上博士は、それだから、『ツガンの推論』に對して攻擊の砲火を集注された。が、私から見ると、

河上博士の射撃は稍々あせり氣味の體で・手許が狂ひ、敵にはカスリ傷を負はせた位であるのに自分は何時しか敵の術中に陷つてゐるのを氣づかず居られたとしか思はれない。ツガンを蹴つに急なるの余り、博士自身も亦た不知不識マルクスを修正するの結果に陷つたと見るより外はない。河上博士は、ツガンの修正を評して、『資本論第二卷と第三卷の間に當然架けられねばならぬ橋が、(原著者マルクスが病魔に襲はれた爲めに)完成されずに終つてゐる』のに乘じて企てだれた蓄積理論の逆用であるとされる。そして博士みづから其の橋を架けることに依つて新しき行詰りの理論を編みあげてゐるのであるが、私は此の論文に於て博士の架けられたそれが極めて危險な橋であることを明かにするであらう。否な、博士が架けたと信ぜられる橋は實は一片の錯覺であつて、人の渡れる本物の橋は既にマルクス其人によつて架けられてあつたことを示すであらう。私は、かく河上博士のツガン評、福田評に抑つて危險を感ずるのであるから、從て「ツガンの推論」に向つて私自身の批評を投げる責任が生ずる。それも亦た此の論文に於ける私の仕事の一つになるであらう。そして最後には、私の見て以てマルクスの崩壊理論となす所のものを述べて此の稿を結び度いと思ふ。

五

順序として私は先づ、河上博士が採られたローザ・ルクセンブルクの理論の檢討から始めねばならぬ。河上博士がツガンの數字表を以てマルクスの誤解に立脚するものとされたのも、またマルクス自身の擴張複生産の表式のうちに資本制生産の本來的、根本的矛盾を見出されたのも、擴張複生産に於ては剩余價値の實現が不可能であるとの議論に基づくものである。しかるに此の議論はローザ・ルクセンブルクの著『資本の蓄積、帝國主義の經濟的説明への一寄與』の中に一層十分に説かれてゐる。一八一二年十二月の日附ある其の序文に於て、著者が此の書物を書くに至つた意味深き經路が次のやうに述べてある――。彼女は前からマルクス經濟學を通俗化した入門書を書くべく心掛けてゐたが、黨の學校での仕事や、運動の爲めやで果さず、一九一二年の一月に至つて再び入門書の著作に取かかつたところが、思ひ設けぬ困難に逢着した。といふのは、『具體的關係に於ての資本制生産の總行程並びに其の客觀的歴史的限界を明瞭に叙説することが私には出來かねたのである。そこで一層詳しい考察の結果、私は斯ういふ見解に達した。即ち、茲には、單に叙説の問題だけでなく、マルクスの『資本論』第二卷の内

容と理論的に關聯し、且つ同時に今日の帝國主義的政策及び其經濟的根抵と結びついた一つの問題が横はると言ふことこれである。此の問題を科學的に精確に把握しやうといふ私の企てが若し成功してゐるならば、本著は、純理的興味の外に尙ほ帝國主義に對する吾等が實際の鬪爭にとつて若干の意義を有つものであらうと思はれる。』かくて、その頃既にインタナショナリスムを捨てゝ無產階級的性質を喪失せんとしてゐたドイツの社會民主黨運動をば、リーピクネヒト等と共にマルキシズムの本道に引戻すでべく鬪つてゐたローザ・ルクセンブルクは、此の著作に於て帝國主義の歷史的必然性と、資本主義的崩壞のそれとを理論づけやうとしたのあつた。『帝國主義は資本蓄積行程の政治的表現』であると共に又た『資本の生存を長らへんが爲めの歷史的方法』である。（『資本の蓄積』ローザ・ルクセンブルク全集第六卷、三六一頁）資本主義がその最後の發展階段に入つたといふ客觀的事實は、之に應ずべきマルクス主義理論の發展を要求した。ローザの勞作は、正に此の要求を充たさんとする企てゞある點に於て、そして其企てに於て資本の複生產過程と其の理論との重要性を明かにし、且つ資本の『現實過程』――わけても資本主義と非資本主義的外圍との關係に於けるそれに注意をむけた點に於て、疑ひもなくマルキシズムに對する一大貢獻である。『資本の蓄積』は、その論證に於て決して間然する所なきものでは無い。それにも拘らず、特に其の歷史的部分の重要と、全篇に亙る說服力ある議論の連鎖とは、問題の發見に於けるかの天才的洞察力の現はれと相俟つて、『資本の蓄積』を最も勝れた理論的著作の一つにする。河上博士が此の著物にたよられたとしても敢て不思議とするに足らないのである。

さて、私は私の課題へ急がねばならぬ。ところで、資本家蓄積に於ける剩餘價値實現の不可能に關するローザ・ルクセンブルクの論證は、マルクスの擴張複生產の理論、特にその方式の吟味とともに進展する。そして私が河上博士及びローザの所論に向つて加へやうとする批評の主點は、マルクスの蓄積理論の構成と性質、從てその一成分としての表式の特定の職能に關する解釋の問題に歸着するのである。であるから、批判への前提として一應マルクスの理論そのものの輪廓を見究めて置く必要がある。

六

周知のことであるが、マルクスほど深刻に資本主義社會の矛盾を見拔いたものはない。が、このことが餘りに强く印象されるが爲めに却つて屢々忘れられ勝ちな一事は、最も鋭どい矛盾

觀察者であつたマルクスこそは又た同時に資本主義下の社會的生產の有機體的性質を最も明確に掴んでゐた者だといふ點である。資本主義社會は、階級對立の社會であり、その生產は無政府的であつて、組織そのものに內在する多くの、飽くまでも現實なる、矛盾を有する。が、それにも拘らず其れは一體をなし、それ自身に於ける新陳代謝と生長とを營むものである。生長し得るが故にこそ其の最后の段階に於て自身に取つて代るべき次の社會を自身の胎內にはらみ得もする。とはいへ、謂ふ所の生長は機械的、自動的なそれではない。內在的な矛盾を有つのだからである。彼れにあつての生長は、常に、矛盾を克服する過程を含む生長であり、その克服によつてのみ、克服の過程に即してのみ可能なる生長である。矛盾の克服とは、平衡の獲得である。平衡は獲得される。が、それは絕對的、永久的な平衡ではなくて、相對的、一時的なそれである。相對的、一時的なそれではあるが、平衡であるが故に、其の範圍內に於ての新陳代謝と生長との可能はある。平衡はそれだから、動的平衡である。動的平衡に即しての生長は如何なる形をとらねばならぬか？、一面に於てそれは、徐々に自身の胎內に於いて次ぎの社會を準備して行く。が、他面に於ては、矛盾克服の爲めに資本主義社會が使用し得る手段は何處までも階級的な性質を有つ所からして、一定階段に於ける矛盾の克服は、次階段への生長を可能ならしめると同時に、常に、次階段に於ける矛盾をば、ヨリ大いなる規模に於て展開させるやうな仕方でされる。恐慌その他の形をとつて現はれる此の矛盾の周期的擴大的展開を含む發達過程から資本主義社會が完全に解放され得るのは、自身の組織としての階級的對立と生產無政府その他から完全に解放された時、即ち、自身を完全に否定した時に限られる。そして、生長と發展との最后の段階――轉形期――の性質を決定するものも亦た、かの『矛盾の擴張再生產』の過程である

これは、資本主義社會が併せ有する矛盾性と有機體性、及び其の双方に制約される資本主義的發展の辨證法的性質を、最も抽象的な言葉で綴つて見ただけであるが、私はこれだけのことを頭に置いて、資本論第二卷第三篇の擴張再生產の理論を調べたいと思ふ。

擴張複生產の理論は、すくなくとも其の志向に於ては、當然に、資本主義の發展相を對象とするものでなければならぬ。何故といふに、資本主義的發展乃至生長とは、資本家による生產の擴張であり、その遞增的擴張であり、即ち資本の累積だからである。そして、其れ以外のものではあり得ない。何故なら、『蓄積を其の必要缺くべからざる一部分とする所の、剩余價値

の生產』こそは『資本家的生產の直接の目的であり、强調的な動機』だからである。發展相の考察が玆に發足するのであるが、それは理論的考察であるのだから、マルクスが自身に向つて提起した問題は、先づ最も單純な、根本的且つ一般的な問題である。曰く擴張復生產——資本蓄積——は如何にして行はれるか？ が玆での擴張復生產は、資本主義社會のそれである。從てこの問題に對しては、當の社會の有機體性に即しての解答と、矛盾性に即しての解答とが同時に豫想される。そして更に、二ツの解答の動的結合が豫想される。何故なら、發展相の考察を志向とするからである。ところで、矛盾性と有機體性とは、離れ〳〵のものでないとはいへ、その事實を忘れない限り、暫く一方を度外視して考察の焦點を他の一方のみに集注する事は可能でもあり、必要でもある。玆に於てマルクスの問題は一段と限定されねばならなくなつて來た。そして、マルクスが選んだのは、先づ有機體性の方に觀察の力點を置く方法であつた。『擴張復生產は如何にして可能であるか？可能なる爲めの條件は何々か？』——かやうに先づ問題を起したのである。もちろん、反對に斯う問ふことも出來た——『擴張復生產を困難ならしめる諸條件は何か？』此の場合には、取り敢へず矛盾性の方に重きが置かれる。がしかし、有機體性といひ矛盾性といつても元來が同一過程に於ける肯定相と否定相に過ぎないのだから、『可能ならしめる條件は？』と尋ねて行けば自づから『困難ならしめる條件』の發見になり、その逆も亦た眞だといふことは、問題と對象との性質の然らしめる所である。何故といつて、『可能にする條件』が見出された時、當の條件の部分的乃至は相對的欠除は直ちに『困難』を意味するし、その全部的乃至絕對的欠除は「不可能」に外ならないからである。之を要するに、マルクスが提起した問題は資本主義的擴張復生產を可能ならしめる條件（平衡要件）を求めるといふ形で問題を提起してゐるとはいへ、問題を裏に返へせば直ちにそれを困難ならしめる條件（矛盾相）の追求であり、それを辨證法的に展開せしめることによつてやがては『不可能』（崩壞相、行詰り）の考察に到り得るものであつたことを悟れば足るのである。

剩余價値の增殖は資本家的生產の直接の目的である。が、剩余價値の增殖は、蓄積を經てのみ遂行される。さうすると蓄積は必要缺くべからざる手段だとも云へる。增殖に奉仕する意味での蓄積は、さし當り剩余價値の生產と實現（貨幣化）とに制約される。此の意味での蓄積は、飽くまでも階級的——資本家的——立場からの觀察で、階級的要求に極大限の重みが與へられてゐる。玆では對立相が際立つ。ところで、蓄積を制約し、

從つて剩余價値增殖を制約する所の、剩余價値の實現は、常態的には、何によつて制約されるかといふに、生産的社會の新陳代謝の要求によつて制約されるのである。賣れるものを生産せねばならぬといふ意味の大半は玆にあるのである。そして玆では反對に平衡相、有機體相が前景に浮び出て來る。資本制生産は明かに階級的生産であるが、單なる階級的生産ではなくて同時に社會的生産である。が、飽くまでも階級的生産ではあるのだから、階級的動機が優越して來る毎に――そして絶えず優越する傾向があるので――社會的新陳代謝の要求の方が今度は脅かされる。で、蓄積行程に於ける剩余價値實現の問題は、對立的、階級的立場からと、平衡的、社會的立場からとどちらからも見ることが出來、どちらからも見なければならぬのだから、特に一方から眺め乍らも他方を沒却しない用意が要るといふ點に於て、前段に述べた場合と變らない。剩余價値の實現を制約する事情としては、尙ほ、流通手段の數量のことがあり、テクニカルな問題としてのそれがあることを序でながら注意して置く。

七

それでは、資本主義的擴張複生産が可能なる爲の條件は何か？　ところが、求むる所の平衡の條件を、最も根本的な形に於て見出すのには、問題を更に限定して『擴張複生産が故障なく行はれ得る爲めの條件は何か？』と問はねばならぬ。（斯く問ふことはまた、問題を裏に返して困難を見る場合に最もハツキリとそれを指摘し得る所以でもある。）一社會の擴張再生産にあつては社會全體の資本が一回毎に增大し、從て生産も增大する。此の過程は、在來資本の更新と、新らたなる資本の追加とから成る。そこで、問題を簡な單らしむる爲めに先づ在來資本の更新のみに就いて見る。即ち、單なる複生産を見ることにする。これにあつては、唯だ在來の資本が毎回更新されるだけであるから、毎回生産さるる價値の量にも變化がない。それにしても、生産は勞働の過程である。そこで一定量の價値で表はされる所の社會全體の資本は、勞働力に放下される部分（勞賃）と、勞働の要具（例へば機械）及び勞働の對象（原料）に放下される部分とから成る。いま、勞働力に放下される資本分を可變資本と呼んで之を v で表はし、後者即ち生産手段に放下される部分を不變資本と呼んで之を c で表はすなら、社會全體の資本は、c+v に均しいであらう。ところで、資本制生産に於いては、資本家に買ひ取られた勞働力は剩余價値を生産し、資本家がそれを收得する。いま、剩余價値を m であらはす

ならば、一社會に於て年々生產される價値の總量は、c＋v に m を加へた c＋v＋m に均しい。(價値の增殖の行はれない單なる複生產なるものは一つの抽象であつて、資本主義社會の複生產は擴張複生產なのであるが、いま後者を調べる準備として單なる複生產を想定してゐるのだから、生產される價値の總量中に m を含ませて差支ない。)

c＋v＋m であらはされる價値總量は、もちろん、凡百の生產物に體現されてゐるのである。いま生產物に即して見ると、C が更新されるといふことは、消耗された原料や機械が更新される事なのだから、C 分に相當する價値は、それらの生產手段を代表することになる。次に、V 分の價値は勞働階級が消費する消費資料を代表する。何故といふに、V が更新されるといふことは、消耗された勞働力が更新されることを意味し、勞働力は勞働者の消費生活(衣食住)を經なければ更新されないからである。最後に M 分の價値は、資本家階級が『身分相應』の生活をする爲に消費する消費資料を代表する。何故といふに資本家は、實際の物質的生產の一要素をなさぬとはいへ、資本制生產、階級的生產に於いて搾取者としての役割を演ずるものであつて、此の搾取階級がそれ自身を複生產して搾取を續行し得る爲には矢張樣々な消費資料を必要とするものだからである。かやうに、生產手段と消費資料とが生產され消耗され複生產されて、勞働者の勞働と機械の運轉と資本家の搾取との續行を可能ならしめて行く過程が、即ち資本主義社會の社會的新陳代謝の過程である。此の新陳代謝が故障なく行はれ行く爲めには、如何なる條件が充たされねばならぬか?此の問題を一般的に解すれば、多數の條件が考へ得られる。が、その多くは既に資本論第一卷及び二卷の前半に於て扱はれてある。茲では、研究は既に資本主義の發展相のそれに迄で進んでをり、問題は此の研究階段に特殊なるそれである。そこでマルクスは答へて、條件とは、生產手段の生產と、消費資料の生產との間に或る平衡が保たれることであるとした。

社會全體の生產物を生產手段と消費資料との二群に大別し、各群に屬する生產物全體の價値を其の構成部分に就いて見るならば、どちらも c＋v＋m で表はし得ることは社會全體の生產物の場合と同樣である。いま生產手段(Pm)の方の大文字で表はし、消費資料(Km)を小文字で表はせば次の如くになる。

I　C＋V＋M＝Pm

II　c＋v＋m＝Km

資本制生產は、商品生產であり、從つて分業生產であるから、凡百の生產物の生產は凡百の產業部門に分かれる。いま生

産物のうちで生産手段(原料機械等)に屬する物を生産する産業諸部門を一括して第一部門と名づけ、消費資料に屬する物を生産する諸部門を第二部門と呼ぶことにするならば、即ち此の第一部門の生産と第二部門の生産との間に或る平衡が保たれねばならぬといふのである。何故といふに、例へば第一部門の産業たる製鐵業に於ける勞働者と資本家とが、それ〴〵の所得たる賃銀(V)と利潤(即ち剩余價値M)とを生活資料に換へやうとしても、自己の産業の生産物たる鐵をはじめ自余の第一部門諸産業の生産物たる各種の原料機械の類は何づれも其の目的に役立たぬ物ばかりであつて、是非とも第二部門産業の生産物にそれを求めねばならぬからである。反對に、消費資料を生産する産業例へば製靴事業の資本家は、所要の原料や機械は之れを第一部門産業に求むるより外はない。いま此の種の依存關係乃至は交換關係を前掲の方式に就いて調べて見やう。第一部門で生産される價値の總量を表はす C+V+M は、之れを生産物として見れば恐く生産手段(Pm)であるが、之れを貨幣價値として見れば、Mは資本家の所得、Vは勞働者の所得もしくは資本家の可變資本、Cは資本家の不變資本である。VとM即(V+M)なる貨幣價値を與へて買ひ取る所の生産物は、いま言ふ通り、第二部門から供給される。が、Cの方は、各資本家が不變資本として放下し回收する部分の價値であるから、之れを以て買取られる各種の生産物はみな生産手段(原料機械等であつて第一部門から供給される。だから、此の部分に就ては、第一部門に屬する各資本家は同じ部門の他の資本家から所要の生産物の供給を受ける。言ひ換へれば彼等相互間の取引で足るのである。一方、第二部門の c+v+m は、之れを生産物として見ればすべて消費資料(Km)である。從て、貨幣價値としての v+m(勞働者及び資本家の所得)を以て買ひ取られる生産物は、同部門內の資本家等が供給する。が、しかし、c(不變資本)の部分に就ては、所要の生産物を第一部門資本家の供給に俟たねばならぬ事既述の通りである。

すると、二群に大別された兩生産部門間の交換關係は、とにかく、v+mと、cとの關係であるとが知れる。茲で調べてゐるのは單なる複生産の場合であつて、在來資本の更新が行はれるだけで何等新資本の增投がない。資本家によつて收得される剩餘價値は少しも資本化されずに總て彼等の個人的消費に充てられるのである。然る時は、第一部門が第二部門に對して有つ需要は、丁度v+m額の價値になり、第二部門の第一部門に對する需要は正にc額の價値になる。從てもし、第一部門が第二部門に供給すべく生産する生産手段の部分が丁度 c 價値のも

のであると同時に、第二部門が第一部門に供給すべく生産する消費資料が丁度$V+M$價値のものであるならば、兩部門間の取引は少しの過不足もなく、完全にバランスが取れる。即ち、價値相から見ても品目相から見ても

$$c=V+M$$

である時にのみ、生産手段を生産する産業部門と、消費資料を生産する産業部門との間の生産の平衡が得られるのである。そして、$c=V+M$なる平衡は、同時に他の二種の平衡を意味するものである。何故といふに、$C+V+M=Pm$なる時に$c=V+M$ならば、$C+c=Pm$である。即ち生産手段を生産する第一部門の生産物全體が、價値に於ても品目に於ても、第一部門並びに第二部門の要する不變資本全體と一致する。又た、$c+v+m=Km$なる時に、$c=V+M$ならば、$V+M+v+m=Km$である。即ち、消費資料を生産する第二部門の生産物全體が、價値に於ても品目に於ても、第一部門並びに第二部門の資本家及び勞働者の個人的消費を代表する所の可變資本及び剩余價値全體と一致する。即ち、これらの平衡が得られる時にのみ、社會的生産全體の新陳代謝が故障なく續行され得るのである。これがマルクスの解答であつた。

いま、數字を用ひて此の關係を示せば、$c=V+M$なる爲には、例へば次ぎの如くでなければならぬ。

I　$4000C+1000V+1000M=6000Pm$

II　$2000c+500v+500m=3000Km$

即ち……$2000c=1000V+1000M$

$4000C+2000c=6000pm$

$1000V+1000M+500v+500M=3000Km$

けれども、此のマルクスの解答の裏を讀み得る者は、生産の意識的統制を欠き階級對立に基礎を置く資本主義社會に於いては此の種の平衡によつての故障なき新陳代謝が如何に困難なるかを容易に知ることが出來やう。そして、右の解答は、實に、より遙かに多くの困難を含むところの擴張複生産過程を調べる爲めの準備階段としての意義を有つものであることは私が既に指摘して置いた通りである。

八

然らば、擴張複生産が故障なく行はれ行く爲めの條件はどうか？　擴張複生産は、剩餘價値の増殖を含む複生産過程である。資本主義的生産の「直接の目的」と「強制的な動機」とを體現する過程である。此の過程は、しかるに、或る平衡に制約され、該平衡の範圍内に於てのみ可能である。此の平衡を得る

爲めの條件の研究に於て、先づ、完全なる平衡の爲めの條件を見出すことは、同時に、平衡獲得を困難ならしめる條件を最も明確にする所以である。そしてそれはやがて、かく肯定相と否定相とを同時に含むところの一過程の辨證法的發展に關する理論を、その辨證法的歸結に導びく爲めの必要準備でもある。

が、此の完全なる平衡の爲めの條件が、肯定相に就ても否定相に就いても、資本主義的發展の最根本的、最本質的な條件を示すものであるが爲めには、平衡條件の考察は最も純粹な、最も本來的な姿に於ての資本主義社會に就てなさねばならぬ。そこでマルクスは、いつも乍らの方法に從つて、資本主義社會の『機構の内部の働きを隱すところの一切の現象を暫く度外視する』爲めに、次ぎの假定を設ける。即ち、問題の擴張複生産の行はれる資本主義社會は、産業資本家階級と賃銀勞働者階級との二者のみから成り、他の資本主義及び非資本主義的社會との交易は全く無く、商品の價格は常にその價値と一致し、流通手段（貨幣）としては金のみが流通するものとする。

單なる複生産に於ては、在來資本の更新が繰返へされるだけである。これにあつての平衡は、$c=V+M$ に條件づけられることを吾等は見た。此の條件が充たされねばならぬことは、擴張複生産に於ても全く同樣である。何故といふに、在來資本の更新、新陳代謝の必要は、擴張複生産に於ける一要件だからである。がしかし、擴張複生産は、新陳代謝の過程であると同時に又た生長發展の過程でなければならぬ。そして後者の過程は即ち新資本增投の過程である。で、擴張複生産が故障なく行はれ行く爲めには、更新過程に於ける平衡と併せて增投過程に於ける平衡が獲得されねばならぬ。二つの平衡が二つながら完全に得られる時に始めて、生産的有機體全體としての完全なる平衡が得られる。その時に始めて、單なる複生産に於けると同じく、一方には社會全體の不變資本と生産される生産手段全體との間の價値上及び品目上の一致があり、他方には生産される消費資料全體と資本家階級及び勞働者階級の所得全體との間に於ける同樣な一致があるのである。擴張複生産に於ける平衡は一段と困難であり、特に增投過程が加はるが故に困難である。蓋し、それは資本制生産の膨脹的進行に於ける平衡のことだからである。比較的短期の現象としては、生産の擴張もまた剩餘價値の增加も、必ずしも資本の增投によらずして生じ得る。それは大いに注意すべき點であるが、しかし、長期をとつて觀察すれば、剩餘價値の增殖、生産の膨脹は、常によリ多くの資本を要求する。此の追加部分の資本は、わが純粹なる、最抽象的なる資本主義社會に於ては、勞働者階級によりて生産せられ資

本家階級によつて收得される所の、剩餘價値の一部分が資本化される時にのみ生ずる。言ひかへれば、剩餘價値の全部が消費資料に換へられて資本家の個人的消費に奉仕する代りに、その一部分が資本に繰り入れられて勞働力及び生産手段の購入に充てられること——これが擴張複生産への一先要條件である。そこで、m は今まや二つに分かれ、その資本化される方の部分は更に不變資本化される部分と可變資本化される部分とに分かれねばならぬ。剩餘價値を三分し、資本家の消費分を mk 不變資本化分を mc 可變資本化分を mv で表はす時は、第一部門及び第二部門の生産物の價値構成はそれぞれ次ぎのやうに書きかへられる。

I. $(C+V+Mk)+(Mc+Mv)=Im$

II. $(c+v+mk)+(mc+mv)=Km$

右の二式に於いて、前の括弧で括くられた三項は、蓄積年度毎に更新される部分に當り、後の括弧で括くられた二項は蓄積年度毎に増投される部分に當る。更新される部分、即ち

I. $C+V+Mk$

II. $c+v+mk$

に就いて言へば、その平衡の爲の條件は、單なる複生産の場合と全く同樣に、

$c=V+Mk$

でなければならぬことは、既に見た所によつて明かであらう。問題は新らたに資本化される部分、即ち、

I. $Mc+Mv$

II. $mc+mv$

の方にある。ところで、Mc は、その品目相に於ては生産手段群に屬する凡百の商品から成り、價値としては第一部門各資本家に依つて不變資本化される部分に該當する。從て此の部分の資本化は、總ての生産手段を生産する第一部門の資本家の相互の取引によつて實現される點に於て、單なる複生産に於けるCの場合と異る所がない。從て又之れに就いての平衡は、各資本家の新不變資本と擴張の爲めに要求される所の各種の生産手段の生産と、之等の生産手段に放下さるべき各資本家の不變資本とが、價値に於て品目に於て一致する時に得られること前の場合と同樣である。次ぎに、Mv 即ち第一部門に於て可變資本化される部分は、品目相に於ては種々なる生産手段であるが、價値としては新らたに追加する勞働力に放下されるものである。此の價値分を賃銀として受取る新來の第一部門勞働者等は、しかし、所要の消費資料は之れを第二部門の供給に俟たねばならぬ。即ち、擴張複生産に於ける Mv の增投は、單なる複生産

に於ける V＋M の更新と全く同樣なる意味に於いて第二部門に依存することが知れる。一方、第二部門の mc は、生産物としてはみな消費資料であるが、價値としては新らたに不變資本化される部分に當り、生産手段に放下されるのであるから、mc の增殖は、單なる複生産に於ける c の更新と全く同樣の意味に於て、第一部門に依存する。最後に、mv は、價値としては可變資本の追加分に當り、第二部門勞働者の手に渡つた上で同部門の資本家等が供給する生活資料にかへられるのであるが、品目相に於ての mv は消費資料であるが故に、これが勞働者の消費資料に適する形のものでさへあれば過不足なく處分され得る譯である。

すると、新らたに資本化される部分に關して、第一部門の生産と第二部門の生産との間に平衡を得る爲めの條件は、

$$Mv = mc$$

であることがわかる。即ちMvとmcとの價値上及び品目上の一致である。此の條件が充たされる時にはじめて擴張複生産は故障なく進行することが出來るのである。いま、

I. $(C+V+Mk)+(Mc+Mv)=Pm$

II. $(c+v+mk)+(mc+mv)=Km$

なる時に、$c=V+Mk$ 及び $mc=Mv$ であるならば、一方に於て

$$C+c+Mc+mc=Pm$$

なると同時に他方に於ては、

$$V+Mk+v+mk+Mv+mv=Km$$

であり得る。即ち、一方では、第一部門に於て生産される生産手段全體と、兩部門に於て更新され且つ追加される不變資本全體とが一致し、他方では、第二部門で生産される消費資料全體と、兩部門の資本家と在來及び新來の勞働者の所得とが完全に一致して過不足がない。そして資本家は剩餘價値の資本化を行つて所要生産手段と勞働力とを增加し、生産の規模を擴張する。その結果は、生産される價値全體の增加となつて表はれ、他の事情が同一ならば、餘剩價値も從つて增加し、かくて、剩餘價値の增殖は可能である。

いま、右に述べたやうな平衡が得られた場合の諸關係を數字に當てはめて表はすなら、例へば次のやうになる。(次表に於ては、第一部門の資本家等は、剩餘價値の半額を資本化し、資本化されるものの中の五分の四を不變資本に、他を可變資本に充てることになつてゐる。第二部門に於ては、剩餘價値の五分のが資本化され、更にその内の三分の二が不變資本に、他は可變資本に充てられてゐる。)

原年度 { I. 4000C＋1000V＋1000M＝6000Pm / II. 1500c＋750v＋750m＝3000Pm } 計＝9000

次年度 { I. 4400C＋1100V＋1100M＝6600Pm / II. 1600c＋800v＋800m＝3200Km } 計＝9800

三年度 { I. 4840C＋1210V＋1210M＝7260Pm / II. 1760c＋880v＋880m＝3520Km } 計＝10780

以上述ぶる所は、資本主義社會がその社會的生產の物質的要素の新陳代謝（更新）と生長發展（擴張）とを些の故障もなく行ひ得る條件、即ち完全なる平衡を以て行ひ得る條件を數學的に表出したものである。此の條件を充たすことの困難は、既に幾度か示唆して置いた。そして吾々は今やそれを明確に見取り得る地位に置かれてゐるのである。擴張複生產——資本蓄積の理論——は、資本主義社會の有機體性の考察、特にその生長を可能ならしめる條件の考察といふ形をとつてゐるとはいへ、それは直ちに彼れの恐慌の理論を準備するものである。第二卷は蓄積の理論を以て終つてゐるとは言へ、それが當然に恐慌篇へ展開するべきものであつたことは、「剩餘價值學說史」の體系を一瞥する者の直ちに察知し得る所である。恐慌の理論は矛盾相の理論であり、その展開の理論である。

九

マルクスは彼の蓄積の理論に於て、先づ平衡の條件を求めてゐる。そして、その條件を數學的に表出した。が、彼れは詳しい說明によつてそれを補ひながら、機會ある每に、該條件の充たさざる場合即ち平衡破壞の場合を暗示することを怠らなかつたのである。わけても彼れは、擴張複生產に於ける剩餘價值の資本化の前提である所の剩餘價值の實現（貨幣化）に際して種々なる困難の起るべき種々なる場合を理論的に想定し、且つそれ等が資本主義組織の內部に於て如何に克服され得るかを說明してゐる。ローザ・ルクセンブルクが議論の出發點として取り上げたのは、即ち是等の困難であつた。ルクセンブルクは、その困難を絕對的と見、純粹なる資本主義社會の內部に於ける資本蓄積の不可能を結論し、資本主義的蓄積の必須要件として、非資本主義的外圍の存在及び之れとの交易の必要を主張するに到つたものである。そして、河上博士も亦たその理論を容れられた。之れに對して私は、マルクスが想定せる剩餘價值實現上の困難は、たかだか、相對的部分的なる困難であつて、資本蓄積の本來的絕對的不可能を意味し得ないことを論證しようと思ふ。そして、かく解する時にのみ、マルクスの蓄積理論がマル

キシズムの全體系に於て占むる位置を正しく把握することが出來よう。

一〇

ローザ・ルクセンブルグは斯う書いてゐる

『蓄積の目的の爲には、剩餘價値の一部分は、資本家によつて消費されずに、生産の擴張の爲めに振向けられる。ところで、此の資本家自身が消費せざる部分は、勞働者が之れを消費することは尙更ら出來ないのである。何故と言つて、一定の時に於ける勞働者の消費は、其時に於ける可變資本の總額以上に出づることは出來ないからである。』『そこで問題は、此の、資本家も消費せず、勞働者も消費し得ざるところの剩餘價値の部分、即ち正に蓄積されねばならぬ價値の部分を代表する餘分の生産物は、その買手を何處に見出すか、である。これに對する需要は何處にあり、何人がそれを消費するのか？ 乃至は、マルクスが表現したやうに、蓄積される剩餘價値に對して支拂ふ爲の貨幣は何處から來るか？』（『資本の蓄積』九七頁）

すると、ローザ・ルクセンブルグが提起した問題は二つに分けて考へることが出來る。『剩餘生産物を買ひ取る貨幣は何處から來るか』といふのが一つ、『剩餘生産物に對する支拂能力ある需要は如何にして增加するか』といふのがその二である。ローザ自身も亦た問題を區別し、前者は寧ろ流通に關するテクニカルな問題であるとし、眞の問題は後者にあるとなしてゐる。が、しかし、議論の順序から言ふと、彼女は先づ貨幣の出所を論じ、此の問題はマルクスが解決せずに殘した問題であると結論し、それを根據として後の論點に移つて行く。で私は先づ第一の問題を調べ、これが旣にマルクスに依つて解決されてゐることを示すであらう。

ローザ・ルクセンブルグに依れば、資本化される剩餘生産物は、資本家自身も勞働者も之れを買ひ取ることが出來ない。謂ふ所の剩餘生産物の內で資本家によつて買ひ取られる部分は表式に於ける Mc と Mv とであつて、前者は第一部門の資本家によつて、後者は第二部門の資本家によつて買ひ取られるとになつて居る。勞働者の買ひ取る部分は mc と mv とであつて、前者は第一部門の勞働者が、後者は第二部門の勞働者が買ひ取るとになつてゐる。いま、資本家の場合を見るに、彼等——例へばA A′ A″等が、自己の生産擴張に要する新らたなる生産手段を、他の資本家——例へばB B′ B″等から買取り得る爲めには、A等自身が先づ自己の剩餘生産物を賣り、代金として受取つた貨幣をB等に支拂ふより外はない。ところでA等が賣らう

としても、彼等の剩余生產を買取る者が矢張り他の資本家即ちB′B″等であるといふならば、B等も亦先づ自己の剩余生產物を他の資本家に賣つて貨幣にかへて居なければ買取り得ないのだから、そして此の場合の他の資本家とは正に賣らうとしてゐるA等に外ならぬのだから、問題は到底解決されやうがない。從て、資本家等が相互間の取引によつて剩余價値を貨幣化し且つ所要の生產手段を買つて生產を擴張する——即ち資本蓄積を行ふといふとは不可能である。これが、ローザ・ルクセンブルクの議論である。次ぎに、勞働者が資本家からその剩余生產物を買取る場合を見る。表式に於ける IIc と IIv とは、生產物としては勞働者用の消費資料で、後者は第二部門の勞働者が、前者は第一部門の勞働者が買取る筈のものである。又た、IIv は品目相に於ては生產手段であつて、第二部門の資本家によつて買取らるべきものではあるが、彼等がそれを買取り得るのには先づ自己の剩余生產物 IIc を第一部勞働者に賣つて以てそれを貨幣化して居らねばならぬ、といふ關係になつてゐる。即ち、IIv の貨幣化も亦た、間接ではあるが結局勞働者の購買力に依存する。で、これらはみな、勞働者に賣るとによつて資本家がその剩余生產物を貨幣化せねばならぬ場合である。ところで、勞働者がそれを買ひ得るであらうか？此の場合、資本家が賣附けやうとしてゐる相手方の勞働者なるものは、みな新らたに追加される勞働者である。彼等は無一文なるが故にこそ今や賃銀勞働者たらうとしてゐる者で、所要の購買力は資本家から勞賃を貰はぬ限りゼロである。そこで、唯一つの方法が殘る。資本家が剩余生產物を勞働者に買はせる爲めには、それを貨幣化するに先だつて賃銀を渡すと、これである。が、その賃銀となる貨幣を資本家は何處から出すといふのか？これが、ローザ・ルクセンブルク問題である。

マルクスは、此の問題——即ち剩餘生產物の實現に當つて流通行程と關聯して起り得る困難を理論的に想定し、あらゆる一時逃れの解決法を否定した上で、結局、斯ういふ解決を與へてゐる。凡そ資本家等が相互の剩餘生產物を貨幣化せんとする場合には、彼等の一部の者は、自己の剩餘價値を實現する前に先づ他の資本家なり勞働者なりに貨幣を渡す必要のあることは拒めない。が、此の前拂ひに要する貨幣は、資本家等が相應に多額の固定資本を有する限り、常に彼等の手に貯へられてある。何故といふに、固定資本は事實上長期の後に更新されるもので、年々それを更新するものとして計上されてある價値分（C及びｃの一部）は實は總てが其年内に生產手段に轉化されるのではなく、其の一部分は謂はゆる償却基金として貨幣態で積立てら

れてゐる。資本家の前拂ひに役立つのは即ち此の貨幣である。單なる複生産の場合には、それは資本家等をして各々共の剩餘價値を實現して以て個人的消費の爲めの消費資料を購入せしむるに役立つた。『同じ貨幣が玆にもまた現はれるのであるが、前とは違つた職能を以て現はれる。A等やB等は、（今や、）彼等の剩餘生産物をば追加資本たるべきものに轉化せんが爲めにかはる〴〵此の貨幣を供給し、そして新らたに形成された貨幣態資本をばかはる〴〵流通界に投じて流通手段たらしめるのである。』（『資本論』第二卷四七六頁）（尙ほ、この固定資本更新用積立金が蓄積行程に於いて演ずる役割に就ては、彼の『剩餘價値學說史』第二卷第二分冊二四六—二四八頁に最も明快に述べてある。）

『資本の蓄積』の著者は、然し乍ら、マルクスの此の解決を解決と見ないのである。そして唯だ簡單に斯う書いてゐる。『玆で吾々はもう一度單純複生産に逆戻りしてゐる。資本家等Aと資本家等Bとが、時々、彼等の不變（固定）資本を更新せんが爲めに次第に貨幣の貯へを積立てゝ行き、かくして互に其の生産物の實現を助けるといふのは、全く正しい。が、しかし、此の積立てられる金は天から降らない。それは、段々に生産物の中に移入されて行く所の、固定資本の價値の、次第〴〵にしたゝり落ちた沈澱物であつて、固定資本の價値は、生産物の賣却と共に少額づゝ實現されるのである。かくては、此の積立金は只だ在來の資本の更新に間に合ふ丈けであつて、それを超えて追加部分の不變資本の購入に用立てることは不可能である。』（『資本の蓄積』一〇〇—一〇一頁）

河上博士も亦た明かにマルクスの解決に滿足されざるものである。博士は、ローザ・ルクセンブルクと略々同一の論據から剩餘生産物實現の不可能を說き、之れを第二部門の生産物に就いて見れば m_c 分と m_v 分とが必要に『賣れ殘る』とされる。此の部分を前揭の數式に當にはめれば、一五〇單位に當る。『…之が賣れないのである。消費資料のうち是れだけが必然に賣られずして殘るのである。勿論この一五〇單位の消費資料は、次年度に於て兩部門の生産規模が擴張せられ、從て之に使用する勞働者數を增すがために…（彼等の）生活資料に充てらるゝ筈なのであるが、今吾々が問題としてゐるのは資本主義の社會で（あるから、）……それは必ず一旦貨幣によつて買はれなければならない。しかし勞働者階級が一九〇〇單位（補註、1100V＋800c）の購買力を有し得るのは、資本家の剩餘價値が既に實現化（貨幣化）された結果として生産擴張の行はるべき次年度のこと』である。『そこで此の一五〇單位の消費資料を如何にして買るべ

きかといふことが、解決すべからざる問題として殘る。さうして此の到底解決すべからざる問題が恰もマルクスにより解決されざるがまゝに殘されてゐるのである。云々』『社會組織と社會革命』一七七—一七九頁)

二

右に就いては、吾々は既に高田保馬博士の批評を聞くことが出來た。博士によれば『河上博士の此の主張は少くも私にとりては極めて解し難きもの』であつて、『與へられた事情の下にありて尙ほ資本家が擴張複生產の道を進み得る可能はいくらも存在する樣に思はれる。』といふのは、問題の『一五〇單位は究局賣れ殘るものではない。やがて勞働者によりて買取られ得ることが十分に見込まれ得る。從ひてそれは需要を有し得ざるものに非ず、たゞ現在の需要を見出し得ざる丈けのことである。此際、其近き賣行の見込まれ得る以上、資本家はその賣行くまで成行に任せて次の生產——擴張複生產——に取りかゝり得ないものであるか。』そこで博士は博士の謂ゆる成行きに任せて賣行かせる方法として、先づ第一に、固定資本更新用の積立金に言及し、『これが擴張複生產の爲に利せられ得ないか、一五〇單位の賣らるゝまで立替へ得られないか、所謂 Schatzbildung の議論は此際必ずしも棄て去るべきものではあるまい。』が、『しかしこれは私の立場から言へばほんの附隨的のこと、顧みられざるも妨げぬ』といふ意見である。第二に博士は信用の利用し得べきをあげ、第三には、『よし以上の道行を離れて考へても、賣行の見込確實なる一五〇單位は商人により買取られないか。』といつて商業資本を取入れ、そして最後に博士は斯う思はれたのである。『所謂次年度に於ける可變資本及び不變資本の總體が投下せられ終るまでには既に一五〇單位が賣られてゐる事を要する。然れども、これ等の資本は大抵の生產業にありて、すべて生產年度の當初にすべて一齊に投下せらるゝを要しないと思ふ。……一五〇單位は年度の初めに賣殘つてゐても、二三月乃至五六月の間に……換貨せられ資本としての役目を務めば、なほそれで擴張複生產は都合よく行はれ得る譯である。云々』『改造』一三年一二月號所載『剩餘價格第三論』一〇二—一〇四頁)

尙ほ、博士は附言して、以上の諸點は『極めて平凡のものであるけれども……それが平凡であるだけに多くの人々によりて直ちに考附かるゝ所である。』と述べられたのは、博士の謙遜であるかどうかは別として、私も略々同感なるものである。先づ博士の最後の論點を見る。『一五〇單位は年度の初めに賣殘つてゐても、』とあるのはどうしたものか？　爭點は、正に、賣れる

か、賣れ殘るかにあるのではなかつたか？『賣れ殘つても、』後で賣れるといふのであるが、年度の始めには常態として賣れ殘るといふのか？賣れ殘るべき理由、本質的な理由を認むるといふのか？そして『二三月乃至五六月の間に』貨幣に換へられる時に、其の貨幣は何處から來るといふのか？想ふに、博士は、商人の仲介（第三論點）なり、信用の利用（第二論點）なりによつて、賣れ殘らぬとされるのであらう。が、此の『多くの人々によつて直に考へ附かるゝ』であらう所の、信用や、商業資本こそは、正に其の理由からしてマルクスによつて暫くのあひだ度外視されてゐるものであつた。ルールに遵つたゲームは、無効の宣告を受けねばならぬ。が、只だこれだけではない。その種の第二次的、派生的な現象を、氣の附くがまゝに譯もなく取入れることは、資本主義社會を、其の矛盾相及び調和相に於て、本來的本質的に究める所以でなく、從て、或は在るかも知れぬ剩余價値實現上の眞困難を見逃してしまう所以でもある。マルクスは、あらゆる一時逃がれの解決を恐れたのであつた。信用なり、商人なりの存在することと自體が、問題の困難の實在することに起因しないと誰れが言へるであらうか？若しかするとそれは、そこに矛盾が實在するが故にこそ、それを克服する手段として發展し出でたものではなかつたか？博士が、博士の論點を自ら平凡なりとされたのに私が同感であるといふのは、一つは此の意味である。が、また、總ての眞理はさして奇拔なものでないことも確かである。茲での理論的討究に用ひられてゐる正しき方法が許す範圍内に於て、（ゲームのルールに適つた範圍内に於て、）唯一の正當な解決の鍵である所の固定資本積立基金があることにも博士は確かに氣附かれてゐる。が、鷹揚な博士は、氣附くや否やそれを『ほんの附隨的なこと、』だとし、『顧みられざるも妨げぬ』と揚言されたのであつた。そこで、いよ／＼私は問はずには居られない。年度の始めに賣れ殘つたものを『成行きに任せて賣行かせ』やうといふ資本家等は、二三月から五六月時分のだん／＼陽氣のいゝ頃に、そもそも何者の懷から金を引出さうとするのか、と。

三

もと／＼マルクスが提起した問題なのであるから、ローザ・ルクセンブルグも河上博士もまた高田博士も、マルクス自身が用ひた鍵に依りさへすれば間違ひなかつた筈のものである。『剩余價値學說史』に於いてマルクスが、かの固定資本積立金を『蓄積用基金』(Akkumulationsfond)と呼んでゐるのを見ただけでも、彼が三氏の如くそれを輕視してゐなかつたことが知れ

る。此の基金が、蓄積行程に於ける剩余生産物の實現に用立つか否かの問題にとつては、それが『天から降つた』ものであるか、『次第〳〵にしたゝり落ちた沈澱物』であるかは敢て問はないのである。問ふ所は、それが發生史ではなくて、現在に於ける作用能である。（一）それが貨幣態をとつて居り、そして其價値が十分な大さに達して居れば足る。いま表式の假定の範圍内で言へば、第一部門の不變資本總額四〇〇〇單位の假りに半額を固定資本と見、更にその半額だけの固定資本分が年々實際に更新されると見ても、一〇〇〇單位の價値は貨幣態で積立てられてゐることになる。一方、追加される不變資本の總額は僅かに四〇〇單位に過ぎぬ。前者を『前拂ひ』に用立てることに依つて、後者に體現された剩余價値の總てを實現して尚ほ余りあるといふ事は、算盤を俟つまでもない明かさである。ローザが、『たゞ在來の資本の更新に間に合ふ丈けであつて』と言ふのは、二〇〇〇單位の全部が、實際に更新さるべき固定資本の價値を表はすと見る誤謬を犯した爲めと見るより外はない。假りに百歩を譲つて其の立場を是認するとしても、謂ふ所の二〇〇〇單位が一年の内の或る一瞬間に一擧にして更新されると做す第二の誤謬を重ねない限り、彼女の立言は不可能であつたであらう。彼女の説く通り、『固定資本の價値』が『生産物の賣却と共に少額づゝ實現される』のと同じやうに、固定資本の更新も亦た一擧に行はれずして全體の内の一部づゝが個々の資本家に依て逐次的になされるのである。固定資本と限つたことではない。すべての更新と貨幣化とが、部分的逐次的にのみ行はれる。擴張複生産の故障なく行はれる爲めの條件、完全なる平衡の條件の探究——既にしば〳〵指摘した二重の含意ある其の探究の爲めに、種々なる Magnitudes を單純な數學的考察に附してゐるあひだは、其の最抽象的な階段にあるあひだは、流通行程は正當に度外視されてゐるのであつて、從て、どれもこれも只だの Mass と見てをつて差支ない。ローザの謂はゆるWaarenbprei の考なども許される。が、しかし一度その階段から進んで問題を一段と具體化し、價値の貨幣化の過程に觸れた時からは、もはや流通行程は之れを其の本來の姿、即ち、其の逐次的部分的な各節を有つ姿に於て眺めるより外はないのである。それがまた、マルクス自身が、正當に、取る所の態度でもある。

であるから、問題の固定資本の場合にしても、假りにその總てが年々更新されると見ても、その年度の最後の日に更新を行ふ資本家は、『生産物の賣却と共に少額づゝ實現される』ところの其の價値を十二ケ月間は積立てねばならぬ。或は十ケ月、或は八ケ月等、長短は種々あつても、此種の基金が、全體として

も比較的僅少な（四〇〇單位）の追加不變資本の購入に用立たぬと論ずるのは、詭辯としても巧みなものではない。加ふるに、在來の固定資本の更新が小刻みに順次になされると同じく、新らたに添加さるる不變資本の購入もまた部分的逐次的に行はれる。全體として四〇〇單位の價値を體現する各種、各樣、凡百の生産手段が、それ〴〵の供給者の手からそれ〴〵の需要者の手に置きかへられるところの、從つて各資本家の剩余價値の實現と物的要件の更新とを同一過程の兩側面として同時に遂行せしめる所の、双方的交換を完結する爲めの此の種の商品流通の全行程に於て、所要の流通手段、購買手段として作用すべき貨幣の量は、經濟學の常識によつて、全商品の價値總額即ち四〇〇單位ではないのである。その三分の一、五分の一、乃至十分の一で足りやう。假りに四分の一と見れば所要の貨幣は一〇〇單位であるが、一ケ年の内に四〇〇〇單位の不變資本の價値を回收する資本主義社會に於て、僅か一〇〇單位の貨幣が前拂ひされ得ぬといふのが『資本の蓄積』の著者の主張である！

同じ基金が、追加勞働者の雇傭に際して資本家の『前拂ひ』に用立つことは、マルクスの指摘してゐる通りである。要するに、ローザ、ルクセンブルクが、困難のないところに困難を見いだすに至つたのは、問題のうちに流通行程を取り入れながら、それを其の正しき姿に於て見ることを拒んだからである。尙ほ、マルクスは、蓄積の進行につれて流通手段（貨幣）の社會的必要量が増加した場合には、その追加部分は何處から來るかを明かにしてゐる。それは言ふ迄もなく、第一部門産業に屬するところの金鑛業が供給するのであるが、斯業の資本家によつてなされる金の供給は、茲では直ちに貨幣であるから、社會全體から見れば、それが常に前拂ひと同じ作用を營んで剩余價値の實現を促進するといふことも又た記憶して置いてよからう。

一三

ローザ・ルクセンブルクには、いま一つの論點がある。擴張複生産に於ける年々の生産物の増加部分は、資本家でも勞働者でもなき第三者の、支拂能力ある需要を前提として生産さるべきである。後者の需要の増加に應ずべく生産されるものでなければならぬ。さもなければ、謂はゆる擴張複生産なるものは、資本主義的には全く無意味であらう。『……此の剩余價値の他の部分——蓄積される部分は、何人の爲めに生産されるといふのか？ マルクスの方式によれば、運動は、第一部門即ち生産手段を生産する部門からおこる。此の増加された生産手段を何

人が必要とするか？　方式は答へて、それは第二部門がヨリ多く生活資料を生産し得んが爲めに必要とするのだといふ。然らば、増加された生活資料は何人が之れを必要とするか？　方式は答へて、それは即ち第一部門である。何故なら第一部門は今やヨリ多くの勞働者を雇傭するからだといふ。明らかに、吾吾は圓を廻つてゐる。ヨリ多くの勞働者を雇ひ得んが爲めといふ其事のみの故にヨリ多くの消費資料を生産し、ヨリ多くの消費資料を生産せんが爲めといふ其事のみの故にヨリ多くの生産手段を生産するといふ事は、資本主義的立場からは無意味である。』（八八頁）また斯うも言つてゐる。『……何人が此の絶えず増加する剩余價値を實現するのか？　方式は答へて、それは資本家自身であり、資本家のみであると。然らば彼等は其の増加する剩余價値を以て何事を始めるのか？　方式は答へて、彼等は絶えず益々生産を擴張する爲めにそれを使用するのだといふ。それなら之等の資本家は、生産擴張の爲めの生産擴張狂である。』（二五九頁）資本家等が絶えずヨリ多くの機械を製造するとが、單にもし、更にヨリ多くの機械を製造せんが爲めに過ぎないとならば、そこに生ずるのは資本蓄積ではなくて、何の目的もない單なる生産手段の増加生産であらう。そしてそれが資本主義生産の眞の特質であり、マルクス説の當然の論理的歸結であると揚言したのは、かの嗤ふべきツガン・バラノフスキーである……云々。で、増加する剩余生産物に對する需要者が資本家（乃至は賃銀勞働者）のみであるとなすとは、マルクスの資本主義に關する理論一般、特に第二卷の理論と全く相容れない結果になる。そしてそれは、本來、第三者（非資本主義的生産者）の需要を考へなければ不可解なる所のマルクスの方式を、皮相的に文字通りに解せんとするが爲に外ならない、といふのがローザ・ルクセンブルクの主張である。

がしかし、私は問ふ。マルクスの方式をマルクスが説いた通りに解する事が果してツガン・バラノウスキー主義に墮するかどうかは別として、さう解する時には其處に資本の蓄積は無く、資本主義的に意味をなさぬ生産があるのみだといふのは何故であるか？　それを押詰めて行くと、ローザ・ルクセンブルグの議論は再び流通行程に戻る。『資本が蓄積するといふは、絶えず大なる商品の山をつくり出すことでなく、常に益々多くの商品を貨幣資本に轉化することである。』（四〇六頁）資本の蓄積は即ち貨幣資本の蓄積である。資本主義社會全體としての蓄積にあつては、資本家階級の貨幣資本が全體としての増加を來たさねばならぬ。『新らたに増加したに剩余價値は、新らたに増加した貨幣資本に於て實現されるを要する。』（四〇七頁）しかる

に、資本家のみで相互の剰余價値を實現するに於いては、資本家階級全體としての貨幣資本は、實現の後に於いても實現前の總額以上に出づることは出來ない。言ひ換へれば、蓄積即ち貨幣資本の蓄積は全く不可能である。

例へば『資本家Aはその商品を資本家Bに賣り、Bの貨幣で剰余價値を收得する。此のBは彼の商品をAに賣り、彼自身の剰余價値を貨幣化する爲にAから貨幣を取り戻す。兩人は彼等の商品をCに賣り、その剰余價値に對してCから貨幣を得る。がしかし、此のCは今度は貨幣を何處から得るのか？ A及びBから。

剰余價値實現の爲めの貨幣の他の出所はないことになつてゐる。即ち彼等の他に商品の消費者はない事に假定されてゐる。が、此の方法で、AB及びCが新らたなる貨幣資本を殖やすことが出來るであらうか？』（四〇六——四〇七頁）それと同じ議論は河上博士にもある。（『社會組織と社會革命』一〇〇——一〇三頁、その他を見よ）

一四

資本蓄積過程の考察に流通行程を取入れるに際してローザ・ルクセンブルクが如何なる誤謬を犯してゐるかは前段に於いて詳しく指摘しておいた。玆では彼女は、剰余價値が一定時に一擧にして實現されると見てはゐないやうにも思へるが、實は同種の誤謬を繰返してゐるのである。資本家的蓄積は、資本家階級全體の貨幣資本の增加に結果せねばならぬといふのは正しい。一つの蓄積年度に於ける全貨幣資本の額は、常に、前年度に於けるそれよりも增加してゐなければならぬ。かくてこそ初めて資本家的蓄積である。がしかし、玆での資本家とは產業資本家であるのだから、謂ふ所の貨幣資本は、貸附資本を意味する貨幣資本でなくて、產業資本の一態樣としての貨幣資本、即ち、產業資本流通の始點及び終點としての貨幣資本であることは言ふまでもない。其意味での貨幣資本の增加とは、產業資本それ自身の增加に外ならない。資本家Aが資本家Bに機械を賣り、Bから受取つた貨幣をもつて更にBから鐵を買ふといふ理論的設例に於て、Aの買つたものが、Bに於て增加した所の剰余生產物であれば、Bの剰余價値は今や貨幣資本化されたのであつて、剰余價値即ち放下資本以上の價値を代表する貨幣資本であるが故に正にそれは貨幣資本の增加である。單なる回收によつて貨幣資本化された在來資本分に添加された新貨幣資本だからである。同じことはAに就ても云へる。かくして二人の貨幣資本がそれ〴〵に增加し、同樣にまた自余の資本家のそれもみな

增加すれば、社會の全貨幣資本の增加が生ずる。が、産業資本家の資本は、長く貨幣資本形態に止らずして直ちに勞働力及び生産手段に轉化されるのが特徴であつて、今の設例に於ても、Aの新貨幣資本は銑に、Bのそれは機械に形をかへてゐる。これが資本の增投であり、蓄積である。産業資本そのもの丶增加である。ABC等の取引が完了しても、購買手段たる貨幣の量は增してゐぬかも知れぬ。從て全資本家の全産業資本のうちで一定の時に貨幣資本形態をとる部分も亦た增加してゐないかも知れぬ。が、ヨリ多く價値を體現した商品が流通したのだから、貨幣の回轉速度その他が同一なら、購買手段たる貨幣の量も亦た增加し、從て産業資本の貨幣態部分も又た增加してゐるであらう。そして此の增加部分の貨幣が、金鑛業の資本家によつて供給されることは既述の通りである。

一五

全貨幣資本の增加なきが故に資本家的蓄積がないといふ議論が誤つてゐるとすれば、その立場からの立言であるところの、玆での蓄積は資本主義的には無意味だといふことも亦た『無意味』にならなければならぬ。マルクスの理論及び方式に從へば、生産手段を生産する産業と、消費資料を生産する産業との間に既述の如き權衡が保たれる限り、純粹なる資本主義社會即ち勞働者と資本家のみの社會内に於て資本蓄積は故障なく進行することが出來る。そして吾々はマルクスが正しかつたことを見た。

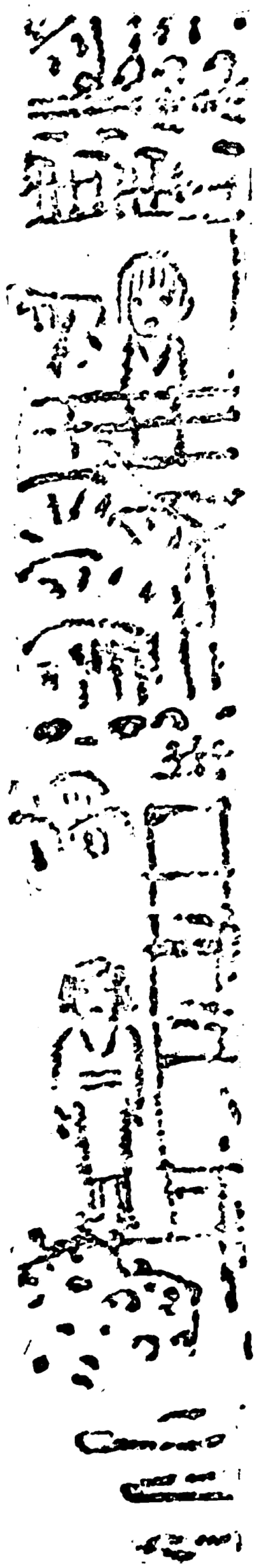
平衡の條件が充たされた場合に生ずる資本の蓄積は、年々放下される不變資本の增加となり、雇傭される勞働者の增加となり、全生産物の增加となり、また剩余生産物の增加となる。即ち『剩余價値の增殖』が行はれるのである。が、マルクスの蓄積理論及び方式は、此の增殖が如何に多くの困難なる事情に條件づけられてゐるかを示す。ローザ、ルクセンブルクが指摘した剩余價値實現上の困難もその一つである『前拂ひ』の爲めに用立てられねばならぬ基金が或は不足するかも知れぬ。追加さるべき貨幣としての金の生産が間に合はぬかも知れぬ。が、しかしその種の困難は理論上資本家的蓄積を『初發の一歩から』不可能ならしめる程の絶對的困難ではない。自余の諸困難と同樣なる部分的相對的困難として作用し、剩余價値の實現を部分的相對的に妨げるものに過ぎない。資本主義はまた常に之等の困難の克服に努めて或る程度まで成功し、成功した限度内に於て——即ち平衡を獲得した範圍内に於て資本の蓄積は行はれる。資本主義が非資本主義的外圍との交易する主要動機は、剩

余價値の單なる實現の爲めではなく、平均以上の高率利潤を獲得せんが爲めである。資本主義にとつての非資本主義的外圍の重要は、剩余價値實現の必須條件としてのそれではなくて、各資本家、各資本主義國が、競爭に於いて滅びざる爲め、優勝する爲めの必須條件としての重要である。

私有財產制度に根ざす競爭は、資本主義的發達の動力であると同時に又た組織に內在する矛盾を展開させる挺子である。マルクスが病苦の爲に完結を見なかつた第二卷第三篇の蓄積理論は、未だ競爭を取入れるだけの階段に進んでゐなかつた。が、剩余價値學說史に於けるそれは直ちに恐慌の理論へと續き、恐慌の理論に於ては既に競爭が最も重要な役目を勤めてゐる。恐慌論に入ると共にマルクスの研究は、矛盾の相の檢討に移る。競爭は、資本構成の高度化と共に利潤率の低下を惹起し、資本家をして賃銀の壓迫を余儀なくさせると同時に『生產擴張の爲めの生產擴張』を余儀なくさせる。かくして生ずる社會の生產力と社會の消費力との矛盾が展開されるのは恐慌に於てである。恐慌は、資本主義の發達と共にます〳〵その範圍を擴大しその影響を深刻ならしめる。資本主義の行詰りとは、かゝる內在矛盾發展の或る階段に現はれる現象に外ならない。それがマルクスの蓄積理論の歸結である。最抽象な階段から次第にヨリ具體的なそれへと進み、平衡の相と矛盾の相とを同時に把握しつゝ進む所の彼の理論の『正當なる歸結』である。私が、第二卷の蓄積理論と第三卷の內在矛盾展開論との間には既にマルクス自身の架けた『橋』があつたのだと言つたのは玆である。マルクスの蓄積理論の志向と性質とを、それが彼の學說の全體系のうち占める位置に即して見究あることをせずに、前を承け後に續く理論的連鎖の只だの一環を切取つて之を『修正』し、それに『正當なる歸結』といふレッテルを貼りつけたのが、ツガン・バラノフスキー乃至は福田博士の『資本主義は行詰らず』論である。その賣れ行きの如何は知らず、僞物は正に僞物である。ローザ・ルクセンブルク及び河上博士は、早くもその僞物であることを見抜かれた。が、その一環が全理論的連鎖の如何なる一環であつたかを見究はめる前に、他の一環乃至は數環と照合しつゝツガンの修正そのものを修正せんとされたが故に却つてツガンの痕跡が殘つて、もはやマルクスのものとは云へぬ蓄積理論が出來上つたのであつた。辨證法的に發展する資本主義は又た辨證法的に行詰らねばならぬ。辨證法的に發展する資本主義は今や、嘗つては自身の發展の動力たりし競爭そのものをさへ否定するに至つた。獨占の、金融資本主義の現階段がそれである。發展の動力としての競爭に代つて、直接な露骨な破壞を手段と

して余命を繋がんとする窮余の競爭が展開されて來た。競爭の舞臺は國際的となり、競爭の主役は個々の資本家ではなくして國家權力に支持された獨占的大資本家團となつた。帝國主義の現代がそれである。至るところに階級鬪爭を極度に尖鋭化する客觀的條件がつくり出されてしまつた。資本の蓄積は、階級的政治的鬪爭を激成することなしにはもはや不可能となつた。資本主義崩壞の過程は機械的な過程でないから、行詰りの理論も亦た辨證法的方法による時にのみ行詰りの現實を說明することが出來る。帝國主義に關して近頃書かれたものの中で最も纒つた論文であつた『帝國主義と無產階級』（『大原社會問題研究雜誌』）に於て細川嘉六氏は、一面に於ては河上氏の行詰り論を容れ、理論的には非資本主義的外圍の消滅と共に何時かは必然に行詰る筈なのであるが、現實には其れに先立つて既に行詰つてゐるとし、行詰りの現はれとしての帝國主義の諸相を說かれてゐる。が、私から見れば、其の謂はゆる現實の行詰りこそは、マルクスの內在矛盾展開崩壞論そのものゝ論理的歸結を體現するものである。現實を說明し得ずして而も理論と稱せられてゐる不可思議なものを打破する爲めにマルクスほどに力鬪したものは余りなかつたのである。

附言。與へられた紙數を思ひの外早く盡してしまつた爲めに、後半の理論を十分に展開し得なかつたことを遺憾とする。尙ほ、"Unter den Banner des Marxismus" の第一號及び第二號に、第三インタナショナルの若き理論家ブハーリンの論文 "Imperialismus und die Akkumulation"（帝國主義と蓄積）が載つてゐる。私は本稿の締切が迫つてから其の事を知り、嘉治隆一氏の厚意によつて同論文を一讀することが出來た。文字通りの卒讀であつたとはいへ、少なからず得る所があつた。まことにブリヽアントな、そして極めて啓發的な論文である。本稿に於て扱つた問題に興味を有たれる諸士の必讀をすゝめたい。



勞働協約と法律

末弘嚴太郎

はしがき

社會局の「勞働組合法案」第十二條に「勞働組合ガ雇傭條件ニ關シ雇傭者又ハ雇傭者團體ト契約(勞働協約)ヲ爲シタル場合ニ於テ協約ノ條項ニ違反スル雇傭者及組合員間ノ雇傭契約ハ其ノ違反スル部分ニ限リ無效トス、無效ナル部分ハ協約ノ條項ヲ以テ之ニ代フ」なる規定が設けられて居ることに關聯して、最近勞働協約法に關する事柄が屢々各方面に於て論議の題目となるに至つた。

歐米諸國に於ける勞働協約の事實及び其の經濟的意義に關しては、既に古くから福田博士を初め其他の經濟學者が相當詳細なる紹介と説明とを與へて居る(福田德三氏「勞働權勞働全收權及勞働協約」改訂經濟學考證一〇五頁以下、同氏

「勞働協約一斑」「獨逸に於ける勞働協約」「英國に於ける勞働協約」續經濟學研究四一四頁以下四三一頁以下四四一頁以下、同氏「賃銀協約の新趨勢」「勞働契約より勞働協約へ」等改定經濟學研究坤九一八頁以下九三一頁以下、關一氏「集合協約」「工業政策下卷四八五頁以下」。法律學者の中にも故石坂博士等夙に法律的見地から此の問題を論究したる人亦決して稀れではない（石坂音四郎氏「賃率契約」民法研究第一卷四四七頁以下、岡村司氏民法と社會主義二四一頁以下）。併し、此等諸學者の對象として論じたる所は、主として歐米諸國に於ける勞働協約及び之に關する法律論であつた關係上所論自ら吾國の現實を離れて架空の感を與へ易く未だ多く一般の注意を惹くものがなかつた。

然るに、世界大戰を機として吾國にも亦現實の問題として激烈なる勞働運動が擡頭してより此方、勞働爭議の頻發、勞働組合の發達に伴つて、勞資の間に集團的取引團體的交渉の行はるゝ風習漸く事實的現象として現はれ、學者の見て以て勞働協約となし、又は少くとも勞働協約の原生體と認むべきものが少からず發生するに至つた。勿論、其の社會的乃至經濟的効果は未だ微々たるものであり、從つて其の法律的効果が裁判所の問題として爭はるゝが如き事例はまだ實際上發生しないけれども、經濟社會現下の情勢より推せば、近き將來に於て此の種の法律問題を生ずるに至るべきこと必ずしも之を豫測するに難くない。是れ恐らく社會局當局者が勞働組合法制定に際して勞働協約に關する一箇の條項を其の中に插入せむと企てた所以であらう。

歐洲に於いても、勞働協約の現象が主として英國にのみ止まりたる限り、專ら學者の注目を惹いたものは其の社會的效果であり經濟的意義であつた。而して其の實際的效力は主として勞資相互間の均勢關係による社會的制裁によつて事實上支持されて居たに過ぎないから、國家が立法により裁判によつて此の現象を整理し又は之に法律效力を與ふべきや否やは多く問題とならなかつた。現に英國勞働組合法第四條は、勞働協約は夫れ自身何等「不法」にあらざれども、

而かも裁判所は之が直接履行又は其の違反を理由とする損害賠償の訴を受理すべからざる者を規定し、此等の事項は勞資相互間又は組合員相互間の經營問題として内部的に處理せらるべきものとして一般に考へられて居る。立法論として之に法律的效果を與ふべしとする提案も從來必ずしもないではなかつたが（Webb, Industrial Democracy, p. 534 の記載參照）、之に關する法律論は同國に於ては殆ど之を發見することが出來ない。

反之、佛蘭西に於ては社會現象としての勞働協約は其の發達遙に英國のそれに遲れたるに拘らず、其の法律的效力が裁判所の問題となり又法律學者の論題となつたことは反つて其の例甚だ多く（佛蘭西の判例については D. Raynaud, Le contrat collectif en france, 2e edit. 1921, pp. 149 參照）、終に一九一九年三月二十五日の法律を以て之に關する特別の法律が設けらるゝに至つたのである。又之を獨逸について見るも社會的事實としての勞働協約は反つて英國に後れたるに拘らず、それが法律問題となり又法律學者の研究題目となつたことは遙かに其例多く、現に吾々は之に關する世界的名著として Sinzheimer の Der Korporative Arbeitsnormenvertrag, 1. Bd 1907, 2. Bd 1908 及び Ein arbeitstarifgesetz. Die Idee der sozialen Selbstbestimmung in Recht. 1916 の二著を擧げることが出來るの外、一九一八年十二月二十三日以降同國の制定した勞働協約に關する諸法令及び一九二一年四月に發表された勞働協約法案の如き法律的見地より見て甚だ注目に値するものありと云ふことが出來る。

かくの如く、勞働協約が獨佛等の法律學者により法律問題として特に其の研究對象にされたことは、自ら吾國に於ても此の問題が法律學者注目の對象となるの形勢を馴致し、先きには平野義太郎氏が法學協會雜誌々上に於て「勞働協約に關する獨逸の立法」を紹介したるあり（同誌第四十卷第一號及び第四十一卷六號）、近くは又安井英二氏が社會政策時報誌上に於て「勞働協約の研究」を發表し（同誌第五十一號以下連載）、頓て「勞働協約結論」の大著を公刊して本制度

に對する法學的研究に多大の貢献を爲したることは、實際的立場からしても學術的見地から見ても大に喜ばしきことゝ言はねばならない。

勞働協約は資本主義經濟組織の生み出した社會自然の產物である。從つて、それは經濟學者の研究對象として多大の興味を提供するものなること素より云ふを俟たないけれども、國家が立法上又は司法上之に向つて如何なる態度をとるべきかは正に法律學者の研究に値すべき問題である。吾々は佛蘭西、獨逸を初め瑞西、墺太利、勞農露國等の諸國が之に關して色々の立法を爲し、法學者亦之に關して樣々の立法的乃至解釋的の意見を述べて居ることに鑑みつゝ、吾々も亦吾國に於ける此の問題の解決に向つて法學者の立場から出來得る限りの貢献を爲さねばならない。

私は頓ては本問題の全般に向つて論究を進めたいと考へて居る。しかし、先づ出發點が極めて大切である。國家が立法上司法上此の問題に對して如何なる態度をとるべきかの問題と實質的內容的に論議するに先立つて、勞働協約なる社會的產物と國家的法律との關係を硏究し、以て國家の之に對する態度を決定するについての根本的考察を試みることが是非とも必要である。而して本論は實に其の目的を以て書かれたものである。

一

現代經濟組織の下に於ては、生產の二要素たる資本及び勞働は二種の別個の人格者によつて保有せられ、而して其の結合提携の關係を形成するものは「勞働契約」である。而かも、「勞働契約」の賣買其他財產取引に關する契約と同樣主として契約自由の原則に放任されて居る結果、契約內容は自由契約の名の下に實は資本家によつてのみ專橫的に決定せられ、個々の勞働者は唯々諾々之を受け入るゝの外如何ともし難い立場に置かれて居る。勿論、今日の勞働供給關係は

大體に於て集團的大量的現象として現はれて居る。從つて個々の資本家が個々の勞働者と一々勞働條件を協定することは事實上不可能である。勞資結合の關係及び諸條件は必然標準化し規範化すべき狀況にあるのであつて、個々の資本家乃至勞働者は之を如何ともすることが出來ないのである。然るに、從來此の標準化されたる勞働條件の內容は主として資本の立場のみから定められ、賃金の如き勞働時間の如き――本來から謂へば勞働者の生活需要を參酌して定められて然るべき事柄であるにも拘らず――すべて唯資本側の立場のみから、即ち所謂「產業」の利害のみを顧慮して定められて居り、其の結果或は勞働者及び其の家族の爲めに人間らしき生活をすら保障し得ないやうな勞働條件が定められ、又或は勞働者に對し自己の自由意志を以て任意に受けつけた勞働條件であると云ふ感じを與へ得ない結果、やゝともすれば彼等の間に絕えざる不平乃至怠業的氣分を釀成し勝ちであり、惹いては同盟罷業其他勞資爭鬪の紛擾を喚び起す原因となり勝ちである。

かくの如く、勞働條件が標準化し規範化したるに拘らず、其の內容が獨り資本側の利害のみから專權的に決定せらるゝことに因つて生ずる弊害は、一には工場法其他國家の勞働者保護法に依つて之を減少せしめることが出來る。けれども、現在の如く事實上主として資本家的勢力によつて支持されて居る政府及び議會は到底滿足なる勞働者保護法を制定し得る筈がない。又假りに出來るとしても、國家の法律によつて與へ得る所のものは畢竟一律的標準に過ぎない、而して一律的に與へらるゝ所のものは結局すべてに通用し得べき最大公約數的のもの、即ち最小限度のものでなければならない。國法を以て最低賃銀率を定めるとしても、現に米國の二三州に於て行はれつゝあるが如き――すべての產業に通ずる最低賃金額を例へば一週何弗と云ふが如く法定する――所謂均一式最低賃銀法に於ては其の規定する法定金額は結局極めて低額とならざるを得ない。之によつて到底各種の產業各種の地方に於ける勞資双方を充分に滿足させるこ

とは出來ない。又次に國法を以て勞働時間を——例へば、最長八時間と云ふが如くに——きめるとしても、現に佛蘭西の八時間勞働法に於て爲しつゝあるが如く、其の細かい實施方法に至ると之を關係勞資兩方面の意見をきいて適當に工夫するの外途がないのである。從つて個々の地方個々の產業又個々の企業にそれ〲適應し得べき勞働條件の規範を定めるが爲めには、國家的法律によるよりは寧ろ直接利害關係を有する勞資兩當事者をして之を個々的に協議決定せしめる方が遙かに適當であつて、勞働協約制度の經濟的意義中重要なるものゝ一は實に此點に存在するのである。

勿論、勞働者と資本家とが完全に平等なる立場に立ちつゝ右の如き協定をなすことは、勞働者の團結從つて其の社會的實力が充分發達して最早資本家側の專權的命令を許さゞるが如き程度に至つて初めて可能である。其の程度に至るまでの間は資本家は力めて長く其の專權的命令の實權を保持せむが爲めに、或は勞働者の團結を妨げ、或は勞働者側の團體交涉の申込を拒絕する等各種の手段を用ふるであらう。而して其の結果、勞資の間には同盟罷業其他爭鬪的狀態を生じ實力鬪爭の手段によつて勞働條件の決定を行ふに至るのである。

しかし、かくの如く實力鬪爭によつて集團的に勞働條件を決定する現象は、既に或る意味に於て勞資兩當事者が平等的に對立し取引して居ることを意味するものである。而して、此の鬪爭の結果爭議解決の條件として從來の勞働條件に變更を加へ又は將來に向つて新しき勞働規範を設定約定するが如きは、恰も國際間の紛議が戰爭によつて解決せられ、而して解決の爲め講和の條約を締結すると全く同一の現象であつて、かくの如き爭議解決の協定は既に或る意味に於ける勞働協約であり、又は少くとも勞働協約の原生體と認むべきものである。

かくの如く、勞働者の集團的實力の發展は必然に資本家から其の專權的命令の立場を奪つて漸次に勞資を平等の關係に立たせるに至る。而かも資本家の此の自然的傾向に對する反抗は必然に勞働爭議を釀成する原因となるのである。所

が鬪爭は畢竟精力の浪費を意味する。勞働者にとつては勞働を貨幣化するの機會を失ふ所以であり、資本家にとつては其の資本の利用を失ふ所以であり、社會全般にとつては又其の生產を失ふ所以である。此故に、實力鬪爭の外他に執るべき途全く存在せざる場合は格別、成るべく相互の平和的交涉によつて問題を解決せむと希望するに至ることは、資本家にとつても又勞働者にとつても蓋し當然の傾向なりと謂はねばならない。殊に勞働者の集團的實力が事實上增大して資本家と對抗し得べきものとなるとき、資本家が强ひて此の勢に反抗して常時爭鬪の不安を味はんよりは、寧ろ平素平和の際勞働者團體と協定して彼等の間を支配すべき勞働規範を定め、以て少くとも協約の効力續く限り安んじて間斷なく一定の對價を以て勞働を買ひとり得べき途を講ずる方が遙に賢明であると考ふるに至るのは極めて自然であつて、勞働協約の風習は實に主としてかくの如き情勢によつて發生し發達するのである。而して、勞働協約の社會的意義の中心をなすものは實に此點である。

二

勞働協約の社會的意義は略かくの如きものである。然らば國家は社會自然の產物たるこの協約に對して果して如何なる態度を執るべきであらうか。

この問題を考ふるに付て先づ第一に考究を要するのは、社會と法律との乖離なる事實及び之が救治方法である。國家の制定したる成文法及び主として之れに準據して爲さるゝ國家の司法並に行政的行動は必ずしも常に社會の進化に伴はず其の需要に副はざるものである。殊に社會變遷の急激なる場合に於て國家行動の上に現はれたる法律は屢々甚しく社會進化の後に取り殘さるゝものである。勿論斯くの如くにして生ずる社會と國家的法律との乖離は國家の立法及び司

法的行動に依つて始めて之れを取り除かねばならぬものであるが、同時に學者も亦一方に於て乖離事實を指摘發見すると共に他方或は之が救治方策を具體的に提示し或は國家の救治的努力に向つて指導原理を與へ以て之が救治に助力せねばならぬこと素より言ふを俟たない。

しかしながら、この種の救治的努力は實際上立法乃至司法機關の上に現はれたる政治的乃至階級的勢力の偏在に依つて屢々其の成功を妨げられる。現に我國の帝國議會の如く又政府の如く殆んど資本家的勢力の下に立つて居る諸機關に對し、眞に勞働者の立場を顧慮したゞ公正の立法を望むことは殆んど不可能に近い。此故に、立法によつて此種の救治を行はむと欲するものは先づ必ず立法機關夫れ自身の改造を企てねばならない

しかし、私が今玆に社會と國家的法律との乖離に付て特に指摘し特に攻究を要すと信ずる點は右の外尙別に存在する。其の一は、從來の法律學及び法律學者を支配して居る理論及び概念が、新しき社會の現象に對して最早甚しく妥當を缺くに至つて居るにも拘らず、自ら悟らずして恰もこれを永久不變の眞理なるが如くに誤信する結果、單に其の理論に適合せず又概念に當嵌らざるの故を以て、新社會の新現象が故なく正しき法律的取扱を拒まれて居るといふ事實である。而してこの種の古き理論並に概念の再審を行ひ、これを新らしき社會の需要に適合すべく改造することは正に社會革新の爲めに貢獻すべき法律學者の任務でなければならない。殊に、當面の問題たる勞働協約の法律的取扱を妥當ならしむるに付いて、從來一般に法律學者を支配した古き幾多の理論と概念とが少かざらる妨害を與へて居る事實を考へて見ると、此點に於て法律學者の成し遂ぐべき仕事は尙大に殘されて居るものと言はねばならない。

次に又社會と法律との不調和問題に關して考慮すべきは、法律は如何に完全に立案されて居らうとも結局一律的であらねばならぬと云ふ事實である。個々の社會的需要は如何に法律が完全なる場合に於ても、必ずしも總て顧慮せらるゝ

ものではない。從つてこれが爲めに生ずる社會的不都合は、法律の性質上如何ともすること能はざるものであつて、國家の內部に於ける各種社會の特殊需要に應ずべき適當の規範を制定するに付て、若しも國家が其の規範制定を獨り自己の手にのみ收め、國民に向つて法律的規範を與へ得るものは獨り國家あるのみにして、其れ以外我々を拘束するものは唯我々の自由意思に基く契約あるのみであるとする從來の法律思想政治思想に捉はるゝ限り、個々の小社會に於ける特殊の需要は到底これを適當に滿足せしめ規律することが出來ないのである。國家並に其の法律は唯其の性質上乃至實力上爲し得ることのみを爲し得るのであつて、其の力の及ばざる所は寧ろこれを他の力に一任すべきである。然らずして濫りに其の力の及ばざる所のものまでをも自ら規律せんとするときは反つて法律の無力を暴露し國家の信用を失墜するものと言はねばならない。而して此點は勞働協約の社會的性質を研究し、且之に向つて國家の與ふべき法律的取扱を考究するに付いて、最も考慮を要すべき事柄であつて、從來の法律學者が一般に法律はすべて國家の制定又は少くとも其の認許委任によつてのみ成立し得べしと考へて居るものゝ如きは、勞働協同の性質を誤解し、從つて之に與ふべき法律取扱を不當ならしむる最大の原因をなして居るものと言はねばならない。私は此點に於ても勞働協約法の研究上法律學者の特に努力を要すべきもの少からざるを痛感するものである。

三

凡そ社會の存立し得るが爲めには必ず其處に法あることを必要とする。法なき社會は到底これを想像することが出來ない。併し其の法は、從來稍ともすれば法律學者に依つて說かれつゝあるが如く、必ずしも國家の制定に依り若くは國家の裁可乃至委任に依つてのみ成り立つものではない。

先づ第一に、社會はすべて自ら自らの社會的規範を作り出す。即ち社會は常に自治的立法の機能を有するものである。勿論其の立法機能は國家が立法する場合の如く、必ずしも常に形式的立法の手續に依つて爲さるゝものではない。或る場合には民間多年の慣行に基き、或る場合には社會構成員相互の協定により、而して又或る場合には其の社會に於て實力を有する者の專權的命令に依つて規範の成立を來すものである。例へば一工場內に於ける職工の遵守すべき從業規則の如き、其れは明かに工場社會に於ける規範であり法律である。而して其の成立の過程を見ると、或場合には特に形式的に規則の制定を爲したることもなく、從つて又文書にも成つて居らず、唯慣行上一定の事柄が當該工場の從業規則として職工を規律して居ることがある。又或場合には現在多數の工場に於て行はれつゝあるが如く、工場主一方的に從業規則を定め、これを以て專權的に職工を規律して居ることもある。併し又一歩進んでは、或は一應職工側の意見を聽いて制定せらるゝこともあり、更に進んでは勞資相互の協定に依つて規則の成立を見る場合もある。併しながら其の規則成立の原因如何に關係なく、其れが工場社會の規則であり法律であることはすべての場合に通じて毫も疑はないのである。

更に他の例を引くならば、同業者相互間を規律する規範が同業者間の慣行乃至協定に依つて成立することがあり、又は何人か彼等の間に於ける有力者の命令に依りて規則の成立を見ることがある。而して其の同じことは一村落又は一町內の自治的規則の成立についても全然同樣に之を見得るのであつて、これ等は總て社會自らが自治的に自らの規範を定むる現象である。

而して第二に注目すべきは、この社會自らの作りたる社會的規範が社會自らの力に依つて強行力を有ち實際上施行せらるゝといふ事實である。工場內の從業規則が實際上職工に對して行はるゝ所以のものは、屢々法律學者に依りて說か

れつゝあるが如く、職工これを遵守すべきことを雇入契約に際して約束したるが爲めではない。彼が斯くの如き約束を爲したると否とに拘らず、又其の規則の存在乃至內容を知りたると否とに拘らず、苟くも工場の一員となりたる以上、當然に規範の下に立つのであり、而してこれに違背するときは規則所定の制裁が工場社會の權力者に依つて當然に加へらるゝのであつて、それが或場合には罰金刑となつて現はれ、或る場合には又解雇刑となつて現はるゝのである。後に述ぶるが如く、國家が斯くの如き規則を是認し若くは裁可するや否やは、自ら其の影響としてこの種の規範其れ自身を消滅せしめ若くは變化せしむる結果を惹起することはあるとしても、規範の存在する限り、規範其れ自身は敢て國家的法律及び裁判所其の他國家機關の助力を俟つことなく、社會自らの力によつて自治的に社會に實施せらるゝのである。

同じことは、これを同業者間の規範に付いてもこれを發見することが出來る。彼等の間に於ける規範が組合員中或者に依つて侵犯せられたる場合に於て、同業者は彼等の間に存在する權力に依りて自らこれに制裁を加へるであらう。而して其の制裁は或は違約罰となつて現はれ又或は除名刑となつて現はれる。而して其の制裁を强制的に實施することは國家の裁判所がこれに向つて何等の援助を與へざる場合と雖も、尙事實上行はれ得るのであつて、社會的規範は社會其れ自身の權力に依つて社會的に實施せらるゝのである。

尙又この同じ現象は村落町內の自治的社會的規範に付いても同樣にこれを認め得るのであつて、國家が其の規範の遵行に對して援助を與ふるや否やに關係なく、規範は其れ自身社會の力に依つて自治的に實施せらるゝのであつて、我々は村八分其の他各地村落等に於て行はるゝ私刑に付いて容易く此の事例を見ることが出來るのである。

これを要するに、社會は總て自ら自治的に其の規範を制定する機能を有するものである。而して其の規範は又社會的の力に依つて自治的に實施せらるゝものである。而して社會は兎も角も之によつて規範附けられ規律立てらるゝのであ

つて斯の如き社會的規範の自治的成立及び其の社會的效用は何人もこれを否定することが出來ない筈の事柄である。

四

然らば斯くの如き社會的規範に對して國家は如何なる態度を執るべきであるか。其の態度を想像してこれを區別するに、略之れを次ぎの三者とすることが出來る。

第一は、國家的見地より觀察して積極的に其の規範の消滅乃至變更を圖る場合である。例へば不當なる村八分を行ひたる者に對し、刑罰乃至損害賠償の義務を課して、斯くの如き私刑及びこれに依りて支持せらるゝ規範を消滅せしめんと圖るが如き、又現に改正工場法施行令に依りて企圖せられつゝあるが如く、從業規則に對し國家官廳に變更命令の權を與へんとするが如き即ち其の例である。

第二に、國家は社會的規範を國家的見地より整理し典型化してこれを國家規範の下に置き、以てこれを國家的に利用せんとする場合がある。即ち工場内に於ける從業規則其れ自身の働きはこれを認めるけれども、或は必ずこれを書面に認めて工場内に掲示すべきことを命じ、或は規則の中に定むべき事項を法律に依りて一定し、又或は規則制定に付いて取るべき手續を法律に依りて一定し、これに依つて工場社會内の個々の事柄は國家必ずしも其の内容にまで立入つて自らこれを定めないけれども、尙其れを國家法に依つて規律し其の成立並に内容を國家的に整頓せんとするが如き即ちこの例である。

更に第三の、國家的態度は、上記の如く特に何等積極的なる行動を執るにあらず、唯社會的規範の施行に付いて國家機關特に裁判所の援助が求められたる場合に於てこれに向つて助力を與ふることである。例へば訴訟上當事者の一方が

社會的規範の一たる慣習法を援用して自己の主張を貫徹せんと圖る場合の如き、國家は或場合には其の慣習法の效力に向つて國家的司法的助力を與へるであらう。又或場合にはこれを拒否するであらう。而して如何なる場合にこれを許與し、如何なる場合にこれを拒否すべきかに付いて例へば我國現行法は「公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セザル慣習ハ法令ノ規定ニ依リテ認メタルモノ及ビ法令ニ規定ナキ事項ニ關スルモノニ限リ法律ト同一ノ效力ヲ有ス」（法例第二條）との規定を設けて居る。而して學者は一般にこれを說明して、本規の存在する結果本規定の要件を備ふる限りに於て慣習法は即ち國家的法律となるのであると言ふて居る。併しながら、慣習の結果社會的に生れた法律は、國家がこれを是認すると否とに拘らず、社會的には尙常に社會的規範でなければならない。法例第二條の要件を備ふるの故を以て、社會的規範たる慣習法夫れ自身が化して國家的法律となると說くが如きは甚しき誤りである。裁判所は結局慣習に依つて成立した社會規範其れ自身の效力を認めて、これに國家的援助を與ふるや否やを決するのである。適用せらるゝものは即ち國家的法律にあらずして、社會的規範たる慣習法である。而して法例第二條は實に、如何なる慣習に對しては國家的援助を與へ、これに「法律ト同一の效力」を認めて裁判を爲すべきかを定めた國家的法律に外ならないのである。

即ち、社會的規範たる慣習法は、その內容が法例第二條の標準に該當するや否や、從つて裁判所に依つて「法律ト同一ノ效力」を與へられて裁判の基礎に採用せらるゝや否やに關係なく、其れ自身社會的權力に依つて支持されながら社會的に實施せられ得るのである。勿論裁判所が法例第二條に該當せざるものとして「法律ト同一ノ效力」を與へざる慣習法は、或は裁判所の斯くの如き態度の影響として消滅し去るかも知れない。併し理論上慣習法は常に社會的規範であつて、其の「社會的效力」は法例第二條に依つて與へらるゝ所謂「法律ト同一ノ效力」即ち其の「法律的效力」とは全然別個のものと考ふべきものである。即ち社會的效力は其れ社會自身の自治的權力に依りて支持せらるゝ效力であり、これ

に反して法律的效力と云ふものは國家も亦其の規範の强行に對して援助を與へることになつて居るといふ意味に外ならない。而してこの區別を明かにすることは社會的規範と國家的法律乃至裁判所との關係を正確に理解するに付いて絕對的に必要である。

然るに、現在法律學者間の通說は全然この點の區別を明かにして居ない。而して現行法上慣習法に對して裁判所のとるべき態度如何については兎も角法例第二條の規定があるけれども、其れ以外の原因に基く社會的規範に對して裁判所のとるべき態度如何に付ては全く何等特別の規定が設けられて居ない。其結果解釋上次の如き疑問が起り得るのである例へば從業規則違反の故を以て工場主職工に制裁を課し、而かも其の制裁の實現を自己の力のみに依つて爲し遂げ得ざりし結果、裁判所に對し其の援助を求めたる場合の如き、これを如實に觀察すれば、慣習法なる社會的規範に基いて國家的援助が求められて居る場合と性質上全然同一の事件として觀察せらねばならぬものがある。國家は同じく從業規則の定むる所が「公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セサル」や否や、又「法令ノ規定ニ依リテ認メタルモノ」若くは「法令ニ規定ナキ事項ニ關スルモノ」なるや否やを標準として、これに「法律ト同一ノ效力」を與ふるや否やを決すべきこと、尙法例第二條を以て慣習法に臨むのと略同樣の態度をとらねばならない。然るに從來法律學者の多數はこの考方を認めない。從業規則が職工を拘束する所以は飽くまでも職工が雇入に際してこれを遵守すべきことを約したるが爲めであると說明する。即ち何所までも契約理論に依つて規則の法律的拘束力を說明せんとするのである。併しながらこの考方に依るときは、規則が勞働者を法律的に拘束するや否やを定むるに付いて、常に勞働者が勞働契約の締結に際し從業規則の內容を知り且つこれを遵守すべきことを承諾したるや否やを明かにせねばならない、其の結果其の知不知乃至承諾したりや否やといふが如き本來立證困難なる事由に依りて法律的效力が左右せらるゝことゝなる。又契約を基礎として規則の法

律的效力を說明せんとするときは、一旦勞働者が雇入れられたる後に於て規則の變更を爲さんとするが如き場合には、理論上一々個々の勞働者の同意を得なければならないことゝなるのであつて、同意を得ずして爲されたる變更には何等法律上の效力なきことゝならねばならない。而かも現在工場の實際に付いてこれを考ふるに、斯くの如き個々的承諾を得ることは事實上不可能であり、假りに可能であるとしても其れは決して契約の合理的基礎たり得べき自由意志に依つて爲さるゝことなく、承諾の名の下に實は强制が行はるゝの結果とならざるを得ないのである。

要するに、契約理論に依り個々の勞働者の承諾を基礎として從業規則の法律的效力を說明せんとするが如きは、結局事實に遠ざかつた無理な說明を試みるにあらざれば、到底其の目的を達することが出來ないのである。而かも尙通說がこの無理を敢てする所以のものは、從業規則の社會的規範としての社會的效力を正しく理解せず、從つて其れと國家的法律乃至裁判所との關係を正しく理解せざるが爲めである。而して又國學的法律の外人々を拘束するものは唯契約あるのみなりとする傳統的思想に捉はれて居る爲めである。學者にして若しも先きに慣習法と法例第二條との關係に付て述べた所を正しく理解するならば、同じく社會的規範たる從業規則の社會的效力及びこれに對する國家的法律並に裁判所の態度に付ても同樣に正しき理解が得らるべき筈であり、さうして上記契約說の如き無理を侵すことなしに事態を正確に說明し得べき筈である。

此點は私の夙に法學協會雜誌第四十一卷第六號「從業規則の法律的性質」中に於て詳說した所であつて、本文を讀まるゝ方々は併せて同論文をも一讀せられたことを切望する次第である。

五

勞働協約も亦社會的規範である。關係資本家並に勞働者のすべてを羈束すべき社會的規範である。從來既に規範化して居り、さうして事實上資本家のみの立場から專横的に內容を定められた勞働條件——即ち勞働雇傭の社會的規範——が勞資双方の協議により相互の任意協定によつて定めらるゝに至つたもの、それが即ち勞働協約である

而して勞働協約も亦其他一般の社會的規範と同樣、社會自らの制定する所であり、又社會自らの力によつて實施せらるゝものである。即ち、其の社會的效力は國家が其の法律によつて之に裁可乃至援助を與ふると否とに關係なく、勞資相互の相對的實力關係によつて支持されるものである。元來當事者が協約を締結するに至つた理由は之によつて同盟罷業其他無用なる爭闘を避けむとするにある。從つて、例へば假りに資本家協約に違反せむと欲しても、それによつて惹起せらるべき勞働者の反抗を恐るゝが爲め、自ら違反行爲を差控えて協約を遵守するに至ること、尙國際條約の效力が戰爭に對する恐怖によつて支持せらるゝと同一である。

然らば、かくの如き社會的効力を有する勞働協約に對し、國家は果して如何なる態度をとるべきであるか?

此點に付いて、第一に想像せらるゝ態度は、勞働協約に對して法律的効力を認めず、從つて其の施行について國家の援助を求めらるゝも全然之を與へざるのみならず、協約夫れ自身を以て不法なる集團的行動と看做し、個人の自由を害するものとなし、以て積極的に之を禁止妨害せむとする態度であつて、例へば協約の履行を强制する手段として勞働者が同盟罷業を爲したるが如き場合に一概に不法なる集團的行動として之を罰せむとするが如き即ちそれである。現に獨逸帝國裁判所が勞働協約を以て同國營業條例 Gewerbeordnung 第百五十二條及び第百五十三條所定の不法團結 Koalition に該當すと判決したるが如き(一九〇三年四月三十日判決 R. G. St. 36. 236; 一九一〇年一月二十日判決 R. G. Z. 73, 92ff.)、略此種の態度なりと云ふことが出來る。而して此種の態度は、資本家が勞働者の團結を妨害せむとするに

際し國家も亦之に向つて助力を與ふることを辭せざるが如き時代に於て、裁判所の容易くとり得べき態度である。けれども、其の不當なること素より謂ふを俟たないのであつて、以下の敍說に於ても勿論之を考慮の外に置きたいと考へる。

　次に、想像せられ得る國家の態度は、勞働協約の成立及び實施をすべて社會に一任して、何等の妨害を爲さゞるは勿論、何等の國家的援助をも與へざる態度であつて、現に英國々家のとれる態度は即ち是れである。一八七一年の英國勞働組合法第四條は勞働協約は夫れ自身毫も不法ではない、併し其の直接履行又は之が違反を理由とする損害賠償は裁判所に向つて之を訴求し得べからざる者を規定して居る。蓋し勞働協約の如きは性質上關係當事者相互間の實力關係によつて社會的に其の實施を保護せらるべきものである。國家は到底超越的なる第三者的實力を以て公正且衡平に協約の實施を保護することは出來ない。して見れば、國家濫りに干涉して而かも充分なる實施保障を與へ得ざるよりは、寧ろ初めより萬事の解決を當事者相互の自重自制と實力交涉の關係とに一任して何等の國家的干涉を與へない方が賢明である。殊に、英國に於けるが如く勞働組合の組織堅固にして其の實力能く資本家に抵抗し得べき狀態の下に於ては、國家が立法的にも又司法的にも何等かの干涉を加へ保護を與へむとするが如きは、獨り無用たるのみならず反て有害である。是れ現行英國法が此點について嚴正中立の不干涉態度をとつて居る所以であり、而してかくの如きは實に英國にして初めて是認し得べき態度である。

　之と異なつて勞働組合の實力未だ充分に資本家に拮抗し得べき程度に至らざる國に於ては、勞資双方共其の相互的實力的制裁によつて協約の實施を保障することが出來ない。從つて國家は屢々其の實施に關して援助を求めらるるのである。例へば佛蘭西の裁判所は第二十世紀の初頭以來屢々勞働協約の實施について國家的援助を求められ、協約の法律的効力について解答を與へねばならぬ立場に立たせられた。而かも、此點について何等特別の法律なく從つて從來一般の

民法々規並に法理によつて問題を解決せねばならなかつた裁判所は、稍ともすれば從來の個人的利益の保護を主眼とした契約法の理論に捉はれて、事態の特質に適應した妥當な解決を與へることが出來ず、自ら解釋上幾多の困難な問題に逢着した。此故に同國に於ては一九一九年三月二十五日の法律を以て勞働協約法を制定したけれども、其際立法者の主として考へたのは、從來裁判所が裁判上事態に適合した妥當な解決を與へ得なかつた點を改むる爲め新しき裁判規範を制定することであつた。勿論、其外別に社會制度としての勞働協約そのものを法律的に規律立てることも多少之を試みては居るもの丶、其の主眼とする所が協約の法律的效力に關する裁判規範の制定にあることは明かに佛蘭西勞働協約法の特色である。

之に反し、獨逸一九一八年十二月二十三日の勞働協約令は無論其中に勞働協約に關する訴訟を妥當に裁判し得る爲めの裁判所規範をも規定しては居るもの丶、同時に「一般拘束力の宣言」Allgemein verbindlichkeitserklärung なる制度を國家の力によつて協約の效力を協約當事者以外のものにまで推し及ぼさしめ、以て其の社會規範としての效力夫れ自身を創設擴張することゝ計つて居る。殊に一九二一年四月を以て發表された勞働協約法案の如き、社會制度としての協約夫れ自身を法律によつて國家的に整理せむとする傾向を更に一層顯著に表はして居る。

以上を通觀すると、吾々は勞働協約に對する國家の態度として略次の四種を想像することが出來る。

第一　獨り何等の國家的援助を與へざるのみならず、寧ろ之を不法視して禁止するの態度をとるもの

第二　全然放任的態度をとつて何等の國家的援助を與へず又干渉制限をも與へざるもの

第三　勞働協約の強行に付いて裁判所の援助が求めらるべきことを豫期して訴訟を妥當に裁判するに適する裁判規範を設くることを主眼とするもの

第四　裁判規範を設くると同時に社會制度としての勞働協約夫れ自身を國家的に整理し、以て其の社會的効力を創設して國家に利用することを計れるもの

而して、右の中第一の態度は近代的勞資關係の特質に鑑みて素より之を排斥せねばならぬこと既に一言した通りであるが、第二以下何れの態度を妥當とすべきかは、各國に於ける勞働組合の發達程度其他特殊の事情に應じて定まるべき事柄であつて、一概に其の是非を論定することは出來ない。

六

かくの如く、國家は其の適當と信ずる所に從つて、立法上司法上勞働協約に對して各種の態度をとることが出來る。しかしながら、此際飽くまでも注意せねばならないのは協約夫れ自身の有する社會的効力と國家が之に向つて與ふる法律的効力との區別である。既に一言したるが如く、現に英國法に於ては勞働協約に對して放任的の態度をとつて居る結果として、協約は國家によつて法律的効力を少しも與へられて居ないけれども、自ら協約關係者相互間の社會的制裁によつて完全に其の社會的効力を保障されて居る。而して此種の事例を考へて見れば、協約の社會的効力と法律的効力との全然區別せらるべきものなること毫も疑ひを容るゝ餘地はない筈である。

然るに、法律學者は一般に此點を誤解して居る、即ち彼等の中の或る者は勞働協約の本體を解して契約なりと云ふ。さうして其の社會的効力を契約理論によつて説明せむとするのみならず、法律的効力も亦同じく契約法理を以て説明しやうとする。成程、協約の法律的效力を説明するについて契約法理を採用せむとするは必ずしも全然不當ではない。何故なれば、協約に因つて生ずるものは社會的規範としての法であるとしても、發生原因たる協約は――個人主義的契約

法に於ける「契約」ではないとしても——ともかく一種の契約である。從つて、私法上「契約」取消の原因事由たるべき詐欺强迫が勞働協約の締結に際して行はれて居るやうな場合には、裁判所は同樣の理論によつて協約の效力を否定して差支ないであらう。けれども、勞働協約が社會上關係者の間に行はれて居るのは、決して契約夫れ自身として行はれて居るのではない。勞働條件の內容が資本家一方の專權的命令によつて決定されて居る場合なると、勞資相互の協定によつて決定されて居る場合なるとを問はず、要するにそれは規範化せられ社會的規範として社會的に行はれて居るのであつて、規範化されて居る勞働條件が自ら規範としての社會的效力を有する點は、前後場合を異にするによつて何等異なるべき筈はないのである。殊に、勞働協約の社會的效力は——特に現在獨逸に於て法律上行はれつゝあるが如き「一般的拘束力の宣言」Allgemeingültigkeitserklärung を俟たずと雖も——決して嚴格なる意味に於ける契約當事者の間にのみ止まるべきものではない。協約當事者たる勞働者並に資本家が一單位の勞働市場に於ける大勢を支配し得べき優勢のものなるときは、彼等のみの協約によつて決定した勞働規範が自ら當該勞働市場の全體を支配するのである。而して、何故に勞働協約がかくの如き社會上一般拘束的效力を有するかは到底契約理論を以て之を說明することは出來ないのである。要するに、勞働協約の效力を契約理論によつて說明せむとする人々は、第一根本に於て社會的效力と法律的效力とを區別することを知らず、而して其の法律的效力は契約理論によつて說明するを一見尤も妥當とするが爲め、其の社會的效力も亦契約によつて之を說明せむとするものであつて、觀察の根本に於て既に許し難き誤謬を犯して居るものと云はねばならぬ。

所が更に第二の學者は、右と反對に勞働協約の本質を解して法律なりとするに拘らず、同じく社會的規範と法律的規範との區別すべき所以を知らず又協約の社會的效力と法律的效力との差異を悟らざるが爲め、協約の法律たる所以を說

明するに付いても多くは其の根據を國家的裁可乃至認許に求めやうとする。即ち、國家が特に勞働協約法を制定し、國家的法律の一部としての勞働協約を制定することを關係當事者の相互協定に委任して居るが故に、それだけを根據とし勞て働協約が法律となるのであると說明するのである。是れ恰も、從業規則の本體を解して法律なりとする學者の多數が、其の法律なりとする根據を國家的裁可乃至認許に求め、從つて從業規則に關して國法上何等の規定なき間は契約說を通說とするに拘らず、一度國法上從業規則に關して何等かの規定が出來ると忽ち法律說をとる學者が多數を占める――それは實際獨逸に於て起つた學說の變化過程である――のと、全く其軌を一にするものと謂はねばならぬ。

乍併、勞働協約が社會的規範としての法律であるか否かは之を社會的に獨立して觀察決定すべき事項であつて、國家的法律たる勞働協約法の制定されたりや否やによつて何等の影響を受くべき事柄ではない。國家的法律としての勞働協約法は單に、或は協約の實施に付いて國家の援助及求められたる場合に於て國家――裁判所――のとるべき態度を規定したものに過ぎない、又或は一步進むで國家が協約制度を整理せむとする努力を規定したものに過ぎない。而して國家が如何に命令し又如何なる態度をとるかは、毫も協約夫れ自身の社會的本質を變動せしむるものではない。本來法律的性質を有するものは國家が之を如何に取扱はうとも常に法律でなければならぬ。而して、國家が本來法律たるものを取扱ふに當つては、反つて必然に之を法律として取扱ふことを强制されるのであつて、國家が本質上法律たるものに向つて立法上契約としての取扱を與へるならば、それは正しく背理なりと云はねばならぬ。

此點は、私が先きに從業規則の法律的性質を論ずるに際して最も力說した事柄であるが（上記「從業規則の法律的性質」參照）、同じく社會的に既に法律的性質を有する勞働協約に對し國家裁判所のとるべき態度も亦同じく飽くまでも之を社會的「法律」として取扱ふことであらねばならぬ。而して國家が勞働協約法を設

けて協約の效力及び其の有效要件を法律的に規定したとしても、それは只國家は如何なる條件のもとに協約の實施に對して援助を與ふべきかを國家的に定めただけのことであつて、其の國家的法律と協約夫れ自身の社會的法律たることゝは全然別個の事項として兩立すべき事柄であることを特に重ねて力説する必要がある。

七

然らば、現在吾國の如く何等特別の勞働協約法なき場合に於て、若しも勞働協約の效力が裁判所の問題となつたならば、裁判所は果して如何なる法理を以て其の取扱を決すべきであらうか？

恐らくは吾國の通説も亦、獨逸のそれと同樣、全く之を一個の債權的契約として觀察し、契約法理によつて之を取扱はむとするに違ひない。現に岡村博士（前掲書二六六頁）、石坂博士（前掲書四四七頁以下）の如きは素より、安井氏（前掲書一五一頁以下）の如き新しき學者までもすべて一樣に其の論者であるやうに思はれる。乍併、勞働協約が社會上既に勞働規範としての社會的效力を有することを認むる以上、未だ國家的法律としての勞働協約法が制定せられざるの故を以て、何故に法律上之を契約として取扱はねばならない理由があるのであるか？　勿論勞働協約に基く勞働規範は協約を以て發生原因とするが故に、其の發生過程の法律的批判に際して契約理論を參酌すべきこと素より當然であつて、假令勞動協約法が制定された後に於ても毫も此理に變動を生ずる筈はないのである。乍併、苟も協約の結果發生して居る社會的拘束力が勞働的にあらずして既に規範化して居る以上、之が取扱に當つては必然規範として法律として之を觀察することが必要である。而してそれは勞働協約法の制定なき以前と雖も何等理を異にすべき筈がないのである。

吾國の現行法は先にも一言したるが如く、社會的規範としての慣習法に對して國家が如何なる法律的取扱を與ふべき

かの根本原則として、法例第二條の規定を設けて居る。しかし、若しも假りに同規定がないと想像して、其の場合裁判所は慣習法に向て如何なる取扱を與ふべきであらうか？　恐らくは、――今日最早殆ど存在せざる一二の制定法萬能論者を除くの外――一般の學者は尙之に向つて法律としての取扱を與へやうとするのであらう。それならば、慣習に出つて發生した社會的規範に向つては法律としての取扱を與ふるに拘らず、協約によつて發生した社會的規範に向つてはその同じ取扱を與へない理由が何所に存在するのであるか？　勿論後者については規範發生の原因たる協約夫れ自身の成立過程を法律的に探究し批判することが許されねばならぬ。しかし、それは恰も現に存在すと主張せらるゝ慣習法の效力が爭はるゝに際し、それが果して慣習によつて發生し又現に社會的規範として存在するや否やが探究せらるゝと同一であつて、一度其の批判探究が終つた上に於て、之を法律とし規範として取扱はねばならぬことは毫も協約に因る法律なると慣習に出る法律なるとに依つて異なるべき筈がないのである。

果して然らば、現行法上勞働協約に與へらるゝべき法律的取扱は次の如くであらねばならぬ。

第一　協約が眞に適法なる過程によつて有效に成立したりや否やの點につきては一般契約の成立に關する法理を適用すべきこと

第二　愈々協約の存在及び內容が確定したならば、約法例第二條と同樣の標準によつて之に「法律ト同一ノ效力」を認むるや否やを決すべきである。

而して此の標準によつて法律的效力が認められた以上、例へば勞働協約の定めに違背する個々の勞働協約は、吾が勞働組合法案第十二條の如く又瑞西債務法第百二十三條、佛蘭西勞働協約法第三十一條(レ)、獨逸勞働協約令第一條等の如く、特に之を「無効」とする者の規定なしと雖も、單なる債務不履行として取扱はるべきにあらずして、「法律ト同一ノ

効力」を有する强行的社會規範に違反するものとして之を無効とすべきであると考へる。諸外國の勞働協約法に於て特に此の趣旨の規定を設けるに至つた理由は、勞働協約によつて勞働規範が協約を以て其の成立原因とするが爲め、其點にのみ注意を奪はれて協約の規範的効力までをも亦すべて契約理論によつて判斷されねばならぬと考へ、從つて特別の明文無き限り勞働協約も又債權契約の一種として之が違反行爲は債務不履行として損害賠償の原因となるに過ぎない、然るに協約の効力を其の性質に適合した方法で充分に保護するが爲めには、更に一歩進んで協約違反の勞働契約は法律上當然無効なるものとし、而して其の無効となりたる部分は當然協約の規定によつて補充せらるゝものとせねばならない。しかしそれにはどうしても特に其の趣旨を規定した法規を必要とすると考へたからである。けれども、此等の立法はすべて協約規範の社會的規範としての效力は其の成立原因たる協約の契約的効力を決定するによつてのみ決定せらるべきであるとする獨斷から出發して居る。成程、協約規範は關係當事者の協議決定から出發して存在するに至つたものである。從つて其の協議決定の過程に於て何等か重大なる瑕疵があるならば裁判所は之を理由として協約規範の効力を否定することが出來るであらう。しかし、それは規範成立の原因に瑕疵あるが故に、規範そのもの有効に存立することを否認することが出來、又否認せねばならぬと云ふまでのことである。それが爲め、一度成立した協約規範が社會的規範として社會的に法律的性質を有することまでをも否認し、有効に成立した勞働協約でも其の効力は終始契約的であつて法律的ではないと主張すべき理由は少しも存在しないのである。然るに、以上の諸立法はすべて此の誤解の上に立脚するが故に、特に如上の規定を設くるの必要ありと考へたのである。而して學者も亦かゝる特別の規定なき限り、勞働協約はすべて唯債權的効力を有するのみであり、從つて之が違反行爲は單に債務不履行となるに過ぎない、協約違反の契約を無効とすることは出來ないと說くのである。

吾が社會局勞働組合法案第十二條も亦正しく此種の見解から出發するものであつて、正しき法律的見解よりすれば特に明文を設くるまでもなき自明の事項を規定したに過ぎない、と私は考へるのである。從つて假りに同規定が勞働組合法案中から取除かれたとしても、將來勞働協約の法律的効力が裁判所の問題となつたならば、現行法によつて全然同規定と同一の主旨に之を判斷解釋すべきものである、と私は主張するのである。何となれば、例へば强行法たる慣習法に違反する行爲は法例第二條の適用を受くる結果として無効となり、其の無効となつた部分は慣習法の規定によつて補充されねばならぬ、之と全く同様に、社會的規範としての勞働協約中强行法規たる性質を有する條項に違反する個々の勞働契約は當然無効となり、其の無効となつた部分は協約の條項によつて補充せらるべきでありと解釋するのが事の性質上最も自然であり又妥當だからである。

八

勞働協約の社會的性質及び國家の立法上司法上之れに對して執らねばならない態度の如何は以上說述の如くである。從つて、國家が勞働協約に關する立法を試みるに當つては、以上說述の諸點を充分に考慮して、其の自ら立法せんとする目的が主として如何なる點に存するかを正確に考ふると同時に、其の國に於ける勞資勢力關係の實際を具體的に觀察して如何なる立法的態度が最も時宜に適するかを決定せねばならない。

翻つて社會局勞働組合法案第十二條を見ると、其の目的とする所は僅かに協約に違反する勞働契約の法律的効力如何に關して一個の裁判規範を設定せんとするものたるに過ぎない。而してこれだけのことであれば、上記私の解釋論を以てすれば、特に斯くの如き明文なしと雖も容易に同一の結論を導き出すことが出來るのであつて、同條の設定は僅かに

現在の通説たる契約説を抑へるだけの働きを爲すものたるに過ぎないのである。

勿論、現在我國の如く未だ社會事實として勞働協約が充分發達せざる國に於ては、其れ以上特に詳細なる規定を設けて、協約を國家的に指導し利用する施設を豫め爲し置く必要は實際上存在しないのであらう。從つて私は勞働組合法案第十二條が現に獨逸の勞働協約法案中に規定せられつゝあるが如き諸種の事項に付て何等詳細の定めをして居ないことを少しも不當だとは思はない。それよりも、若しも立法者が勞資關係の協約化を以て勞資双方の當事者及び國家産業の利益の爲めに結局有利であると云ふ考へをもつて居るならば、寧ろ今日尚未だ資本家の勢力强大にして勞働規範の協約化を妨げつゝある彼等の態度に對し、何等か適當の制限を加へて資本家の專制より轉じて協約の時代をもち來たすべく立法上の努力をすることが更に一層必要であると考へる。

從つて、法律學者の勞働協約法に關する議論も、單なる抽象的學術的研究としてならば兎も角、又單なる外國の立法例乃至學説の紹介を爲すに過ぎざるものとしてならば格別、苟も我國現在の時弊を救濟するが爲めに法律家の立場から何等貢獻したいと思ふのであれば、現在我國の實情に照しつゝ今日勞働協約に關して何等かの立法を爲すとせば、如何なる態度を執ることが最も妥當であるかに付いて具體的なる攻究を試みることが甚だ必要であると考へるのである。

本稿は未だ必ずしも其の具體的考察を充分に表現したものではない。寧ろ主として其の前提として法律學者の必然考へねばならない根本問題を考へて見たのである。私は、此の小稿が本問題の學術的研究に對し又實際的取扱の發展に對して多少とも貢獻することが出來るならば甚だ幸ひであると考へて居る。(終)

蠻族來寇

アンリ・バルビユツス

本誌の讀者諸君と現下の重大な問題について時を定めて共に物語る機會を得られるやうになつて以來、私はその度ごとに現時の數かぎりない出來事の中から、特に世界的歷史的な重要さを有つて、且直接に日本の思想界にとつて興味深しと思はれるもののみを擇んで、之に論評を加へ來つたのであつた。

さて今日ここに取扱はうとするところの事實は、日本人諸君に於てもすでに十分知悉して居られるところのものと思ふ。だが私をして云はしむれば、この事實の齎すところの重大な結果は、他のあらゆる事實にもまして注意せざるべからざるものである。かく言ふところのものは千にも餘れあたふかぎりの世界の富のうへに加へられたアメリカ人の組織的差押へである。かうした掠奪の粗野狂暴をきはめた性質に思ひ到るとき、吾人は只「來寇」の文字を用ゆるよりほかに途はない。又北米合衆國の支配階級の有する心理性情を想ひ見るとき、吾人は「蠻族」の文字のみよく之に該當する

ことを思はざるを得ないのである。

　人口二千萬、然して今日正にその活動と繁榮の點よりみて實に驚倒すべきほどな最高頂に達してゐる強大た北米合衆國は、現代のあらゆる強大國に於て見られるのと同じやうに、否それらの場合よりももつと極端に實業家工業家等の手によつて左右されてゐるのである。しかもこれらの業は力をあはせて歐洲その他の將來の天地をして自らの植民地化せんとすることに努力しつゝあるのである。

　かうしたアメリカの全權政策の侵略、全世界に散在するあらゆる事業、あらゆる自然の富を一手に把握せんとすることの傾向は、すでに長いあひだヨォロッパに於てもひとつの明白な事實として認められ、避けがたい一個の災厄として認められたところのものであつた。だが悲しいかなわがヨォロッパに於ける輿論なるものは、物を理解するにあたつてその性至つて疎懶、しかも自らの名聲とならざるごとき事實（かうした事實の續出こそは、歴史的に老巧した國々にとつて何れも免れ得ない悲運の兆といはれやう）の追及吟味にあたつては至つて冷淡であるといふこの二つの點からして、かうして目下現出を見んとしつつある北米合衆國の經濟的征服のことに關しても、ただ至つて皮相な解釋のみしか下してはゐない始末である。

　しかも一方アメリカのブルジョワジイが如何に野蠻にして如何に大膽不敵な所業を敢てしつつあるかに關しては、覺るところ更に少ないといはなければならないのである。

　然しそこには實に種々明白な事實が存在してゐる。そして吾人はいつか一度は認めざるを得ざるの日に立到るのである。例へばかのイタリアの場合の如きこれである。世人は久しいあひだあのファシストの連中の行つた狂暴無比な蛮虐さのうへに目を閉ぢてゐたのであつた。あのファシスムなる一種官許の警察が、警察力と公權力とを妥協共謀してゐる

のをいことにして、何等の制裁をも受けることなくイタリア全土に亘つて犯したところのあの無法極まる所業の數々について、吾人は最初殆んど之を意に介せずに打ち過ぎて來たのだつた。然るに一朝ひとつの事件、その性質に於てはそれまで犯されて來た無數の犯行と何等異るところのないあのマテオッチ議員暗殺の件が勃發するや、たちまちにしてそれまでの輿論の沈默は破られ、思はずも世人をして「黒襯衣黨」の怖るべき組織に戰慄させたのであつた。

之と等しく、アメリカに於て起つた一事實は、現下實際上に於て世界の覇者たるアメリカ人の考へ方について、まさに晴天の霹靂ともいふべきほどな一つの事實をばヨオロッパ全土に知らしむるに至つたのであつた。それはあのデイトンに於ける訴訟事件である。これこそは實に吾人をしてあの中世時代にまで逆轉したるかを疑はしめたところの事實であつた。この訴訟事件たるや讀者諸君もすでに熟知して居られることと思ふが、それは今日まで實に久しい年のあひだあらゆる文明國の大學及高等學校等に於て教へられて來つた科學上の學說、即ちかのダアヰンの學說を、ある一人の教師が學生に教へたといふことに源を發して、忽ちにして公權力の發動となりその教師は訴追さるるに至つたのだつた。碩學ダアヰンの罪、從つてその生物學說を說明した教師の罪といふのは、その說くところが聖書のなかに說かれた天地創造の事實と背馳するものであるといふところに起因するのだつた。創生記のなかにあつては、神は種々の異つた種類の動物を一時に創り出されたものであると明記されてある。すなはち鳥と魚とは第五日目に、その他の動物はその翌日に創られたことになつてゐるのだつた。

然るに十九世紀に至つてダアヰンは、しかもそれまでに於ける種々の科學的發見の基礎のうへに立つて、諸種の生物は無限の時代に亘つての數多い變化、及び環境にたいする適合の必要からして、互に一は他を生んで今日に至つたものであると說いたのだつた。

アメリカ人士は、科學が此のごとく聖書に反する學說を流布することは、とりもなほさず許すべからざる破廉恥行爲を犯すものであると斷じた。しかもかくの如き說をなすところの人士はしかも當代有數の政治家中になほ且之を發見したのであつた。たとへば後に至つて歿したけれどかの民主黨の首領ブライアン氏のごときもその一人であつて、氏はこの「十字軍」の旗頭をさへつとめてゐたのだつた。かうした科學反對の鬪人どもはしかも輿論を巧に籠絡し得て、遂にデイトンの裁判所は舊約聖書による天地創造以外のことを敎へたことを理由として問題の敎師スコープス氏を有罪と宣告したのであつた。

かかる重大な論議を惹起すべき運動が、この一事實のみに留らなかつたことはたしかに合理的であつたといはれやう。成程あらゆることについて一樣に聖書ばかりを參考にして考へて行かなければならないことになると、凡ての科學學說は青少年子弟には敎ふべからざるものとなつて來る。すなはちあらゆる科學上の學說は、かの信者達によつて一般にモーゼがつくつたものと考へられてゐるあの聖典中の單純幼稚な說にたいして、かなり直接に衝突する點をもつてゐるからのことである。從つて問題はずつと擴大されてきた。そして、內閣書記官のロレン・エス・ウイトナアなるものは嘗て米國洲議會によつて可決され、聖書に反するあらゆる敎育を禁止する旨を規定した法律を採用して、科學の授業をワシントン州の學校の授業目錄より削除されるべく、數多い一味徒黨とともにキヤムペインをはじめたのであつた。物理、科學、博物、それに哲學的思想の說明、論議は勿論のこと、一言にして云へばあらゆる思想の考察探究は若きアメリカの子弟の智囊中から除外せざるべからずといふのだつた。

しかも右は單に理想的な所論たるのみにとどまらずして、すでに合衆國の六州の支配階級者等はこの點に關してその意見の一致を見てゐるのである。

此の如く國家をして公式にその國民を無智たらしめる教育をこころみさせようといふ動議の提案が、事實アメリカ合衆國に於て目下有力なる地位を占め、或は嘗て占めたりし政治家たちによつて爲されてゐるといふことに思ひ到つたとき、人はまさに夢に夢見る心地がすることであらう。しかもなほ一層怪訝の念に耐へざることは、かうした科學の追放が、他の諸國に比して少くもその規模の點より見て遙かに手びろく科學上の進歩、物理學や機械學の方面に於ける發明を利用すること多かつたアメリカに於て爲されたといふ點であつて、その無自覺と拔くべからざる暗愚さとは只々驚くの外はないのである。

然しこのことは吾人に對して、現實は常々吾人が想像してゐるところのものに較べてずつと違つたものであり、ずつと奇怪なものであるといふことを教へてくれるものである。アメリカの支配階級（私が斯く云ふ所以のものは、吾人はアメリカ國民全體と、彼等を導き、公式に彼等を代表してゐる寡頭政治の輩とを混同してはならないと考へてゐるからである）は、一方に於て此のごとく世界全部に亙つてその自然の富を吸收し、且例へばかのドイツ全部について行ひまた世界の至るところに於て部分的に行ひ來つてゐるやうに、幾多の廣大な諸國民の活動力をそのまま自己の利益のために轉じさせるといふやうな、實に强大か、又實に貪婪な所業をやつてのけてゐながら――しかも他方に於て、世界到るところにその巨大なる足を踏みしめてゐるこの近代的巨人は、全然原始の野人にみるごとき固陋蒙昧な考へ方をしてゐるのである。若しもこのことにして正眞正銘の事實でなかつたとしたならば、定めし茶番ぐらゐにも取扱はれかねまじきかうした奇怪な醜態は果しく何れから起つて來たのであらう。これが由つて來るところは、すなはちアメリカがまつたく資本主義と成金との極度までに押進められた國であつていまやその意味に於ける完全な一典型を示してゐるところにある。

世界各國の經濟統計を攻究するとき、吾人はアメリカ國民がその物質上に於ける壓倒的優越力に於て遙かに他の國民を凌駕してゐるのに驚嘆禁じ得ざるものがあらう。アメリカ合衆國の富は殆んどそれだけを以つてして、地上に散在する他のあらゆる富の半を占めてゐるのである。

アメリカに於ける自然の富、アメリカに於ける集約的事業などは、麥、燕麥、綿絲、石炭に關し、信じ得られざるほどな貯藏量をアメリカ人に保證したのだつた。アメリカに於ける一の自働車の商標は、それのみをもつてして、世界の他の商標を有するあらゆる自働車の總和に比するも、更に三倍するほどな自働車數を動かしてゐるのであつた。

この偉大な富豪たるアメリカ人、何人にも負ふところなく、却つて世界の他の各國がすべて負債を負はされてゐるところのアメリカ人は、かくして絶えず驚くほどの增加の速度をもつてして、その收入の資源、黄金集中の事業の開發に日も夜も足らぬ有樣なのである。再び言はう、彼等はその力に於てもその食慾に於ても、まさしく現代資本主義を代表してゐるところのものである。

悲しむべきは彼等がただそれ以外には何物をも代表してゐないことである。當るに敵なき弗の女王たるアメリカのブルジョワジイは、ただ單に器械的進歩に伴ひ、自働的に改良されて行く一つの機械に過ぎないのであつて、その中には智性德性の片鱗をさへ留めてはゐないのである。それは大きさや數字をもつて量り得る狂暴な力ではあるけれど、思索するところの力ではないのである。惟ふに運命は、この新らしき大陸を執り來つて、金權政治の面妖にして憎むべき戯畫を示してゐるのではあるまいか。

あらゆる人間としての活動のうちに於て、その動物的生活、若くは機械的生活から發するところのものを除き、その他の活動に於てはアメリカ人に實に不十分平凡の極みを暴露して、如何にも慘めな狀態を呈示してゐる。

先づアメリカが生んだ藝術家のうちにあつて、獨創性に富んだものの數が如何にも少ないことを痛感せずには居られない。彼等の藝術的な考へ方、彼等の想像力の如何にも生硬幼稚なことを思はずには居られない。藝術的意味より云つてアメリカ合衆國が吾人に示すところのものは、如何にも子供染みた劇作あるひは活動寫眞にたいするところの一般民衆の禮讃、然らずんば百萬長者の館にあつて金力にまかせて他國から買ひ求めた傑作の蒐集、それでなければスポーツ、拳闘にたいする熱狂ぐらひなところである。

吾人はいまも適切な一例によつて、アメリカ人の宗教的感情なるものが如何に偏狹にして陰險なるか、如何に狂熱的であると共に同時に固陋なものであるかといふことを知つた。

不幸にしてかの一般にはアングロ・サクソンが自負し、特にアメリカ人が自負するところの所謂自由主義、所謂デモクラシイの精神なるものを執り來つて考へるとき、吾人は之と同樣の感を禁じ得ない。これらの觀念は彼等の中に於て何等の偉大さをも、また何等の眞正な智慧の閃きをも藏してはゐないのである。彼等は事實、既成の秩序にたいして密接且執拗に結びつけられてゐる。彼等こそは虐げられつゝある階級擁護を叫んで立つ人々にとつて、最も頑強なる、最も狂暴なる、最も無謀なる、最も執拗なる敵である。他の如何なる國を執り來つて考へてみても、革命家、若くは只單に思想上に於て果敢な論議をなすゆゑをもつて然う考へられてゐる人々にたいして、この國ほどに殘酷な虐待を試みてゐるところの國はないのである。かのクー・クルックス・クラン（K・K・K）のごとく強力にして粗暴な團體によつて代表せられてゐるアメリカのファシスムは、國家の手による驅致によつて手もなく保守團體・反民衆團體に編入されたあの歐洲大戰の古兵や、又は警察官などと一緒になつて、只管その忠誠を競ふといつた有樣なのである。

アメリカ國民の雄辯なる諸種の宣言、彼等の政治家のうちの最も代表的なものの幾人かが折々國際的會合に來て讀み

あげるところのものは、實は只一片の辭令に過ぎないのであつて、彼等のうちの何人も、それを實際に適用してみやうなどと考へてもゐないのである。一九一四年の大戰、彼等にとつて驚くべき未曾有の機會を與へ、彼等をして最も大きな、否殆んど獨占的な利得者たらしめたあの大戰の後に於て、彼等は平和會議に向つて一個の人物、すなはち大統領ウイルソンを送り來つたのであつた。ウイルソンはその堂々たる主義を提げてヨーロッパの諸國をば烟に卷き去つたのであつた。すなはち彼は、諸國の政府はその國民の下僕(しもべ)でなければならぬ、そして國民をして政府の下僕たらしめてはならぬと云ひ、一般のための利益は凡ゆる國家的利益を排除するものでなければならぬ、とまで云つたのではなかつたか。然るにそのウイルソン氏が自ら進んで爲した戰後の事業を此處にとり來つて考へてみるとき、彼は果して何をなしたか。只徒らに十四ケ條の提案の堂々たる理想を振かざしながら、實は世界を愚にしてゐたものとも考へられるし、若し然らずとすれば彼自身も自らが如何なる言(げん)を爲してゐるかを理解してゐなかつたものとも考へられやう。

アメリカ人はまた國際交通の關係に關しても、自らが非常に寛濶自由な考へかたを持つてゐることを自負してゐる。安んぞ知らん、その門を訪れる外國人にたいし、この國民ほど亂暴にその國境を固め、無數の制限を敢てして徒らに外國人をして困惑せしめるところのものはない。これらの點に關しても、なほその他の諸點、例へば特に目下世界の人々の間に物笑ひとなりつつあるあの無謀のかぎり滑稽のかぎりをつくした禁酒法案の喜劇のごときも、アメリカ人自らがその口に說くところと行爲にあらはすところとを全く矛盾撞著せしめて、しかも毫も怪まないでゐることを端的に物語つてゐるではないか。これ恐らくは單に所謂アメリカ人の道德無視より生じたものではないであらう。むしろアメリカ人に於ける理性の欠缺より生れ來つたところのものと考へるのが至當ではあるまいか。

かうした現今のアメリカ人の姿は、不幸にして決して誇張したところのものではないのである。吾人は敢て豫言者た

らずとも、時の經過に從つて事實は明かにこの點に關して吾人を教へてくれることを信じる。そしてアメリカの獨裁者流は今後現下の狀勢に押流されて行くままに、不義不法による征服をもつて信條とし、あらゆる非理非道の方法を用ひて諸國民の要求、しかも先づ第一には彼等黄金黨と同一視すべからざるアメリカの國民自體の要求にたいしてまでも、戰を宣するであらうこと、火を睹るよりも明かである。

○

目下アメリカ合衆國によつて示されてゐる狀態は、今日二千億の民衆の眼前に提出された社會的政治的問題の經濟的歸結、その如何にも特徴ある形勢をまざまざと描き出してゐるものと見ることが出來やう。

科學の應用がこころみられてまつたく幻術的な變化をみせてゐる現代の世界にあつては、すべての事が實に急速に進んで行つてゐる。現代の人々のその手のうちにあつて實に電光石火のごとき神速さを以て增加しつつあらゆる種類の武器は、往昔にあつては實に遲々として殆んど見る目にもそれと分らなかつたやうな進化をば、いまは驚くほど速かに、目に見えて發展させて行つてゐるのである。

このことからして果して過去數十年のあひだにあつて、イギリスの世界的覇權を明かに奪得し來つたアメリカの優越性、黄金と鋼鐵とその全盛が、確固不拔のものとして永遠性を持ち得るものと考へられるであらうか。

否然らず、それには何等の確實性もなく、また何等の永續性もないのである。なるほど今日までのところに於て、老衰したるヨーロッパの諸國はかの大戰の結果互に反噬してその結果最後の活力までも消盡しつくし、いまは全く恐るべきものなしと見るを妨げない。然しながら古來一つの例外もなく行はれて來た歷史上の宿命觀より考へ來るとき、將來

に於てアメリカがいづれかの新興國の霸權の下に立たざるべからざる日の來るべきことは是亦全く疑ふべからざること上に屬する。××の上に基礎を置かれた資本主義的・帝國主義的勢力は、只××によつてのみ支持さるべきものである。一朝外部よりして同じ種類の××が、しかも生活力に燃え、野心に躍る若き血潮をみなぎらして之に肉迫し來るとき、それは必然的に××し去らざるを得ないのである。

然るに目下の時代に於てなほ問題となるべき他の一の勢力の存在することを見逃してはならぬ。今日世界の區劃は種種の國家によつて行はれ、然して彼等はあるひは武力による征服により、あるひは經濟的手段による征服により（しかもこの兩者たに分離して考ふることの全く不可能なことを思はざるを得ない）絕えず交互に世界の霸權を爭つてゐるところのものである。然るにこの他になほ一つの勢力の存することを忘れてはならない。それは今その形態やうやく成らんとしつつあるところの新らしき一の團體である。

此の如き團體が生るるに至つた理由とするところは、かの「列强」と稱して互にその×××××、之を××することをもつて職とする團體などの存在理由とは全く異つた基礎のうへに打立てられてゐることである。この新らしき團體は人類社會に別個の新らしい××××し、新らしき區別、觀念上に於ける新らしき××、新らしき戰爭の目的を提示し來るところのものなのである。

それは搾取階級にたいし、今日まで搾取され虐げられてゐたあらゆる××××させるところの新らしい一つの××である。すなはちプロレタリア對カピタリスムである。

この團體たるや目下の場合に於て、現に存在する資本主義世界の組織のあひだに位して、まつたく一の實力による組織たる性質を有してゐるものである。かかる組織はロシアを除くの國々にあつては未だ公然のものとはなつてゐない。

ロシアにあつては初めてこの組織はその根を下ろし、來るべき新らしい秩序のためまだ十分の××を得て居らぬ×××のあひだにあつて、先づ能ふかぎりの限度に於て、勞働者と農民との國家、すなはち働くものの國家、民衆のための×××××××やうとこころみたのであつた。

かうした團體は、現在各々の國に分れて權力を擁して立つてゐる主義方策などとは全く反對に、××××××××つづけやうとしつつあるのである。如何となればこの團體の形式自體からして、すでに目下見られるやうな各國間の地理的または商業的國境を眼中××××、×××××××××××××××。××××のものなりとし、かうした××××ればこそ、ただ自己の個人的富を蓄積するに汲々たる支配階級と、一方生産の道具たり、征服の武器たる機械的奴隷的位置に置かれた被抑壓者階級とが、いつも無理やりに一團に結びあはされて、その××××××し切れないでゐるのだと說いてゐるからである。

目下の情勢に鑑るとき、現今人類のあひだに於けるこの二個の大なる流れ、すなはち國家的カピタリスムと民衆的インタナショナリスムとのあひだの鬪爭は、その相互間の力量に於て均等を欠いてゐることを思ふ。あらゆる物質上の×××××、ただロシア一國を除くのほか、すべてカピタリスムの手に握られてゐる。なほその上にカピタリスムは觀念上の武器を無數に貯へてゐて、×××××なほ多數の民衆のうへに巨大な勢力を恣にしてゐるのである。カピタリスムにとつて全くの御用をつとめるところの既成宗教のことは敢て此處に云ふまでもなく、その他になほ幾多の傳統的な觀念が存してゐて、カピタリスムは鳴物入りでこれを囃し立て、一方の人々はその前に出て叩頭三拜するの風習から全く脫しきれない狀態にあるのである。かの民主的理想といひ、愛國的禮讃といひ、これとりもなほさず今もつてその勢を誇つてゐるカピタリスム宣傳のため、二個の思想的樞軸を成してゐるところのものではないか。

然るに此處にもつと手近に寄つて眺むるものが出て來るとき、たとひ表看板だけは××××××××××みせて（かの古代の世界がその××の前日までさうした威力を見せてゐたのと同じやうに）如何にも歴然たる姿を見せてはゐるものの、しかも資本主義による×××××××××××してゐることを認めないではゐられない。事實は何等隱るところなしに、人々を金錢上の事業×××××××××××××が、その實少數者のみの利用するところであつて、自由のためといひ、進歩のためといひ、×××××××××など〻口に唱道してゐるところのごときも、その實は全く之と異つて、要するに黄金を特定の數個の金庫に集中せしめんとするための××××××××××に過ぎないものであることを示してゐるのである。

數學者たらずとも何人も、かの機械の進歩にともなひ、動物社會にあつて彼等相互を鬪はしめてゐるところの法則にもまして更に無殘な兵力による競爭、强者萬能の法則が行はれ、その結果必然的に物資の消費はただ增加の一方をつゞけ、他方戰爭は頻々としてその勃發の數を增して、遂には×××××までをも誘致するであらうこと、を想像するに難くない。

すでにあらゆる强大國にあつては、武裝せる平和と戰爭とのために費消されたる金錢物資は、今や大なる深淵となつて横はり、そのためあらゆる有益な社會的活動は徐々として痲痺狀態に陷らんとする傾向を示してゐる。一方に於て、軍備併びに戰爭の制限または防遏は全く不可能事として考へられてゐるにつけ、他方、學者の發明は必ずや驚天動地の破壞的手段をも案出し來るべく、此を想ひ彼をおもへば人類の全體がいつまでも此の如き戰爭の法則の下、言ひ換ふれば×××××××××××らざること、一片の理性以てよくその間の事理を推することが出來やうと思はれる。幾十億の人々は此の如き××××××××××にたいして、まつたく利益相反したる立場に立つてゐるものである

る。いまはこの幾十億の人々がその生存權について自覺し、また自らが形作る强き力を自覺し、かのインタナショナルの××××××××××××××××××××としてゐるときなのである。

富裕階級の暴虐を考ふるとき、理性と論理とより出發してそこに何うしても××の運命を認めざるべからざるに反して、一方自らに××なる現在の事情の下にありながらなほ凡すでにその輪廓をあらはし初めてゐる×××××××××××、日に日に生長し、日に日にその廣さを增して行くばかりである。かのロシアにあつて半ば實現を見たところのもの（このロシアに於ける社會解放の事業はその發展の中途に於て、全世界の他の部分よりする猛烈なる反對によつて壓迫され、一時中止を見るに至つてゐるが）他の諸國にあつては官憲の力が彼等の所謂「不穩分子」と稱するところのものを壓抑し拘禁して、目下たゞ夢の如くにのみ考へられてゐるところのもの、さうしたものが遂に深くその××××××××××××××××××××られて來たところのものとは全く異つたこの新らしい信條、これこそは××××××上に築かれ、各人の生活の安定と身體の安全に關し、また個人としての自由と發展とに關し必要なる限度に於て凡てを保證するところの×××上に築かれたところのものなのである。かの虐げられたる國民に關する複雜な問題であるとか、ある國民がある領土にたいして有する解決の途なき貪慾とか、かうしたものもこの新らしい萬國的法規の見地より見るときに於ては、すべて間接的でこそあれ、しかも何等××××××××るのである。かゝる萬國的の法規が認むる「外國人」なる觀念は、要するに×××××××たるもののみを指してゐることになるのである。

かるがゆえに、現下の×××××關せず、また多數の人々の生活をかくも無益に徒費せしめつゝある目下の事實にも拘らず、また今日までのあいだ常に心正しき人々がその爲に戰ひ來つてしかも今なほ一般民衆が係縛から免れ得ずにゐる事實にも拘らず、またかのアメリカなる妖怪、及び種々の異つた名稱の下に次々に生れ來つた他のあらゆるモロク神の存在にもかゝはらず、何人にもあれ一度びこれらのことを深く考ふるところあらんか、實に××××××××××の念の湧き來るを禁じ得ざるものがあるのである。

世界思潮の新動向

勞農露國の新思潮の基調

青野季吉

勞農露國は言ふまでもなく世界最初の社會主義國家である。社會主義國家といふ言葉に多少の語弊があれば、勞働者國家と言ひ換へてもよい。とにかく資本主義的經濟から社會主義經濟への過渡的經濟基礎に樹てられた國家である。その意味において勞農露國が示してくれるものは政治、經濟方面にせよ、文化方面にせよ、我々にとつては常に興味ある研究の題目である。

文化方面において勞農露國が創造してゐるものは、最近になつて特に盛んにわが國に紹介されて居り、それはいかにも示唆に富んだものであるが、しかしそれは、例へば國民經濟上の新現象などに比べると、まだまだ明確な形を執つて居らない。隨つて研究の興味ある對象となるのは、寧ろ今後のことゝ言つてよいであらう。

そこへ行くと、基礎的方向であるだけに、國民經濟上の現象は、勞農露國が產業的に安定、發展して來れば來るほど、ますます興味ある問題を提供する。それらの國民經濟上の問題で特に興味あり且つ重要なものは、謂ゆる「社會主義的蓄積」の問題である。我々は、資本家社會の蓄積の法則は、これを知つてゐる。しかし社會主義への移渡の社會における蓄積の法則は、いま勞農露國で實驗の途上にあるもので、人類にとつて始めての經驗である。それは、ひとり經濟研究家の興味の對象であるばかりでなく、無產階級○○の進行上の重大な研究題目であるこれがそういふ性質の問題であるから、それに對する論議研

究が、この二三年來勞農露國の目覺しい現象となつたことは、決して怪しむに足らない。近年の勞農露國でのエキサイティングな問題と言へば、誰でもすぐ、トロツキーズムに對する闘爭を想ひ浮べるが、社會主義的蓄積の法則に關する問題も、やはりトロツキーズムとの闘爭中に、一つの重大な問題として現はれてゐる。序でながら、トロツキー排斥、トロツキーズムの征服を、共産黨内部の單なる勢力爭ひ、權勢慾の醜い爭ひといふ風に片附けてしまつてゐる人が多いが、それは決してそんな單純な、心理的なものではなく、確乎たる客觀的條件の上に現はれた二つの方向であると思ふ。そのことは、社會主義的蓄積に對する兩派の解釋上にも、極めて明確に現はれてゐる。

社會主義的蓄積については色んな人々が論議してゐるやうであるが、別けても總括的に取扱つてゐるのは、ブハリンと共に曩にかの有名な「共産主義のＡＢＣ」を書いたプレオブラヂエンスキーの論文「社會主義的蓄積の根本法則」に答へたブハリンの一文である。いま兩者のそれに對する解釋を見ると、勞農露國が現に踏んでゐる道、それを主潮としての二つの觀念上の方向を、はつきりと掴むことが出來る。

先づ第一に、社會主義的蓄積の基礎條件たる、近代的勞働者による小生産者の搾取といふ問題から見て行かう。

プレオブラヂエンスキーの解釋ではかうである——勞働階級が最上位に居つて小生産者（主として農民）がその下位にゐる。かくて勞農露國の主要二大階級たる勞働階級と農民との關係は搾取關係である。勞働階級が搾取階級で、農民が被搾取階級である。社會主義革命が起つて國家が、資本主義的に遲れた國家であればあるほど、勞働階級の搾取的性質は鮮明となり、したがつて小生産者よりの搾取が大である。

彼のこの見解からすると、社會主義國家における勞働階級と農民との關係は、「搾取關係」なのであるから、したがつて政治上における勞働者と農民との結合はあり得ないと云ふことになるこれはその結合を唯一の政治の基調としてゐる勞農露國にとつて、重大な問題でなければならぬ。

それに對してブハリンは答へてゐる。「社會化された産業は、小生産者から剩餘價値を受取つて、それを蓄積資源とするか？いかにもその通りだ。それに間違ひはない。然らばこれは、一階級から他階級即ち支配階級への、價値の轉位であるか？いかにもその通りだ。疑ひなくそうである。しかし、その場合と資本主義社會の搾取の場合とを、大ざつぱに對比したり比較したりしていゝものかどうか？そして勞働階級を「搾取階級」と

呼んでいゝものかどうか？ 否！ 千度でも否！」

資本家的搾取は一定の生産關係から成つてゐる。資本家階級は剩餘價値を受取り、この剩餘價値の上に生産が樹てられてゐる。全生産過程は常に、この搾取關係を再生産する。しかも常に擴大された規模において再生産する。かくて一階級から他階級への價値の轉位は、不斷に階級對立を增大し、不斷に資本家と賃銀奴隷との關係を再生産する。ところで、社會主義國家における、一階級から他階級への、價値の轉位はいかなる傾向を持つてゐるか？ それは資本主義社會の場合とは、正反對である。都會と田舍、勞働者と農民、社會化された經濟と小ブルヂョア經濟との間の、對立を征服する傾向を持つてゐる。社會化された經濟範圍での蓄積が急速であればあるほど、對立癈棄の速度が急速となる。この過程を搾取過程だといふのは、その歴史的意義を解しない者の言ひ草である。——これがブハリンの解釋である。

この解釋からすると、なるほど社會主義國家の勞働階級は、小生産者(農民)から剩餘價値を受けて——價格の差異、稅金等によつて——それを蓄積するが、その蓄積は結局、搾取を癈棄せんがための蓄積であり、階級の對立を絶滅せんが爲めの蓄積であるから、その蓄積を爲す上においても勞働階級と農民の結合が必要であり、蓄積が進行すればするほど、その結合又は融合は、強くなつてこそ行け、弱くなつたり、切れたりはしないと云ふことになる。

これは勞農露國の現在の政策を理論づけたもので、社會主義國家の蓄積と、階級關係の變化における、極めて興味ある問題である。

現在の勞農露國には、一方に社會化された産業(國有産業)と他方に個人(主として小ブルジョア的)的産業がある。この關係はどう變化するか。これが次の問題である。

トロツキー派の經濟上の理論家と云つてよいプレオブラヂエンスキーの解釋を聞かう。社會化された生産組織と、個人的生産組織とが、一つの國民經濟の組織のなかに併存してゐるが、この兩者は、完全な經濟的平衡を保つて、相互に併立して行くことは出來ない。そのやうな平衡はとうてい恒久的に維持され得るものでない。何となれば、一つの組織は否でも應でも他の組織を自己のうちへ捲込んでしまはざるを得ないからである。そこでこの場合、二つの道しかない。個人生産組織の衰滅か發展かである。とにかくどつちつかずに停止してゐることは出來ない。これがその解釋である。

この理論もまた現在の勞農露國の實際上の政策に偏れて、その不可能を豫斷したものである。即ち現在勞農露國では、一方に國有産業を發展させてゐると同時に、他に小生産の衰滅を防いでゐるからである。若し彼の解釋が正しいとすれば、社會化された産業を代表する勞働階級と、小生産を代表する農民とは、とうてい結合することは出來ぬからである。

これに對してブハリンは、現在勞農露國が採つてゐる政策を擧げて、極めて興味ある解釋を下してゐる。

吾々の執つてゐる道は不可避的に、農業小生産の破壞(併呑)を導くであらうか？　そうは考へられぬ。現在吾々が第一の政策としてゐるもの、吾々の主要前進線は何であるか？　國營商業と協同組合とがそれである。吾々は、現在の農民經濟をソヴィエツト經濟に代へ、現在の農民經濟を破壞することによつて、社會主義的農業經濟に到達しやうとしてゐるのではない。吾々は全く別個の方法で目的地に達するであらう。即ち、農民をして勞働階級と結合した協同組合に誘ひ入れ、經濟的に、國家及びその施設に依存せしめる道によつてである。かくして吾々は流通行程によつて、社會主義に到達するのであつて、生産行程によつて、即時に社會主義に到達するのではない。吾々は協同運動によつて社會主義に到達する。だからこの際、小生産の消滅とか、又は捲込みとかは問題でなく、現在進行してゐることは、農業經濟の生長を基礎としての、その漸次的改良である。

これがブハリンの理論の要點である。

即ち彼によると、ブルジョア權力、資本家銀行、資本家信用機關、資本家組織者、資本家觀念の支配の下における農民大衆の協同組合組織は、不可避に資本主義とならざるを得ないが、無産者獨裁、無産者銀行、無産者信用機關、無産者産業、無産者組織者、無産者觀念の支配の下における農民大衆の協同組合組織は、全然別個の組織へと生長する、といふのである。

茲に注意しておく必要のあることは、プレオブラチエンスキーが、經濟力と政治力とを全然切り離してしまつて、經濟的進行に對する經濟外の强制力を、ほとんど計算に入れてゐないのに對して、ブハリンは寧ろ經濟外の强制力の方に重點をおいてゐる觀方である。吾々は、無産者獨裁の○○的權力を共調として考へる限り、協同組合運動が資本家權力の下におけると同樣な、發展を示さうとは考へることが出來ぬ。そこでブハリンの謂ゆる「全然別個の組織への生長」を期待してよい十分な理由があると思ふ。

以上の問題に關聯して特に重大なのは物價問題である。勞働

者と農民との關係において、物價の高低の演ずる役目は極めて大きく、且つそれは社會主義〇〇の進行の上に、直接の關係を持つてゐる。物價問題が特に近年勞農露國において論議の的となるのは、そのためである。

これについても二つの相反した方向、政策を瞥見しておかう一方の主張によると、社會主義的蓄積は國家獨占の基礎の上に成るものであるから、その特權によつて價格政策を樹てなければならぬ。この場合價格政策は個人産業にたいする租稅政策に外ならない。かくして獨占的價格、即ち高い價格を設けて、小生産者からの剩餘價値の離脱を容易にし、社會主義的蓄積を促進す可きだといふのである。

これに對するブハリンの意見は、過渡期の經濟における物價政策についての、かなりに徹底的なものを含んでゐる。

彼によるとかうである。吾々は不斷に物價の低下を計らなければならぬ、それは生産力の生長、生産の擴張の表現であらう。それはまた前進的運動の一表現であり、吾々の事情においては社會主義への進行の一表現であらう。

第一に、たとへ國營産業の生産物の價格が低下しやうとも、吾々は小ブルジョア經濟から剩餘價値を獲得することが出來る問題はかゝつて、吾々が、保證付の獨占利潤を獲得することで滿足してゐるか、それとも前進してゐるかである。ところで、吾々は物價を引下げない以上、生産力を發展させない以上、迅速に前進することは出來ぬ。

第二に、吾々の摑んでゐる獨占的地位を放棄するのは、吾々として馬鹿げたことに違ひない。しかしこの地位を利用すると同時に、國内市場の吸收力を弱めるやうなことがあつてはならぬ否、それを增大しなければならぬ。これが何より重要な點だ。次に吾々はあらゆる有利な地位を利用して、生産の範圍を擴張し、生産費を低下し、したがつて生産の各連續的な部門において出來るだけ價格を引下げることに努力しなければならぬ。これがブハリンの物價策の方向である。

一方の方向では、小生産者を搾取――物價策によつて――することによつて、社會主義的蓄積を高めることに力點をおくのであるが、他方では、社會主義的蓄積を行ひつゝ同時に、生産部門を擴げていつて、そこから自然と生ずる生産力の高上に力點をおいてゐるのである。一方では社會主義の原始蓄積においては、所謂勞働階級による小生産者の搾取はまぬかれないとして、その事實に立つて物價策を樹てるのであるし、他方では、その事實を肯定しながら、蓄積の進むにつれて物價を引下けてその搾取的事實を廢棄しやうとするのである。

ブハリンも言ふ通り今日の勞農露國は、プロレタリアートが小生産者の剩餘生産物をとつて、蓄積を行つてゐる。しかしこの蓄積と資本家階級が勞働階級から剩餘價値を搾取して行つてゐる蓄積とを、同一法則の下において考へてはならぬと思ふ。

今日の勞農露國の、單に經濟上のみでなく、政治上その他の現象を取扱ふ場合に、それと資本主義社會の類似現象とを對比して、資本主義社會に行はれる、吾々の經驗的法則に照して、それを解釋しやうとする人が餘りに多いやうであるが、それは明らかに間違ひではないかと思ふ。

私は現在の勞農露國における勞働階級と農民との結合に關する、二つの異つた見方を紹介して來た。思ふにこの問題は獨り經濟上の問題ではなくて勞農露國における一切の現象の基調となつてゐるものではないかとさへ思はれるのである。

たとへば文化藝術の方面に見ても、一時の革命的騷擾のなかゝら生れたものは、今日では最早や廢棄せられて、勞働者及び農民の道德的な方面に落着いた眼を開くといつた傾向が強くなつて來てゐるのは、誰でも知つてゐる。しかもその場合、第一の問題となつてゐるのは、この靜かな革命的進行の途上におけるその兩階級の關係の問題である。

かくも勞働者と農民との關係の原則上の問題が、一つの爭論の形となつて現はれて來てゐることについては、それを裏附ける客觀的事情が存することは言ふを俟たない。その客觀的事情とは謂ゆる經濟的封鎖が撤去されてしまひ、資本家國家がこぞつて勞農露國を認め、同時に他方において世界〇〇が遲滯してゐるといふ國際的事情と、急速に經濟的發展があつて、勞働階級と農民との間に新らたな關係が生じつゝある、といふ國際的事情である。この事情を前にして、社會主義〇〇進行の途上における、基本的の二つの階級即ち勞働階級と農民との關係が、一切の思潮の中軸となるのは、極めて自然なことである。

そして幾にも云つた如く、この二大階級の關係の今後の發展こそ、吾々にとつて最大の興味と最大の教訓とを與へるものでなければならぬ。（一一、三）

フランスは方向する

小牧近江

フランスの記憶も大分薄らいだ。その記憶を背景として、そこに浮び上つて來る新らしい傾向を模索して見やうとする。近く手にした二三の書冊やその折をりに目にふれた刊行物の印象を頼りに、一わたり見まわす。これがどれだけうまく切抜けられるか、それは疑問だ。

×

この春頃から超現實主義の話がめつきりやかましくなつて來たやうだ。主唱者がアンドレ・ブルトンや、ルイ・アラゴンだといふから、新ダダのお流れだ。かつて、フイリツプ・スウポーが、こんな定義をダダに與へたことがある。

叡智に未來がある。
ダダに未來がない。
叡智は粹だ。
ダダはダダだ。

（カタローグ　第七號）

超現實主義の正體をはつきりさせるために、N・R・Fでおなじみの評論家アルベール・チボオデは、こともおらうに象を引張つて來た。各國民性と超現實主義者を取扱つて象の著述をさせて見るといふのだ。

イギリス人はアフリカとインドに渡り、數字取り混ぜだらだらの報告書を書くことだらう、むろんホテルの勘定も忘れやしない。ドイツ人は象といふ概念のまはりを彷徨し、フランス人は動物園のカフエへ入りひたつて、おつといはせるやうな記事を書くだらう。さてポオランド人はといふと「象とポオランド問題」を忘れず、ロシア人の研究題材は「象果して存在すべきや」といふ。……

さて、超現實主義者は？といふと、象は存在しない、一切

印象だといふのだ。

ルイ・アラゴンによると、超現實主義者の先驅者は、サン・ポル・ルウ、サン・ジヤン・ペルス、レオン・ポオル・フアルグ（故平戸廉吉君の「神」だつた）等だといふが、スユル・レアリスムの言葉なら、ギヨーム・アポリネールが「チレジアスの乳房」の序文でとくの昔に使つてゐる。

『人間の歩行を模せんとして、人間は「脚」を考へることなくして、むしろ「車輪」に思ひいたつたのだつた。そして、それが計らずも超現實主義を生み出したのだ。』

といふと超現實主義ならクロオデルこそ古い先輩だと出しやばつて來るものがある。種本屋のラルウである。そして、その證據には「東方所觀」こそ立派な代表的作品だといふのだ。

ところが、お株を取られてゐるための腹癒せかどうかそのところ確と聞かなかつたが、超現實主義の作家、畫家廿二名の面々、クロオデルに公開狀をたたきつけたものだ。

「すでに、いはゆる美の概念は行詰りで、ただ存在するものは一つの精神的觀念これである。これ例へば、一個の人間が同時にフランス大使たり、また、詩人たり得ずといふがごとき之である」と。

とにかく、ラヴイニアン街のマクス・ジヤコブ、ギヨーム・アポリネール、アンドレ・サルモンの立體派時代から未來派、ダダイスムをとんとんと飛び越えてグルネル街の超現實主義時代、アラゴン、ブルトン、エリユアール、スポーの御代になつたことは、これも藝術上の新傾向といへば新傾向だらう。

藝術上の新傾向といつたついでに、僕は踊りのジヤン・ボルラン、音樂のエリツク・サチ、セナリオのピカビアの綜合映畫藝術も、デリユツク逝ける淋しいエクラン界に於ける新らしい方向の一つとして指摘したい。

オリンピック以來、スポーツ熱も一つの傾向だ。非波淸治教授、お讀みなさい。ベルニエの「テートドメレ」（さて、日本語で何といつたものかな、運動競技に關しては目に一丁字なき無智蒙昧の甚たる僕は只々恥入る許りである）を。

文學に印象主義を植えつけたといふ外務省畑ジロドウも一方すばらしいスポーツ・マンであるとかいふ。

×

──誰だい今頃ブルジョア禮讃なんて？
──それが、どうした、フランスのブルジョアジイはその叡智に於て、奉國の精神に於て、歴史的功績があるんだ。從て存在の理由があるのだ。

と、大きく出て來たのが、ルネジョアネである。

人生は生れながらにして惡である。そして、この絶望に光あらしむるものは、實力ある强權(王權主義)と指導の力のみである。而して今のフランスにそれがない。フランス人は戰場に於ける士官の立場を忘れてはならない。兵卒は、士官に服從するのではない。兵卒は、士官を選良されたる指導者としてその使命に協力するのである。そして、その協力がフランスの勝利を得た。軍隊に階級のないやうに、フランスに階級がない。凱歌を唱へつつ！　かくしてフランスは行進するのだ。かくて、ジョルジュ●ヴァロアの新經濟論が成立する。

ルネ●ジョアネ、ジョルジュ●ヴァロアはともにジョルジュ●ソレルの門下である。イタリアのファシスチ運動もソレルの影響だといつたイタリアの學者があつた。その名を忘れた。左に行く代りに右に行つた、その結果はかうである。

フランスを不幸にするものは勝利だ。かつて、リシヤアル●ブロックがいつた。「カルナヴアルが死んだ。」この意味は藝術に信仰がなくなつたといふことである。新らしい信仰が創造されることによつて新らしい藝術が生れるといふのである。

ドリユヴ●ラ●ロシエルがいふ。

「フランスの出發點は勝利ではない。戰勝と戰ふことにある」。フランスは右であつてもならない、左であつてもならない。フランスはフランスの尺度を以てフランスを創ることにある。そこに彼の Mesure de La France が生れる Plainte contre inconnu が生れる。

ポオル●モランとドリユヴ●ラ●ロシエルを中產階級の代表作家だと見做すものがある。イギリス風のポオル●モランは國境を撤してのブルジョア生活研究者であり、ドリユヴ●ラ●ロシエルはアメリカ人に蹂躙られたフランスの「フランス論」者だ。

『アナトル●フランスは中產階級の代表大作家だ、變節主義者だ

愛國社會主義者だ』。
といふのが、エドワアル・ベルトだ、フラニエだ、ミカエルだ、ベルニエだ。『クラルテ』のグループである。彼らは何故モスクワが吊電を送つたか疑つてゐる。

『アナトル・フランスは誰か？ それは一個の骸である』と、いふのが、アナ系のアラゴン、ブルトン、デルティユ等の諸君である。彼らはこの「智識」を追悼するため、御ていねいに冊子「骸」を刊行した。

『アクション・フランセイズ』とモスクワの吊電を地下で讀んでアナトル・フランス。

『右や左の旦那さま！』

プロ創作一つや二つ書いたからつて、街頭で演説したからつて左傾、左傾とはいふまい。

×

エドワアル・ベルトはソレルの高弟だ。ソレルがレエニンを認めたところから、同じ門下のジョアネや、ヴアロアに反し、ブルードンとマルクスから同じ絲をたぐらうとする。それが無理だ。マルキストも迷惑だらうが、ブルードニアンも御迷惑だらう。彼によると、バクーニンにはどつかブルードンらしいところがある。だから、レエニンは、彼の方程式によると、「バクーニン化したマルクス」といふのだ。

レエニンとソレルの一致點は宿命社會主義者とは異つて、ともに階級闘爭論者だつたことにある。ベルトはソレルの「神話」の代りに「崇高」といふ言葉を用ひる。そして、ブルジョアの「崇高」は破産、プロレタリアの「崇高」は飛躍といふのだ。「崇高」の極致は戰爭である。そこで『國家の戰爭か階級の戰爭か』が彼の主題となる。

戰爭を「義」であると見做すことはブルードンの思想であらうただベルトはいづれを「義」とするかといふこと自體を問題としてゐる。國家戰爭が「義」か、階級の戰爭が「義」か？

Edonard Berth の "Guerre des Etats on Guerre des Classes" には新ソレル主義の勃興を意味する。

フランス共産黨内部に於けるトロツキイ派の沒落を一つの思

想的傾向とすれば、社會黨内の左傾派の擡頭も亦一つの政治的反面だらう。フランス政界の動揺はここらからも起因してゐまいか。

總同盟の右傾は日本の政府を益々安泰にする。

さつとこんなもんだ、目新らしい傾向も見られない。

題して「フランスは方向する」といふ。いかものらしい日本語を用ひた所以は、今日のフランスのあらゆる方面がただ一所に低徊して、首先きだけの方向轉換を行つてゐるに過ぎないやうに見受けられるからだ。

方向してゐるのは、むしろ筆者であるかも知れない。

×

英國勞働運動の新展開

——スカボローとリバプール——

野坂鐵

一、世界覇權の喪失

エンゲルスは、一八八五年、當時まで完全にブルジョア思想の指導の下にあつた英國の無産階級運動に、革命的チャーチズム復活の曙光を認めて、彼の著『一八八四年に於ける英國勞働階級の狀態』の序文に、次のやうに書いてゐる。『英國の產業的獨占の時代にあつては、英國の勞働者階級はその獨占的利益を或る程度に於て享樂した。もとより、その利益は彼等の間に公平に分配はされない。少數の特權者が多くを獲たには違ひないが、しかし大多數の勞働者も亦部分的にその配分に預つてゐた。玆にオーエニズムの沒落以來、英國に社會主義の聲だに聞くを得なかつた理由がある。』即ち、十九世紀末に於ける英國は、世界を搾取し、世界市場を獨占し、殖民地を獨占した。その結果として、英國のプロレタリアートは偏狹なる職業組合と經濟鬪爭

萬能の傳統に囚れ、思想的にはブルジョア觀念の夜具の中に眠つてゐた。

然るにエンゲルスは曰ふ。「この獨占の破綻と同時に、英國の勞働者階級はその特權的地位を失つて、彼等は全般的に、少數の特權者も亦、他國の勞働者と同一水準に置かれる。そして、これが英國に再び社會主義の現れる理由である。」かくて、世界が十九世紀末より帝國主義時代に入ると共に、英國資本主義の有した獨占的王座は忽ちにして他の帝國主義國家によつて侵害せられ、世界は是等の國家の爭奪の巷と化した。從つて、從來英國の資本家階級が國內の勞働者に與へた獨占的利益の一部は、最早や一般的性質を失つて、單に勞働者階級上層の少數勞働貴族のみを養ふものとなり、一般勞働大衆は貧困と屈辱の下に呻吟する。讀者は、何が故に十九世紀末より英國に勞働貴族が發生し、何が故に當時『新組合主義』が生れたか、その眞實の理由を英國資本主義經濟の變動の中に見出すであらう。

しかし乍ら、英國プロレタリアの『社會主義化』は、エンゲルスの豫想した如く、急速に行はれなかつた。何故なれば、英國は產業的獨占を失ふと同時に、新しき金融資本の獨占を獲得したからである。しかし、世界大戰と共に、英國はその獨占的地位の一切を失ひ、その霸權を米國金融資本家に讓つた。更に、殖民地被搾取民族の叛逆、巨額なる戰時國債の負擔、戰敗國の殖民地化による英國內產業の窮乏、二百萬の失業者と勞働者生活の低下、勞働黨內閣の裏切り、政治的自由の消滅とファスシズム。かくして、一世紀の間世界を把握した英國資本主義沒落の過程は急速に進行した。そして、その進行に伴つて、英國の無產階級大衆は鬪爭化し、革命化する一方、勞働貴族の數は益々減少し、彼等は益々一般大衆より離れ、彼等は益々ブルジョア化し、墮落していつた。

即ち、英國勞働者運動の新しき傾向とは、一言にして云へば、一般勞働大衆の革命化と勞働貴族のブルジョア化。更にこれを具體的に云へば、英國勞働組合會議の左翼化と英國勞働黨の自由黨化である。そして、この二つの傾向は、本年九月初めのスカボローの勞働組合會議と、同月末のリバプールの勞働黨大會に於て明確に現れた。從つて、兩大會の經過に述べることは、結局英國勞働運動全般の新形勢を說くことになる。

二、スカボロー大會

最近に於ける英國勞働運動の傾向は、次の二つの事實によつて窺ふことができる。第一は、勞働組合會議總評議會が、アムステルダム國際勞働組合聯合本部と獨墺佛其他の勞働貴族の反

對あるにもかゝはらず、勞働大衆の眞の要求であるところの國際勞働組合統一のために、猛烈な運動を起して着々効を收めてゐることである。これは、舊來の英國勞働組合運動の非國際的、非階級的傳統に對する叛逆である。次に、第二の事實は、少數派運動及び共產黨が、漸次勞働組合員大衆の支持を得、八月の少數派全國大會には八十五萬の會員が代表せられ、又勞働黨幹部の壓迫にもかゝはらず、地方勞働黨內に於ける共產黨の勢力は依然增大しつゝある。そして、この勞働大衆の幾何の部分が、如何なる程度まで革命的傾向を辿りつゝあるか、これを決するものがスカボロー第五十七回組合會議であつた。

大會は九月七日から十二日にかけて開かれ、四百五十萬の組織勞働者が代表された。議長の戰鬪的開會の辭に次いで、全露勞働組合代表トムスキーの演說あり、終ると共に全員は起立して一齊に「インタナショナル」を合唱した。（五年前までは英國の勞働者はこの歌を知らなかつた！）革命的大會の空氣は既に劈頭より看取された。

幾多の決議の內、こゝに最も重要なるものは、第一に國際勞働組合統一に關して總評議會の努力を承認したものであつて、これがアムステルダム反動幹部に對する挑戰であることは云ふまでもない。第二は、歐洲をモルガンの金融資本の支配下に置かうとするドーズ案に對する反對決議である。第三の、而して英國の組合運動にとつて劃時代的意義を有するものは、右翼幹部の壓迫にもかゝはらず、二、四六六、〇〇〇對一、二一八、〇〇〇の多數を以て決せられたる、次の勞働組合會議の目的に關する決議文である。

「勞働組合運動は、資本主義打破の鬪爭のために、勞働組合と勞働者政黨とを結合することに努力せねばならぬ。

「資本家階級との協調は絕對に排斥せねばならぬ。協調は過去に於て勞働者に何物をも齎さなかつたのみならず、運動の前進を妨害する桎梏であつた。

「更に、强力なる工場委員會は、資本家の產業支配を廢棄せしむる鬪爭に於ける最も重要なる武器である。故に、同委員會組織の發達と擴大に全力を注がねばならぬ。」

斯やうにして、スカボロー大會は、左翼革命的分子の勝利に歸した。英國勞働運動史上永久に紀念すべきこの大會は、今や展開しつゝある組合運動の新傾向を卒直に物語るものである。即ち、第一に、英國の勞働運動が一切の協調主義と改良主義を排して、明確な階級鬪爭の上に立脚し、運動の最終の目標が資本主義制度の打破といふ一點にあることを明示した。第二に經濟鬪爭と政治鬪爭との結合的關係が承認せられ、階級鬪爭によ

る政治的權力獲得の問題が漸く理解されて來た。第三に、運動全體が國際的革命運動の方向に展開し、歐洲大陸殊にロシア、並に殖民地勞働大衆との協同戰線が結合せられた。さうして、四百五十萬の組合員の內、その七割五分はパーセル等によつて率ひらるゝ左翼「國際統一運動」の贊成者であり、更に、その二割がポリット等によつて指導さるゝ革命的「小數派運動」であり、その內部にあつて英國共產黨が全運動を指導して居る。そして、トーマス、クラインス等は僅に全運動の二割五分の上に立つてゐることを知るのである。

三、リバプール大會

然るに、スカボロー大會に次いで、九月二十九日より三日間、リバプールに於て開かれたる勞働黨二十五回大會は、一般の豫想を裏切つて、完全にマクドナリズムの勝利に終つた。

即ち、同大會の最大問題である共產黨加盟問題に於て、同黨の加盟を拒否する決議が例年の如く通過したのみならず、勞働組合をして勞働黨大會への代議員は共產黨員を選擧せしめざることの勸告案は、何れも大多數を以て再認された。更に、同大會は、スカボローに於て踏みにじられたドーズ案に贊成し、帝國主義政策を承認し、國際聯盟を支持する議案が可決せられる一方、資本課稅、無償土地國有、資本の攻勢に對する對策、明年五月の炭坑係爭に對する準備、等はすべて否決されてしまつた。この結果に先づ滿足の意を表したものはブルジョア新聞であつた。タイムスは包み切れぬ喜悅を表して叫んだ、「リバプール大會は一個の原則を確立した。實にうまくやつた。この政策は繼續されねばならぬ」しかし、英國の無產階級にとつて、これほど大なる屈辱があらうか。鑛夫聯合のクックは曰つた「リバプール大會の決議はスカボロー大會を愚弄するものである。」英國の勞働運動の歷史の上に、かくの如き破廉恥なる大會があつたらうか。

けれども、スカボローの精神は何が故にリバプールに於て勝利し得なかつたか。吾々は幾多の原因を擧げることができるが、その直接の原因は、リバプールに怯えたブルジョアと右翼幹部があらゆる狡猾なる手段を用ひて左翼の運動を妨害したこと、並に大會のタクチックに於て左翼は到底マクドナルドの敵にあらざること、であらう。次にその根本的原因を擧げれば、第一に、英國の勞働大衆がなほ政治鬪爭に對する無關心と、古き自由主義の傳統とより十分離脫してゐない事實である。更にその二は、勞働黨の特殊の組織形態から來るものである。元來同黨は勞働組合と社會主義團體とによつて組織せられてゐたが、一九一八

年の細目改正によつて個人の加入を許して、プチ・ブルジョアの侵入に路を開いた。それがために、この異分子によつてエンゲルスの命名した「ブルジョア勞働黨」は益々自由主義化して、光榮なるブルジョア第三黨を形成した。そして、現在の勞働黨諸機關は完全に彼等の手に握られ反動的幹部の巣窟となつた。かく觀來れば、スカボロー對リバプールの一見不可解な對照も容易に理解し得るであらう。たゞ問題は、スカボローがリバプールを征服するか、リバプールがスカボローを征服するか、といふことである。

四、新展開

英國の勞働運動が新しき途を踏み出したこと、左翼少數派の運動が漸次一般組合員の大衆の熱烈な支持を得つゝあること、はスカボロー大會の明に示すところである。しかしながら、英國のプロレタリアが、この鬪爭的な、眞に階級的な革命的進行を續けるためには、豫期以上大なる困難の存在することは、リバプール大會の敎ふるところである。然らば、兩大會の何れが終局に於て勝利するか？

これに對する回答は、極めて簡單である。即ち、スカボロー大會の指示する革命的方向は帝國主義の崩壞過程に添ふところの勞働運動の必然的方向であるが故に、勝利はリバプールの手にあらずして、スカボローに握られてゐる、と。

言ふまでもなく、スカボローが組織勞働大衆自身の確立したる意見を代表するものであると觀ることは、明に早計である。多くの代議員にとつては、スカボローは未來に對する感激と理想の表現であつた。それにもかゝはらず英國の、勞働大衆が、晩かれ早かれ、スカボローの精神を明確に意識し、これが實現のため邁進することは、疑ふべからざる事實である。たゞ、この新精神が一般大衆の行動を把握する時期は、要するに、英國資本主義崩壞の速度と、左翼及び共產黨の戰術の巧拙、並に勞働黨幹部に對する鬪ひの勝敗如何にかゝつて居る。

以上の事實は、過去百年の英國の勞働運動史の證明するところである。即ち、英國の勞働運動に於ける新しき方向は勞働者階級の基礎的組織である勞働組合の上に常に最初に現れた。そして、この新しき理論を實際に轉化する力を創造するものも亦勞働組合であつた。例へば「新組合主義」の主唱者であるトム・マンやベン・チレットが最初の勝利を得たのは、ベルファスト（一八九三年）とノーヰッチ（一八九四年）の組合大會であつた。然るに、ブロードハーストのブルジョア自由主義的反動は直に來た。一八九五年のカヂフ大會は、恰も今日のリバプール大會の

如く、當時の過激派トム・マンとケア・ハーデーを除名した。ところが終にカヂフはブロードハーストの自由主義を復活し得たか。否。結果は反對に四年後のプリマウス大會に於ては除名されたハーデーとトム・マンが勝利して、今日の勞働黨を築き上げたのだ。

リバプールは自由主義の凱歌であり、マクドナルドの勝利であつた。しかし、彼の勝利は三十年前のブロードハーストの享樂したものであつて、プリマウスの運命はたゞ時間の問題である。マクドナルド・トーマスは、彼等の最後の據り場所である勞働黨執行機關を通じて、この歴史の回轉を停めやうとするであらう。

しかし、勞働黨がその特殊の組織形態——勞働組合の團體加盟——を變更しない限り、そしてその勞働組合がスカボローの行進をつゞける限り、リバプールは終にスカボローによつて征服せられるであらう。レニンは曰ふ「若し英國共産黨が勞働黨内部に於て革命的行動をとり、ヘンダーソン等がこの政黨を除名せざるを得なくなつた場合は、英國に於ける革命的、共産主義的勞働者階級運動の勝利である。」

英國に於ける今後の運動は、勞働黨、勞働組合會議、左翼少數派運動、共産黨、之等の運動を中心に展開するであらう。

(一九二五、一二、六)

支那の赤化的傾向

大西齋

一

支那が共和民國になつてから已に十五年目となつた。その間政爭又政爭兵亂復兵亂、元首の更迭すること七回に及び、内閣の更迭に至つては屈指するに遑がない。民國の根本法たる憲法もまだ確立してゐなければ、共和國としての實質も何一つ出來上つてゐない。十五年の歲月は支那の政國體變更の大事業——大破壞より大建設への時間としては決して永いとは云へないだらう。併し永くはないが、此の短かからざる時間に於て支那は果して何物を得たであらう？ 徒らに共和の名があつてその實は

一寸とも變つてゐない。共和民國になつてから政治的現象は一年一年惡くなり、一日として平和の日なく、その弊寧ろ前清末の秕政に過ぐるものがある。清朝復辟派の人物鄭孝胥氏は、曾て記者と復辟問題を論じ、民國以來の政治の腐敗混亂、殆ど底止する處を知らざるを痛嘆し、共和の支那國民性に適合せざる所以なりとし、支那が共和を採用する限り、此の混亂から脫却することは出來ない。共和即ち混亂に外ならぬ狀態これ自身が斯かる狀態を阻止し得た帝制への復歸を可能ならしむる唯一の理由であると斷言したことがある。氏の指摘せるやうに、革命以來の支那の混亂は全く御話にならない。その不秩序である點を比較するならば、前清時代の方がまだましであり、支那多數國民の爲めには寧ろその時代の方が仕合せであつたに違ひない。それだけは確かな事實であらう。しかしそれだけ事實であつても、それだから支那國民が帝制へ復歸しなければならぬ結論とはならない。民國となつて以來の亂象を支那國民が呪ひつゝも、厭ひつゝも、共和制體そのものは、支那國民に取つて最早や動かすことの出來ない常識上のものとなつて了つたのである。支那國民革命はまだ試錬の道程にあるのである。今後更らに如何なる經過を辿つて行くであらう？ 過去十四年の歷史上の成績は極めて不良であるが、支那はこれ以上惡くなり、次惡より最惡に向ふのか乃至は多少良くなり、次善より最善に向ひ得るか。こうした總ては支那の將來に殘された大なる謎である。將來のことは知る由もないが、只現代支那の一面を現はしてゐる傾向に就いて考察を加へて見たいと思ふ。

二

支那の共和の實績が擧らず混亂に混亂を重ねてゐるのは、國民革命が徹底せず、實權は舊官僚舊軍閥の壟斷する處となり、その舊勢力が割れて互ひて勢力を爭ひ、一方舊勢力に對抗する革命黨の勢力が伸び切らず、ぞれ自體亦分裂し、これが入り亂れて錯雜紛糾を呈してゐるからである。

十五年前清朝は朽木の如く倒れた。革命の力で清朝を倒したのでなく、清朝の實權を握つた袁世凱が革命を利用して、うつろの大木同然の清朝を倒したのである。雜作なく清朝が倒れて雜作なく民國が出來上つた。清帝と云ふ統治者が大總統と云ふ袁世凱に代はり、形式だけ帝制が共和の姿に變はつたのである。共和の實權は袁及袁と思想を同ふする前清の舊官僚の手に握られたのである。革命黨は袁世凱に一杯喰はされて、次ぎの革命に取りかゝり第二、第三と革命を企圖したが、いづれも次ぎ次ぎに失敗した。袁世凱は革命を利用して甘く成功するや、直ち

に革命黨退治を治め、舊勢力を以て革命黨を一掃した。袁が南側の野望を起し中途にして蹉跌し遂に病を得て倒るゝや、袁の下に統一された舊勢力が分解し、直ちに今日に至るまでの軍閥禍亂の端を啓くに至つた。袁の下に北洋軍閥は結束され、政治的分野は、北洋大軍閥に對して小弱なる革命黨の存在と二つ色分を見るに過ぎなかつたのであるが、袁の沒落と共に、北洋軍閥は二つに分れ、段祺瑞を首領とする安徽閥と馮國璋を頭目とする直隷閥とが相對立して勢力を爭ふに至つた。孫文一派の革命黨の勢力は微々として振はず、支那の中心勢力たる北洋派中の安直二軍閥の政權爭奪が政局を左右した。此の兩軍閥以來に新たに擡頭したものは張作霖の奉天軍閥である。民國九年の安直戰爭に奉天軍閥は直隷派に加擔し、安徽軍閥こゝに倒れて奉天軍閥之れに代はり、奉直二大軍閥の抗爭時代に入つた。民國十一年の奉直戰爭は直隷派が勝ち、十三年の奉直第二次戰には奉天派が勝つて直隷閥は倒れた。第二次奉直戰に於て直隷派内部から直隷派に致命的打撃を與へた馮玉祥一派の國民軍が直隷派に代はつて擡頭し、奉國二大軍閥の對抗時代に入つた。戰後奉天軍閥は中原に向つて勢力を伸張し、津浦沿線の山東安徽より滬寧鐵道に沿ふて江蘇上海まで手を延ばしたが、最近南方に於いて孫傳芳等五省聯合軍が崛起して之れに反抗せる爲め、奉天派は南方の地盤を失ふに至つたのである。而して北方に於ても奉天軍と國民軍とは兩立せず、形勢險惡を呈しつゝ、一時姑息なる妥協を爲すこととなつたのであるが、そこへ奉天軍の驍將たる郭松齡が御大張作霖に弓を彎いた爲め、奉天軍閥は脆くも分解し、奉天軍閥内部の動搖によつて國民軍は俄かに勢力を加へた。張作霖一派の沒落は目捷の間に迫つてゐる。郭松齡と連絡を有するものと見られた直隷督辦李景林は山東督辦張宗昌と共に飽くまで張作霖と進退を共にし、馮玉祥及郭松齡に宣戰を布告し、京津一帶の地方に於て戰端が啓かれんとしてゐる。本誌の出づる頃これらの關係や形勢は判然してゐるであらうが國民軍閥の勢力が北方に於ける唯一の大軍閥となることは最早や明白な既定の事實であらう。南方には奉天軍を上海・南京・徐州より驅逐し江蘇安徽の地盤を獲得した孫傳芳一派の五省聯合軍があり、之れと呼應して岳州より漢口に入り再起して呉佩孚一派の直隷派がある。支那の形勢は大體から觀て、北方馮玉祥等の國民軍閥南方南京を中心とする孫傳芳等の五省聯合軍及漢口に於ける長江上游の勢力を握る直隷軍閥の鼎立せる形である。北洋軍閥の流れを汲める軍閥が、分裂離合集散してゐるのが、民國以來繰り返されてゐる支那の縮圖であり現狀である。軍閥が大きくなると他から倒されなければ内部から壞はされ

る。代はつて勢力を振ふ軍閥が現はれると屹度その内に倒れる。殆んど定義のやうに正確に循環する。こうした軍閥の對立・抗爭・起伏は支那の常態であつて容易に已まないものであり、從つて軍閥の末期はまだなかなか近き將來において期待されぬものと斷ぜざるを得ない。

三

軍閥が合縱し連衡し、その爭奪が環の如く繰り返さるゝ限り、支那に於ける時局の安定は望まれない。民國十四年の歴史は、實に軍閥の政權爭奪に終始してゐる。併し此の黒重々たる軍閥の權力爭奪の間に、國民革命の思想が民衆の間に擴まつたことは見逃がすべからざることである。孫文の提唱せる國民革命主義は歐洲戰後に於ける民族主義、民主主義の世界的潮流と相俟つて現代支那に於ける一大傾向を形成するに至つた。外、列强の帝國主義を打破して、支那の民族・政治・經濟の獨立を圖ると共に、内軍閥を打ち倒して國民の自由を確保するのが、國民革命の精神である。此の精神と思想とを持つた國民運動が、如何に顯著なる傾向を示してゐるかは、巴里會議に華府會議に、將又最近の關税會議に雄辯に物語つてゐる。唯國内に於いては、大小軍閥の勢力が尚强く、國民運動は先づ對外的に現はれて次いで對内に向ふ順序であるが、對外的に侮り難い國民運動も對内軍閥の場合になると案外弱はい。國民運動——國民革命としての對内軍閥打破が成功するのは果して何時のことか、無論それは分らないが從來軍閥と云へば殆んど例外なしに思想的に保守的のものと相場が定まつてゐたのに、國民運動に共鳴し、革命主義を奉ずる軍閥の勢力が有力となりつゝあることは注目すべきことであらねばならぬ。

四

國民革命主義を奉ずる軍閥と云へば、一つは廣東の蔣介石によつて率ゐらるゝ廣東政府であり、他の一つは最近の機會に於て北京の政權を把握するに至つた馮玉祥一派の國民軍及國民黨系である。何づれも赤化の色彩を以て見らるゝものである。抑も孫文の革命主義たる民族民權民生の所謂三民主義の中民生主義は地權の平均即ち國家の土地使用法國家資本の使用法に於いて、一種の國家社會主義を提唱するものであつて、共產主義と同一のものではないが國民黨と共產主義者の握手により、民國十三年一月の國民黨改組以來、十四年七月一日廣東に於いて共產派の主張が勝利を占め、國民代表會に於いて中央執行委員を選定し、共產派の闘將たる譚平山廖仲愷等を委員に擧げて中央

執行委員會を創立すると共に、執行委員會の監督の下に國民政府を組織し、汪兆銘を委員長に以下委員を任命し、更らに共の下に省政府を設け、茲に赤色廣東として共産制度の形式を確立し、極左的態度を宣明した。國民黨改組以來穩健派は事毎に共産派と相容れず、孫文の逝去と共に分裂したが、更らに八月中共産派の領袖廖仲愷が暗殺さるゝや、實力を有する蔣介石がクーデーターを行ひ、從來の同志である胡漢民、許崇智等を始め共他異分子と目するものを悉く一掃し、廣東は共産主義の極左派によつて完全に把握さるゝに至つた。赤露の代表ボロディン等十數名が顧問として活躍してゐる。制度の形式からは廣東は立派に赤化してゐるが、政策としてまだ共産主義を實行してはゐない。しかし注目すべき一例は、廣東政府支援の下に昨春のメーデーに開かれた第二回全國勞働大會の決議である。同大會の參加者百六十五團體出席者二百七十七名(團體加入の勞働者五十四萬)で、六日間の會議に於て決議せる事項中、勞働者の手に政治經濟の支配權を收めプロレタリヤートの專制を確立すること。アムステルダムの第二インターナショナルを資本國の走狗として排斥し、一致してモスコーの第三インターナショナルに參加することを以てせるは、共産露國に倣はんとするもので、廣東政府の最終の目的が奈邊に在るかゞ窺はれる。赤化の形式を整へた廣東政府の共産主義の實行は今後之れを徴せなければならぬ。廣東と對照して見らるゝものは馮玉祥一派である。廣東に足場を失つた國民黨の穩健的及廣東と氣脈を通ずる共産黨一味は、馮玉祥の國民軍に着目し、互ひに之れに喰入つてゐる。馮玉祥は張作霖との政敵關係から赤露は張作霖との睨合ひから、兩者は自然に接近し、馮の親露策と馮を包繞する周圍の關係から、馮派の態度如何は非常に注目されてゐる。現に金錢武器彈藥を赤露から馮軍に共給し且つ馮の帷幕に反對の赤露軍官が參加した事實があり、馮自身已に張家口に於て自働車會社や劇場を手始めとして沒取し、一部の共産主義類似の行動を實行してゐると云はれてゐる。必要の前に民間のものを奪取するのは軍閥の常套手段で、之れを以て共産主義と見るのは當らない。馮の親露政策は自己の立場上露國を利用してゐると見るべきであらう。北京に於ける共産派は最近の北京に於ける直接行動に依り馮派から敬遠され、極左派を以て目せらるゝ李石曾・徐謙等の計畫は頓挫を來たしてゐる。廣東の赤色に比すると馮玉祥一派の爲す處は、事實まだ桃色(ピンク)の程度にも行いてゐないのである。併し今後如何なるラジカルな政綱政策を行ふか行はぬか觀物である。以上極めて大雜把な觀察によつて軍閥の爭鬪の甚しく到底近き將來に已むものでないこと、而かも他面に於

いて國民革命主義の一般に擴がつてゐること、そしてその主義思想を背景とする軍閥の一つは已に赤化し、他の一つの軍閥も赤化する危險があるか無いかを興味を以て見られてゐることを一言述べようとしたのである。いよいよ命題の結論に急がなければならぬ。

五

バートランド・ラッセル氏は曾て支那に於ける講演に於て勞農露國の視察談を試み、マルクスの所說に從へば共產主義への可能は、爛熟せる資本主義國に於いてのみ可能である。それが資本主義の發達しない農業國の露國に於いて實現されたことはマルクスに對する一大皮肉であり、マルクスを地下から起せたら何んと答へるであらう。……と云つて暗に支那にも共產主義の行はれさうな可能性のあることを仄かした。單に大國であり農業國である一點から露國と支那とを比較するとよく似てゐるが、それ以外に於いて殆ど似通つたものはない。兩國の國民性は根本的に違つてゐる。四千年の文化を有し、あらゆる思想、あらゆる危險思想をも容易に消化し得た歷史上の事實をもち、免疫性をもつ支那の偉大なる國民性が、思想的にも政治的にも赤化し共產化するものでないことは、支那の識者は固より支那の事情を解するもの丶一致する見解であり、吾人も大體に於いて之れには同感である。支那に共產主義の適不適、支那の幸不幸は別問題とし、共產派の支那に活躍し、廣東の如き共產主義の實行としては尙多大の疑問が存するとしても、共產主義的色彩の濃厚であることは、支那現代の一面を語る有力なる事實である。歐洲各國に對する赤化宣傳運動に失敗せる露國は、今や東方に目を轉んじ特に支那に對しては全力を注ぎ、興味と期待に燃えてゐる。洗鍊されすれ枯らした支那の國民性は、共產主義を種子に赤露から現ナマをせしめ、赤い舌を出して露國の與みし易きを嗤ふかもしれぬ。露國の對支赤化は恐らく効を奏しないであらうとは思はる丶がさりとて全然安心は出來ない。支那には易世革命はあつたが、歐米に於ける如き政治革命は到底行はる丶ものでないとは多くの人々の信じてゐた處である。それが支那にも行はれて共和民國となつた。今度來るものは政治革命より社會革命への進步である。それが赤化主義であるか無いか誰れが保證し得よう。

北京政局は新思想を背景とする軍閥政客の把握に歸しつ丶ある。昨年奉直戰後段祺瑞を圍んだ人々は、今度こそ革命をやり直し、正式の中央政府も出來れば南北の統一も出來ると云つて直隷派を倒したことを甲子革命と名づけ意氣揚々たるものが

あつた。それがどうであつたかと云へば、今日見るが如き態たらくである。國民軍系の政府は已にまた革命の成功だとして得意の色を浮べてゐる。國民軍の手によつて軍閥割據の局面が多少ともよく整理され得るだらうか？　鄭孝胥氏は亂雜極まる政治が、共和に愛憎をつかし復辟に歸る可能性であると云つたが、復辟などは最早や問題ではない。斯かる混亂の連續せる間から生れるものは何であらうか？　支那は非常の開展を試みなければ到底浮ぶ瀬は無い。其の望みがあるか。次ぎへの開展は次ぎへの混亂を深刻ならしむるに留まりはしないだらうか。

（大正十四年、十二、六認）

米國社會運動の最近動向

八木澤善次

一

たしかヂノヴヰエフではなかつたと思ふ。アメリカの勞働者階級は歐洲諸國の無產階級が既に一八四八年頃にぶつかつた問題で今頃愚圖付いてゐる、實にアメリカは無產階級の見地から云ふならば政治的にはイギリスとかドイツとかと比較せらるべきでなく寧ろペルシヤとか支那とか云ふが如き國と比較せらるべきであると云ふやうな意味の隨分思切つた惡口を云つた。

然しながら最近三四年の米國社會運動の過程を眺めてゐる程の人ならば誰でもが、此の惡口が單なる惡口ではなく、八分の眞理を摑んでゐると思はずに居られない程、歐洲諸列强の社會運動に比較するならば遙に後方に「圖體ばかり大きくつて何してゐやがるんだ」と云はずには居られない程愚圖々々した姿をアメリカ社會運動は示してゐる。（我々日本人も其の點ではあまり大きい口をたゝくことを許されないが。）トム・マンではないが之れがあのアメリカン・シヴヰリゼーションの本場かと、中學校時代に西洋歷史で習つた美しいアメリカ建國史の故に一度は誰でもが恐らく持つであらう處の「自由の國」アメリカに對する憧憬が、米國社會運動の近狀を見ると、忽ちにして幻滅の悲

衰と變り、アツダースンの小說「マーチング●マン」の主人公マツクグレゴールと共に「アメリカは勞働者にはつらい處である」と歎ずるであらう。事程左樣にアメリカの社會運動は共資本主義運動の華々しさに反比例して暗澹とした俄に光明を期待し得ない狀勢にある。混沌たる狀勢にある。

一九二二年二月鐵道關係の諸勞働組合の提唱によつて出來た進步的政治行動會議（Conference of Progressive Political Action）が何等か米國社會運動の上に打開を來たさしめるかと期待せしめるところがあつたにも拘らず、第三黨のラフオレットをかつぎ上げるなどして終に變なものとなり了り、一九二三年孤々の聲を擧げた、聯合農民勞働者黨（Federated Farmer-Labor Party）も亦頭初の六十萬の民衆の團結による獨立無產政黨と號した勢にも拘らず、昨一九二四年十一月の大統領戰問題が表面上の理由となつて消滅してしまい、政治的にアメリカの無產勞働社會が解放せらるゝなどは愚か階級的自覺に立つてどこまで獨立的な無產階級政治運動を實現し得るか甚だ覺束ない狀態にあるのである。

二

米國に於ける社會運動の最近の傾向を論ずる前にかなり古い之れが過去の歷史を振返つて見るのに、歐洲の社會主義運動が萠芽してからは、米國に於ても既に一八五〇年代から歐洲に居られなくなつて亡命して來たドイツ社會主義者達の影響を受けて從來のオーウエン派の勞働組合運動以外にマルクス派の社會主義運動が行はれるに至り、共後此兩者は互に或は並行し、或は交錯して、後日に至つて勃興して來たサンヂカリズム運動までも參加して、各者間に於ける勢力の消長を時代々々に夫れ々々示しながら今日に至つたのである。

然しながら前世紀末に現はれた米國勞働聯合會（アメリカン・フエデレーシヨン・オブ・レーバ）が勢力を加ふるに至つて以來は該聯合會が樹立以來僅か一期と云ふよりは一年を除いて昨冬メキシコに於いて客死するまで約四十年の間會長として勢力を振つて來たゴンパースの猛烈なる社會主義嫌に影響せられて、アメリカの勞働社會には積極的政治行動を排斥し全然經濟行動によつて勞働條件の改善を計らむとする純然たる勞働組合主義運動と階級的な獨立的無產政黨を樹立し革命を通して政治的方面から無產階級の解放を招來せんとする社會主義運動とが對立して最近まで來てゐるのである。勿論、アメリカの勞働組合は米國勞働聯合會によつて其全部が網羅せられてゐる譯ではなく四ツの鐵道友愛會（レールウエイ・ブラザーフツド）や合同縫衣工組合（アマルガメーテツド・クロシングウアーカース）とか云ふが如き有力なる勞働組合を自家藥籠中のものとなし

得ずにゐる有樣であり、從つて既成勞働組合中にも聯合會に加入せざる多くのものゝ如く獨立無產階級政治運動の必要を痛感して獨立無產階級政黨の樹立を劃策して來たものがあるばかりでなく、シカゴフェデレーション・オブ・レーバーの如き聯合會內部に於いても左翼分子は聯合會幹部の絕對的社會主義排斥に盲從せず、之に反對して社會主義者達と提携して獨立的無產階級政黨の樹立を企て聯合會の無政黨政策（ノンパーテザン・ポリシー）を打破せんとする者が輩出する傾向を示してはゐるが。

三

歐洲大戰後に於ける米國の社會運動は一九一九年の社會黨の分裂に始まつて昨二四年の大統領選擧戰に至るまで一期をなし大統領選擧戰以後同國の社會運動は面目を新にして進まむとしてゐるやうである。すくなくも政治的方面から云ふならばさう云ふことが出來るのである。（之に就いては「社會思想」二月號以下に亘つて詳細に論じたいと思つてゐるから、就いて見られたい）

即ち一九一九年の社會黨分裂は衆知の如くレーニン主義を奉じて第三インターナショナルに加入すべきか否かの問題を中心として起つたものであつて、之を奉じて第三インタナショナルに加入すべしとなした所謂左翼派（數の上に於いても質の上に於いても有力なる分子であつた）が脫退して、別個に共產黨（コンミュニスト・パーティ）——當時は丁度米國政府が共產黨狩に波々乎としてゐた時であるから秘密結社であつたことは言を俟つまでもない——を樹立し革命主義的獨立無產政黨運動を開始した。然し政府の壓迫甚だしかりしが故に二一年十二月ワァカース・パーティを、組織して、コンミユスト・パーティは其後全く裏面にのみあつてワァカース・パーティ（W・P）を助けて活動を續けてゐたが、二三年四月に解散してしまつた。然しそれは表面のことで實際は此派の人々がW・Pを主宰して共黨名の下に大衆を糾合せんとしたのである。而して此W・Pこそ最近の米國社會運動上極めて重要なる役目を演じてゐるのであつて、それは恰も我國の最近一、二年の社會運動を考察するには所謂共產黨系の運動を看逃しては考察することが出來ないのと同樣である。

米國の共產黨運動は啻にW・Pによつて行はれたばかりでなく、彼のウヰリアム・フォスターの勞働組合敎育聯盟（Trade Union Educational League）を通じても行はれて來てゐるのである。元來フォスターはI・W・W・出身でサンヂカリズムの思想を持つてゐる人である。されば氏は既成組合の存立あるにも拘らず更に新しく組合を作つて既成組合打破に無益な勞力を費さ

んよりは既成組合を利用して以て無產階級の共同戰線の効を擧げしめむとしてゐたのである。

T・U・E・L・は一九二〇年十一月シカゴに於いて孤々の聲をあげたのであるが、其は最初から新に結社を作ると云ふことをせず、右は勞働聯合會から左は共產的勞働團體に至るまで其の內部に革命的分子の組合を來たさしめむことを期し、之に向つて行動をして來てゐるのである。此意味に於いて我々は今後の米國社會運動に於いてT・U・E・L・の占むる役割を最も注意しなければならぬであらう。

然しながらフォスターの此運動は第三インターナショナルや赤色國際勞働組合が二重組合主義を捨てゝ此運動を援助するに至るまでは、と云ふよりも寧ろ二二年フォスターがロシア旅行から歸つて來るまでは、さしたる活動をしなかつたのである。即ち二二年の二月から此運動は活動期に入り同三月には機關紙(レーバー・ヘラルド)を發行し、全國的活躍を試みるに至つた。而してフォスターが以前嘗て席を置いたことのあるシカゴ勞働聯合會の幹部の提唱によつて、一九二三年七月に所謂シカゴ會議なるものが開かれ、此處に全國的な、其當時有頂天になつたW・P・が一領袖の言を藉りて云ふならば六十萬の農民と勞働者とを代表するものによつて出來た獨立的無產階級政黨たる聯合農民勞働者黨の樹立を見るに至つたのである。

四

此F・F・L・P・(聯合農民勞働者黨)の樹立に先立つて既にフォスターのT・U・E・L・はW・P・と提携し、切つて切れぬものとなつてゐたことは言を俟つまでもなく、T・U・E・L・は此間あらゆる方面の勞働組合に於いて左翼分子の結合と擴大とを計り實にめざましい戰を續けてゐた。

然しながらT・U・E・L・の活動は勿論のことW・P・の活動、即ちアメリカに於ける共產主義の活動は果して其努力に値する効果を獲得し得たとは必ずしも云ふことが出來なかつた。

成程二三年のシカゴ會議に於いてはW・P・が代表する共產主義派は捷利を得自派の掌中に於いて殆んどF・F・L・P・を作りあげるにはあげた。しかしF・F・L・P・は成立後農民の多くと勞働聯合會に屬するものとが離脫し去り、二四年六月のセント・ポール會議に於いても同樣に議場の懸引は頗る見事にして內派の捷利を見るに至りしが、其れは大會に於いてゞだけであつて大會の終るや間もなく大會まで一緒に結合して步調を合せて米國無產階級の政治的革命のために戰つて來た、尠なくも戰はんとして來た、僚友が脫退し結局殘つたものは自分達左翼同志だ

けで大衆とは大分にかけ離れた處にあるのを見出すだけであると云ふ状勢だつたのである。其結果はフォスターを大統領、ギトローを副統領の候補に立てゝ十一月の選擧戰にもろくも三萬三千票の投票を得たゞけで一敗地に塗れてしまつたのである。

此の苦き經驗は直ちに彼等を促して「勞働黨なくして農民勞働者政黨運動にまで飛躍するの謬れるを覺らしめ「勞働黨運動にまで一歩退却する」旨の宣言書を發せしむるに至つた。それは米國に於ける共産主義者の勢力が如何なるものであり、彼等が如何なる地位にあるかを雄辯に物語る。また米國社會運動に於ける共産化の日尚ほ遠きを思はすに十分である。

五

共産黨運動が斯かる有様である一方、這次の大統領戰に於いて米國勞働界の後援を得て約五萬票の投票を得たラフォレットの第三黨運動もラ氏の死後著しく其の影を薄くし、獨り依然として非政黨政策を固執する米國勞働聯合會はゴンパースの後にグリーンを据えたゞけで相變らず猛烈なる保守振りと社會主義嫌ひを發揮してゐる。此の十月アトランテック市に開かれたる同會の年次大會の發したる聲明書は勞働鎖國主義とでも云ふべきか極端なる孤立主義を標榜する全然階級意識の缺如するものであると云ふほかない。そしてこゝ暫らくの間は米國勞働聯合會の天下と見ゆるのである。しかしながら聯合會とても必ずしも前途の樂觀を許すものではない。一九二〇年の四百萬を頂上にして其後年々會員數減退し一九二四年は前年の二三年よりも會員數六萬人を減じ、二百八十六萬六千名弱となつてゐる。しかも米國の勞働人口は決して減退せず、最近の米國々勢調査の結果の發表によると賃銀所得者は一九一〇年の二千二百四十萬名から二千六百〇八萬名に增大してゐる有様である。之は無産階級の增大を意味する。

従つて米國の資本主義が如何に獨裁的壓制に出でやうとも社會運動の進展は阻止し得ないであらう。

今後米國の社會運動は如何なる動向を取るであらうか、現に如何なる動向を示しつゝあるであらう乎？

それはフエデレーション・オブ・レーバーの執れる道か共産黨のとれる道か二者の中孰れかでなければならない。然し乍ら前者は餘りにクラフト・ユニオン的で全無産階級的でない。極端なる共産黨並ひ其のこと自體が既に示すが如く其態度は甚だ消極的であり、今迄に自分達が獲得したる利益を擁護するに急である。従て大衆的たり得ない。共産黨を除く他の諸社會黨も英國のそれと異つて今後の發展を期し得ない、年々の記錄はそれが

滅亡に向へるを示してゐる。共產黨も現在の儘にては將來を期待し得ない。何れかの分野に一大打開が行はれて大衆を味方にし得ない限り、米國の社會は資本主義萬々歲であらう。(一九二五・一二・六)

冬眠せる獨逸社會主義運動

藤井悌

一

資本主義の安定、マルクシズムに對する再批判新理想主義・新國民主義の勃興などといふことが、近頃の流行語となつた。しかしながら、さすがに社會主義を全く棄て去ることはできないと見えて、理想主義と社會主義との私通が始まり、精神的乃至貴族的社會主義が再興された。最近問題になつたゾムバルトの著書『無產階級社會主義』は、この煩悶の一つの表れであるとも見ることができる。この風潮は外形から見れば、一部で唱へられてゐるやうに空想派社會主義への逆行であるとも見られ得るが、然しながら、社會的歷史的には全然別の意味があるのだ。一面に於て、かなり久しい以前からあつたカントと社會主義との折合は、今もなほ哲學的社會主義者と呼ばれる一團の人々によつて、倦かず試みられつゝある。また他の一面に於て、資本主義の絕望的攻勢防禦としての反動運動も、亦何等かの形に於て社會主義の名を借稱しなければならない。そこで反動運動も亦私通關係には入り込んで來て、國民的(國粹的)社會主義といふ奇妙な看板を揭げた。こゝにも國際的ならずしてドイツ的なる、無產階級的ならずして英雄的なる、一口に言へば社會主義的ならざる社會主義が幅をきかしてゐるのである。中にも失笑を禁じあへないのは、わがゲーテさへも、とうとう社會主義者の仲間へ引つぱりこまれたことである。

二

一體、理想主義や神秘的ロマンテイシズムは、根ざし深きドイツの傳統の一つである。そして民族主義、ドイツ文化至上の

觀念が右の思想と固く結びついてゐる。長い間支配者側の勢力を裏づけてゐた哲學はこれであり、また支配階級と『青年ドイツ』とを結びつけてゐたものもこれである。ドイツの大學生を初め、學生團や青年團が、どうしても無產階級の味方となり得ないのは、どこの國でも然る如くに、彼等の出身が純粹無產階級でないからでもあるが、それよりも寧ろ主として右の理由に基くのである。そして彼等は、今も尙ほ帝政ドイツの光榮にあこがれてゐる。散文的な無產階級文化は、彼等のロマンティシズムを滿足さすことはできない。されぱと言つて、彼等も亦現代の青年である。社會主義的な何物かを掴むことなしには到底存在し得ないのである。こゝにまた、理想主義的社會主義ともいふべき或る新運動が孕まれざるを得ない事情がある。

ドイツの中流階級は、帝政ドイツの實際の支持者であり、その產業及文化の眞實の指導者であつた。從うてドイツの物質的ならびに精神的の隆昌は、彼等にとつては、彼等自身の問題であつた。革命の結果として、實は世界大戰の結果として、このドイツ覇權が完全に踏みつぶされたのは、彼等にとつて絶大の痛恨事である。然のみならず、戰後經濟の破綻によつて、最初に且つ最も露骨に沈落したものは彼等である。彼等のうちには、從來社會民主々義に同情した分子が少くなかつたのであるが、今や彼等の現前の不滿は、彼等をして革命の直接責任者たる社會主義諸黨派から背かしめた。そして彼等は、一度は反動の陣營に走つてみたが、資本專制の下に於ては、彼等の沒落の過程をどこまでも續けて行く外ないことを覺らずには居られない。ここにも亦、『無產階級的ならざる』社會主義の要求があるのだ。

三

ドイツの無產階級は、半世紀の間社會主義民主主義に率ゐられて來た。それは元來、大體に於て正統マルクシズムであつた筈であるが、前世紀の終り頃から、思想內容に著大な變化を得來りつゝあつた。第一に前世紀最後の二十年間に於けるドイツ產業の急激な發展繁榮は、無產階級をも其の餘瀝に潤ほはしめることができた。素より此の事は、自國の無產階級の負擔、即ち資本主義制度の下に於ける必然の負擔の一部を、植民地的領域に轉嫁することによつてのみ可能であつたので、かゝる過程が初めから行き詰りを孕んでゐたことは言ふ迄もないのであるが、現前の事象は、彼等ならびに彼等の指導者を非常に樂觀的にしてしまつた。そしてかやうな情勢の下に於ては、樂觀的指導者に默つてついて行けば差當り間違ひがなかつたので、大衆

は自然極めて從順不活潑になつてしまつたのである。加ふるにドイツ人は、多年の軍國的官僚的支配及び教育の下に訓練されて來たので、民衆側は一體に自發的ではない。かくして彼等は指導者の言ふがまゝに世界大戰にも引きずり出され、また大戰後の革命をも起し、更に革命そのものを無産階級的ならざる方向に導くことにも助力した。その結果、革命は社會的經濟的には無意味になつたばかりでなく、却つて資本の覇權を戰前以上に確立してしまつたのである。

かくして彼等の新たなる苦難が始まつた。今や資本膨脹のために要求せられる犧牲の全重荷は、國内無産階級の肩上に懸つて來たのである。この幻滅は共產黨の勃興を促さゞるを得なかつた。共產黨は嵐の如き宣傳を始めた。彼等は幾度か直接行動をも試みた。然しながら、ドイツに於ける諸勢力の分布狀態は、未だ共產革命の成功には熟してゐなかつた。無産階級以外の諸分子は勿論、無産階級自身さへも、上述のやうな多年の因襲によつて非能動的ならしめられてゐるので、かゝる革命を積極的に支持する分子はやはり少數であつた。然のみならず、政治上の諸機關特に强力的機關は、今や無産階級とは殆んど全く絕緣されてしまつてゐる。機會は既に去つたのである。

成功しなかつた度々の擾亂は無産階級の精力を浪費するのみならず、逆さまに反動勢力を喚起させ、强壓政治に口實を供し更にドイツの外交政策を攪亂して其の國際的地位を不利に陷れ延ひては其の經濟的復活を遲延せしめるほかには何等の能がない、といふやうに考へられて來た。共產黨の指導者らは、民衆の災禍を利用するものとして非難され、「禍亂政治家」と罵られた。彼等が自稱する明確なる階級意識は、實は强烈なる黨派心（朋黨的意味に於ける）に外ならずとせられた。定型的の階級戰術に對して、潤ひのある人間味を注入しなければならないといふやうなことが言ひ出された。彼等の辛辣なる倦まざる宣傳、絕えまなく繰返す示威運動は、若し其の目的が遂した場合には歡呼するであらうところの民衆側をさへも、遂にはいら／＼させるに至つたのである。蓋し非常の時、疾風の如く事を處理しなければならない段階に入つた時は、如何なる手段も是認せられ如何なる刺戟も喜んで受入れられる。然しながらかゝる事態が漫性化することは、多數の人の堪へるところでない。かくしてピューリタン的共產主義は、差當り不人氣とならざるを得なかつたのである。同時にまた、再び獨立の地步を占め得た資本はもはや封建的反動勢力と提携する必要を認めなくなつたので、反動思想もまた將に下り坂にならうとしてゐる。そして社會民主主義は、一步一步と右の方に退却しつゝ、それでも少しづゝ

復活しさうに見える。

四

以上總ての情勢の下に、意識的又は無意識的に受入れられてゐるのが、最初に述べた新理想主義的思潮であり、それに裏づけられた新空想派社會主義（單に比喩的意味に於てかくいふ）である。思ふに社會運動は今の此の刹那、切に休息を求めてゐる。それは息もつかない强行軍に疲れた。長時不斷の緊張に堪へなくなつた。要するに今社會運動は途中の一休みをしたいのである。そして謂はゆる右傾的社會主義――その代表者である社會民主黨――は、形勢我に可ならざる此の時期に於ては、最少抵抗線に沿うて行くほかないのである。榮養物搾取の不可能なる間は、或る種の動物はできる得だけ精力の浪費を防ぐために、殆ど假死の狀態になつて冬籠りをする。ドイツの社會主義は今冬籠りをしてゐる。しかし死んでゐるのでは勿論なからう。

一口に言へば今日は大革命に附き物の反動時期だといふに過ぎない。いはゆる資本の安定も、經濟的條件が復活したためではなく、反動の一表現として資本が覇權を獲得したための人爲的安定に過ぎない。一層重大なる危機はこゝに孕まれてゐるのである。私は現在特に社會思想の著大なる轉廻があるものとは思はない。大局から見れば社會思想の本流はほゞ從來と同じ方向を辿つてゆくものと思ふものである。

農民勞働黨問題

勞働總同盟の脫退に至るまで

總同盟　麻生久

一　困難なる提議

今回日本農民組合に依つて企てられた單一無產政黨の提議は、之れを成立せしめるためには非常に困難なる時機に於てなされたのである。その困難なる原因は外でもない、勞働總同盟の分裂問題である。而も分裂後日尙ほ淺く、總同盟と評議會との對立は最高潮に達し兩々鎬を削つて戰ひつゝある時であつた。そして最初はそれほどはつきりしなかつた兩者の理論的立場も、分裂して戰つてゐる間に次第にはつきりとなつて、評議會は明かに共產黨的色彩を明かにし、總同盟を罵るに、日和見主義、資本家の手先き、を以てし、總同盟亦彼等を罵るに小兒病者、空論派、私黨的共產派を以てするに至つた。

此兩者の分裂と對立とは、智識階級の社會運動者の間にも必然に二つの對立せる狀態を惹起せしめたのである。

十餘年の歷史を有する總同盟が分裂に至るまでには眞にその內部に於て深刻なる血淚がしぼられてゐる。現在の總同盟が一朝間違へば自己の崩壞と沒落とを見ねばならぬ危險を前にして二十數組合を除名するの決心をなすまでには、外觀者の窺ひ知る事の出來ない悲壯な痛苦をなめてゐるのである。而も分裂後の總同盟の評議會は現在の日本の勞働運動の上に於ては尙ほ披主要なる勢力たる事を失つてはゐない。

農民組合の提議は斯くの如き狀勢を前にして、突如として而

も極めて無雜作になされた。それは單一無產政黨樹立と云ふ合言葉の上に！

此提議は總同盟と評議會とを如何なる立場に置いたであららう？

先づ評議會は雀躍したのである。何故ならば、ブラ下り主義食ひ込み主義乘取り主義に依つて自己の勢力の伸張を期する評議會は、此展開されんとする舞臺を彼等の勢力を伸張する絕好の機會であると思惟したからである。

之れに反して總同盟は自己の存立上又感情上、死活を堵して除名を敢行した評議會と再び手を握る事はそれが假令政治上の舞臺なりとは云へ忍びざる事であつたのである。

斯くの如き事情に拘らず總同盟が農民組合の提議に應じた所以のものは、一つにそれが農民組合の提議であると、多くの友誼團體と共であるのと、又二つには單一無產政黨と云ふ麗はしき掛け聲のためであつたのである。

そこで此提議が何の破綻なく、換言すれば反協議會派の脫退なく、圓滿な成立を遂げるためには次の事が要求されてゐたのである。その一つには評議會派の絕對に謙遜なる態度、乘つ取り政策、罵倒政策の停止、二つには提案者たる農民組合の細心なる注意と努力、即ち此困難を排除するための必死の努力とである。

其提案が單一無產政黨と云ふ絕好の題目であり、提案者が農民組合である以上、提案當時の事情を以てすれば、總同盟と雖も當然それに加はつて行つたであらうし、又加はつて行かねばならなかつたのである。併しながらその後の事情は不幸に向つてのみ進行して行つた。

二　成立に向はしめんとする力

此困難なる事情に於て何の破綻なく完全なる成立に向はしめる力は、提案後如何に動いて行つたであらう。

先づ單一政黨を作ると云ふ合言葉は、何と云つても總てを引き摺つて行く多きな力である。よく／＼の事でなければこの合言葉にさからう事は出來ない一個の强大の力である。若しもこれに逆らへば、逆らつたものは非常な苦境に立たねばならぬであらう。成立せしむる事を欲する者は此合言葉を極端にまで利用する事が出來るのである。そして此合言葉は實際强い力を以て總同盟をも引き摺つて行つた。

次ぎに提唱者が農民組合と云ふ事である。友誼團體のうちでも殊に親しい農民組合の提議であると云ふ事は、何と云つても總同盟を動かして成立に向つて進ましむる大きな力であつた。

次ぎに今一つの力が總同盟を動かして成立に向はしむるべく努めたのである。總同盟内に於ける關東關西の事情は評議會と絶對的な對立狀態にあるのである。併しながら鑛山はその地域的事情及人物的事情からして、分裂當時に於ても關東關西とは自から別個の立場に在つた。勿論鑛山と雖も總同盟の精神を守る事に於て毫も變りはないが、たゞ如上の理由からして對評議會の關係に於て、その感情上關東關西とは亦幾分相違があつたのである。そこで此力が評議會側に働きかけて、その輕擧をいましむると共に、一方關東關西に於ける對評議會の對立的感情を幾分やはらげ且つ牽制する力として動いたのである。之れと同時に評議會側に於ける幾分の勢力もその輕擧妄動をいましむる力として動いたのは事實である。

以上は總同盟の脱退を防ぎ完全なる成立を遂げしむる力の總和であつた。

三　破壞に導いた力

農民組合の提案が何の破綻もなく完全なる成立を遂げるためには、評議會系の絶對の謙遜を必要とする事情にあつたのであるが、此絶對に必要なる要求は不幸にして絶對に破壞されて行つた。そして彼等の屑倒に依る引き摺り政策、乘取り政策利用政策は農民組合の提案以來、愈露骨に無遠慮となつて現はれ來つた。而も彼等は此提案の完成を絶對の必要事としながら、彼等の此露骨な政策が如何に組合間に作用して、自己の希望を裏切りつゝあるかに氣付かず、益々増長を逞ましうして行つたのである。

先づ第一に總同盟に對する屑倒的引き摺り政策は、總同盟が農民組合の提案以前から起してゐた所謂地方政黨に向つて放たれた。總同盟が企畫した地方政黨は、最初から全國的政黨を促進し之れが實現の曉には直ちに解體して之れに加はるつもりで假りに作られたもので、その規約の中にも明かに之れが明文を掲げてゐたのであつたが、一度び單一政黨が提案さるゝや、評議會系の勢力は、徐ろに誠意を以て總同盟と交渉する處なく、直ちに總同盟に對する惡罵となつて現はれ著しくその感情を害したのである。

第二に第一回綱領委員會に際し評議會側が執つた策戰、即ち政治研究會、水平社青年同盟との完全なる協同戰線を張つて會議に臨み他の團體を壓倒せんとした不謹愼な態度は、たゞに總同盟の感情を害したばかりでなく、他の諸團體の感情をも害して、險惡なる空氣を會議續行の上に溢らすに至つた。

第三は、此間に於て評議會側の乘取り政策は愈露骨となつて

只に政治研究會にクーデターを行つて乘取つたばかりでなく、全國の勞働團體に向つても其がなされて行つた。官業、市電自治會、機械聯合會等悉く然りである。たゞに夫ればかりではない、總同盟内にあつて從來比較的對評議會の感情に於て好意を有するとされた鑛夫組合に向つてもその陋劣なる乘取政策の手をのばして來たのである。

併しながら斯くの如き情勢の下に於ても總同盟内の空氣は決して脱退に向つて動いてはゐなかつた。寧ろ成立に向つて動いてゐたので居た。而して總同盟を脱退に向つて絕對に押し進めた直接の原因は、東京に開かれる最後の會議の直前に至つて展開され來つた政治研究會、青年同盟、並に川崎爭議の問題であつたのである。

最後の暗礁たる政治研究會の問題は、寧ろこれが暗礁たる事を知つた總同盟内に於ける成立を希望する分子の積極的行動に依つて圓滿なる解決をなさんと試みられた。併しながら事は志と相違して愈々此問題の解決は難關に陷ると同時に總同盟の反感を刺戟した。一度總同盟が政治研究會の解散を希望する事が傳へらるゝや、政治研究會は寧ろ硬化し、各地の評議會系の地方協議會は、總同盟の聯絡の不備に乘じ、決議宣言を以て總同盟を罵倒するに至つた。そして巧妙にも、その宣言決議には總同盟の支部の名をも印刷したのである。そして評議會政治研究會側は曰く、『見よ總同盟の支部と本部と意見を異にしてゐる。今に總同盟は大混亂に陷るであらう』斯くの如く萬策盡きた最悪の情況の下に總同盟の中央委員會は十一月廿八日朝より脱退を表明した。二十九日午前十一時まで續行された。勿論此長時間に亘る會議は、總同盟は脱退すべきか否かの問題に對してゞあつた。

此間政治研究會の問題に對して農民組合は必死の努力を續けて、やゝその曙光をみとめたのであつた。然しながら時既に遲し！　若しも政治研究會がその會の性質に鑑み自から進んで早くに之れを解決してゐたならば！　殆んど徹宵懊惱と苦悶のうちに續行された總同盟中央委員會は二十九日午前十一時に至つて遂に最後の斷案に到達した。

脱退！　而して總同盟は眞に孤立の儘に！　諸種の事情は脱退せんとする事情が脱退を食ひ止むる事情に打ち勝つたのである！

此決意をなすに當つて總同盟は、漠然たる友誼團體の援助を期待する以外、何の聯絡もなく全く孤立の姿であつた。

單一政黨を破壞すると云ふ汚名を着せらるゝ事、總同盟が孤立に陷る事、此二つは總同盟に執つて致命的な事柄である。此

事實を前にして漠然たる友誼團體の援助を夢見ながら脱退を決意するためには實に二十八日から廿九日の十一時迄の苦悶と懊惱とを要したのである。而も此全き不利を前にしても尚ほ關東關西鑛山悉くが、評議會側と共に單一政黨を作る決意に向はせずして、遂に脱退を決意せしめたのである。何と云ふ悲壯な中央委員會であつたか!

總同盟の脱退に拘らず、農民組合の絶對絶命の立場は、會議をかつて繼續せしめ、その解決策として地方評議會の脱退となり、市電自治會の保留を殘して一日眞に苦惱の中に農民勞働黨の陰慘なる結黨式が擧行されたのである。

而して相次いで霹靂の如く落下し來つたものは何であつたかそれは思ひも設けざる解散の命令!

無産階級の運動者に對して絶對に要求される事は不屈の勇氣と、冷靜なる反省とを以て自己の前に落下し來つた最惡の事態を凝視し、感情にとらへらるゝ事なく、その最惡の事態の上に冷やかに最上の再擧をはかる事である。

今回の事件に就て總同盟の幾多反省すべき點あるは論を俟たない。而して左派に屬する人々は更に又一段の反省を要するであらう。そしてその冷やかな透徹した反省こそ、眞に左派を確立する所以である。從來の如き思ひ上つた惡屬政策、乘取政策は決して眞に左派も確立する所以ではない。農民組合も亦今回の深刻なる經驗に依つて多くのものを得た事は必然である。

更に解散命令の落下に對しては、我々が餘りに敵を度外視して仕事をなし來つた甘さに對して自から苦笑あるのみである。

私は今回我々がなめた苦がき經驗に對して、我々は冷靜なる反省を必要となすものである。たゞ、總同盟が執つた態度に對しては、その絶對絶命の立場を訴ふると共に、何のはかるところもなく突如協同戰線を破つた事に對しては提案者たる農民組合並に多くの友誼團體に對して深かく陳謝するものである。

私は我國に於ける無産階級の政治運動のために再び農民と勞働者との完全なる提携に依つて、愼重なる熱慮の下にそして眞に協同戰線をつくる同志として溫かみの下に再び單一政黨の生れ出づる事を衷心から希ふものである。

農民勞働黨禁止に對する所感

官業勞働　川村保太郎

結黨式の日である。萬歳を三唱して演壇から下りて來た金子氏は突然小岩井氏に飛びついて聲をあげて泣いた。この五ヶ月間左右兩派の間に立つて人しれぬ苦勞を續けて來たこの二人は我國無産階級の解放運動史上に劃時代的意義を有する無産政黨の結黨式を無事に濟ましたので嬉し泣きに泣いたのである。

實際農民組合が全國的單一無産政黨の組織を提唱して以來、全國の無産階級が拂つた努力や犧牲も非常なものであるが、幾度か分裂の危機に瀕した際その中心に立つて來たこの二人の苦心は筆紙に盡しがたいものがあつた。この二人の非常な犧牲そして最後には二晝夜に渉る陣痛の惱みを續け漸やくにして産れいでた無産政黨、農民勞働黨が單に産聲をあげた許りで、結黨後僅かに三時間にして、一片の禁止命令に依り、無慘にも××されて了つたかと思ふと實に感慨無量である。

結黨禁止に就き松村警保局長の談に依れば禁止されたのは綱領に表はれた表面の意味が惡いのではなくその裏に含まれてゐる原則的精神が惡いと云ふのである。否な現在綱領の裏面に不穩な原則があるといふのではなく、黨の中には左傾分子がゐて將來不穩な原則を持つに至る虞れがあるから禁止したと云ふのである。

便利な法律があつたもので我々の政黨の掲ける綱領が如何に穩健なものであつても、その綱領の裏には不穩な精神が含まれてゐる。否な將來不穩な精神を持つに至る虞れがあると當局者が頭腦の中でそう認めればそれでよいのである。それだけで我我が苦心慘憺の結果築きあげた政黨を何時でも破壞して了ふことが出來るのである。あゝ憐れなる法治國の國民よ！　と言ひたくなる。

然し乍ら、善いにせよ、惡いにせよ、それが日本の現在の狀態である。我々は現在許されてゐる自由の範圍内に於いてやつてゆくよりほか仕方がないのである。この點に於いて今回の政黨組織運動は、日本の無産階級全體にとつてよい試錬であつた、

經験であつた。そして將來の政黨組織の運動に一つの標準を示されたものと云ふことが出來る。

即ち禁止された理由は表はされた綱領そのものにあるのではなくて隠くされた綱領、即ち構成分子にあるのである。もつと具體的に云ふと農民勞働黨の内部には政治研究會、靑年同盟等の左傾分子が這入つてゐる。尙將來評議會等も這入つて來ることになつてゐるから不可ないと云ふのである。言葉を換へて云へば階級的單一政黨が不可ないのである。將來政黨を作るにしても單一政黨のスローガンの下に左翼を包含した政黨を作らうとするならばその政黨は恐らく農民勞働黨と同じ轍を踏まなければならぬであらう。我々が全然政黨政治運動に思ひを絶つて了ふならば兎も角、そうでない限りこの點は深く考へて見なければならぬ所であると思ふ。

無産政黨の芽生へは昨年二月三日大阪で開かれた全國勞働組合協議會にあつた。この協議會は總同盟、官業勞働、農民組合、製陶勞働、司厨同盟、自治會、機械聯合、海軍聯盟海員組合等大體に於て主義主張の合致した團體のみが集まり、當面の問題としては政黨組織の協議をしやうと云ふのが主たる眼目であつたのである。けれ共この凡ては失敗に終つた。それは二三の主要な團體が參加しなかつたのと今一つは總同盟が自派系統の組合のみを糾合せんとする陰謀であるとの非難があつたゝめ會合僅かに二回にして流産のやむなきに至つたのである。

その後總同盟は九州民憲黨、足尾公民黨、關西民政黨等の地方政黨の組織に着手したがこの凡ても共産黨一派からは盛んに非難された。そして生るべき政黨は全國的政黨でなければならぬ、階級的利害の上に立つ單一政黨でなければならぬ。と云ふので、全國的階級的、單一無産政黨、と云ふスローガンが盛んに高調されたのである。前の全國勞働組合協議會の失敗と地方政黨の不評判とに鑑み、全國的單一無産政黨のスローガンに應じて農民組合から提唱され組織されたのが今度の無産政黨組織準備委員會である。

故にこの無産政黨組織準備委員會は初めから一つの破綻の上に立つてゐた。何んとなれば單一政黨であるからその内には主義、主張の根本的に相容れざる二つの潮流を包含してゐるものであることは云ふまでもない。この點は主催者に於ても氣がついてゐたので、八月十日に大阪で開かれた第一回會合に於ても評議會側から綱領の大綱だけに就いても論議してをきたいとの希望があつたが、綱領に觸れることは一切避け、只如何にして政黨を組織すべきかと云ふ方法のみを協議し、ハレ物に觸るやうにして會を閉ぢて了つたのである。けれ共破綻は破綻として

現はれずには於かなかつた。第一回綱領規約調査委員會ではこの點が最も露骨にさらけだされたのである。同じ文字で表現されてゐる事柄でも右翼派と左翼派との間には趣旨に於いて根本的に相異のあることが明らかになつた。私共はこの時既に到底終始行動を共にし難きを思ひ、結黨後分裂する位ならば、寧ろ今の内に脱退せんことを心秘かに決心した位であつたが農民組合の切なる勸誘に依り意を飜したのである。

第二回綱領規約調査委員會では我々が消極的態度を採つたので分裂を防ぐため評議會や政治研究會の諸君もいろんな點で成るべく議論を避け讓歩してくれたので、綱領規約の草案は曲りなりにでも出來たのであるが、その後に起つたのが政治研究會及青年同盟の問題である。

これは規約の上で團體加入をし得るものは勞働組合、農民組合以外に一定資格の無產階級的團體は中央執行委員會の審査の上加入せしめることになつてゐたので、左翼派の方では政治研究會、青年同盟等を勞働組合と同樣團體加入をせしめやうと云ふのであるが、これに對して我々の方では政治研究會及青年同盟の會員は大部分評議會の會員であるが故にこれに團體加入を許すと評議會の會員は二重三重に發言權を行使し得ることゝなり、結局出來上つた政黨は左翼派のため牛耳を握られて了ふ慮れがあると思つたので極力これに反對した。斯くて無產政黨組織準備委員會は再び分裂の危機に瀕したのである。

以上述べた通り全國的單一無產政黨と云ふ美しい言葉の中に重大な破綻をはらんでゐたのであるから無產政黨は產れ出する前に既に左右兩派の間に激しい爭ひが續けられてゐたのである。それが二十九日の第三回綱領規約調査委員會の席上突如總同盟が脫退の聲明をしたので爭ひは愈々白熱化した。私共右翼派の七團體は斷然準備委員會を解散せしめて總同盟を加へた右翼派のみの勞働黨を組織せんことを決心したのである。この間に處して農民組合の苦心は一通りではなかつた。一晝夜の間惱やみつゞけて結局評議會を脫退せしめることにしてケリがついたのである。

斯くて我國最初の無產政黨は結黨式を擧げた。けれ共產れ出でた農民勞働黨は依然として分裂の危機をはらんでゐた。それは自治會が準備委員會の席上で結黨式延期の動議を提出し「我我は總同盟及評議會の二團體を融和せしめることは到底困難なりと信ずるが故に黨に加入することを躊躇する」と述べてゐる如く、農民組合、政治研究會、水平社無產者同盟を除いた以外の團體は此點で何れも自治會と同じ程度に躊躇してゐたであらうと思はれるからである。總同盟と評議會との融和困難なりと

云ふことは、即ち左翼派と右翼派との融和困難なりと云ふことである。そして農民勞働黨の內部にも極く少數ではあるが左翼派を含んでゐたことは事實であるから禁止にならなければ結黨後も準備時代と同樣左右兩派の間に激しい爭ひが續けられたであらう。そして農民勞働黨は結局自ら崩壞する運命をもつてゐたかも知れない。

私共は初めから單一的政黨と云ふことに對して疑ひを以つてゐた。故に官業勞働總同盟は今日まで單一政黨でなければならぬと云ふことは一言も云ふてはゐない。右翼も左翼も階級的利害に依つて一團になれと云ふことは、それは一つの理想であるそうしてうまくゆくならばそうする事が一番よいに違ひない。けれ共現實の運動はそう理想通りにゆくものでない。今度の無產政黨組織の運動に際し、農民組合の非常なる努力にも拘はらず終始紛擾の絕へなかつたのは、到底融和し難い左右兩派を打つて一丸にせんとする所に非常な無理があつたからである。

況んや今度の結社禁止の眞の理由が農民勞働黨の內部に左翼分子を包含してゐる點にあつたとすれば、將來政黨を組織するに際し左翼を包含した單一政黨を組織することは事實出來ないと云ふことに歸着するのであるから我々はこの點を根本的に考へなほさなければならぬと思ふ。

農民勞働黨の準備時代

小岩井淨

一　準備委員會の成立

日本勞働總同盟及び組合評議會の分裂は、我國勞働組合の間に大きな旋風を捲き起さうとした。兩者の分裂の原因は勿論全組合の間にどうしても超ゆる事の出來ぬ溝渠が生じたからではなくて、尠くともその一半は單なる指導者の間に於ける感情の衝突であつたと思はれる。併し乍らその分裂は宛かも根本的立場の相違に基づく所謂「左翼と右翼」との分裂、なるかの如く兩者に依つて意識され、分裂した事に依つて、不必要な程度にかうした勢が現はれやうとする形勢になつて來た。

大正十三年の夏日本農民組合中央委員會の決定によつて組織された同組合内の無産政黨組織に關する準備委員會は、その年の十二月半頃に開かれた總會に於て政黨に對する大綱を立て、今後の方針の大體をきめ、可及的速時に他團體に交涉する事を決定した。此の經過は大正十四年三月の日本農民組合大會でも承認され爾來委員會は着々努力し來つたのである。そして總同盟の分裂問題に依つて惹起されつゝある形勢の如きは何等その計畫を躊躇させる事にならなかつた。否寧ろ日本現時の狀勢に於ては、所謂「總ての團體を打つて一丸とせる」政黨が必要である——而して是が組織の提唱には日本農民組合こそ最も適當な地位に置かれてゐる、此の事業の敢行に當る可き使命をもつてゐる、かうした自覺が委員會の内部に昂つて來た。

遂ひに大正十四年六月二十一日附をもつて無産政黨組織に關する「提議」なるものが組合員一千名以上を有する經濟團體（國際勞働會議の勞働代表並に顧問選出資格を有するすべての勞働組合及び二三の農業勞働者組合）に向つて日本農民組合内無産政黨組織準備委員會の名を以て送らるゝに到つた。

右提議の主旨は無産政黨樹立に關する問題は「既に相當の論議も戰はされ」「多少の見解は定つた形勢にある」そこで「殘されたる重要なる問題は各組合が無産政黨の「助産役」として如何なる行動に出づべきやにある。「玆に於て「各組勞働合が共同して一の政黨組織準備に關する機關を組織し具體的に一步を進め」やうではないかといふ點にあつた、

そこで右問題に對する各組合の決定的態度、つまり「綱領規約等具體的内容に關する決定的意見の意味」ではなく、政黨の「助産役」たる準備機關を組織するや否やに就ての決定的態度」を表明し得可き代表者等の協議會開催を主唱したのである。そのために場所は何處を撰ぶか時日も八月中の何日頃を希望するか併せてその回答を求めた。此の提議に當つて、農民組合内の委員會は何れの團體とも前以つて打合はせる事をしなかつた。只提議を送ると同時に神戸大阪等に本部又は有力なる支部を有する團體で從來何等かの關係あるものには特に人を派して「提議」に對する諒解を求めたのである。

かくして八月十日大阪中之島公會堂に各團體の協議會が開かれる運びとなつた。（是等の事情は既に詳細知られてゐるから出來るだけ簡單に摘記する事にしやう）

當日參加の諸團體

中部日本農民組合
日本勞働組合聯合（道）
日本製陶勞働同盟
日本勞働總同盟
官業勞働總同盟
東京市電從業員自治會
機械勞働組合聯合會
日本勞働組合聯合（東野田）

大阪市電從業員自助會
出版勞働組合
日本農民組合
日本勞働組合評議會
大日本船舶司厨同志會

會の順序はまづ農民組合の前川正一君に依つて開會の挨拶あり滿場の一任により議長に同じく農民組合の行政長藏君を推す議事は各團體一名の代表者よりなる「議事順序に關する小委員會」に依つて殆ど決定され協議會は此の報告（委員長細迫兼光君）をきいて承認を與へていつた。

先づ第一の問題は「準備機關成立の可否」である。是は此の協議會にとつては第一義的な重要問題であつた。此の提案の主旨はいふまでもなく種々相違せる立場をもつ各團體が政治の戰線に於ては一個の全階級的な政黨をもつためにその組織のための共同機關を持つ可きや否やといふ事である。議事に入る前當日傍聽の形式で招待されてゐた全國水平社、水平社青年同盟、政治研究會も此の協議會に參加せしめる事が可決され、是等團體の代表者も議席についた上、まづ此の重要問題の審議に入つた。併し此點については別に異議もなく豫想せられし樣に滿場一致可決と決定した。

次ぎの問題は日本農民組合の提議にも附記せられてゐた共同の準備機關を「組織するとならば組織後の方針」を如何にするかにある。まづ此の共同の準備機關を無產政黨組織準備委員會と名づけ、事務所を日本農民組合のうちにおき、事務機關として庶務會計各一名を置くこと、準備委員會は更に第二回會議を開き、それには百名以上の無產階級的團體をも加入させること尚參加勸誘宣傳の機關として關東、中部、關西（神戶、大阪、京都）東北、中國、四國、九州、北海道の十地方に各參加團體の當該地方支部の地方協議會を設置すること。更に第二回會議の決議方法は如何にするか、時期及場所は如何にするか（九月下旬より十月上旬の間で庶務が決定し通知すること、場所は東京）。凡そ是等の事項の決定をみた。尚第二回會議の議題は黨の綱領規約であるとして小委員會は之については各團體に草案を提出せしめ、庶務に整理を一任しやうといふ事にきめて報告したが、政治研究會代表の島中雄三、三輪壽壯兩君より小委員會設置案が提出され討論の末、各團體選出の一名宛委員を構成する綱領規約調査委員會たるものをおくことに決定した。

當日の協議會については折柄日本勞働總同盟分裂の後をうけ果して無事成立するや否やは非常に危ぶまれてゐたが、各團體代表の態度に表はれた互讓と誠意とは豫想以上の靜肅を以て此の日の會合を終了せしめた。たゞ議論のやゝ鬪はされたのは小委員會設置の可否についてと、——之は後より考へれば非常に

いゝ事であつた。若しあゝした機關がなかつたら農民勞働黨の成立と禁止といふ様な結果すら生まずにいろ〳〵な意味でもつて悲觀す可き結果を惹起したのではないかと想はれる――も一つ問題になつたのは庶務の手許に提出する綱領規約そのものの草案の方針についてである。つりま綱領規約の大綱かそれとも具體的なものにするかといふ點である。尤も當時の議論に於ける大綱なるものがどの程度の事を意味するか、つまり極はめてつきつめた根本目標といふ様な處まで意味するのか、それとも綱領規約を草する方針といふ程度のものであるか、此の點についてはそれ程明瞭に說明されなかつた。併し當日の小委員會及び協議會内の空氣が、かゝる大綱に觸れる事を極はめて忌避したといふ事だけは明かに觀取された。云ふまでもなく夫れは樹立す可き黨が如何なる根本原則に依るかを明示することの危險なるがためではない、(農民勞働黨禁止理由の一に黨には別に原則綱領があつてそれが危險だからいかぬといふ點がある!)否むしろ反對に此點を論議する時には各團體各々立場を異にし決して一致に導き得可きものでない事を各團體に於て充分に知つてゐたからである。

尤も討議まとまらず小委員會に附した結果は、調査委員會は設置する、綱領規約の草案は大綱でも細目でもいゝ云々の決定となつた。併しながら玆に云ふ大綱の意味は全く別で唯細目まで起草できぬ場合の「概略」といふが如き意味で用ゐられてゐたそれはとにかく之等の事情を回想しても當時參加の各團體代表が樹立す可き黨の性質について、凡そ夫れが如何なる意味をもつてゐるかといふ事は充分諒解してゐたものと考へられる。樹立さる可き黨は厳密な原則の一致に依つて結合されるものではない。それは實に政治的の協同戰線であり、當面の問題に於て無產階級の利益と幸福とを贏ち得んとする政治行動の組織である。

さればこそ當日作製せられた各參加團體連名の聲名書に於ても『現在日本に存在する凡ての政黨は悉く有產階級を代表する政黨なるが故に我等は是等の政黨に對し最早何ものをも期待しない。されば我等はこれ等のブルジョア政黨に對抗し無產階級の利益と幸福とを仲張すると共に更に進んでその完全なる解放を目的とする全無產階級を打つて一丸とした全國的一大無產政黨の樹立に向つて邁進せんとするものである。』『而してこの全國的一大無產政黨を樹立するには先づ現在既に勞働組合農民組合並びに其の他の團體に組織されたる無產者が助產役として共同する必要を痛感し玆に我等は無產政黨組織準備委員會を成立せしめたる所以である』といつてゐる。

かくして準備委員會は成立した、會の終つた後開かれた茶話會では誰しもこの日の成功を豫想以上であつたといつてよろこんだ。唯それらの人々の中にはこれなら大丈夫だといつた樂觀派と、これからが問題だとする非樂觀派とがあつた様である。

二　第一回綱領規約調査委員會の模様

創立協議會で置く事になつた事務機關の庶務及び會計は、その人選を日本農民組合に一任されてゐた。それの正式の決定は八月下旬に始めて出來た。會計は大阪に於ける勞働運動の舊い恩人であり、現に官業勞働總同盟、特に向上會に縁故の深い金子忠吉氏にお願ひし、庶務は自分がやる事になつた。その前後自分等はいつも農民組合の本部に出かけていつて此の責任重い仕事の準備に着手した。尚農民組合とも諒解を得て岡部眞一君にも助手として手傳つて貰ふ事にした。行政長藏君が時々旅行先から歸つてきては、いつも心配してくれる。同君の好意に依つて小さい柳行李を二個程組合本部から借用した。外に菓子箱一個、準備委員會事務所は最後まで唯之だけであつた。時々自分達は大笑ひした。「看板も要るでせう」といふので行政君が板切れをもつてきた。折柄點呼に郷里に歸つて歸京の途上組合總本部に立寄つた莊原君が「無產政黨組織準備委員會事務所」と達筆を振つた。自分等はその外農民組合總本部の人々からいろ〳〵好意を寄せられ、時々は迷惑もかけながら仕事に努めた。尤も自分は辯護士事務で時々續けて顏を出さなかつたり、なまけたりしたものだが、金子さんはめつたに休みもせずいろ〳〵と面倒をみてくれた。

八月十日の決定では綱領規約の草案は八月中に庶務の手許まで屆ける事になつてゐたが日本農民組合の外にはどこからもやつて來なかつた。九月になつて漸くボツ〳〵と集まつて來た。そこで之等を謄寫版にして各團體に送つた上、愈々綱領規約調査委員會を招集する事にして期日を九月十七日ときめた。

一體綱領規約調査委員會なるものは八月十日の創立協議會の趣旨に依つて、整理のための事務機關で決して各團體を代表した委員が寄つて綱領規約について決定する機關ではなかつた。唯意見の相違あるが如き場合には各團體間の諒解に努める。だから時には細迫委員長の報告に所謂「お使いの役も努める」といふ様なものであつた。併し自分は此の調査委員會の職能を最もよく果すために、委員會自身が團體の草案を基礎にして一個のまとまつた草案を作製するといふ方法が最も便宜ではないかと考へ、期日の通知と共に「調査委員會の議事に關する私案」と題する簡單な意見書を送附した。

第一回調査委員會は九月十七、十八兩日大阪中之島公會堂の小集會に於て開かれた。

當日の出席委員

官業勞働總同盟　川村保太郎　日本勞働總同盟　西尾末廣
日本農民組合　行政長藏　日本勞働組合評議會　渡邊政之輔
日本製陶勞働同盟　荒谷宗二　東京市電自治會　濱田藤次郎
大阪市電自助會　森田満五郎　日本司厨同盟　村松信太郎
政治研究會　佐野袈裟美　中部日本農民組合　森義一
水平社青年同盟　高橋貞樹　全國水平社　上田音市

八月十日に加盟せる大日本船舶司厨同志會は他の二組合と合同して日本司厨同盟として加盟し、出版勞働組合は評議會に合併した事により獨立加盟をとり消し、更に全國水平社無產者同盟の成立加盟に依つて全國水平社と水平社青年同盟の加盟が取消され、無產者同盟の代表者だけ此の會議の半から加はつた。參加團體のうち兩方の組合聯合及び機械聯合は調査委員會には不參であつた。

先づ調査委員會はそれ自身一つの案をまとめてゆく事にした。この方針のもとに綱領の整理から始めた。綱領については根本的態度よりきめてゆきたいと主張した者もあるが根本的態度といふが如きものについてはまとまるものでない、形の上に現はれた具體的な項目についてまとめればいゝといふ反對意見も出で、結局一項目毎にまとまるものはまとめ、意見の分れるものは保留する事にして審議をすゝめる事になつた。

ところが規約よりも簡單に片づくものと豫想された綱領について、なか〳〵議論が沸騰し、容易にまとめる事が出來なかつた。かくして二日間の委員會は、規約について殆ど唯各團體の簡單な意見の開陳をしたに止まり、綱領についても多くの保留案を殘し、前途頗る暗澹たる感を抱いたまゝ一先づ之を切り上ぐる外なかつた。

今自分は一々の議論を茲に紹介するの餘裕もないし、第一それ程的確に記憶してゐるものでもない、又その必要もみとめないから全部省略する事にする。唯次ぎの如き項目が保留になつたといふ事實に依つて略々議論の内容が察知出來はしないかと思ふ。

一、「司法制度並びに警察制度の改革」の採否
二、「殖民地自治制度の樹立」と「殖民地の解放」との何れを採るか
三、「軍備の徹底的縮少」の採否
四、「土地國有」の採否
五、「外交の公開」の採否　その他略

議論の基調についても明確に紹介する事は、自分は避けたいと思ふ。たゞ大體感じたまゝをいふならば政研、評議會、無產者同盟の委員諸君の議論は恐らく誰もが意想外で面喰ふほど高

飛車のものであつた。始めから盛に發言を求められ、多くの事を論じ、主張し、なか〱後へは退いてくれない。某君は雜談の時(それだから、冗談かも知らないが)『自分の主張は自分の團體で決めた事だからみんな採用してもらはねば困る』といふ樣な事をいふ。自分は反省を求めたい意味で『一體あんな事を云つてゐてまとまると思ふのか』と問へば他の某君は、『議論はしたつていゝちやないか、議論はするだけしてまとまらねば二次會議(第二回總會の意味)でやつて、そこで多數決できまればその通りついてゆくんだ』といふ。調査委員會の性質として討議する事がいゝか惡いかは別の問題である。併し議論と一概に言つても議論にはその調子もあり、態度もあり、凡そ特定の問題については意見や主張についても大體限られた範圍がある筈である。自分の立場から更に遺憾であつた事は某君がY委員に向つてたとひ雜談の場合であつても『君等のやつてゐる運動は階級意識を覺ます運動ではないんだ』とやつてY君の憤激を買つた事である。――之は一例であつてこうした態度が更に委員會の空氣を妙にギコチないものにして了つた。

N委員は『僕は日和見主義だから多數につくんだ』と冗談を云つたが議論が沸騰については大體まとめる樣にした。H委員もさうであつた。最後までS、W、T諸委員を向ふに廻はして奮鬪したのはA委員であつた。K委員は途中で意見を吐かなくなつて了つた。他の委員の中には始めから殆ど意見を出されない人もあり、中途歸へつた人もある。自分はA君に感謝したくなつた。同君が最後まで奮鬪してくれなくて、みんな默り込んで了つたら一體どんな事になつたのだらう。

新聞紙などは調子の高い委員達の意見を理論派と呼び他を現實派と呼んだ。併しなぜ現實派は理論派に壓倒されなければならないだらうか。理論派といふが苟くも實際運動については現實を充分に考慮しない理論が一體何になるのだらう。而して現實派といふが現實派には理論があり得ないものだらうか。實際運動に關する限りそこには尠くとも獨斷でない確信がなければならない筈だ。之を以て宙に浮いた理論は征服する事が出來なければならない。自分はこんな事をあの當時考へながら『困惑しきつて議長』をつとめた。しかしそれよりも遙かに痛切に感じたのは小委員會の空氣である。それはアリ〱と巨大な變化を表はして來た。それをちつとも感知しないで小數の委員達は依然として高飛車な議論を鬪はしつゞけた。此等の人達は如何にして自分達の主張を貫かうかといふ事だけ考へて來ただらうけれども、現實の客觀的事情を充分に考慮のうちに入れ、いかにして大衆的一大無產政黨を樹立させるかといふ點については

殆んど考慮してゐないかの如く思はれた。もつと自分に皮肉な事をいふ失禮を許されるなら、綱領の項目について「制定」といふ處を「獲得」としなければならぬといふ主張を執拗に個々の場合に生かさうと焦慮して、結局全體に於いていかなる大なるものを失ふ事になるかといふ様な點は殆ど考へてゐないかの如くであつた。自分は大なる慨嘆の中に十八日夜を以て調査委員會を一とまづ閉ぢる事にし、第二回の會合については別に時日の打合等をしなかつた。

三、その後の推移

第一回調査委員會を終つた自分は報告書の作製をすつかり園部君にたのんで、直ぐと九州へ旅出たねばならなかつた。どうやら暗礁に乘りあげたのではないかといふ不安も抱き、併し又多分に個人的性格の關係したこれだけの事で團體間の協同戰線が破れる様な事はないであらうとの樂觀も出て、結局自分は時間の推移を待つ事にしやうと考へた。九州では主として農民組合の仕事などで四五日費やし九月廿何日大阪に歸つた。

かへるなり事務所に出ると仁科君から「官業は準備委員會から脱退する相だ」とまづ最初の情報をきかされた。官業勞働の機關紙に載つてゐた「準備委員會の將來」といふ川村君の論文も讀んでみた。それから後の暫くの間は「官業だけではない、總同盟も農民組合も脱退するといふがほんとですか」と多くの人々に聞かれたものである。併し自分としてそんな事はある筈がないといふより外に何も言へなかつた。

かうしてゐるうちに十月になつた。東京には政治研究會の大會、日本勞働總同盟の大會がつゞいてゐた。前者が調子の高い議論で景氣をつけた一方後者の大會は悲觀的意見が多かつたが結局「單一政黨實現のために努力する」といふ決議になつたといふ事をきいた。まだ併し官業勞働に積極的な曙光見えず、日本農民組合自身はつきりとわからなかつた。自分は唯十月十三日に開かれる農民組合の中央委員會を待つの外なかつた。農民組合は政黨組織のために設けた十名の小委員會を督勵してどこまでも單一無産政黨樹立のために積極的活動をする事を申合はせた。小委員會は在阪各團體を歴訪して運動を開始した。

第二回の調査委員會は同じく大阪中之島公會堂に於いて十月の十八、十九、二十の三日間開かれた。前回の出席委員中更替した人は、日本農民組合前川正一君、評議會中村義明君、政治研究會黒田壽男君、水平社無産者同盟上田音市君、それに中部農民は缺席し新に組合聯合（東野田）の阪本孝三郎君が加はつた。

此の調査委員會に於ては急進的現實的意見(?)の差異以外、殊に政黨の組織に當つては積極的、消極的意見の對立を見ない事はなかつたが屢々懇談を重ねいづれもよく讓歩して、大體に於て黨の綱領と規約とに關する骨子の決定をみる事が出來た。委員會は屢々食事等を一緒にとる事によつて、更にそれ以上第二次準備委員會總會及びそれにつゞく結黨式等についても打合はせ、中央執行委員長、書記長、會計等の人選についても懇談を交はす餘裕をもつたのである。

準備委員會の仕事は之でほゞ目鼻がついた事になる。事務所は擧げて第二次の準備委員會並びに結黨式の準備に沒頭した。まづ二回の調査委員會に於て決定された綱領規約の再整理のために、在阪委員會等もやり、綱領の分類排列、規約の成文等を起草した。會場等の準備は關東地方協議會の濱田君にその交渉をたのんだ。

一方第二回調査委員會の終了と共に、共れ以前より設立されてゐた地方協議會にも活動を促し、未設置地方にはその設立をすゝめた。地方協議會は八月十日の決定の樣には統一されなかつたが、相當に活動を開始した。

かくして第三回調査委員會十一月廿九日、第二次準備委員會總會十一月三十日、結黨式十二月一日と期日も確定され、日本の無產階級運動にとつて殆ど劃時代的意義をもつ此の光榮ある日を喜び迎ふるだけになつてゐたのである。ところがブルジョア新聞は一方安部磯雄氏黨首に擬せらるといふ樣な賑やかな記事と共に、屢々無產政黨の危機を傳へた。それは云ふまでもなく所謂「政研除外問題」に絡んだ流言蜚語であつた。併し準備委員會の進行については、幾度びか危機がつたへられた。それを何とかやつてきた。既に基礎工事が終つた今日、政研問題によつて分裂といふ樣な破目に陷る筈は斷じてあるまい。自分は——「政研問題」についてそれ程の重大な運命を決する暗礁になる樣な事はあるまいと考へてゐた。廿六日夜大阪驛から三等急行に身を投じて廿七日朝市電自治會本部を訪れ、準備委員會事務所を借りておく事をたのんだ。

果してその後、日本農民組合内の對策小委員會の奮起となり政治研究會の解散の聲明によつて、總同盟、自治會その他に對する積極的行動の勸告となり、「政研」問題は略々解決される事になつたのであるが、廿九日第三回調査委員會に先立ち日本勞働總同盟は農民組合に對し準備委員會を脫退しなければならぬ旨を傳へ、市電自治會本部に於てひらかれた右調査委員會の席上、麻生久氏は脫退の聲明をして退去された。玆に於て調査委員會は之以上議事を進めてゆく事も出來ず「準

備委員會を如何にす可きか」といふ問題について懇談を重ねた。自治會、官業勞働、製陶、組合聯合、機械聯合、自助會、中部農民、日本司厨の所謂八團體は大體に於て準備委員會の解散を主張した。此點まとまらず翌三十日となつたが依然として混沌たるものであつた。明治會館には定刻より入場者あるもなかく開會も出來ぬ。幾度でも休會をつゞけたが、果然八團體と日本農民組合との提携となり、暫く組合評議會にも脫退を促し總同盟と同時に近き將來に單一無產政黨の傘下に集まるとの條件によつて之に脫退を承諾させ午後五時に到つて第二次總會は漸く成立し、翌日の結黨の準備を調査委員に一任し、かくして大正十四年十二月神田青年會館に於て農民勞働黨の結黨式を擧ぐる事が出來たのである。黨は僅か三時間の生命をもつて內務大臣の禁止命令に接した。

自分は之等の事について書いてみたい事も澤山にあるけれども奈何せん時間と頁數とを許されてゐない。他日筆を改めてせめて書いてみたい。尻キレトンボになつて頗る可笑しいものになつたが、結黨直前の事情を克く諒解し之が批判を誤らざる資料としてでも役立てば幸甚である。只自分が嘗つて準備委員會の庶務であつたといふ事よりして萬事に注意して記し來つたつもりであるが何にしても結黨前後の疲勞甚しきに拘はらず夜汽車で大阪に歸らればならぬ事情を眼前に控へてなぐり書きをしたのであるから、妄言に亙つた點があらば是非に寬恕を乞ひたいものである。(一二、六)

總同盟の脫退と評議會の脫退

評議會　中村義明

(一)

十一月二十九日には無產政黨組織準備委員會から突如日本勞働總同盟が脫退し、無產政黨組織の上に大きな障害を與へた。この障害を除く爲に三十日には日本勞働組合評議會が犧牲的に脫退した。

斯くて政府の暴壓の爲め結黨後數時間にして解散の悲運に當面はしたが、兎にも角にも我國無產階級運動の上に重大なる一轉機を劃すべき『日本農民勞働黨の結黨』を見た。

然しながら總同盟、評議會の兩翼を失つた農民勞働黨は完全

た意味に於ける全國的單一政黨ではなかつた。この事はかへす〴〵も同黨の爲めに遺憾な事であつた。

然らば如何にして、この悲しむべき二つの不祥事は惹起せられたか？　我國無產階級運動の上に靜察すべき必要且重大な問題である。

（二）

評議會の脫退は、總同盟の脫退が政黨組織の上に投じた障害を除くが爲めであつた。從つて先づ、何故に總同盟は準備委員會から脫退したかといふ事が問題である。

總同盟の發した脫退理由の聲明書、並びに麻生政治部長の宣明に依れば、總同盟の脫退は、主義主張の違ふ評議會と、協同して政黨を組織する事は出來ない。而して（一）政治研究會を除外せんとする總同盟の主張に對し、全國各地の協議會から起つた猛烈なる反對運動を、評議會、政研等の煽動の結果と見、（二）川崎富士瓦斯紡績爭議に於ける關東地方評議會の應援を罷工破りの爲めと見、これが決意を强くしたと云つて居る。

（三）

共處で吾々は先づ總同盟が脫退の決意を强くしたと云ふ二つの點に就いて考へて見よう。

第一に政治研究會除外反對運動が全國的に起つたのを、總同盟では、評議會、政研の理由なき煽動によるものと云つて居る然し吾々は、これは總同盟幹部が自身の行動に依つて大衆運動を批判せるが爲めの錯覺に基く獨斷であると考へる。といふ意味は、大衆が政研除外反對の運動を、あゝした公然の討議に移そうとするが如き運動を起すことなく、總同盟幹部が政研を除外しようとして爲した運動の如く、少數組合幹部の間を歷訪して秘密條約を結ばうとすべきだとの見地に立つてからの憤慨であるから。

彼等は常に、こうした見地に立つて居るから、凡ての大衆運動に怖れ戰き、これに幻影を畫き、それ共產主義者の陰謀だ、煽動だと騷ぎ廻るのである。

無產政黨は決つして、少數組合幹部の爲めの政黨ではない、無產大衆の政黨である。政研除外の問題は彼等少數幹部のみに依つて決せらるべき問題ではない。須からく大衆に、政研除外反對論者はこう言ふ、然るに吾等は斯く信ずるがと、示すべきである、然るに彼等は何故か、大衆の討議を避け少數組合幹部のみに依つて事を決つしやうとした。——如何に彼等の行動が大衆の支持を得てゐない斷獨的行動であるかといふ事は、總同

盟内の組合が幾つも政研除外反對運動に參加して居る事が何よりの證據である。——この彼等の非大衆的、非無産階級的行動に起つて大衆が抗議し、その陰謀を粉碎せんとした事は當然の事である。

若しそれを大衆の意志ではなくて、評議會、政研が煽動したからだと云ふに至つては、大衆の意志と相反する事でも、煽動さへすれば大衆は動くものだと考へる大衆運動の本議を辨へぬ者の妄言である。

總同盟の言ふ、評議會の煽動云々は、評議會の大衆的行動を云つて居るのである。

（四）

夫に總同盟では、富士瓦斯紡績爭議に對する關東地方評議會の決死的應援を罷工破りであると言つて居る。而してその理由とする處は、關東地方評議會が配布した『惡虐なる資本家と對戰せる、川崎富士瓦斯紡績爭議團を應援せよといふ見出しで『勞働者の幸福の爲めの鬪爭には一切の感情や利己心を顧みる事を罪惡と信ずる、……評議會の組合員は別な要求を持つて居るが、此度の爭議に付いて我々の要求を拋棄し、總同盟の要求を支持し、その貫徹の爲めに死力を盡すものである……如何なる場合であらうと共同の敵を前にしては勞働者は同一の戰線に共同しなければならぬ。總同盟の指揮の下にあるからと云つて我評議會がサボタージュするならば、それは感情によつて勞働者の道德を潰したものである。謂んや他組合に屬する勞働者諸君も亦組合を舉げて、全日本の婦人勞働者及青少年勞働者を××しつゝある、惡虐なる紡績業資本家の一角を崩壞し、八十萬の勞働者に我等の堡壘、勞働組合の組織を覺醒せしめ、奮起せしめよ！　富士瓦斯紡績爭議を應援せよ！　共通の敵、資本家の前に共同戰線を完成せよ！』といふ意味の應援ビラの中に、總同盟幹部が從業員に代つて會社に提出した希望及び要求は、『復職の條項を除く外は凡て會社側が考慮しますと云へば、大勝利解決と云ふ具合に解決が出來る樣な要求である。我が所屬組合員はそれとは別な要求を持つて居る。單に考慮を願ひます、へい考慮しますと云ふ具合に解決せんとするものではない。然しながら我々は勞働者の幸福の爲めの鬪爭には……』云々との文句を舉げて居る。當時評議會は四百名の應援團を派遣して居つた。然るにそれが總同盟に取つては斯のビラと共に『評議會の腹黑き割込み』應援に名をかりて自己組合の宣傳と罷業の攪亂』と映じ、評議會の應援拒絕となつたのである。これは評議會の實に遺憾とする處である。こ

の問題については吾々は今靜かに無産大衆の裁斷を希望し、待つて居る。然しながらこれ丈の事は言へる。それは評議會は罷業破りの團體でもなければ反動團體でもない。從つてこの事のために、無産階級の協同戰線黨を評議會と共に組織する事は出來ないといふは、餘りに感情的、利己的であつて大衆承服の理由とはならない。

（五）

二つの問題は總同盟の云ふが如く、脱退を強く決意せしむる理由とはならない。

然らば『主義主張の違ふ評議會と協同して政黨を組織する事は出來ない』といふ總同盟脱退の根本的理由はどうか？　總同盟の態度は全くそれであつた、——但し鑛夫組合並に九州聯合會等の態度は相違しておつた——故に彼等は全力を擧げて全國的單一政黨の組織を防止しやうとした。それは麻生政治部長、山名部員の地方政黨組織實行の聲明に依つて窺はれるが如く、總同盟は無産階級の歴史的使命について充分なる認識がなかつた爲め、政黨組織について獨自の意見を持ち、全國的單一政黨組織に對しては最初から熱意はなかつた。然しながら無産大衆は農民組合の提唱による全國的單一政黨を切實に要求せるが故、止むなく隨從して來たのである。こうした總同盟の態度が、全國的單一政黨組織準備委員會に如何に反映せるか自から明かである。故に總同盟脱退の因は準備委員會の創立と同時に萌くまれて居つたのである。若しそうでないとすれば、總同盟幹部は無産階級の協同戰線についての認識を缺いで居るが爲めである。何んとなれば、無産大衆の要求する政黨は、原則綱領による結合ではなくて、無産階級の現實當面の要求に基く、即ち行動綱領による結合である。故に無産階級の利益を代表せる凡ゆる要素の結合せる協同戰線黨、階級的、大衆黨である。從つてその中には原則綱領の一致を求むる事の出來ない幾つかの要素のある事は固よりで、その一致せないものが一つに即ち全階級的に行動綱領によつて結合する處に、全國的單一政黨の强味があり、その力を今、日本の無産階級は求めて居るのである。即ち吾々の組織すべき政黨は全國的單一政黨であり、協同戰線は吾々の絶對的態度で總同盟幹部の云ふ、協同戰線の絶望は利己的結果の獨斷であり、その放棄は實に階級戰線に立つものゝ許すべからざる無責任なる態度である。

總同盟の云ふ脱退の理由は竟に吾々を承服せしむる何物をも持つて居ない。然るに總同盟は脱退した、何故か？　それは彼等が大衆に聲明せる理由の裏に秘めて居る腹黒き陰謀の爲めで

あつた。即ち、總同盟幹部の指導權の下にある政黨を組織せんが爲めであり、無產階級の政治的勢力を分裂せしめんが爲めの脫退である。

（六）

吾々は我國に於ける主要無產階級團體である總同盟のこの態度を痛く悲しみ、我國無產階級運動の爲め、その反省を切望した。然るに彼等は竟に反省しなかつた。爲めに全國的單一政黨の組織は一時全く危機に瀕した。評議會の脫退は實にこの危機を救ふが爲めであつた。

即ち總同盟の脫退により、政黨組織準備委員會を解散すべしとの主張があつたので、評議會は、その準備會の解散が、脫退した總同盟を加へた委員會を再び成立せしむるための解散となるのでなく、日本に於ける無產階級の政治鬪爭の組織を二分し兩者對立せしむるの結果に至る事が明かに看取されたので極力解散の防止に努めた、その結果、準備機關の解散を防止し、全國的單一政黨を組織せしむるが爲めには、總同盟が復歸するまで評議會は一時準備機關より脫退せざるを得ぬといふ悲しむべき矛盾の現實に當面した。

そこで如何なる犧牲を拂つても全國的單一政黨の樹立を希望する評議會は、凡ゆる努力と、各團體の互讓的精神によつて進み來つた準備機關より悲痛、斷腸の思ひを以つて、政黨組織が乘り上げた暗礁を突破せしむべく脫退を決意した。

斯くて評議會は、六月以來全國的單一政黨組織に全力を傾けて協力し來た準備機關よりの脫退を悲しむだが、然し評議會の犧牲的態度が全國的單一政黨の實現に貢獻し得た事を何よりの喜びとしたのである。

人或は、總同盟、評議會の加つて居らぬ「日本農民勞働黨」は全國的單一政黨にあらずと云ふかも知れぬ。成る程、同黨は完全な意味に於ける全國的單一政黨ではなかつた。然しこれに對立した新たな政黨を組織する餘地は少しも殘されてゐなかつたのである。何故ならば、評議會は總同盟の復歸と共に入黨し總同盟に對しては、積極的に復歸を促す運動が、農民勞動黨に依て試みらるゝ筈であつたからである。從て農民勞働黨は近き將來に於て全無產大衆を抱擁することの出來る可能が豫想せられ、實質上には日本に於ける唯一の無產者黨であつたのである。

然し凡ては、今は無き、日本農民勞働黨樹立の物語りとなつた。されど二十九日と三十日の出來事は、必ずや近く再び問題となる無產政黨組織の上に味ふべき大きな教訓を殘して居る。

（十二月六日）

無産政黨の解散

大山郁夫

一

第五十一議會に於ける普選法制定の當然の結果として産まれ出たところの、日本での最初の無産階級の政黨であつた農民勞働黨は、結黨後數時間内に、當局から解散の命令を附きつけられた。

無産政黨は、普選法制定の當然の結果として産まれ出たものであつたと同時に、それが産まれ出て來なければ普選法制定の意義が減却されるものとも考へられて居たものであつた。たしかに政治行動肯定の立場を取つた無産階級の側に於ては、皆が一齊にさう考へて居たのであつた。彼等は、他の諸階級がブルジョア諸政黨を通して、議會に於て、それぞれにその階級的利益を主張し、その階級的生存表現を行つて居る通りに、彼等もまた、新たに制定された普選法の下に、彼等自身の政黨である無産政黨を通じて、同じ議會に於て、無産階級としての彼等の階級的利益を主張し、その階級的生存表現を行ふのが、當然至極のことだと考へたのであつた。しかもそれは、立憲主義の原則の下に於ても當然すぎる當然だと、彼等は考へてゐたのであつた。否、ひとり彼等がさう考へてゐたばかりではなく、一般の言論界に於いても、また特に操觚界に於ても、少くとも進歩的諸分子の間には、同樣の論據から、無産政黨の出現を歡迎したものも少からず見られた。

それにも拘らず、その無産政黨として産まれ、農民勞働黨と命名された新政黨は、この世の光を見たかと思つた間もなく、疾風迅雷の勢で發せられた當局の禁止令の下に、忽ち窒息せしめられた運命に會つた。

それは、普選法制定の殊勳者であることを自ら誇つてゐる憲政會内閣の下に起つた出來事である。それは、他の政黨にも率先して『憲政の常道』を賣り物にして來た憲政會内閣の下に起つた出來事である。しかもそれは、最近頻りに『社會政策』呼ばはりをして無産階級に呼び掛けることに依つて、來るべき總選擧に對する準備をしてゐたやうに見えてゐた憲政會内閣の下

に起つた出來事である。
　かうした事實は、民衆をして、現代ブルジョア政治の表裏について、樣々のことを考へしめるであらうことは、たしかである。かうして、ブルジョア政黨の本質を不用意の間に晒らけ出して、それを民衆の眼前に不信用なものに映ぜしめることは、必ずしも無産政黨の手を須つまでもなく、ブルジョア政黨が自それらをしてゐるのは、何といふ皮肉な現象だ！　ブルジョア政黨が自ら活きる努力をすることの裡に、それの早晩の死を招來する原因が含まれてゐる、といふことが、そこに暗示されてゐるではないか？　一旦は叩き潰ぶされた無産政黨が、軈がて猛然と起き上がつて來るのは、ただ時日の問題である。と同時に、今勝ち誇つてゐるブルジョア政黨が、いつかは沒落の運命を辿らなければならぬといふことも、我々には一つの必然として見られる。ネメシスの手は誤まるまい。我々は希望を棄てない。

二

　無産政黨の準備期間は永かつた。勞働運動の政治行動肯定への轉換が叫ばれてから、既に數年になる。が、それが一のムーブメントとなるやうになつたのは、一昨年九月に於ける關東地方大震災の後であつた。昨年の六月に、無産政黨の促進と無産階級の政治教育との目的を以て、政治研究會が産まれた頃からこの趨勢が一層着々と進捗し始めた。更らに本年の八月に入つて、日本農民組合の主唱の下に無産政黨準備委員會が設けられてから、無産政黨組織計畫が、ますます具體化して來た。それから、それと相呼應して、『全國的單一無産政黨組織へ！』の叫びが盛んに擧げられて、それが遂にこの運動の上に於けるメインカーレントとなるやうになつた。
　それ以來、來るべき無産政黨の綱領、組織、規約などに關する審議が引き續き行はれた。もとより、その間に豫期された通りの幾多の難關があつたが、それらは皆順次に突破されて、無産政黨組織運動は、愈よその最後の歸着點に達しようとするばかりになつた。
　ところが、十二月一日の結黨式を目睫の間に控えての十一月の半ば頃から、意外にも、政治研究會を無産政黨から除外しようといふ運動が、日本勞働總同盟を中心とする一團から起つたことが傳へられて、暫らくの間は時ならぬ波瀾を捲き起したがその問題は、結黨式の前日に政治研究會が自發的に結黨式後の解體を聲明したので片附いた。そしてそれで我國の無産階級が數個月來熱心に待ち望んでゐた無産政黨の出現へのあらゆる障

得が撤去されるかと思つてゐると、更らに第二の意外の事件が突發した。それは、同日に於ける總同盟の無産政黨からの脫退の宣言であつた。

事こゝに及んで、無産政黨の成立も全然絕望狀態に陥つたかと危ぶまれた。けれども、去る八月以來無産政黨組織運動の主力となつて立ち働いて來た日本農民組合、及びその他の數團體の幹部らの、その間に於ける絕大なる斡旋の努力と、その當日脫退を宣した總同盟が糺彈の標的にして居た組合評議會の謙抑的態度の下に於ける自發的脫退の聲明とに依つて、その危機が辛くも乘り越されてかくて豫てより最右傾派と見られてゐた總同盟と、最左傾派と思はれてゐた評議會とを除外した中間諸團體から成る無産政黨が出現する手順となつた。が、それは無論全國的單一無産政黨の理想から見れば、缺陷のないものではなかつた。が、それは、與へられた狀況の下に於て望み得られる限りのものには相違なかつた。

十二月一日の結黨式場では、市電自治會の脫退といつた、小波瀾もあつたが、大體からいへば、式は非常に靜肅に秩序正しく行はれた。一言でいへばそれは我國の政界に於ける一新勢力として花々しく打つて出ようとした農民勞働黨にふさはしい外觀を呈したものであつた。が、それの進行中に於てやがてそれの頭上に下されようとした鐵槌が用意されてゐたのであつた。否今少し立ち入つていへば、新政黨の運命は既に、總同盟が脫退を決意した時に定まつてゐたのであつた、——と、今我々に考へられる。この間に於ける總同盟の態度は、様々の批判の對照とされるに相違ない。しかし私は、茲でそれを試みることを避ける。それは、一つには私に今さうしてゐる遑がないためでもあるが、同時にまた、私が總同盟の脫退に多少關聯してゐる政治研究會の一會員であるためでもある。

以上は、農民勞働黨の成立から解散までの經過報告のつもりで書いたものではない。それには、別にその人があらう。私は寧ろただ、無産政黨がその成立までに如何に多大の難關を潜ぐつて來たかの概觀を示すために、それを書いたのである。しかし、それがこれほどの難關を潜ぐつて來て始めて、成立したところに、政府がそれを一擊の下に粉碎する價値を認めた一根原があつたのであらう。我々は濫りに他人の心事を忖度することを好むものではないが、しかし外面に現はれた事實から見て、こさう結論しない譯に行かないのである。殊に、内務當局の解散命令の說明を見るに及んで、我々のさうした考へは、ますます强められるばかりである。

三

內務當局の解散命令の理由とするところは、大體に於ては、(一)農民勞働黨成立までの經過に於て、治安妨害の點が認められること、(二)黨の構成分子中の主力に共產黨系の人物のあること、(三)黨の綱領中に見方に依つては過激と考へられる或る個條のあること、といふ位に歸着するのである。

が、事實上、黨の成立の經過から見れば、過激と見られる主張が、漸次に穩健と見られる主張に取り替へられた推移の跡が現はれるのである。それは少くとも、綱領中に含まれてゐる、諸項目の變遷の上に、最も明白に現はれてゐるのである。殊に結黨前の數日間に於いては、少しでも過激に響きさうな嫌れがあるやうに考へられた諸項目は、片端から順々に或は削除され或は緩和されて、結局結黨式に於て發表されたやうな、或る一部の人々には骨拔きのものと見られたやうなものにまでなつたのである。尤も、その點を知り拔いてゐる當局は、發表された綱領は行動綱領にすぎないので、その奧に別に原則綱領が用意されてあることを暗示するやうな口吻を弄してゐるのである。いかにも、發表された綱領が單純に行動綱領にすぎないものだといふことは事實だが、しかし別に原則綱領が用意されてあることを諷することなどは、事實を無視した誣言である。若し假りにさうした事實があるならば、當局はそれを公表して、彼等が農民勞働黨の成立を治安妨害と認定した根據を明示すべきであつた。だが當局は、毫もその事實を公表しないで、ただそれを治安妨害と認定したことだけを言つてゐるのである。かうしたことが、立憲治下に於て許されるべきことか否かは、無產階級の側に於てよりも、寧ろブルジョアジー中の立憲主義者の側に於て考察されなければならない問題である。

同樣のことは、農民勞働黨の主力中に共產黨系の人物があるといふ聲明についても言はれるべきである。尤も、共產黨系の人物といふ言葉が既に幾通りにも解釋される言葉であるが、しかし、さうした人物の黨中に存在してゐることが解散理由中に算へられてゐるところを見ると、それは恐らくロシアの共產黨と連絡を保つてゐる人物といふ意味で用ひられてゐるのであらう。だとすると、それは黨中の何人であるかといふことは、我々が先づ知りたいことである。が、更らに一步を讓つて、さうした人物が黨中に實在してゐるにしたところで、黨そのものはそれに依つて引摺られて行かうとしたものではなくて、却てそれの存在を無視して黨自體の目的を決定しようとしたものであることは、綱領決定までの經過を見ても明白である。それ故に

我々は、この點に於いても當局の說明することを首肯する根據を持たないのである。

發表された綱領が決定されるに至るまでの經過は既に述べたが、しかしそれでもまだその上に過激若しくは不穩當な個條が掲げられる虞れがあるらしく認められた場合には、當局は事前に警告を發することも出來れば、事後に削除を命ずることも出來たものと我々には考へられるけれども、當局がそれを敢てしようともしなかつたことは、あの解散命令が豫定的のものであつたことを、我々に思はせるに充分である。

我々から見れば、黨の綱領に如何なる項目が含まれてゐやうとも、苟しくもそれが直接に且つ明白に現行法規に觸れないものである限りは、黨をして自由にそれを議會で主張せしめるべきである。否、我々でなくとも、苟しくも一般の議會主義を肯定してゐるものである限りは、誰でもさう考へてゐる筈であるこの點から見れば、當局の農民勞働黨に對する解散命令は、議會主義蹂躪の處置だとも、我々には考へられるのである。さうなると、それは單に我々に取つて重大問題であるばかりでなく同時に一般の議會主義者たちの問題でもある譯である。

四

あらゆる狀況から判斷して、農民勞働黨は現憲政會內閣の政略の犧牲となつたものだと、我々は見てゐる。が、この點に關しては、私は玆では何も言はないことにする。

が、無產政黨組織の計畫者たちから見れば、農民勞働黨の解散は、非常に貴重なる試錬となつたものである。少くとも、彼等が將來その經驗を善用しようとする覺悟をさへ持つ限りは、彼等は今日の失敗を明日の成功への飛び石とすることが出來るのである。殊にそれは、彼等が現に有して居る實力と、周圍の社會事情との釣り合ひを、充分に彼等に示した。彼等の實力は現在に於ては縱し小さいものであるにもせよ、それは何ものもが阻止することの出來ない不可抗の新興勢力である。が、それを繞ぐるものは、立憲國家のカームフラージュの下にある、警察國家であつて、そしてその下に於ては、立憲主義に最も忠實であるやうに思はれてゐるものが、案外にそれに冷淡であるといふ事實が目立つて見えてゐるのである。しかもそこには、無產政黨に對するあらゆる悪辣な逆宣傳が無制限に行はれ、あらゆる不當な誤解が故意に挑發されてゐる。かうした事情の下に於て、無產階級運動の前に開かれてゐる道は、數年前の議會否認に立脚する直接行動主義に復歸するか、それとも飽くまで現在の行き方を押し進めて、萬難を排して無產政黨を最後の完成

へ導くかの外はないのである。しかも我々の見るところを以てすれば、さきに無產階級運動を政治行動肯定に轉換せしめた諸原因は、今尙ほ儼存してゐるのである。それ故に、無產政黨運動を今回の失敗に依つて挫折せしめる必要は、全然見られないのである。日本農民組合が農民勞働黨の解散後に發した聲明にそれの再興の決意を示してゐるのは、この點から見て我々にも共鳴が出來る。ただそのためには、自己の實力と周圍の狀況との間の釣合に對する透徹した洞察と、萬難を排して進むための鐵の如き意志と鍛錬とが必須のものであることを、今度の經驗が何ものよりもよく我々に教へる。

未だ財界の黎明は來らざるか

青木得三

吾々は今日本邦經濟界の前途に一脈の光明を認むるものである。吾々が此の言を爲す所以のものは決して一時の氣休めを言ふのではない。凡そ一國の政治家といはず、實業家といはず、勞働者といはず、苟くも經濟界に關係する者が、前途の歸趨に就いて、何等の定見なく、唯盲目的に、行き當りばつたりに日々行動するといふことは、個人に取つても、國家社會に取つても、極めて危險であり、且極めて悲しむべきことであるから、社會一般に對し吾々の信ずる所を披瀝して、其の批評を仰ぎ度いと考へるのである。

今日の我邦は到る處不景氣に見舞はれて居る。最近農村に於ては米と繭との相場の良かつた爲に、多少好景氣といふ樣な感があつたけれども、それは一時的の事であつて、米價も昨年秋の豐作の結果漸次低落するものと見なければならぬ、都會に於ては殆んど總ての方面に不景氣の風が吹き捲くつて、三越、松屋のやうな大きなデパートメント・ストアから銀座あたりの中商店、さては淺草六區の小商店に到る迄賣行が極めて少いといはれて居る。失業者の數は漸次增加せんとして、勞働階級の間には悲痛なる叫が擧げられんとして居る。

此の時に當つて經濟界の前途が如何に成り行くであらうかといふことを、豫斷するは勞働者の爲にも中産階級の爲にも將又資本家の爲にも頗る肝要なることであると確信する。而して吾々が經濟界の前途に一脈の光明を認めるといふのは決して根據なくして云ふのではない。私は先づ第一にトレード・サイクルの學説即經濟界に於ける景氣不景氣循環の理法を信ずるものであることを前提として述べなければならない。私は玆でトレード・サイクルの學理を說明しやうとも思はない、又十年に一度必好景氣が來るといふやうな窮屈な說を信ずるものでもない。然し乍ら、私は好景氣は決して永續すべきものでなく、又不景氣も決して永續すべきものでなく、非常なる好景氣から不景氣に轉ずる中間に於ては屢恐慌を生ずるといふ程度に於てトレー

ド・サイクルの學說を信ずるものである。而して不景氣より好景氣に轉ずる中間に於ては一度必ず金融緩漫、物價低落の時期を經過することをも信ずるものである。

最近我國の經濟界に於て顯著なる事實は第一に金融緩漫の徵候である、成程預金協定利率は未た引下げられないけれども、割引步合やコールマネーは一ケ年前に比較すると少からず低落して居る。殊に顯著であるのは公債社債發行利廻の低下であつて、一ケ年前に比較すると一分方の低落を示して居る。次に顯著なる事實は外國貿易の好轉であつて、昨年十一月末迄の輸出は二十億九千七百餘萬圓、輸入は二十三億八千五百餘萬圓、差引輸入超過二億八千八百餘萬圓であつて、之を前年同期に比較すれば輸出に於て四億七千百餘萬圓を增加し、輸入に於て一億二千百餘萬圓を增加し、差引輸入超過に於て三億五千餘萬圓を減少して居るのであるから、非常な好轉といはねばならぬ。第三に顯著なる事實は外國爲替相場の恢復したことであつて、最近には橫濱正金銀行の建相場對米爲替電信賣四十二弗半となつたので、之を昨年の初三十七弗半に低落した時と比較すると正しく五弗の恢復を示して居るのである。

斯樣に私が我國經濟界恢復の象徵たる事實を列擧すると、反對論者は必云ふであらう。君は我國の金融が緩漫になつたといふけれども、それは唯大都會に存在する第一流銀行の手許丈のことであつて、大都會に在つても二流以下の銀行の手許は少しも樂ではない、殊に小都會及田舍の銀行の手許は逼迫して居る、從て我國の金融は決して緩漫ではないと。私も亦我國の第二流以下の銀行の手許が樂でないことを知つて居る。然し乍ら凡そ一國の金融の緩漫とか逼迫とかいふことは同時に總ての銀行に付いて同じ程度に起り得るものではない。若し第一流銀行の手許に金が有り餘つて應募又は買入すべき確實な有價證券もなくなつたならば、第二流以下の銀行に對して融通をするやうになるであらう。金融の緩漫は大銀行より小銀行に、都會より田舍に漸次波及すべきものである。それは啻に金融の緩漫のみではない。好景氣不景氣の循環も、物價の騰貴低落も何れも皆大都會より小都會に、小都會より山間僻地に波及すべきものであつて、一國社會に於ける經濟界の變動が同時に同程度に總ての地方に起ると考ふるが如きは、其の愚も亦甚しと謂はねばならぬ。或は亦我國現在の金融緩漫が都會の大銀行にのみ限られて居る故に變則なる金融緩漫であると論ずる者も少くない。然し乍ら私の信ずる所では金融緩漫が都會の大銀行から田舍の小銀行に及ぶのは極めて順當なる經路であつて、私は之を正則なる金融緩漫の徵候であると信ずる。吾々は決して今日我國の經

濟界が好景氣であるとは云はない、唯吾々は前途に一脈の光明を認めるといふのである。我國の經濟界は好景氣に向つて進みつゝあるといふのである。故に我國今日の金融緩漫が都會の大銀行に限られて居るとしても、それは決して吾々の説を傷けるものではなくして、却て吾々の説を裏書するものに外ならない。

次に反對論者は又言ふ、我國の外國貿易は好轉したといふけれども、これは震災直後の大正十三年との比較である、大正十三年の一月乃至三月には彼の復興材料輸入税減免の結果四億七千九百餘萬圓の輸入超過を見たのである。その大正十三年と大正十四年とを比較して好轉して居るといつて喜ぶのは當らないと言ふ。私は此の議論を聽く毎に論者は一體何を論じて居るのであるかを疑はざるを得ない、我々は我國の經濟界が好轉しつゝあることを論じて居るのである。好轉しつゝあるといふのは、大正十四年が大正十三年よりも好況であることを論じて居るのである。決して大正七八年我國經濟界が好景氣の絶頂に在つたときと大正十四年とを比較して居るのではない。大正十三年が震災直後の年で復興材料の輸入税減免の爲に非常な輸入超過を見たればこそ我國の經濟界は悲境のどん底に沈倫したのである。その時よりして我國の經濟界が漸次恢復しつゝあることを吾々は論じて居る、從て大正十三年の貿易と大正十四年の貿易とを比較するのは當然のことである。思ふに經濟界景氣不景氣の循環は恰も延々として一貫せる山路の如きものである、吾々は大正七八年の時に居つた山の頂と今日吾々の居る場所との高低を論じて居るのではない。吾々の今辿りつゝある路が登り坂であるか降り坂であるかを論じて居るのである。若し又登り坂でもなく降り坂でもなく平坦なる山道であるとしたならば、吾々の前途には登り坂があるか、降り坂があるかを論じて居るのである。かくしてこそ、始めて經濟界前途の吉凶をトすることが出來るのではないか。若し吾々が大正十三年の貿易と大正十四年の貿易とを比較することを笑ふ者があつたならば、私は却て彼等がインダストリアル・サイクルの理法を解せりや否やを疑はざるを得ない。

吾々が我國經濟界の前途に一脈の光明を認むるといふ説に對して最有力なる駁論を提供する者は、我國の物價が未だ低落しないといふ事實を擧示するものである。此の駁論は反對論中の最有力なるものであると私は考へる。日本銀行の調査に係る物價指數に依れば我國の卸賣指數は之を英米の兩國に比較して次のやうな趨勢を示して居る。

東　京　倫　敦　紐　育

大正三年七月	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正四年平均	一〇一・六	一二九・二	一一三・八
大正五年(同)	一二二・九	一六八・三	一三六・六
大正六年(同)	一五四・七	二一四・四	一八〇・五
大正七年(同)	二〇二・六	二三六・〇	二一六・七
大正八年(同)	二四七・八	二四六・八	二一五・七
大正九年(同)	二七二・八	二九七・四	二一七・三
大正十年(同)	二一〇・八	一九〇・一	一三一・三
大正十一年(同)	二〇六・〇	一六七・三	一四〇・〇
大正十二年(同)	二〇九・五	一七〇・二	一五四・八
大正十三年(同)	二一七・三	一八二・六	一四八・六
大正十四年一月	二二四・八	一八五・九	一六一・〇
二月	二三一・〇	一八六・〇	一六〇・四
三月	二一五・〇	一八二・五	一五九・八
四月	二一二・二	一七七・四	一五八・一
五月	二〇九・七	一七三・八	一五三・八
六月	二一〇・三	一六九・六	一五七・三
七月	二〇八・六	一七三・三	一六〇・〇
八月	二一〇・六	一七三・五	一六四・五
九月	二一一・六	一七二・六	一六二・七
十月	二一〇・八	一六八・七	一六三・五

故に論者は我國の物價が大正三年七月の物價に比較して二倍一分強であるに對して、倫敦は一倍六分八厘、紐育は一倍六分三厘であるから、我國の物價は未だ大に低落すべき餘地がある。從て之が低落し終つた後でなければ景氣は恢復しないといふのである。私も亦大體に於て論者の說に贊成するものである。但私は大正三年七月の物價を百とした指數が必しも倫敦又は紐育と同一になることを景氣恢復の必要條件と考へて居るものではない、何となれば大正三年七月に於ける我國の物價と倫敦又は紐育の物價とは何れが高かつたかと云へば、殆んど總ての人は倫敦又は紐育の方が高かつたと考へて居るであらう。景氣恢復の前提として必要なる物價の低落は戰前に比較して倫敦又は紐育と同じ程度になることではない、物價がこれ以上に低落しないといふ確實なる見込の付く所謂どん底に達することである。將來物價はこれ以上に低落することはない、多少なりとも漸次上騰する見込である場合には、商人は多額の商品を仕込むに躊躇しない、製造業者は其の製造數量を增加し工場の規模を擴張するに躊躇しない、斯くの如くして景氣は徐々に恢復するのである。不幸にして我國の物價は前表に示すやうに大正九年以來未だ著しい低落を示して居らない。尤も大正九年の二

七二・八に對して大正十三年の二一七・三は相當の低落であるけれども、未だ將來此の以上の低落はないといふ確信の付く所迄は行つて居らない。若し大正十二年の大震災がなかつたならば、我國の物價はもつと早く低落したであらう（卽大正十一年には二〇六に下つたものが、十二年には却つて二〇九・五となつたのである）震災の爲に滅失した我國の富卽經濟財貨の集積は幾十億の巨額に達したにも係らず、通貨の數量は著しい縮少を見ないのであるから、震災の爲物價低落の勢を阻止したのは爭ふべからざる事實である。然し乍ら最近に至つて私は我國の物價が更に低落するであらうと信ずべき理由を發見するに至つた。其の一は勞働賃銀の低落し始めたことである、其の二は爲替相場の恢復し始めたことである。

抑、我國の物價引下策としては大正九年以來種々の方法が講ぜられた、或は公設市場の設置、或は消費節約の運動等其の數は決して少くないけれども、未だ充分なる效果を奏しない、而して此の間に在つて今日迄發生しなかつた現象にして物價低落の原因となるべきものは勞働賃銀の低落と爲替相場の恢復と通貨の收縮とである。

商工省の統計課が本年四月以來發表して居る所に依ると、我國の勞働賃銀は最近著しく低落し始めた。卽左表の通である。

（大正十年乃至十二年の全三箇年平均賃銀を百とする）。

	大正十三年	大正十四年	減
四月	一〇四・三	一〇四・一	〇・二
五月	一〇四・二	一〇三・二	一・〇
六月	一〇四・三	一〇二・九	一・四
七月	一〇四・四	一〇二・六	一・八
八月	一〇四・一	一〇二・五	一・六
九月	一〇四・三	一〇二・五	一・八

卽前年同期間に於ては賃銀指數の高低相錯綜して居たのであるが、昨年四月以降は漸落の步調を辿つて居る。勞働賃銀は生產費の最重要なる部分を占めるものであるから、勞銀の低落は卽物價低落の原因であることは疑のない事實である、私は勞銀の低落は失業者の增加と相伴ふ現象であると信ずるもので、勞働階級の爲に誠に悲むべき事態であると考へる。尤も物價が先づ低落して然る後に勞銀が低落するならば、必しも勞働階級の爲に悲しむには足らないのであるけれども、我國の今日は物價未だ著しく低落せずして勞銀が先きに低落し始めた感がある。私は通貨の縮少に依つて先づ物價を低落せしめ然る後勞銀を下降せしめて、互に因となり果となつて物價を更に低落せしむることを、日本の現在の社會に就いて特に切望したものであつた

が、事は私の望と違つて勞働賃銀が物價よりも先に低落し始めた。私は此の點に就いて我國の勞働階級の爲に滿腔の同情を寄せるものであるけれども、勞銀の低下し始めたことは物價の低落する前兆であるのは如何にしても否定することが出來ないのである。

次に論ずべきは爲替相場の恢復である、即横濱正金銀行は對米爲替建相場を十月二十日四十弗二分の一から四十弗四分の三に引上げ、十月二十九日四十一弗に、十一月四日四十一弗二分の一に、十一月十八日四十二弗に、十一月二十八日四十二弗二分の一に引上げたのであつて、四十日間に二弗の回復は誠に驚くべき現象であると云はねばならぬ。私は此の回復の原因が貿易の好況のみから來て居るとすれば左迄喜ぶには當らないと思ふ、何となれば我國の貿易は下半年に於て出超であつて、上半年に於て入超であることは例年繰返される事象であるから、それが爲の相場恢復であるならば、本年上半季には再下落すべき筈であるからである、私が今回の相場恢復を特に喜ぶ所以は政府の實行しつゝある正貨の現送が此の相場の恢復に與つて大に力ありと信ずるからである。或る論者はいふ、今回の相場恢復は紐育に於て思惑で多額の圓を買つた者があるからであると。然し乍ら私は論者に問ひ度い、何故に紐育の人が思惑で圓を買ふのであるかと。それは圓が將來騰貴すると考へたからである。何故圓が將來騰貴すると考へたのであるか、それは日本が正貨を現送し始めたからではないか。

大正六年以來金の輸出を禁止して一毫の金貨をも海外に出さなかつた日本が、大正十四年の秋に政府自ら正貨の現送を開始したことは、私をして云はしむれば、正に日本の經濟史に特筆大書すべき一大事件であつた。私は當時の日本國民が欣喜雀躍して此の事實に對すべき筈であつたと思ふけれども、東京兜町の一角に於て一日株式の暴落を見るといふやうな何等の理解なき奇現象を呈した。流石は世界金融の中心と唱はるゝ倫敦のタイムスやフイナンシヤル・タイムスは此の報道を耳にして之は日本が名義のみの金貨本位國から眞正の金貨本位國に復歸するのであつて、爲替相場は速に回復するであらうと評論した。

私は日本が正貨現送を繼續する限り爲替相場は上騰するものと信じて居る。而して爲替相場の上騰は大に我國の物價を低落せしめる所以であると確信する。何となれば我國民の消費する財貨の少からざる部分は輸入品又は輸入品を原料とするものであるからである。日本は大正十四年一月から十一月末迄の間に八億七千二百餘萬圓の棉花と一億一千三百餘萬圓の羊毛と一億二千餘萬圓の米及籾と一億餘萬圓の油粕を輸入して居る。綿織

物と毛織物と米と農產物との價は此等の輸入品が爲替相場の低落して居る爲に高價であるに因つて如何に高くなつて居るかは多言を要しないことである。世の中には爲替相場は安定して居れば宜しい、必しも上騰する必要はないと論ずる者がある。若し我國に於て物價を低落せしめる必要なく、或は物價を低落せしめずして景氣を恢復せしめる途があるならば、私は敢て多辯を弄しない。然し乍ら私は今物價低落の必要を說いて居るのであるから、どうしても爲替相場の上騰を力說しなければならない。綿織物と毛織物と米の騰貴は必や他の物價をも騰貴の趨勢に向はせる。加之私は今唯一億圓以上の輸入品を擧げたのみであるけれども、小麥、豆類、砂糖、木材、毛織絲、鐵、毛織物及機械類も亦何れも各五千萬圓以上の輸入があるのであるから、爲替相場の例へば二割の低落は卽日本國民の消費する多數物品の價格を二割騰貴せしめる理由となるのである。

世上屢爲替相場の恢復は輸出を減退せしめるから、却て景氣恢復を妨害するものであるといふ議論を聞く、此の議論は大に攻究に値し且反駁を要する謬論であると信ずるから茲に聊詳細に亘つて論破して見度いと思ふ。議論を進むるに先つて私は第一に吾々の立場を明にして置かねばならぬ、吾々は景氣恢復の前提として物價の低落することを要件と思ひ、從つて景氣恢復の前提として爲替相場の恢復することを必要と考へるものである。成程論者の考へる如く輸出超過の時代は卽好景氣であつて、輸入超過の時代は卽不景氣である。私をして更に一層剴切に立論せしむれば、私は通貨の膨張しつゝある時代は卽好景氣であつて、通貨の收縮しつゝある時代は卽不景氣であると言ひ度いのであるが、暫く一般の所說に從つて輸出超過卽好景氣、輸入超過卽不景氣と立論する。

然らば爲替相場の低落は論者のいふ如く果して輸出超過を來すや否や。成程爲替相場が低落すれば或る種類の貨物の輸出は增加する、例へば我國の綿糸、綿布の如きものである。然し乍ら輸出超過といふのは輸出と輸入との差額であるから、輸出額は增加しても輸入額も同樣に增加するならば輸出超過額は增加しないのである。之れは極めて明白なる事柄であるが、世間には往々爲替相場の低落に依つて輸出は增加するけれども、輸入は增加しないと考へる人がある。誤れるの甚しきものである。成程爲替相場の低落に因つて輸出品の數量は增加するけれども、輸入品の數量は增加しないのは事實である。然し乍ら外國貿易の輸出超過といふのは數量の比較ではなくして金額の比較である。輸出品の數量增加に因つて圓を以て表示せられた輸出品の價額が增加すると同時に、輸入品の數量は增加しないけれども

爲替相場の低落の爲に図を以て表示せられた輸入品の價額は增加する。然らば則爲替相場の低落に因つて外國貿易が輸出超過になるといふのは最奇怪なる議論ではないか、論より證據、日本は外國爲替相場の低落した時代に輸出超過であつたか否か。

論者は或は爲替相場の低落に因つて輸出品の數量は增加すると同時に輸入品の數量は減退する、故に輸出超過となると云ふかもしれない、然し乍ら不幸にして我國の輸入品中其の價額の大なるものは何れも皆前述の如く棉花、羊毛、油粕、米、麥、豆、砂糖、木材、毛織物、鐵、毛糸、機械といふやうな國民生活又は產業上の必需品であつて爲替相場の低落の爲に其の輸入數量を減し難いものが大部分を占めて居る。加之我國は現在輸入超過であるから輸出價額の一割の增加を以て輸入價額の一割の增加を償ふことは出來ない。

私は景氣恢復の前提たる物價低落の前提として爲替相場上騰の必要を說いて居るのであるから、此の以上爲替相場に關する議論を進める必要がないかもしれないが、世の中にはたとひ輸出超過にならないでも爲替相場低落に因る輸出數量の增加は景氣恢復の原因であると考へて居る人があるやうであるから、此の點に就いて尙一言を辯じ度い。一國社會は單純なる輸出數量の增加に依つて何等得る所は無いと信ずる、輸入數量の增加に依つて國民の消費すべき財貨は增加する、故に輸出數量の增加に依つて交換に輸入數量の增加を來し得るならば國民經濟上得る所があるけれども、爲替相場の低落に依る輸出數量の增加は寧ろ輸入數量の減少を來す虞のあるものである、少くとも輸入數量の增加を來すものでは決してないから、國民經濟上利する所はない、又一國社會に存在する財貨の數量は却て減少するのであるから、物價の低落する所以でもない、尤も個々の輸出商は輸出數量の增加に依つて利益を受けるであらうけれども、國民經濟上から考へるときは、輸出品の生產に要したる勞働力を廉價に外國に供給する結果となるのである、又輸出超過に非ざる單純なる輸出數量の增加は通貨を膨張せしめるものでもないから、其の意味に於ても亦景氣恢復を意味するものではない。

最後に私は物價低落の原因たる通貨の收縮に關して論ずる必要がある。通貨の數量と景氣不景氣の循環との關係は前に述べる樣に、通貨の膨張しつゝある時代は即好景氣、通貨の收縮しつゝある時代は即不景氣であると私は信ずる。通貨が收縮の極點に達した時は即今後通貨は漸次膨張すべき筈である、少くともそれ以上の收縮はないのであるから、經濟界の前途は唯好轉あるのみである。而して通貨と物價との關係に付ては玆に詳論する場合ではないけれども、通貨の收縮は物價低落の最重大なる

原因であるから、通貨の收縮が極點に達した時は即大體に於て物價の最低落した時である、此の意味に於ても私は物價の低落は景氣恢復の前提であると信ずるのである。

我國の經濟界に於て物價低落の前提として必要なる通貨の收縮が未た顯著でないことは私の常に遺憾とする所である。日本政府が目下現送しつゝある正貨は嘗て小額紙幣の準備であつたもので、現に日本銀行券の準備たるものではないから、此の現送に依つて銀行券發行高の收縮を來すことはないけれども、私は政府が其の所有する正貨を現送し終つた曉には、銀行券の準備たる正貨を現送することに依つて、發行高を收縮せしめる時期あるべきことを期待し、且切望して居る。斯樣にして物貨の低落は其の究極に達するであらう。

之を要するに私は我國經濟界の前途に一脈の光明を認めるものである。其の證據として私は金融の緩漫となり始めたこと、貿易の好轉し始めたこと、勞働賃銀の低落し始めたこと、爲替相場の恢復し始めたことを述べた。斯の如きは何れも皆我國の經濟界が不景氣から好景氣に向ひつゝあることを證明するものである。私は勿論現在我國の經濟界が好景氣であるとは考へない、又既に好景氣が始まりつゝあるとも云はない、唯吾々は前途に一脈の光明を認めるといふ、吾々は今暗黒の世界を歩みつつある、然し乍ら前途には一脈の光明が輝いて居るといふのである。

或る論者は現在我國の經濟界を見渡して唯暗黒のみの世界であるといふ、何等の樂觀すべき材料がないといふ、私は反對に我國現在の經濟界には多數の樂觀すべき材料がある。然し經濟界は未だ不景氣の域を脫しないといふのである。例へば論者は我國の外國貿易が將來殆ど永久に輸入超過であらうから我國の經濟界は永久に不景氣であるといふ。私も我國の外國貿易が近き將來に於て輸出超過になるであらうとは考へない、然し乍ら同じく輸入超過と云つても六億の輸入超過と一億の輸入超過とは大なる相違である、我國の貿易外受取勘定は大正七八年好景氣の時代に於ては一ケ年五億に達したことがあるといふ話であるが、最近不景氣のどん底に沈んでも尙一ケ年一億內外を上下して居るといふことである、然らば貿易の輸入超過が一億に止る時期が來れば、我國の通貨はその時以上に收縮する理由はない、即通貨收縮の極點であつてそれより好景氣は始まるのである。故に我國の外國貿易が近き將來に於て輸出超過にならないといふことは決して景氣が恢復しないといふ根據にはならない、吾々は寧ろ物價を出來得る限り引下げて、輸入超過を出來得る限り少からしめなければならない。繰返していふ、物價の騰

貴しつゝある時代は好景氣であるが、物價の騰貴そのものは必しも好景氣の徴象ではない、物價の低落しつゝある時代は不景氣であるが、物價の低落そのものは必しも不景氣の徴象ではない、極度に低落したる物價が騰貴し始めるのは好景氣の初期であり、極端に騰貴したる物價が下落し始めるのは不景氣の初歩である。我國の物價は大正九年の二七二・八から二一〇・八迄低落した、而して最近の歩調は更に低落を示さうとして居る、其の極點に達するのも遠きではない、其の極點に達したときは即好景氣の第一歩である。故に私は今吾々の辿りつゝある山路は暗黒の谷底にあるけれども、前途には一脈の光明を認めるといふのである。

大正七八年我國の經濟界が好景氣の絶頂にあつた時に、我國の實業家、政治家、勞働者は殆んど皆其の好景氣の永續すべきことを考へて、何等の警戒をしなかつた爲に、大正九年三月の激變に遭遇して再起つことの出來ない傷を被つたではないか、その時に至る迄此等の人々は非常なる好景氣の後には必恐慌の來るべきことを知らなかつた、是れ恰も足下に狂瀾の逆捲いて居る斷崖の上に來て、海の中に落ちる迄それを知らなかつたのと同一である。日本の政治家、實業家、勞働者は再び其の過ちを繰返さうとするのであるか、金融の緩漫は變則であり、貿易の好轉は未だ大正七年に及ばず、勞銀の低落は悲むべき現象であつて、爲替相場の恢復は輸出貿易を阻害する所以であると云つて經濟界の前途に何等の光明を認むる能はずといふのは、恰も宿醉未だ醒めず、日三竿の高きに上る頃『未だ黎明は來らざるか』と家人に問ふの類ではあるまいか。

私は決して日既に三竿の高さに上れりとはいはない、然し乍ら東天かすかに一沫の黎明を認める、鷄は曉をつげんとする、吾等は褥を蹴つて起たなければならぬ。(完)

無産階級運動に於ける婦人の問題

山川菊榮

一　プロレタリアと性的差別觀念

最近に無産政黨の問題に關聯して、無産階級運動に於ける婦人の地位如何といふ問題が、男女の鬪士の間に多少の注意を喚起するようになつて來た。此事は在來この種の問題に對して殆んど何等の考慮をも拂はうとしなかつた日本の無産階級運動の上に、新しい發展の機會を作るものとして、甚だ喜ぶべき現象だと云はなければならない。そして此問題を一層徹底的に研究し、討議することによつて、無産階級運動に於ける婦人問題の性質を明かにし、之に對する明白な行動の理論と方針とを得ることは、吾々の運動全體の上に重要な意義を持つのである。

けれども遺憾ながら、吾々の指導者の中には、今猶ほ婦人の問題を無産階級運動の問題とすることそれ自身に何等の意義を認めぬ者、又は寧ろ之を單に問題とすることにさへ敵意を持つ者が見られる有樣である。吾々は何千年來、私有財産制度の上に築かれ、同時に亦たそれを維持するための支柱としての女性の隷屬に基づく差別觀念を神聖なる道德の名に於て强制せられ、且つそれを甘受して來たのである。此差別觀念は、あらゆる隷屬狀態に對する反逆の指導者たるべきプロレタリア自身の中にまで、一種の心的習慣として、根强い感情となつて巢くうてゐる。『男女七才にして席を同じうせず』式の封建的な習慣の結果として、男女は、性的關係より以外に友として同志として相接近し、協同の行動を採る機會と習慣とを全く缺いてゐる。私有財産制度の下に於ける特徵的な現象である此男女間の差別觀念は、殊に封建的遺習を脫せぬ我國に於て甚しく、無産階級の男女間にも、階級を共にする結果としての兩性の共同利害が此差別觀念に妨げられて明白に理解せられぬまでに至つて居る。例へば多くの婦人は、家庭より外の世界を知らぬ結果と

して、一切萬事家庭中心の利己主義に立脚し、直接自己の家庭の利害に關するより外の一切の問題を自己の生活圏外の事と考へ、家庭外の問題について男子と共同の義務を負ひ、責任を分つの必要を、寸毫も理解し得ない狀態にある。

他方、男子も亦た、婦人を自分自身と同じ人間として考へる習慣が無いので、現在の社會に於ける婦人特殊の隷屬と搾取の形態について、直接自分自身の問題として考へるまでにそれに對して痛切な利害關係を感じ得ない。そして婦人の隷屬は、それ自身に於て獨立した、全無産階級の問題から遊離した、特殊の、婦人のみの問題であつて、それと無産者の階級的隷屬との間に、そして又資本主義の社會組織の全構造との間には、何等の有機的な關係も有り得ないかの如くに考へてゐるのである。

かような態度の必然の結果として、婦人問題—即ち婦人特殊の搾取や隷屬の形態に關する問題は、無産階級の指導者によつて全然省みられずに來た。隨つて男女勞働者の間の溝渠は、男子勞働者の進歩の急激なるに連れて益々擴大され、兩者は階級的利害の一致によつて相結ぶ代りに、性による差別觀念に捉はれて分裂對峙せしめられて來たのである。斯樣な傾向が如何なる危險を伴ふかを知る前に、吾々は先づ此等の態度を代表する意見について知る必要がある。

二　婦人問題の否定と自然生長論

今日、無産階級運動の指導者の間に、男性中心の男女關係そのものを直ちに肯定する程反動的な思想を持つ者はある筈がない。たゞ問題は、何人も等しく認める男女平等の原則を、單に抽象的な原則として承認するだけに留めるか、特にその原則を實際的に確立するために闘ふか否かといふ點に歸着するのである。今日猶ほ我國に於ける指導者の大部分は、單に抽象的な平等の原則を承認するより以上の積極的な態度を以て婦人問題に臨むことを、無産階級發展の上に特に重要な要素だとは考へてゐないらしい。其等の人々の態度は、大體次の三つの範疇に入れることが出來る。

一、無産階級の男女の間には既に平等の原則が確立せられて居る。隨つて女性隷屬の事實はブルジョア階級には在り得ても、無産階級には在り得ない。故に無産者は之を問題とする必要がない。

二、今日の社會に於ける女性隷屬の事實は之を認める。けれどもそれはひとり無産階級にのみ存することでなくて、ブルジョア階級にも共通の、一般的な問題である。隨つて此事實は、單純な、純粹な、プロレタリアのみに關する階級

的問題でないから、プロレタリアの立場から問題にする必要がない。少くともプロレタリアの男子が自分自身の問題として、婦人と協力して戰はねばならぬ問題ではない。

三、現在の社會に於ける一般的な女性隷屬の事實も又それが勞働婦人の隷屬と關係のあることも、更に又、勞働婦人の女性としての隷屬が、勞働階級の全體の運動にとつて有害な作用をしてゐる事實も認める。けれども現に在るがまゝの勞働婦人は、餘りに後れすぎ、餘りに無智に過ぎてゐる。隨つて之に階級意識を持たせ、階級鬪爭に參加させるとは不可能である。故にさういふ方面に努力することから起る精力の浪費を省いて、一層容易にして、一層效果の顯著な男子勞働者の組織に全力を集中するとが得策である。そして男子の力で新しい社會が建設された後、吾々は始めて婦人の問題を省みることにしよう。

無産階級運動に於て、積極的に婦人の問題を考慮する必要がないといふ人々の擧げる理由は大體右のようなものである。この三つの態度は表面上それ〲異つてはゐるが、その根底には共通の精神が横はつてゐる。それは無意識の間に、無産階級に於ける男子の問題と女子の問題とを區別して、それに輕重の別をおいて考へること、及び且つ運動の他の方面に於てはどうあらうとも、少くとも婦人勞働者の運動に關する限りに於ては、彼等が全て最も消極的な、不活潑な自然生長論者たるに甘んじて居ることである。

三　無産階級に於ける女性隷屬の事實

(一)の意見について云ふならば、今日、女性の隷屬がブルジョア階級と無産階級とに共通の事實として存在することを否定するのは余りに盲目的である。單に無産階級にも其事實が存在するのみならず、却つて實際上ブルジョア階級に於けるよりも女性の隷屬の程度が甚しい事實を吾々は認めざるを得ない。是はブルジョア階級は既に封建的思想習慣から脫して、自己階級の内部に於ては、或程度までブルジョア・デモクラシーを承認し、隨つて婦人の權利をも認めてゐるに拘はらず、彼等が、無産階級に對する場合には、搾取の目的のために、飽まで封建的な思想習慣を存續せしめてゐる結果である。云ひ換へれば、ブルジョアジーは、自分自身もはやそれに支配されてゐないに拘はらず、プロレタリアを支配し、壓伏する武器としては、どこまでも封建的思想習慣を利用してゐるのである。

所が多くのプロレタリアは是を意識しない。そして自分らの接する極めて狭い範圍の例外的な男女關係—男女が平等にして

自由な關係に立つ―を以て全無産階級の男女關係の現實の法則と思ひ違へ、ブルジョアの利益のために維持せられてゐる、プロレタリアの間の女性隷屬の事實を看過して居るのである。

若し或特殊のプロレタリアの家庭に夫婦の平等が實現されてゐるといふ事實を以て、其階級全體に平等の原則が實行されてゐるといふ意味に解し得るのであつたなら、今日、大抵の家庭は共産的生活を營んでゐるといふ事實から、もはや×××が社會の原則として採用されてゐる、といふ結論にさへ飛躍し得られる筈である。然し吾々の冷靜な觀察は斯樣な突飛な結論を承認しない。管々しく云ふ迄もなく、今日に於て最も封建的な男女關係が殘つてゐるのは、ブルジョア階級ではなくしてプロレタリア階級である。そして、プロレタリアが此事實を意識しないといふことは、彼等がそれだけ完全にブルジョアジーの思想的支配の下に在ることを證明するものに外ならない。

第二に、女性の隷屬は、各階級の婦人全體に共通の問題であつて、特にプロレタリア婦人のみの問題でなく、隨つて無産階級運動の取扱ふべき問題でないといふ說がある。然しながら其等の論者と雖も、新たに生るべき無産政黨が『××××××を擴大し、階級鬪爭の自由を獲得する』手段として政治上におけるデモクラシーを要求することには反對しない。樞密院、貴族院の廢止、言論、集會、結社の自由、選擧權擴張の要求等が、當然ブルジョア階級をも包含するものである限り、之が純粹にプロレタリアのみの階級的要求であるとは誰か云ふことが出來よう。にも拘はらず、プロレタリアが之を要求するのは、ブルジョアのためではなくて、プロレタリア自身の立場からするのである。即ちプロレタリアの立場から之を要求して之を利用することが、明白に有利だからである。封建的社會關係の主要なものである女性の隷屬に對する戰ひも同じことであつて、それが單に、ブルジョア社會の內部に於て男子と對等の權利を求めることに留まる限りは、それは飽までブルジョア・デモクラシーの範圍を出るものでない。故に資本主義の社會組織を承認して、其範圍に於て男女の平等を求めるにすぎぬフェミニストの立場からの要求は、同じ要求であつても無産階級運動の取扱ふべき問題ではない。けれどもプロレタリア婦人が要求する社會的デモクラシーは、政治上のデモクラシーの場合と等しく、資本主義を維持する目的のためでなく、階級鬪爭の自由を擴大する目的のためにするものである。隨つて此意味に於て、女性の隷屬に對する戰ひは、ひとりプロレタリアの婦人のみならず、男子にとつても等しく重要な、階級的性質を帶びたものでなければならぬ。

若し男子と女子とが、資本家と勞働者との間のように、利害

の相反した人類の二大階級を形成して居るならば、婦人の問題は男子の問題ではあり得ず、随つて男子は婦人の問題に對して責を頒つ義務もなければ必要もない。此場合には、恰かも勞働者の問題は勞働者だけで解決することが本當であるように、婦人も亦、婦人だけで自己の問題を解決せねばならぬし、又當然さう爲し得る筈である。

けれども男子と女子との關係は、資本家と勞働者との關係とは異つて居る。彼等の間には、勞資間に見られるような本質的な利害の不一致の代りに、却つてその本質的な一致が見られる。生理的にも、社會的にも、男女は相異る特質を以て相援け、相補ふことによつて互の幸福と進歩とを完成するように運命づけられてゐる。この自然的な調和を破つたものは少數男子の手に富と權力とを集中した社會の組織であり、それに基いて發達したところの男性本位の道徳―支配階級の道徳であつた。

資本主義經濟は婦人を個々の男子、個々の家庭に對する隷屬から或程度まで解放して、直接資本家に對する隷屬關係においた。そこで男女の間には、舊來の男主人と女奴隷との利害の對立した隷屬關係より外に、新たに被搾取者として、同じ勞働者としての利害の一致を見るに至つたのである。けれども實際の社會關係はそこまで發達して來てゐるにも拘はらず、久しい間の支配階級の教育によつて養はれて來た心的習慣は、容易に根こぎにせらるべくもない。今や個々の婦人が個々の男子に隷屬してゐた封建時代の社會關係は既に其力を失ひ、婦人は男子と同じく勞働階級の一員として共同の戰線に參加する必要に迫られつゝあるにも拘はらず、男子も女子も此新しい關係によつて生じた新しい階級的道徳によつて互を律する代りに、既に亡び去つた封建的社會關係の遺物である、封建的な道徳――即ち過去の幽靈によつて互の關係を束縛せられて居るのである。

女性隷屬の事實が無産階級にとつて何を意味するかを解し得ないのは此幽靈のために、活きた現實の社會をハッキリと見る目を塞がれてゐるからである。其等の人々は、支配階級によつて植えつけられた兩性の差別觀念のために、同じ勞働者にとつての共通の問題として女性隷屬の事實を考へることが出來ずに、自分らと全然別個の人類の一大グループを形づくる特殊な劣等種族の問題としてのみそれを考へるのである。かような考へ方は、明らかに支配階級の賜物である傳統的な差別觀念のために、プロレタリアの階級意識が不徹底に終つてゐることを示すものである。

第三に、現在の勞働婦人の狀態に對して絶望的な觀察を下し、彼等の間に於ける教育は到底徒勞に終るであらうといふ悲

觀論者がある。然し少數の前衛分子を除けば、一般的に樂觀を許さぬ狀態にあるのは無產階級の大衆に共通の事實であつて必ずしも婦人に限つたことではない。然し吾々は、さういふ狀態を十分考慮に入れた上で、大衆を教育する必要を認めてゐるのである。のみならず、多年に亘つて最善の努力を盡した後に猶且つ何等の效果も絕對に擧らなかつたならば、斯ような悲觀論も多少の理由を見出されるかも知れないが、少くとも日本に於ては、婦人勞働者の教育のために、未だ曾て殆んど何等の教育的努力も行はれた事實は存在しないのである。教育の努力の行はれなかつた所に、教育の效果の擧らないのは當然のことである。吾々は、婦人勞働者に對して、播かぬ種子を生やす奇蹟を望むことは出來ない。婦人勞働者に對する吾々の義務は、まづ第一にその特殊な境遇に應じた特殊な教育の方法を講ずることであつて、何もせぬ先に、まづ第一に絕望することであつてはならないのである。

　以上に、私は、無產階級運動に於て特に婦人の問題を考慮に加ふるの必要なしといふ意見のうちの代表的なものに就て各々批評を試みたのであるが、猶ほ斯樣な消極的な自然生長論の危險を示すために、女性隸屬の事實が、階級鬪爭の上にいかなる役割を演じてゐるかを明かにしたいと思ふ。

四　階級鬪爭の難關としての女性の隸屬

何れの國に於ても勞働階級の男子よりも婦人の間に團結力の薄弱な事實は認められる。之に關しては、『女同士の間は男同士の間よりも嫉妬猜疑が强い』といふような漠然とした主觀的な理由だけを擧げる者が多い。勿論、今日の婦人は男子の奴隸として教育されて來た者であるから、無智と盲從といふような、奴隸の美德と同時に、猜疑嫉妬といふような奴隸の缺點をも多量に備へてゐることは事實であらう。然しさういふ主觀的な原因は、團結を妨げる客觀的な原因より以上に强い力を持つものではない。現に個人として種々なる缺點を持つ男子勞働者が、全體として女子より團結し易い狀態にある事實は、婦人の性にまつはる特殊の組織難の理由を暗示するものではあるまいか。

　私の知り得た限りでは、日本に於ける婦人勞働者組織難の理由は、大要、

一、婦人の年齡が甚しく若きこと、
二、婦人の移動率の著しく高きこと、
三、寄宿制度、
四、封建的家族制度の影響、

の四つに歸するかと思はれる。女子勞働者の年齡の若いこと

は何れの國にも通有の現象ではあるが、日本に於て特に甚しく、工場法適用工場の女工約八十五萬のうち、約六割までは二十才以下、殘る四割も大部分二十五才以下であつて、二十五才以上の女工は例外的に存在するのみである。紡績會社や製糸會社の事務員は女工と呼ぶのに『こども』といふ特殊の名詞を用ゐてゐるが、事實上、日本の女工の大部分は『こども』であつて、獨立の思想と行動とを持つに堪へない年齢の者が多いのである。此事は勞働者の最低年齢と密接な關係がある。大正十一年末に於て十五才未滿の男工は約一萬五千人（男工の總數の三分）、女工は約十二萬七千人（女工總數の一割五分）に達してゐるが、最低年齢の制限が現在の十二才の代りに十四才乃至十六才となれば、其影響は男工よりも女工に多く、少くとも二十萬以上の女工が產業界から退くことになるであらう。吾々は勞働階級の少年少女を保護する目的と同時に、その團結促進の目的から見ても、最低年齢の制限は、日本に於て特に重要な意味を持つことを考へずにはゐられないのである。

次に女子勞働者の移動率の高いことも周知の事實である。遺憾ながら之に關する統計が手許にないが、私の聞き得た所では、相當な紡績會社でも、女工が同一會社に勤續する期間は平均一ケ年とのことである。東京市社會局の調査によれば職業婦人の平均就職年限は三年以內である。女工の場合も之と大差あるまいと思はれるが、假に平均五ケ年賃銀勞働に從事するとしても、其間數ケ所の工場を轉々するのが常であつて見れば、斯かる移動常なき要素の間に團結の基礎の固まる筈のないことは勿論である。そして婦人に限る此高度の移動率は、女性の隷屬的地位を利用した特殊の搾取の狀態、即ち、賃銀の法外に低廉なること、勞働時間の長きこと等（日本は外國と反對に、平均して男工より女工の勞働時間の方が長い。女工の大部分を吸收してゐる染織工場に於ては全國の平均勞働十二時間、男工の大部分を吸收する機械及び器具工場は平均十時間である。）一般的に勞働條件の甚しく劣惡なることに基因してゐるのである。同時に亦た、女性の隷屬が齎らした主觀的な原因として、職業に對する婦人自身の不眞面目な態度をも擧げることが出來る。今日の經濟組織の下に於て、全體として見た婦人は既に恒久的な生產的要素となりつつあるにも拘はらず、婦人自身の中には全然さういふ自覺がなく、職業を一時的、偶然的內職の如く考へ、終生賃銀者として留まると否とに拘はらず、勞働階級全體に對する自己の利害の一致といふものを考へることが出來ない。そこで勞働條件が劣惡ならば、團結し之が改善を企てることは思はずに、女給へでも、酌婦へでも、轉々することを意としないの

である。しかし婦人の此自覺は、勞働階級の男子が、ブルジョア男子と同じく婦人を、自己と同等の責任ある勞働者として考へずに、玩弄物又は性的奴隷を以て目する限りは、到底如何ともし難いものである。玆にも亦た吾々は、女性の隷屬が、無產階級にとりて實に重大な問題を提供してゐることを感ぜずにはゐられない。

第三に寄宿制度である。日本の女工八十六萬人の中、五十萬人までは寄宿舍に收容せられてゐる。寄宿女工は殆んど全部貧寒た農村から一時的出稼を目的とする年期奉公のつもりで募集人に連れ出されて來る尋常小學卒業の程度である。雇傭契約は本人でなく、親と傭主との間に成立し、娘は一定の前金と引換へに、物品同樣、親から傭主へ引渡され、保管を委託される。寄宿女工は勞働時間以外の生活全體を傭主の監視の下におかれその衣食住は傭主の供給に甘んじ、外出も交際も全て傭主の意のまゝに制限される。故鄕との通信さへも、傭主の目付役たる世話係の干涉を受ける。鄕里の父母が死に瀕しようとも、傭主の許可が得られぬ間は歸鄕することを許されぬ。そして傭主は前金の踏倒される恐れがないことを確かめぬうちは其許可を與へぬのが常である。賃銀の計算は全て傭主側に於て爲され、貯金も國許への送金も全て傭主の取計ひに一任され、女工は一定の小遣を宛がはれるきりである。年齡は若く、田舍から出て寄宿舍に入つた切り、外の世界を知らぬ娘達は、何事に對しても獨立の批判力を持たず、賃銀が勞働時間や生活費に對していかなる比例を保つてゐるか位の事についてすら、全く無我夢中の狀態にあるのである。寄宿舍に於ける女工の生活がいかに悲慘なものかと玆に繰返すことは見合せるとして、兎に角人身奴隷の境遇に近い寄宿女工の狀態が、何故に今日まで維持されて居るかといふことは、我國に於ける經濟的發達の特殊な事情に基づく、特殊な社會狀態によるの外說明の困難な問題である。

云ふまでもなく、その特殊な社會狀態とは、封建勢力と資本主義勢力との妥協であり結合である。殊に農村地方に於ては、その生產方法が本質的に封建時代と多く異らぬ結果として社會關係の上にも封建的な習慣が少からず殘つて居る。農民がいかに生活の必要に迫られたにしても、少々の前金のために幼少な娘の自由を長期に亘つて資本家に賣り渡す心理は、資本主義的生產關係の下に於ては當然打破せられねばならぬ封建的遺物の一つである。然も此遺物は搾取の目的を達する上に絕好の材料として、資本家によつて完全に利用された。農村の親を支配する封建的心理は、娘をも支配せずにはおかない。彼等は、其生產關係の示すが如く、家庭や男子への隷屬狀態から切離され

て、資本家に隷屬する、獨立の生産者としての自己を見出す代りに、依然たる封建的隷屬關係の裡にあるものとしてのみ自己を考へてゐる。そしてその舊い隷屬關係の裡に養はれた奴隷の美徳を、それと兩立せぬ新しき生産關係の中にまで持越し、親や夫に對する盲從を、其儘對資本家の關係にまで延長し、よつていかなる搾取にも敢て團結して抵抗するだけの力を持たないのである。若し日本の勞働者及び農民の間にブルジョア・リベラリズムが徹底してゐたならば、寄宿制度は疾の昔に其姿を消したであらう。現にアメリカの如きに於ては、勞働婦人の間に個人主義の自覺が徹底するに隨つて、女工の寄宿制度は衰滅したのである。斯う考へて來ると、吾々はブルジョア・リベラリズムの徹底を、それ自身のためではなく、實にわが無産階級運動の鞏固なる發展のために要求することの必要を感ぜずにはゐられないのである。

第四に、勞働婦人の團結を妨害する原因の一として私は封建的家族制度を擧げた。親や夫が娘や妻に對して專制的な權力を振ふ家族制度と、それに伴ふ道徳は婦人が既に獨立の生産要素となつた今日の生産關係と相容れぬものであるに拘はらず、其新しき生産關係によつて生じた、新しき理想、新しき道徳の代表者でなければならぬ勞働階級の男女自身の間にも猶ほ深く根を張つてゐる。多くの通勤女工は、家庭に於て、寄宿女工と同じ人爲的拘束を、親や夫から受けてゐる。婦人勞働者が組合の集會に出席することを妨げる點で、勞働階級の親や夫は殆んど資本家と共通の態度を採つてゐる。『女が男と同じ會合に出るものでない。』『女の一人歩きは危ない。』『女が夜分外出するものでない。』『女が組合になど入れば生意氣になる。』若い娘が一人で活動館に出入することを咎めぬ親が、組合に出入する時許りは斯樣いふ態度を採る。現に最近に私の聞き及んだ限りでも、親の手前を殘業としてつくろひながら會合に出席してゐた娘達が、失業してから外出の口實と機會を失ひ、組合運動から遠ざかつてしまつた例が幾つもある。組合運動そのものに對する無理解は、一つには日本の勞働組合が余りにも小さく、且つ大衆とかけ離れてゐるといふ原因にもよることではあるが、同じく組合に對して無理解な親兄弟でも青年男子勞働者に對しては、女子と同じ程度の壓迫干渉を加へる事實がないのであるから、これも亦た、封建的な家族制度の遺物であるとしか解せられぬ。

家庭に於てのみならず、工場に於ても、新しき生産關係と兩立せぬ此封建的な男女の差別觀念が支配してゐる。資本家は此差別觀念に基いて、同一勞働に對して差別ある賃銀を支拂ひ、

共差額だけ、男子より女子を多く搾取する。更に多くの工場では、女工は其擔任する仕事以外に、男工のために種々の雜用を辨じ、男工の歸宅後まで居殘つて作業場の跡片附から拭掃除まで引受させられる。男子は、家庭に於ける專制君主の態度を工場の婦人同僚にまで適用し、女工に對しては、同等の人格を認める代りに、之を玩弄物視し、奴隷視することさへ稀でない。

一層始末に困るのは前にも述べた通り婦人勞働者自身の間に於ける封建的な因習である。彼等は男子との差別待遇を當然の事として甘受し、『工場通ひは嫁入りまでよ』の不眞面目な氣分で、機會さへあれば工場を見捨て、階級戰の戰線を見捨て去らうとして居る。然も工場に踏み留まつて眞劍に身を投じようとする目覺めた婦人勞働者よりも、さういふ無自覺な、玩弄物たり奴隷たるに適した娘の方が、女らしい女として、勞働階級の男子一般の歡迎する所とはなつてゐないであらうか。

工場法適用工場の職工百四十萬の中、八十六萬は女子である。總數の五割八分に達する此婦人の問題が、どうして全勞働階級の問題でないといはれよう。是等の婦人及び少女の勞働狀態が、殘る四割二分の男子の勞働狀態の上に、いかなる影響を及ぼすかは、余りにも明白な事實ではあるまいか。然も婦人及び少女は、現在又は少くとも未來に於ける母である以上、彼等の運命は、同時に勞働階級の次の世代の運命をも包含し、代表してゐるのである。

女性の社會的隷屬は、女性を男子以上の殘虐な搾取の對象たらしめてゐる。其劣惡なる勞働條件は、ひいて男子の勞働條件をも劣惡化せしめずにはおかない。更に其等全ての結果としての團結力の薄弱なことは、全勞働運動にとつての最大の脅威である。

女性の隷屬が、資本家にとつていかに有利な有力な武器であるかは、何人を俟つまでもなく、無產階級の男子には明白な筈である。にも拘はらず、男子の中には、支配階級によつて植えつけられた性的偏見のために階級意識の徹底を妨げられ、女性を對等の勞働者としてよりも人類の中の特殊な劣等種族として考へる習慣のために、女性の利害と、それ自から男子の利害から獨立した特殊のものと看做し、隨つて全無產階級の共同利害とも沒交渉であるかの如くに考へてゐる者が多い。隨つて、多くの男子は、女性隷屬の事實が、直接に自分自身及び全無產階級を搾取する絶好の武器として利用せられつゝある事實を前にし乍ら、猶且つ之に對して反抗することを知らないのである。

五　組織難の主要なる原因

婦人勞働者の團結難は日本に限らず、各國に共通の事實であるが、婦人の組合運働に關する約一世紀間の經驗の結果として、イギリスのバーバラ・ドレーク女史は共著「勞働組合に於ける婦人」の中に斯ういふ結論に達してゐる。

『一、婦人の仕事の性質。婦人の主として傭はれる仕事は、殆んど全て半熟練業又は不熟練業であつて、熟練業は男子の獨占となつて居る。熟練の度合に隨つて組織の難易が決定せられることは男女に共通の現象である。婦人が原則として半熟練工又は不熟練工に留まる限りは、勞働組合運働に於ける婦人の問題は、婦人のみの問題ではなくして、男女を通じて半熟練工又は不熟練工を組織するといふ、一層大きい問題の一部分を形成して居るに過ぎない。

又家庭勞働、內職等の如き傳統的な婦人の職業も組合運働の發達を阻害してゐる。然し傳統的な婦人職業に於ける勞働條件を、一層進步した產業の場合と等しくせよといふ叫びが若い勞働婦人の間から擧げられてゐるから、此狀態も永久的なものではない。

二、低廉なる賃銀。婦人の賃銀が極度に低廉なる限りは、組合に加入して活動するだけの余裕がない。英國の紡績女工は、男女の賃銀率が同等となる度合に比例して、漸次に男子と同等の活動的な組合員たるに至つた。大戰中男子に代用された婦人の中の賃銀のよい階級も同じく男子に劣らぬ活動的な組合員となつた。一切の經驗の敎ふる所により、婦人が組合員として男子と同等に活動するようになるのは、彼等が男子と同一賃銀率を得る時であつて、決してそれ以前にはなり得ない。

三、勞働組合が婦人を排除せしこと。英國の勞働組合は約半世紀前まで、全ての男子不熟練工と共に、女子をも組合に加入せしめず、隨つて女子は性別本位の單獨組合を作り、男子より低廉な賃銀率によつて男子と競爭する立場に立つた。最近では男子の組合も徐々に婦人に對して門戶を開放してゐる。

四、傭主の壓迫。是は或程度まで男女に共通の事實ではあるが、婦人に對する場合には特に傭主の干涉が露骨で執拗な事實が多い。(日本に於ても同斷である)。

五、勞働生活の中斷。結婚と母性とによる婦人の勞働生活の中斷は免がれ難い所である。けれども相當の熟練と、隨つて相當の收入とを有する婦人が結婚後も自から進んで勞働生活を繼續する場合と、夫の死亡や失業によつて突然賃銀勞働に

追遣られた若い母親の場合とは混同する事が出來ない。後者は母親の扶助料によつて產業界から退かせることが得策であり、前者は、勞働婦人の間に於ける自覺の發達に伴ひ、益々增加する傾向がある。そして一般的發達に伴うて、婦人が產業上の恒久的な要素となりつゝある事實は否むことが出來ない。

六、習慣と傳統。婦人が家庭中心の生活に慣れて公共生活に對する興味を感ぜぬこと、及び賃銀其他勞働條件に關する物質的な問題を露骨に語り合ふことを野卑なことゝして斥けること。又婦人が夫や父の無給の助手として働いた時代の遺習として、自己の勞働を無價値な、詰らぬものとして卑下し、其爲に當然の權利を要求するだけの自覺を持たぬこと。』

ドレーク女史は以上の如き組織難の理由を詳しく說明した後に斯う述べてゐる。

『要するに婦人の組合組織は尋常一樣でない困難に遭遇してゐると云つてよい。けれども是等の困難は、第一に女性であるが爲の困難ではなくて、婦人が大抵は半熟練工で賃銀の廉い勞働者の階級に屬してゐる事實に基づくものである。のみならずいかなる障害も眞實打克つことの出來ぬものではなく、却つて其等は、經濟狀態及び社會狀態と共に、自然に消滅しつゝあるのである。』『上に掲げたような困難は現代の若い娘より舊い時代の婦人に關することであつて、問題が解决に向ふ過渡期の困難にすぎない。』

ドレーク女史は半世紀前までは婦人が集會に出席することは『集會行きの女（ゴーイング・ミーティング・ウイメン）』の異名を取る程異樣な目を持つて見られたが、今日ではさういふ事もなくなつたと述べてゐる。現在英國では婦人勞働者四百萬人の中、組合員八十一萬人（一九二〇年には百四十萬人）に達し、五人に就て一人は組合に屬してゐる。（無論之は極めて不滿足な狀態であるとして、最近には男子指導者も此方向に熱心な注意を向けるようになつた）然るに、日本では女工總數八十六萬人のうち、組合に屬する者僅に七千人、即ち百人に就て一人未滿の有樣である。是には日本の資本主義が若く、組合運動の歷史が短いこと、官憲の壓迫が嚴しいと等も無論關かつて力あるには相異ないが、日本の勞働婦人特殊の困難、即ちその封建的な隷屬狀態が重要な役割を演じてゐる事實をも見落すことは出來ないのである。

更に各國の勞働婦人に共通の組織難の重大な原因である、不熟練と低賃銀の事實も、無產階級に於ける女性の隷屬が產業勞働の方向に反映した一例に過ぎない。今日の經濟組織は、勞働階級の女子に對して、男子と等しく、生產勞働者たることを要求して居るに拘はらず、勞働階級の父母は此事實を認めずに、

社會科學

現代の經濟組織を知らんとする最好の文獻
各大學、及智識階級唯一の參考書

經濟學を學としての完成の域に達せしめし者は實にアルフレッド、マーシャルである。彼の驚歎に値する深奥なる理論は、現代の社會組織を餘蘊なきまでに解剖し、而して倫理的觀念を恒に持しながら彼の巨大なる綜合大系をなした。スミス、マルサス、リカルド、と正統經濟學の本流の中に成りて而かもオーストリー學派、歴史學派、數理學派の諸説を巧妙に綜合統制せし彼の偉大なる功献は何人と雖も否み難い處だ、今や全世界的に彼の學説は普遍し、全國各大學及び各高商は殆んど彼の書を用ゐ、彼の學説を説く。彼逝いて一年餘未だ彼に比肩するの學者を見ず、誠に彼の學説は燎原の火の如き勢を以つて全世界に行はる。現代氣鋭の徒、ピグー、ケーンズ、セリグマン、タオシック、イリー、シガーカバー、リーフマン、カールリール、レキシス、皆殆んど總てはマーシャルに依り、然らざれば大なる彼の被影響者である。彼の學説は勿論、マルクスの如くダイナミックではあるまい。併し、現代社會現象を斯く迄に明快に犀利に論斷綜合せるは偉大なる彼を措きて如何に吾々は經濟學、社會政策、社會理想を論じ得よう。マルクス主

接吻

愈々發賣

は全智全能神の如き生死の鍵を握つてゐるとしても倭子に對して惡魔であつたことを肯定せずにはゐられません。妾達はこの作者への一つの皮肉として薄倖なりし倭子のために追悼會を催したいと思ひます。愛する貴女達よ！、どうぞ御出席下さい。妾達は心ゆく限り倭子のために泣きませう。どうぞみなさん！

これはある婦人團體の中に廻送された檄文の寫しである

◇

菊池君の「第二の接吻」は、讀者を滿足させて完結しましたね。流石に老巧なものですな。私の讀んだのはいゝところばかりでしたかもしれませんが、うまいものですね。あんなに受けた小說は朝日新聞がはじめださうぢやありませんか。（中略）近代であれくらゐ讀者心理をしつかりつかんだ人は稀でせう。現代第一人ですね。

現に通俗小說を書いてゐる、中年の作家の話である。（週刊朝日）

初刷一萬五千部

四日間で賣切

定價貳圓　送料廿錢

東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番

改造社

娘は、息子と違つて、昔ながらに結婚によつて生活の保障を得るものと考へ、産業勞働者として必要な資格——職業教育を與へようとはせずに、針仕事事務所の雜用に習熟させることにのみ重きを置いてゐる。然るに實際は娘も息子と同じく賃銀勞働者たることを余儀なくされるので、勢ひ職業に對して何等の準備もない大多數の婦人は、不熟練業に甘んずるの外ないのである。

此點では小ブルジョア階級の父母は、勞働階級の父母よりも覺醒して居る。小ブルジョアの父母は、もはや結婚が娘にとつて安全な生活の保障を意味せぬ事を覺り、娘のために職業教育を要求し、高等教育機關の充實を要求し、職業範圍の擴張をも要求してゐる。然るに小ブルジョア以上に娘を生活の不安に曝しつゝある勞働階級は今猶ほ此事實に氣づかず、娘の爲に教育と職業の自由とを要求する代りに、只だ漫然と『幸福な結婚』を夢みることに甘んじてゐる。そして又た娘自身も、彼等が最も低級な教育と、最も割の惡い職業とに甘んずることが全勞働階級の生活を低下せしめて、勢ひ『幸福な結婚』を益々困難ならしめつつあるにも拘はらず、勞働者の現實とかけはなれた、『幸福な結婚』の幻影に欺かれてゐるのである。

婦人が一般的に不熟練工たることがいかに其自覺を妨げてゐるかはロシアの場合にも見られる。ロシアの場合には男女平等の賃銀率を採用してゐるにも拘らず、婦人は不熟練工なるが爲めに比較的低率の賃銀に甘んじ、随つて其組織が發達せぬ。そこで最近には工場附屬の職業學校入學者の中、一定率は必ず女子を採用することゝし、謂はゞ强制的に女工を就學せしめてまでその訓練に努め、よつて一般に女子の職業的地位の向上に努めて居るのである。

ビアトリス・ウエッブ夫人も『男女同賃問題』に關する其パンフレットの中に此問題に言及してかう云つてゐる。即ち不熟練工の競爭による賃銀の低下を防ぐためには、最低賃銀制の確定と共に、不熟練工そのものを根絶するの外はない。そして全ての職業にも、教員、醫師、産婆、運轉手等の如く、一定の試驗制度を採用し、及第者のみを雇傭するのが得策である。さうして一定の職業教育を受けなければ何等の業務にも就けぬとなれば勞働階級の親達の、娘に對する教育方針が一定せられるのであらう。即ち始めて娘をも息子と同じく、近代の生産關係によつて生じた新しい地位——即ち獨立の産業勞働者としての地位に置いて考へるようになり、随つて其地位に相當した教育を施すの必要を認めるであらう、とウエッブ夫人は云つて居るのである。

婦人の組織難が其不熟練工たるに負ふ所の多い限りは、不熟練工を作る原因である教育及び職業上の制限の撤廢は、無產階級自身の立場から見て緊要な要求でなければならぬ。同時に亦た『女に教育は無用の沙汰』と考へ、職業生活を『幸福なる結婚』の障害と考へるような封建的な考へ方を一掃して、娘を嫁入りまでの預り物としてゞなく、男子と同じ一人前の生活勞働者として教育することが、娘自身の幸福のため、同時に全勞働階級の組織の促進のためにいかに有意義なことであるかを勞働階級は覺らねばならぬのである。

六　差別待遇に對する勞働婦人の戰ひ

『勞働運動は原則として男女の平等を認めてゐる。故に特に婦人の權利擁護の爲に戰ふ必要はない』といふ論者がある。實際、今日の世界に、革命的たると改良主義的たるとを問はず、原則として男女の平等を承認せぬ程野蠻な指導者はあるまい。けれども實際の所、今日の社會を支配するものはブルジョアの原則であつて勞働者の原則ではない。されば主義に於て男女の平等を認めても、積極的に婦人の權利を擁護せぬ限りは、事實上ブルジョアの原則を承認するに等しいのである。現に男女平等の参政權が無產階級の普通選擧の概念であるに拘らず、無產階級が積極的に婦人の参政權を主張せぬ限り、何處の國にもそれの認められた例しはない。最低賃銀や失業手當の場合も同じことで、無產階級の原則は男女平等を承認してゐても、積極的に主張されなかつた結果として、現に何處の國でも、男女によつて異る率が採用されて居る。一九二四年度の英國の各職業の最低賃銀率（週給）は男女によつて次のように異つてゐる。

	男	女（單位シリング）
被服業	五八、〇	四〇、〇
石鹸製造	五四、〇－五六、〇	三〇、〇－三二、〇
紙袋製造	五五、〇	三〇、六

一般に婦人のためには男子の賃銀の八分五乃至四分三に相當する最低賃銀率が定められてゐる。失業手當に於ても同斷で

	男	女	少年	少女
一週	一八・〇	一五・〇	七・六	六・〇

といふ差異を示してゐる。

大戰中、物價騰貴に應じて男子勞働者は賃銀の値上げ又は本給以外の特別手當の支給を受けたが、是等の場合、婦人勞働者は全然除外されるか、又は男子より遙かに少い割合で増給されたに過ぎなかつた。

最近には、男子と同じく失業保險に加入し、保險金を負擔してゐる婦人勞働者に對して失業手當支拂に關する制限が設けら

れた。即ち三十歲以下の婦人勞働者に對しては、父、夫其他頼り得べき男子の親戚なき、全然孤獨の者の場合に限り失業手當を支拂ふべきで、頼り得べき親戚ある限り、失業手當を支拂ふ必要なしとの內命が政府によつて發せられたのであつた。然るに勞働婦人の大部分は三十歲以下であるから、斯樣な制限は事實上、勞働婦人には、失業保險の掛金を支拂はせるのみで、失業手當は支給せぬ原則を確立するに等しいのである。

更に又、失業の爲めに受ける苦痛は男女によつて異らぬに拘はらず、政府の失業對策が全く婦人を無視し、婦人の爲めには殆んど何等の救濟事業も起されてゐないことが、英國勞働婦人によつて指摘されて居る。

斯の如く政府は勿論、勞働運動によつてさへも婦人の利害が無視されがちなことに對して、組織されたる勞働婦人は常に抗議を繰返して居る。勞働黨の大會には、全國婦人勞働黨聯盟の名に於て、勞働黨に對し『勞働運動及び社會主義運動は、婦人を包含するに非ざる限り、いかなる改良法案をも承認せざること』を幾度びか要求した。本年五月に開かれた勞働黨婦人大會は、

『本大會は、政治、經濟、及び敎育上に於ける男女の平等を支持せざる勞働黨の代表者を嚴重に處分すべきことを勞働黨に對して要求する』

といふ決議を通過した。提案者及び贊成者は孰れも勞働黨員にして性的偏見に捉はれてゐる者が少くない事實を指摘した。

以上は英國の實例であるが、其他の資本主義國とても、婦人勞働者に對する差別待遇には變りがない。そして斯樣な事實に對して鬪ふことは、婦人勞働者を組織へ導く第一步であると認められてゐる。昨年共產黨インタナショナル第五回世界大會に於て、全世界の戰鬪××××××××××××のために揭ぐべき戰ひのスローガンとして認められたのは左の十ケ條である。

一、產業及び農業の全ての部門を通じ、且つ××××××の企業を通じて、同一勞働に對する同一賃銀

二、請負制度の撤廢

三、婦人勞働者に對する低率の賃銀支拂を隱蔽せんが爲めに用ゐらるゝ異なる賃銀算出方法の廢止

四、健康に有害なる業務を除き、あらゆる產業部門に婦人を雇傭せしむること(職業上の制限撤廢)

五、現存の職業學校及び講習所に出席せしむる事により勞働婦人の資格を向上せしむること(職業的熟練の習得)

六、夜業及び殘業の廢止

七、婦人勞働者、母親、及び幼兒の保護。分娩前後各八週間の强制休

護及び其期間の賃銀全額支拂。授乳中の母親に休憩室と授乳時間とを與ふること。

八、妊娠中及び授乳中の婦人の解雇を禁ずること

九、既婚婦人の解雇を禁ずること

一〇、男女平等の失業手當を要求すること

是等は婦人の特殊要求であると同時に、勞働階級全體の直接當面の要求として認められて居る。婦人勞働者の差別待遇は、それが資本家にとつての有力な武器として、資本主義を維持する支柱として利用せられる限り、單に婦人のみの問題ではなくて全無產階級に共通の、階級的な問題である。此意味に於て、女性の隸屬に對する鬪ひは、男子への戰ひではなくて、實に資本主義そのものに對する鬪ひの一部分である。此差別待遇の直接の犧牲者が男子でなく、女子であるといふことのために、此事實に對して敢て積極的に鬪ふことを拒む者があるならば、それは階級鬪爭の逃避者と認められなければならぬ。抽象的な男女平等の原則を承認するに滿足して、具體的な事實の上にそれを確立する鬪ひを拒む者は、實際上、女性の隸屬を武器とするブルジョアに味方して無產階級の搾取を援助する所の、階級的裏切者と認められなければならぬのである。

七　無產階級の主婦と母

以上に私は女子賃銀勞働者を中心として見た無產階級の婦人問題に就て述べた。が、無產階級の婦人は、同じ階級の男子と異つて、原則として生涯賃銀勞働に從事する者ではない。既婚者の就業率が徐々に增加しつゝあるにも拘はらず、大體に於て成年以上の婦人賃銀勞働に從事する者は少數であつて、大多數は主婦として、母として家庭に留まるものである。吾々は資本主義の進展に伴うて勞働者の家庭が破壞され、婦人が男子と同じ生產單位となりつゝある事實も、それがいかなる犧牲を伴ふにしても、結局彼等を解放へ導く必要な過程である事實をも承認する。隨つてブルジョア婦人の如く、勞働婦人に向つて『家庭へ歸れ、子守と臺所の世話に終始せよ』と叫ぶ者ではない。けれども、婦人が家庭から奪はれて行く過程は、今なほ進行の途中にあつて、決して既に完了した譯でない。そこで無產階級の婦人は、一方で獨立の生產者としての新しい資格を得つゝあると同時に、他方では母として主婦として家庭に縛られてゐる舊時の狀態から、全然脫し切つてゐない狀態にある。故に吾々は生產者としての婦人の利益を擁護すると同時に、現在あるがまゝの狀態に於ける、主婦として母としてのその直接當面の利益をも擁護しなければならぬのである。

教育や職業の自由についても、ブルジョア婦人は之を要求し

つゝあるに拘はらず無産婦人は之を要求しなかつた。それは無産婦人に其必要がなかつたからではなくて、彼等に之を要求するだけの自覺がなかつたである。主婦や母の立場からの要求とても同じことで、在來これを問題としたのはブルジョア婦人のみであり、隨つて多くの人々は其等の要求が、それ自體としてブルジョア婦人の要求であつて、無産婦人の立場からは、さういふ要求を持ち得ないかのように考へてゐる。けれども之とても無産婦人が、自分自身の問題を十分に理解するだけの智力がないためにさういふ要求を提出し得なかつたゞけの話であつて、實際に於てさういふ問題が存在しなかつた譯ではない。殊に日本の家庭生活は多くの封建的な、保守的な思想習慣の根城であり、其中にあらゆる煩雜な仕事を持ち乍ら、何等の經濟的獨立も持つことのない主婦及び母親の生活は、賃銀勞働者のそれにも增して奴隷的なものである。此事實に對して無産階級の婦人が叛逆の意思を持たぬ限りは、其解放の曙光は到底認められないのである。其等の事實に對する叛逆の意思から出發して具體的な、種々なる要求を以てブルジョアジーと戰ふ必要を覺るに至つた時、其處に始めて、原則として賃銀勞働者でない、然し乍ら必要に應じてはいかなる條件で、いかなる勞働にも甘んずる所の、大なる産業豫備軍を形成してゐる無産階級の成年婦人―無産階級の中の最も保守的な、不活潑な要素―を、階級鬪爭の戰線に參加させるとが可能となるのである。殊に都市の無産婦人のみならず、數量に於て一層大きな力を持つ農村の婦人をも考慮に入れる時、吾々は無産婦人の問題の一部分である女子勞働者以外の全くの要素を度外視することの危險を覺らねばならぬ。

無産婦人を家屋に於ける其隸屬狀態に叛逆させることは、彼等を階級鬪爭へ導く必要なる第一步であるにも拘はらず、直接、工場内の經濟鬪爭に關せぬ問題を全く非鬪爭的と認めがちな革命主義者は、これらを以て直ちに非プロレタリア的非鬪爭的として排斥する。然し再三述べたように、日本の女子勞働者は大部分廿五才以下であつて、廿五才以上の者は稀である。故に女子勞働者以外の要素を無視するとなれば、最も成熟した、活動的な年齡にある無産婦人の大多數を、無産階級運動の陣營外に放置することゝなる即ち彼等を敵の手に捕虜として殘すことゝなるのである。彼等を戰線に參加させる爲めには、先づ其日常生活の當面の利害に即した鬪爭から出發しなければならぬ。其等の鬪爭は決して非プロレタリア的なものでも、非鬪爭的なものでもないのであるが、只だ、日本のプロレタリアが在來取扱はなかつた問題であるが故に見慣れぬ感じがすると

いふだけの事に過ぎない。機械的なマルクス主義者は、マルクス主義の教科書に掲載されてゐない全ての應用問題を、マルクス主義の公理によつて解かうとはせずに、問題それ自身が間違つてゐるといふ態度で頭から否定してかゝらうとする。恰かも九九を習ひ立ての小學生が、九九で割り切れぬ問題は全て問題其物に間違ひがあると考へると同じ態度である。

日本よりも遙かに安全に資本主義化せられた英國の如きに於てさへも、此點にどれ程考慮が拂はれてゐるかといふ事は、英國×××が婦人部の任務に關して發表した次の説明によつても明らかである。

婦人は何の爲にあるか。社會の種々なる段階に於て、婦人の狀態は特種の搾取と隷屬との形體を生ずるが故に婦人の專門部をおく必要がある。

婦人も男子と同じく鬪爭に關係のある事は明白であるが、婦人の場合にはその觸れ場所―急所―が男子と違つてゐる。故に勞働階級の婦人大衆の間に黨の感化を及ぼす爲には、或程度まで特殊の方法が必要である。

對男子の運動に非ず。婦人部は女權主義的職分は毫も持たぬ。それは全ての勞働者と協同して鬪爭に參加せんとするもので、男子と女子とを分離させる一切の行動に反對するのである。

婦人部は勞働階級の婦人の大多數が階級意識を持たぬこと、賃銀勞働者は其中の一少部分に過ぎないので、最も直接な接近の方法、即ち工場を通じての接近の道は閉されてゐること、婦人の經濟鬪爭は、勞働狀態よりも寧ろ食糧、被服、住宅、保健衞生、及び子供の教育等を中心として居ること、を認めるものである。

主要なる仕事。故に婦人部の主要なる仕事は次の如くである。

一、女子勞働者の鬪爭に參加すること。彼等を男子と同一條件で組合に加入せしむること。同一勞働に對する同一賃銀を要求すること等。

二、職業紹介所、救貧委員失業救濟事業を通じて失業婦人を組織すること。

三、協同組合、購買組合、保健及び母親保護の機關、並に家庭を通じて主婦及び產業に從事せざる勞働階級の婦人と接觸すること。

四、社會的活動を通じて婦人黨員の熱心を加へしむること。婦人部の仕事が同志男女の協力によつて行はるゝこと、性による分裂を來さゞるようにすることは最大重要の點である。

本年のメーデーに同じ婦人部が特に無產婦人の爲に選定した標語は左の如くである。

全ての婦人は勞働組合へ
同一勞働に對する同一賃銀
全ての失業者に組合協定率の失業手當を
母親と嬰兒の保護
物價引下げ。賃銀値上げ。
小屋の代りに家を與へよ。
勞働者の子供に高級の教育を
勞働者とは戰ふな、壓制者と戰へ。
全ての婦人は協同組合へ
强制的家庭勞働への反對
全ての勞働婦人に八時間勞働を
但し『强制的家庭勞働』とは失業婦人に女中奉公を强制するを云ふ

(ボルドウイン政府は女中拂底の折柄、失業婦人に女中たることを要求し、之を拒む者には失業手當の支給を拒否せんとす。勞働黨婦人大會も『强制的家庭勞働』に對する反對決議を通過してゐる。)

此メーデー標語に關し、婦人部は斯う說いてゐる。

『婦人は自分ら自身の要求を提出し其爲めに戰ふことによつて階級鬪爭に一層大なる效果を擧げるように參加することが出來るのである。吾々が特に婦人の標語を掲げたのは其故である。全ての婦人は此要求の至當なるを認めるであらう。全無產階級の自由なくして婦人の自由が得られぬことは認めなければならないと同時に、婦人の組織的な活動次第で、今日でも避けられる害惡の爲めに、今猶ほ吾々が苦しんでゐることも認めなければならぬ。』

フランス××××××の內外に於て婦人の爲に戰つてゐる條項も之に類してゐる。

一、男子と完全に平等なる政治的及び市民的權利
一、女子の賃銀は一日五十フラン以上とし、物價の騰貴に應じて引上ぐべきこと
一、同一勞働に對する同一賃銀
一、失業手當、及び物價の騰貴に應じたる手當の率を男子と平等ならしむること
一、八時間勞働の嚴正なる實行
一、夜業、殘業の廢止、
一、勞働者――男女――に選出される人々による勞働狀態の管理
一、六ケ月勤續後二週間の休暇を、一ケ年勤續後は一ケ月の休暇を與へること。其期間の賃銀額支給
一、產前產後各八週間の强制休養、其期間の賃銀額支給
一、五十人以上の婦人を傭ふ全ての企業に於ては、托兒所又は育兒室を提供すること
一、姙娠四ケ月後工場を缺席した婦人、及び授乳する母親の解雇を禁ずること
一、授乳中の勞働婦人には、日給外に其地方の平均賃銀の二割五分の手當を拂ふこと
一、全ての勞働する母親及び其子供に對し、醫療費及び入院料を免ずること、

最も鬪爭的な政治團體が、A・F・L其他の改良主義的關係でさへ認めてゐる是等の卑近な要求を特に鬪ひのスローガンとして掲げるのは何故であらうか。それは是等が勞働婦人大衆の直接當面の利害を反映して居り、且つ是等の要求を掲げて鬪ふことによつて、始めて婦人大衆を階級鬪爭へ導き入れることが出來るからである。即ち是等の要求は、要求それ自身に於×××××のでなくとも、これを掲げて運動する間に、無產婦人の間に階級意識を發達させ、その運動を指導する精神を把ませることが出來るからである。

日本の無產階級運動は在來その戰線が極度に局限されてゐた

ので婦人の問題にまで觸れることがなかつた。然し婦人の問題に觸れなかつたのは運動の勢力が不足だつたからであつて、日本の無產階級に婦人がゐないからでもなく、隨つて婦人の問題が存在しなかつたからでもない。今や吾々の戰線は婦人の問題にまで擴大されなければならぬ。單に吾々の微力の結果として生來觸れ得なかつた問題を、在來取扱つた經驗がないといふ理由のために、無產階級の問題とすることを拒む者は、結局運動の大衆化に反對する者と觀なければならない。

『大衆を政治に惹付ける爲めには、婦人を惹付けなければならぬ。何故なら資本主義の下に於ては人類の半分は二重に壓伏せられて居る。勞働婦人と農婦とは資本家に壓伏せられてゐるのみならず、最も民主的なブルジョア共和國に於てさへも、法律の前には男子より劣等の人間として取扱はれてゐる。そして彼等は家事と臺所の雜務に追まはされる眞の『家庭奴隸』である。』とはレーニンが云つたのではなかつたか。

八　結　論

以上に述べ來つた要點は大體次の諸點に歸着する。

一、無產階級運動は特に婦人の問題を考慮する必要なしといふ論は、婦人の特殊狀態に應じた特殊の運動方法の確立を無用とする結論に導く。隨つて婦人大衆の間に階級意識を呼び覺ます代りに彼等を其現狀に留めることを主張するに等しい。

二、無產階級運動は原則として男女平等を承認して居るから特に積極的に婦人の權利を擁護する必要なしといふ論は、事實上婦人の隸屬狀態を、プロレタリアに對する絕好の搾取の武器としてゐるブルジョアジーの戰術を是認し援助する結果となる。女性の隸屬に對する戰ひは、その隸屬がブルジョアの有利な武器として利用せられる限り、資本主義に對する戰ひの一部分を形成するものである。女性の隸屬といふ、階級的團結の最大障害に積極的に手を觸れることを拒む者は、階級鬪爭に對する×××である。

三、敎育と職業の自由は、勞働婦人の組織を促進する重要な條件である。故に無產階級運動は此等を等閑視してはならぬ。

四、無產階級の婦人は全て賃銀勞働者ではない。故に賃銀勞働者としての其利益を擁護すると同時に、母として主婦としての生活に伴ふ利害をも擁護しなければならぬ。

是等の條項を更に分類すれば、無產階級運動が、婦人を參加させる爲めに特に考慮せねばならぬ點は、大體左のようなもの

かと考へられる。

一、男女同權の要求―女性の隷屬に對する反對

一、勞働條件の改善案―女子賃銀勞働者の保護

一、母親と子供の保護―分娩哺育の任に對する經濟的保護、育兒及び教育に關する公共機關の充實其他

繰返して云つておかねばならぬのは、是等が、直接には婦人特殊の要求であつても、根柢に於ては男女共通の階級的な要求であるといふ點である。久しい間私有財產制度の支柱として、支配階級の武器として其根を固められて來た兩性の差別觀念は、吾が無產階級運動をさへその捕虜として、問題が直接婦人の利害に關する限り、男子をしてその階級的重要性をさへ認めしめぬ程の力を有してゐる。目覺めたる鬪士は階級意識の徹底のために、階級的戰線の擴大のために、支配階級から植えつけられた性的偏見を振すてなければならぬ。無產階級の半數を占める婦人に對する最も實際的、具體的な運動方法は、此問題に對する徹底的な理解を俟つて始めて確立し得られるのである。

（左は第五回世界大會決議の一節である）

『無產階級の協同戰線及び戰線の擴大は婦人――即ちプロレタリヤの婦人、勞働する農婦、及び小ブルジョアの婦人――が無產階級のあらゆる鬪爭に對して、男子と同等の活動力と決意と犧牲的精神とを以て參加する時、始めて實現せられる。反革命主義者は久しき以前から既に、是等の鬪爭に對する婦人の協力の偉大なる重要性を認めてゐた。社會民主黨其他の改良主義者、ファシスチ及びありとらゆる種類のブルジョア政黨は、婦人を各々自己の目的のために利用せんとして極力努めてゐる。此事實の前に、大衆中の婦人を其等の反革命的勢力との接觸から救ひ、×××××××××××××××××××。『國際的形勢は近東及び極東の婦人が國際的××××××××××××××××××。東洋に於ては虐げられ、掠奪せられたる民衆が、其壓制者に對して反逆し、民族的獨立のために、且つありとあらゆる種類の隷屬と搾取とに對する戰ひを開始した。同時に東洋婦人は何千年來隷屬の中から突如として出現し、彼等も亦た男子と同等の人間である事實を承認する證據として、同等の權利を要求してゐる。東洋婦人の、反帝國主義鬪爭への參加は、在來、社會生活の條件、習慣傳統、及び宗教的偏見のために拘束せられてゐた××××××××××××××××。…

『國際的形勢は全インタナショナルに對して、無產階級、貧農階級、及び小ブルジョア階級の婦人に對する運動を、在來より××××××××××××××××××××××。×××

は、無産階級が企てるありとあらゆる闘爭的行動に、婦人が自覺した、活動的な共働者として參加するように敎育せねばならぬ。歷史的經驗は、婦人は一般に後れては居るが、一旦偉大な××××××××××××××××××××××××。……

『故に本大會は婦人に對する運動は、決して第二義的重要のものでなく、却つて其反對に××××××××最大重要な、決定的な仕事の一つであること、且つ無産階級の××××××××××××主要な要素の一つであることを特に力說するものである。……

『本大會は、「××××××××××××××するに及んで始めて××を得ることが出來るのである」、と云つたレーニンの言葉に注意を促すのである。』(十月五日)

在歐通信

河合榮治郎

獨逸學界（第七信）

（一）

R君

始め僕が英國を去る時に、目指す國は獨逸であつた。然しふとした事の行違ひから、獨逸の物價が法外に高いと聞き誤つたのと、一つは暑さの嫌ひな僕は、伯林の夏を厭つて、落付く先を先づ凉しい所に求めることにした。英國を去る時に、獨逸の本に接したい希望は湧くやうに强かつた。靜に本を讀むのならば、場所を必ずしも選ぶの必要はなかつた。かうして自分は七月十六日倫敦を立つて、翌朝瑞西チユーリツヒのステーションに友人Hに迎へられ、チユーリツヒ湖畔を走ること六哩、リユシユリコンと云ふ小さな村の、とあるホテルの一室に落付いた。ホテルは湖畔からみると高さ三百尺位ある、チユーリツヒ湖を一望の下に納め、近くチユーリツヒ市を眺め、晴れた日には、遙に白雪を戴いたアルプスを夢の様に、中空に望むことが出來る。恐らくはチユーリツヒ湖隨一の眺望と云ふべきであらう、偶然にかうした所に二ケ月の夏を送ることが出來たのである。

瑞西に於ける點景の主題は、何と云つてもアルプスの連峯であらう。あの山と云ふよりも、寧ろ大きな巌と云つた方がふさはしいと思はれるアルプスを眺めると、胸の躍るを覺える。水の美しいことも亦我々を喜ばせる、チユーリツヒの湖は美しい方ではないが、ルツエルン、ツツク、ジユネーヴ等の湖の水の美しさは喩へるに物がない、清澄と云ふのがあゝ云ふのであらう。底を泳ぐ魚も數へることが出來る位である。更に夏の瑞西に趣を添へるものは、草花と果物である。長い冬の間押へられ

てゐた各種の草花は、夏になつてから一齊に咲き揃ふ。どの通を歩いても燃えるやうな紅の花が目に着く。又氣候の關係と見えて野生の果物が澤山ある殊に多いのは梨と林檎であるが、僕等はよくホテルの庭の果樹の下に冠を正したものである。然し恐らく瑞西の野外に詩趣を加へるものは、牧場に於ける鈴の音であらう。山の中腹に草を食ふ牛の首に鈴が着いてゐて、其の歩む毎に鈴が鳴る、英語にパストラルと云ふ字が丁度此の趣を表はすにふさはしいものである。

我々夫妻は八月のある日、友人Kの訪問を受け、其の誘ふがまゝに、湖の對岸に居る友人Hと、都合四人でアルプス登山を試みた。チューリッヒを立つて第一夜をサンゴタルドの隧道の傍のアンダーマットに送り、次の日細雨の降る中を一氣にフルカ峠を越えた。峠の上にローネ氷河がある。日光に輝く氷河の[illegible]は實に美しい、丁度水晶の宮殿のやうである。此の水は流れ〱てローン河となつて、地中海に注ぎ、此の氷河の向ふ側の水は流れて、ライン河となつて北海に注ぐ。此の僅かの源の違が、末はあれ程大きな違になる、考へてみると面白いものである。其の夕べゴルナグラットに着いてマッテルホルンに落ちる夕日を眺め、翌朝早く旭の昇るのを見た。マッテルホルンはあれこそ山と云ふよりも、巖の聳えると云ふのが適當であらう。群山を膝下に踏まへて、巍然として立つあの姿は、永く眼から離れられない。第三日はインターラーケンに下つて、歐洲の夏の社交界を覗ひ、次の日ユングフラウに上つた。ユングフラウは海拔一萬一千尺のヨッホまでは、電車が通ずるので誰でも往ける。此に素晴しく大きなホテルがあつて、泊ることが出來る。吾々の泊つた晩は折惡しく暴れてゐた。明日の登山は諦めて、夜更ける迄話をして、眠に就いた。所が朝の三時に强力二人に起された時、見ればすつかり晴れて星は鮮に輝いてゐる。直に支度して雪を踏んで登りに掛つた。すがすがしいと云ふのが此の時の心持である。夜はまだ明けないが、雪明りで暗くはない。段々東が白んで來て、美しい雲を背景とした氷河の壯觀は言に盡せぬものがある。頂上に着いたのが九時過であつたらうか。頂上の雪の上に横になつて、見下すアルプスの連峯は實にいゝ。ツルゲネフは其の散文詩の中で、ユングフラウとフインステルアールホルンとの對立を題材として、大きな場面を描いてゐるが、此の山の頂に立つて、何千尺の下に人の世を見下す時には、あゝした大きな想像が生れるのであらう。下つてグリンデルワルドに一夜を送り、ルッエルンを經て、チューリッヒのホテルに戻つた。アルプス數日の旅は、果しなくも一生忘れられない思出の種を殘したのである。

瑞西と云ふ國が小さい所でありながら、大きな意味を歐洲文明の上に持つ。最も早く國民主義の上に立つた獨立を實現したことは云はずとしても、宗教改革は獨逸に於けると劣らずに、瑞西に其の功を認めねばならない。今もチユリツヒに於てツングリ、ジユネーヴに於てカルヴインの偉を偲ぶことが出來る。其の後に於ても、自由の戰士は此に憩の家を求めた。ジユネーヴに於けるボルテーア及びルーソー、ユラ山村に於けるクロポトキン、何れも此の地に因緣があつた。瑞西と十九世紀始の巴里、十九世紀後期の倫敦とは、何れも祖國を追はれた人達の先づ、落付く所であつた。更に赤十字運動に於て國際主義に先鞭を着け、遂に現今に於て、ジユネーヴと云ふ國際都市を持つやうになつた。かうした使命を果した國家と云ふものは、人類文化史の上から、多大の禮讚を博して然るべきである。

九月の國際聯盟の總會には、僕もジユネーヴに出向いて、マクドーナルドとエリオの提携を見た。此の時が歐洲に明るい光の輝いてゐた時であつたらう。マクドーナルドは平和の陸は地平線上に或は見えたり、或は隱れたりすると言つたが、此の時に歐洲は平和の和いだ氣に滿ちてゐた。大戰直後の保守主義が退いて、英國に勞働黨内閣が出來、フランスにポアンカレーが失脚してエリオが立ち、獨逸に於ても、社會民主黨は再び勢力を挽回して來た。其の時の進歩主義の空氣が僅に束の間で、再び保守の暗雲に蔽はれたのは、眞に遺憾に堪へない事である。

(二)

R君

僕が瑞西二ケ月の生活を終へて、伯林に向つたのは、千九百二十四年の九月十六日である。僕は南獨逸を走る夜中の汽車中に於て、幾多の感慨に耽つた。獨逸と云ふ國は、云はゞ僕の昔の憧憬の國であつた。

高等學校の時代に、まだ碌に獨逸語の讀めなかつた當時は、止むなく、英語の本によつて讀書の渇を醫してゐた。轉じて大學に來てから、政治經濟等の學問研究に手を染めるに及んで、英語で書かれた書物の散漫と淺薄とは、僕をして餓ゑたる者の如くに獨逸學問に赴かしめた。かうして大學四ケ年の後、農商務省の一屬僚として、社會政策の行政に携はるや、社會政策そのものの研究と實際とから云つても、日本が獨逸に學ぶべきものの多いことは英國の比ではなかつた。のみならず後進國民として、政府萬能の國柄として、獨逸は日本と國情を等しくし、此の國の實績は移して、我國に直に則るべきものに富んでゐた、かくして僕は永い間熱心な獨逸研究家であり、又獨逸崇拜

家であつた。

歐洲大戰は、更に僕を驅つて獨逸の同情者たらしめた。世界に於ける現情維持から受ける利益者はアングロ・サクソン民族であり、不利益者は日本や獨逸である。此の感じは世界のスタッス・クオーを破る戰士として獨逸を眺めしめた。戰爭中に於ける獨逸の孤軍奮鬪は同情と讃美とを與ふるに余あつた。かうした獨逸贔負からして、轉回したのは確か千九百十八年の春であつた。詳しいことは余りに個人的の叙述に亘るから、今は略くとして、要するに僕の心の中に、國家と個人との關係に付て稍深い思索があつた結果、自由と云ふことの我々の生長に貴重なことが段々と明になり、當然に此の事はアングロ・サクソンの社會に興味を惹付けた。そうして又歐洲大戰は假令双方が美名を掲げつゝ自己の利益に狂奔してゐるとは云ふものの、少くとも此に自由と民權とを標榜せずにはゐられない聯合側と、之を標榜せずともゐられる獨墺側との間に、大きな差違のあることを思つた。かく考へてみた時に、彼の大戰には見逃すべからざる問題が動いてゐる。此の時世界の動亂の渦中に身を入れて、此の動きを自ら心臓に感じてみたい、此の期を逸して又と一生中にかゝる躍動が、人間の歴史中にあらうとも思はれない。かうした希望は幸に容れられて、千九百十八年の夏から翌年にかけて、僕はアメリカに渡るを得たのである。

それ以來六年の時が立つた。僕のアングロ・サクソン殊に英國に對する理解と同情とは、かなりに深まつた。然し一年半の今次の滯英生活は、僕に多大の示唆を與へたと共に又、英國の足らざる點と、獨逸の持つ强みとに眼を開かしめた。今や再び新な憧れの心を抱いて、僕は伯林に走りつゝあつたのである。

然し獨逸に於て僕の持ち得べき時間には限があつた、多くとも七ヶ月しか得られない僕は、始めから限ある問題を抱いて、之に勉强を集中しなければならない。同時に又英國に於けるが如く、各方面の旅行と視察をして、國民の生活に身を投ずる余裕もない、止むなく蟄居して讀書の生活をすることに定めた。獨逸に求むべきものが其の學問にあつて、生活にない僕にとつては、之は必ずしも不本意ではなかつた。かうした心組みで僕が獨逸へ入つた時、選んだ問題は第一にマルクス研究の現狀を探りたいことであり、第二に獨逸の最近の社會學の發達をみ、第三に新カント派運動が社會哲學の方面にどれ丈の業績を舉げつゝあるかを眺めたいことであつた。此の三つとも何れも大きな問題であり、僕の獨逸七ヶ月の生活は、此の希望の小部分を滿たすに過ぎなかつたとはいふものの、而も尚その與へた啓發は頗る大なるものがあつて、一年半の滯英生活と比して、勝る

とも劣るものではなかつた。僕は今も尙獨逸の生活に、感謝と憧憬とを懷くものである。

(三)

R君

僕が伯林に入つた時の獨逸は、マルク相場の變動ももう止まつて、國民生活も略安定し、既にロンドン條約の成つた後でもあり、國情は戰敗國とは思はれない位に、常正の落付にあつた。之が爲に僕は獨逸の疲弊時代を詳に見ずして終つたのであるが、前年十日程獨逸を旅行した事があつたので、マルク相場の動變には聊接するの機はあつた。然し一ケ年を經て再び此に落付いた時には、もう當時の動揺は見る影もなかつた。

獨逸へ落付いたものの先づ懷く疑問は、一體革命は何を獨逸に與へたか、何を勞働者に與へたかと云ふことであらう。人も知る如く千九百十八年十一月愈々西部戰線の形勢不利なるやキール軍港に於ける暴動を手始めに、遂に革命起つて、カイゼルの國外逃出となり、勞働者出身のエベルト大統領となり、一時社會民主黨は天下を掌握するの狀にあつた。之れ我々の知る所である、然し獨逸に來るに及んで、直に我々を打つものは此の革命が畢竟所謂みかけの革命（Schein-revolution）であつて、戰敗から來た屈辱感、戰時中の苦痛に對する報復、戰敗の責任に對する怨慨、かうした普通にあり得る原因から來た革命で、獨逸がマルクス主義發祥の國であり、社會民主黨の有勢なりし事情より推して、社會的革命と思ふならば、それは大なる誤である。此のみかけの革命に對して獨逸人はどう思つてゐるか、之を次の三種の人の口を藉りて、此に描いてみやう。そして革命に對する獨逸人の此の批判が即ち社會主義其の後の變化に大に關係があるのである。

先づ第一に擧げたいのは、伯林大學經濟學教授ルードウィヒ・ベルナード（Ludwig Bernard）氏である。氏は西洋に於ける大學教授としては、ずつと年が若い、四十に屆くか屆かない位であらう。大學教授には珍らしい位の宏壯の邸に住み、思想は正銘まがひもない保守主義であり、獨逸國民主義である。僕が氏を訪うた時、先づ話は氏から出て、英國のギルド社會主義に付て僕に尋ねられた、あれはどれ位英國を今現に動かしてゐるか、何を英國の勞働運動に與へたか等に付て、かなり細い質問に答へて後、氏は最近伊太利に旅行して、ファッシスチーの運動を研究して、現に著述を印刷中であると云ふ。伊太利保守主義に多大の興味を感じた所に、氏の傾向を窺ふに足りる。話は進んで獨逸革命に及んだ時、氏の云ふには、一體戰前の獨逸に於

では、一方に政府の社會政策の實施があり、學者の社會政策學派があり、他方に於て社會民主黨があつて、社會問題に對する思想の分野は極めて分明であつた。然るに戰爭後に於て、社會政策學派なるものが、殆其の存在理由を失ふかの如き狀態になり、所謂人をして社會政策の危機を叫ばしめてゐる。更に又他方に於て、社會民主黨は戰爭中に於て政府に入つて政府の政策を支持したり、勞働組合の幹部が大臣になつた爲に、幹部と一般組合員の卒伍との間に、間隙が生じて、統一が立たなくなつた。戰爭後社會民主黨の要求する二大條項の一たる産業の國有は資金の缺乏の爲に、實行不能となり、他の條項たる經營協議制度（Betriebsräte-systen）は、露西亞の制度に倣つたものであるに拘はらず、結局實行されたものは、非常に骨拔のものであつた。之が爲に一方に於て勞働者の反感を買ひ、他方に於ては、此の程度でも資本家に危險視せられ、結局双方から嫌はれて、失敗に終つて了つた。かうした事情が一般國民の上に、社會民主黨は少からず威信を失ふことになつて、今の獨逸は社會民主黨からも社會政策學派からも、何れからも活潑な活動がないこととなり、甚だ憐れな狀態に在ると云ふ。僕は問うた、然らば獨逸勞働者は此の革命によつて何を獲たのですかと。氏答へて曰はく、何にも獲ません、唯其の幹部の中から大臣を出した丈ですよと。そして社會民主黨と共産黨との軋轢を嘲笑し、最後に保守主義の人に屢々見出される如く、自國を罵つて英國の社會運動の着實でしつかりしてゐるのを賞賛した。此の見解が先づ保守派が革命を見る態度を代表すると見るを得ないか。彼等は社會黨が革命に際して、何事をも爲し得ざりし無能を嘲笑する。然しそれは有能であつて欲しかつたのではなくて、無能であつてよかつたのである。無能たりしことを咎めて、社會主義を不信に導かうと云ふのである。

第二に僕の擧げたいのは、マックス・ベーア（Max Beer）である。氏は「マルクスの生涯と著作」「英國社會主義史」の著者として弘く我國にも知られ、近くは古代よりの階級鬪爭史を著した。マルクス主義者中に於ては、右でも左でもない中間の地位にある。僕が英國のトウネーからの手紙を封じて氏に送り、面會を希望した所、氏は自ら僕の寓居を訪うて呉れ、かなり裕な時間を持つことが出來た。氏はいかにも貧相な初老の人である。脊丈は小さく顏は憔悴して、ユダヤ人としても社會主義者としても、永い過去の苦勞と奮鬪を物語るやうであつた。話は先づ氏の英國研究から始まり、次で唯物史觀に及んで、僕は準備した數種の質問を試みたが、氏は中々質問の要點に觸れた答をして呉れない。唯氏は云つた、自分は學生時代にゲーテ、シルレルを

讀み、理想主義の哲學に共鳴するものでした。そして友人の唯物史觀に少しも耳を傾けなかつた、然しやがて年又年の立つた後、始めて自分は唯物史觀に眼が開かれて來ましたと。その時氏が英語で演說口調で Years and years passed away と云つた言は、今も僕の耳に付いて離れない。話が革命に及んだ時氏はいかにも無念さうに、あの革命は失敗でした。あれ丈のよい機會が勞働者に與へられたに拘はらず、遂に之を逸して了つた。今の獨逸は戰前にも增して、資本主義の跳梁に委してゐる。此の點に於てあの革命は千八百四十八年のフランスの二月革命にも及ばざるもので 千八百三十年の七月革命にしか當らない、誠に遺憾の事であつた。若しあれが英國勞働黨であつたなら、必ずや立派な事蹟を擧げたに違ひありません、英國勞働黨には學者は居ない、若し學問上の論爭をしたら、到底獨逸社會黨に及ばない。然し彼等は一人一人實によくデンケンし、眞劍に自己の守るべき所 進むべき所を解してゐる、巨人の樣な步みと云ふのがあれであらう、あの堂堂とした足並には、獨逸社會黨の頭の先と口の先ばかりでは勝味はありませんよと云つた。之が先づ急進派の見たる革命觀である 有能であつて欲しかつた社會黨を、眞に遺憾に思ひ、其の學ぶべきものが英國勞働運動にあると云ふのである。

最後に僕の擧げたいのは、ケルン大學の勞働問題の教授フーゴー・リンデマン（Hugo Lindemann）氏である。氏に御目にかゝつたのは、後述するマックス・シェーラー氏からの紹介で、氏が態々僕を同氏の宅に案內して吳れた。氏は勞働問題に關する戰前の國際會議にも屢々出たことのある人で、各國の勞働事情に通じてゐる。話は先づ僕が目下の獨逸勞働者界に於て、最大の問題は何ですかと云ふ質問に始まつた。氏は之に答へて、第一に八時間制度の問題であり、第二に賃銀の問題であり、第三に仲裁々判の問題であると。之に付て一々詳細に說明があつたが、要するに第一のことに付ては、戰前に於ても、獨逸勞働者の百萬以上は一週四十四五時間であつた。唯戰後に於て聯合國に對する償金の爲に八時間勞働を擲つことになつた。過般プラーグに於て開かれた勞働問題の會議に於ても、老ブレンタノ教授なども、獨逸現今の國情よりして、勞働者も亦犧牲を甘じて、八時間制を擲つべしと切言したと云ひ、注目すべき近時の傾向は、以前と反對に、時間の短縮は結局能率を減ずるものであると云ふ結論に來たと云ふ。第二の問題に關して、氏は目下の勞働者の實質賃銀は戰前に比して劣り、紙幣濫發の當時に於て、殆すべての貯金を失ひ、器具洋服等も戰時中からすつかり消耗されたので困窮の極にあると語られた。更に氏は一般に獨逸資本家の心理は英國あたりと大變違つて、民主的傾向が

妙い、今でも資本家勞働者の關係を、主從の關係と同一視しやうとしてゐる。經營協議制度に付ては相當成功してゐると思ふ。元來之は露西亞から倣つたもので、實施したのは本物とは大分趣を異にするが、資本家は大部分反對であつて、厄介なものだと思つてはゐるが、中には之を使つて勞資爭議の緩衝地として利用してゐるものもある。

最後に革命によつて勞働者は何を獲たかの質問に對して、千九百十八年十一月、革命直後に於て、資本家と勞働者との間に、次の條項の覺書を交換した。第一に八時間制度の實行、第二に集合協約の實施、第三に勞働者の團結權を認め、共の代表者を公認すること、第四に資本家の走狗たる黄色組合（Gelbe Vereine）を保護せざること之である、之は獨逸勞働者にとつては、確に劃時代的の事で、革命より得たる收獲と云ふべく、勞働者のマグナ・カルタである。更に又戰前の等級選擧制度が廢止されて、平等になつたこと、階級の差別が社會上に少くなりつゝある事であらう。要するに革命に大した期待を懷かないから、大きな失望もない。そして實際上の事績を細く點檢して、革命の收獲を談ずる所、いかにも隱健中正の自由派の立場を躍如たらしむものがある。

（四）

R君

僕は少し餘談を交へながら、千九百十八年の革命に對する三種の見方を紹介した。かうした革命に對ずる色々の心理が、戰後に於ける社會思想の變化を辿るに心要な鍵である。上述の三氏の意見の中から、今迄の社會民主黨のマルクス主義では駄目だと云ふ不滿と、兎に角社會主義はあれ丈の革命を起す丈の力になつたと云ふ事に對する恐怖が含まれてゐる。之よりして戰後獨逸に於ける社會思想は、次の樣な各種の潮流を示すに至つたのである。

第一に共産主義の擡頭である。之は千九百十七年の露西亞革命に源するもので、既に戰爭中に於ても存在し多數派社會主義と爭ひつゝあつたものであるが、革命後に於て一層共の色彩を強くし、社會主義に對し極左翼を代表する。獨逸に於ける共産主義者中に於ては、さまで俊秀なものを見出し得まいが、本部たる露西亞に於けるレニンやラデツク等の共産主義の爲めに揭じたる文獻は、戰後の社會思想が持つた貴重な收獲であらう。僕は殊にレニンとカウツキーとの論爭に興味を持つもので、此

の論爭に於ては勝味はレニンの側にあるのではないか、議會主義とか、デモクラシーとかの思想は、本來リベラリズムの產物である。之は決して完全にマルクス主義の系統中には攝取されてはゐない。十九世紀後期に於ける歐洲の時代の趨勢よりして、マルクス主義の中に附加へられた不純物ではあるまいか、若しカウツキーが本當にデモクラシーを擁護しやうとすれば、寧ろマルクス主義全體を改造して、根本から出直す必要がありはしまいか。政黨の政策はともすれば、本來の指導原理と調和しないものをとることがある。彼等の論爭は此の點に於て頗る興味がある。

若し共產主義を以て從來のマルクス主義に對する不滿から來るものとすれば、次に掲ぐべきものは、同じマルクス主義に對する不滿にしても、マルクス主義の根本觀念たる唯物史觀を去つて唯心的基礎の上に社會主義を建設しやうとする企で、社會主義が革命後に曝露したあの醜體は、一に人間の理想の上から出發しないから來るものだと云ふのである。此の意見に共鳴するものは頗る多い、所謂マルクス主義の精神的危機(Geistige Krise des Marxismus) と云ふ言は學界に流行せる一種の合言葉であつた。此の派に屬する文獻は、不思議にもローマ舊教徒に屬する學徒の手になるものが多い、此の事は獨逸に於けるローマ舊教徒より成る中央黨なる政黨が、かなりに進步的なる政黨たることと併せて注意すべきことである。ケルン大學の教授マックス・シエーラー、フライブルグ大學の教授ブリーフス(G. Briefs) 同大學の私講師ハイマン (Eduard Heimann) 等は此の系統に屬する代表的の者である。

僕は第三に資本主義擁護の思想を擧げたい。之は社會主義が兎も角も獲得した力に對する恐怖から來た、云はゞ資本主義の逆襲である。此の種に屬するものとしてウイーン大學の教授ミーゼスの「協同經濟」(Ludwig Mises: Die Gemeinwirtschaft, 1922) リーフマンの「經濟學原理」(R. Liefmann: Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1917—19) ポーレの「資本主義と社會主義」(L. Pohle: Kapitalismus und Sozialismus 1919)其他フォイグト等の著を掲げることが出來る。右の內に於てポーレの本は小冊子ながら簡明に資本主義と社會主義とを對照し、資本主義を擁護してゐる。社會主義の勢力が抑しも抑されもしなくなつた爲に、資本主義の城廓を守護する必要が生じて來て此に果しなくもかなりに良い之等の文獻を得た譯である。

最後に僕は社會主義に對する資本主義の擁護ではなくて、社會主義を以て社會觀上結局個人主義に歸すべきものなりとして、個人主義を攻擊して、全體主義とでも云ふか、國家民族に重

を置き、個人全體の前に微弱なることを切言するものを擧げたい。其の代表者はオトマー・シュパーン（Othmar Spann）で、其の代表的の書物は、「眞實の國家」(Der Wahre Staat, 1921) である。恰もフランス革命後の混沌たる時に、獨逸フランスにロマンチック學派なるもの生じて、個人主義に對する全體主義を主唱したことがあつて獨逸に於てアダム・ミュラー（Adam Müller）が、其の代表者であるが、恰もシュパーンの傾向がミュラーに類似するもので大戰後の混亂した社會に面接して、從來の思想の傾向が唯物論的、個人主義的たりしを排して、理想主義的、全體主義論に進まうとするのである。此の傾向は大戰後の歐洲に相當勢力あるもので、シュパーンに共鳴するものは決して尠くない。僕は其の思想の內容には賛成し兼ねるが、戰後思想界の產物として、シュパーンの著述は見逃し難いものと思ふ。

少しく趣を異にするが、略傾向の此の派に似るものとして、僕はゾムバルトの近著「プロレタリアの社會主義」二卷（W. Sombart: Der proletarische Sozialismus 1924）を擧げたい。ゾムバルト氏は日本に於ては「社會主義と社會運動」を始めとして、多くの著書を以て知られてゐる。氏は十九世紀末、カール・マルクスの研究が毫も大學々界から注意されなかつた時に於て逸早く大學教授としてマルクスを研究した人として知られてゐる。假令唯物史觀に於ても勞働價値說に於ても、氏は無條件にマルクスに共鳴しはしなかつたものの、多大の同情を之に注いだものである。此の點に於て「社會主義と社會運動」の一書は、ブルジョアー學者の手になりながら、マルクス研究を刺戟したことは尠くなかつた。所が戰後氏はあの本を、第十一版を最後として、絕版とし、全く新なる社會主義に關する著述を企ててゐると云ふことであつたが、前に擧げた「プロレタリアの社會主義」二卷が即ちそれであつた。此の本に於て氏は前著に於けるとは比較にならない位に、マルクス主義の思想的構成を分析してゐる、之は明に氏が從來よりも哲學的に深さを加へたことを示すものであるが、之と同時に氏が著しく保守主義に近づき、マルクス主義に對する同情の著しく稀薄になつたことを表はした、或は寧しろ反感をさへ露骨に表はしてゐると云へやう。氏のかうした變化は矢張りシュパーンと同じやうに、戰後の混亂から刺戟を受けたものと思はれる。僕が獨墺を旅行して多くの學者に會つた時に、丁度此の本が出たので、必ず其の批評が出て、ゾムバルトの變化を遺憾なりとするものが多かつた。殊にケルンに於てマックス・シェーラーに會つた時、氏はゾムバルトがより哲學的になつたことはいかにも賛成であるが、哲

學的になつた爲により急進的にならずして、より保守的になつたことは遺憾であると云はれてゐた、自分もシェーラーの批評に同感である。思想の變り易いゾムバルトには物足りないが、個々の點に付ては、流石に氏の著は示唆を與ふることが尠くない。

（五）

以上は戰後に於ける社會思想の概況であるが、之等の各種の思想に圍まれて、或は反對されるにしても、或は改訂を加へられるにしても、何れにしても其の中心的地位に坐するものは、マルクスの社會主義である。曾てある倫理學者は近世の倫理學者は先づ、ホッブスの倫理學に對しいかなる立場を採るかを決定しなければ出立が出來なかつたと云つたが、丁度之と似たことが社會科學に於てマルクスに付て云へるかと思ふ。之に贊成するにしても、之に反對するにしても、何故に贊成し反對するかを明かにすることによつて、社會科學研究の道途に一歩を踏み出し得る。思ふにマルクスの偉大は其の學說の完成してゐることには、なくて、混沌とした矛盾を大規模に包有する所にある、彼に會流する思潮は英獨佛の三ケ國に亙り、彼の拔はんとしたる題材は、認識論より社會問題に及び、各種の異る思想を攝取し、雜多の素材を統一する巨大の手腕は到る所に躍動してゐる。ジョン・スチュアート・ミルが思想發展の徑路は頗興味があるが、マルクスの場合はミルに比して、一層其の規模が巨大である。哲學の學徒がカントの關門を通ることなくして、近世哲學を解し得べからざると等しく、社會科學を學ぶものは、永く彼に觸るゝことなくして、研學の途に立つことは出來まい。獨逸に來つて驚くことは、マルクス反對と辯護の書物の、汗牛充棟僕を更ふると雖、其の遑なきに苦しむことである。

此に興味あるはマルクスの社會思想とカントの思想とを調和せんと試みる企である。此の企は逸早く我國にも紹介せられて、敢て事新しいことではなく、既に十九世紀の末に始まつたことであるが、前に述べた（Geistige Krise des Sozialismus (Marxismus) の聲と共に、此の運動は更に熱心を加へたかの感がある。此の運動は主として、同じ新カント派に屬する內でも、所謂バーデン派でなく、マールブルグ學派たるコーヘン、ナトルプ、シュタウヂンガー、カール・フオアレンダー、シュルツエ・ゲヴァーニッツ、マックス・アッドラー等の人々を其の代表者とする。マルクスの社會主義には贊成ではあるが、其の基礎を唯物史觀に置かずして、カントの認識論又は倫理說に置かんとするもので、唯物史觀に對する理想主義者の反抗と

も見られ、又理想主義者の社會主義を攝取せんとする企とも見られる。既に三十年來の運動ではあるにしても、而も尚我々學徒の見逃すべからざる興味ある運動である。

R君

僕の希望はミュンスター大學にカール・フォアレンダー(Karl Vorländer)を訪ひたいことにあつた。彼は「カントとマルクス」(Kant und Marx, 1911)を始めとして、多くの著書に於て、此の運動の中に活動する主要人物の一人である。不幸にして僕はミュンスターに往かれなかつたので、氏に御目にかゝることは出來なかつた。氏とプレンゲとはミュンスター大學の誇である。後者は「マルクスとヘーゲル」(T. Plenge: Marx und Hegel, 1911) の著者として、或る意味に於て狂人的、或る意味に於ける天才と唱へられてゐる。

僕の會ふことの出來たのは、ウイーン大學のマックス・アッドラー(Max Adler)氏であつた。氏は「思想家としてのマルクス」(Marx als Denker 1908)や「マルクス主義の問題」(Marxische Problem, 1922) 近くは「カント認識批判に於ける社會學」(Das Soziologie in Kants Erkenntniskritik, 1924)等の著者として、マルクス主義者中に於ける有數の哲學者である。丁度ウイーンに旅行した時、ミーゼス教授に伴はれて、大學の教授學生の出入するとあるカッフェーへ往つた。其の時隣に坐り合せた若い婦人のドクトルが、是非アッドラー氏に會へと勸め、自分が紹介するからと云ふことであつた。婦人名はゾムマー(Sommer)と云ひ、重商主義に付て書かれた立派な著述もある。婦人に伴はれて翌日ウイーン大學にアッドラー氏の講義を聽いた。題目は社會科學の方法論と云ふので、當日はデカルトの事を話された。講義の後ゾムマー孃に紹介されて、翌夕とあるカッフェーで始めて寛と質問の機會を得た。

氏の本に接した想像では、まだ若い俊敏の人のやうであるが、實際の氏はもう五十を越した人の良さゝうな老人である。話は社會學に關して始まり、マルクス主義に付ての僕の細微な質問に及んで、今此に述べるには余りに煩に堪へないが、氏はマルクス主義は完成されたものとみるは誤である、あれは未完成の素描として、今後幾多の人によつて完成せらるべきものであることを力說せられた。僕がマルクスの思想中の難點は何かと問ふた時に、一つは勞働價値說で、他は唯物史觀であると答へ、後者に關して最も鋭利な攻擊を加へたものは、一はマックス・ウエーバーで、他はトレルチであると述べた。氏とカール・フォアレンダーとの差に付ては、フォアレンダーはカントの倫理說とマルクスとを結ばんとし、自分はカントの認識論の上に、マルク

スの社會學を建設せんとするにあつて、期する所を異にすると云はれた。氏は僕のマルクス主義に對する質問を意外に感ぜられ、日本の學徒の中にいかにマルクスが研究せられつゝあるかを問いて、驚いて居られた。話は僅に一時間位で、定めの汽車で僕はハイデルベルグに立たねばならなかつたので、再會を期して、別れたのであるが、自分は今一度ウイーンを訪うて、氏に御目にかゝりたいとの念から永く離れ得なかつた。

僕がフライブルグに於てシュルツエー・ゲヴアーニッツ(Schulze-Gävernitz) に御目にかゝつたのは、ウイーンから南獨逸へ入つた時の同じ旅行の時であつた。氏は有名なる「英國に於ける帝國主義と自由貿易」(Britischer Imperialismus und englische Freihandel, 1906)の著者として知られ、近くは「カントかマルクス」(Kant oder Marx, 1909) を著した新カント派學者の一人である。元來が經濟學者であるが、哲學の研究に興味を持つた人で、氏の嚴父は國法學の教授であられ、歴代名門の家柄である。其の爲か氏の風丰の何れかに貴族らしい上品さがある。僕がフライブルグの旅館に泊つてゐた時、氏の令孃から早朝電話が掛て、其の日の御茶に呼びたいから來ないかと云ふことで、早速御邪魔して、家族の人達と茶を飲みながら、氏の話を伺ふことが出來た。

話は今尙ミュンヘン郊外に隱棲たる老教授ブレンタノ(Brentans) 氏から始まつた。氏はブレンタノと共に、リベラリズムを主張し、出來得る限り國家政府の補助よりも、自助の方法を採ることを說いて來た、此の點に於てシュモラーやワグナーの國家主義と趣を異にし、同じ社會政策學派の中に於ても、異る一派を成してゐた。此の大戰は結局シュモラー、ワグナー等の獨逸に齎らした過を悟らしめ、ブレンタノや自分等の勝利を明にした。彼等と氏等との差は、結局軍國主義と個人主義との差に歸着すると。僕は此に於て獨逸リベラリズムの人生觀は何にあるかを問ふた所、氏は勞働者に眞の自由を與へて、其の人格を完成せしめんとするにある。ブレンタノ氏はリベラリズムを唱へつゝ、其の基礎付けを爲さなかつたが、氏の後を繼いで、之を完成したものが、即ちマックス・ウエーバー(Max Weber)であると云はれた。僕が進んで英國の社會主義と獨逸の社會主義の差を問うた所、氏の云はるゝには、英國のウエッブ等の社會主義は何等の哲學を有しない、之に反して獨逸の社會主義には、唯物史觀といふ一個の哲學がある。此の場合の所謂唯物的とは、決して屢々誤解せられる樣な物質とは何等の關係がない、唯經濟關係を云ふに過ぎない。然しそれでさへ現今は社會主義者中、唯物史觀を信ずるもの尠く、マルクス主義は今や

沒落の運命に向ひつ丶ある。新に社會哲學を作らんとするものは、宗教の方面より出立せねばならない、既にローマ舊教徒により又、クエーカーの信徒よりして、兩方面より之が企てられつ丶あると云はれた。之は僕が前に述べた Geistige Krise des Marxismus を指し、ブリーフスやハイマンの企を意味されたのであらうと察せられる。氏は英語に堪能で、有名な英國研究者である。氏のリベラリズムも亦英國の研究から來たのであらう。英國の研究者が多くリベラリズムを採り、同じ經濟學者であつても何か經濟學丈で滿足出來ないで、ある他の深い思想を求めるのは、僕が多く獨逸の學者に付て經驗した所であるが、此の邊に英國の與ふる大きな感化があるのではないかと思ふ。氣品のある氏との會話は、いかにも氣持がよい。氏の「大工業論」を譯した山崎覺次郎博士のことや、昔氏を訪うたと云ふ左右田喜一郎氏の噂をしてから、殘惜しく氏の門を辭したのであつた。

（六）

R君

僕は以上に於てカントとマルクスとを調和せんとする企を述べたが、僕の疑問とする所は、果してカントとマルクスとは調和し得るものなりや否やにある。僕の見る所に依れば、カントは感性に對する理性の超越に善を認め、善の實現は唯各個人のみの負り得る精神的事業たることを高調して、此の實現に際して必要とする物の存在を價値あるものと認めなかつた。從つて其の物の一種たる社會なるものに、事實としての存在を認めたかも知れないが、善の實現に必要なりとする倫理的價値を認めなかつたのではないかと思ふ。若し果して然りとすれば、社會を以て價値あるものとし、其の社會をより良きものたらしめんとする仕事に價値を置かんとする思想とは、少くとも直接には結び付かない、若し之を結合せんとするならば何かカントの思想を展開せしめた別のものを探ることによつて、始めて其の企が成功すると云ふべきでないか。單にカントの云つた「人格を單に手段とするのみでなく常に同時に之を目的として扱へ」と云ふ言や、「自由なる人格者」と言つた言などを捕へて、之を以てカントの倫理説とマルクスの社會主義とを調和せんとするはカントの根本思想と相容れないものではないか。此の事はカントの認識論とマルクスとの調和に付ても、同様のことが云ひ得る。

若し此に僕をして更に一言を加へしめんとするならば、何故に獨逸の學者がマルクスの唯物史觀に不滿なる場合、カントを借つて之を訂正する必要があるのであらうか。唯物史觀の非と

之に代はるべきものとを、自巳の體系から試みて然るべきではないか。何故に哲人カントの大名を借りる必要があるのか、僕は此にも獨逸國民が永い專制政治に慣れて、カイゼルやビスマルクを崇拜すると似たやうな偶像崇拜があるやうに思はれるのである。大哲學者の研究と之に對する憧憬とは固より必要である。僕は毫も之に反對するのではない。唯過去の哲人の大名を借りて、之によつて企に權威を加へんとするやうに見えのは、僕の感服し得ない所である。

唯此の派の人々の企ての非常に大きな功績は、社會哲學と云ふ獨立の學問の存在に人の注意を促した所に在る。元來「社會」の發見は十九世紀の大きな出來事であり、之を對象とした社會學の出現は亦、學問界に新紀元を劃したものである。然し不幸にして社會學なる學問の性質に色々の學派があつて確定しなかつた爲に、ともすれば經濟社會內の現象を研究する經濟學に、其の存在を蔽はれるの觀があつた。從つて「社會問題」なるものが單に經濟現象ではないのに、經濟學が之を扱ふ資格あるかの如く考へ、更に「社會問題」の解決はいかなる意味に於ても經濟學の領域外であるに拘はらず、之を經濟學の內部に包容せんとするの傾向さへ生じた。此の點に於ては個人主義の經濟學たると、社會主義の經濟學たるとを問はず、一樣に持つた誤解であつた。社會哲學は一面に於て社會の研究が經濟現象の研究よりも、其の對象に於て廣汎なることを明にし、他面に於て社會に關する「說明」と「規範」とが異ることを明にし、其の使命を明確に社會の規範の研究にありとした。かゝる獨立の學問の領域のあることは、先づ空想的の社會主義の暗示した所で、新カント學派の社會哲學の更に明確にした所である。此の學問が將來に於ていかに發展せしめらるゝかは、それこそ廿世紀の大きな問題であらう。唯彼等がカントの倫理觀を以て、社會哲學の根柢とせんとする所に僕の異論があるのである。

R君

此迄論じて來て、翻つて獨逸哲學の近狀を觀察すると、此に極めて興味ある變化が起りつゝある、それはカント哲學の凋落と云ふことである。人も知るやうに、カントに返れと叫んで新カント派の運動の起つたのは、千八百六十年代である。ヘーゲル哲學凋落の後に起つた唯物論的、自然科學的風潮が、獨逸學界を風靡したること久しいものがあつた。之に反抗して起つて理想主義を揭げたのが新カント派の人々で、ライプチツヒ大學の敎授オツトー・リープマン(Otto Liebmann)が Kant und die Epigoni を書いて、各章の末に、かくて吾人はカントに返らざるべからずと唱へたのは、千八百六十五年である。然

し哲學界に本當に壓倒的の勢力を持つに至つたのは、千八百八十年代からであらう。かくて最近に至るまで、一方はマールブルグのコーヘン、ナトルプを中心とし、一方はハイデルベルグのウインデルバンド、リツカートを中心として、カントを語らずんば學者でないやうな風さへあつた。然るに極めて最近此の數年、著しき轉回が起つて、カントを去つてヘーゲルに赴くの風を生じた。ハイデルベルグに於けるリツカートの名聲頻に衰へ、マールブルグに於てもコーヘンは既に物故し、ナトルプも昨年逝いた。而して之等の人の後繼者と目せらるゝものは、或はニコライ・ハルトマン、或はハイデツガーと云ふやうな新カント派からは、異端を以て目せらるべきヘーゲル哲學に近い人々である。目下の獨逸に於て顯著なものは實に此の旋回である。

然らば此の變化は何に原因するか、僕は一つの理由はカントの思想は當然にヘーゲルに展開すべきものだと云ふ點にあると思ふ。若しカントとヘーゲルとの關係が黑と白との關係のやうに、全く異るものであるならば、しかく容易に轉回は出來なかつたらう。夫れ自身の論理的開展は、カントよりしてヘーゲルに赴かしめるのではなからうか。然し主要な變化の原因は、社會の要求に在る、今多くの獨逸人の語る所によれば、大戰と大戰後の慘憺たる生活とは、獨逸人に大きな問題を提起した、それは善とは何ぞや、善なる社會とは何ぞや、何の爲に我々は此の慘狀に耐へねばならないかと云ふことであつた。永い間獨逸思想界を風靡して居たカントの哲學は、之に何等の解答を與へなかつた。認識は如何にして可能なるや、社會科學は如何にして成立するやと云ふ研究は、此の動いた社會を前にして、余りに呑氣な余りに迂遠なものであつた。カントにも倫理說はある、然もそは余りに形式主義で、當面の問題に指針を與へては呉れない。之がカントを去つてヘーゲルに往かんとする理由であると云ふ。僕は此の說明が果して事實に合するか否かはよく分らない、然し少くとも此の說明は不合理なことを云つてはゐない、いかにもありそうなことを說き及んでゐると思ふ。

（七）

かうした變化の表はれは、各種の方面に認め得る。例へばリツカートの樣に歷史哲學の性質如何の研究に物足りない傾向は、歷史哲學そのものを求める、シユペングラーの歐洲の沒落(Oswald Spengler: Der Untergang des Abendlandes, 1918)があれ丈人氣があつたのは之が爲である。カントの智識主義に反對する立場から、神秘主義、情緒主義が喜ばれる、シユパー

ンやゾムバルトの最近の傾向は、卽ち之を表示するものではないか。人世觀（Weltanschauung）を說いた書物の澤山に歡迎されることも其の一例である。(例へばディルタイ、メンツアー、ヤスペルス等)。更にカント倫理觀の形式主義に對して、之に何等かの實質を與へんとした企として、マックス・シユーラーの「倫理學の形式主義」(Max Scheler: Der Formalismus der Ethik und die materiale Wertethik, 1921)は特筆すべきものであり、最後にフライブルグ大學の教授フッサールの現象學の有する勢力は、最もよく新傾向を物語るものである。

此に僕の面白く感ずることは、英國に於ては千八百七十年代にカントとヘーゲルとが同時に研究せられ、理想主義の運動を起した、卽ち人が或は之を新カント派と云ひ、又之を新ヘーゲル派とも云ふ所以である。そうして最近に於ける變化は此の運動殊にヘーゲル哲學に對する反動で、リアリズムと云ふべきものである。之に反して獨逸では、先づ新カント派があつて、之に次いで最近に於て始めて、ヘーゲルの復活を見る。此に興味ある對照がある。同時に從來獨逸の哲學史家は英國の新カント派、新ヘーゲル派を以て、單にカントとヘーゲルとの祖述と速斷した然し實際に於て嘗にヘーゲルの研究は獨逸に於てよりも、英國に於て實績を擧げたのみならず、英國の理想主義は決してカント、ヘーゲルの祖述ではなかつた、立派に之を英國化した獨創性があつたのである。獨逸の學者がヘーゲルに注意するに至つてから、此の間の消息が分つて、英國理想主義に重を置くやうになつたことは、さもあるべきことである。

僕がフライブルグ在のシユワルツワルドの山莊に、フッサール教授を訪うたのは昨年の暮であつた。フライブルグで經濟學の教授ブリーフス（Briefs.）に會つたら、誰か會ひたい人があつたら、御世話をしやうと云ふことであつたので、それではフッサール氏に會つてみたいと云つて、氏の手紙を貰つてフライブルグを立つた。氏は停車場を下りてからの路を敎へて呉れて、若し途中で出會つてもフッサールはすぐ分りますよと云ふ。どうしてと尋ねたら、あれが獨逸大學のプロフエッサーの代表的のものです、頭髮が白くて、鬚があつて眼鏡を掛けて、兩手を後に組みながら、默々として步む所、誰でもすぐ分るものですと云ふ。シユワルツワルドは經濟史で敎へられたが、今も時計や玩具を作る手工業の榮ゆる所である。日本の箱根のやうな澤山のトンネルを過ぎて、とある小さなステーションで下りてから、ポカ／＼と暖い日和に四千尺程の高原を步く、いかにも閑な田舍である。やがて宿に着いて刺を通ずると、今丁度山の上

を散歩しておられる、あの夫妻がそれであると指されるので、坂を登つて追ひ付いた。打見た所もう六十を越した老人で、いかにもブリーフスの云つたプロフエツサーと云ふ姿である。歐洲の老先生に見受けるやうに裕然として打笑みつゝ、快く自分を迎へて、下の宿に下りてから共に中食の食卓に就いた。日本に於て有名な獨逸學者の噂や、氏の知る日本の留學生の話などが出てから、西田幾太郎氏が手紙と寫眞を送つて與れたと云つて喜んで居られた。中食が濟んでから、若し時間に余裕があつたら、自分に一時間の晝寢の時を與へて與れないかと云ふことになつて、僕は其の間附近を散歩して廻つた。遙に瑞西の山々を眺めた此の最南獨逸の高原は實に氣持がよい。起きられた氏と山の中腹のベンチに腰掛けながら、數個の質問を御尋ねした。氏は社會問題解決の根本原理は倫理學にある、經濟學等の社會科學は一の假定の上に立つ此の假定を整理することが大切である。倫理も民族主義の上に立つものであつてはならない、民族的と云ふことは、文化の基礎として大切なことではあるが、之はすべての人に本當のものを發達せしむ基礎になると云ふ丈の事で、積極的に民族を擴張することを肯定することにはならない、と云はれ、氏はひどく民族主義を攻撃された。其の後はどうもよく間に觸れた答が來ない、結局現象學の説明に入つて了つた。自分の問が御分りにならなかつたのかも知れない、然し後でフツサールは本で讀んだ方が、よい人ですよと言つた或人の言を成程と思つた。其の内に夫人が下から息せき切つて登つて來られて、汽車の時間に間に合はないから、今夜泊つたらどうかでなくば今直ぐ立たねば駄目だと云はれる。急いで支度して飛ぶが如くにステーションに馳け付けたら、其の時間表は日曜丈の時間表で、平日の時間表ではなく、更に二時間程ステーションで待たされた。フライブルグに戻つてから人に之を話したら、それが獨逸プロフエツサーの世間知らずと云ふものですよと笑はれた。假令フツサール氏の言はるゝことはよくは分らなかつたし、當方の問にも嵌らなかつたもののシュワルツワルドの山荘と老哲人フツサールとは、永く忘れられない思出を自分に殘したものであつた。

僕がマツクス・シエーラーに會つたのは二度であつた。一度はケルンの僕のホテルに氏夫妻が來訪された時で、二度目は伯林に於て日本の先輩K博士と共に、中食に招待を受けた時であつた。氏はケルン大學の哲學及び社會學の教授で、前に述べた「倫理學の形式主義」「價値の革命」（Vom Umsturz der Werte, 1919）其の他「社會學及人世觀學論集」（Schriften zur Soziologie und Weltanschauungslehre）等の

戰後の著述がある。戰後フランスの反獨感の強かつた當時、フランス學界が獨逸學者二人を招いた時、自然科學でアインシユタインが當り、社會科學でマックス・シエーラーが其の選に當つたと云ふ。年の頃四十五六でもあらうか、精悍の氣眉宇に溢れるとでも云ふか、いかなる問を出しても、打てば響くが如くに答が出て來る。僕の當つた時の感じは、英國の元のグラスゴー大學の敎授エー・デイー・リンゼーと頗るよく似てゐる。獨逸語の上手なK博士と一緒であつたので、大變都合がよかつた。色々の話の中に、氏は西洋の思想が行きつまつたこと、此の思想上の轉換は、東洋殊に支那と印度の思想から來なくてはならないこと、獨逸の哲學者に東洋に對する興味の增したことを述べられた。僕が氏の立場に付て說明を問うた時に、氏は自分はいかなる意味に於ても、マテリアリストではない、又同時に從來の意味に於けるアイデアリストでもない。マテリアリストの誤は人間が脚さへあれば步けると思ひ、何所に往くかを示す眼の必要を忘れる所にある。之と反對にアイデアリストの誤は、人間は眼があれば步けるものだと思つて、步くものは脚たることを忘れるにあると云つた。此の一句實に簡潔に氏の立場を表はしてゐる、そして兩者の欠陷を銳く突いてゐるではないか、若し此の一句を本當に註釋するならば、此に一卷の哲學史を爲すであらう。氏の言說の猛烈なる、實に此の種の如きものがある。

（八）

R君

僕は前項で社會哲學のことを述べた。社會哲學の研究と密接の關係あるものは、獨逸に於ける社會學近時の發達である。人の知る如く、社會學なる學問の出現した當時は、歐洲に生物學の全盛の時であつた。從つて社會學研究の方法も亦、生物學的方法又言を換へれば自然科學的方法を用ひ、人間の社會を以て動物の社會と同一視したり、社會を以て自然と同一視したのである。コムト、スペンサー等の社會學創設者が即ち之に當るものである。此の傾向は獨逸にも傳はつて、グムプロウイッツ、ラッツエンホーヘル、アンモン等、又更に少し異る領域をみてもマルクスやエンゲルス等も亦此の系統に屬するものである。然るに前世紀の末から、社會は決して自然ではない、人間の意圖の働いた目的を以て作られたもの、所謂文化的のものであるといふ見方が現はれて、社會學の研究方法も亦自然科學的から離れて、文化科學的となるに至つた。之れ最近に於ける社會學の著しい傾向である、之が旋回をなさしめた劃時代的の作物

は、恐らくフアーヂナンド・テニース（Ferdinand Tönnis）の「協同體と社會」（Gemeinschaft und Gesellschaft, 1887）であらう。それ以來之に屬するものとして、パウル・バルト（Paul Barth）トレルチ（Troeltsch）マックス・ウエーバー（Max Weber）シユウタヂンガー等を舉げることが出來、前に述べたケルンのマックス・シエーラー氏の如き、哲學者たると共に社會學者であり此に列すべき人である。又近頃日本に於て紹介せられる伯林大學の哲學及び社會學の教授フイアカント（A. Vierkandt）氏の如きも、假令其の立場に於て分明を欠く所ないではないにしても、尚此の派に數へて差支へないであらう。

社會學の此の新傾向は、一面に於て新カント學派の擡頭に負ふものである。久しく學界を風靡した唯物論的、自然科學的思考の傾向を哲學界から驅逐したのは、之等の人々である。哲學界に地盤を奪はれた自然科學的見方が、やがて社會科學から排斥されつゝあるは、當然でなければならない。と同時に社會學の此の新傾向は、又社會哲學に大きな影響を與へつゝあることを看過してはならない。固より社會學者は社會を以て文化的產物なりと扱ふにしても、其の研究の出立に於て社會を何等かの價値付けられたものとみる丈で、研究の過程に於ては、其の方法は科學的であり、價値的評價を企てるものではない。此の點に於て社會學と社會哲學とは、明瞭に區別されねばならないのであるが、然し社會が自然に非ずして文化であり、人間が目的を以て造られるものとする見方が、科學者たる社會學者によつて、前提とされたことは、社會哲學の可能と必要とを、更に一層強く刺戟することとなつて然るべきである。其の適例はテニースの「協同體と社會」の一書に付で明に之を舉げ得る。テニースが科學者として分解した協同體の概念は、現存社會と余りによく對立せしめられ、我等の社會の赴くべき到來社會が、ある意味の協同體たるべきであると云ふ社會哲學的示唆を與へた、そうして之が社會哲學界に與へた刺戟は實に尠いものではなかつた。現今の獨逸に看過し得ないものは、社會學の新傾向である。

僕が伯林大學のフイアカント氏に御目にかゝつたのは確か三回であつた。何れも大學の哲學研究室に於てゞある。氏には「國家と社會」（Staat und Gesellschaft in der Gegenwart, 1921）等の小著もあるが、主として、氏の名聲の係るものは、最近の「社會學」（Gesellschaftslehre, 1923）である。恥づかしながら僕は日本を立つときに氏の名を知らなかつた。所

がロンドンでホツブハウス教授の所で知合になつたギンスベルグ(M. Ginsberg)と話をした時に、ホツブハウスの樣な試みを獨逸で企てたものがあるかどうかを尋ねたら、氏は言下に伯林のフイアカントを擧げた。フイアカントとホツブハウスとを類似すると見る見方は少し問題であるが、英國の學者が獨逸の文獻に通ずることは稀有であるから、ギンスベルグ氏の此の答は珍らしいことと思ひ、さうした點に於てもフイアカントの名は爾來僕の忘れ得ないものであつた。

氏はもう相當の年輩である、非常に深切な心の行き屆いた人であるが、頭の鋭い人ではない。僕は氏と二回會つて、自分の志望を語つた時、氏によつて必要なる注意と示唆とを與へられたことは、私の勉強にどれ丈の展開を與へて呉れたか、圖られざるものがあつた。其の問答はかうした簡短な印象記に書くに適しないから略くして、氏が自分等を呼ぶにコリーグ、コリーグ(同僚)を以てし、手を執るばかりに情の深いのは、僕をして獨逸學者の印象を良からしめた一つの原因であつた。一回氏は僕を伴うて其の助手と共に、地下三層の書庫に入り、一冊一冊書物を棚から取り出しては、短評を加へて往かれた、之などは中々普通の人の出來ない事で、僕の利益したことは非常であつたが、氏の勞苦は大變であつたと察せられた。是非宅へ來て夕食を一緒にして、書齋でユツクリ話をしやうと云ふことであつたが、氏が病氣であつたり僕が旅行したりして、遂に御宅に伺ふことは出來ずに了つた。

僕がテニース教授をキールに訪うたのは、もう獨逸を去らうとするに間近い時であつた。氏は前に擧げた「協同體と社會」の外にホツブスの研究や、マルタスの研究があり、「輿論」(Offentliche Meinung)其の他英國に關する二三の著述がある。氏も亦ある意味の英國研究者である。僕が氏の御宅を訪うた時、出て來られた婦人をすつかり女中と思ひ込んで、後で夫人であることが分つて大變失禮をした。教授は今丁度大學へ出たばかりだといふので、直に大學へと驅け付けたが、小使は居ないと云つて、ハルムス氏主宰の「世界經濟調査會」の建物へ往つてみてはといはるゝまゝに、此に往つてみたが見當らず、再び御宅を訪うてから、夕方の再訪を期してキール軍港の海岸を散歩して時を消してから、三度目に訪問したが矢張まだ歸られないと云ふ。夫人は若し夫が戾つたら定めし殘念がるから、是非今夜キールに一泊しないかと勸められたが、自分は伯林への歸りを急いだので、遂に教授に御目にかゝるのを斷念した所が、夫人は氣の毒とでも思はれたか、教授の助手をしてゐる某氏を招いて、書齋で僕と話をさせた。助手氏は自分はテニース教授の

代理にはなれないが、教授の學說を御話しすることは出來るかも知れないと云はれた。から云ふ場合の代理は困ることではあるが、少し話をしてみたら矢張爲になつた。同氏はテニースが社會を文化とし自然と見ないで、生物學的研究法を社會學から排斥したこと、同時に社會學は經驗科學であつて、經驗的に研究すべきものである、此の點に於てリツカート等と立場を異にすると力說された。やがて間もなく氏の宅を辭したのであつたが、今から考へれば其の晩キールに泊つて、翌日教授に御目にかゝればよかつた。他日再び獨逸を訪ふことあるにしても、老體のテニース教授が生き永らへて居られることが、どうして保證出來やうか、恨を長く殘したことであつた、即ち此にテニース教授に會はざるの記を書く。

（九）

轉じて經濟學界を眺めると、此には前に述べた所に似る著しい新傾向はないやうである。又獨逸經濟學者もワグナー、シュモラーの物故以後之等の人が持つたやうな中心的地位を占めるものが居ない。否更に大きく歐洲經濟界を眺めても、人材の寂莫たるものがありはしまいか。英國のマーシアルは昨年夏逝き、フランスのヂード老い、獨逸にブレンタノ未だ矍鑠たるものあるも、既に學界の第一線に立つ人ではない。此に於て六十前後の人で今現に活動しつゝあるものは、瑞典のカッセル、獨逸フライブルグのカール・ヂール、フランクフルトのオッペンハイマール、オーストリアのウイーザー等あるのみである。今が働き盛の新人はずつと若い所に下つて四十代の人に多い。ウイーンのシュムペーター、ミーゼス、プラーグのアモン、ハイデルベルグのレーデラー等が丁度之に當るもので、其の今日迄の業績に於ても、未來の發展の可能性に於ても、今獨墺學界の期待は擧げて彼等の上に在る。之等の人々は皆限界功用說から出發したもので、レーデラー氏のみは稍之と離れて勞働價値說に近づきつゝある。若し此の系統と離れた勞働價値說の方の代表者を求めるならば、フイナンツ・キャピタルの著者ルドルフ・ヒルフアヂング（Rudolf Hilferding）がある。經濟價値論に於て、限界說に對する一方の大立物と云ふべきである。

目下の獨逸經濟學者の主要な題目は二つあるといふ、一つは價値の研究で、紙幣濫發の際マルクの相場の下落から、貨幣價値の研究を刺戟せられ、更に進んで一般價値の問題に及んだものだと云はれてゐる。實際あの當時には、貨幣に關する書物が實に澤山出版されたものである。第二の問題は保護貿易か自由貿易かの議論で、戰後の農工業保護の必要を叫ぶものが多い。

僕がどうしていつまで同じ様な問題を蒸し返しをしてゐるでせう、リスト以來の復習ですかと云つたら、困つたものですと云ふ人と、いや形は大分變つて來てゐるのですと云ふ人があつた。

僕が始め伯林へ入つた時、最初にお目にかゝつた人は、伯林大學の舊約聖書の大家ダイスマン教授(Deissmann)であつた。教授は僕の志望に對して、出來る丈多くの人に會ふことゝ、澤山の勞働組合の支部等を視察することを勸め、是非カウツキーとベルンシュタインとに會へと云はれたが、遂に二人には會はずに了つた。ヘルクナー教授に會つたのは、ほんの束の間であつた。以下お目にかゝつた人々の印象を、纏まりなしに記してみやう。

伯林で會つた人の第一に、教授シューマッハー氏(Schumacher)がある。氏には纏まつた著述がない、一つ論文集が最近に出た丈である。が今は伯林大學經濟學部長で教場に於て學生に人氣のあるのは、ゾムバルトと氏とであると云ふ。僕の教授を訪れたのは、少しく他に用事あつて、教授の意見を敲きに往つたのであるが、話は自ら學界の事に及んで、氏は目下の中心問題は何と云つても、價値論ですよと云ふ。それから獨墺經濟學者の品評に入り、其の學説から性癖、家庭關係まで、微に入り細に入り話をされた、會談二時間に亘り、僕をして一踏經濟學者通たらしめたが、僕は氏に二つの立場があつて、之によつて氏の品評が裏付けられてゐることを考へた、一つは保守主義であり、他は實證主義である、一を以て社會主義者を難じ、他を以て哲學的色彩ある學者を難ずる。氏の門を辭しながら、人の批評を聽くに先ちて先づ評者自身を批評せざるべからざるを思つた。

前に擧げたベルナード教授を訪れた時、氏は目下の問題は、理論の方では價値論、政策の方では保護貿易論で、前者に於て相對峙するのは、一方に於て限界功用説、他方に於てカッセル一派の心理學説であるとし、氏はカッセルの説は經濟學の研究以外のものであるとせられ、勞働價値説に付ては一顧をも與へなかつた。氏は亦シュモラー等の歴史學派が經濟學に與へた貢獻は極めて少いし、メンガー等の研究は餘りに抽象に偏する、此の點に於て吾々の大に倣ふべきは、マアシアル、キーンス等の英國のリアリスチックな學風であるとせられた。話は古人の事に及んだ時、クナップ教授が年齢八十五位で今現に生きて居られる、あの「貨幣國定説」(Knapp. Staatliche Theorie des Geldes)が、最近二三十年間に獨逸が持つた最良の本であらうとの事であつた。

僕はウィーンへ旅行した途中に、チェックスロヴァキアのプラーグ大學の教授アモン氏 (Alfred Amonn) を訪つた、氏は"Objekt und Grundbegriffe der theoretischen Nationalökonomie, 1911, の著者であり、近く又リカルドに關する小著 (Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, 1924) を出された。昨日引越したばかりと云ふ亂雜な書齋に於て、色々な話題が飛ぶ。氏の前著に話が來た時、經濟學の方法論は中々決定されますまい、今後半世紀不斷に問題になるでせうと云はれ、近著『リカルド』に付ては、自分は經濟學の研究はリカルドから出立するのが一番よい、そして何所にリカルドの欠點があるかを考へることによつて、自分の頭が段々と整理されて往く、此の方法を自分は永い間學生に對して行つて來た、それを今度纒めて出版したのであると云ふ。氏はシュムペーター、ミーゼスと共にウィーン大學に於てボエーム・バウエルクに敎へられた限界功用學派の三俊才の一人である、共に所謂ウィーン學派を双肩に擔ふべき人であるが、シュムペーターは米國のクラークに接近し、ミーゼスはリカルドの說に近づき、アモンはマーシアルに似つゝある。かくしてメンガー、ボエーム・バウエルク、ウイーザーと三柱石を持つたウィーン學派には、純粹の直系後繼者の乏しきを覺へてゐると云ふことである。

ミーゼス教授には、ウィーンで數回御目にかゝつた。始めは氏の書齋で、次には翌日氏から御茶に呼ばれ、色々の話をした後で、之から差支がなかつたら、ウィーンの夜を御案內しませうか、あなたはダンスをなさいませんかと云ふ。往つてみればよかつたのであつたが、少し躊躇してゐる內に、あなたはそんな事に興味がなささうだから、之から夕食を濟まして、教授達の集まるカフエーに往きませう、きつとケルゼンやマックス・アツドラーも來ませうと云ふ。カフエーでは之等の人に會へなかつたけれども、かうして度々ミーゼス教授と會つた爲に、僕の興味が啓發されたことは尠くなかつた。色々の事の中に一入僕の興味を持つたことは、ウィーン學派と云ふものである。僕も經濟理論に於て、限界功用說を採る一團の學者がウィーンにあることは、前から承知してゐたが、所謂ウィーン學派なるものは、單に理論經濟學のみに限られたものではない、心理學、倫理學、國家學、政策學等に亘るもので、心理學に於て快樂主義、倫理學に於て功利主義、國家學に於てリベラリズム、政策學に於て外は自由貿易、內は自由放任主義である、經濟學以外に於て世界的な代表者は、國家學に於けるハンス・ケルゼン (Hans Kelsen)、倫理學に於けるヨードル(Friedrich Jodl) であつた。

遅蒔ながら之を知つて、僕は此の一團に對する興味を多分に唆られたのである。

シユムペーターに會つたのは事務的の用事で、學談に觸れる餘裕はなかつた。頭の迅くて鋭いと云ふのが、あゝ云ふのを指すのであらう、此の點に於てロンドンのハロルド・ラスキーと好一對である。顏の色淺黑く、面立何となく宗之助の扮する武家によく似てゐる。前に大藏大臣をした人丈に、學者の外に政治家的の所があり、今現に銀行の頭取をしてる丈に、實業家らしい機敏さもある。人は當今學界第一と云ふ。兎も角、當つた時の感じに普通の人と異つた肌觸りがある。

ケルゼンにもウイーザーにも、シユパーンにも御目にかゝる手筈はあつたに、急ぐ用事があつたので、僕はウイーンを立つて、ハイデルベルクに赴き、此でエドガル・ザリーン（Edgar Salin）に一寸會つた。趣味の廣い、そして外國人をよく遇する人だと云ふ噂を二三の人から聞いてゐた、然しゆつくり會ふ時もなくて、ほんの束の間の面會で別れた。

フライブルグではカール・ヂールには會はないで、ブリーフス教授夫妻には度々會つた。氏自身はローマ舊教に屬する人で、政黨も中央黨（ツエントルム）に屬し、かなり重要な地位に在る。夫人は永く英國で育てられた、所謂教養ある貴婦人型の人で、社交界に色々の活動をして居られるとはフツサール夫人の話であつた。

氏に御會ひして二日目に、氏に伴はれて大學の經濟研究室を巡つた。室の一方の壁に澤山の肖像があり、シユモラー、メンガー、コンラード、マックス・ウエーバー、マルクス等であつた。其の繪を捕へて早速僕が話題を向けたので、大分話に花が咲いた。氏に依るとシユモラーは實に博學の人であつた、唯あの博識を活用するに足る人格的の力に乏しかつた、氏も晩年之に氣付いたやうだけれども、遂に如何ともすることが出來なかつた。學者にも亦性格の强さが必要である、例へばマックス・ウエーバーやマルクスは之を具へた人であるが、獨逸學者は從來余りに倫理的なあるものを欠いて來ましたと。ワグナー、シユモラー以後獨逸學界には、中心的人物がゐない、唯マックス・ウエーバーの生前に於て、稍之に近い地位を占めてゐたと云ひ得るかも知れない。彼は研學の徑路に於て極めて惠まれた人であつた、始は法律の歴史を勉强し、次でフライブルグへ來てから、經濟學を修め、ハイデルブルグに往つてからリツカートの影響を受けて、哲學の研究に入り、最近は社會學に興味を持つた。歴史學、哲學、社會學、經濟學、此の四つが將來社會科學を修めんとするものゝ當然に踏まなければならないものである。色々の外部的の事情から、マックス・ウエーバーが此の

四つの勉強を經過したことが、彼をして偉大ならしめた所以であらう。彼にはビスマルクが持つやうな一種の人格的の强さがあつた、斗酒尙辭せずと云ふ豪放な所があつて、之が氏の死因になつたとも云ふ。唯氏は超越的なものと現實の世界との間に、何等の連絡を結ぶことなしに、二つの世界を認める二元論で終つたが、之をどう結び付けるかゞ、氏の殘された大きな問題があるのではないかとはブリーフズ氏の意見である。

氏の話は中々暗示に富む。話が獨逸社會政策に及んだ時、社會政策學派には顯著な二つの區別があつた、一つは軍國主義的な傾向でワグナー、シユモラーが之を代表し、一つは人道主義的な傾向で、ブレンタノ、シユルツエ・ゲヴアニッツが之に當る。此の區別は根本的の差違で、表面は同じ社會政策を採つても、究極の立場に於て非常に區別せらるべきである。獨逸に於ける個人主義の代表者は過去に於てハインリッヒ・デイーツエル(Heinrich Dietzel)であつたが、現代に於てはミーゼスとリーフマンとであらう(之は僕の前に述べた資本主義辯護と云ふことに當るであらう)。殊にリーフマンの考方はそつくりベンサムである。曾て氏が彼に會つた時尋ねたら、彼はベンサムを少しも知らなかつたのは、非常に意外に思つたと。氏は話題に富み話方の上手な人である、擧げたら盡きない話の中から二三此に拾つて揭げたのである。

(十)

僕が獨逸へ往つた時は、秋の始めであつた爲め、色づいた木の葉は實に奇麗であつた。伯林市中のチーア・ガルテン、郊外のグルネワルドの二つの公園には始終散步に出掛けたものである。美しい色に染つた森の散步や、ガサ〳〵と鳴る落葉を踏んでの逍遙は、忘られない懷しいものである。祖國を去つて既に二年余になり、もう次の年は日本に於て迎へると云ふ感じは、見る物每に一縷の寂しさと懷しさとを與へた。七ケ月の滯獨生活の學的收穫と共に、何故か獨逸の風物は、僕に後髮引かるゝ思をさせる。若し將來に再び歐洲に遊ぶことがあつたら、自分は獨逸に落付きたいと云ふ願に堪へない。

今一つ獨逸に僕を惹付けるものは、音樂取り分けオペラである。伯林に於ける二つのオペラ・ハウスには、實によく通つたものである。今でも其處で聽いた曲や背景は、夢の如くに自分を伯林に誘ふ。日本と違つて其の國の一般生活標準に比較するとずつと安く立派なオペラに往けることは、本當に羨しいことである。巴里に來て美術が、いかにも國民の生活の中に織込まれてゐることを思つたが、獨逸に於て音樂が國民になくてなら

ないもの、又すべての人が享樂し得るやうになつてゐることを嬉しいことと思ふ。

七ケ月の獨逸生活は、大體に於て伯林に於ける蟄居の生活であつたが、三度旅に都を離れた。一つはライプチッヒ、ハレ、イエナ、ワイマール、アイゼナッハ、アイスレーベン、、ウィッテンベルグ等の小環旅行で、一つはドレスデンからプラーグウイーン、南獨逸を經てケルン、アーヘン、ボン等を廻つて伯林に歸る大環旅行で、一つはハムブルグからキールに往つたことであつた。小環旅行の目的はゲーテ、シルレル及びマルチン・ルーテルの遺跡を探ることにあつた。ルーテルに關係ある地はウオルムスを除いて、殆すべて廻つてみて、此の人の爲した宗敎改革の運動と云ふものに今更に興味を唆られた。學究的なメランヒトンと巨大な性格のルーテルとを併せ持つたことが、あの當時の獨逸の幸であつた。曾てマルクスは青年時代の作物の中で、獨逸が叫んだ聲として前にルーテルの宗敎改革がある、今プロレタリアの運動が再び獨逸から叫ばれなければならないと言つたが、あれこそ本當に獨逸が叫んで世界を動かしたと云ふものだらう。到る處に立つルーテルの銅像を見て、大地を動かす人の力を思ふ、ルーテルあの時年三十五であつた、內面的に羽翼成るとでも云ふ年である。本當の強さは此の年頃を俟つべきでないか。

景色のよい土地は獨逸に限がない、そして其のすべてが歷史と離れられない聯想を伴ふ。アイゼナッハの停車場を下りて、夢の樣に中天に浮ぶワルトブルグの城は實によい。城へ登つたのは冬枯の時であつた。獨り默想に沈みつゝ、林間の小路を往くと、今にもタンホイザーやエリザベスが現はれさうに見える程、それはオペラの世界と似てゐる。ハイデルベルグの「哲學者道」から見た城山とネッカーの流もよい更にボンの河畔に立つて、ラインの流を見た時もよい。あの陽やかな大河を間に挿んで、獨佛の二大國民は何百年の間一進一退の爭を續けた。血生臭い歷史を知らぬげに、ラインは悠々として流れて居る。

三月末僕等は愈々伯林を立つて、巴里へ向つた。ライン河を渡つた時、心からさようならを獨逸に告げた、それは丁度一年前に、オックスフォルドに呼びかけたと似た感じ、感謝と祝福に溢れてゐた。

歸朝の途に就く（第八信）

（一）

巴里には親しい友が自分の着くのを待つてゐて吳れた。此で二ケ月のフランス生活を持つた譯であるが、僕のフランスに關する智識は充分でないし、フランス語は自由でなかつた爲に、早速語の稽古に取り掛つた。若し世界に都らしいと云ふ都があるとすれば、それは巴里であらう。いかにも整つた美しい街である。そして巴里といふ都と離すことの出來ない表象に富んでゐる。エッフエル塔、凱旋門、コンコード、シヤンゼリゼー、セーヌ河等何れもが、巴里を表象し、巴里を聯想させずに置かない。之等の一つを示した繪を見る時に、我々の胸はときめくを覺える、之が倫敦に就ても、伯林に就ても感ぜられない所である。

フランスにもオペラはある、獨逸のワグナー等の重苦しいオペラに對して、此には輕妙な陽氣なオペラがあつて、一つの特徴を爲してさへゐる。然しフランスになくてならないものは、繪畫と彫刻とである。ルーヴル、ルクサンブール、ロダン等の博物館は、僕の樣な美術眼のないものをも惹き付ける、そして名畫の前に立つ時に、分らぬながら何かゞ分るやうな氣がする。僕のイタリア旅行は余りに短かつた爲にフランスと比較することは出來ないが、自分はよくルーヴルの繪の前に腰掛けては、長い時間を費したものである。色々の流派の分類、時代の整理等をして、日本でも知らず識らずの間に、美術に興味を持たしめる設備があつてほしいと思ふ。曾て倫敦のある美術館で、汚い身姿をした子供達の一行を眺めて、守衛の一人が我々はかうして次の時代の國民を作るのだと云つたが、我々の國にも之丈の用意があつて欲しい。

若し僕にフランスに懷しい時代があるとすれば何かと問はれたら、僕はあの大革命の前後と答へたい。革命前に於けるヴォルテーア、ルツソー、エンサイクロペジストの人々は、僕のいつか親しく究めてみたいと思つてゐる所である。殊にルツソーに就ては取り分け惹き付けられる。曾てある哲學史家は彼を評して、多くの革命思想家のやうに彼は認識論に興味がなかつた、唯人間に關することのみが彼の興味を惹いた、彼が哲學的冥索に導かれたのは、自己と他人との交際に於て及び人々相互の交際に於て、見出される不快と苦惱と憤慨とからであつた。かくして此の世界の現在は果してあらねばならぬものであるのか、若し之が理想でないならばどうしたらよいのであるか、此の二つが彼の出立に際して抱いた問題であつたと。僕はかうした思索の發途に興味を覺へる。自分から問題を持つて出立する人と、他から與へられた問題を一生懸命に抱いてゐる學者とがある。今の世は余りに後者が多過ぎまいか。

彼の思想は當然に纏まつたものではなかつた、かうした出立から來る思想は、手際よく纏められるには、余りに問題が巨大である。然し彼は纏まらなかつた爲に、多くの人々に大きな感化を與へた。反對な立場が等しく彼から流れる所に面白さがある、カントとヘーゲルとは等しく彼によつて動かされ、異る二つの體系を立てた。僕は彼以後の社會思想の發展を頭に置きながら、彼の「民約論」を英國の田舍で繙いたことがあつたが、彼の片言雙語が流れ落ちて、東と西の大河に別れる節に接して、興味津々たるものがあつた。

革命以後に於ては、人の知る如く凡そ三種の思想を生じた、一つは復古思想でル・マイスター、シヤトーブリアンによつて、代表せられ、一つは社會改造思想で此にサン・シモンとコムトが入り、第三に折衷學派があつてヴイクトア・クーザンが之に當る。僕に意味のあるのは第二の改造思想であるが、此の派別れて空想的社會主義となり、他は實證主義となつた。空想的社會主義は苦無しにマルクス、エンゲルスに片付けられて、科學的社會主義に代はられたが、彼等には足らざるもののあつたと共に、捨てられてはならないものがあつた。理想の實現を期する手段に於て思索が足りなかつた、然し理想を掲げたことは捨てずともよいことであり、否捨ててはならない事である。ツーガン・バラノウスキーは彼等を復活せしむるに努力したが、誰か再び彼等を新しく現代に活かすものがあつて欲しい。實證主義はベンサムの功利主義やマルクスの唯物史觀と同じ樣に、科學の力を以て社會の改造を企てた一つの試みである。社會の改造と云ふ大きな目的から出立した思想が、其の思想の中で人間は目的を以て動くものではないと云ふ。此にソフイスト以來社會思想史上に去來する一個のパラドツクスがある。

（二）

R君

五月末日僕は巴里を立つて、一年振りに英國へ向つた。僕は英國海峽を渡ること、此に五回の多きに及んだが、恐らく之が最後と思つてドーヴアーに上陸した。實を云ふと僕は一ケ月後、歐洲を立ちアメリカを經て日本に歸るのである。始から歐洲生活最後の一ケ月を殘して置いた、そして之を自分の一番氣に入つた場所で、勉强なしに靜な默想に費したいと思つてゐた、あれかこれかと思案して結果、僕の撰んだ場所は結局オツクスフオルドであつた。

一年前に英國を立つた時は、倫敦會議を招集した矢先で、勞働黨内閣の油の乘つてゐた最中であつた。一年立つて戻つた時

は、英國は壓倒的多數の保守黨の天下であつた。チャーチルの保守黨内閣入は予想はされたにしても、見る影もない自由黨の様は憐れであつた。敗戰後アスクイスはリベラリズムの存在の必要は之からだと豪語したさうだ、僕も亦自由黨がかうして死んで往くとは思はないが、餘りに無慘の姿である。當のアスクイスもオックスフオルド伯を名乘つて、貴族となつた、然し貴族になつた以後の彼は、却て社會的には活動してゐるやうである。翻つて勞働黨を見ると、此にも一年前とは違つた混亂があつた、一つは首領マクドーナルドの威重の減じたことである。英露條約談判とチノビエフの書簡事件に於ける彼の態度は、彼には珍らしい位、確信のないものであつた、人は之を稱して過勞の爲だと同情したが、其の時の過失と總選擧の失敗とは、彼の黨員に對する威重を減じて、選擧後の黨員總會に於て、首領の選擧に五十名はジョージ・ランズベリーを擁立した、結局ランズベリーは候補を辭したので、彼は難なく首領に選ばれたが、五十名は尙棄權したと云ふ。然し之は一時の形勢でやがて彼の信望は回復するであらう、僕歸朝後の報知は之を裏書してゐる。

　今一つの變化は勞働運動が政治に興味を失つて、再び勞働組合主義に戻らうとしつゝあることである。チー・デイー・エッチ・コールは此の形勢を大きく見てゐるが(Die Gesellschaft, Juni 1925)、僕の考に依れば此の形勢の大きさは俄に斷ずることは出來ない。一般社會の改造を去つて、各産業の雇傭條件の改善に戻つたとみれば、それは保守主義に返つたことを意味し、若し議會主義を擲つて、産業を威壓することによつて、勞働者の權利を伸ばさうとみれば、急進主義ともみられる。其の何れを認むべきかは、今少し多くの時を俟たねば判じ兼ねる。勞働黨の勢力は決して昨年の選擧で減じてはゐない、着々として伸びつゝある。其の政治的勢力の伸ぶる時に、英國勞働社會は、政治圏外に中心運動を求めやうとは考へられない

　僕のオックスフオルド滯在中に起つた興味ある事件の一つは、議會に於て保守黨が提出した英帝國特惠主義に對し、勞働黨から少からざる投票があつたことである。僕は此の事に面白い推移が讀めるのであるが、元來勞働黨は帝國主義に反對し、自由貿易を唱へて來た。然し之等の主義は勞働黨が自ら考へて、自黨の主張としたのではなくて、自由黨が主張してゐた爲めに、自由黨から分離した勞働黨は、知らず識らずの内に、之を一緒に綱領の中に採り容れて來たのである。勞働者の爲めにどうするがより良いかを大して考へてから、採用したのではあるまいと思ふ。若しさうだとすれば、殖民地から來る或種の物品を保

護する爲に、外國品に課税し、其の代りに英本國からの殖民地に對する輸出の便宜を圖らうとする場合に、さうした方が勞働者の爲に得策だと考へるものがあれば、元來自由貿易の主張が自分の腹から出たものでないならば、動搖があつても決して不思議ではない。現に此の場合に於て十數名の勞働黨員は、一種の帝國主義的保護政策に贊成したのである、それはジエー・エッチ・トーマスのやうな人ばかりではない、クライド社會主義者と云ふ最も急進的分子が之に贊成したのである。僕は今どの態度が良いと云ふのではない、唯此に自己の根本思想と有機的一體をなさない主張はいつか抛げることがあることを感ずる丈である、兎も角英國勞働黨が帝國主義に對して、態度をハッキリ決すべき時は近づきつゝある。

此の頃に現はれた書物の中で注意すべきものは、ハロルド・ラスキーの Grammar of Politics の大著である。六百六十頁餘の浩瀚な書物であるが、著者が數年來ロンドン大學に於て爲し來れる講義を整理したもので、かうした政治學書に乏しい英國に於ては、始めて纏まつたものを獲たと喜ぶべきである。トゥネーは「英國勞働運動」(British Labour Movement)を著はした、アメリカに於ける講演の出版である、之は小冊子ではあるが、英國勞働運動の全體を見渡したもので、此の類のものの乏しき英國に於ては、捨て難いものである。コールは近來愈々健在で、オーエンの傳を書き、コベットの傳を出した、更に「組織勞働」(Organised Labour)の一篇を以て、前著「勞働組合主義序論」を全部改訂した。若し夫れバウガンの「政治哲學研究」二卷(Vaughan : Studies in Political Philosophy)は、ルツソー研究に名ある人の手に成るもので、最近社會思想に關する人ではないが、ボサンケ以後の文獻と推重するに恥づかしくあるまい。

オックスフオルドの一ケ月は、僕の留學最後の生活であつた。此で二ケ年半の過去を顧み、辿り來れる考索を整理し將來の計畫を案じて、老いたる人が晩年に、半生の清算をするに似た氣持で、靜な時を持つことが出來た。さうして七月四日サザムプトンから巨船モウレタニア號でアメリカへ立つた。

（三）

R君

僕は七月十日早朝紐育の港に入つた。自由の女神の像を左にし、薄霧の中に浮ぶ大廈高樓を眺めて、船は靜々と波止場に近づく。僕は此に果てなくも六年前を偲ぶのである。千九百十九年の春自分は紐育の埠頭に立つて、大西洋を越へて歐洲に渡る

とを憧れた、然し官命背き難くして、空しく海を眺めて渡歐を諦めたのである。今や歐洲よりの歸途、此に來つて色々の思出に滿ちる昔の生活は、走馬燈の如くに眼前に浮んで來た、僕の今度の旅行はアメリカに在ること僅に十日、七月二十一日には桑港を立つて日本に向つたのである。今度の旅には語るべきことは何物もない、唯此に六年前の往事を少しく語りたい。

僕は其の時桑港に上陸してから、シカゴまでは途伴があつた、然しシカゴで遂に獨りになつて千九百十八年九月二十三日紐育に入つた。當時歐洲大戰のまだ酣の時で、ウイルソン大統領の油の乘つた絶頂であつた。同廿七日ウイルソンは自由公債募集の應援の爲紐育へ來り、有名なメトロポリタン・オペラハウスで演説をした。此の日の演説が最も明白に聯合國の十四ケ條要求なるものを宣言した時で、歷史的の大演説である。僕は偶然にも紐育に入つて後數日にして此の演説を聽くことが出來たのであるが、それは僕にとつて一個の事件であつた。何千と云ふ老若男女が涙を浮べ、咽び泣きをしながら聽いた此の場の光景は、僕にとつて驚異であつた。否之は決して此の場内の光景ではなかつた、それは一億何千萬の全米國の光景であつた。あれ丈雜多の人種を交へた國民が、あの際に一人の「道德的指導者」の掲ぐる標旗の下に集まつた壯觀は、有史以來のインスピレーションである。彼等を動かしたものは、領土の擴張でもなければ、國の光榮でもなかつた、それはアメリカの世界に對する道德的使命であつた。かゝる動機の下にかゝる指導者の下に、かゝる巨大の國民が戰に參加した事實は、それ丈でさへ大きな歷史的躍動である。僕は後彼が議會の開院式に列する爲巴里から戻つた時の演説をも、ワシントンの院内で聽いたことがあつたが、戰爭の赤熱時のアメリカ、彼の全盛時代のアメリカを身自ら觀照し得たことは、僕が終生忘るべからざる思出であつた、若し國民に感激の心あり、若し其處に靈感の人あらば、一億の人も亦奮起し得るものなるとは、僕の銘記して忘れ得ざる所である。

巴里に於ける彼には失敗があつた、彼は理想の人であると共に、又超俗的の仙人ではなかつた、それとこれとを比較して、何れを採るかの場合に於て、彼の内に巣喰つてゐた世の中的の悧口さが、遂に彼を裏切つたため、彼も亦理想を以て終始し得なかつた、かくして彼も亦分裂せる自我の持主の人であつたのである。巴里より歸れる彼は俗人を喜ばすを得ず、理想家を滿たすを得ず、腹背敵を受けるの止むなきに至つた。而も彼の不屈不撓なる、自ら國際聯盟の爲に宣傳せんとして、將に太平洋岸に着いた時、病の爲に仆れ、半身不隨の儘ワシントンに送られた。其の後の彼は唯悲慘であつた。彼の人となりに付ては、色

々の說がある。僕もアメリカで多くの人の意見を敲いたものであつた、然し彼は理想がいかに現實を動かし得るかを示した近世の第一人者である。彼の死んだ時、英首相マクドーナルドが未亡人に打電して、彼の思想は此の世に行ふべく、余りに高遠であつた、されど人類は未來に於て幾度か彼を偲ぶの時あるべしと言つたのは自分等の云はんとする所をよく穿つてゐる。

曾てマンチエスター・ガーヂアン紙は、彼の死に際して彼を評して曰はく、彼は多くの場合に初對面の第一印象で、人の好惡を定めた。初對面で彼を好いた人を彼は好いた、初對面の時に彼に疑を挿むが、彼を嫌つた人を、彼は遂に最後まで愛し得なかつた。所が初對面の時に直に彼を好くやうな人は、彼と同じ樣な理想家で、容易に彼を好きえない人は、リアリスチツクなプラクチカルな人であつた。此に於て終生彼の圍に集まつたものは、彼と似た型の人で彼よりも劣るもの、彼と異つた性格で彼に欠けたるものを補ひ得るものは、彼の圍に來るものがなかつた。彼が元首となつた時彼の必要とする人物は、初對面に彼を直に好きえないやうな人物であつた。ウイルソンの失敗は此に存すると、彼の弱點を突き得て鋭い、之れすべて理想家の陥り易い弊である。彼も亦强さうであつて、弱い所のあつた人なのであらう、人間的な所が此にあると共に、彼の人格の限度が此に在つたと云へないか。

（四）

六年前のアメリカを想ふとき、今一つ僕の忘れえないのは、ミス・ハザノイツチ（Miss Hasanowitz）のことである。僕がアメリカに來た時に、アンタル・トムス・キャビンが奴隷生活を描いて、奴隷解放運動の爲に貢獻したやうな、何か工場勞働の生活を描いた書物を探したいと願つてゐた。紐育のとある本屋の店頭で「彼等の一人」（One of Them）と云ふ標題の書物が目に着き、之がアメリカの勞働生活を寫してゐるらしいので直に求めて讀んだ。結果は求めたよりも大きなものを與へて呉れた、爾來其の著者ミス・ハザノウイツチには是非とも會ひたいと思ひ窃に考へてゐた所、ある日のこと婦人衣服製造職工組合の本部を訪うてプライス博士と話をした時、ふと話が彼の女に及び、彼の女の隣室にあることを聞き、偶然の緣に驚いたのであつた。

彼の女はロシア生れのユダヤ人であつた、當時年の頃廿六七であつた。ユダヤ人に對するロシアの迫害に苦んで、獨り兩親と別れてカナダに逃れ、次でアメリカに入り、苦しい工場生活の中に組合の設立に苦心しながら、あの本を書いたのであつ

た。書物は相當の好評を博し、ロシアに關する智識に餓ゑてゐた時であつた爲、彼の女は既に新人の一人として、講演などにも頼まれて一人の婦人作家の地位を獲てゐた。僕は彼の女の家に招かれて夕食の御馳走になつてから後、ゆつくりと話をする時が得られた、その一二時間の會談の後、二人は永い間の知合の樣に御互を理解した。其の後の彼の女は僕の爲にあらゆる便宜を提供して呉れた。屢々僕を伴つて、工場の監督に案內し、外國人の容易に足を入れえない工場生活の內部を開き、ある時は婦人作家の群に僕を招き、ある時はロシアの外交官夫妻に紹介し、凡そ彼の女のなし得るありとあらゆる便宜を僕の爲に惜しまなかつた。

ユダヤ人として藝術家として、彼の女の人となりは感傷的であつた、非常に美しい人ではないが、智性の閃が面に隱しえない所に人を惹付けるものがあつた。多くの若い男が彼の女の元に求めに通つたやうである。僕は彼の女と屢々會ひ、屢々語つて、異國の友として親しみながら、彼の女の人となりに尊敬を高めるのみであつた、親しんで狎れず、寛容の中に威嚴を忘れずに、彼の女は己を守り、僕を守り、僕の妻子を守るが爲に、あれ丈親しみながら人知れず心を拂つた苦心に僕は敬して措かなかつたのである。僕の愈々紐育を立つて日本に歸らうとした時に、彼の女は泌々と云つた、私はあなたの爲に出來得るあらゆることを盡しました、出來ないことは私の心の足りない爲ではなくて、私の地位と力の足りない爲です。私は日本へ往きたい、そして日本の婦人と勞働者の爲に盡したい、然し私は日本語も話せないし日本にも往けない、どうか私の爲に私に代つて、日本の婦人と勞働者の爲に戰つて下さいと。彼の女に代つて婦人と勞働者との爲に、此の一句が永く其の後の自分を支配した。

× × × × × ×

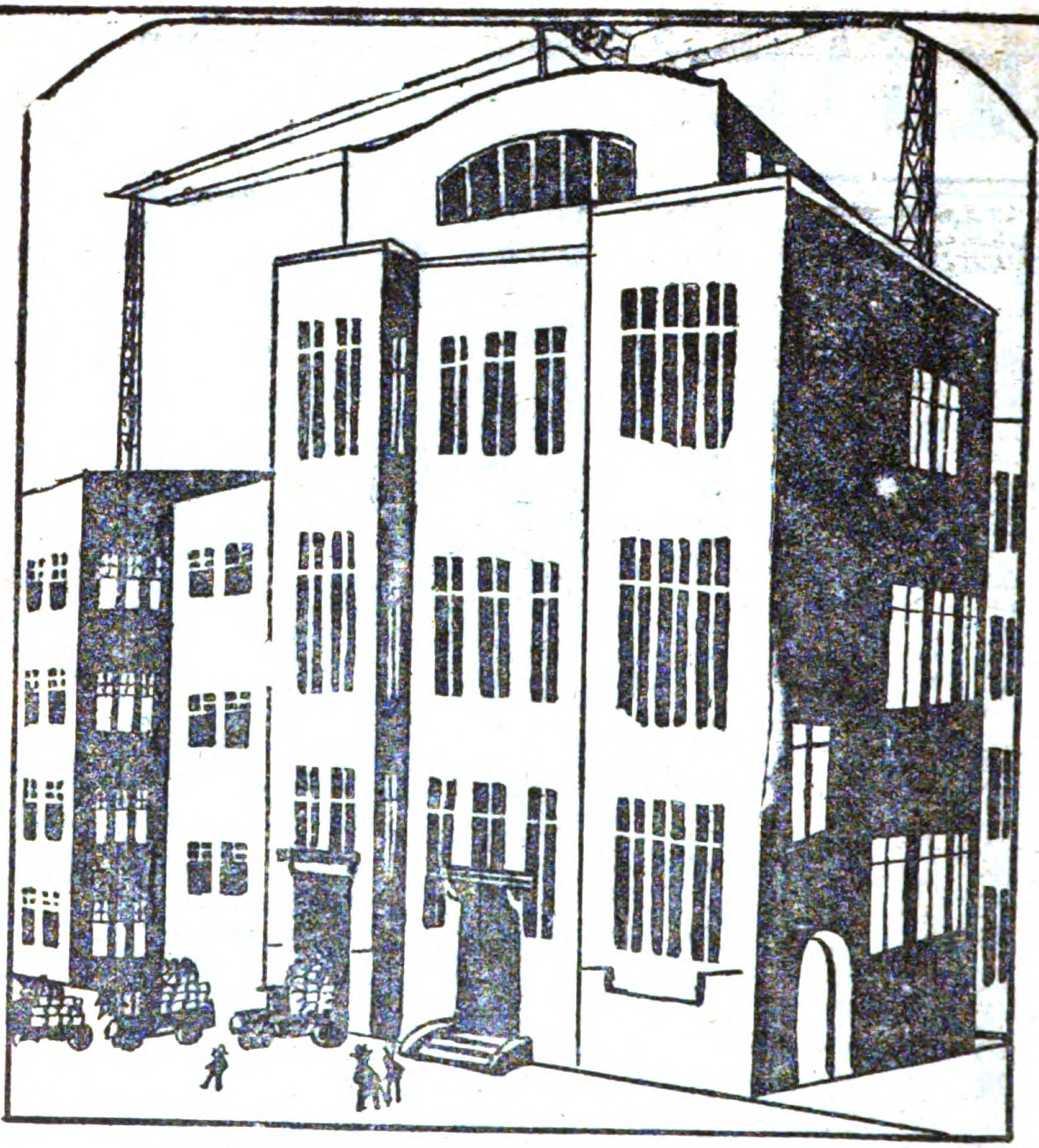
R君

以上は六年前の話である、僕は七月廿一日桑港を立つコレア丸に乘つて、日本へ歸航の途に就いた。桑港の波止場で見送る人と見送らるゝ人とを見て、熟々日本へ近づいたなと思ふ。洋服の着方も顏付も、日本人の中でも都の人とは變つた人々である。あちらでもこちらでも「日本は陽氣が惡いから、身體を氣を付けなよ」と云ふ田舍訛の言が聞える。此には東京を知らない日本人が澤山居るのである。

船は一日〳〵と祖國に自分等を運ぶ。六年前自分は此の海を渡りながら、數日寢床の上に輾轉反側の思を爲したことがあつた、當時官省の一屬僚たりし僕は、日本の婦人と勞働者との爲にと云ふ彼の女の言を想ひながら、自分の將來を案じ迷つた、

米國で受けた澤山の人の好意と同情とに何を以て報ゆるべきか、廿代の若さに於て此の世界の躍動の中に投ずるをえせしめた日本の國民に何を報ゆべきか、僕は至醇の感激に滿ちて、歸國を急いでゐた。六年の後の今、僕の心には此の海の樣な靜けさがあつた、往くべき路は明であつた、唯力と時の足らざるを憂ふのみである。騷がぬ落付いた胸を抱いて、自分は祖國へ急いだ。八月六日始めて日本の島影を眺め、二ケ年八ケ月を經て横濱の波止場に近づいた。甲板に立つた自分は、埠頭に在る老いたる母の姿を求めた。少し面窶れした母は僕を見付けた時淚込んだ、それを見た僕の眼からハラ／＼と淚が落ちた。母は生きてゐて呉れた、之丈が唯嬉しかつた。

（完結）



朝刊 **新愛知** 夕刊

——本年の大飛躍——

●宏荘なる社屋の新築……

●精鋭なる高速度輪轉機の据付

名古屋市 **新愛知新聞社** 西區本町

河北新報


森永の菓子
長壽千年
の言祝に
進め参らす菓子の
かず〳〵
ミルクチヨコレート
ビスケット各種
ドロップス
クリームウエーファース
ミルクキヤラメル
森永製菓株式會社

京大助教授

大宰施門著

ロマンチック時代

（定價貳圓貳拾錢 送料二十錢）

新刊

文藝の花園、佛蘭西文學史上に、わけても絢爛たる研精の時代、十九世紀前半のロマンチク時代を其社會的背景と共に述べたものである。ラマルチーヌ、ジョルジュ・サンド、バルザック等が如何に此時代に生き、如何に其作品を完成したか。著者はロマンチクの名を負ふて立つ本邦唯一の權威者、本書は佛文學の本質にふれ、ロマンチクの諸相を細敍す、ロマンチクを概念的に抱懷する者、或は個々片々たる飜譯によつて佛文學作品を讀みたる者、若し本書を看過せば永遠に暗愚の暗に閉さるべし。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

富田林一家の話

堺利彦

(一)

僕わ富田林(トンダバヤシ)八郎とゆう者です。

僕わあなたを善く知つています。あなたに對してわ、僕わ色々な事からして深い親しみを感じています。それで僕わ今、僕の一家の話を書いて見たくて仕様がない氣持になつたについて、それをあなた宛の手紙の體にして書く事にしました。そして實際又それを手紙にして、書きあげた分だけ順々にあなたに郵送します。どうぞお暇の時、讀んで見て下さい。面白い事わ確かです。そして必ず多少何かの參考になると信じます。

然し僕わ一體、何をどこからどう書けばいいのでしょう。書きたくて仕様がないのわ事實だが、書く方法が分らない。現に書きたいと思う事は頭の中に一パイ詰つているのだけれど、それを引張りだす順序が立たない。實際、困つてしまう。

けれども構うもんか。僕わ小説を書くのじやなし、歴史を書くのじやなし、只だ親しい先輩のあなたに對して、あるが儘の事實、感じた儘の心持を話すに過ぎない。順序も方法もあるもんか。行きあたりばつたり、氣まぐれ次第で、横

道にもはいろう、先から先に飛んでも行こう。重複もしよう、繰返しもあろう。兎にかく只だ滅茶苦茶に書いて見ます。

僕の家（即ち富田林家）わ、一口に云えば地方の豪族です。可なり大きな豪族です。大地主でもあれば、銀行業者でもあり、工業資本家でもある。僕の兄弟や親戚の中には、大小の富豪は勿論のこと、親任勅任の官吏もあり、閣下と呼ばれる軍人もあり、有名な政治家もあり、大學教授もあり、新聞社長もある。そして僕わ、僕の妹と共に、庶子である。僕と妹とわ、富田林重威（シゲタケ）の子にわ相違ないが、それと同時に、僕わ勞働者の子、女工の子であり、妹は小作人の子、そして殊に穢多の子である！

僕は今年廿五歳、大學を中途でよして、一年志願兵に行つて、そして今、自分の家に歸つている所です。

僕わ假名づかいを出來るだけ發音どうりにします。六かしい字や、知らない字や、思ひだせない字は、大てい假名で書きます。

（二）

富田林家の邸宅は丸で小いさな城カクです。山に依り、川に臨み、凡そ幅一町ばかり、石垣を築きあげて、その石垣の上にわ白壁の厚い塀があり、その塀の内にわ同じく白壁の家倉の一群がある。中にも、向つて左手の奥まつた山ぎわにある天主閣のような三階作りの高い屋根わ、近隣一帯の地を見下してそびえている。この三階作りの高殿わ餘ほど古い建築だそうで、富田林家の家格と歴史と富力とを象徵する、神聖なる殿堂と目されています。

門わ、幅一町の石垣の、向つて右手の七分三分の處にある。その門前に高瀬川の大橋が掛かつて、その大橋から一直線に六間道路が二里ばかり松原市まで續いている。だから松原市の方から遠く富田林の城を望めば、――例えば自轉車

に乘つて、或は自動車に乘つて、其の一直線の平坦な道路を大橋に向つて走つている時の如き、――遥かの彼方にキヤシヤな鐵橋が見えて、その向うに、高い石垣の間に大きな城門が見えて、その城門の上の方に、白壁の家倉の一群が、恰好よく茂つた大きな樹木の間に高く見えて、そしてその左手に、例の三階作りの天主閣が又一段高くそびえて、そしてそのうしろに鴻巢山とゆう、奈良の三笠山を大きくした樣なはだか山が坐つていて、その頂上の處だけに杉や松や檜の木の枝が黑ずんで立ち茂つている其の眺望わ、『宛然一幅の畫圖の如し』と、或る舊式の文人が形容しました。

門の形にわ、別に變つた所わないが、楠の木だとゆう二本の角柱の素晴らしく大きい事が有名になつている。この材木わ、紀州の熊野の奥から伐りだしたもので、當時富田林家と遠く婚嫁を結んでいた新宮の豪族玉木氏から、遥々の海路を大船に曳かせて、寄進されたのだとゆう事です。今でわ木理が眞黑につぶれて、殆んど石のやうに見えています。或わ化石しかけているのかも知れない。それから又、門の兩脇の石垣が、殊にその直ぐ兩脇の處だけわ、少し誇張して云えば、チヨツト大阪城を思いださせるような、素晴らしい大石で築いてある。舊記の傳うる所に依れば、――實際、僕の内にわ色々な舊記や傳說が殘つているのですが、――それに依ると、この數個の大石わ、こゝから十里あまり離れた神倉山の中腹から切りだして、大變な人力を費して運搬したもので、その運搬人力を延人員に計算すると、實に三萬五千八百九十七人となり、その中、負傷者百二十七人、死者十三人の多きに達したと書き殘されてある。

富田林家わ何しろ舊家です。そして昔からこの近隣一帶の、――三階の天主閣が見くだしている限りの、――總ての土地を領していたのです。現に僕の母わ、――勿論、僕の實母でわない、父の正室で、今わ尼將軍として富田林一族を支配しているのだが、――その尼將軍わ、この古城の門を出てから松原市に至るまで、他人の田地の間を一歩も踏むことがないとゆうのを、最大の愉快、ヒツセイの誇りとしている。大英帝國の領内には日が沒しないとゆう英國支配階級の

誇りと、主觀に於てわ全く同一の誇りである。ついでに、この尼將軍わ自働車がキライで、誰が何と云つても自働車にわ乗らない。彼女の唯一の乘物わ金紋のついた黒塗の人力車で、それを朝日夕日にキラキラさせて、松原市との間の直線道路を往來するのが自慢である。イギリスの貴族の中にわ、今でも古風な二頭立の馬車に乘つて、カポ〳〵カポ〳〵とゆう、蹄の音の悠長さを樂しむ者があると聞いたが、我が尼將軍の保守趣味もそれに似たものであるらしい。

それでこの、昔の領主、今の大地主の處に、毎年の秋、年貢米の運びこまれる時わ、それわ實に大變な賑いです。尤も、最近でわ、小作爭議だの何だのとゆう不祥な事件が續出して、この舊家豪族の威信に甚だしくケチをつけて、何となく景氣がさびれているが、僕の少年の頃までわ、それわ實に、富田林家の繁昌を具體的に示す所の、一年一度の自然のデモンストレーションであつた。勿論このデモンストレーションなどとゆう言葉わ、僕が今日の心持から使つているのですが、僕の少年の心に映じた、年々の年貢米運びこみの光景わ、實際、素晴らしいものでした。馬や車が四方八方から、幾十幾百となく、總て米俵を積み載せて續々とやつて來る。門内、門外、人の聲、馬のいななき、車のきしる音、『殷賑』といふ言葉が、如何にも善くその感じを現わしている。（いつの頃か、淸國から來遊した或る名士の書き殘した『殷賑』の二大字が、例の三階の額になつている。）それから母屋の廣い臺所では、尼將軍指揮の下に、一家中の女共が總掛りで、跡から跡からと大釜に赤飯を炊いて、煮しめや豆腐汁で皆の衆に振舞をする。昔の小作人達わ、それを又、一年一度の光榮として無性に嬉しがつたものだそうです。

（三）

次に富田林家の祖先について考えて見ます。

遠祖は藤原の鎌足だとゆう事です。然し足利の末年までの事わ少しもわかりません。當時、戰國の間に、土民をヒョウリャクして歩いた野武士の一人に富田林百助とゆう者があつた。――僕が少年の時、小學校の或る老先生から聞いた話に依ると、――土民をヒョウリャクした野武士とゆうのわ、つまり小泥棒の事だそうです。所が、その小泥棒がいつの間にか少しばかり大泥棒になつた。大泥棒わモウ泥棒でなく、土地の領主とあがめられて、それが大名と呼ばれた。この百助が即ち富田林家の先祖です。

然し富田林の舊家たる所以わ、そればかりでない。傳說の傳うる所に依れば、右百助の妻は、今も僕の家から一里ばかりの山中にある、安武神社といふ古い宮の神主の娘であつた。或る時、野武士百助がこの神主の家に忍びこんで、幾多の財物と共にその娘を引つかついで盜みだした。盜まれた財物は百助の所有となり、盜まれた娘は百助の妻となつた。それから百助の、この土地に於ける地盤が生じた。安武氏わ神社と共に數千年來の舊家で、大和民族以前の先住民族だつたらしいのです。それで安武氏は、武力のすぐれた大和民族のはいつて來た時、酋長としての支配權を新來者に讓り、自分わ只だ土民の祖先に對する祭祀の職に當つた（即ち神主になつた）ものと考えられる。然し戰國の世になつて、政權の統一が失われて見ると、安武氏は矢張りその舊家の威信を以て、又自然に近隣の小いさな支配者となつていたが、そこに富田林百助が侵入してあばれだしたので、安武氏は再びその支配權を、盜まれた娘と共に新來者に與えて、祭祀の職に復歸した。かくて富田林家は、一面に藤原鎌足の末エイと稱し、一面に安武氏の姻戚として、次第に威力と富力とを增大したといふわけです。

所が、この百助の妻が女丈夫であつた。彼女わ名族の姬君として、歌に秀で、管弦に長じてゐた。彼女は野武士百助に盜まれたにわ相違ないが、それわむしろ彼女の望みであつた。百助としてわ名家の姬君にあこがれてゐたのだが、姬

としてわ武力の強き腕にすがつたのである。彼女わその夜、──三日月のさやかな秋の夜、──霧にしをれた練衣のうえに黒髪をなびかせて、──（練衣とわどんな物か僕にはわからないのだが、舊記にそう書いてある。）──百助の背に負われながら、持つて來た横笛を吹きつゞけて山を下つたと云ふのです。又その時、姫のよんだ歌とゆうのが傳わつている。即ち『物部の弓張月の影戀ひて、降れば早し安武の山。』

然るに百助がこの姫に四人の男の子を産ませて死んだ後、富田林家わ暫らく女王政治であつた。舊記にはそれが『安武御前』として記されてある。──（現在の尼將軍も、この女王政治の傳統に鼓吹されてゐるものと考えられる。）──安武御前は四人の男の子の中、兄に安武家を繼がせ、次の二人にそれ〳〵所領を與えて分家させ、末の愛子に富田林の本家を繼がせ、自分は四家の總支配として、その雪の如き白髪の頭に黄金の輪金を飾り、神秘の威厳を輝かして内外に君臨していたと云う。それで富田林家わ、もちろん百助を祖先とするのだけれども、實際にその家運の基礎を築石にしたものわ、即ち安武御前であつて、安武御前が百助に盜まれたと云うよりも、むしろ百助か安武御前の蜘蛛の網に掛つたと云うべきかも知れない。又安武御前の歌『我家は紫匂ふあけぼのの安武山の藤の眞盛り。』『名にしおふ富田の森の四つ柱うべも富みけり動がざらまし。』前者にわ藤原鎌足の末エイが利かせてあるらしく、後者では既に、安武氏が富田林家の一部と目されている。何しろ『家』の觀念が强くこゝに植えられています。

然るにこの富田林家が、徳川時代には大名でなく、郷士といふものであつた。どうもその頃の歴史がよくわからないのですが、多分秀吉あたりが天下を統一した時、地方豪族の意地として、それと一戰を交え、その結果、半和睦、半降伏といふ狀態になり、政治上の支配權は奉還したが、經濟上の地主權だけは維持して居り、半士半農の形で郷士といふ格式になつたものぢやないかと思います。安武氏が支配權を讓渡した時わ、名譽の祭祀權だけを維持して、經濟上には極

く小さな實力を殘し得たのだが、富田林家は大名の名譽を棄てたかわりに、年貢米搾取の實力は充分に保存していた。それで德川幕府の下に於ける大名武士が次第に衰弱して行く間に、富田林家わ段々とその經濟力を蓄積していた。そしていよいよ大名武士が亡びて明治の新政府の下にブルジョア社會が成立した時、富田林一族はそのブルジョアのチヤキ〳〵であつた。

前記の城門や石垣や三階の天守閣などの築造わ、旌記や傳說の語る所に依ると、百助時代の事のようでもあり、又鄕士時代の事のようでもあるが、僕の考える所でわ、それわ、最初の築造に關する話と、後の改築の話とが、ゴツチヤになつて傳えられているので、それで時代がアイマイなのだと思います。一說でわ、總てそれらの築造が安武御前の仕事になつて居り、安武御前わ大昔に於ける、筑紫の女酋卑彌子(ヒミコ)ででもあるかのように傳えられています。話としてわその方が面白いようです。

(四)

富田の森の四つ柱わ、安武御前の祝福的豫言のとうり、少しもゆるがないばかりでなく、現にます〳〵富み榮えて、僕等の屬している本家と、梅屋、菊屋、松屋、の三家とがあります。

この三家の中、梅屋が昔の安武氏ですが、いつの間にか矢張り富田林といふ姓に變つている。そして安武氏は別に小いさく、矢張り安武神社の神主として殘つている。そうした變遷の歷史は充分に善くわからないのですが、何んでも元の安武氏が明治維新のドサクサまぎれに、神社に屬する山林田畑を、(一面にはそれが近隣村落の共同使用の入會山であるのを)自分個人の私有財產と爲し、衣冠束帶を脫ぎすてて謂ゆる殖產興業に志ざし、その脫ぎすてた衣冠束帶には神

社の名義と、建物と、ホンの少しの社領とだけを附けて、遠い親戚の末輩に引きわたしたと云うことです。それで今日の安武氏は富田林四家の中にわ入らず、只だ富田林一族の氏神たる安武神社の神主として、形の上だけで尊敬されています。そして梅屋わ、安武山林の經營をやっている中、運よくも其の一部に銅の鑛脈を發見し、その採掘が大いに當つて暴富を致し、今でわ一個の小銅山王に成つています。近來でわ、九州邊に炭坑も持つています。

次に菊屋わ早くから松原の城下に出て、藩の用達をやりはじめた。つまり松原藩の年貢米の販賣方と、家中の士族えの分配方とを引受け、藩に對しても、家中一般に對しても、その米を書入にして金錢の融通をしたのだそうです。德川の中頃から晩年にかけて、段々瘦せてゆく藩主と士族とに對し、物の見事に直接の搾り取りをやつたのわ、この菊家である。明治以後、この用達の家が銀行業に發展したのは當然であつて、松屋と共に株式會社富田林銀行の基礎を据え、それが今では富田林一族の金融機關として、可なり全國に重きを爲してゐる。それから菊屋わ又、本家と一緒に、早くから紡績事業に手を出した。

松屋わ德川の中ごろから造り酒屋となつて一廉の富を拵え、今でも松原市で造酒業を續けているが、明治以後わ其の大きな富力を以て、菊屋と共に銀行業をやりだした。

本家は、廢藩置縣に依つて藩主といふ蔽ひ物が取り去られた時、縣下に於ける最大の地主として、實際上の地方貴族であつた。そして梅屋が鑛山業で當て、菊屋が銀行業をやり、松屋が酒造と銀行とを兼ねている間に、本家としては、菊屋を誘うて紡績業に踏みだした。今日の松原紡績株式會社が即ちそれである。

之を要するに、富田林の四家わ、前に云うとをり、明治大正の社會に於ける、ブルジョアのチヤキ〳〵です。

(五)

扨、この本家の主人、即ち僕の父、富田林重威(シゲタケ)わ、可なりの才物であつたらしいのです。彼わ明治初年の青年として自由民權の運動に身を投じ、自由黨の志士として相當に名聲を馳せ、縣會議員となり、縣會議長となり、衆議院議員となつた。そして自由黨が政友會になつた頃にわ、政治家としてよりも、むしろ實業家として知られ、即ち前記の松原紡績株式會社の社長になつていた。實に標本的の明治紳士と云ふべきですね。

彼は明治四十年に五十五歳で死んだ。僕は彼れの死んだ時、僅かに五歳で、幽かに彼れの、稍や猿に似たような赤ら顔を覺えています。彼れの子、即ち僕の兄弟わ、庶子たる僕等の外に六人あつて、その中、長男の重敏(シゲトシ)が早く死んだ。重敏わ謂ゆる宗領の甚六で、青い瓢箪のような顔をしていた。慶應義塾を卒業して米國に遊學し、バチエラー・オヴ・ロウの學位を貰つて來たが、體が弱いと云うので何もしなかつた。それでも女房を持つて子をふたり産ませるだけの事わした。凡そ大家(タイケ)に在つてわ、宗領の最大の任務わ、少なくとも一人、男の子を作る事である。重敏わ即ち正に其の最大の任務を果した上、猶ひとりの女の子を殘した。それが分家松屋の嫁になつている所に、又甚だ大なる意味がある

次男重國(シゲクニ)。これも慶應卒業で、菊屋を相續し、富田林銀行の頭取を務め、父の死後わ松原紡績の社長をも兼ね、今日のところ、富田林家の中樞人物である。政友會に屬して衆議院議員になつてる所まで、確かに父の後繼者ですが、猿わ餘ほど進化して柘榴のような顔になつています。

三男重行(シゲユキ)。これわ東京帝大を出て官海に入り、今わ知事まで立身している。富田林家がいつかわ遂に大臣を出すかも知れぬといふ一族間の希望わ、實にこの重行の上にかゝつている。

長女早苗子。これわ今、梅屋の大奥様である。

次女みよし。これわ舊藩主高倉伯爵家の分家たる高倉男爵家にとついでいる。昔しの郷士が舊主人と親戚になつた。富田林家としてわ、これが又何よりの誇りなのです。

三女貞江。これわ重行の親友で、今ま政務官として幅利の政治家村松氏の夫人である。

富田林家の勢力の分布わ凡そ斯くの如くであるが、猶ほ彌屋重國の妻が大審院長の娘であり、知事重行の妻が大阪屈指の富豪の娘であり、又彌屋の長女が或る羽振のいゝ陸軍中將の妻であり、梅屋の當主の弟が大學教授であり、松屋の叔父が松原新聞の社長である事など、數えあげれば殆んど際限がない。

(六)

ところで、これから、現在この富田林一族の總支配をしている尼將軍の話をします。

富田林重威の未亡人政子、當年正に七十歳、今でも皮膚が艶々してる。その潤いの消えぬ黒い目に、昔しの美しさが夕日の光のように殘つている。體格は極く小いさい。然しその小いさいのがキチーンとして、引締つている。健康にわ申分がない。それだけ元氣が充ち滿ちている。髮わ純白の茶筌で、それが房々とふくらんでる。丸でカツラのように見える。昔しの安武御前わ、雪のような白髪に黄金(オーゴン)の輪金(ワガネ)を飾つていたと云うが、今の尼將軍わ只だ其の茶筌をクスんだ色の打紐でしばつている。服裝も極めてジミで、如何なる時でも茶色か鼠色かの被布のような物を着てる。彼女が先祖の安武御前と、數百年の時間を隔てゝ自然の照應を成して居り、それを彼女が自覺している事も確かだが、前者の派手な女王らしさわ、全く後者に缺けている。尼將軍とゆう仇名わ、政子とゆう實名に依つて生じたもので、源頼朝の歿後

に於ける、その未亡人北條政子の地位を利かせたのであるが、實際またそれにふさわしい彼女の實質がある。彼女は歌をよまぬ、笛を吹かぬ、管弦をもてあそばぬ。彼女は、夫のある間わ其のカゲに立つていた。今でわ子と孫とのうしろに立つている。そして實權實力わ握つている。

然し彼女の神秘性わ決して安武御前に劣らない。只、安武御前わ神秘の威嚴を輝かして内外に君臨したが、尼將軍政子わそれほど陽性でなく、その神秘性を被布と袈裟とで押し包んでいる形がある。然し神秘は陰性であるだけ、却つてそれだけ感應が强い。彼女わむしろ安武御前以上の威力を持つているとも考えられる。

彼女も安武家の出である。そこに先づ神秘性がある。彼女わ分家から本家に入つたと云うよりわ、安武家の歴史的神秘性を再び富田林家に注ぎこんで、後者の世俗性を淨化したと云う意味を持つている。彼女わ安武家および富田林家に於ける、女性優勝もしくば女性支配の折々の現はれの中に、何か深い神秘的の意義を認めている。彼女わよく祖先について語るが、殊によく安武御前について語る。安武御前を樣々に神秘化して、それを尊崇し、渇仰し、禮拜する事わ、大變なものである。筑紫の女酋ヒミコの話などわ彼女わ聞いた事もないだろうが、天照大御神と神功皇后との名わ、しばく〵彼女の口から出る。それわ暗に、我が家の安武御前を、日本歴史上の偉大なる女性支配者の列に立たせて、それに依つて更に安武・富田林家の歴史を飾ろうとするのである。彼女の心の奥にわ、天照・神功・安武・政子といふ女性支配の系譜が作られているのかも知れない。

然し彼女わ常に（前に云つたとをり）夫のかげに立ち、子と孫のうしろに立つ事を忘れない。自らは只、先代が早く無くなられ、長男が又若くて死に、そして孫がまだ成長せぬので、しばらく家のツナギをしているに過ぎない。即ち自分は只、無くなつた夫の代理であり、當主たる孫の後見であるに過ぎない。

この『家のツナギ』とゆう言葉わ尼將軍の常用語で、別に珍らしい新語とゆうわけでもないのですが、然しそれが彼女の口から出る時、妙に、そこに一種の、深い、家の觀念の現われを感じさせるのです。彼女わ自己を機械視している。昔から幾度も、富田林家の血に安武家の血を交える任務を果して來たのわ、安武家の婦人である。そして又、前の男性支配者と、後の男性支配者との接續がシックリと行かない場合、しばらくそのツナギの役を務めて來たのが、昔も今も、同じくその安武出の婦人である。ツナギの役、血液交叉の任務、自分わ（昔の安武御前と共に）それらのツトメを果す爲の道具である。彼女の神秘性わ、そうしたふうに自己を機械視したところにある。

彼女わ『女性中心說』などとゆうものを全く知らない。若し彼女がそれを知つて、天照大御神の眞意義を理解し、又これを基礎として神功皇后の地位を解釋し、從つて又、安武御前と自分とが、遠い隔世遺傳の形を以て、變態的に發生したところの、その昔の女性中心現象（即ち女性支配）の再現である事を自覺したならば、彼女の神秘性わ一層の（或わ幾層の）深刻味を加えたに相違ない。けれども彼女わ、そんな新らしい智識に接觸する機會がないので、只だ現在の（及び歷史上の）男性中心の社會だけを見て、どこまでも自分を（即ち女性を）ワキ役にしているのです。彼女わ自分を道具だと見ているばかりでなく、男に附屬した道具だと見ているのです。

然し彼女わ、その男性中心觀の底に、直覺的の、或わ無意識的の、或わ本能的の、女性中心觀を持つていると解釋すべきだと僕わ思います。彼女わ、生物の歷史に於いて、發生學的に考えて、男性なるものが異質混和の目的の爲に作り出だされたところの、後代の派生物であり、女性の附屬物であるとゆう事など、夢にも知らないが、それでいて彼女わ、實際上にわ却つて、總ての男子を自分の道具に使い、ワキ役に使つている形がある。その意味からすると、家のツナギとゆう事も、女性が血統の流れの根源である事を證明する言葉のようでもあり、血液交叉の任務とゆうのも、女性

が主となつて、男性を利用しておこなうところの、性的事業だとも考えられる。安武御前が盗まれたのでなく、却つて百助が捕えられたのだとゆう解釋も、そこから出て來る。尼將軍政子の潛在意識としてわ、必ずそうした自主的の、女性の誇りがあるものと觀察される。

何にしろ、性的行爲に於いて、生殖現象に於いて、種の保存の事實に於いて、連綿たる血統の流れに於いて、女性の役割、女性の任務、女性の活動が、男性に比して遙かに多大である事わ、一見して爭はれない事實である。男性を種々に擬し、腹わ借り物として女性を田畑視する、男性中心社會の考へ方があるに係わらず、實際上、性の事に關する限り、女性が中心である事は爭われない。尼將軍政子は確かにそれを自覺していた。少なくとも潛在的にそれを意識している。

だから彼女が『血統』について語り、『家』について語る時、必ずそこに、一種深刻な神秘性が發現する。彼女わ先代の男性と次代の男性との中間に於ける、一時的の『家のツナギ』であるばかりでなく、實に安武・富田林家の血統の維持者である。『血統』の維持者わ即ち『家』の根幹の維持者である。彼女わ、安武御前から自分に至るまで、代々の女性が、常に男性のかげに隱れて立ちつゝ、――稀にわツナギとして表面に立ちつゝ、――この血統を維持し、この家の根幹を發達させて來た事を、本能的に自覺しているのである。

彼女わ斯くの如き血統の維持者として、又その維持者の現在に於ける代表者として、この富田林家の永久不滅、天壤無窮を確信してゐる。世間に存在する、他の多くの家々わ兎もあれ、この神聖なる我が家に限つてわ、現に既に（百助以來、安武御前以來としても）幾百年の光輝ある存在を續けている以上、これが亡びるの、つぶれるの、衰えるのとゆう、そんな不祥事のあり得る道理がない。昔し安武御前に在つてわ、『我が家』の『むらさき匂ふあけぼの』を讃美し、

その『藤の眞盛り』を咏嘆し、その『四つ柱』の『ゆるがざら』んことを祈念し祝福したに過ぎなかつたが、今の尼將軍としてわ、その『家の觀念』に對して、更に一段の神秘觀を加え、一段の信仰味を添え、こゝに萬世不朽なる、一種宗教的の、富田林家を作り出だしたといふわけです。

（七）

もすこし、安武御前と尼將軍政子との比較をやります。

前者わ家の榮えを自分の一身に體現させた。白髪（ハクハツ）の額にはめた黄金（オーゴン）の輪金（ワガネ）に女王の誇りが現われてゐた。彼女わ其の片足づゝで、富田林家と安武家との屋の棟を踏まえて大空に立つていた。衆人をして地上から自分を仰ぎ見させるところに愉快を感じ、又そこに支配者としての威嚴の必要を感じた。後者わ之に反し、家の尊嚴を强調するだけ、それだけ自己を弱小に見せた。見せたばかりではない、それを實感した。彼女は富田林の『家』を大空に搖え立たせて、神秘の雲に包ませた。そして彼女わ、衆人と共にその旅にひざまづき、その白髪の茶筅髷を垂れて其の前に禮拜するところに滿足を感じ、又そこに實際的支配者としての謙抑の必要を感じた。謙抑の感と、自負の感とは、時として同一物である。つまり前者の無邪氣な率直な誇りが、後者では變態的にヘリクダリの形を以て現われているのです。

斯樣に尼將軍わ自己を『家』の從屬物と爲し、『家』の機械と爲し、『家』の道具と爲しているが、それと同時に彼女は又、一家中、一族中の者に向つて、矢張り悉く、この『家』の附屬物となり、機械となり、道具となる事を要求している。そして實際上、自分がその『家』を代表して、總支配の地位に立つている。

そこで彼女の心の目から見わたすと、この神聖にして、この偉大にして、この光輝ある富田林の『家』に、先づそれ

を代表する中心機關として、（機關などとゆう言葉わ、もちろん彼女にわからないのだが）、當主の重泰がある。然しその重泰がまだ成長中であるので、それの後見として、實際の中心機關なる彼女自身がある。この中心機關の周圍に種々の附屬物がある。第一にわ重泰の母がある。この人わ場合に依り『家のツナギ』にもなるべき筈の地位なのだけれども、無爲無能な青瓢簞のバチエラー・オヴ・ロウ（即ち重泰の父）の未亡人として、全く邪魔物あつかいをされている。第二にわ二人の庶子、八郎と三輪とがある。八郎は即ち僕です。この二人が極めて厄介な、不名譽な、そして恐らくば最も愛ふべき附屬物たることは勿論です。

富田林本家の直接の家族わこれだけです。以上が第一種の附屬物。あとわ番頭の一家族（邸内居住）、書記二人（通勤）、下男夫婦（邸内居住）、車夫夫婦（同上）、小間使一人（これわ遠緣の者で、尼將軍のお側去らず）、女中二三人、外に巡査一人（邸内居住）。猫三匹、犬二匹、馬一匹。これらが第二種の附屬物。

第三種の附屬物わ三つの分家です。分家わ本家と共に富田林家の『四つ柱』を構成するものであるが、然し決して本家と對等のものでわない。梅屋が元の安武氏として特殊の地位を占めていることわ事實であり、又梅屋わ現に尼將軍の生れた里方でもあるのだが、然しそれが爲に、富田林の『家』に對する附屬物の性質を失ふものでわない。實を云えば、尼將軍から見る時、本家その者も矢張り一種の附屬物である。『家』もしくは『富田林家』とゆう抽象的存在に對する時、本家も分家も等しく皆な附屬物であり、機械であり、道具である。本家の當主が形式上の中央機關であり、彼女自身が實際上の中央機關であると云うが、機關わ即ち機械であり、道具であること、前に記した通りである。『家』とゆう神秘な靈的な尊嚴物から見下す時、有らゆる人間的存在・物質的存在わ、悉く從屬物であり、附屬物である。

この意味からすれば、本家も分家も同列である。只だ本家が『家』とゆう抽象物を具體的に代表する點に於いて、そ

こに特殊の尊嚴がある。從つて共の中央機關に特殊の權威がある。然し實質上の中央機關わ、今のところ、むしろ三分家の首長である。富田林銀行、松原紡績會社、松屋の酒造、梅屋の鑛山、それらが（本家の所有する土地以外に於ける）富田林家の富である。そしてそれらの經營當事者わ三分家の首長である。だから三分家の首長わ實質上の中央機關である。けれども又、三分家の首長とゆう中にも、梅屋の鑛山業を作りあげた冒險的事業家わ既に死んで、今の當主わ寧ろ形式上の經營者に過ぎず、松屋もほゞそれと似た形であり、總ての經營が番頭もしくば支配人任せになつていることと、本家の田地經營と同じ趣きである。そこで本當に實質上の中央機關たる者わ、銀行頭取であり、紡績會社長であるところの、菊屋重國だけである。殊に富田林家の富の中心が、次第に多くこの銀行と會社とに在る事となり、四家が皆それ〴〵の程度に應じて、この銀行と會社の株主であり、又鑛山と云い、酒造と云うも、矢張りこの銀行の保護を受けないでわ立行かれないので、つまり菊屋重國が富田林四家に通ずる、實質上の中央機關だと云う事になる。

そこで僕に云わせると、重國は實に富田林王國に於ける首相の地位です。そうすると、政子わ矢張り重泰と共に形式上の中央機關に過ぎないとも云えるが、然し重國首相が（一面に政治家として、衆議院議員であるとわ云え）ハッキリした法制上の總理大臣でなく、一族の全般に亘つて直接の政權を及ぼすわけに行かないので、そこで尼將軍が決して虚位を擁するものでなく、矢張り實際上の總支配となつているわけである。

そこで彼女の目から見わたす時、本家の當主重泰わ自分の孫である。菊屋の主人重國わ自分の次男である。そしてそれが銀行と紡績を經營して、一族中の最重最大の任務を帶びている。梅屋の先代のつれあいわ自分の長女早苗で、當主わ即ち自分の孫である。松屋の當主の嫁わ重泰の姉（即ち矢張り自分の孫）である。この四家が昔しから互いに重緣に重緣を重ねて、極めて複雜な濃厚な血族關係を成している事わ勿論だが、殊に今ま尼將軍から見る時、それは皆な直接

た、自分の子と孫との家である。そこで彼女わ、この子孫中の最高の地位にある重泰を我が手に擁して、以て他の總ての子孫および其の從屬者に君臨しているのだとも云えるし、又彼女が總てこれらの（重泰をも含めて〇）子孫および其の從屬者をひきいて、『家』の前に奉仕しているのだとも云える。

（八）

更に彼女が分家以外を見わたす時、そこに第四種の附屬物がある。

先づ彼女の三男重行がある。彼わ知事までも立身して、追々わ大臣にもならうかとゆう希望まで持たれている。彼わ名聲ある一個の新分家を創立すべき地位にある。何しろ彼わ、經濟的に偉大なる、この富田林家を、將來、政治上に代表し擁護すべき任務を帶びている。次に次女みよし、即ち高倉男爵夫人がある。次に三女貞江、即ち村松政務官夫人がある。次に菊屋の長女（即ち尼將軍の孫）なる某陸軍中將夫人がある。これらも亦た皆、外に在つて富田林家擁護の任務を果すべきものである。尼將軍わこの任務を『守護』と呼んでいる。右の外、松屋の分家と云うべき、當主の叔父たる松原新聞社長、梅屋の分家となるべき、當主の弟たる大學助教授など、皆な尼將軍の眼中に於いて『當家守護』の人々である。猶ほ菊屋重國の妻の父たる大審院長、重行の妻の父たる大阪の富豪、その他、多少とも親戚關係の繋がる有力の人々、それらも皆、尼將軍の富田林家中心觀からすると、同じく『當家守護』の役に準ずべき方々である。

彼女の信仰からすると、富田林家は實に絕對である。その家運が萬代不易であるばかりでなく、社會その者が常に只この『家』の爲にのみ存在しているのである。富田林四家の家族が總てこの『家』の道具であり、四家以外の一族緣者が總てこの『家』の守護者である事は、右に云う通りだが、猶それ以上、彼女の周圍にある遠近の事物、勢力、人間、

皆な同じくこの『家』の守護たるべきものである。若しそうでない場合があるとすれば、それわ總て間違ひである。要するに、一般社會がその組織と制度とを以て、富田林家の第五種の附屬物となつているわけである。

松原新聞が我が家の守護である事わ、その社長が松屋の叔父である事と、その經濟が富田林銀行から補助されてゐる事とに依つて、自明である。然し尼將軍の信仰としては、總ての新聞なるものが同じく富田林家の守護でなければならぬ。又、菊屋重國が政友會の議員である以上、政友會とゆう政黨その者が我が家の守護たる事も自明である。又、三男の重行が知事であり、三女の婿村松氏が政務官である以上、その政府が亦た我が家の守護たる事も當然である。政府と政黨との間に爭いがあるのわ、それは只だ内輪の小ぜりあいに過ぎない。又、一族縁者中に大學助教授もあり、大審院長もあるのだから、大學とゆうもの、裁判所とゆうもの、それらも皆な同じく我が家の××であらねばならぬ。殊に、松原市にわ陸軍の師團があるが、その師團長わ菊屋の長女の婿の親友である。從つて××とゆうもの全體が我が家の守護である筈だ。次に警察、これわ邸内に居住させてある巡査さんを見てもわかる。これが一ばん直接の守護である。その外、尼將軍わ、在郷軍人團、青年團、小學校、中學校、寺院、教會などから色々の寄附を求められる時、總てそれらを我が家の守護と目して、それ〳〵相當の扶持を充ておこなうのである。又我が家と同じような性質の、大小の富豪、資本家、大地主、これわどうも我が家の守護とわ考えにくいが、そのかわりこれわ、同僚として、仲間として、廣い意味での兄弟として、互いに助けあうべきものである。それが互いにシノギをけずつて營業上の戰いをするのも眼前の事實であるが、我が尼將軍に云わせると、それは矢張り例の、内輪の小ぜりあいに過ぎない。(尼將軍のブルジョア的階級意識は頗る鮮明です。)

然らば尼將軍の眼中に於ける敵わ何者であるか。富田林家および其の同僚に對して弓を引くものわ誰であるか。

（九）

尼将軍わ或る秋の日の朝早く、孫の重泰と共に日の出を拜むべく例の天主閣の三階に登つた。

この富田林家の邸宅が城廓のように見える事わ前に云つた。門から石垣から白壁から三階の高殿に至るまで、總てに封建時代の古色が蒼然として漲つている。然し内部にはいつて見ると、存外、新式なところが多い。郷士、豪農、大地主とゆう舊家が、その實、今でわ、銀行および紡績の大株主として、ブルジョアのチャキ／＼であり、新資本家であるとゆう、其の新舊の兩面が、丁度よく、この建物の内外兩面に現われている。重威が政治家・策・實業家として可なり派手な生活をしたのと、重敏が（無能とわ云え）アメリカ戻りとして、種々米國式を輸入したのとで、この古風な建築の、屋根の下に、多くの人が思いがけない感じをするほどの、氣のきいた西洋風の設備がある。

例えば天主閣、――これわ僕が勝手につけた名で、當邸に於ける正式の名稱わ、例の大額の題字から取つて毀賑閣と云つているが、――その殷賑閣の一階わスツカリ洋風の設備で、何處かのホテルの廣い應接室を思いださせるほど、可なりハイカラに出來ている。それから二階に登ると、こゝわ三室に仕切られて、客間と書齋と寢室とになつている。同じく洋風であつて、家具にわ頗る多く支那趣味が取り入れられてある。こゝにわ重敏が住んでいた事もあるが、今でわ特別な客人を入れる處になつている。三階わ小ぢんまりとした純日本式の一間で、椽側のランカンごしの眺望が極めていゝ。こゝに登つた心持わ、ちよつと銀閣寺とゆう趣きで、日の下に池もあり、それに大きなマナ板のような石橋もかゝつている。

扨、尼将軍わこの三階の冷々する椽側に重泰と並んですわつた。朝日わ丁度いま淺霧の中に登りかけていた。たぶん

重泰が十四五の時の事だつたろう。彼わ林檎のような顔をした美しい少年だつた。尼将軍わ祖母らしく、ほれ〴〵と其の顔を眺めた。然し小いさく引きしまつた其の被布姿にわ、どこかゲン然としたところがあつた。房々した純白の茶筌髷わ奇麗に梳きあげられていた。彼女わその小皺に包まれた目に微笑のササナミを浮べて、「然しながらそれと同時に、一種神秘な凄味を交えて語りだした。

『重泰、あなたわこの家の主人ですぞ。

『この邸わ云うまでもない。今こゝから見わたす一面の田地も、皆あなたの物です。あの松原の銀行も紡績も、ザット半分わあなたの物です』

『この邸に住んでいる者共わ、私をはじめ、あなたの母親まで、皆あなたに仕えているのです。

重泰の美しい顔わ只だ得意のほゝえみをほゝえんでゐた。

『主人とゆう者わ、それほど權式のあるものです。それほど貴いものです。

『けれども重泰、主人とゆう者わ、それだけに又、苦勞がありますよ。心配の多いものですよ。骨が折れますよ。』

重泰のほゝえみわ消えた。彼わ少しこわくなつて來た。薄氣味わるくなつて來た。

『主人とゆうものわ、この家を先祖から預かつて、大切にもりそだてて、そしてそれを次の代に引きわたすのが役目です。

『主人とゆうものは、この身代の持主でわあるけれども、實わそれをしばらく先祖から預かつているだけのものです。私たちわ皆あなたに仕えていると云うたが、そのあなたも矢張りこのお家に仕えているのです。

『このお家わ萬代不易です。このお家を、あの朝日の登るように榮えさせるのがあなたの役目です。

『尤も、それにわ分家の人達が皆あなたを守護します。一家一族の者共が皆あなたを守護します。世の中の總ての者が皆あなたを守護します。あなたを守護するとゆうのは、それがそのまゝお家を守護する事です。それであなたわ其の、ありとあらゆる守護を受けながら、この身代をキリモリして、お家を大切にもりそだてて、朝日の登るように榮えさせるのが役目です。』

重泰わ初めて叔母の方に振りむいて其の顔を見た。尼將軍の顔にわ物凄い熱情のホノウが燃えていた。家の哲學、家の宗教、家の神秘、家の尊嚴、家の永遠性、家の無限發展性が、彼女の小いさなカラダに乘り移っているのであった。彼女の全身が即ち家の化身であった。

『おばあさん。身代とわ何の事ですか。』

重泰が初めて言葉を發した。言葉わ疑問であった。

『身代とわ財産の事です。田地も紡績も銀行も鑛山も酒倉も、皆お家の身代です。』

『おばあさん、家とわ何の事ですか。』

『マア!。家とわ何かとゆう尋ね方がありますか。このお家があなたにわからんか。昔から今日までズット榮えて續いている、この富田林のお家とゆうものがわからんのですか。』

重泰わ頭をかしげて考えた。

『わからん!。ジヤおばあさん、歴史が家なのか。』

『…………………』

『ジヤおばあさん、血統が家なのか。』

『…………………』

『何だが僕にや雲をつかむようでわからん！。』

『そう云われると、わたしわ無學だから返答の仕様がないが、昔からよく云うでしよう、お家の爲とか、お家の大事とか、お家の寶とか、お家の石杖とか、……そのお家とゆうのわ、………あゝどうもわたしにわ、口でわ云われぬ。……口でわ云われぬけれども心にわハッキリわかつている。……つまり、こうでしよう。御先祖から今日のあなたやわたし達まで、この土地に居り、この邸に住み、この田地を持ち、時世(トキヨ)につれて色々のあきない、様々のいとなみをして、段々に富み榮えてゆく、その血筋の糸が「お家」とゆうものでしよう。』

『血筋の糸、……それなら血統が即ち家だとゆう事になるのかなア。』

『けれども、その血筋の糸にこの大きな身代が結びつけられてあるのですよ。』

『ジヤ身代が即ち家だとゆう事になるのかなア。』

『……・…………』

『ジヤ、つまりおばあさん、家とゆうのわ財産の事ですね。だけどおばあさん、財産とゆうものわ何の役に立つのです。』

『田地があるから年貢米があがつてくる。株券があるから配當がはいつてくる。元手があるから利子がついてくる。それで一家の者が安樂に暮せるのじやありませんか。』

『ジヤおばあさん、財産わ利益を取る爲ですね。』

『…………………』

『だけどおばあさん、財産が獨りでに利益を産むのじやないでしよう。』

『だから色々その財産の世話をするのです。田地の世話をしたり、銀行の世話をしたり、紡績の世話をしたり、鑛山の世話をしたり、酒造りの世話をしたり、……』

『ジヤおばあさん、僕達がその世話役なのですね。』

『そうですよ。全くそうですよ。そしてその世話が大變なのですよ。だから世話料がはいつてくるのです。』

『だけどおばあさん、田わ小作人が作つてるでしよう。紡績にわ勞働者がはたらいてるでしよう。鑛山にわ坑夫が居るでしよう。あの人達わどうなるのです。』

『だからあの人達わお家の寶です。』

『家の寶！……』

『だからあの人達を大切に世話してやらねばなりません。可愛がつてやらねばなりません。いたわつてやらねばなりません。それをするのが矢張りあなたのこれからの役目です。そうするとあの人達も、皆な喜んでお家の爲に働きます。』

『あの人達わ今でも皆な喜んで働らいてるのだろうか。』

『もちろんそうですよ。あの人達わ、世話してやる者がなければ、働らこうにも仕事がなくて食べることが出來ぬのです。それで皆、小作の人達わ田地にすがり、坑夫の人達わ鑛山にすがり、女工の人達わ紡績にすがつている。つまりこのお家にすがつているです。だからそれがお家の寶です。あの人達を大切にして可愛がつてやる事がカンジンですよ。あの人達わ皆な喜んで働らいているのだから。』

重泰わ狐につまゝれたような顔をしていた。尼將軍の教育講話にわ、まだお家の敵が現われてゐなかつた。そこにわ

只、お家の『守護者』とお家の『寶』とだけがあつた。

(九)

今年の夏の初め富田林邸のあちこちにある藤の花の盛りの頃、尼將軍の七十歳の祝賀會が催された。

尼將軍わその日、暗い中から起きて、白襟紋付にキチント身を堅めた。其の小い引締つた姿と、房々した純白の髪と柔かい細い皺をたゝえた目元とが、朝風に涼しく見えた。彼女わ先づ、重泰と小間使の娘とを連れて、三臺の人力車を走らせて安武神社に參詣した。富田林家の人々わ何かの度毎に、必ず皆な代る代る安武神社に參詣する習慣であつた。祈願、報告、表敬、拜謝、そして又遊山と休養をも兼ねるのであつた。然しこの日の參詣は殊に眞劍であつた。尼將軍は安武山の藤の眞盛りの間に、嘸かし『我が家』の富み榮えを感謝した事だらう。

然し僕わ、この折角の祝賀會の光景を知らないのです。尼將軍が安武參詣に出かけた直ぐ跡で、僕と妹とわ自轉車を反對の方向に走らせた。僕等二人がこの祝賀會に列席しない事わ、むしろ總ての人の、暗に喜ぶところであつたのです。だから僕等わ、この賑いを跡にして松原市に走り、それから更に大阪に走つた。

僕等が自轉車の上から富田林邸を見返ると、例の大石垣の間の楠門の上に大國旗がユッタリと交叉されて居り、又三階の高殿にわそれがヘンポンとひるがえつて居り、白壁の塀の上に見えるテントにわ小旗がヒラ〳〵とひらめいて居り、塀の片隅にある稻荷の小社の旗のぼりも賑かそうに群がり立つて居り、如何にも物々しい光景であつた。そして門前から松原市への直線道路にわ、もう自轉車、人力車、自動車が頻繁に往來してゐた。

それから跡の事わ僕等わ知らない。只、母家の廣間が四つ五つ玄關からブツとをしてジュウタンを敷きわたされて、

それが百疊敷ばかりの祝賀會の會場になつた事と、三階の殿臘閣が家の寶物（祖先百助の武裝した畫像、安武御前の使用した黄金の輪金など）と、古記錄との展覽會場になつた事と、テントの中で歌劇と大神樂と、新舊ゴタまぜの餘興のあつた事だけ知つている。

僕の想像する所と、あとでチョイ〳〵聞いた所とに依ると、午前十一時ごろ、尼將軍一行が戻つて來る。その前後に來賓が續々と來着する。フロックがあり、燕尾服があり、シルクハットがあり、羽織袴があり、丸髷があり、島田があり、耳かくしがあり、裾模樣があり、洋裝があり、殊に輕快な男女青年の學生服があり、その間に著るしく目立つ禮裝の軍人服や、警察官服があり、猶それよりも一段と目に立つ神主服と僧侶服とがあつた事だろう。（神佛の外、耶蘇の坊さんも來ただらうが、それはフロックだから目に立たなかつたろう。）

このブルジョア社會の標本的陳列の間に立食のキョウオウがあつて、菊屋重國が柘榴のような顏に威嚴と滑稽と愛嬌とを取りそろえてアイサツを爲し、縣知事と、松原新聞主筆と、代議士と、警察署長との祝辭もしくば演説があつて、それから無慮百通に近い祝電――東京、大阪、九州、朝鮮、滿洲、上海、サンフランシスコ、ニューヨーク、ロンドン、パリ、その他、全世界の有らゆる方面からの祝電――の披露が來賓を退屈させ、最後に尼將軍と重泰とがウヤ〳〵しく一禮に及び、來賓一同が『富田林家萬歳！』を三唱して、それで式を終つた事だろうと思う。

それから來賓一同が庭園に解放された時、頗る氣のきいた趣向として、松原新聞の號外が配布された。それわこの盛大なる祝賀會の景況を逸早く報導したもので、只つた五分間ほど前、『富田林家萬歳！』の三唱された事までチヤンと書きつらねてあつて、大いに一同の喝采を博した。

それから數時間のあいだ、鴻巣山の麓に於ける、この富田林家の一城廓わ、晩春初夏の暖かい太陽の下に人間を滿載して、ブルジョア社會の豪華の氣分を天地の間にたゞよわせていた。實に是れ、富田林の一家一族の總會であり、その『守護者』の總召集であつた。『お家の寶』の代表者と稱せられる數人も、亦その末席に列なるの光榮を有していた。前

に年貢米の運びこみを一つのデモンストレーションだと云つたが、この大デモストレーションに比べると、あんなものはモウ問題にならない。實にこの盛大なる、現代的の祝賀會において、富田林家の『家』の尊嚴と、『富』の威力とが、最も有効に、最も適切に展開されてあつた。

所が、群衆の到る處に於いて酒氣が高まり、惰氣が充ち滿ち、歡樂の氣が正にその絶頂に達した頃、又一つの號外が配られた。人々は爭つてそれを手にした。それわ號外でなかつた。或者わ奇異な顏色をしてそれを棄てた。或者わそれを見つゝ低聲にさゝやきあつた。或者はソーッとそれをもみまるめて袂に入れた。或者はそれを持つて走つて行つた。或者わそれを引き裂いて罵聲を發した。或者わ甚だしい怒氣を含んで、一體だれがこんな事をしたのだとワメき立てた。實に怪しからん、これわ不穩文書だと、或者わ怒號した。眞赤に醉つぱらつていた警察署長わ、劍のツカに手をかけて母家の方に駈けて行つた。

然しそれわ誰が持つて來たとも分らなかつた。配つた人わ、前の號外と同じ性質のものだと思つたのであつた。宴會の全部が忽ち白けてしまつた。態と平氣な顏をして大きな聲で笑ふ者があつても、その跡が却つて寂しかつた。ヒソヒソ話がそこにもこゝにも始まつた。不穩文書わ又してもソット讀み返された。

富田林家が呪われていた。その守護者が悉く罵倒されていた。ブルジョア階級××××が豫言されていた。一揆騒亂が今にも勃發するかと思われた。而もそれが勞働者の名に於いて、坑夫の名に於いて、紡績女工の名に於いて、小作人の名に於いて、水平社の名に於いて、即ち『喜んで働らいている』筈の『お家の寶』の名に於いてであつた。

『重泰、今そんなものを見ずともよろしい。』

尼將軍はそう云つて重泰の持つている不穩文書を取りあげた。然しそれから以後、彼女わ重泰に對して、『お家の敵』を指さし示さねばならぬ事になつて來た。

(隨分へんな物を長く書き續けましたが、この邊で一くぎりにして置きます。若し氣が進めば、この次にわ僕と妹との身の上を書いて見ます。)

團十郎と菊五郎

松居松翁

一

泰西人の所謂七十年（セブンチース）乃至八十年（エイテース）時代に生れた、われら老人のグループに於いては、たゞ團十郎といへばそれが九代目團十郎で通り、菊五郎といへば五代目菊五郎でパッスする。必らずしも彼等が市川家、尾上家の第何世であるかを説明する必要の無い事は、奈波翁第三世の盛時に生れながら、奈波翁といへば第一世と速斷する習慣のあると同樣である。それほど十九世末に生れた吾老の心には、此二人者は偉大なる俳優であり、前後を空くした藝術家である。

「うしと見し世ぞ今は戀しき」で、既往をのみ偏愛せんとするかたくなな感情は、あらゆる老人にまぬがれがたい習癖である。ことにその偏つた感情は、角力贔負、役者贔負に甚だしい。形の後の世にまで存續する他の藝術は、「論より證據」で、さうおのが好む所にのみ阿ねるわけには行かないが、自分の幻像としてのみ生存して居る過去の藝術には、自分勝手の評價を附する事が出來る。「あが佛尊し」を極度まで振りまはす事が出來る。この馬鹿々々しい習癖は、われらの同胞の間に跋扈して居るばかりでなく、藝術批判には割合に冷靜公平な筈の、英國人の間にも烈しいらしい。

「われらの見る所では、芝居の見物は、常に年少の人が多い樣に思はれるが、中には老人の見物といふのがあつて、しきりに年少の見物に反對して居るのを見る事がある。併し此老人の見物といふものも、つまるところは年少の見物の年齡をとつたに過ぎないのであるから、その友人が如何に「おれの若い時の芝居や、役者といふのは……」などゝ威張つて見たところで、その芝居なり役者なりを、現在の年齡で見物した譯ではなく、年少の頃に見た事を繰返すに過ぎないのだ。そ

れでも老人連は尚且つ今を譏り、古をほめて獨よがりをして居る。(中略) だから今日に於ても、年少の見物、即ち近代のサツクレーを知つた位の程度の若い人では、ケンブルやキーンを見たと自慢する老劇通には、いつでも法螺を吹かれてしまふのだ。が此老劇通とて、ガアリツクを見たといふ老武者が現はれると一文へもない。然るに此ガアリツク最負の老武者の後にはポープの様な老劇僻が居て、「昔のベツタアトンこそ、自分が見た中では、第一等の俳優だ」などとおどかされる事があるのだ。併しさすがはポープ、自分は正直にこんな懺悔をして居る。「が、私がベツタアトンの通を並べると同時に白狀しなければならない事がある。私が若い時に、ベツタアトンの肩をもつと、老人たちは例のハートの方がもつと名優だといつて、丁度私がベツタアトンの通(つう)を並べると同じやうに、通をならべて居た。もつとも千六百九十年に出來た或書籍を見ると、ハートよりも一層好い俳優といふのを澤山擧げてあるが、いづれもハートよりは前の時代の俳優であつた……」。(ダルトン・クツク『舞臺の前後』)。

愚老なども、ポープ以上の「昔戀しき」病にかゝつて居るのかも知れぬ。左様なると、九代目團十郎を、The 團十郎と考へ、五代目菊五郎を、尾上家隨一の菊五郎と考へる事は差控へねばならぬのかも知れぬ。現に今日では六代目菊五郎を以て、彼の父なる五代目を凌ぐものと考へやうとして居る年少劇評家が無いでも無い。

併し愚老は、「若い時に見た目」の、買被つたイルージョンを二人の舞臺から割引(ヂスカウント)したとしても、現在の世の中に彼等にまさり、若くは匹敵し得る役者があるとは信ずる事が出來ぬ。市川家の七代目、八代目、尾上家の三代目、名人小團次、彦三郎などを、見た人々でも、尚且つ九代目團十郎の藝術の前にあたまを下げて居た。五代目菊五郎の或プロダクションには、心から推服して居たものだ。

愚老が菊五郎を舞臺で見たのは九つの年齡(とし)である。親しく彼を樂屋に訪ふて、語り合ふやうになつたのは、愚老の二十四歳の時である。忘れもしない明治二十六年の初春興行、彼が歌舞伎座で「安政三組盃」をして居た時である。この狂言の主人公たる鈴木藤吉郎と、藏前時代に知人であつた祖父の蒐集(コレクシヨン)のうちに、藤吉郎の千蔭風の短冊があつたので、愚老はこれを菊五郎におくつてやつた。菊五郎は折返して禮狀をよこし、是非逢ひたいと云つてよこした。併し菊五郎は彼の部屋に、八つ橋の被布に、鼠木綿の腰衣、片手に木如意、片手にドピアルのパイプ、鼻眼鏡をかけて、紺の宗十郎頭巾を首にまいた、異風の扮

二才を見出した時には、其後の舞臺でも絶に見る事の出來なかつた程、呆然たる科をわれ知らず見せて居た。此時小さな黒衣をつけて居た、まるまつちい當時の丑之助、今の六代目菊五郎は、不思議さうに可愛ゆい目をみはつて、愚老の大きな口に啣へて居るパイプを見詰めて居た。「坊ちやん、一つ吸つて見ませんか。」愚老が如斯云つて、そのパイプを彼にさしつけると、彼は側に居た梅助か菊三郎かの後へ姿をかくして、尚丸い目でパイプを見戍つて居た。その當時から腕白の大將のやうに評判されて居た幸坊から、こんなしほらしい樣子を見た愚老は、今以て彼を素直な、おとなしい人に思へてならない。その癖いつかこの話を六代目にしたが、六代目はまるで覺えがないと云つて居た。それも其筈か、六代目の幸坊は、愚老が初めて彼の父を舞臺で見たと同じ年齢の九つにしかならなかつたのであるから。

愚老が團十郎を舞臺で初めて見て、文字通（リテラリー）に魂をゆりうごかされたのは、これより七年前で、風呂場の長兵衞と吉備大臣であつた。田舍からぽつと出の丁稚上りの小僧が、今日では絶後となつた神田明神の大祭（おまつり）と同じ時に、此名優の偉大なる藝術を赫灼たる瓦斯燈のかゞやく檜舞臺の上に見たのであるから、魂を天外に飛ばすのに無理も無い。併し此名優の白粉や砥の粉を剝した素顔に接したのは、それより十一二年後の事で、菊五郎と相知つてから數年後の事であつた。爾來愚老は團十郎に傾倒してしまつた。終には彼が舞臺藝術に關する感想を一々に書き留め、愚老が從事して居た『報知新聞』に連載する程にまで、彼の藝術を尊敬するに至つた。之れが菊五郎の好奇心を動かしたと見えて、程なく彼の藝術談をも連載する事になつた。併しこれは菊五郎自身のプロポーザルではなくて、或ひは田村成義翁が、菊五郎を宣傳せんとする一種の策略だつたかも知れぬ。すべての藝談なるものが、田村翁の代辯なので、筆を執る愚老も興がのらなかつたし、話が藝の末梢にのみ渉つて、讀者の感激も薄かつたらしい。併し兎に角彼等の藝術上の感想を筆記したといふ事が、愚老にとつては舞臺藝術に目をひらく初めであつた。此年になつてもあらゆる藝術に盲目な愚老が、こんな事を云つたら、噴飯せらるゝ人々もあるかも知れぬが、兎に角其處から愚老は彼等の藝術を味解しやうといふ心にはなつた。而して二人の藝術の偉大なるものなる事を、朧げながら感じ初めた。

併しほんとうに彼等の藝術――特に團十郎の藝術――に大なる價値を認めたのは、愚老が西洋に遊んで、澤山の芝居を見、澤山のえらい役者に逢つてからである。愚老は倫敦でも、巴里

でも、伯林でも、團十郎を凌ぐやうな俳優には一人も逢はなかつた。たゞ維也納のジョーゼフ・カインツをその帝室劇場で見た時、團洲亦敵ありと思つた。

かう云つたら或人は、愚老をもつて、徒らに好む所におもねるものと思ふかも知れぬが、團十郎を禮讃する藝術家は、外國にもある。ライン・ハーデングは、英國の劇壇にも有數なる名優である。彼の沙翁物やロスタン劇のヒーローなどには、驚嘆に値するものが少くない。が、彼は世界中の誰よりも、日本の市川團十郎をもつて、最大の名優と信じて居る。彼が日本へ來遊の際に見たのは團十郎の最明寺入道であつたらしい。雪のふり積む笠をかぶつて、馬上にふるへながら花道を出て來る團十郎の姿を見た時、はやくも彼はその非凡の藝術家なるとを直覺したといふ。彼は愚老に逢ふ毎に、此話をくり返した。愚老が二度目の外遊の時、彼は倫敦のグローブ座で、『レイグロン』のフランボーをして居た。彼は老兵長の姿をその儘、手を握つて再會の喜びを叙するや否や、又團十郎禮讃の辭をくりかへした。團十郎は此の如くに外國の俳優にまで尊ばれて居る。

今の舞台圖案家、久保田米僊君の大人米僊畫伯は、いつか如此いふ話をした事がある。

「嘗て米國紐育のヘラルド記者が、我國へ來て數月間觀風の客となつたが、或る人の紹介で自分の宅を訪問した其折、わたしは日本に御來遊中、尤も美なりと感ぜられたのは何かと尋ねたら、その人は開口一番、市川團十郎と答へました。」

我邦の國語を毫も分らぬ人たちをさへ、彼はこれ程迄に感動せしむる力をもつて居たのである。愚老の觀劇眼といへども、甚だしく盲(めしい)て居ない證據にはならぬ事もあるまい。

但し菊五郎については、果して外國人から同じ程度の賞讃を受けて居たか如何か、愚老は知らない。伊原青々園君は、その著『市川團十郎』の第一頁に「散文家として且つ創作家を兼ねた」故森田思軒氏の、「團十郎が現代第一の名優たる事は無論であるが、斯くの如く現代第一の名優たる彼が、其以下の俳優に於けるは、他の有らゆる方面に於ける最傑物が、各の、其第二流に於けるよりも、抽んずる事一層高い」といふ語を引用して、氏自分さへも「如何さま、思軒氏の此評語は、決して團十郎を過褒するものではあるまい」と裏書された事がある。愚老も團菊を同じレベルに置き並べやうとは思はない。が、菊五郎も泰西で見た、國々の名優に比して、大して劣つて居るとは思はない。倫敦のサア・ハアバアト、巴里の大ギュトリーなどの寫實俳優に比して、決して遜色ありとは考へられぬ。カインツのレアリスチックな演出振を見た時にさへ、此人の或演出を思

ひ出した程に、彼の寫實藝は世界の梨園に於いて、可成よい段階を占むべきものだと思つた。

愚老は此日本劇壇の二明星と時代を同うして、その妙技を幾百回か鑑賞するを得たるのみならず、忘年の交りさへ結び得た事を深く光榮とする。

英國の名優エレン・テリー女史は、一代の名優サア・ヘンリー・アーヴィングを葬つた日、涙と共にかう人に語つた。

「ヘンリー・アンヴイングは英國のものだ。一家族のものではない。英國がウエストミンスタア寺院に彼を葬つたのは、アーヴイングが自分のものであることを知つてゐたのだ。」

英國は藝術の士といへども、國家が之に授爵し、之を國葬し、永久に尊敬する所以の道を知つて居る。しかし日本では如何に彼等の藝術を記念しつゝあるであらう。木挽町や丸の內の初興行に殺到する年少の見物中、果して幾人が靑山や押上の霜解道を踏み分けて、彼等の墓石を掃ふであらう。幾人が彼等の名さへ共口に上すであらう。あゝ薄倖なる日本の舞臺の藝術家たちよ。

二

團十郎は天保九年の十月十三日に生れて明治三十六年の九月十三日に死んだ。行年六十六歲であつた。菊五郎は天保九年におくるゝ事六年目の弘化元年の六月四日に生れて、團十郎より七月前の二月十八日に死んだから、丁度六十歲で世を去つた事になる。人間の定命を五十年とすれば、二人とも長生といふべきかも知らぬが、由來俳優は割合に長壽なものである。百十二歲の壽を保つた藤川武左エ門の昔は云はず、明治に入つてからでも四代目の鰕藏の七十四歲、元祖多見藏の九十歲、三代目仲藏の七十八歲、四代目芝翫の七十歲、二代目荒五郎の七十七歲などゝ喜の字の祝ひを濟して世を去つた俳優は少くない。それから見ると二人はまだ哀惜さるべき價値は十分にあつた。たゞし二人の晩年は、餘りに多病であつた。老病舞台に堪へないものがあつた。併し飽まで舞台を愛する二人は、如何にしても其執着を棄てる事が出來なかつた。菊五郎の如きは、不隨の身體を强いて、辨天小僧を演じた事があつた。愚老は脚光の前から、彼の從弟の先々代田之助の悲劇を、まざ〳〵と見せられたやうな氣がして、幾たび鬼の眼の淚に咽んだ事であらう。

團十郎が俳優の總本家ともいふべき市川家の出なる事は、今さら斷る必要もあるまい。彼は七世團十郎（即ち海老藏）の第五男で妾腹の出である。菊五郎は十二代目市村羽左衞門の次男で、母は三代目菊五郎（後に梅壽）の次女であるから、これも

斯道に於ける名門の出といふべきである。前者は當時の梨園國なる木挽町に生れ、後者は其後移轉したる芝居町なる猿若町に生れた。彼等は生れながらにして、芝居國の特殊な空氣を吸ひ、團十郎は五歳、菊五郎は六歳で既に舞臺を踏んで居る。彼等は入るにも出るにも、芝居の雰圍氣にひたされ、見るも聞くも悉く演劇に關するものでないものは無い。一種の天才敎育を日常の庭訓にして、彼の住む以外の世界から、何等の誘惑も妨碍も受けた事はない。此點は泰西の一代俳優が甞め盡した苦惱の生活とはまるで比べものにはならない。二人者の如き大天才が、割合に容易に現はれたのも、或ひは此特種な空氣が醱酵した結果かも知れぬ。

愚老の知る限りに於て、英國に於いて俳優の六代つゞいた家は、ケンブル一家のみと思ふ。四代つゞいた家系さへ、稍名ある俳優の間に之を覓むれば、至つて鮮ない。大アーヴィングと唱はれて、二十世紀の初頭には世界第一の名聲を博した彼さへ、所謂素人上りで、其衣鉢を襲いだ二子も、もう世を去つてしまつた。俳優のアーヴィング家はもうあれで種切れとなつた。佛國の一大光明であつた神聖（デヴイン）サラも、十七歳で國立俳優學校（コンサアヴアトアール）に入學して以來、六十有餘年間佛國の劇壇の女王であつたが、子孫にその箕裘を繼がうとするものが無いから、これもたゞ一代の光輝の發揚に過ぎなかつた。旅役者の娘と生れ、朝から晩まで樂屋裏で養育され、八歳の時初舞臺を踏んで、今では一族三十二人が舞臺藝術に關係をもつて居るといふエレン・テリー孃の如きは、泰西に於ても極めて稀有なる一例と云ふべきである。

かういふ落莫たる環境の中に立つて居る泰西の俳優に比ぶれば、日本の俳優は何といふ惠まれた空氣の中に育（はぐく）まれて居るのであらう。わけても團菊兩優の如きには、二百有餘年の間に、發達し、伸展し、陶冶され、修煉され、爛熟されたる家の藝を傳承し、その長き間に家族（ファミリー）の血となり、肉となり、魂となつた大才を一身に集め、おのが身邊には、よき父祖と、その門弟の俊秀と、よき師友とを有し、舞臺藝術の基本たる舞踊音樂は勿論、當時の社會の儀禮たる香、花、茶の湯等の末技をさへ習熟せしめられたのであるから、甚だしき低能懶漫の性質のものでない限り、いやでも一廉の名優たるべく運命づけられて居たのである。況して團菊兩優に至つては、其時代の劇壇の覇權を有する名門に生れ、居ながらにして舞臺によき役を攫得し、衆多の凡庸俳優を支配する特權を有して居たのである。惠まれたる天才が、惠まれてる天才敎育を享け、惠まれたる特權の地位に置かれたのだ。明治の二明星が燦然たる光輝を、王政維新後の

新日本に放つたのも決して偶然では無い。

併し此二人に對して飽くまで惠みふかゝつた天も、決して二人をスボイルする事はしなかつた。その進展の徑路に於て、屢ば彼等の前に荊棘を植えつけた。いろ〳〵な形式の盤根錯節をならべて置いては、やうやく鍛え上げられたる新刀の切れ味を試みしめた。だからその難關を切り拔いて進んだ點に於て、此二人は決してスボイルド、チャイルドでは無かつたのだ。

團十郎の父の海老藏の名優なる事は、誰知らぬ人もあるまい。兄の八代目團十郎が、その自刄以前に夙くも天才の資を認められた事も、其時代の劇通は既に知るところだ。併し彼の五歳の時、父海老藏は追放せられて浪華の空に漂浪し、父と同じ舞臺に立つを得るに至つたのは、彼が十二歳の時で、それもたつた三年の間で父は再び大阪に赴き、數年の後、故鄕に還つては來たが、彼と同座したのはたゞ三回の興行に過ぎなかつた。兄の八代目が大阪で悲慘な死を遂げたのは、彼が十八の時であるから、その薫陶を受けた事は少くなかつたであらうが、之れより後も、彼には一向天才の萠芽さへ現はれなかつたところを見ると、父兄の影響が存外に稀薄であつたのかも知れぬ。が、彼の生後七日目に、所謂藻の上から彼を養子とした六代目權之助が、周密にして徹底せる一種の硬教育は、彼が二百年來の祖先から享けた血液の裡に沈潜せるあらゆる藝術的才能を、悉く醱酵し、沸騰せしめて、終にあの如き世界有數の天才を大成せしめた。

權之助は彼が父七代目の出演せる河原崎座の座主で、當時の劇界に於ては、所謂飛ぶ鳥落す、大興行師であつた。彼が團十郎を養子に迎へた時には、既に二十六歳であつたが尙ほ妻帶しやうともせず、實母のおつねと共に團十郎を養育する事に、心を傾倒して居たらしい。而して二人は團十郎を教育するには、決して普通の「猫可愛がり」はしなかつた。かつて實父の七代目が、河原崎家の老母に向つて、

「あなたのところでは、そんなに伜の長十郎をしつけて、しまひには責め殺しはしませんか」。

と、戯談の中に云つた。と、おつねは苦笑しながら、

「あなたの家(うち)では、子供を砂糖樽へつけて置くからいけません。わたしのところでは同じ砂糖樽でも、唐辛子を入れてあります」。

と答へた。此唐辛子によつて、長十郎の團十郎は、其地位から墮されんとする腐敗分子を全く除去する事が出來たのであつた。

菊五郎の生家市村羽左衛門の祖先については、「俳優略傳」に

記すところが興味は多いが、伊原青々園氏の「日本演劇史」の方が無論正しい事と思ふ。彼はもと野州下妻の産、江戸に出で村山座の創建者同苗又五郎に信任され、彼の死後自から劇場と興行權とを買收して、座名を市村座と改めた。彼自身は俳優を營業したものではなかつたが、養子竹之丞以後、俳優にして興行主となり、泰西の劇場に多く見る、所謂actor-managerをやつて居たのだ。之れが十一代つゞいて十二代目が即ち彼の父である。而して母は怪談物に妙を得た三代目菊五郎の娘である。但し菊五郎の祖父の死んだのは嘉永二年のとであるから、彼はまだやつと六歳で、その四月の舞臺には初めて出場をしたのであつたが、彼自身も「此時の舞臺の模様などはよくも覺えて居りません」と云つて居る位であるから、傲岸にしてもしかも無邪氣だつた祖父の人格も、後には彼がそつくり繼承したやうな舞臺の技藝も、まるで印象されては居なかつたらしい。父の十二代目羽左衛門の死は、それよりわづか二年の後であるから、これとても多くは知つては居なかつたらしい。

それに人氣ある俳優にして興行師を兼ねた十二代目羽左衛門の夭死は、市村家の家道をも衰へさせずには置かなかつた。勘亭流の名人石井三禮氏は市村家について、かう云つて居る。

「この市村家は始終苦しかつたので、明治二年の春中村座から四百五十兩借りて、自分の座の二丁目を棄てゝ、中村座で市村家橘を、尾上菊五郎と名前替をして、弟の竹松に家橘を讓つて、それを坂東の姓にしましたが、それには入組んだ事情があるのです。」

團十郎も其後種々なる家庭の悲慘事に苦められ、悲運は悲運を累ねて、赤貧骨を噛むに至つた。かくして天が重ね下した試煉は、却つて兩優を大成する機縁となつた。愚考は兩優が、如何にこれらの複雜なる生活の道を辿つたかをたづぬる前に、今より二十二年前、兩優について記した小傳の緒言をこゝに引いて見たい。雅文めかした當時の厭味つたらしい文體も、過去の追憶にのみ生きる愚老にとつては、なつかしいもの丶一つである。

市川の流れ滔々として絶ゆる時なく、尾上の松の緑、年を經て色を添ふ。暫時（しばし）木の葉の下くゞりつる思ひせし編笠の世は疾（と）くに過ぎて、今は百川こゝもとに朝宗する劇海の大洋、もろもろの鱗屑（うろこくづ）ひとへに其水の徳にしたがふに至りぬるに、此方も又松の隠居の竢ひにける効のいちじるしく、花さまぐの色しあれど、百花の魁梅が香妙に薫りて、黄菊白菊其外の名はなくもがなと、秋の匂ひ春の装ひ、たゞ此枝にとゞめをさしたりっ げにや阿國歌舞伎のむかしは云はず、市川尾上の

兩家は、共に江戸芝居猿若町を三分して其二座に據り、親方旦那の名稱は、斯道の王號覇稱とも見つべく、九代の久しき孝子屢ば門に出でゝ、日本役者の冠者時に海外に紅隈を知られ、五代の系統常に才技の名にほこりて、お化の開山屢ば都人の膽魂を寒からしむ、遮莫(さもあらばあれ)、今代兩家の代表者たる團菊兩優に至りては、寔に前代になくして後代に珍かなるべき名優の双出、藝園の連璧 江戸の花とやいふべき。九代目團十郎は七代目の子にして妾おための出、天保九年三月堺町に生れつ、共後六年を經て弘化元年六月四日といふに、五代目菊五郎は生れたり、父は十二代目市村羽左衛門。母は三代目梅壽の娘おとはなり、團十郎は嬰兒の間に河原崎座六代目の太夫元權之助の許に養はれ、菊五郎はもとより市村の太夫元なれば、共教育の方法やゝ相等しく、二人の年わづかに六年違ふのみなれば、時代も亦た相同じ、舞臺の上はしばらく措き、兩人は手習の師匠を同じくし、殆んど經歷進退を同くせり。然れば其技藝の點に於て、共に名人の譽れを博し、團菊左と幷べ稱するものから、まづ兩人を更に其中に推す人の多きは、今さら訝かるに足らぬ事ながら、さて二人が平生の性行嗜好、舞臺の上の演技の行方、心の用ひかた、一々に相異りて、さながら別時代に生れ、全く異なる境遇に立ちたらんやうなる節の見ゆるこそ可笑しけれ。近世の學者は時勢は人を作るといひつれど、同じ時代に異樣なる人物二人を出し、おなじ畠に植えつるおなじ花の、おなじ時に異やうなる色に咲き出づるは、いと〳〵おもしろき現象ならずや、いでや諸君と共に、こゝに巨眼厚唇の從容自若たる老紳士に逢ひ又た短頸禿頭滑稽洒落なる老才子と語り、同時代に生れ、同境遇に立ちたる此二人が、如何に全く相異れるかを見るも、豈(いか)で一興ならずとせんや。……

二個の天才世を去つて、彼等の事迹は一層愚老のノートブツクに繁くなつた。その幾卷を繙いて、先づ彼等の教育の方法から比較檢討をして見たい。

三

當時の社會に於ける唯一の普通教育機關であつた寺小屋で、彼等二個の天才はおなじ折内藤兵衛の許に見出した。藤兵衛は後に團十郎の門弟として、驚くべき天才の萠芽を示しながら、目を病んで夭死した市川新藏の父である。彼の許へは二人の若太夫の外に、澤村家の二子訥升と田之助も入門して居た。菊五郎と田之助とは二つ違ひの少年であつたが、其の早熟にして、動もすれば氣を負ひ人を凌ぐ點に於て、二人は相許すところがあ

づた。二人は田之助の兄訥升をも三角同盟の一に加へて、絶えず團十郎を苦めた。二人は折々印半天に緋縮緬の襷といふ、さながら『助六』の福山のかつぎの如き扮装で、師匠の許へやつて來るのに、團十郎はといへば、河原崎家の庭訓が甚だ嚴重で、若太夫の威嚴を保つ事に力めて居たから、いつも黒縮緬の羽織に黄八丈の小袖、鶸茶の襦袢といふいでたちなので、それが一層菊五郎等の不快を煽る事になつた。

彼等は又繪の師匠をも同くした。それは花所隣春と云つて、土佐繪を能くする人であつた。團十郎は後年も繪を善くした程あつて、幼時から丹青に堪能であつた。師匠は「市村は見込がないが、河原崎はうまくなる」と云つて居た。だから團十郎は熱心に稽古に勵んだが、菊五郎はまるで眞面目に繪筆をいぢる事をしなかつた。師匠の目をぬすんでは、格子の中から吸付煙草の煙管の出て居る繪をかき、その側へ「ばんにはどうだ」と附記して、訥升に渡すと、訥升は直に惣利と台の物の繪を描いて一枚一本で遊ばうといふ意を示し、「用のじもいくとさ」と、忽ち吉原繰込の相談を一決してしまつたのである。此際いつもねぶ一挺の除物にされて居たのは團十郎で、彼はこの寺小屋仲間から「お茶壺」といふ綽名さへつけられた。幕府時代には、宇治から獻上さるゝ「お茶壺」の逓送人には、狂猾に近よれぬほどの權威のあつたものだが、町人たちは一種の反感をもつて之を敬遠した。團十郎も菊五郎等のグループからは、反感と侮蔑とをもつて敬遠されて居たのだ。

特に喧嘩つぱやい事にかけては、自慢の菊五郎――「若い時芝居で喧嘩といふと、わつしか、出方の房吉の二人に極つて居たやうでした」と、自負して居た菊五郎――には、團十郎の落つき拂つた態度が一種の反感をそゝつてならなかつたらしい。菊五郎かつて曰く――

「エヽ、わつしは若い時から喧嘩早くつて、堀越をなぐらうと思つた事は、幾らあつたか知れなかつたが、とう〳〵あの男ばかりあ、一遍もなぐらずに我慢しました。併しそのたんびに此腕がぶる〳〵しましたよ。」

併しこの反感は、或ひは二人の生活態度の懸隔から起つたものではなかつたか。二人の若い時代をよく知つて居た石井三禮氏は、又こんな事を云つた事がある。

「團十郎の幼い時は、何しろ若太夫であるから、大したもので、書や生花の稽古に外へ出る時には、必らず乳母を連れて行つたものです。其頃市村の家は同じ太夫元でも、貧乏で、頬のやせた親父さん、十二代羽左エ門と云つた人が、毎朝自分の櫓の前へ行つて、口の内で拜みを上げてはいつたもの

で、この息子の菊五郎は、今いふ團十郎の外出するのを破れた藏の中から覗いて羨んで居ましたのは、他の見る目も可哀さうでした……」

こんな工合で、八歳で孤兒となつた菊五郎の幼時の行動は、むしろ放縦で、亂暴であつたのに、團十郎の家庭のしつけは、餘りに嚴格で注入主義であつた。踊を最大の基本藝術とする思想は、今も昔も日本の俳優の間には不變であるが、團十郎の養父の權之助も、團十郎に對する舞踊の教育はもつとも嚴しいものであつた。それに師匠の西川扇藏がまた名代の喧ましやで嚴しかつたから、頑是ない團十郎には、これ一つでも可成の負擔であつたのだ。しかも權之助は此外に三味線、書畫、茶、花と、俳優の必要な遊藝儀禮は、悉く之を學習せしめた。團十郎は朝起きて飯をくふと、乳母の背におはれて、寺子屋へ行き、それから踊の稽古、三味線の稽古に行き、これで午前の課目を終つてうちへ歸ると、家庭で踊と三味線のお復ひをする、讀書を習ふ。それがすむと茶の稽古、花の稽古、晩になつても又踊の稽古をくり返す事があつた。かうして彼には便所に行くと、灸治を受ける外には、あけしい暇が無かつたといふ。併し此嚴しい、烈しい鞭撻——彼の祖母の所謂唐辛子のはいつた砂糖樽が、彼の後年の藝術をどの位高上せしめたか知れない。……

佛國のサラ・ベルナル女史は、ラシツエル以後傑出せる女優を澤山に有して居る巴里の劇壇でも、最もすぐれた閨秀俳優である。彼女は十七まで尼寺に在つて、劇道とは何等の交渉を爲さぬ無垢の少女であつた、一たび國立俳優學校の入學試驗に通過するや、彼女の母は、絶へず鞭をふるつて彼女を督勵した。彼女は猶太系統であつて、齒を切つて發言する癖があつた。母と教師とは彼女を此惡癖から救ふために、双頬に小さいゴム球を含ませて、その發音を矯正したといふ。團十郎舞踊の學修に關しては、これに似た殘酷な教授法を、その家庭と教師とから受けて居たらしい。

放縦な菊五郎も、舞踊にかけては可成熱心であつた。彼は四歳の時から、乘物町の藤間およしに手ほどきをしてもらひ、七歳になつて花柳壽輔の門に學んだ。そこでは彼の一門、彦三郎、田之助、訥升なども毎日顔を合せて、感心に競爭したものだといふ。

「私は其時分からマセて居たから、稽古の仕方がズルかつたので、他の者が五度で覺へる所は、六度遣ると先が解つたものだ。ですが、其代り師匠の通り、二足でまはる所を胡麻化して、一足で廻るやうにして居りましたから、度々師匠に小言を云はれました」。(菊五郎自傳)。

こんな風に菊五郎は、團十郎と反對に家道は甚だ振はなかつたが、家庭の空氣は極めて寛大であつたし、稽古事に對しても、至つて自由であつた。それにも拘はらず、後年兩者が名優となつて、その門下を教育するに方つては、全く正反對の態度を取り、團十郎は飽まで自由な放慢主義に傾き、菊五郎は極めて煩瑣な干渉主義を實行した。前者は幼時も干渉教育を心から呪ひ、後者は放慢主義の非をさとつたものかも知れぬ。

四

人間の運命ほど逆睹しがたいものは無い。團十郎は家庭教育の嚴格な點こそ、幼い彼の重い負擔であつたらしいが、その生活は坦々として何等の苦悶も無い筈であつた。菊五郎に至つては、その家政は日々に衰ひ、若太夫の權威も次第に墜落して、屢ば部下の凌辱を受ける程であつたが、年少氣鋭の彼は、喧嘩といふ武器を以て之を逆襲し、猿若町全體の尊敬を受けて居た。年長の團十郎にさへも、幾度か侮辱を加へて、自ら快を叫んで居た。

ところが團十郎の生活の道は、他から見るほどに平坦なものでは無かつた。前にも云つたやうに、彼の五歳の時に、父は江戸を追放されて大阪に漂浪した。十四歳までは、權之助をまことの父と思ひ込んで居たといふ彼には、此一件だけでは何の痛痒も無かつたか知れぬが、十八歳の折には、兄の八代目は大阪で切腹し、生母のおためは、其翌年賭博で其筋の手に捕はれ、兄の猿藏も夭死してしまつた。而して又その翌年には、養父權之助の據つて以て劇界の覇權を握つて居た河原崎座は、興行停止の命令を受けて、木から落ちた猿となつてしまつた。その爲めに今までは梨園のプリンスたる若太夫團十郎も、たゞの市村座の抱役者となるより外は無かつた。此殘酷なる運命は、團十郎を刺戟して、赤裸々に運命と直面する勇猛心を引起させたに相違ないが、其翌々年に至ると、彼が進路を滑かにして呉れべき筈の實父海老藏が世を去り、其翌月には實母お爲も其後を追ふた。親の七光を失つた彼は、こゝに至つて自己の實力の外、何の頼むべきものゝない事を自覺し、數奇艱難なる運命によつて、却つておのれを玉にするの勇氣を奮ひ起したが、戯ら好きな運命の神は、尙彼を呪はんとする手をゆるめず、慶應二年には、さしもおのれを鍾愛して、その技藝の向上進歩に身も魂も注ぎ込んでくれた河原崎の養祖母を失ひ、明治元年には市川家の實兄重兵衞は行衞知れずとなり、養父權之助は兇賊の手にかかつて、無慘の最期を遂げてしまつた。當時彼は年やうやく三十一、此雨の如く降り注く大厄難に當面して、不屈不撓の勇氣

をふるはなければならなかつた。幼時の幸福はかくの如くして、中年時代に其權衡(バランス)をつけられやうとしたのであつた。

八歳にして孤兒となつた菊五郎は、前にも記した如く、慶應四年の八月、市村羽左衞門の名を弟竹松に讓り、自分が五代目菊五郎を襲名したのには、複雜な事情の壓迫もあつたのではあるが、翌年中村座へ出勤する事となつても、河原崎座の權を失つた權之助父子の如き悲慘な有樣ではなく、わづかに二十三歳の身を以て、一躍實力的の座頭となり、稲葉幸藏を創作(クリエート)して、立派にその眞價を見功者の間から認められるに至つた。十八の歳に實母を失つた事は、人情に篤い彼としては、大きな苦痛に相違なかつたらうが、濶達にして負けず嫌ひの一面を有する彼は、儕輩を擯んじて、好劇家の賞讃を博しつゞけて居る喜びに、身邊の寂みを十分に慰め得たらしい。たゞ彼が幼少にして太夫元の位置を占めて居たので、屢ば部下の心なき輩に凌辱されやうとするのを防止する爲め、いらぬ神經を尖らして、動すれば喧嘩三昧に日を送らうとする傾向のあつたのは、後年の圓轉滑脫、客を遇するに巧みを極めた彼を知れる愚老等には、同情の念を禁じ得ない次第である。彼の懷舊談にこんな話がある。

「町奉行はお月番から先へ廻るのですが、私が初めて廻つた時は、日本橋の鍋の尾(待合)で休んで行きましたから、多分根岸備前守樣であつたらうと思はれます。それから時候は多分三月頃だと思はれますのは、アンポツ駕籠の中に手爐(しゆろ)(梅の透彫(すかしぼり)がしてある)が入れてあつたので、想像されます。私が此手爐の上に手を載せて居りますと、附添の藤助(送り)が提げ莨入から煙管を取出して、煙草を塡めて、駕籠の戸の所からニユツと手を出して、私の前にある手爐で火をつけやうとしたのです、それが私には無上に癪に障つたので、いきなり其手を摑んで「おい藤助、親父さんでも斯なことをするのか」と云ひますと、假令身形は小さくつても、太夫元でもあり、其上理の當然にせめられて、藤助はヘイ誠に相濟みませんと詫びましたが、兎も角も太夫元に無禮をしたのですから、其儘では首になるかのといふので、他の人達が歸してしまつたさうです……藤助は七日の頭から詫をする事になり、漸く三日の冷飯で事が濟んだのでございます」。

同じ樣な無禮をガラ藤といふ床山が彼に加へたといふので、彼はまだ糸鬢奴の時代にさへも、烈しい憤怒に身を焚かれて、芝居から自宅へ歸つてしまつたゝめ、芝居中は大騷ぎとなり、床山一同頭を揃へて詫びをした事もあつたといふ。彼は門から若太夫の權威を保つたのには、小さい心の裡で少なからぬ苦悶

をしたらしい。

併し彼はこの位の苦悶を除いては、舞臺の上でも、家庭の中でも、甚だしい惡闘を經る事なしに、自己の立場を確立して行つた。後年弟の家橘を失ひ、養子の菊之助を失つた事は、これも一生の打撃には相違なかつたらうが、他の養子梅幸（當時榮三郎）は、彼の相手となつて常に女房役に扮する樣になり、その二子なる今の菊五郎、榮三郎の前途の希望も、團十郎に依賴して、大抵は安心の出來るやうになつてから、此世を去つた事は、まづ／＼幸福なる生涯と云つてよからう。

團十郎に至つては、なか／＼さう容易に、人生の春を樂む機會を與へられなかつた。明治七年再び實家市川家に復歸して、九代目團十郎となるに至つて、然も彼の責任は重くなつた。彼は三十餘年の間養育の恩に浴したる養家河原崎家に向つて、何等かの報償をしたいといふ希望から、芝の新堀へ一座を創設して、河原崎座と名け、以て養父の遺志を繼がうとした。併し彼の藝風は、當時の人心に共鳴を見出す底のものでなく、ついに多額の負債の爲めに、孤城をだに守る事が出來ず、三升の名の下に土州野州の村芝居を打廻つたが、赤貧骨を嚙んで、再び都の空が戀しくなり、幽靈の如くひそかに柳島の合羽屋の寮にしのび歸つた時には、六萬圓の借錢を負ふ身に、纒ふところは單衣を染かへした襤褸一貫で　その前年に娶つたばかりの細君は、粉炭を吹き／＼貧と寒さを凌ぎかねて居たとさへ傳へられる。だから彼にして後年井上馨侯の救ひの手がなかつたら、或ひは永久に貧困の淵に沈湎して、あの大天才を發揮すべき勇氣を失つたかも知れぬ。

當時幸ひにして新富座は再築せられ、新人團十郎を座頭として迎ふべき機會が作られた。彼より一頭地を抽んずるが如く、信ぜられて居た彥三郎は既に世を去り、彼の先輩であつた芝翫は、健忘症の爲めに時代後れの俳優となつた。これが爲め彼は容易に俳優最高の位置を贏得て、菊五郎、左團次を左右に捉げて、新劇場の新座頭となり、終に劇界の頭領と仰がるゝに至つた。

歌舞伎座の新興は更に一段と彼の地位を高めた。明治二十二年の春には、彼はかうまで愚痴をこぼした事がある。

「何しろ、一萬六千圓といふ大きな借金ですから、所詮償却の見込みはありません。自分はもはや天命だと諦めて居ます。」

ところが、彼の藝術上の聲價が昂まるに隨つて、彼の生活程度も亦次第に昂まり、彼が明治三十六年の九月に死んだ時には、下馬評ではあるが、二十萬圓以上の富豪になつたと傳へられて居た。今日では二十萬圓以上の財産を誇る俳優は少くないか

も知れぬが、當時に於ては唯一無二の富豪俳優ではなかつたらうか。ケチ五郎などゝ京童に後言をされたから、蓄財に如才なかつた菊五郎も、此點では一籌を輸する所あつたらしい。併しその子息の六代目菊五郎は、彼の恐ろしい大震災後に於てさへ、其地面家屋を十餘萬圓に賣却したと噂されて居る。物質の方面から見ても日本の社會では俳優は最もよい職業の一つである。

五

團十郎が六十六年、菊五郎が六十年の舞臺生活に於ける詳細の検討をする事は、この短かき紙面に於て能くし得べき事では無い。愚老が曾て製作したる團十郎の演出年表によつて計算するに、彼が一代に創作せる役々は實に三百五十を數ふ。此外に若い頃に地方巡業をして演出したものも、すくなくはないであらう。菊五郎が生涯に江戸と東京だけで演出した役々は、伊坂梅雪氏の調査によれば、四百二十九だといふ。菊五郎よりは六年も長命した團十郎の方が、演出役々の少ないのは不思議な樣であるが、團十郎が生涯で演出した八百五十餘の役々の中には、再演をした數が非常に多い。菊五郎は專賣物で、十七の年から演じたといふ辨天小僧でさへ、生涯にたゞ六回しか演じて居ない。彼が最も得意とした天竺徳兵衛、お菊、權太の諸役も、五回づゝの再演を見たに過ぎない。ところが團十郎となると、忠臣藏の由良之助だけも、愚老が初めて知つた明治二十八年代に、早くも四十有餘回演出したと云つて居た。『勸進帳』だけでも生涯に十一回も演出して居る。若狹之助、定九郎、曾我の五郎、幡隨院長兵衛なども各十回以上位は演じて居るらしい。

併し何と云つても、彼の一代の演技で、最も光彩を放つて居るものは勸進帳の辨慶であらう。安政六年九月、二十二歳を以て、此大役を演出してより、明治三十二年の四月、六十二歳の老齢をもつて最後の延年の舞をまふに至るまで、勸進帳だに演ずれば、滿場の士女は狂するばかりに、其所演の劇場に殺到した。

菊五郎に至つては、團十郎の如く、十八番といふ傳統の大物をもつて居ない爲めに、梅幸十種なるものを新たに作つたが、其多くが舞踊物だつた點に於いて、『勸進帳』や『暫』や『助六』ほどの迷信的喝采を、見物に要求する事は出來なかつたが、一作毎に洗練に洗練、優に團十郎の新十八番と拮抗する事の出來たのは、彼も亦一代の巨匠といふべきであつた。若し夫れいがみの權太や、辨天小僧などに至つては、全く彼によつてのみ其至妙の至藝を見る事が出來るので、流石の團十郎も心から、彼の演技に敬服してゐたのであつた。

『市川團十郎』、『市川團十郎の代々』の著者たる伊原青々園氏は、團十郎の生涯を劃して、三期に分つた。即ち幼時より新富座に入るまでを第一期、新富座時代を第二期、歌舞伎座時代を第三期とするのである。

愚老も此區分には大體に於て異論がない。併し彼の藝術の進展を仔細に檢討する時、新富座時代の前に、もう一つの時代を分劃したい。彼の生活の方よりいへば、河原崎座再興時代とでも云はうか。藝術の方面より觀へば、即ち彼の半生の綱領（モットー）たりし「活歴」演出法の萌芽時代である。

團十郎が少壯時代に於ける演出法は、當時の社會からは好意をもつては迎へられぬものであつたらしい。他日あのやうな偉大な俳優となつた結果から遡つて、其當時に於ても晩成を認むる何物かが現はれて居たなど丶、自己の明を誇らんとする人も無いではないが、兎も角も一般の看衆は、寧ろ「大根」を以て彼を遇して居たらしい。有背老人といふ人が、當時の追憶談にこんな一節がある。

「若年の頃は何となく「なま〱」とした風で、田之助、家橘、菊五郎などに、兎角おくれを取つて居たので、其時分に惡口のお經が出來て「新車增長、田之高慢、芝翫ボンヤリ、權チヤアン、なま〱」。彼に喧嘩をふつかけて彼を苦めて居た菊五郎、田之助等の若敏なのに引かへて、彼は如何にも鈍物らしく見えたといふ。併し前に述べたやうな種々なる艱難は彼を玉にして、兎も角も安政六年二十二歳に至り、名人小團次を富樫に廻して、『勸進帳』を演じた頃から、彼の技藝に進歩の痕が見え初むる樣になつて來たといふ。

此時代に於ける彼は、其半生以後の彼の如く、音吐朗々千言立ろに下る辯舌の雄では無かつたらしい。いやいづれかといふとタンカの切れぬ方の俳優であつたといふ。彼は夙く自己の病所に目ざめて、私に雄辯術（デクラマション）の修練に注意し初めたらしい。而して彼はその玲瓏たる音聲と、活殺自在なる雄辯とを以て一世を壓倒してしまつた。

併しマンネリズムの權化ともいふべき形（フォーム）の藝術のみを鑑賞した、當時の歌舞伎世界の見物には、目よりも耳を多く使はねばならぬ辯の藝術は、多數の喝采を博するに適しなかつた。彼は彼の雄辯に滿天下の信用を得るまでには、幾十回かの失敗を重ねべく餘儀なくされた。

兎にも角にも自己の發見した演出法を、徹底的に研究して、其極致にまで漕ぎつけずに措かなかつた彼の精神力の強さには、何人も驚嘆せさるを得まい。彼の演出法は、一代に幾回か

の變化を經ながらも、終にその行き着くべき目的に行き着いたのである。

しかも其當時に於ける彼は物質的には甚だ惠まれなかつたが、精神的には偉大なる後援者を得た。それは當時の華胄界に於て、最も豪放濶達だと云はれた土佐の容堂公であつた。彼は此貴族から、昔の大名——ひいては彼が好んで扮する英雄豪傑——の好モデルを獲た。同時に此人に侍して屡ば能樂を見る事が出來た。團十郎が扮する人物の、時に莊重にして文雅の趣あるは、此貴族から影響される所が非常に多かつたのだ。

明治七年の七月に芝新堀に再興した彼の河原崎座は、物質的にいへば彼に取つて大きなる躓の石であつた。之れが爲めに彼は都落ちをしなければならなかつた。併し精神的には彼に飛躍の窓を開いた大なる機會であつた。彼はその舞台開きに、新作として備後三郎を演じた。第三回は吉備大臣を創作した。これは一般の見物に對しては、徒らに欠伸を强ゆる樣な演出として見られた。併し自分が Actor-Manager として、誰に遠慮もなき演出を擅まにし得る機會を得た彼は、自己の信ずる通りの道を進んだのだ。此爲めに彼は、從來心に慊らなかつた淫靡な脚本を棄てゝ、おのが好める忠君愛國的の主人公(ヒーロー)を選んだ。マンネリズム其物のやうな半舞踊的演出を棄てゝ、寫實的な、エロキユーションを主とする演出を試みた。而して衣裳調度の如きにも注意を拂つて、其時代の風俗を寫さうとした。『勸進帳』の如きも此時の演出によつて、初めて今の大口袴を用ゆる樣になつた。其以前は辨慶だけが大口で、四天王は裁附袴(たつつけ)であつたのだ。

此時代の團十郎は、英國劇壇に於けるデーヴイツド・ガアリツクによく似て居ると思ふ。ガアリツクが出現するまでの英國の舞台衣裳なるものは、甚だ亂脈なものであつた。羅馬史劇の主人公が、當時の見物と同時代の服裝をしても、一向不思議とは思はれなかつた。ガアリツクは此時代錯誤から登場の人物を救つた。當時の俳優は生硬なるコンヴエンシヨナリズムの奴隸であつた。彼は其奴隸たちを解放して、自然演出の貴ぶべき事を知らしめた。思ふにガアリツクの藝術は、團十郎のそれに比して、少なからぬ遜色あるものらしいが、同時代の劇壇に貢獻した功績は、敢て讓る所ないと思ふ。

團十郎が折角發見した自然的演出法も、不幸にして適當なる戯曲の上に試る便宜のなかつたゝめに、生硬にして無味なる所謂「活歷」演出法に止まつてしまつたのは、口惜い限りであつた。彼が心血を注いだ、默阿彌や、櫻痴居士の史劇に代ゆるに、逍遙先生や鷗外先生の創作を以てしたら、彼の妙技はます

ます光輝を發したであらう。團十郎の爲め、日本の劇壇の爲め、返す〴〵も遺憾の極みであつた。

併し彼も晩年には「活歴」の非をさとつた。「活歴」が、何故に一般民衆に悅ばれないかの原因をも、朧げには理解したらしい。彼は次第に、世間が「活歴」即腹藝と信じて居たその腹藝を「活歴」から引離して、時代物にも世話物にも應用した。而して日清戰爭の新作には、船頭に扮して現代劇の腹藝の妙技を見せてくれた。しかし彼には其腹藝を十分に發揮し得べき戲曲が無かつた。其腹藝を如何に應用しべきかを指示(サツゼスト)する指導者がなかつた。彼の腹藝の妙技は、其晩年に至つて、ちと寶の持腐れの觀があつた。

愚老は當時毎日の樣に彼と逢つて居た。彼の演技上の感想を聞くべく、彼の樂屋をおとづれる日が多かつた。併し日本の劇術についても、泰西の劇情についても、何の知るところなかつた愚老は、彼に對して何等の益言を呈する事は出來なかつた。當時を憶ひ起す毎に、愚老は滿身燃ゆるが如き恥しさを感ずる。一體彼の周圍には、社會のあらゆる階級を網羅した友人が澤山あつた。それにも拘らず、彼等は彼の大發見なる自然演出を適當に指導する方法を知らなかつた。切めてあの當時坪内逍遙先生だけでも、彼に接近せしむる事が出來たなら、彼の晩年の演技は一轉機を示したかも知れなかつた。併し彼より數年の後世を去つた大アーヴイングさへ、その前年に初めてマーテルリンクの戲曲を讀んで見たが、一向に感服する事が出來なかつたさうだ。『闖入者』の如きは戲曲ではないとまで、罵倒したといふ。機運が熟さなくては、如何なる種子も芽を吹く事が出來ぬ。それは單に團十郎の身の上ばかりではない。

とはいふものゝ、愚老等の時代の者は、その「活歴」をさへ見得た事を幸福とし、光榮とすべきである。今になればこそ「活歴」を生硬の、無味のと罵るものゝ、あの團十郎の大目玉により、厚い唇から洩るゝ朗かな聲により、抑揚自在なそのエロキユーションにより、その柔軟性に富む四肢の自在な跳躍により、舞台の上に釀し出されたあの「活歴」ほど、興趣深いものはなかつたのだ。今日の大文豪の戲曲を第一流俳優の演出するのも結構には相違ない。泰西の名作を一代の俊才が翻譯して、當代並びなき舞臺監督が上演して下さるのも結構だ。併し若し團十郎再び此世に蘇生して、又「活歴」を演出さるゝならば、愚老はよろこんで他のあらゆるよき劇場を棄て、團十郎へと赴かう。

要するに彼が六十六年の演出方法は、變轉休む時なく、常に新を趁ふて居たのであるが、その心は常に「活歴」を目標とし

てそこに進みつゝあつたのである。而して晩年には「活歴」の殼を脱ぎ棄てゝ腹藝に趨かうとして居たのだ。若し彼と名戯曲家とが手を握り合ふ事が出來たならばとは、愚老が常に心に惹起する空想であるが、今更そんな事を思つても、もうどうともならぬ。そんなあだな望みを以て、永久に樂園の眠りを樂んで居る彼を攪してはならない。愚老は彼が日本に遺して行つてくれた、偉大なる藝術を鑑賞するとの出來る光榮な時代に生れ合せた事をたゞ天に感謝するのみだ。團十郎が劇界に殘して行つた足痕が、常に高きに高きにと、向上しつゝある間に、菊五郎のそれは、深きに深きにと突き入つて居る。團十郎の藝術上の閲歴は、變化から變化を求め、從來の傳統（トラヂシオン）と習癖（コンベンシヨン）との打破であつたのに、菊五郎の藝術上のモツトーは、傳統の修飾と、保存とにあつた。自己が十七歳の時、初めて創作したといふ「辨天小僧」に向つてすら、彼は四十年に渉つて、何等の根本的變革を加へなかつた。いや、寧ろ最初に作り出した舊形の、外觀や末梢やに、瑣細な修飾を加へたに過ぎなかつた。彼の四肢を自由に使用する事が出來なかつた最後の演出に於てさ、その補塡修正の方法として、舞臺裝置に幾分の訂正を加へたに過ぎなかつた。前者はカンパスの上に筆を揮つて、最初の構圖の影もとゞめぬばかり、塗抹又塗抹、終に自己の全精神を畫板の上に示現せしむる藝術家であつて、後者は玉の如き象牙に鐵刀を押當て、所謂彫心鏤腸、花卉禽獸をその一擲一毛までも、さながらに活躍せしめんとする工藝家たる如き慨があるではないか。

この二人の演出手法の相違は、二人が得意とする藝術の領分（スクヰーア）の相違によつて、特に強く色づけられた。團十郎の好んで創作せんとした人格は、英雄、豪傑、忠臣、烈女、すべて材を過去の歴史中に求めた理想的人格で、それを梨園のテクニツクでいへば、所謂「時代物」中の人物である。團十郎は此等の人物を思ふまゝに理想化した。而して彼の理想が向上し、技藝が進歩するに從つて其手法が、思ふまゝに擴大し、向上したのは常然な事である、ところが菊五郎が喜んで演出した人間は市井の俗衆である。狹斜の蕩兒である。所謂「世話物」中の人物である。これらの人格を演出するには、たゞ寫生の一法あるのみである。心理解剖よりも、其形態の寫實に興味を有する彼の如き俳優に取つては、彼の技藝が洗錬さるればさるゝに從つて、其演出手法が煩瑣となり、纖細となるべきは已むを得ない事である。若し夫れ家の藝たる「怪談物」については、愚老別に一說の有るあるが、こゝにはすべて省略に附する事にする。たゞ次第に理智的となり、怪力亂神について、懺悔の門を投じつゝある時代に、彼が如何に「恨めしや」と絶叫するも、彼の祖先の

松緑や俳諧がおさめた効果の一半をも受け得なかつたのは已むを得ない。たゞ舞踊の一事に於いては、團十郎の莊重には及ばぬものがあつても、艶麗のこれにまさるものがあつた。特に今日から見れば、泰西の所謂ヴォードビル藝術の嫌ひはあつたが、つぎ〳〵に起る新らしき社會の出來事を舞踊化して、看衆の注意を惹かうとした彼の努力は、徒らに自から新人を以て誇りながら、年が年中興行師の頤使にのみ是れ從ふ、今日の一部の俳優の頂門の一針とするに十分である。

六

團十郎が愛用の印章の中に、『百華王章』といふのがある。これは彼の門地なり、彼の藝術なりが、所謂天香國色、遠く俗李凡桃を抽んずるといふ處から、人が尊敬し、自から信ずるに至つて、此印章を作つたもので、彼自身も牡丹を描くを得意とするまでに自尊心を高めて居た。菊五郎に至つては、梅幸の俳名が彼の技藝のシンボルとせられて、彼の贔負達は直ちに彼の洗練された藝術の一方面のみを梅花に比するに忙はしくて、動もすればその卑俗に墮ちんとする他方面の存在に目を掩はうとして居た。愚老を以て見れば、團洲の牡丹、梅幸の梅、ともに當らない。團洲には牡丹に似たる豐麗天香、如何にも二十四番の風吹き過くして、春光の殿、百花の王との感じは十分にあるが、同時に玉骨氷肌、俗塵を絶した高士の氣品を備へて居る。梅幸に至つてはたゞ簡單に櫻である。しかしこれは宣長の「朝日に匂ふ山櫻花」の豪宕な櫻ではなくて、千蔭の所謂「世の人の心を春になすものは、野山に匂ふさくらなりけり」の艶麗なそれである。此人一人の爲めに、わが日本の十九世紀末の劇壇は、どれほど春の景色が濃かになつたか知れぬ。彼がなかつたら、暗香疎影の冷たい風流の春は見られても、「木の下は、汁も膾も櫻かな」の花やかな、狼籍たる春は見られなかつたかも知れぬ。

同じ土、同じ時代、同じ社會、同じ環境の裡に生育されながら、二人は何事にも兩極端を示して居た。而して其少年時代には極度の教育に惱まされた團十郎は、その半生以後に至つて、却つて自由な、寛洪な、「心」の藝術家となつてしまひ、若くして自由放縦な生活を享樂した菊五郎は、煩瑣な干渉主義の「形」の工藝家となつてしまつた。團十郎は儕輩や後進に對しても、冷淡と云ひたい程に、非干渉主義を取つた。先年新富座再興の時、彼は『伊勢三郎』を演出した。その妻の濱狄の役を取つた源之助は、如斯團十郎にたづねた。

「旦那、あの奥から出る時には、如何したら御都合が好いでせ

う」。

「おまへの好いやうにするがいゝ。おれはおまへの都合のいゝやうに調子を合はせてやるよ」。

　これが團十郎の答へであつた。ところが菊五郎に至つては、相手の技藝を束縛しても自己の心に適ふやうにしなければ滿足が出來ない。かつて明治座で明智左馬之助を出した時、養子の菊之助の重兵衛と立廻をする件があつた。菊之助は當時その死期の迫つて居たせいか、技藝は頓にすゝみ、此重兵衛なども彼の創作中もつとも推賞すべきものゝ一つであつた。その立廻の烈しさ、見事さ、愚老の如きは間然すべきところなしと思つた。それでも菊五郎は決して、滿足しなかつた。菊之助は父の烈しき非難に憤慨してこれでもか〳〵と働いてかゝつたので、流石の菊五郎もあしらへかねるに至つて初めて可矣と云つた。

　これも、その頃の事であつたが、三枡稻丸と尾上和市といふ俳優が、菊五郎を便つて上京した事があつた。彼等は初めて都座（新富座の一時改名）へ出勤して、前者は金鞠大輔、後者は里見義成に扮した。すると其初日に揚幕からのぞいて居た菊五郎は、二人が樂屋に歸るのを待つて、まだ衣裳も脫がない中に、早く自分の部屋へ呼びつけて、あすこはあゝでは無い、此所は如斯しろ。あんな事では江戸の見物は喝采もひつかけはしないなどと、自分の門下を叱ると同樣に罵倒した。それが何日ばかりではない。二日目も、三日目も、自分の心に承知のなるまでは、決して手綱と鞭を棄てなかつた。ところが團十郎に至つては、來つて求むるものでなければ、どんなに拙い俳優を見ても、決して批判をしない。曾て或座で『一の谷』の熊谷を上演した時の事であつた。樂屋に歸るや、そこに遊んで居た愚老に向つて、苦々しげにかう語つた。「わたしも度々熊谷の役を演て見ましたが、今度の樣な下手糞な小次郎と玉織姫に出逢した事はありません」。「では一つ教へてやつたら如何です、あの手合だつて、つまり市川一門の人たちなんだから」。愚老が如斯いふと、團十郎は輕く首を掉つて、「いや、止しませう。人に云はれてから自分の缺點が分るやうな人間では、とても上手にはなれませんよ」と云つた。

　此二者の相違は、他に對してばかりで、各自の技藝の表現手法に、最も的確に現はれて居た。一は「心」の藝に沈潜し、他は「身體」の藝に徹底した。而してそれが自己の身を飾る小道具衣裳にまで、各自の嗜好が現はれて居た。菊五郎はかつて明治座で、山門の久吉に扮した事があつた。其時彼は順禮の柄杓の柄の長さを定めるに、數十分の考慮を費やし、初めには一尺五寸にしろといひ、次には一尺三寸にし、更に他の柄杓を持來ら

しめて一尺八寸に切り、又一尺五六寸にした。愚老は恰度その席に居合せたので「こんなに片つぴしから切つてしまふのでは、東京中の柄杓を買つて來ないと、初日が出せないね」と菊五郎を揶揄してやつた事があつた。ところが團十郎となると、矢張同じ年の歌舞伎座の慈善興行に、『逆櫓』の樋口に扮した時、「花道の出に簑をつけて櫂をもつのは面倒だ。これでい丶や」と云ひながら、饅頭笠に面を掩ふてすつと揚幕を出た。愚老は揚幕の後でこれを見送りながら、却つていつもの樋口よりも船頭らしい色の豐富なるに敬服した。

菊五郎が形(フォーム)を尊ぶ結果は、日常の調度でさへ小道具がもつて來るものでは氣に入らず、彼自ら小道具を蒐集して居た。手拭、煙管、煙草入、彼のコレクションは何百種に上つて居た。若し其折々の役に煙管の要る場合があれば、彼は自己の集藏品をのこらず楽屋にもち來つて、心しづかにその中より選むのであつた。其煙管の何百本は、みな形を異にして、村田張りもあれば、夜雨張りもあり、蛭張りもあり、新古、大小、殆んどないものは無い。ところが團十郎は、世話物の場合を措いては、か丶る穿鑿にはほとんど無頓着で、『毛剃』の元船の煙草入には、自分が楽屋で使用して居た、木綠りの物を無雜作に持出した事さへある。

此兩者の差違は扮裝の上にも現はれて居た。菊五郎の扮裝に細心な事は實に驚くべきものがある。これも愚老の實見したところであるが、彼が時次郎の役の化粧にか丶るや、先づ素顏に白粉を塗り、その上へ猩臙脂を潮したが、その色が少し濃かつたので、一度塗つた白粉を悉く落してしまひ、更に又白粉を塗り臙脂を加へ、眉錐をとつて眉をかいた。が、その眉が自分の思ふ通りでないといふので、三たびもとの素顏にかへして、三度目の扮裝にか丶つた事がある。ところが、團十郎の扮裝のぞんざいな事は有名なもので、指先で眉をかき、目の下に隈を入れ、白粉でちよつと鼻の先をた丶いたまで丶、家康となり、秀吉となり得たのである。

許されたる紙面は、こ丶に盡きんとして居る。而してこの一篇の爲めに蒐集したる材料は、十分の一をも竭して居ない。しかも殘れるすべてを割愛に附して、たゞ一事を最後に語つて置きたい。

世人往々兩者の得意とする所のみによつて判斷して、團十郎を純「時代物」の俳優とし、菊五郎を純「世話物」の役者と斷定する傾きがあつた。この一般の批判は二人に取つて、もつとも平かなるを得ないものであつた。前に書いた三桝稻丸は、折角上京しながら好評を得られないのを思ひ悩んで大阪へ歸らう

とした事がある。彼は其時團十郎の許へ行つて如斯云つた。「私は少しは時代物が出來るつもりですが、世話物がいけませんから、大阪へ歸らうと思ひます」と。すると團十郎は微笑して、「折角上つて來たものだから、もう少し辛抱するがいゝ。併しほんとうに時代物が出來れば世話物はそれにつれて出來るものだ。おまへは私には世話は出來ないと思つて居るだらうが、まあ出來るか出來ないか、もう少し見て居て貰はう」と云つた。稻丸は其足で菊五郎を訪ふて前のやうにいふと、菊五郎も苦笑しながら、如斯云つた。「まあ、折角出て來たものだ。もう少し辛抱するがいゝ。併しおめへはおいらが、時代物が出來ねえと思ふなら大違ひだよ、世話が出來れば時代も自づと出來るもんだ」。稻丸は其後團十郎の『春雨傘』を見て、名優の語のいつはりならざるを知り、再び團十郎を訪問して、前言を謝し、「これから屹度辛抱しますから何分御頼み申します」と云つた。すると團十郎は、「おまへの藝風はおれよりも菊五郎につくがいゝから、寺島へ行け」と云つた。稻丸はそこで菊五郎の配下となつた。

此の如く二人は、世間が得意ならずとした領分にも、十分の抱負があつたのだ。而して時に其不得意らしく見ゆる境に闖入しながら、驚くべき妙技を示す事も稀れではなかつた。たゞ、菊五郎は團十郎の時代物に心から推服し、團十郎は菊五郎の世話物を嘆賞措かざりし爲め、自らなる互ひの分野を侵さうとは試みなかつたのであらう。

千八百八十一年の倫敦ライシアム劇場に於ける、ブース、アーヴィングの一週間代りの『オセロ』は、二大明星を一卓に盛つたる世界の最大饗宴として、今に於いても語り傳へられて居る。併しわが日本ではその時代から引つゞき、彼等にまさるとも劣らぬ二大明星が、時を同うし、處を同うし、最後には多く劇場を共にし、幕を共にして、その大藝術を心ゆくまで示して居てくれた。若し日本に夙く沙翁ありて、『オセロ』の如き大傑作を彼等に演出させたならば、明治劇壇の偉觀は更に〳〵光彩を增したであらうに。

思へばこれも老人の愚痴か。大正も早や十五年となつた。九世團十郎五世菊五郎を凌ぐ名優は、もう其姿を現はして居るのかも知れぬ。老眼模糊として其姿を見る事が出來ぬ。われこそ其人なりと呼號して、此衰殘の老人を喜ばせてくれる人はないか。

古代人の地誌にあらはれたる日本

在巴里　小町開三

【紹介の言葉】――小町開三と云ふのはX君の假りの匿名である。X君は佛蘭西政府授與の理學博士の學位を持つて居られる科學者である。しかし私の友人としてのX君は熱心な文獻蒐集者、篤實な史的探究者としてのX君である。その蒐集する文獻、探究する史實は、主として、桃山末期より德川中期にかけての日本文明と拉典文化との交渉である。從來日本の學者は德川時代に於ける日本の洋風學藝の開發を說くにあたつて、その力點を和蘭系統の文化の影響に置いて、それ以前に遡のぼるべき拉典文化の感化に就いては比較的冷淡であつたと言へる。これは日本に於て收穫し得られる史料の範圍に於ては致し方もないことであつたかもしれぬ。この點に於てX君の滯佛六年間の努力は正に日本文明史上未發の領土を開拓するものと言はなければならぬ。猶X君はこの方面の研究の副產物として極めて古く歐羅巴で刊行された世界地圖を數多く蒐集された。勿論それらの地圖に「日本」といふ島國が如何なる風に表現されてゐるかといふ事を見るためである。X君の研究はいづれ學術的に立派にみとめられて世に出ることであらうが、それはそれとして、研究の斷片をば隨筆風に時々書かれて一般の人々に示されてはどうかと嘗て私はおすゝめしておいたのであつたが、それが機會となつて最初に書かれたのが、この短篇である。X君はこれに最初「手室の花」といふ題名を附されたが、私は筆者と相談の上新たに「古代人の地誌にあらはれたる日本」といふ隨筆向の範疇に更へたのである。讀者諸君は、この短い一篇によつて、「日本」といふ神秘の島國の存在が、マルコ・ポーロの時代よりも遙かに古い時代に既に朧ろげながらも西歐人の間に想像されてゐたにちがひないことを識り得るであらうと思ふ。私は讀者諸君と共に、X君のこの方面の隨筆的短篇が續いて數多く發表されることを希はざるを得ない次第である。――（巴里　森口多里）

もうかれこれ三四年も以前のことになる。有名なミストラルが全く吹き收まり兼ねてゐる夏の始めにプロヴンスの古い町々で古本を探したり、寺院の牧師などを訪れていろ〳〵のことなどを尋ね廻つたりしてゐたが、一向自分の探してゐるものに突き當らずに唯だいら〳〵してゐる計りであつたから明日はもう巴里に歸らうと腹を決めた。でも一日中の一番暑い時間が過ぎ去ると、角のカフエーへ腰を下して何か冷いものでも飲まないと矢張り氣が落付かない。そして其處には數日來の顏馴染の愉快な爺さんが烟管を喰へて陣取つてゐるのを常の如くに見出す。爺さんの右の手は口に喰へた烟管にしつかと癒着してゐる。左の手を出して『どうです？』と挨拶をする。自分は此處ではどうも得ることが少なかつたなど、泣言を並べたのが機となつて、或人に紹介され、それから二三の下らぬ書籍と一葉の古い地圖とを手に入れることが出來た。その地圖はプトレマエウスの名高い註解者の一人であるバーゼルの地理學者セバスチアン・ミュンステル（一四八九―一五五二）の撰に係るもので木版摺りの隨分奧床しいものであつた。

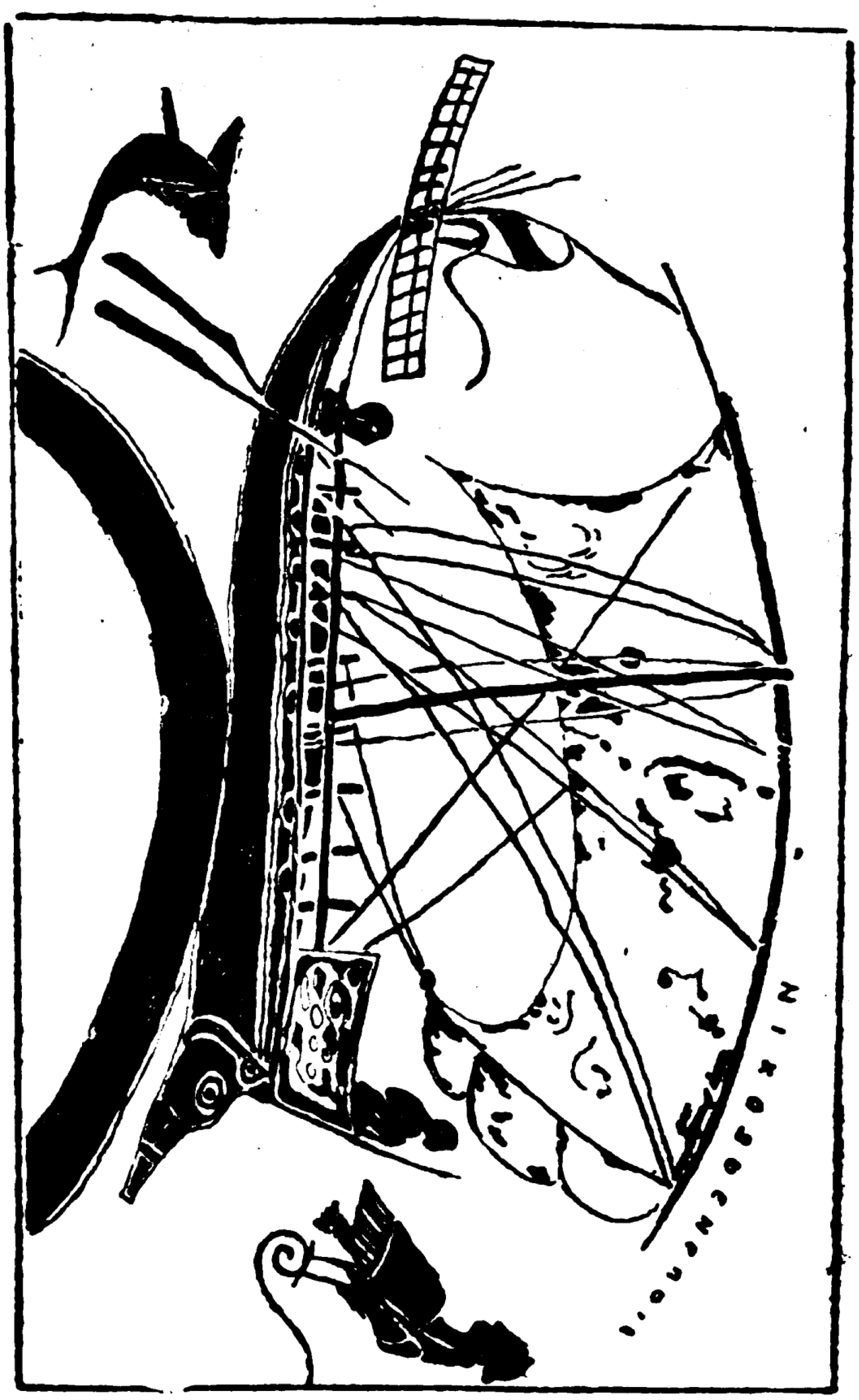
プトレマエウスは紀元二世紀の上半にアレキサンドリアに住んでゐた學者であつて、アレキサンドリアの名と共に幾何學のエウクリデスの名が連想されると同じやうに天文、地理ではプトレマエウスの名が連想せられる。アレキサンドリアは希臘の文化の花が移し植えられたといふ許りではなく古代の東洋と西洋との間の經濟上の衝路であり、智識の都であつた。その文書館は當時世界の智識の結晶であつたことは歷史上名高い事實である。アレキサンドリアから方々へ散れてゐたプトレマエウスの著作の寫本がグーテンベルグ活版發明時代からは恐ろしい勢で版本となつた。活版發明時代即ち十五世紀の版本は一般に骨董として汎く珍重され歐洲人は之れを特に嬰典　INCUNABULA　と名けてゐるが、プトレマエウスの地誌でそれに屬するものも數多ある、其他十六世紀の始めにまで掛けての骨董本を加へるなら恐らく三十の數を以て算へられる程の異つた版本が今日知られてゐる。プトレマエウスは古代の科學者としての明星であること

は今新たに言ふまでもないが、更に中世紀に這入つてからでも古代地理學者に依つて所謂『プトレマエウス復活期』と名付けられる一期を現出した程彼れの事實が再びやかましく學問界に擔ぎ出されたことに依つても如何に彼れが重要な役目を演じてゐるかといふことが分る。從つて彼れの著作に就ても數多の註解者が産み出されてゐる。之等を渉獵することは夫れ〱の時代の學者に依つて彼れのテキストの見解を異にしてゐることゝ、それ等の學者連自身の時代智識とが窺はれるといふ點から甚だ大切でもあり亦た極めて興味の深いものである。

セバスチアン・ミュンステルがプトレマエウスのテキストに依つて描いた亞細亞の地面は後世屢々引用せられる所であるが、私の手に紛れ込んだ前述の此の地圖は夫れ等の有りふれた地圖とは隨分趣きを異にしてゐる。といふのはミュンステルは中世紀は固より、千五百年代の始めに掛けての新智識を持つた頭でプトレマエウスを註解し、それにまた自分を多分に玆に出してゐるからである。例へば『……タプロバナ TAPROBANA は今日の所謂スマートラ・ゼイロン(セイロン)、ジパングリ(日本國、)ザンジバルなどに當る』といふ文句が誌されてある。數あるプトレマエウスの註解者の中にはタプロバナに就ての論議は樣々で今日に至るも未だに決して盡きぬところであるが、明かにタプロバナはジパングリであると言ひ放つたミュンステルのテキストのある地圖を手に入れた時の自分の感じた面白さ愉快さはまた何とも言ひやうがない程であつた。先づ穢多卑人位にしか思はれぬ名無しの太郎が不圖何かの機みで自分の家の系圖が見付かつて調べて見ると、自分はりつきとした家柄の子孫であるといふのが分つたといつたやうな氣持と言つてもいゝ。世界の中でも最も古い記錄の一つである、古代最高の權威プトレマエウスの地誌に自分達の住んでゐる國の記載を見付け出したといふのだから。

ミュンステルに依つて今も吾々の國に當てられた此のタプロバナは、古代の人々には誠に美しい、そしてまた神秘に

認められた島と考へられてゐた。千四百年代のカタランの人々の傳說に依れば此地方の海には二種の精がゐる、一は半女半魚で他は半女半鳥である。此島の住民は色が白い、禮節も正しく上品で極めて穩やかである。姿のいゝその肉體には着物も纏うてゐないそれから此島人は生まの肴を食ふ。此島には草木が見事に茂つてゐて、花は一年に二度咲く、などと云はれてゐる。今日の開明國人の中で生まの肴を食ふのは恐らく日本人だけであらうが、日本國有の文學にせよ、藝術にせよ、科學にせよ、あの刺身の味を知らなかつたなら或は生れ出でなかつたものかも知れない。



希臘のものに現はれた海の精ある怪鳥。
(巴里ルーヴル博物館所藏の陶器 Nic.sthènes 杯の舟の畫に依る。)

タプロバチといふ名は希臘羅甸その他南蠻人は皆な女性にしてゐる優しいものであるが之れとは全く異つた傳說も希

嶼、羅馬から中世紀に掛けて歐洲人の口々には行はれてゐた。到る所に蛇が澤山にゐるとか、住民は膚の色が眞黑の矮人で白人や他の外國人を採つて食ふとか、背丈けは一丈二三尺もある巨人であるとか、此島には白がね黄がねやいろいろの寶石が無盡にあるとか、種々の高貴の香料が產するとかいふことである。此島は印度洋――といつても東方の大洋といふ意味であつて今日の印度洋では固よりない。當時印度洋、太平洋などいふことは少しも分つてゐなかつたのだから――即ち東方の大洋の果てにある島であつて、いろんな人種が此地方に航行して人魚などに魅せられたものと見える。成る程、古い千五百年代の地圖を見ると今日の南洋地方ではなしに立派に日本の近海に人魚が波を蹴つて二つ三つ跳つてゐるところの面白い繪を見る。此人魚に就て思ひ出されるのは、曾て自分は、最初のアトラスを作つた名高いフラマンの地理學者アブラハム・オリテリウス（一五二七――一五九八）の東洋の地圖を一葉手に入れたことがあつたが、その羅甸版は初版か二版かゞ問題になつてゐるのだから、之れを解決するために或る古代地理學者を訪れて敎へを乞ふたことがあつた。此の高齢の學者はオリテリウスに就ては深い研究を遂げた人であつて、若い時代に研究した備忘のノートを出して一々差し示してくれた。それで自分の疑問は全く氷解したのであつた。私が初版だと思つてゐたものは第二版であつて、二版だと思つてゐたものが却つて初版であつた。それは私が初版かと思つたのは圖版に表はれてゐる銅版の線がいかにもくつきりと鮮やかであつて、二版と思つたものは殆ど線が磨滅してゐたといふ事實に外過ぎないのであつたが、此學者の說明に依ると、初版は當時世界から非常にもてはやされて同じ年に二度も刷つたが、何れも羅甸版の初版といふことになつてゐる。數年の後ち此磨滅した銅版に針を加へて刷つたのが第二版の羅甸版であるから、圖版の線が原版よりも更に鮮やかなのも決して不思議ではないのださうだ。自分の所藏の圖にある人魚は何人かゞ鵝筆で色の部分をがちや〱に消し潰してある、然しそのインキの色はもう大變長い時の働きに依つて酸化されて消え掛けては

あるもの、如何にも惜しいことだからオー・ド・ジャヴェル水か何かで消したものかと言ふと、此老人は腕を空に振り動かして、『むゝ、馬鹿者奴が詰らぬことをしたものだなア！　けれども此時代の人が裸の女の姿を見るのを憚つたのは宗教上の習慣だから仕様がない、その將へを美しい人魚にまで及ぼしたのは却つて面白いことぢやないか……立派な人間の裸かの姿程美しいものが、少くも人間に取つては、外にあらうかと俺はいつも思つてゐる……。』と呟いた。そんなに美しい人間よりも尚ほ更に美しい人魚なら、今日でも瀬戸内海か筑紫の海あたりにでも時々出て吳れても決して惡くはないと思ふ。

タプロバナに就ての記事を古文書に依つて調べて見るといろ〳〵のことが出て來る。地理的の記載を見ても、記錄的事件を見てもどうしても咀唔する全く別種の事柄が同じタプロバナといふ名の下に讀出される。最も古いストラボー（紀元前一世紀）に依ると、此島は印度半島からは南方に離れた一つの島であつて一週間又は三週間の航海を要すべき距離にある、その廣袤は英國のそれに比すべきであるといふ。ポンポニウス・メラ（紀元第一世紀）に依るとタプロバタは一つの島かそれとも又或大陸に至る入口か分らないといふ。誰れも此島を廻つた人がないのだから明かには言へないが恐らく相當の大陸と考へてゐたらしい、少くとも島の中では最も大きいものとされてゐた。プリニウス（紀元第一世紀）はタプロバナに就て最も委しい記載を吾人に遺してくれたが、それにも拘らず後世の學者は却つて惱まされたに過ぎない。假令ばタプロバナから羅馬のフラウヂウス皇帝に遣はされた使節の話が出てゐるが、それに依るとタプロバナには五百の都市があつて、島の中央には湖水があり、その周圍六十五哩などである。此島の住民は極めて低い家に住んでゐる。黃金を調度として使用すること甚だ盛んで迚も羅馬とは比べものにならない。此島の使節は羅馬へ行つて始めて大熊尾や昴宿などの星を見て吃驚した。之等の星宿は彼等の國では未だ嘗て見たこともないものであつた。それよりも更に驚

いたとには、彼等は自分達の影法師が長く北に引いて地に落ちるのを見付けたことであつたなど丶言つてゐる。プトレマエウスに依るとタプロバナは印度からの距離が著しくなつてゐて、其の廣袤は今日でいふなら十五度乃至二十度も與へられてゐる。プトレマエウスよりは稍降つた矢張り紀元三世紀に於けるアガテメロス（紀元第三世紀）に依るとタプロバタは島といふ島では最大のものであつて英國はその次に位すると言つてゐる。此島は一部赤道以南に在るらしく思はれる記載のあることからして今日のスマートラに相當するといふ學者も多いが、古代史の研究では人に知られてゐるスコツトランドの史家ウイリヤム・ロバートソン（一七二一—一七九三）は之れに一見尤もらしい解釋を試みて曰く、古代の航海者は決して今日のスマートラまでは航海しなかつたらう、それからコモリン岬を迂廻して航海した古代の航海者は陸地が全く見えなくならないやうに陸地に添うて航海したものに相違ない。そして而もタプロバナが知られてゐたのだからそれを今日のスマートラに當てる爲めには印度半島からの距離は甚しく大に過ぎる。先づ最も穩當な考へとしてはタプロバナを以て單に今日のセイロン島に當て丶おくにあると言つてゐる。けれどもそれは英國人の口から出る言葉に過ぎない。古代の人はスマートラまでは航海しなかつたといふのは歐洲人の言ひさうなことであつて、東洋人から見れば決してそんなことは言へない。印度が英國の殖民地でなかつたらタプロバナをセイロンには持つて行くまい。彼のこのドグマは私がタプロバナを以て唯一つの日本だけに當てやうとするドグマと何等の選ぶところがない。タプロバナをスマートラに當てるのは十五六世紀頃のポルトガルの地圖に屢々見られるところである。所がカタラン人は之をマラツカ半島に當て丶ゐるらしい。

兎に角古代の學者等が亞細亞に於ける島々に就ての知見を調べて見ると、タプロバナがその最も著しいものである。但しアレクサンドロス大王の印度遠征以前には此島は歐洲人には知られてゐなかつたといふことが出來る。フラグンと

いふ學者は Ut liqueret insulam esse, Alexandri magni oetas resque proestitere といふプリニウスの言葉を引いてアレクサンドロス大王の印度遠征以前にはタプロバナといふ名丈けは知れてゐたかも分らないが之れが島であるといふことさへも知られてゐなかつたと言つてゐる。

タプロバナの外に更にインスレ、マニオーラやインスレ・サチロームやインスレ・ボネーフオルトウーネなどは矢張り古代の東洋に漂うてゐた島々である。その中インスレ・サチロールムを以て日本の主なる三つの島即ち本州、四國、九州に當てる學者もあるが、プトレマエウスのテキストに依ると總て之等の島々は赤道以南に位してゐるといふから之れを全く無雜に日本に當てることは少しく附會を免れないであらう。古代の島々を成るべく西の方へ西の方へと位置を移したがるのが近代の歐洲の學者の何時もの癖であるがロバートソンも亦總て之等の島はベンガル灣内のアダマンやニコバル等に當てるのが正しいとしてゐる。それから此のインスレ・サチロールムが日本なら大變なことだ。さうすれば例の神話にある半身半山羊の神が住んでゐるところである。これは厭やなことは恐ろしい色慾を表徴することになつてゐる。

インスレ・マニオーラは今日の比律賓の首府マニラに音が似てゐるところから呂宋島に當てる人もあるが、之れは滑稽な誤りである。兎角かういふ間違が『過去の科學』を調べるに當つて行はれ易いものである。或る時代の科學を調べるには、その時代の前後の科學を咀嚼し、その時代の思想を理解し、それ等の思想や科學の目から或る一定の調べようとする時代の科學を窮つて然る後ちに現代の科學に對比すれば現代人に取つて始めて意味ある『過去の科學』となるものであらう。扨てインスレ・マニオーラはケロソネスス・アウレエ——黄金の半島の意味で、今日のマラツカ半島——から約十五度も西方に置かれてゐることが分つてゐるのだから今日の比律賓でないことは言ふまでもないことである。それに希臘の學者は當時世界に四つの主な半島をよく知つてゐた。ダルダネルスからボスボルスに掛けたバルカンの一角を

ケロソネスス・トラキアといひ、クリミア半島をケロソネスス・タウリカといひ、丁抹のジュトランド半島をケロソネスス・キンブリカといひ、それから前述のマラッカ半島即ちアウレア半島とである。斯く著名であつた、切言すれば古代の地圖には印度半島よりも大きく描かれてゐるのが常であるところのマラッカ半島に附帶して書かれてあるインスレ・マニオーラがマラッカ半島の東北に間違はれる筈がない。

タプロバナに關して是非考へなければならないものに希臘時代に世界史を作つて有名たシヽリアのヂオドーロスの『ヤンブロスの島』といふのがある。希臘學の復活者として名高いウキッテンブルグの古典學者ラウレント・ロードマン(一五四六―一六〇六)に依ると『ヤンブロスの島』はタプロバナに過ぎない。ヂオドーロスの『ヤンブロスの島』を通して日本を見ると次のやうなことが出てゐる。

ヤンブロスといふ希臘の或商人がアラビアの砂漠を横ぎつて香料の産する地方へ行かうとする途中仲間の者と共に追剝の手に捕へられてしまつた。始めは牧童などに使はれてゐたが後ちには「此泥棒達の郷國エチオピアに連れて行かれた。エチオピアには昔から、二人の異人を神に捧げて國家の清福を祈るといふ傳説が行はれてゐたから早速此の希臘人を國家の贖罪の犧牲に用ひた。『汝等は何處までも進んで行けば屹度或る島に行き當る、そこには極めて柔和な住民がゐて、其處に住むのは汝等に取つて此上もない幸福であらう。恙なく汝等の旅が果せればエチオピアは正に六百年間は安泰で繁榮する。海が辛いとか島が見付からぬとか言つて歸つてども來ようものなら汝等は國家の叛逆者、瀆神者として酷い罰を與へられるものと思へ。若しさうなれば致方もないから吾々は岸邊に出て、澤山の犧牲を神に供へ、嚴かな祭禮を行つて神に謝罪するより外途があるまい。』といふのでヤンブロスともう一人の男は木の葉舟に乘せられ六ケ月の食料を貰つて大洋のたゞ中へ遙かに追ひ出された。

此二人は四ヶ月の間恐ろしい湖に引廻はされ命も消え〳〵になつて、と或る島に辿り着いたが、之れを見た島の人達は直ぐ大勢助けにやつて來た。陸に上ると島人等は此二人を取卷いて、その企圖の壯大なことゝ搾けなかつた勇氣とを褒めたゝへ、何くれとなく親切に世話を燒いてくれた。此島人は未だ嘗て、此二人が見たことも聞いたこともない程風俗習慣が變つてゐた許りでなく、その體つきさへ異つてゐるのであつた。脊は何れも同じ位に揃つてゐて、凡そ六尺よりも稍高い。骨は曲まりまた元の位置に歸ること筋肉と同じだ。此人達は如何にもか弱さうに見えるけれどもその筋肉の强いことは吾々とは丸で比べ物にならぬ、一度手に握つたものは吾々にはどうしても取り外すことは出來ぬ。毛は頭と眉と睫とそれから一寸の髮があるばかりで、體の他の部分は肌の理が誠に細やかに滑かで唯一本のうぶ毛さへ認めることが出來ない。顏立は實に立派で身體の釣合も見事に品がよく出來てる。耳は吾々のよりは少しく立つてゐるから中のひだが見える。舌はまた不思議であつて、一部自然的に一部人工的に舌の尖きが縱てに二つにさけてゐる。之れが爲めに凡ての音や綴も容易に發音することが出來るばかりではなく鳥の歌や獸の叫びを巧みに眞似る。更に妙なことには同時に二人の人と話しをして聊かも混同することがない。

此島は氣候が何時も極めて溫和であつて、暑過ぎるといふこともなければ、寒過ぎるといふこともない。とはの小春びよりが絕えず續く、ホメロスの歌ふフエアシアの島と變りはない。

此の土に豐かに生ふる妙へなるみのりの
とり入れも未だ果てぬうちに、
又た新たなるみのり來る
よろこびぞ簇がる。

年中夜晝の長さが等しく、太陽は丁度頭の上に來るから眞晝には影がない。住民は凡そ數百の部落を作してゐるが氣候と地味とがいゝから別に耕作はしないでも必要なものは有り餘る。此島には殊に一種の禾本が澤山に生へる、その實は湯に漬けて極めて上手に捏ねて大變にうまい麵麭を作る。溫い泉が澤山あつて容易には冷えない、娛樂にもなるし治療にもなる。冷い泉は飲料には此上もなくまた極めて衛生的である。住民はあらゆる學問を心得てゐるし、技藝にも甚だ堪能である、占星術は殊に重んぜられてゐる。七つの文字があつて各々異つた四つの位置を示すから結局二十八の文字があることになる。吾々のやうに右から左へ書かずに上から下へ書き降す。壽命は隨分長く通例百五十才位まで生きるが、病氣にはあまり罹らぬ。片輪の者は嚴かな掟に依つてのけられてしまふ。百五十才になれば自ら喜んで死に赴く、その死に方は面白い。此島には特有の草が二種類あるが、その草の上に寢ると深い眠りに陷つたまゝ命の焔は自然と消える。結婚といふ制度は此島には存在してない、女は凡て共同であつて、生れた子供は誰れのでも分け距てなしに一樣に可愛がられてゐる。子供の方も母の方も決して妬みの感情を持たぬ。此島には一種の大きい鳥が飼養されてゐる。子供をその脊に乘せると鳥は急に飛び立つ、それにも驚かないやうな子供は此社會の人は採用して育てるが、戰くやうな子供は用捨なく捨てられる、之れは一生涯中に起るべきいろんな困難にも凹垂れぬ丈けの勇氣のない奴は育てる甲斐もないと考へられるからである。年長者が此社會の長で、總ての人は之れに服する。百五十歲になれば死ぬことになつてゐるから、そのあとは次の年長者が頭となる。頭は全く王樣の位置を占めてゐる。海は波も高く干滿の差も大きいけれども鹽氣は少い。此島で見る星は吾々の國で見る星とは可なり異る。此國には七つの略々大さの同じ島があるが何れも風習も同じで、また同一の制度が行はれてゐる。いろ／＼の鳥を獵り、多くの種類の魚を漁る外木々にはあらゆる美味の果實を結び、地には潤澤の實を産するにも拘らず、島人は必要以外には決して無駄使ひはしない。此島には

蛇がゐるがその肉は極めて美味であつて食用に供せられる。衣服は草の皮から紡いだもので大變手ざわりがいゝ、之れに種々の采りを施すが仲にも貝類から採つた紫さへもある。生活の樣式は誠に正しく整つてゐて、毎日單一のものを食ふ譯ではない、時には鳥、時には肴、時には穀菜果物の類へといつた次第である。社會に必要な勞作例へば漁りとかその他の公共の勞役は各人が分擔して之れに從ふ、唯だ老人丈けは勞はられる。彼等は大空や星辰などの天體を崇める、殊に太陽を尊ぶ。彼等の祭祈は太陽に祈り太陽を讃ふ。島は凡て太陽に捧げられてゐるし、彼等自分さへも悉く太陽に捧げられてゐる。

ヤンブロスと相手の男とは七年も此島に暮した後ち、性根のよくないことゝ行儀の惡いことゝで島人に厭かれて、多くの食料を貰つて此島から追放されてしまつた。四ケ月間も波間に漂うた揚げ句、印度の或る渚に難破した。相手の男は死んだがヤンブロス丈けは助かつて印度の內地に這入つて行くと、土地の人はこれを王樣の前へ連れて行つた、王樣は希臘人が好きであつたから保護を與へて幸にも故國へ歸して與れた。

これが『ヤンブロスの島』と呼ばれるタプロバの輪廓である。赤道の下にあるやうに書いてある癖に常に秋の氣候だと言つてゐることや舌が縦にさけてゐることなどは仲々分り兼ねる。タプロバナを溫帶として記載しても尙ほ太陽が頭の上にあるとか大熊星が見えないとか兎角に赤道の方にしたがるのは常に古いものに書かれてゐるところである。之れはどうしてもいろ〳〵の島の話が一つになつたことゝ、それから少くもタプロバナへは一度は赤道を通つて行つたといふやうに考へるより外に致方がない。『ヤンブロスの島』のことでどうしても日本に當て兼ねる所も多いが、また如何にもぴつたりと來る節々もないではない。骨が疊まるといふのは跪坐の自由に外あるまいし、毛の少いこと、肌の理めの細かいこと、耳殼の開いてゐることなどはどうしても西洋人でもなければ黑人でもない、日本人でなければ他のモンゴリ

アンでなければならない。溫泉の多いことや太陽崇拜などは隨分面白いし、禾木から糧を捋るところなどは矢張り豐葦原の瑞穗の國を思はせる。婚姻の制の無いことなどはそのまゝに讀めばおかしなことであつて、人類の道德がそこまで進むには未だ數千年の時では足るまい。然し之れを單に數多の家族が一緒に住んでゐる團欒とも見れば見られぬこともない。それからどうやら假名文字なども有るやうだが、之れを書いたシヽリアのヂオドーロスはケーザル時代の人だから日本にその時本當に假名があつたかどうかは知らない。之等の個々のことに就ての意見は見る人の自由に屬する。私はもう附會には努力しようとしない、唯ボーロに依つてのみ日本の存在が西國の人々に始めて知られたとする人々の蒙を解く丈けに止める。

タプロバナそのものに就ての古代地理的の研究は日本とは全く關係なしに別個の問題としても興味のあることであるが、今茲には日本がその中に含まれてゐるか否か、若しミユレステルのいふやうに含まれてゐるなら何ういふ風にその中に現はれてゐるかといふのが眼目である。固よりタプロバナを以て全然日本を代表させることや、東洋南洋印度洋中に今日吾人の知つてゐる或る唯一つの島にのみ當て嵌めることは甚だ困難である。それはどうしても二種の全く異つた性質の事柄がタプロバナの中に取扱はれてゐるからである、一は天堂であり、一は瘴癘の地であるし、一は溫帶の地であり、一は燒土の巷である。いろ〱の古い書き物を考證して見ると高砂か蓬萊の島といつたやうに、要するにいろ〱の島のことが混然として唯一のタプロバナといふ名で呼ばれたものと認めなければならぬ。紀元前と雖も地方〱に於ては部分的の交通はあつたらうし、それに依つての見聞が時間と空間との隔りに依つて樣々に姿を替へたり、一部は本當のことが織込まれたりして遙かに遠い所に傳へられたものに相違ない、だから書いた人に依り、時代に依つて全く別のことが出て來たのも無理はない。此理由で本當の吾々の國のことが上古の時代に於ても朝鮮、支那南洋から印度

へ傳へられ、更にペルシヤ、アラビヤ人の口から耳へ、耳から口へと傳へられて希臘派の學者の筆に上つたらうといふのも大した無理なしに推定することが出來る。

セバスチアン・ミユンステルの賢明な考察に對して自分は甚だ敬意を表し、彼れの古ぼけた一葉の地圖が今日殘つてゐてくれて同胞に之れを示し得ることを限りなく喜ぶ。此の『古い日本』のタブロバナに就て更に古書の模索を續けるのも骨董としては仲々味のある道樂であらうと思ふ。

古い世界に今新しく生れ出た此の美しい日本に自分は『手宰花』といふ優しい名を捧げる。（一九二五、八、一）

歐米庭球界の印象

福田雅之助

偶然とも言はるべき事が時には人の一生に齎らされる。私の硬球の生涯もこんな偶然から生れたもの丶一つであると思ふ。今から日本選手權を獲た當時の事を追憶して見るとほんとうに不思議位に思はれるのである、淸水選手が華々しく歸朝された時など私のテニスは實に幼稚で、そしてテニスの根本的の事すら解らなかつた位であつたと今に思ふ、熊谷選手が日本のテニスを世界に紹介されて歸られてから親しくその教へに接して漸くテニスの原則位を會得する様になつたと思はれる。輕井澤でジヤパン・アドヴアーダイザーが、福田がアメリカのコートへ修行に出掛けると言ふあられもない噂を立てたのを自分はオカシイ程に思ふて居たのにそれが實現されたのも亦一つの偶然が致す處であつたと思ふ。熊谷淸水の兩先輩の名聲が世界の球界に餘りに強い印象とそして好感を與へて居るだけに名も知れない自分が渡米した事に對しては隨分苦しいものがあつたと今でも自分は思ふのである。開拓者には何人にも解らない血みどれになる程の苦心努力があると思ふが又一方それから得た自分が始めて作り上げたものに對する强大の歡喜に據つて寧ろその苦痛は消し去られ様と思ふ。然しその開拓者の後を繼いで行くものはその先行者が爲した事の量と質とが善ければ善い程廣く、深ければ深い程それを守つてそしてそれを一層善く廣くそして深く養ひ上げて行かねば先輩に對しても濟まぬし自分としても左様せねばならないと思ふだけに一層に苦しい立場にあると思ふ。であるから私の様な立場に立つたものとしては寧ろ忠實に自分を强く思ふよりも却つて今まで爲された事に對して良くそれを守つて行く主義に從ふて行つた方が或意味から云ふての成功であつたらうとまでに考へられるのである。

元々自分のテニスは長い間の軟球に據つて得られた經驗から作り上げられたそれであるから軟球の影響と云ふものが色濃く

握つて居て、硬球を始めから始めた者がその當時見、そしてそれを批評したならば必ず隨分な惡い處を含んで居たものであつたらうと思はれる。それであるから硬球を始めてボツ／＼テニスの本等に據つて硬球の妙を尋ね度いと研究し出したもの丶自分の長い間養はれた環境や習慣が實に力強い働きを爲して世界のテニスを味をうとしても往々にして所謂軟球に近いテニスのフォームを持つて居る人のテニスに引きつけられてそれに近くないものは如何しても諒解出來ぬ位の貧しい智識しか持つて居なかつたのである。

外に言葉に變へて言へば自分に近いものが善くてテニスと云ふ立場から考へての善いフォーム等の事は一向氣が着かなかつたのである。

此事は生きて行く上に於て常に遭遇する問題であるが自分に近いもの、近寄り易いもの丶みが善いものでなく自分からは全然外の方面思ひがけない方にもつと善いものがある事を知らなければなるまいと思ふ。それにしては自分と云ふものを一方空虚にして他を廣く考へ見る事と又一方に思ひ掛けない善いものを諒解し得る程に自分を築き上げねばなるまいと思ふ。私は井の中の蛙であつたのであつた。日本のテニスしか解し得ず味ひ得なかつたのである。それだから私は私が渡米して自分のテニスを一層強くするには誰れのフォームを研究しそしてそれを自分に當て篏めたらよいだろうと言ふ事に對しては一考もなく自分等に近いアメリカのジョンストンであつたのであつた。自分のテニスのメカミ・ジョンストンに在つたのであつた。私が桑港に着いた時はジョンストンは世界選手權を獲得し樣と勇志を抱いて既に東に向ふて出發した後であつたので不幸にして最初の希望は滿されなかつた。私の日本を去つたのは大正十二年の櫻の散り初め樣とした四月の十五日であつた。春洋丸が廣い海原を無事に旭の輝く金門港に入つたのは晴々しい五月の一日であつた。清水氏の電報に據つて早速紐育に向け長いそして最も氣苦勞だつた汽車の旅を續けて紐育へ着き、五月九日には最うワシントンの近くの有名なチエビーチエーヅ倶樂部の招待に據つて長途の疲れを療す暇すらなかつたのであつた。私は前に世界の有名なテニスプレヤースに親しく接したのであつた。テルデンが晴々しい笑を以つて迎へて呉れた事は今尙昨日の新しい事の樣に感ぜられる。

私の一番好きなプレヤーウイリアムスの溫顏に接したのもライラツクが晴々しい香氣を五月の空に漲らした其時であつた。學者肌の落着味のある四角の顏したウオシユバーン。さては自分のパートナーとなつて呉れた年こそ若けれテニスに於ては旣

に老大家の城に入るリチャドソン。其の感じを與へる慓悍の顏の持主であるマニエルアロンソ等は皆此フレンドリー、インビテーション、トーナメントに據つて紹介された人々であつた。

全ての物が生き生きとした空氣の中にその喜を胸一杯味ふて居る樣な五月であつたが、さうして私も外國へ來て間がないとしても心から嬉しくテニスも案外の成績を示しテルデン、ハーデイ組を破り、ファイナルでウイリアムス、ウオシユバーンに對して六―三、六―八、五―七、三―六の好スコアーを殘して惜敗した程で自分の最初のテニスとしては頗る滿足であつたし多くの名聲を持つて居る人々に逢ふた事だけでも嬉しい事の一つであつた。ホワイトハウスにテニスに招かれた事も私の生涯に取つて美しい語り草の一つであると思ふ。

テルデンの模範ゲームに對しての自分の印象の一端は彼れが恐ろしい「餘裕」を持つて居ると記してあるし、指の一本位は何の障りもないらしいと洩してあるだけで眞の彼のテニス技に觸れて居ない。此トーナメント後早速紐育へ歸りニユーヨーク近くのトーナメント二三に出場したが差して語るに足るものはないとしても、始めての芝生のコートに於てオレンヂの試合に優勝した事が私のアメリカのテニスの生涯に於て誇るに足らないさゝやかな歴史の中の最も樂しかつたものであつた。それ程に私のテニスの語り草はないのである。メトロポリタン、クレイコート、チャンピョンシップに柏尾君と組んで優勝し、それから直ぐ吾々はカナダへのデビスカップの旅へ出て行つたのである。

プロビデンスに於て私に取つて一つの忘れられない事が起つて來たと云ふのはそこで私は親しくジョンストンのスロー、モーション、ピクチュアーを見た事であつた。そしてそれに據つて私が從來爲して來たテニスの一部分に明らかに改革すべき處を發見したのはバックスウイングであつた。それまではバックスウイングと云ふ樣の事に對する考へすら起らぬ程であつたのに、此活動に據つてジョンストンのそれが吾々のそれと全然處方を異にして居て、彼れのは前方から廻して殆んど完全に近い圓を畫きつゝボールに當たるスウイングであるに反し私の爲して居た處のものはラケットを下げてそれを直ちに後方に引いてその引き切つた時一度その運動を靜止に於て再びボールに對しての運動を開始する樣になり、彼れのは靜止なくして直ちにボールに當たる事になるし只ラケットを振つて見てさへも前方から廻した方が力強いスウイングが出來る事は明らかである事を經驗したのである。ジョンストンのタイミングの善い事も亦此處に歸着して居る事を思ひ、先づ此事から始むべしと思ひプロビデンスのトーナメント後直ちにその事の實行に入り次のボス

トンのトーナメントにこれでやつて見た處が日淺くして馴れない爲めに慘敗したのであつた。

ボストンに於て私は私のアメリカ生活中最も麗しい思ひ出の一つを持つて居る。それは私の好きなエマソンの墓と家とをコンコードに音訪れた事であつた。その日は七月廿一日で晴々しい日の朝廿哩を獨りタキシイを驅つてコンコードを訪れる。スリイピイホローの廣い墓地の靜寂の裡松籟の豐かな眺望の開けた小高い丘の上にエマソンの自然のまゝの大理石の墓は横はつて居る。

アメリカの生んだ少なくとも偉人の獨りである彼れは永眠の眠りを靜寂の裡に眠つて居る。人生の旅は短かいと憶ふ。然し魂の旅は遠い旅を何處までもする。そしてそれは深く廣い。永遠から永劫に流れて行く時の流れのそれの樣に魂の旅は何處までも續く。それを受け入れる心が廣ければ廣い程大きければ大きい程偉人の殘した仕事は大きくも廣くも深くもなるのである、彷徊去るに偲びざるものを感じながら彼の哲人が朝夕を送り迎へし住家へと向ふ。五月來れば美しい花と床しい香りを放つライラックの一株が玄關の側にある。盛夏を飾る青葉を通して見た家の白いペンキの色が光つて居た。庭前の納屋を離れて雜草の生へた野原樣の處へ續いで居る。恐らく花につけ月の夕彼の詩人が瞑想に耽つた處かと思ふと懐しさに堪へざるものがあつた。ホーソーンのウエイサイドインを見てボストンに歸る。時計で有名のウオルサムの町はその途上にある。これをしも清遊と云ひ度い、今にして見れば忘れ難い美しい憶ひ出である。

斯くして東洋の一無名のテニスプレヤーが未知の崇拜者に憧憬れて居る間に偉大なジヨンストンはウインブレドンに於て最後の世界選手權を獲得して世界のテニスフアンにその波動を與へて居た。一方デ戰を目前に控へた私は先づそれに備へる爲めに從來の自分のテニスに返して、理想の實行をデ戰後に廻す事にして只管對カナダ戰に對して努力したかひがあつて、思ふたよりも好成績を納めて最初のデ戰は美事日本の得る處となつたのであつた。

カナダは私に對して善い印象とそして美しい想ひ出草を殘して呉れた。あの旅は思ひ起す毎に樂しさが胸に蘇つて來る。涼しいモニトリオルを去つてミシガン湖畔シカゴに濠洲と相對した。流石はアンダソンと思はれる程に彼れの熱球の速度は素晴らしいものであつた。ホークスのサーヴイスに困却して清水君を助けて日本を勝利に導くだけの素質が私には養はれて居なかつた。濠洲は勝つた。そして今から思へば私のテニスもあの時が一番頂上に達して、或程度までに世界のプレヤーに對して戰ひ

得るだけの技倆を持つて居てそれを發揮し得たのだつた。何故ならその冬に思ひ就いて斷然としてテニスを變更してしまふたから。

盛夏も逝かんとする八月廿七日デビスカップの練習を見にウエストサイド、テニスクラブへ行く。テルデンとジョンストンの練習は呆氣ない程無雜作であつた。ジョンストンに紹介されて望んで止まなかつた彼れのテニスを親しく見る、「恐ろしいスピードだ。バックは僕のに似て居る。嚴肅とも云ふべき態度。而もそのスマイルは晴やかだ」と日記に記してある。その後自分はジョンストンに親しく接してからストロークに對して大分迷ふて居る事が記されてある。殊に問題とされて居るものは重にバックスウイングであつて、グラウンドストロークに對してはストレートのスウイングも可であるが然しハーフヴオレイ等に對する場合は前から廻す事は絕對的に必要であると云ふ考へを招く樣になつて居た。

三日の後には既にジョンストンはアンダソンにフオレストヒルスで破れて居た。最も敬望して居たジョンストンが私が見た最初の試合に破れた事は自分に取つて素敵に淋しいものであつた。私がその試合を見ての感じは次の樣であつた。

戰ひに臨んであれ程眞劍な態度である人を自分は知らない。凄まじい勢を以つて撲り出さんとする有名のフオアーハンド。全身の力は總つて球に入る。完全なる「時」の諧和と美事なる「技」の諧調。進取の氣象。彼れのテニスは攻擊的積極的であるそこに彼れのテニスの美事さとそして尊いスポーツマンの眞髓であるのである。彼れのテニスは全ゆる方面から見て立派である。そして最も理想的のスポーツマンであり人格者である。テルデンのテニスは驚異である。技の粹の粹なるものである。あんなショットが出るかと實際驚く程である」

九月二日はチャレンヂラウンドの第三日であつた。然し最う既にその日は東京橫濱の大震災が新聞紙上に報じられてテニスに對する氣分などは何處かへ行つてしまふたのであつた。三日には三越白木丸ビル帝劇海上ビル東京驛等は灰燼に歸したとしてあつた。不安の氣に溢れて居たがこう遠く離れては一向仕方がないと諦めたが、然し母や妹や弟やそして親しい友達が皆死んでしまふて天上天下只獨りになつてしまふたのではないかとまで考へる程感傷的の氣分に陷つてしまふた事もあつた。然し一方東京が燒け盡されてしふては日本の一大事であるとも考へて日本倶樂部へ何事かもつとしつかりした事を聽き度いと集つて來る人々の顏色は皆一樣に惱ましさで滿されて只々心配して居るだけであつた。

一方アメリカは日本救濟に對して目覺ましい活動を開始し目のあたり見た私は涙ぐましさを感じた程であつた。故國の慘事を強く思ふて吾々はナショナルチャンピョンシップ參加を遠慮して自分等に出來る事があつたらとアメリカ人の贊成と援助とを得て模範試合を諸所に催して故國の急に一微の力を爲した事を今より思ひ返しても嬉しいものがある、テルデンは善く盡力して呉れた事を未だに感謝して居る次第である。大衝動に據つて不安にその日〳〵を送つて居る内にテニスのシーズンは既に過ぎ去つてしまふたのであつた。

着米早々として自分も何物かを掴んで歸り度いと云ふ心の緊張を持つて居たので先此冬は英語を勉強し様と思ひつき寧ろ老年に近い女の人に教はる事にして毎日の様に熱心に通ふたが、會話の點に於ては自分としても解つて居るしこれ程言ふたら通じそうなと思はれる程の事もアクセントの爲めに通じなかつたりしてつく〴〵自分の英語なる事に悲觀した事もあつた。良くその人の男の子に發音を教はつたりして兎も角も三ケ月程は熱心に通ふた。思想の方に於ては此叔母さんに負けないと思ふて居ても言葉が自由に通じないので良く色々の事で自分が負けてしまふた事を憶へて居る。日本人が特徴の様にして持つて居る發音の惡いのはBとVとの區別のない事とRの本當の發音が出來ない事だと常に牛耳られてRを續けさまに發音するなどを良くやらされて閉口したものだつた。此叔母さんは元は立派な生活を贅府でして居た人で女中を何人か使ふて居て自分は隨分時間を持つて居たらしくて文學書を澤山讀んだだけに文學には大分理解を持つて居て文學の好きな私には殊に面白かつた。色々の事を聽いて見ると夫が死んでから夫の兄弟等が家を取つてしまふたらしくその叔母さんには何も殘して呉れないので三人の未だ若い子供等を自分獨りの痩せ腕で養ふて行くので大分な貧困と苦勞を嘗めたらしく、その大きな息子は既に結婚して居るが別居して居るし娘の大きのも結婚はして居るが一緒に居ない様なわけで、日本の家庭を味ふて居る私には親と子及家庭と云ふ事に對しての別の考へを與へられて異様に感じたものであつた。親が年老いて苦勞した悲慘の狀態を見ると日本の様な家庭の眞の温味を思はざるを得なくて氣の毒に堪へなかつた。

紐育の冬は寒いが然し防寒の設備の完全な事に於ては比較にならない程良いので流石の寒がり屋も一向平氣で寧ろ樂しい冬を送る事が出來た。活動は餘り好きでなしその上に來たてだつたので案内が良く解らないしするのでジンバリストをその冬に聽いて始めて世界的の音樂家の風貌に接してその喜を味ひ再び越へて正月二日に天才的のハイヘッツに接した時は紐育に居る

事の有り難さをつく〴〵感じた。專ら家に引き込んで好きな讀書に長い冬の夜の徒然を慰さめたのであつた。幸にしてホームシックを起さなかつた事はテニスして居るために身體の强健からその病のつけ入る隙がなかつたのだと考へる。讀書と云ふ自分の趣味が兎角淋しさを感ずる異境の生活を豊かにして吳れ淋しさを慰さめて吳れた事を思ふ。私は人生を豊富にしそしてその生活に潤を與へその人格に光りを投げ與へる事に於て偉人に個人的に全部の人が接し得られない關係からして讀書は人生に必要の一事であると信ずるものである。

此冬は私に取つては重大な冬であつた事を憶ふ。色々の變化が起る動機と云ふものは實にふとした事が原因するものである私が日本を立つ時からあれ程憧憬し崇拜して來たジヨンストンのテニスから自分のテニスが離れて行かうとは考へられなかつた。然し自分は知らず知らずの內にスウイングを改良すべしと思ふ事から起つて如何も斜のグリツプに傾いて來てしまふたのであつた。

何人も靑年期に於ては理想家になる樣に自分もその傾向の著しく濃い男であるのである。靑年は顧みる過去の美しさを持つては居ないが然し許された「時」の流れ洋々たる將來が許されて居る。玆に彼れの向ふて進むべき白路が橫はつて居るのである靑年は創造に生きる、只管理想に對して向上し樣とする元氣を持つて居る。そこに靑年の尊い生命が波打つて居るのではないかと思ふ。現實を忘れ果てゝしまふ程の稚氣があればこそ理想に向ふて美しい努力を試み樣とするのである。私のテニスは決してあの時に行き詰つて居たと云ふ樣な事はなくあれを改善して行く時代にあつたのであると思ふ。

何故自分が自分の相當に結果を納めて來たテニスを斷然捨て去つてしふたかと言ふ事に對して二つの重大なる理由があると思ふ。

第一にイースタングリツプの方がウエスターングリツプに比較して合理的である事であつて而も色々の特徵を比較研究して見るとイースターングリツプの方がベターであると云ふ事である。

第二の理由は自分だけで信じた事だけれど私は元のまゝのテニスを續けて行つたとしても決して熊谷淸水の兩先輩に次ぐテニスプレヤーになり得ないと信じて熊谷淸水は既に世界的に日本のテニスを紹介して居るが果して誰れがテニス界にイースターングリツプ及ウエスターングリツプの二大潮流のある事を知りたしてそれを日本に紹介し研究するかを考へた場合にそれが自分の使命であると云ふ樣に自分には感ぜられたのである。自

分ならば此事は出來得る樣に思ふたし日本のテニス界としても一方のテニスが非常に良く研究され諒解されて居る事に對して他方のテニスに對して一顧もしないと云ふ事は日本のテニスの發達を害するものだと信ずるものである。盾の兩面を研究する事に據つて益その盾の反面宛の特徴缺點を知り得ると同時にその盾の眞價が發揮されるものであると思ふ。

それであるから私が元のウエスターングリップを捨てたとしてもそれは決して悪いものではないのであるが然し私としては色々の事を犠牲にしてもより善いと思ふものに向ふて進み度かつたが爲めに斷然とそれを捨てゝしまふたのである。私の樣なデ戰と云ふ大試練を控へて居るものに對してそしてそれから充分の時間と云ふものが與へて居られないものに對して私の爲した事は寧ろ好ましくない事で主義の上から賛成するが然し實行の方法に於て最う少し漸次的であつたなら卽ち部分的に改良して行つたら最つと善い結果を得たろうにと或人は言ひ或人は君のフオアーは絕體に保存して於てそしてバックとネットプレイの研究に進んだらと言ひ又他の人は元のテニスは少しも悪くないのであるからそれを變へない方が善いと忠告して呉れた人もあつた、色々の點を結合して見ると結局は私が爲樣とした事が何人からも受け入れなかつた事と或る面に於ては私の爲した事を輕視する人さへあつたのであつた。私は私のテニスを變化した事に對して一つの遺憾とした處はそれを始めた際に少しそれを輕視して自分獨りの力にのみ信賴してプロを採るとか云ふ樣の事に思ひ到らなかつた事が重大の失策であつたと思ふ。その事を他にしては私として私が最も善いと信じた道に向ふて進んだのであるから假令それが失敗に歸したからとて決して失望する事はないと思ふのである。人生は決して結果ではなく人生の價値はその努力手段に在ると信ずるものである。

前に於て結果を重視する人と經過努力を價値あるものだと思ふ人とに據つて差異は生じて來るのである。私は私のテニスを變更した事に對して決して安閑としては居なかつたと思ふ。先づ自分のテニスを築き上げんが爲めに恐らく此冬は考へに考へ苦心に苦心を重ねて先づ第一に理論の方から究め樣と努力したのであつた。

新しい事を始めるには實に勇氣とそして根强い忍耐とが要る事を味ふたのも此事からであつた。斯くして苦しんで居る内に新しい希望と雄圖を抱いて原田君はアメリカにやつて來たのであつた。オリンピック行を命ぜられて二人して元氣を持つて巨船レヴイアサンに身を寄せて大西洋の波に接したのは一九二四年五月廿四日であつた。私は大洋の旅は心から喜を感ずる程好

食である。二人して實に良く食ふて相互にその健啖を譲り合ふたものであつた。大洋の美はその色彩にあると思はれる程に千變萬化の色に據つて海は飾られる。ロンドンは住んで見たい都である、然し汚い都である。氣候の關係から色々の事が日本人に諒解し易い樣に感じられた。英國人が片苦しい樣な處があるのは氣候に影響されて居る事が非常に大であつてアメリカの人間が晴々しい處が多くあるのはあの常に晴々した氣候に據つて人間の性質が作られると思ふのである。

環境は人間を作るに實に力強い働きを爲して居ると思はれた自分は渡米してアメリカに感謝して良い事を一つ學び得たと思ふのは人生に對して常に「明るい」歩み方を敎へられたと云ふ事である。人生に二つの見界卽明るい見方とそして暗い見方があるとしたならば私は內容もある明るい歩み方を採り度いと思ふものである、私が思ふにこれは基督敎の影響が多く日本人が敎れかと云へば全ての物事を消極化し樣とする傾向は佛敎から來て居るのではないかと思ふのである。落着きのある明るい歩み方を持つて進み度いと思ふものである。

ロンドンにて印度に雌伏して充實した技術を持つて征途に上つて來た岡本君を加へて三人ウインブレドンに何物かを爲そうと各々努力したが三人相寄つて爲したテニスは一滴水が全英を震憾した一激動にも及ばなかつた事を思ふと淋しさを感ぜざるを得なかつた。岡本君がローハンプトンの覇權を握つただけで當時降り續けた雨の中に吾々のテニスは煙り去つてしまふた。雨の中を衝いてアービングに據つて美しく畫かれ紹介されて居たウエストミンスターアベイに詣でゝポエットコーナーに英詩人の偉大を偲びナショナルギャラリー及テートギャラリーに名畫を見た事は永久に消へ去り難い懷しい印象を私に殘した。テニスに忙しい吾々は名所を探る餘裕を持つて居なかつた事は殘念であつたが然し一方止むを得ない事である。

英國のテニスとアメリカのテニスが如何して斯う現在に於て差を生じたかと思ふにそれは一つに國民の氣象に原因して居るのであると思ふ。英國は旣に老大國の氣象がテニスに於ても漲つて居るし英米のプレヤーを比較して見ても英には比較的に年輩者が多く米はこれに反して意氣の溢れる靑年に據つてテニス界が賑かされて居る。前に於てテニスのプレイ振りに於ても甚だしい差を生じ一方は堅實味のみに重きが置かれるに反して一方は潑溂味が充溢して積極的なテニス振りである。或意味に於て「若さ」は力であると思ふ。英國が現在の樣な狀態を續けて行つてネットプレイ及サーヴイス等の攻擊的武器に一革新を與へない限りは英國のテニスは再び黃金時代を作り得ないと思ふ。

或る英國人が洩した樣にアメリカは餘り勝敗を氣にして眞劍になり過ぎるから嫌だと云ふたとか此事が英國の一般人の頭に影響して居る事が强く結局テニスはスポーツであるぞと云ふ事に頂きを置く故に勝負は如何でも良くミツクスドダブルスの盛んなる事等を思ふと英國人はテニスをエンジヨーイする事に傾いて居る。然し一方米人は「勝つ」と云ふ事がスポーツの唯一の目的であるぞと云ふ考へが强いから自らテニスプレイにそれが表はれて來て居る。面白い對照だと思ふ。

佛蘭西に渡つて愈々オリンピツクゲームに參加したものゝ原田君だけラストエイトに殘つただけで日本のフアンの期待に添はなかつた事甚だしいと思ふ。旅行して居るものは餘程のハンデキヤツプが付けられて居る事をつくぐ思はせられた。チユーレリイの美しい道ボアデブルーンの素晴らしい公園遠くはベルサイエの人工の美が斯くまで善く自然化されるかと思はれる程の庭園を見て流石に巴里は世界の主都であると感ずる程に美しい都である。ループルにてはモナリサの畫一枚あれば後の畫はなくても善いと思はれた程にその畫の印象は强かつた。ミレイの晩鐘も亦忘れ難いものゝ一つである。有名なオペラでは丁度フアストをやつて居たがあのオペラ座だけで流石は藝術の國であると云ふ事の一端を知り得ると思ふ。友達二人とサンクルーの森に散歩して高い丘の上から將に暮れ逝く巴里の都を眺めた時程樂しい時を送つた事は少ない。フランスの料理はおいしい。ロンドンは實にひどいものだ。

デ戰に間に合はす爲めに岡本原田兩君とオリンピツクに乘つてアメリカに歸つて來たものゝ原田君と二人してエリスアイランドに抑留された時は今から考へれば笑ひ話しの種であるが然し其當時は二人してあの留置場に一夜を明すのかと思ふた時は流石に堪へられなかつただけに夕方許しを得た時は二人共蘇生した思ひであつた。再びカナダと當つてモントリオルへ行く。私は此試合に出場出來なかつた事に對して實に私として得難い經驗を得たと思ふた。自分はテニスを捨て去らうか或は此新しい道を力の限り精進し樣かと云ふ二岐路に立たされて夜も眠り難い煩悶を續けた事があつた。私にも隨分ヴアニテイがあつた事を味ひそして人間は必ずプライドに生きる樣努めなければならないと考へ付いたその結論に到るまで自分はどんなに苦しみそしてどんなにか自分の名聲と云ふ事を望んだらうか。これ位の事が新しくし樣として遂に勇ましく進んで行かれるだらうかと思ふ程私は弱かつた。それ以來私は悶へもし苦しみもし獨りして慰さめ得られない自分の胸中の淋しさを無理に慰さめ樣とし或時は早くテニスのシーヅンが終れかしと祈つた樣な急激の時

もあつたが然し常に自分のテニスの完成に向ふて努力して來た事は事實で今尙その未製品の爲めに苦しみつゝあるのである常に敗戰の悲しみを獨り淋しい胸に味ふて遣る瀬ない思に良く耽つた自分もブルックリンに移つてアメリカの家庭にすつかり吾子の樣にして貰ふてからは其の悲しさは隨分慰さめられたと思ふ。一度信ずると何處までも信ずる事が外國人は強いと思ふたのも此家庭に入つてからであつた。

人を信じ得られない事は淋しい事だが人を信じ得られる人は強い人だと思ふ。キッチンで皆と一緒に食事し夜はラヂオを聽きながらアイスクリームパーテイ等を開いて最後の長い冬も明るく樂しく暮した。最後の冬は美しい良いオペラに有名な音樂家の藝術に接してどんなにか心の喜を味ふたか。別れるに臨んで淋しかつた事は此家庭とそして音樂とオペラとであつた。私が二年有半アメリカに滯在して得た收獲は何かと云へば此通の中に投げ込まれた未製の土器である。私は私のテニスを信賴してアメリカへ期待を以つて送つて下さつた人々に對して實に濟まない事をしたと思ふのであるが然し私と云ふ人を知つて居て吳れる人だつたら此私の我儘を許して吳れるだらうと思ふものである。

私が歸朝して第一に感づいたものは日本のテニスが合理的方面の研究に一歩を踏み出して實行に着手して居る樣に感じたのである。これは誠に喜ばしい現象であると思ふのである。私は天才を養成するには束縛なしに放りばなしにしても良いが然し型と云ふ樣なものの研究から入つて行くのが順當だと思はれる。

過日私が大阪へ行つた時船中に伊藤と云ふ少年と山田と云ふ少年が居て前方は完全なるイースターングリップを採用して美事のフオームで素敵のテニスを爲し後方の少年はウエスターングリップに據つて益々其偉力を發揮して居るのを見て喜に堪へないものがあつた。自分は日本のテニスが旣に玆まで進歩して居るかに驚いた位である。これに據つて今後は益々充實したテニスが日本に表はれると思ふて實際に心から歡喜を感じた。

私は私の努力し樣として居る處は寧ろテニスをこれから始め樣とする人に對して一つのヒントを與へて上げ度いと思ふもので現在名を爲して居るプレヤーは現在のまゝ突進される事を望んで居るものである。グリップは習慣性が強く働くもので絕對的のものでないから日本人にしてもこれを行ひ得るものだと確信するものである。私は決してウエスターングリップの排斥者であると誤解して貰ひ度くないと思ふ此グリップも立派にその効力を世界に示して居るものであるが只自分はより合理的な

ものとしてイ、スターングリップの主唱者であるのであつて此兩二大潮流が日本に良く消化され兩々相俟つて日本のテニスの發達を期した曉により善いより内容の充實したテニスが生れて來るのではないかと云ふ事を思ひ信ずるものである。

私は日本のテニスは既に生れたのだと思ふからこれを育て上げて行くには一方に偏しない正しい道を歩かして行き度いものだと希望して止まないものである。私のテニスは失敗に終つてしまふたのであるが私のテニスの生命は未來に在ると思ふものである、私としてテニス界に出來る樣な事が在つたら喜んで微力を盡し度いしもし私に許されるならジてニヤーのテニスに貢獻し度いものであると云ふ樣な事も思ふて居るものである。

一歩一歩と力強い歩みを以つて進み出した日本のテニスの前途は益々有望でそして多幸である。（一九二五、一二、四、靜夜）

雜詩

中川一政



○

なにも思はず云ふ事を
人々いちいち何か云ふときは
その人如何に思ふやうにならん。

よちよちあるく赤ン坊も
動く氣は失せん。

今は云ふ事廢めにけり。
人ものをたづねても
その人、目は動かせども
舌は永劫に重く動かさず。

○

一寸した景色なれど
枯草が素直に萎れて影を曳き
コンクリートの橋の上に
行く人の顔照り
夕方の風が吹く

この淋しい何でもない景色が
自分はすきなれば

華かな事を願はうとせず
去る者を追はず
一人彩管を友としようよ。

○

よい材料にぶつかり
毎日それに沒頭するより
樂しみはない。
實際それより樂しみはない。
だから諸君考へる事をやめ給へ。
自分が何の爲に人々に
惡い事をしよう。
自分の樂しみは
そんな所にはない。

○

自分は素直な人々を
友としたれば
自分の言葉も素直なり。
イヤと云へば字義通りイヤである
よいと云へば字義通りよいのである。
自分は言葉を構へる必要はない。
だから人々よ
自分の言葉通り自分を解し給へ。

○

自分は人にだまされても
自分を不名譽とは思はない

知らぬ顔してだまされる。
自分はだまされても惡いと思はない
だます人は惡いと思ふだらう。

○

自分はシルクハットを冠る人間ではない。
自分が我姿を想像すれば
麥ワラ帽子をかぶる人間である。
自分がシルクハットをかぶれば
人々が嘲笑ふ前に
自分が嘲笑ふだらう。
自分はどんな帽子をかぶれば似合ふか知つてゐる。
自分はその帽子をかぶりて
人生にいづるのである。

○

自分は絢爛な花は描けず
春の景色を描きても秋に似る、
ほゝえめる人は描けず
貧しき人が描きたし。

自分は王侯とならず
儕族の中に入る
寂然はわが友
自然は我家なるべし。
今自分を觀察すれば
自分とはかくの如き人か。

ペンと鉛筆

——新聞記事の責任について——

廣津和郎

十一月號の本誌で、原田讓二氏が、新聞記事が最近それに携はつてゐる記者諸氏の自覺によつて、好い加減な、無根據な、あやふやなものから、正確なものになりつつあるといふ事を書いてゐられた。

自分はそれを非常に喜ばしい事に思ふ。實際、正確に對する記者諸氏の無神經から、この世の中には隨分迷惑を蒙つてゐる人間が尠くなかつた。それが次第になくなつて來るといふ事は好い事だ。原田氏がさうした方面に深い經驗のある、從つて十分な責任を持つた言葉を以て、記者諸氏の自覺と良心とを語つてゐられるのだから、それに十分信用が持てるし、又原田氏が編輯してゐられる新聞の社會記事には、殊に深い信頼を置く事が出來る。その上は、更に記事の正確を期する以上に、記事の撰擇について神經を働かせてくれたら、我々が希望するやうな新聞が、この日本に生れて來るに相違ない。——記事の撰擇といふ點については、自分は種々な希望を持つてゐる。現今の三面記事と云ふものは、いろいろな點で物足りない。記事の敏速を尊び、それについて各社が競爭するのは、自然の事でもあるし、惡い事ではないし、我々讀者に取つても亦有難い事であるには違ひない。けれども、敏速と正確は有難いが、興味中心のためには、人の不幸も構はずに掲載すると云つたやうな態度は、自分には何よりも一番根本的によくない事に思はれる。これは併し新聞紙ばかりの罪ではない。かうした事は總て相對的なものだから、新聞紙の意見ばかりで、又新聞記者諸氏の意見ばかりで、現今のやうな形式の新聞紙が出來上つたものではない。讀者の興味がどういふ點にあるか、時代感覺がどういふ點にあるかを洞察し得ない新聞は亡びる。從つて敏感な新聞紙はそれを知つてゐる。それだから 今の新聞のやり方は、一方讀者の要求によつて生れ出でてゐるものと云はなければならな

い。が、又讀者――つまり民衆といふものは、或場合には、自分の要求がどういふ點にあるかを、氣がつかづにゐる事があるものだ。さういふ民衆の隱れたる要求に自覺を與へ、はつきりした形を與へて行く指導的な任務も亦新聞にある。それは發見であると同時に又創造だ。それだから新聞は結局、民衆の要求の具體化であると同時に、一方から云へばそれに携はる人々の創造でなければならない。

それだから、新聞が品がなく下等な記事で埋まつてゐるといふ事は、民衆に取つても、新聞にとつても、共に恥辱だ。――が今の場合、自分は新聞に向つて、これだけの事を要求したい。たとひ今のやうな新聞が、讀者の興味と要求とによつて自然に生れたものであつても、讀者――即ち民衆の興味や要求には、未だ民衆の自覺の上にはつきりした形を取らない種類のものが幾らもある。それだから、それ等の民衆の隱れたる興味や要求を洞察するに當つて、その種々の興味や要求の上に、一つの撰擇を施して貰ひたい事だ。民衆の下等な興味や要求に媚ひて貰ひたくない事だ。所謂世の中に受けさえすれば、どんなに下等な事でもお構ひなしに爭つて載せると云つたやうな眞似をして貰ひたくない事だ。それとは反對の品の好い事、下らなくない事に、民衆の興味や要求を誘つていつて貰ひたい事だ。――これを換言すれば、民衆の隱れたる品の好い、下等でない要求や興味に、はつきりした、自覺的な形を與へるといふ事になる。民衆は呆れる程下等な要求や興味を隱れた形で持つてゐると共に、又案外、驚くべき品の好い要求や興味を隱れた形で持つてゐる。それを探り當てて、それにはつきりした、自覺的な形を與へるといふ事は、隨分やり甲斐のある創造的仕事ではないか。

記事の敏速と正確とに腐心するのは好い。併しそれ以上に更に、さうした好い意味での創造的情熱を、新聞に携はる人々に持つて貰ひたい。

原田氏の編輯してゐられる朝日新聞の社會欄の如きは、さうした點でも、他の新聞から較べると、稍理想に近い。載せる記事にもかなり注意が行屆いてゐる。が、自分は今の程度に止まらず、もう一歩進んで貰ひたいと思つてゐる。

△

が、自分が原田氏の前號にかゝれた記事に興味を持ち、此處にこんなことを述べる氣になつたのには、一つの理由がある。といふのは、原田氏の携はつてゐる朝日新聞ではそんなことはないが、他の新聞では、未だに『正確』についての神經も良心もないといふ著しい例を最近見たからだ。そしてそれがために

取返しのつかない損害と不幸とを身に蒙つた人があるといふ顯著な事實を見たからだ。

　といふのは例のダツト氏の問題である。ダツト氏と云つただけでは、解らない讀者があるだらうが、外國語學校講師の印度人ダツト氏が、近頃某新聞の出鱈目な記事に累されて、外國語學校を逐はれる事となつたのである。

　その事件の顛末はかうである。ダツト氏は中年の溫厚な紳士で、昨年文部省から招かれて、外國語學校の印度語、及び英語の講座を受持つために印度からやつて來た。そして本鄉の菊富士ホテルに止宿して、そこから外語に通つてゐたが、生徒にも懷しまれてゐた。ところが、ダツト氏は氏の止宿してゐる家の近くの或賣春婦に誘惑されて、（ダツト氏はそれが賣春婦とは最初は知らなかつたのであるが）大分金員などを捲き上げられてゐた。その賣春婦は一方、自分のさうした賤業を隱して、女學校に通つてゐて、今年卒業したりした。ダツト氏は印度に妻子のある人ではあるが、その日本娘を愛してゐた。——もつとも印度の風習は日本と違つて、三人の妻を持つ事が出來るので、ダツト氏は彼女を妻にしてもいいと考へてゐた。——ところが、ダツト氏はその娘が自分以外の男に賣春行爲をしてゐるといふ事をだんだん知つて來たので、非常に煩悶した。そのダツト氏が煩悶してゐた樣子といふものは、單純であり、正直であつて、いろいろな人間らしい形を示してゐるが、それを詳しく書く事は、あまりに文學者的興味に傾き過ぎるから、今は省く事にするが、兎に角、ダツト氏はその娘の貞操ゆえに大變苦悶してゐた。

　その中、娘は賣春行爲の廉で、K警察の手で先づ檢擧された。それは今から三ケ月餘前の事である。その當時、賣春しながら女學校を卒業した娘といふやうな標題で、都下の或新聞に書かれた。

　その後、今から一ケ月半程前の事であるが、娘は又同じく賣春行爲の廉で、今度は他の警察に檢擧された。その時娘は警察官の前で、まことしやかに、自分が賣春婦になつたのは印最初度人ダツト氏に強姦されて自棄になつたためだといふやうな口から出委せの嘘を云つたのである。

　そこでそこから記事が出て、都下の某々の二つの新聞に、それが大袈裟に、甚だしく誇張を以て書き立てられた。その書き立てられた記事によると、娘は純潔な處女であつたのが、短銃で脅迫されて、たうとうダツト氏のために貞操を蹂躙され、それから自棄的になり、家政が豐でなかつたため、どうせ純潔を失つた以上はどうでもなれと思つて、賣春によつて家を助け始

めたといふのである。

無論この場合『記事の正確』といふ事について、それを書き立てた二つの新聞が（といふよりも、それを書いた記者達が、）良心や神經が全然なかつたとは、自分は云はうとは思はない。その二つの新聞の中、最もダット氏の事を惡しざまに書いたH新聞の記者は、ダット氏を確に訪ねて來てゐる。娘をもダット氏をも、共に訪問して、その各々の云ふところを聽取しようといふ者であつた事は、彼がダット氏を訪ねて來たといふ事實で確に辯解する事は出來る。けれども、殘念な事には、ダット氏とその記者とは互に言葉が流暢には通じ合はなかつたらしい。ダット氏が日本語が解らないのに、その記者は英語が解らなかつたらしい。――そんな事のために、ダット氏には非常な不利益だつた。たうとう新聞に載つた記事は、賣春娘の彼女に都合の好い辯解が主となつて、事實の眞相はすつかり擯磐らされてしまつてゐた。

それに、丁度その時分ダット氏に取つて氣の毒だつたのは、例のリッチ問題で、不良外人といふものが、日本の社會の注目を惹いてゐた。さういふ場合に、記者の頭にも、その社會の注目を惹いてゐる不良外人問題を背景として、この記事を浮き立たせたいと云つたやうな意識が浮いたとしても、（今の新聞の立場として）さう無理な話ではない。それだから外語の講師の外人が、日本の女學生を凌辱したといふ方が、一人の外國人が一人の日本の賣春婦に誘惑されたといふよりも、ずつと記事としての重さがある。いや、さうしてこそ記事になれ、さうでなかつたら記事にもならない。

けれども、記者としては、今の新聞記者式の修養によつて、頭がそんな風に働き、從つて、そんな風に今の新聞記事らしい記事を作り上げてしまつても、現在の新聞の標準からは特に非難は出來ないとしても、併しそのためにダット氏が蒙つた不幸は非常なものだつた。

その新聞記事のために、ダット氏は外國語學校を逐はれる事になつた。自分はそれを聞くと腹が立つたのだ。自分がその當時、ダット氏のために辯解を、その間違つた記事を書いた二つの新聞に投書した事は、或讀者は記憶してゐてくれるかも知れない。自分はダット氏と友人ではないが、同じ菊富士ホテルの止宿人として、事實の眞相をよく知つてゐた。自分ばかりではない。その眞相を知つてゐる人は、同宿人の中に他に幾人もゐる。自分はこの間違つた報導のために、ダット氏の陷つた不幸から、ダット氏がのがれられれば非常に好いと思つた。

若しダット氏に落度があつたとすれば、彼が壯健な中年者と

して、遠い異國に來てゐる孤獨さから。一人の日本娘に近づいたといふだけの事だ。ダット氏は娘を愛してゐたし（娘から誘惑されてゐたのは知らなかつたので）、氏の眞心を示すために、氏としては尠からぬ金員を娘の一家に送つてゐる。金員は結局『金』に過ぎない。『金』なるが故に、或輕さを形式的な道德論者には感じさせるかも知れない。けれども、眞心を示さうとする一つの證據としては、今の世の中で『金』は役立つものだ。そして日本流に云へば『戀人』（或は云ひ方によつては『妾』でも好いかも知れない）、彼の故國の風習に從へば『第二の妻』だと、彼は彼女を考へてゐた。——ところが、それが賣春婦であり、そして警察に擧げられるやうな事になり、そして口から出委せを警官の前で喋つたのだ。

ダット氏は同情されるべきであつて、決して非難されるべき筈のものではなかつたのだ。無論ダット氏が日本娘に近づいたといふ事が、全然の落度でなかつたとは云はれまい。併しこの人間の弱點を眞向から非難出來る人間は、日本の今の社會は無論、世界中の男子の中に、さう澤山ゐるわけのものではない。外國語學校の當局や文部省のお役人諸君は、この孤獨な外國人に、こんな苛酷な處置を取つてゐるが、併し諸君が胸に手を置いて、ダット氏を非難する資格が自分等にあるかどうかを考へて見たら、諸君は恥ぢずにゐられまい。若し又、たとひ諸君が（幸ひにして）內心疚しくなかつたとしても、それだからと云つて、直ちにかうしたダット氏の人間としての弱點を非難し、それに苛酷な處罰を與へてもいいものだと思つたら、それは諸君の人間としての淺薄を曝露し、諸君の人間生活に對する認識の不足を示すものだ。

併し形式的な今の教育家や、文部省あたりに、人間的な氣持で生きてゐる人間がゐる筈がない。新聞に一度出鱈目な記事が載つた以上、たとひダット氏が短銃で脅迫したり、凌辱したりした事が嘘であつても、その娘と關係した事が確である以上は、もう氏を外國語學校から放逐しようと決定した處置を、撤回する事は出來ぬと云ふのだ。

莫迦につける藥はないと俗に云ふが、今のお役人の頭につける藥は、それ以上に見つける事が困難だと云はなければならないではないか。——我々は手を拱いて、長嘆息をするより仕方がないではないか。（唯、最初はダット氏が印度に歸る旅費さへも文部省では出さないと云つてゐたのが、それを出すやうになつただけでも、まあめつけものとして我慢しなければならないのだらう。）

自分が此處で感謝したいのは、讀賣新聞だ。今の新聞の間で

は、同業者の間違ひを突つ込んだり、訂正したりすることは、割にはやらない習慣になつてゐる。同業者の面目をつぶす事は、互に避ける事が、同業者間の風習になり、又道德にもなつて居る。併しそれは同業者間の狹い道德ではあつても、ほんたうの意味での、もつと廣い人間的意味での道德ではない。寧ろ或場合には、その同業者間の遠慮や道德そのものが、新聞の民衆に對する不道德を醸し出させる原因となる。——そういふ場合には、惡き風習を打破つて、敢然として同業者の間違を訂正してくれる新聞があつてもいゝ。ところが、讀賣新聞は、今度の事件に當つて、敢然として、他の二社が間違つて載せた記事を、根柢からくつがへすやうな正確な記事を載せてくれたのだ。ダット氏が誤まれたる報導のために、外語を逐はれる事の不當を、すつかり書いてくれたのだ。その點、自分は同紙の主宰者たる千葉龜雄氏を始め、その他の記者方に厚くお禮を申上げたいと思ふ。

だが、それ等の同情も、それからダット氏を慕ふ外語の學生諸君の同氏留任運動も今や全く徒勞に歸して、ダット氏は十一月十四日の船で、日本を逐はれやうとしてゐる。

▽

『自分は娘と關係がないと云へば、つきり嘘を云へばゆるこれたのです。正直に云つたので、こんな事になつたのです』とダット氏は自分に云つてゐた。明白た事實でも、打消したがためたに、同じ外語を追はれない他の外人講師の例などを、氏は指出した。そして『日本と云ふ國は、解つた嘘をついた方が、正直よりも、却つて赦されス國だ』と結論してゐた。さう云はれても文句がないではないか。

自分は教育とは何であるかといふ事も、この際改めて說きたい氣がする。實際、教育者諸君やお役人諸君が、教育とは何だと心得てゐるのか。——が、そんな事は此處でいくら叫んで見たところで、馬耳東風だらう。

それから自分は又今度の事件で、ダット氏が印度人であつためたに、餘計氣の毒な立場になつた事に、心から同情してゐる。若しこれが英國人であり、佛蘭西人であり、伊太利人であり、獨逸人であり、その他の獨立國の人だつたら、こんな事にはならないだらう。いや、白人であれば、白人と云ふだけだつて、東邦外人達が、辯護の位置に立つだらう。例のリッチの如きでさへも、歐字新聞では辯護しようとしてゐるではないか。ところが氏は印度人だ。英國大使館が氏を保護してゐるべき筈のものだ。が、何とその冷淡なることよ。

それは自分の臆測ではあるけれども、短銃云々の誤報が、その點で隨分氏を累してゐる。印度人は英國の官憲の命令によつて、短銃を持つ事をゆるされてゐない。それは昔琉球人が武器を取上げられてゐたのと丁度同じ事だ。ダット氏が短銃でもつて女を脅迫したといふ虚報は、單にそれだけの意味に止まらず、英國の大使官の神經に餘程障つたらしい。――これは短銃云々が新聞に出ると同時に、氏の友人であつた二三の印度人も、氏のところに訪ねなくなつて來てしまつた。それを讀者よ、印度人の性質の卑怯と取る勿れ。それまでに身を守る事に神經質になつてゐる印度人そのものの立場に同情あれ。友情さへも明かには示し得ない程、何ものかの眼を恐れなければならない彼等の立場――不自由な、悲しむべき立場に同情あれ。

自分は鮮人と日本人との關係などが、聯想されて、憮然とした氣持にならずにゐられない。

▽

だが、それ等の事を詳しく述べてゐるのが、この文章を書き出した目的ではない。今急に文部省や教育者を『教育』しようと急き立つたところで、間に合ふものではない。又英國大使館の印度人に對する態度を直せと叫んだところで、これ亦間に合ふものではない。――それ等の事を考へると、どうしていゝのか、歯ぎしりしたい程苛立たしい氣持になるが、併しせつかちになつても、持つて行き場がない。

そこで自分は最初に歸つて、新聞記事といふものについて考へて見たい。

今度某々の二つの新聞が、ダット氏についての虚報を書かなければ、若しダット氏が一人の日本娘と關係があるといふ事が、當局に知れたところで、彼は日本を逐はれるやうな事にはならなかつたに違ひない。ところが驚くべき虚報が報ぜられた。それでダット氏が外語を逐はれ、日本を逐はれる事になつた。さうなつたら、後からそれが虚報であつたといふ事を訂正しても間に合はない。無論當局の無理解と冷酷とは話にならないが、併しダット氏にして見れば、氏の災難の最初は、不正確な新聞記事が發表されたと云ふ事に歸因してゐる。

新聞は無論、一人の罪なき人間を不幸に陷れようといふのが目的で、あれを書いたのではない。ところが、それが全然の虚報であり、そして虚報であるといふ事が訂正されても、最初投げた一つの石から起つた渦紋は、訂正も間に合はず、ぐんぐんと擴がるところまで擴がつて行つて、一人の人間を思ひもかけない不幸に陷れてしまつたのだ。

ダット氏はその新聞を相手取つて名譽毀損の訴へをすることが出來るであらう。又損害賠償の訴へをする事も出來るであらう。けれども、それが勝訴になつても、氏が日本の當局から受けた辱しめと冷酷な取扱ひとを、訂正させる事は出來ないだらう。

さうして見ると、新聞の責任は非常に重大な事になる。それを書いた記者は、乾度人間としては好い人に違ひない。今日の新聞のならはしに從つて、今日の新聞記者の振舞のやうに振舞つてゐただけに過ぎないに違ひない。ところがさうしたかなりの無意識の行爲の結果が、こんな災難を人に與へる事になつてしまつた。その點を何處までも反省して欲しいと思ふ。

自分はダット氏の側近くにゐたので、この事實を親しく目撃したが、併しこんな例は、今のやうな狀態では、他にもかなりあると思はなければならない氣がする。——そこでダット氏を不幸に陷れた記者ばかりではない。その他の新聞の一切の記者が、もつともつとずつとかういふ事に反省して欲しいと思ふ。

自分は日本でこんな目に遭つたダット氏に對して、心からの同情を寄せると同時に、このか弱き國の善良な人を、日本がこんな目に遭はせたといふ事に、日本人として恥辱と、持つて行きどころのない憤りを感じながら、この筆を擱く。(十一月十日)

有名なる無名氏

——覆面の記者ジューニアス——

楚人冠

はしがき

シカゴの『シカゴ・トリビユーン』が社中の記者に原稿のかき方を示した心得がきの中に、『人若し有名ならば、有名とことわるには及ばず』(If a man is "well known" it is not necessary to say so) といふ一個條がある。

名の知れた人ならば、一々『名の知れた』と書くには及ばぬといふのだから、これほど尤な、これほど分りきつたことはない。まこと名が知れて居れば、誰でも知つてゐる筈であつて、誰でも知つてゐることならば、一々書き立てる必要はない筈である。兎角新聞紙の記事には、誰しも一寸『有名なる誰某氏』などゝ書いて見たがるものだが、その誰某氏がほんとうに有名な人ならば、さう書かなくても人は知つてゐるし、若し又有名でないならば、『有名なる』と書いても、知つた人は少ない。たゞ今日まで心なき有名呼ばゝりが過ぎた爲に、世には誰も知らない『名物』があるやうに、誰も知らない『名士』が出來た。恐らく『有名なる』といふは、さうことわらなければ誰も顧みて呉れないやうな人の頭にかぶせて注意を引く爲か、又は或特殊な一部分にのみ知られて居る人の頭につけて、『お前は知るまいがおれは知つてるぞ』といふ意味をひけらかす爲かに用ひらるゝに過ぎない。『有名』とは廣くその名の聞え渡つてゐる事であつて、已に聞えてゐる人なら、その上聞かせるには當らない。

たゞ此の有名でありながら、而かもその名の全く知れてゐない人が、私の知つた限に於て、たゞ一人ある。これから説かんとする所のジューニアスが即ちそれである。

一、ジユーニアスの出現

一千七百六十九年の一月下旬、ロンドンの一新聞に、驚くべき一篇の投書が現はれた。市民は思はず目を見はつた。

筆者はジユーニアス（Junius）とのみ署名してあつて、誰とも分らなかつた。その新聞紙といふは、その頃ロンドンで最も勢力のあつた『パブリツク・アドバタイザー』で、件の投書は主筆のウツドフヲール（Woodfall）に宛てたものであつた。

この投書は語數約三千の長文で、左ながら秋霜烈日に似たる筆鋒を以て英國現下の形勢を痛論し、當路の諸大臣に對して、峻烈極まる惡罵を加へたものであつた。彼は先づ英國の國情憂慮に堪へざるものあるを斷じて、時の内閣總理大臣グラフトン卿を眞先に引つぱたき、次いで大藏大臣ノース卿、内務大臣ウエーマス卿、アメリカ事務大臣ヒルスボロー伯、陸軍大臣グレンビー卿、最高法官マンスフイールド卿（註の一）を次々にこきおろし、たゞ海軍大臣サー・エドワード・ホークに對してのみ多少の賛辭を呈したる外は、ほとんど面を向くべからざる鋭鋒を振つて、たれかれ構はずなぎ立てた。而して最後に

『この憂慮すべき光景に對してたゞ一語の加ふべきものがある。われらは今や分別ある者が毒殺の外に如何なる療法を見ず死の外に如何の救をも期待し得ざる閣臣の治下にあり。若し天のゆくりなき御惠によつて、この恐怖と絶望に滿ちたる危機を脱し得るとあらば恐らく我等の子孫はこの時代に斯ばかりの歴史のありたらんことを信じ得まい。彼等は恐らく、われらが今日窮迫したといふは想像に止つて事實でなかつたとするか、又はわれらを誠實にして賢明なる人々の治下にあつたものとし、よもやグラフトン卿首相たり、ノース卿藏相たり、ウエイマスやヒルスボローが國務大臣なり、グレンビーの如きが司令長官たり、マンフイールドの如きが首席の法官にてありながら、我等が陷りたるこの絶望的なる境涯から、首尾よく脱し得たらうなどとは信じ得まい。』（註の二）

と結んでゐる。

その文に於ても、その想に於ても、たしかに時の新聞記事中はるかに一頭地をぬきん出たものであつた。殊にこの野卑に近いばかりの無遠慮千萬な毒舌に至つては、正に天下一品、期せずして、衆目の集まる所となつた。彼が首相のグラフトン卿を嘲つた一節に

『借金と無駄づかひの爲におちぶれ行く或る一國の財政は、賭事に身を持ち崩した若い貴族の手に委ねられた。チヤタム卿の手で内閣に入れられ、チヤタム卿の退隱で、内閣の首班

に居直りたる彼は、怪我で大臣となつたのである。彼をしてたゞ一時衆望を博せしめた所以の政見と公言とはなげうち去つて、彼が爲す所は、どの點から見ても、初から變節するつもりでかゝつた變節漢たるに過ぎない。かれの事業に至つては、無定見を天才とし、うつり氣を活氣の證據と解せざる限り、世界は彼に何等の才能、何等の決斷あるも認めぬ。恐らく國家を貯へんより、これを散ぜんことが、かれの性根にも合つて居り、かれの熱愛する所でもあらう』

とあるのを見て、ほゞその趣を察することが出來やう。

この投書が一たび出でゝ、ジユーニアスの名は、一擧に天下の耳目をそばだてしめた。その內容の豐富にして、各般の事情に精通してゐる點、その威武に屈せず、權勢に阿らず、意氣凛然として、大膽に自由にその言はんと欲する所を言つてのけてゐる點、其の文章の暢達明快にして、用語措辭の古典的に正確なる點などが、讀む者をして、直ちにそのかいなでの徒の手に成つた投書でない事を知らしめた。同時に斯くまで時の有力者を遠慮會釋なく嘲罵したものを、平氣で紙上に採用した主筆もえらいとて、ウツドソヲールまでが評判の御伴を喰ふに至つた。

ジユーニアスの投書は、これを手初めとして、三日おき五日おき、乃至十日おき位に續々『アドバタイザー』の紙上に現はれ、現はるゝ每にますく評判となつた。中にも一七六九年十二月十九日附で、第三十五回目の投書として『英國々王に上つる書』が公けにされた時は、正に評判の絕頂に達した。

この書面はジユーニアスの投書中最も有名なもので、約四千八百語の長篇である。

『陛下が民の訴ふるを聞かるゝまで國狀の眞相を知り玉はざるは、陛下の不幸であつて、陛下の政府が受くる非難の元である。しかし陛下の教育の誤を正さんことは、必ずしも未だ晚しとしない』といふのが、その冒頭で、起手一番已に王座の直下に迫つてゐる。彼は先づ國王ジヨージ第三世が四圍の事情によつて國民の現狀を知り得ざるを哀しみ、しばらく閣員や議會や綱臣や其他の言を斥けて、陛下の理解にのみ諮り玉ふ瞬間を與へ玉へとて、本論に入つた。本論では英國の現狀甚だ憂ふべきものあるを說き、これは閣臣の責とはいひながら、陛下が不明の致す所で、若し國民が其の怒を陛下に訴ふるに止めず、先人の例に傚つて、人類の權利の源たる神に訴ふるが如き場合に至らば、陛下は國內のいづれの方面に向つて援助を求め玉ふべきかと問ひ、それから、王が救助を求めさうな先々を一つく擧げ來つて、アイルランドも賴むに足らず、殖民地（主としてアメリカを指す）も賴むに足らず、イングランドの民、スコツト

ランドの民、陸軍、議會皆頼むに足らずと。證を擧げ例を引いて詳論し、『陛下を王位に即かせたる運命は陛下に一人の友をも與へなかつた。陛下が友を求むる時はこれを寵臣の間に求め、これを寵臣の間に求むる時、此に國務の壞滅を見る』と切りこみ、最後に、

『それスチユワートの名は、その名ばかりではたゞ見下げ果てたものといふ迄である。これに王者の權威といふ武裝を加へては、その行狀正に震慴すべきである。若し彼等スチユワート諸王の行爲を模倣するが如き王あらば、之に彼等諸王の遺せる前例を心得しめざるべからず。正統王位の安固なんどにいゝ氣になつてゐる間に、王位の如きは革命に依つて手に入れられたやうに、又革命に依つて失はるゝものなることを記憶せしめおかざるべからず』

といふ有名な一節を以て終つてある。

スチユワート諸王の遺せる先例といふは、言ふまでもなくチヤールス第一世とジエームス第二世とがその失政の結果僅かな年月を隔てゝ相續いで王位を逐はれたことを指す。王位が革命によつて手に入れらるゝとは、オレンヂ公ウイリアムが、一六八八年のいはゆる『名譽革命』によつて英國の王位に即いたことを說いて、何時ジヨージ第三世も革命によつて王位を失ふかも知れぬと諷したことは明かである。

この書面の初に添へた『アドヴタイザー』あてのはしがきには、『牢乎として拔くべからざる決意を以て、その言はんと欲する所を言つては居るが、しかし敬意を以てすることなしとにはあらず』とことわつてある通り、相當敬意は表してゐるらしいが、それでも隨分無遠慮な態度が見える。いやしくも一國の君主ともあらう方に向つて、斯うづけ〳〵と言つてのけたのは、餘りとしても禮を缺いてゐる次第だといふので、この書面に對しては非難の聲も高かつた。

左なきだにジユーニアスの投書が大變な評判となつてゐる所へ、ほとんど歷史上前例の未曾有な右の上奏文のやうなものが出たのだから、忽ちにして湧きかへるやうな人氣を、いやが上に博した。それこそ寄るとさはると、その噂ならざるはない位であつた。その時代に現時のクラブのやうな用を勤めた珈琲店でも、クラブでも、議會でも、はては宮中でさへ、人の集まる限りの處では、必ず談の種となつた。殊に議會では大分問題にされた。それは後に說く。新聞も雜誌も盛にこれを轉載し、批評して評論を加へた。その頃ロンドン以外の町村へ郵便遞送人が郵便物を運んだ時など、わざ〳〵『今日の新聞にはジユーニアスの書面が出てゐる』と呼ばゝつて知らせる位であつ

た。この聲を聞いた時、その土地の人々はわい〳〵と寄つて來て、我れ一とこれを買ひ求めたと、物の本には書いてある。

その時代の新聞紙といふは、今から見ると賣高の僅かなもので、『アドバタイザー』の如きも、日刊でありながら一個月の販賣高七萬五千部に過ぎなかつた。ジューニアスの書面が出て『アドバタイザー』の聲價は馬鹿に上つたが、それでも賣高に太した影響はなかつた。それが、右の『國王に上る書』を掲載した當日、わざと平生より餘分に一千七百五十部の増刷をしておいたが、發行後數時間の内に賣り切れてしまつた。さうしてこの以後初めて、ジューニアスの投書が新聞紙の賣高に影響して、ジューニアスの書面の出る毎に増刷を行ふこと〻なつた。『アドバタイザー』はジューニアスの書面で賣れたのみならず、ジューニアスに對して、廟閣の諸公を始め、名門、貴族、學者、法律家などが或は無名で、或は名乘を上げて、辯明を寄せ、反駁文を投じたので、それが爲に紙面は賑はつて、ジューニアスの書面の出ぬ日でも、相當の賣高をつゞけた。又斯ういふ辯明書の來た時、それが如何にジューニアスに取つて不利と見ゆるものであつても、主筆のウツドフヲールは極めて公平にこれを紙上に採つた。ウツドフヲールが投書の採否を決するにいさ〻か私心をさしはさまなかつた點は、彼が恐る〻所なくジューニアスの投書を採用した勇氣と共に、廣く一般の賞賛を博した。彼は新聞界に於ける名家の出たるを辱しめぬ名記者であつた。（註の三）

ジューニアスの手厳しい非難攻撃に堪へ兼ねて、右に述べた通り、新聞紙上に辯駁書を寄せて、これに立ち向つた者は隨分あつたが、いづれも一たまりもなくジューニアスの爲にやりつけられた。相手が強く出れば出るほど、ジューニアスは尚强くなつた。これは後の話だが、グラフトン内閣の時、ジューニアスの首相攻撃に對し、サー・ヰリヤム・ドレーパーが首相に代つて矢表に立ち、ジューニアス相手に兩三合、戰を交へたが、ジューニアスの勢次第に猛烈を加ふるに及んで、ドレーパーは堪らなくなつて、とう〳〵アメリカまで逃げたといふ話がある。首相グラフトンもジューニアスの攻撃に居たゝまらずして、首相の職をノース卿に讓り、自分はたゞ一閣員として居殘るに至つた。ノース内閣の時はジューニアス全盛の時代で内閣も議會もジューアスの名には震へ上つた。あの傲岸不屈な法官マンスフイールドさへ、毎朝新聞を讀むのがつらかつたと自白した位に傳へられてゐる。

斯くまでの評判でありながら、ジューニアスの誰なるかは、誰にも分らなかつた。

國王に對して、こんな無禮なことを言ひ出すやうになつては、政府當局もすておき難くなつた。何とかしなければならぬとはなつたが、何分ジューニアスとは何人であつて、何處にゐる者か全く知れない。仕方がないから、取り敢へず『アドバタイザー』の印刷人たり主筆たるウッドフヲールだけを起訴した。この訴訟はすこぶる喜劇的な終を告げたもので、裁判長マンスフイールドがいろ〳〵言葉を盡して、ウッドフヲールの有罪になるやうにと、陪審官に事實の説明を行つたが、陪審官は合議の末『印刷し及び發行したりといふ點のみに於て有罪』（Guilty of printing and publishing only）といふ世にも不思議な判決を下した。印刷し發行した事だけは認めるといふのである。そんな事は犯罪にも何にもなるものでないから、ウッドフヲールは其のまゝ無罪放免とあつた。これは上奏文書の出た翌年の六月十三日のことである。裁判はそれほど長引いた。

斯くて後ジューニアスは尚投書をつづけた。その中に右の上書と、マンスフイールドに與へて保釋を論した書とが最も精緻なるもの、一七六九年五月三十日グラフトン卿に與へたものが最も皮肉を極めたもの、一七七一年十月五日ウッドフヲールに與へて英國々民の一致團結を説いたものが最上出來の最有用の書と認められてゐるが、一七七二年一月二十一日マンスフイールド卿に與へた書簡と、カムデン卿に與へた書簡とを最後として、ジューニアスの名は『アドバタイザー』の紙上からかき消す如く失せた。

一七六九年一月から始まつて一七七二年一月に至るまで、丸三年の間に公にせられたもの、大小長短いろ〳〵取りまぜて總計六十三通ある。この六十三通と別にジューニアスに答へた辯駁書六通と合せて、都合六十九通をウッドフヲールは單行本として出版した。これがジューニアス書簡集の第一卷である。

二、ジューニアスの前後

ジューニアスの評判が高くなつた頃、新聞雜誌が『アドバタイザー』からこれを轉載したり拔萃したりした事は前に説いたが、別にその一部を集めて單行本として出版した者も一人や二人でなかつた。その中には、大分誤り傳へられてゐるものがあるといふので、ウッドフヲールは自ら編輯の任に當つて、正眞まがひのない書簡だけを集めて之を公けにしたのである。

然るに後に至つてウッドフヲールは更に、ジューニアスがジューニアスの名を用ひてゐない投書と、ジューニアスがウッドフヲール其他に宛てた私信などを集めて、ジューニアス書簡集の第二卷なるものを出版した。これに依ると、ジューニアスは

一七六九年以前にも、一七七二年以後にも、變名で投書してゐる事が明になつた。

彼はジユーニアスの名を用ひ始めた時より二年前、すなはち一七六七年四月二十八日附でポプリコラの名で、初めて投書を試みた。これはポートランド公の城地に關する問題で、時の首相チヤタム卿及ビユート卿などを攻撃したものであつた。その以來彼は時々名をかへて投書をつづけたが、その內その變名が次第にラテン臭くなり、ルーシアスとなり、アツチカスとなり、ブルータスとなり、とう／＼最後にジユーニアスとなつた。中にもルーシアスの名を用ひたことが一七六八年の八月から九月にかけて七回にも及んでゐる。又ジユーニアスの名は、例の英國の國勢を論じた第一回の投書の前にも、ただ一回用ひられてゐる。(註の四)

思ふに、斯くさま／＼の名を用ひて二十個月にも及ぶ內、この間に自分の投書がどう世間に迎へられてゐるか、又どういふ書き方をするが一番世間に受けるかといふ見當もついたので、遂に一定の名によつて、自分の確信を世に問ふ決心がついたらしい。ジユーニアスと名を一定してからは文章にも議論にも目に見えて細心の注意が加へられ、一字一句も忽にしなかつた跡が見える。これまでは名の定らぬに任せて是非の評論も一向定らず、今日口を極めてほめ立てた人を、明日は手の裏かへすやうにこき下すことが珍しくなかつた。現に其頃の名士ホルクスやチヤタム卿は突いたり引いたりされてゐる。ところがジユニアスなつた以來は全くさういふ矛盾がなくなつた。

ジユーニアスが斯ういふ名を用ひたのは、ルーシアスから、ブルータスとなり、ジユーニアスとなつた徑路から考へても察せらるゝが如く、彼はローマの自由の爲にその友ジユリアス・シーザーを殺した彼のマーカス・ジユーニアス・ブルータスか、又は其祖先であつた古ローマの名相ルーシアス・ジユーニアス・ブルータスかを以て自ら任じた爲なることは疑なし。彼がラテンの名を用ひて評判となつた爲、其の頃新聞雜誌の投書家間にはラテン名を用ふることが一種の流行となり、マーカス、アントニアス、シピオ、カトーなど物々しい名前が何處にも其處にも用ひられた。この流行を詩人クラブは嘲つて『ミロは國の爲だとて牛の足を食ひ居る。カミラスは僅かな金で筆耕を働きながら一日に二度づゝは喧嘩をする。神の如きブルータスは醉つてふら／＼しながら、バーの壁にかきつけた賭博の勝負表に眺め入り、嚴格なカトーはポンチをすゝり、アモール、パトリーは密輸入の茶を賣り歩いてござる』などいふ變な詩を作つた。

ジューニアスの名を用ひる以前に已にジューニアスの書簡が新聞紙に出てゐたやうに、ジューニアスの名を用ひなくなつてからも、かれの投書はやはり新聞紙に出てゐた。斯ういふジューニアスの名を用ひざる書簡が、ジューニアス以前のと合せて約百十八通あるが、最後にネメシスの名を用ひた書簡を投じて、一七七二年五月十二日限り長へに新聞紙上の筆を絶つた。これに對してウツドフヲールから切に投書の繼續を賴んだが、翌年一月十九日附の書面で、『色々紙上で議論もして見たが、今まで何の効果も得られぬ。この上書き續けるのは、丁度角ふりたてゝ市中をあばれまはる牛か又はロンドンの賢明なる市參事會員ほど馬鹿〱しいことだ』とて明にことわつて居る。近頃高山彦九郎の絶筆といふものを見ると、『……時運不至乎、百事不如意、意滿腹之義氣破裂無如何矣、正之快々不樂、生無功於世、終決于屠腹』とある。腹は切らなかつたが、ジューニアスの意もまたさういふ所にあつたらしい。（註の五及六）

ジューニアスの名を用ふること三年にして、書簡の數六十三篇、其の前後三年半に寄するところ百十八通。彼は忽然として流星の如く天の一方に現はれ、英國上下の人心を思ふがまゝに引つかきまはすこと六年半にして、又流星の如く消えた。

ジューニアスの何者であつたかは、今に知れない。

三、その時代

ジューニアスをして、一擧に左しもの名を成さしめた所以の一は、時代であつた。

ジューニアスの出現したのは、一七六九年から一七七三年の間であつたから、ちやうどジョージ第三世の治世の間で、一七六三年に終つた七年戰爭と一七七五年から始まつたアメリカの獨立戰爭との間に挾まれ、內治に於ても外交に於ても、英國の最も多事なる時であつた。

內には七年戰爭のもたらした負債が山とたまつて財政は窮乏を極め、外には、スペインでも、フランスでも、英國を馬鹿にし切つてゐた。殊に植民地のアメリカでは、事毎に施政を誤つて、米人の感情を傷つけ、何時どんな事件が何處から突發せぬとも測り兼ぬる狀態であつた。斯の如き難局に際しながら、第一國王のジョージは無經驗の上に凡庸の君であり、これが下に立つ代々の內閣は、無能で奸黠で私利を事とし、議會は微力にして、王と政府の意を迎ふることを知るのみで、國民の福利などといふことは、丸で眼中に置かなかつた。貴族は貴族で、淫蕩三昧にその日を送り、森嚴なるべき法廷は內閣の意思に盲從して、王室と人民との間を疎隔して顧みない。國を擧げて賴み

になるべきものとては、わづかにピットとバークが時々議會で氣焔を上ぐるを聞くの外、何處にも見出すことは出來なかつた。

今少しくはしく説明することを許さるゝならば、先づビュート内閣が、揃ひも揃つた暗愚な閣員を集めて私利をのみ計り、その上首相のビュートがジョージ第二世の后と兎角の噂を立てられて、ロンドン市民が輕侮の的となつた。民心は早く内閣を離れてゐたところへ、フランスと不利なる條約を結んだことが直接の原因となつて、この内閣は潰れた。次のグレンギル内閣は印税條例で大味噌をつけ、本國ばかりか、アメリカの不平を買ひ、例の『キルタス事件』（後に出づ）では天下の指笑を一身に引受けた體であつた。これが僅か三年で辭職すると、次のチヤタム内閣では、首相のチヤタムが病氣引籠り中に、茶の課税案を通過させて、とう／＼米國獨立戰の導火をつけた。それが爲内閣瓦解となつて、その次にグラフトン内閣が出來たが、これが又今までにない惡内閣で、王にへつらい民をしへたげ、傍若無人の横暴を敢てした。ジユーニアスの初めて出たのは、その時である。

内斯くの如く治まらずして、外交だけが成功せんやうはない。フランスは七年戰爭の結果締結せられた條約を無視して、コルシカを略取した。スペインはフヲークランド問題以來英國を侮つて、フイリツピンに於ける秕政を改めんとはしない。其外、アメリカでは英國の失政の爲に移住民の生活狀態が悲慘の極に陷いつてゐるといふ情報が續々着いた。

今『キルタス事件』と言つたが、この當時の英國の政治の如何に亂脈であつたかを知らせるには、このキルタス事件の顚末を略叙するに限る。——以下『キルタスの横道にはひる。

ジヨン・キルクス

ジヨン・キルクス（John Wilkes）はジユーニアスと列べて、第十八世紀後半の英國政治界に於ける二個の奇人物と稱せらるゝ所のものであるが故に、この二人の一生には互に入り亂れた所があつて、ジユーニアスを說く以上は、キルクスも說いておかなければならない。

キルクスは一七二七年ロンドンの一資産家の子に生れた。特別の教育を受けた人でもなく、どこの國でも金持の息子にありがちな放縱な生活を送つたこともあつたらしい。若い時から四方に遊歷して交友を名門の間に求め、某富豪の一女と結婚し、チヤタム卿の引立で下院議員となり、間もなくバツキンガムシア民兵の大佐に任ぜられた。トルコ大使やクエベツク總督なんどに運動したが、いづれも失敗に歸した。

チヤタム卿の子分であつたゞけに、時の首相ビユート伯とは善くなかつた。ビユートがスモレツトなるものを主筆として『ブリトン』なる政治雜誌を發行するや、ヰルクスはこれに對抗せん爲一週間後れて政治雜誌『ノース・ブリトン』を發行して盛に時の政府に喰つてかゝつた。殊に大藏大臣ダツシユウード、海軍大臣サンドウヰツチなどが、その鎗玉にあげられた。公人が公然新聞紙上に攻擊されたのは、これが初めてだと言はれてゐる。これは一七六二年の事である。

その翌年ビユートは、七年戰爭の後始末で人望を失して辭職したが、これに次いで首相となつたのは、ヰルクスの親友テムプルの實兄グレンギル卿であつた。所で英國で議會に賜はる勅語は內閣で用意して國王に差上ぐるのが慣例になつてゐたが、その年の勅語草案は右のテムプルの手を通してピツトとヰルクスの手に渡つた。これを奇貨措くべしとして、ヰルクスは大膽にも勅語の批評をその『ノース・ブリトン』紙上に試みた。ヰルクスに關する騷動はこれから始まる。

以ての外の不敬といふので、內務大臣ハリフアツクスの命令を以て、ヰルクスは直ちに拘引せられ、家宅は搜索され、その末遂にロンドン塔の獄舍に繫がるゝこととなつたが、友人等ヰルクスの爲に相謀つて訴を起し、間もなく彼は議員たるの故を以て釋放された。斯うなると今度はヰルクスの方でだまつてゐない。苟も拘禁すべからざる議員を拘禁するとは不法も甚しいとて、あべこべに政府を訴へて、五千ポンドの損害を支拂はしめた。こんな不法は今までにも行はれてゐた事と見えて、ヰルクスがこの訴訟に勝つたのを見て、同じやうな事件で政府を訴ふる者が相次いで出で、結局政府は總額十萬ポンドの損害賠償を支拂はせられた。

ヰルクスは勝つた勢で調子に乘つて、自宅に印刷機械をすゑて『ノース・ブリトン』の再版其の他いろ〳〵のものを印刷して居たが、その中にアレキサンダー・ポープの名詩『エツセー・オン・マン』（Essay on Man）を作りかへた『エツセー・オン・ウーマン』と稱する猥褻千萬な詩があつた。これはたゞ十三枚しか印刷しなかつたのださうだが、不幸にして、その一枚が盜まれて、人もあらうに、ヰルクスの敵たるサンドヰツチ卿の手に渡つた。（註の七）

この印刷物が禍をなして、十一月十五日議會再開の日、ノース卿から『ノース・ブリトン』彈劾の動機が出て、陛下に對する不敬、議會に對する侮辱、立法府に對する輕侮、國民をして陛下に背き國法に遠ざからしめんとする陰謀なりとの議が成立し、其の制裁として秘密に印刷した『ノース・ブリ

トン』の再版全部を燒棄することゝした。尙又議員保護律は今回の如き犯罪にその效力を及ぼさずと決議された。

しかしキルクスを崇拜せるロンドンの市民はこんな事を承知しない。忽ちに蜂起した民衆は燒棄さるべき『ノース・ブリトン』を奪ひ去つて、これをテムプル・バーまで擔ぎ行き、とう／＼政府の手に渡さなかつた。

右の動議討論中、政府側の某議員が、キルクスに侮辱を加へた爲、兩人の間に決鬪が起り、キルクスは瀕死の重傷を負はせられて療養かた／＼パリに去つた。政府はその回復を待つて處分する考でゐたが、二個月待つてもまだキルクスは議會に出席し得るに至らなかつたので、遂に欠席のまゝ一七六三年一月十九日議員を除名してしまつた。その上同じく欠席のまゝで二月二十一日彼に對するアウトロー（法律保護停止）を申し渡した。

キルクスはパリで形勢を觀望してゐたが、そのうちグレンギル内閣仆れ、ロッキンガム内閣次いで仆れ、グラフトン内閣がピットを事實上の首相として成立するに及んで、一七六八年英國に歸つた。丁度ジユーニアスが英國の政治界に現はれた時である。

歸つて後程なく彼は議員に再選せられ、アウトロー取消の訴を起して、この方も取消となつた。たゞ『ノース・ブリトン』の秘密印刷と例の淫猥なる惡詩の發行との廉で二十二個月の禁錮と一千ポンドの罰金に處せられた。この禁錮中、彼は人を使つて『ノース・ブリトン』を再び發行せしめてゐたが、或時獄中から内務大臣ウエイマス卿の密書なるものを送つてその紙上で公けにさせた。この密書はキルクスを助けんとする民衆に對し軍隊を以て攻擊すべしとの命令を傳へたものであつて、ウエイマスに取つては、大分手痛いものであつた。この獄中からの投書が又もや議會の問題となり、ピットや、バークや、時のロンドン市長ベックフヲードなど正義の士が極力辯護の勞を取つた甲斐もなく、一七六九年二月三日キルクスは又もや議會から除名された。

二月三日に除名されたキルクスは二月十六日に又再選された。再選された翌日下院はこの選擧を無効として新に選擧を命じた。この選擧には又もやキルクスが再選された。再選されたキルクスは三月に又々除名された。これがすべてキルクスの入獄中の出來事だから驚き入らざるを得ない。バークがこれを罵つて一種の悲喜劇（トラジコメダー）となし、ジユーニアスが政府の全事業はキルクス一人の始末をつくることであつたと嘲つたのは、この時の事である。

キルクスが入牢中に起つた事はこればかりでない。彼は不在中ロンドンの市參事會員に選擧された。市民はキルクスの爲とて幾たびか義金を募つた。市民の彼に對する同情と當局に對する憤慨とは日一日その勢を加へ、はては上院でも棄て置き難くなつて、キルクスに對する政府の處置を憲法違反なりとする動機が初はピツトに依り、後にはロツキンガム卿に依つて提出された。不幸にして兩度とも通過を見るに至らなかつた。

ロンドン市民は遂に堪忍袋の緒を切つた。一七六九年直接國王ジョージ陛下に陳情表を上つたが、何等の沙汰がなかつた。此に於て市民はロンドン市民に直奏の權ありとて、五月十四日市長ベツクフヲード以下二百余人ぞろ／＼と王宮におしかけて、憲法違反の議會は解散されたしと求めたが、王はかくの如き直奏は王者の尊嚴を冒瀆するもので、これこそ憲法違反だとて取り合はない。そこで五月二十三日市長は單身再ひ出かけて王に說いたが、王の嘲笑に逢つて、激烈なる捨ぜりふを殘して引き上げた。(この捨ぜりふはベツクフヲードの碑文に金文字で刻されてあるさうなが、何と言つたのか、調べて見ても、私にはまだ分らなかつた)可愛さうにこの好個の老市長は老年の上に神經を使ひ過ぎた爲か、それから一週間たつて死んだ。

兎角するうちに、一七七〇年四月キルクスは刑期滿ちて出獄し、出獄の翌年ロンドン市長に擧げられ、その年議會の解散があつて、又も議員に選擧された。幸にして今度は除名されなかつたから、彼は一七七五年から八年の間に一七八〇年だけを除いて年々根氣よく前年の除名決議取消の動機を提出したが、一七八二年に至つて、初めて年來の努力が報いられて、かれの動議は容れられた。

かれの議會を去つたのは一七九〇年で、死んだのは一七九七年である。

時の英國は實にこのキルクス事件に見えゆるやうな大べらぼうな時代であつた。

國王も、內閣も、議會も、裁判所も、こと／＼く賴むに足らざる時、敢然立つて、新聞紙上にこの賴むに足らざる國王と內閣と議會と裁判所とを相手に取り、英國人民の權利と利益の爲に戰はんとする者が出て來たとせよ。國民一同のこれを歡び迎へんことは當然である。ジューニアスは實に、かくの如き時に、かくの如き使命を帶びて、かくの如く現れた。いはば時勢がジューニアスを生んだのである。

當時の英國がジューニアスの如き鬪將を必要とした事は次の

一例を見ても知れる。サー・ジエフレー・アマーストは米國に於ける永年の武功によつて、バージニア州の終身總督に任命せられたる人である。然るにさういふ事情などには頓着せず、時のアメリカ事務大臣ヒルスボロー伯は、突然これを解職して、自身の親友ブートトール（註の八）にその職を與へた。ブートトールは酒色と賭博にふけつて財産を蕩盡した男である。斯ういふ私曲の行はれた時誰一人これを責めんとする者のない當時の英國であつた。たゞジユーニアス一人のあるあり、彼のみが猛然とヒルスボローを相手に戰つた。ヒルスボローも初は匿名の下に兩三度辯明書を新聞紙に掲げて、これに答へたが、その匿名が一々ジユーニアスの爲に見破られ、その度毎に次第に勢を加へて來るジユーニアスの攻撃に、流石厚顔のヒルスボローも非を悔いて、アマーストに解職前率ゐてゐた二個聯隊の中一個を返し、別に新に一個聯隊を彼に與ふるに至つた。それから程經て、政府でアマーストを貴族に列しやうとの議があつたが、閣員グラフトン公は之に反對した。その反對した理由は、アマーストに金がないから、貴族の如き豪華(Splendour)な生活は出來ないといふに在つた。隨分人を馬鹿にした反對理由であつたが、ジユーニアスは又勃然としてグラフトンに打つてかゝつた。その結果かどうか、兎に角それから四五年後、アマーストはジユーニアスの望通り貴族に列せられた。

斯ふいふ事は全くジユーニアス一人舞臺であつた。彼は足かけ六年の間各種の人を相手にして戰つたが、かれの說く所には終始一貫した所の精神があつた。それは憲法の擁護であつた。ジユーアニスは英國憲法の主旨精神を體して、英國臣民が享受すべき憲法上の權利の何たるかを英國の上下に知らしめ、且これを死守して一歩も讓る所なからしめんことを努めたのである。これによつて英國人をして今まで左程意に介しなかつた自己の憲法上の權利を自覺せしめ、之を死守せんとする決心を起さしめた。若しイギリスにジユーニアスの出づることなくんば、その頃の英國人は然かく詳かに議會の內情を知らなかつたらうし、又然かく議會の討議に興味を引かるゝこともなかつたらう。これがジユーニアスの殘した何よりの大功績と稱せられてゐる。

四、その文

ジユーニアスの文もまたかれの名を成さしめた重なる理由の一であつた。

ジユーニアスの文はきび〳〵として、讀んでゐて如何にも心持がいゝ。用語措辭が正しくて、一字一句も苟もして居らぬ。

頴があり、元氣があり、小心にして而かも放膽、雄勁にして而かも暢達、人を罵る時は白刃を振つて而もふらず斬つて入る趣があり、人に答ふる時は、敵を眼下に見下して、息もつかせず警句をあびせかけた。

堂々とその言はんとする所を言つて、恐るゝ所なく、辯難攻擊の筆は嚴勵を極め、人を罵る時は最上級の形容詞を連發して憚らず、敵愾の念、嫌惡の情を表はす時は、往々極度に走つて、斯く迄に言はずともと思はしむる位のものがあつた。實にもジューニアスの長ずる所は諄々と論理の糸を手繰つて押し寄せるよりも、まつしぐらに相手の面上に惡罵毒舌をあびせかくるに在つた。ジューニアスといへば直ぐ『インヴエクチヴ』(嘲罵)といふ言葉を聯想するほどに、彼は嘲罵の名人であつた。グラフトン卿を罵つて『この國の惡人どもは皆汝が友人なり』(All the villains in this country are your friends)といひ、マンスフイールドに對して『わが王國中の最奸惡最危險の人物なり』(The very worst and most dangerous man in the Kingdom)評し、バリントン卿を評して『わが王國內で第一番の腹黑はバリントンの腹だ』(The blackest soul in the Kingdom belongs to Lord Barrington)とやつてのけ、その他怒にまかせて、惡人、暴漢、宿なし、しれもの、馬鹿、氣ちがひ、などの語(Villain, rascal, vagabond, wretch, blockhead, fool)を遠慮會釋もなく用ひつゞけた。

グラフトン卿は最もしば〳〵ジューニアスの毒舌にかゝつた。

『お前には他の人間と違つた所がある。それはお前がわざわざ惡い事をするといふのでなくて、怪我にも善い事をしないといふ點である』(Not that you do wrong by design but that you should never do right by mistake)

とやりつけ、又グラフトンがチャールズ第二世の曾孫に當るを材料として、

『チャールス第一世は僞善者で生き、僞善者で死んだ。チャール第二世も亦種類の違つた僞善者であつて、(第一世と)同じ斷頭臺で死ぬべき筈であつた。それから百年たつて二人の違つた性質が都合よく閣下によつて復活し、混合されてゐる。道心なくして氣むづかしく、陽氣な所なくして淫蕩な閣下は今チャールス第二世の如く生きて居るが、恐らくチャールス第一世の如く死なうぞ。』

と罵つたは、隨分手嚴しい。なるほど野卑に近いといはれるのも、全く根據のないことではない。

ジューニアス研究家キリアム・グレーヴスのジューニアス評

は最も簡にして要を得てゐると信ずるが故に左にその要を評して見る。——

『何氣もなくすら〳〵と書いてゐること、言葉の選び方に念の入れること、又その選べる言葉を造作もなくつゞくり合せること、事實を簡明に叙述すること、叙して全體に調和の取れてゐることなど、これらいづれも彼が國語に堪能であつたことを實證してゐる。彼が文體は簡淨であつて平易である。彼が章句は程よい丸味をもつて全い。センテンスにはおほよそ定まつた長さがあつて、其處に格調と音律がある爲、聞く人の耳に快い。事實は手短かに手際よくまとめて、何人にも合點の行き易いやうになつてゐる。議論は條理井然として、敵に對して壓倒的の力がある。彼はよく對句を用ひたが、それがわが表はさんとする思想を最もよく表はしてゐる。彼が比較對照は明瞭透徹、曾てその圖星を誤らぬ。彼が三段論法は完全に形づくられて、如何にも尤もと合點せしめる。その冷評と非難とは、さながら、人の肉を燒けたゞせる力があつて、之に向ふ者は鋭くかきむしらるゝやうな感じを起す。かれの書面の中には反語が多いが、いづれも辛辣にして猛烈である。その嘲笑は面を向くべからず、その隱喩は燦然たる光を放つ。かれの詰問は他の急所に迫つて、他をして覺えず膝を屈せしめ、かれの諷刺は他を赤面せしめんば已まない』

とある。グレーヴスは、ジユーニアスの書簡を以て『われらが知れる限りの最も偉大なる文藝的作品であつて、批評家の最も有力なる者は皆わが說に同意せんことを信ずる』と口を極めて賞揚して居る。

これほどの名文であるから、エドマンド・バークやエルドン卿や、サミユール・ジヨンスンなど、いづれも彼が文章辭句を引用し、リギーやタシタスがラテン文學に於て然るが如く、ジユーニアスを以てクラシツクスの中に數ふべしと言つて居る。ひとり英國に於てのみならず、アルフレツド・ブグローの『外國文學史』(Alfred Tougreault: Histoire des Litteratures Etrangeres)の中にも『ジユーニアスの書簡に於て、嘲罵と冷評は天才とすべし、用語はタシタスに比すべし、英國の散文中之よりも堅實に、之よりも勇健に、之よりも眞個古典的なるもののあることなし』とたゞへた。尤もジユーニアス自身のいふ所によつても、彼が想と共に文を錬つた苦心は一通りでなかつたらしい。

斯ういふ次第であつたから、ジユーニアスの文を新聞紙上に見、彼が大膽に勇敢に誰彼と相手かまはず英國人民の爲に戰つてゐるのを知つた時、之までに覺えぬ愉快と敬意とを以て、英

國の一般讀者がジューニアスを迎へたことは想像に難からぬ。

五、その覆面

しかし時代よりも、筆よりも、何よりもジューニアスの名を重からしめたものは、その匿名の點にある。

スコットの『アイヴンホー』を讀んだ者は、誰しも彼の神出鬼沒、何者とも見當のつかぬ黑鎧の武士に對する好奇心に驅られる。名の知れぬといふは、不思議に人の好奇心をそゝるもので、ジューニアスといへば、直ぐ匿名といふことを思ひ出させるほどに、ジューニアスの匿名が有名なものになつてゐる事が、どれほどジューニアスの名を知らしむる所以となつてゐるか知れない。名の知れざる所以、これ名の知れた所以か。

ジエームス・グラントの英國新聞史の中に說く所に依れば、グラントが『モーニング、アドバタイザー』の主筆を勤めてゐた頃、一八五一年の十二月から約八年間「一英人(アンイングリシュマン)」の名で三百餘通の投書を試みた人があつたが、その誰たるかは今に分らない。この人も、無名が評判になつて、一時は英國の新聞紙界に騷がれた。これをジューニアスに對して『近世(モダーン)ジューニアス』と唱へてゐるほど、ジューニアスは匿名の本家となつてゐる。

ジューニアスが最初にポプリコラの名を用いた事は前に述べた。それがルーシアスとなり、ブルータスとなり、ジューニアスとなつたことも前に述べた。ジューニアスとなつてから三年、それから再び變名を色々に用ひ代へて又一年餘に及んだが、その間にも、その後にもジューニアスの何者なるかを知る者は何處にもなかつた。

ジューニアスが何故に終始その正體を顯はさなかつたかは、色々に解釋されてゐる。一番最初にさまざまの變名を用ひたのは、たしかに一種の瀨踏みであつたらしい。一應の瀨踏が終つて後までも、何變名を用ひて、極力おのれの名を顯はさざらんことに努めたのは、書くことが書くことだけに、禍のその身に及ばんことを恐れた爲だともいふし、又其の時代に一般に行はれた投書家の慣例に從つたまでだともいふし、或は又名を匿してゐた方が、書いたものに重味をつけるからだともいふ。匿名が一種の重味を文書につけることは爭ふべからざる事實であつて、新聞紙が社說の筆者を明さぬのも、さういふ意味から出てゐる。しかしジューニアスが果して、そんな譯であつたかどうかは今分らぬ。

それは分らぬが、兎に角ジューニアスの名を秘した理由の一が、或る時期に於ては危險の身に及ばんことを恐れたに在つたことも、疑を容れない。現にサー・ヰリアム・ドレーパーがジュ

ーニアスに對して、いつまで隱れ居らんより男らしく名乘を上ぐるがよいと迫つた時、ジューニアスはこれに答へて、『貴下に名を明かすのは一向差支ないが、わが國の最も奸惡な、最も强力な人（グラフトンを指す）に打ち明ける必要はない。貴下はまかり間違へば、私に決鬪を挑む位がおちだらうが、世には私を暗殺せんとしてゐる者が多い』と答へ、又ウッドフヲールに對する私信中『私が誰と知れたら三日とは生きて居れまい』（I should not survive my discovery three days）と言つたのを見ても、知れる。

しかし、かれの身に危險の全く去つた後も、何名を秘してゐた。ジューニアスの名聲のます／＼天下に轟き渡るに及んで、彼が自らその名を明かさぬをいゝ事にして、我こそはジューニアスなれといはぬ許りにして、かれが功名を奪ひ去らんとした者が一人ならず二人ならず現れた時にも、彼は依然としてその被れる假面をぬぎすてやうともしなかつた。彼は私信のやり取りにも、校正刷の受授にも、非常な苦心を用ひて、ひたすらに、その名の人に知られざらんことを努めた。彼が名利を求めざる高潔の士であつた事は察するに足る。

これが今日であつたら、斯うまで分らずにゐる譯がない。何とでもして知れさうなものだと思ふが、それが遂に知れずに終つた所に、言ふべからざる興味がある。

前後六年も投書をつゞけたのではないか。何でその間に探り出すことが出來なかつたのだらうか。投書が毎月三四回は來た。その間にジューニアスはウッドフヲールと盛に私信の往復をしてゐた。殊に驚くべきは、ウッドフォールが書簡集を出版せんとした時、これに關する複雜な交渉を二人の間でとりかはしたのみならず、ジューニアスはこの書物に對して、デディケーションも書けば、序文も書いてゐる。甚しきは一々校正刷を取りよせて、自身で校正をして居る。

國王に上（たてまつ）る書の公にされた時、政府は非常の苦心をして彼を引つ捕へんとあせつた最中に、捕へられたら死刑にも處せられかねまじき、かれジューニアスなる者は、平然として投書も私信の往復も續けてゐたのみならず、その頃人の集まるクラブや咖啡店（カフイハウス）にも出入し、議會の傍聽にも行けば、王宮の間近まで大手をふつて踏み込んで來てゐた。

ジューニアスの投書も私信も、郵便に依つたことが多かつたらしい。又自身で新聞社まで屆けに行つたこともあるらしい。これに對するウッドフヲールからの返事は、本人の注文により、各處の咖啡店へジョン・フレットレー宛又はヰリアム・ミドルトン宛として送られた。いづれも僞名である。咖啡店はニュ

ー・エキスチエンヂだの、ソマセットだの、マンデースだの、發電の恐ある毎に、名宛をとりかへた。テムプル・バーから西の珈琲店なら、何處でもよろし、斷じて發覺の憂なしと言つて寄越した事もある。時にはこれらの店で受けとるのに困難を覺えたとか、又は危險があつたとか言つて來たこともある。兎に角斯う云ふ風に、返事を受け取る名宛がちやんと分つてゐたのだから、ウッドフヲールの方で、人をつけるとも、使の者の跡をつけさせるとも、何とでもして、ジユーニアスの正體をつきとめる手段はあつたらう。だから、餘人は知らず、この人ばかりは知つてゐたらうと思ふが、ウッドフヲールは斯ういふ質問を受くる毎に、いつも、頭をふつて、誰とも知れぬ者から渡されたとか、新聞社の書簡函に入れてあつたとかのみ答へた。

投書に關するウッドフヲールからの挨拶は、大抵『アドバタイザー』の紙上で、餘人には分らぬ記號又は文句で返事した。記號ではN、E、C又はCがよく用ひられた。何の事か私は知らない。文句では『御注文の通りしますから安心して下さい』『受け取りました』『いつもの所に出します』などある。文句を使ふのは危險の恐があると言はれて、ラテン語の詩句を用ひたこともある。斯ういふ風に投書家に與ふる返事を新聞紙上ですることは、この時代にあまり珍らしいことではなかつた。一度デストといふ者の投書を掲げて、ウッドフヲールは一百ポンドの罰金を取られたことがある。其の後程經て又デストの筆跡で投書が來て、これに添へた書面には、その投書の採否を紙上で返事して呉れと書いてあつた。ウッドフヲールは前の罰金の事を思ひ出して怒氣心頭に發し、自身活字場へ飛んで行つて、工場中の一番大きな活字を拾はせて、翌日新聞にこの大きな字でノーと返事した。讀者には何の事とも分らなかつたが、デストには分つた。

ジユーニアスの何者であるかが分らぬ爲、隨分さま〴〵の揣摩臆測が行はれた。この筆者を問題とした小冊子も數々出たし、今ならば懸賞募集ともいふべき仕組で、筆者に關する記事を募つた雜誌もあつた。それが一八〇〇年代まで續いて、雜誌では『ジエントルマンス雜誌』『モンスリー雜誌』並に『ノーツ・エンド・クイリーズ』などの名が記憶されてゐる。それほどにしても分らなかつた。ジヨン・ヰルクスは『われらの時代に於ける最も重要なる秘密、即ちジユーニアスの筆者問題』といひ、新聞史家アレキサンダー・アンドルースは『彼は實に政治的文學の鐡の假面以上』と評してゐる。政府がさん〴〵彼を尋ねあぐんで如何ともなし得なかつた時、バークは議會に於て、彼を『森の野猪』となし、『彼は諸君をかれの種取り場とした。さうして諸君はかれの爪にかゝつて血を流してゐる。諸君は彼れ

の怒の下にひれ伏し、今も尚ひれ伏してゐるぢやないか』とからかひ更に議長の方に向き直つて『彼は閣下の力をも恐れてゐない。彼は閣下をさへ攻撃した。ジューニアスに對する戰は勝つべしとも覺えぬ。王も貴族も平民も、たゞ彼が怒號の慰みものたるに過ぎない』と冷罵した。

ジョン・ヰルクスの如きも絶望の聲を上げて『余は現代の最も重要なる秘密、即ちジューニアスの筆者をさらけ出さんとするが如き無禮なる好奇心をほしいまゝにせんとは欲せず。余は汚れたる手を以て、靈廟の神聖なる帳を開かんとするの意なし。余はアッチカの民と共に政治的崇拜の不知なる神に祭壇をさゝげ、彼を雲の上、暗の内に禮拜するに滿足せんのみ』とさじを投げて居る。さしもジューニアスと頻繁に文通したヰルクスさへ、この始末であつた。

かれの正體は斯くして遂に分らぬ。彼がどんな顏をしてどんな容子をした人間であつたかは、元より以て知らん由もない。私が彼に關する十幾卷かの書物を讀んだ中に、やゝ人間らしいかれの姿を見とめた所は、たゞ二つしかない。一はサー・ハリス・ニコラスのジューニアス評論中にある事で、ヰルクスがロンドン市長官邸の舞踏會に彼を誘つて娘のポリーと踊つてくれと案内した時『ブルータスがポーシアと踊らんは願うてもなき事ながら、このブルータスは年配も恰好もさる事には似合はしからず』と返事してゐる。これに由つて彼が相當年配の人であつてあまりいゝ恰好の人でなかつたらうと推測した者がある。今一つはピーボデーの『新聞紙及新聞記者』中にある一節で。それには『輕らかなコートを着、袋かつら（その頃流行した、髮の一種）を被り、劍を佩びた背の高い紳士がアイビー・レーンなるウッドフヲールの印刷所にジューニアスの書簡を投げこみ行けるがたゞ一度見かけられた』とある。これでは前の推測と違つて、瀟洒たる風采の貴公子らしく見える。

いづれにしてもジューニアスがどんな人であつたかは分らないのである。ジューニアスの方でも、身を晦ますに相當苦勞したことは勿論で、彼がヰルクスに送つた書面の中に『私のやうに不利の地位に在つて物を書く人はあるまい。學者と相談する譯には行かず、直接には知人の意見を求むることも出來ない』とこぼして居る。

斯ういふ記事を讀むと、何だか唐紙一枚隔てゝ隣の室まで來てゐながら、とう／＼顏を見せなかつたやうな氣がする。斯くして彼は一七七三年『余の秘密を知れるは余のみ、余の秘密は余と共に死せん』（I am the sole depository of my own secret, and it shall perish with me）の一語を遺して、長へ

にその影を隱してしまつた。
それが忽然として天の一方に現はれた事は、最後の章にくはしく述べる。

六、つけられた見當

ジューニアスの何人たるかは分らぬが、大抵どんな人であつたらうか位の見當はつかないこともない。昔からジューニアス研究家とも稱すべき者が色々と推測を下してゐる。その推測の結果ほゞ斯ういふことだけは分る。

一、寛厚にして細心な人であつたらうといふのである。筆にする所は隨分矯激に渉つて間々野卑に近いこともあつたが、それはその頃一般に行はれた風習で、必ずしもジューニアス一人を責むる譯に行かぬ。その人物に至つては決して矯激でも野卑でもなかつた。彼が書簡をウツドフヲールに送る時、若しこんな書面を新聞に載せることが迷惑なら、遠慮なく棄てゝ呉れとか、又は他の新聞に轉送して呉れとか斷つたことがしば／＼ある。又これを載せても決して恐るゝに足りないから安心して呉れと言つたり、若し又訴へらるゝことがあつたら、斯う／＼するがいゝと言つたりしてゐる。細心の人たるを察するに足りる。尚之に似た事は追々に說く。又彼は猛烈に人を攻撃しておきながら、一たびその評の誤れるを知つた時は心殘りなくこれを正誤してゐる。例へばキルクスに對して、一七六八年の四月にはさん／＼の毒舌を振つたが、翌年の三月には『キルクスを釋放せんは萬人の感謝する所であつて、これに依つて民心の離叛を防ぎ得べし』とたゞへ、チヤタム卿に對しても、グラフトン卿に對しても、初は手ひどく罵つておきながら、後には非常の敬意を表してゐる。彼によつて斯く敬意を表せられた人は、いづれも國士として永く國民に記憶せらるべき人々のみであつた。カムデン卿チヤタム卿グレンギル卿ホランド卿ソープリツチ、ブラツクストーン、ビユート及グラフトンの如き、即ちそれであつた。

二、彼は始終ロンドンにゐた人に相違ない。さうでなければ、あれほど速に答辯反駁を新聞紙に寄せる譯に行かない。たまたま二三週間以上旅行でもしてゐなくなる時は、一々ウツドフヲールに斷つて行つたらしい。

三、相當年配の人であつたことも確實に見える。元氣のいゝ筆つきから察すると、若々しさうだが、二十代の若さではなかつた。『余がこの世に於ける永き經驗の後』（After long experience of the world）など書いたこともあれば、前に擧げた跡倫の案内をことわつた書面の『年と恰好がふさはしからず』

(My age and figure would do little credit to my partner)の一句もある。三十代ならば四十に手に届くところ、恐らく四十以上の人であつたらうといはれてゐる。

四、宗教は英國教會の教義を奉ずといつてゐるが、時々さうでもなさゝうなことを言ふ所から見ると、宗教上の意見は自由に近かつたらしい。少くともその點では熱狂的でなかつたことゝ察せられる。

五、政見は英國國民の憲法上の權利を自覺せしめ、どこ迄もこれを擁護せんことを主眼とした。時の大官を痛罵するに當つて、その用語措辭は過激に流るゝこともあつたが、その思想は言葉ほどに急激ならず、彼は『腐敗選擧區(ロッテン・ボロー)』の廢止にも反對して居たし、共和政治にも反對した。

六、相當の財産があつて、衣食に困らぬ人であつた事はたしかである。投書に對しても、著書に對しても、一切報酬はうけて居ない。ウッドフヲールがジューニアスの援助を得て、その書簡集を發行せんとした時、その書物の利益の半額を贈らうとしたのを拒絶し、そんならジューニアスの名で何處かの慈善機關にでも寄附しやうかと申し出でたに對し、『余は全く金錢に望なし(I am far aboveall pecuaiary views)と謝し、たゞ出來るだけ立派に皮製の表裝を施し金ぶちにして、背にジューニアス一卷、二卷と金文字を入れた書物一部だけ送つて呉れとのみ注文した。又國王に對する上書が問題となつて、ウッドフヲールが起訴された時、若し有罪の判決でも受くることがあつたら、これに要した費用がどれほどになるか知らせて呉れ、一切私の方で辨償しやうと申込んだ。金のない人には出來ない事である。

七、大學に學んだかどうかは分らぬが、兎に角高等の教養を積んだ人である事も、疑を容れない。殊に歴史と語學の造詣なみならず、憲法に關する智識も深かつた。法律家ではないと、自らも語つてゐるし、實際法律を職としてゐる人ではなかつたらしいが、法律學上の智識も相應にあつた。語學はフランス語に通じてゐたことは勿論、ラテン語にも精通してゐたと見えて、かれの私信中には、リギーや、タシタスや、ヴーヂルや、シセロや、クインチリアンや、ホーレースの語句を自由自在に縷々と引用してある。

八、法律家でもなかつたし、上下兩院いづれの議員でもなかつたし、貴族でも、僧侶でもなかつた。議員でなかつた事は議會の傍聽に苦心したことで分るし、僧侶でなかつた事は僧侶の使ふまじき言葉を使つてゐるのでも知れる。たゞし彼には軍事上の經驗があつたらしい。この點は諸說ほとんど皆一致して居る。

丸、宮中に出入した人が、出入しないまでも、餘ほど宮中に接近した人であるらしい。貴族ではなからうが、宮中に出入し得べきほどの身分の人であつたらしい。政府及宮中の内情に通じてゐた事は驚くべきほどのものであつた。閣員間の陰謀、爭鬪、政府がまだ發表しない諸提案、クラブやロンドン市の内幕話など掌中の物を探るが如く知つてゐた。何處へ何といふ軍隊が派遣される、誰が何といふ官職に任免さるゝ、宮中のお惣菜に何が用ひらるゝかといふやうなことまで知つてゐた。サー・ハリス、ニコラスの『ジューニアスの發見』中に『彼は如何なる方面からも情報を得た』とて、次の如く書いてある。

『若し秘密の遠征が準備中であつたら、彼はこれを知つてゐた。若し戰爭が近づいてゐたら、オレンヂ又はココ・ツリー(註、その頃大官貴族の集まれるクラブ)にどんな人々が出入するか、一切前以て知つてゐた。若し官省に異動があるなら、彼は何人よりも前にこれを發表した。若し某の貴族が侮辱を受けたとしたら、一番にこれを摘發する者はジューニアスであつた。ロンドン自治體、市民の私黨、幷にクラブの事は、何もかも彼に見えすいてゐた。宮中と雖も彼には神聖にして侵すべからざるものでなかつた。その私室の秘密も臺所の秘密も彼はよく知つてゐた。『或るえらい方はコーデアル(酒)を大分召し上つた』ともいつたり、王族方の間にいらだたしい事があつて、(その心持を洽かにおちつける爲に)一週間ジャガ藷ばかり召し上ることになつて居る』とも書いた。新聞印刷人の知るべき事さへ、ジューニアスはウッドフォールよりもよく知つてゐた。『新聞に出てゐるヹルヂカスとはホキットワースの事だらう、私はあんなものを信じてゐない』とか『リカルガスとはケントといふ若い男だ』などいつてゐる。』云々

實にも彼は他人の匿名をちやんと心得てゐて、しば〲相手をまごつかせた。ヒルスボロー卿がジューニアスの辯難に對して、クレッアスといふ假號で答辯を試みたところ、ジューニアスは忽ち見破つて、一層辯難の勢を加へたことがある。同じ手でグラットン卿をやりつけたことは前に說いた。

ジューアニス研究に興をもつたジョン・メースン・グード博士は以上の推測を大體に一括して、

『ジューニアスの書面の筆者は、高等の教育を受け、語學、法律、及英國の憲法と歷史とに精通したイギリス人であつた。彼は、裕福といへぬまでも、生活には苦勞のない人であつて、名譽を重んじ、物事にけち〲せぬ人であつた。彼は他人の窮乏、殊に自分の爲に起つた他人の難儀を救はんとする

情愛と資力とを併せて持つてゐた。彼は内閣員と秘密の交際あり、一切の秘密を打ち明けられてゐた。彼は浮世の辛酸を嘗めたと誇り得るほどの年頃であつた。一七六七年から一七七一年までの全部と、一七七二年の一部は、ほとんど常にロンドン又はその附近に住んでゐて、其の時間の大部分を政治問題にさゝげ、いろ〳〵異なつた署名の下にその政治上の意見を「パブリツクアドバタイザー」の紙上に公けにした。かれは生得、氣の早い、怒り易い、短氣者で、兎もすれば政治上の僻見に陷り、個人的憎惡の念に驅られたが、しかし彼は高邁なる獨立の精神を有し、眞正直に憲法の大義を守つて、之を維持せんが爲には、恐るゝ所疲るゝ所を知らなかつた。彼は自ら持する所の素行に於ても、人に對する所の作法に於ても、嚴格であつた。自らは英國教會の一員と稱して居た。英國の法律には通じてゐたが、法律を職とする者ではなかつた。」

と言つた。恐らく最も簡明にジユーニアスの人となりを說き得たものと思はれる。

七、彼に擬せられた人々

ジユーニアスに關する書物は隨分ある。書簡を集めたものだけでも、相應に數多いが、その中にジユーニアスが嚴重な校訂の下にウツドフヲールが編輯したジユーニアス書簡集二卷は、その後二卷にまとめられて、ボーンのスタンダード・ライブラリーの中に加へられてゐる。この書はクラシスツクスの一と呼ばるゝだけあつて、二卷本の立派な美本（エヂシヨン・ヅ・ルツクス）まで出來てゐる。

英國史又は英國新聞史には、どれにもジユーニアスの事を載せざるはないが、ジユーニアスとは何者であらうかといふ問題だけを取り扱つた著書も相應にある。何でも大小合せて百餘種あるさうなが、私でさへ二十種ほどの著者と書目は知つてゐる。

かやうに各方面からジユーニアスを研究した結果、彼が出現以來、今日までの間に、彼に擬せられた人は、三十九人ある。この中には、強ひて自ら否みもやらずに、そのまゝ承認した體でゐる人もあれば、又自ら明かにジユーニアスを以て任じた人もある。前者はヒユー・マコーレー ボイド、後者はリー將軍の如きを擧げ得る。（註の九）

三十九人の中で、日本にも知られてゐる人々を少し擧げて見る。第一はエドマンド・バークである。しかしバークはしば〳〵議會でジユーニアスを論評して、時には口を極めてこれを賞賛

してゐる。バークほどの人物がそんな見えすいた芝居は打つまいと言はれてゐる。その上文體が兩人全く違ふ。バークとするの説はサミユール・ジヨンソンも信じて、『バークを除いて、今時あれほどのものを書き得る者はあるまい』と言つた位だが、バークはジヨンソンに對して、斷じてその然らざる由を親しく語つたといふ。

第二は例のジヨン・ヰルクスだが、これは殆ど問題にならない。第三はチエスタフイールド卿であるが、卿はジユーニアスの書簡の出さかる頃、病氣重態で、間もなく死んでゐる。第四にチヤタム卿ヰリアム・ピツトといふ説もある。恐らくジユーニアスはチヤタムと親交あつて、これから始終材料も得たらしいが、チヤタム自身でないことは、初の頃チヤタムを攻撃した一事を見ても知られる。第五にジヨン・ダニング(後のアシユバートン卿)は、年齡、門地、才能、學識、機智、嘲罵癖、ロンドン住居、及政見に至るまで、何から何まで似てゐるが、彼は司法次官のやうなソリシタ・ゼネラルの職にあつた。ジユーニアスが法律を職とする人でないことは衆説の一致する所でジユーニアス自らも『余は法律を職とせず』といつて居る。ダニングは嘘をつくやうな人でないから、この第五説も取るに足りない。この五人の外に『ローマ衰亡史』の著者で聞えたヱドワード・ギボンや政治家のホーレース・ワルポールなども數へられた。

いろ／＼名は指されたが、どれも難點があつて、いづれもそれと確かめ兼ねた中に、一番有力な候補者として今日まで多くの人に認められてゐるのは、サー・フイリツプ・フランシス(Sir Philip Francis)である。

ジユーニアスの名が『アドバタイザー』の紙上から消えて後四十年。一八一三年に至つて、ジヨン・テーラー(John Taylor)なる人が、ジユーアニスの正體と見つけたとて、このサー・フイリツプ・フランシスを擔ぎ出して來た。フランシスは僧フランシス博士の子、一七四〇年アイルランドのダブリンに生れた。十六の時内閣大臣フヲツクスに雇はれ、次いでピツト(後のチヤタム)に仕ふることゝなつた。其後相次いでブライ將軍キヌール伯爵に使はれたが、一七六二年陸軍省に入り、職に留まること十年にして、一七七三年印度ベンゴール政廳の吏員に任命せられた。三年の後印度總督ウヲレン・ヘスチングスと決鬪して重傷を負うて英國に歸つた。一七八四年下院議員に選擧せられて一八〇七年に至り、退隱の後は專ら政治上の著述と新聞の投書で餘生を送つた。死んだのは一八一八年である。フランシスの事蹟といへば、ジユーニアスの筆者であるといふ點が

一番名高い。それほどにフランシス説は勢を得た。

テーラーがこの説を唱へた根據は、經歴の年月が兩者相一致すること、文體と筆蹟の似てゐる事、性急な所が共通である事等である。なるほど一七七三年に印度に出かけた人だから、その年から消えてなくなつたジューニアスを説明するには年代がよく合ふ。晩年著述と投書とで日を送つたといふ事もジューニアスの晩年らしく見える。それやこれやでフランシス説は忽ち世間の認むる所となつて、ブルーム、カムブル、マホン及マコーレーの諸卿も皆、これに贊成を與へ、其他法律家や文學者の間に同意見を唱ふる者が少くない。後、筆蹟鑑定の專門家チャールズ・シャボーなる者『ジューニアス筆蹟の專門的調査』(Charles Chabot's The Handwriting of Junius Professionally Investigated) の一書を著はし、筆蹟鑑定術の上から、ジューニアスとフランシスの筆蹟が全然同一なることを論じたので、いよ〳〵以てフランシス説は確乎抜くべからざるものゝ如く認められてしまつた。今日では、一般にフランシスなる事疑を容れずと迄で認められてゐる。史家スタンホープの如きは、その『英國史』中に、ジューニアスのフランシスたることは、もう確定した事實であつて、今更何を疑ふぞといはぬばかりの調子で、この説に同意を表してゐる。

百五十年前の英國にあつた事實を、百五十年後の日本に居て、考證的に研究するといふは、容易に出來る話でないから、私はこれに對して兎角の意見を述べる資格を有しないかも知れぬ。しかし私の見た二人の筆蹟は似ても似つかぬほど違つてゐる。ジューニアスのは細い奇麗な字で如何にも學者風の筆つきだが、フランシスのは日本人でも書きさうな、やゝ肉太の子供みたいな字である。殊にフランシスは使はでもよい處に無暗に頭文字を使つてあるのが、恐ろしく目にさはる。ジューニアスがわざと筆蹟を晦ましたのだらうといふ説もあるが、六年間自分の癖を矯めて筆蹟を晦ましどほしに晦ますといふが如き事は實際に出來るものでない。

それのみならず、テーラーのこれを言ひ出した事情が頗るたよりないものである。彼は初めフランシスの父のフランシス博士を以てジューニアスにする積りでゐたが、これをその子のフランシスに相談して、『無用の詮索だて』とさん〴〵に冷やかされた。その上『年數もたつたことであるし、今まで幾たび企てられても、こと〴〵く失敗に終つた事ではあるし、ジューニアスの正體を見極めやうなどは全然望のない (perfectly hopeless) 事だ』とまでいひ聞かされた。その上、考へて見ると父では年が合はない。そこで氣が變つて、父のフランシス博士から子の

フランシスに河岸をかへた。而かも初め父にするつもりの時は片々たる小冊子であつたものを、子のフランシスにしてから急に堂々たる四百頁の大冊に書き足した。その大部分はフランシスの議會に於ける演說と、ジユーニアスの文體との比較で占めてゐる。

この再出版の前にテーラーはフランシスに對して、異存はないかと聞きにやつたら、『私の私行に立ち入つて惡聲を放つやうなことがない以上、御自由に』との返事であつた。しかしその頃發行してゐた『モンスリー雜誌(マガジン)』の主筆がこの書に關する社說を書く積りで、意見を聞きにやつた時、『御丁寧な御來書だから御返事するが、たとこの問題の僞ばかりだつたらお斷りしたらうと存じます。貴下が馬鹿々々しい、惡性の噓(A silly malignant falsehood)を世に傳へんことに手傳はるゝと否とは、貴下の御隨意ですが、私に取つて何等無關心のことであります』と、フランシスは返事した。『馬鹿々々しい惡性の噓』とまで本人が言つてゐる事を、いくら百五十年後の日本でも信ずるには當るまいと思ふ。(註の十)

フランシスであらうが、なからうが、そんなことは格別われわれに關係のある問題でないが、ジユーニアスに對するわれわれの興味はその誰とも知れぬ所に在るので、フランシスのやうな男にしてしまふのは何だか惜しい。それ位ならむしろ何處までも誰やら分らぬものにしておいて、キルクスの言葉のやうに『雲の上、暗の中に禮拜』して居りたいやうな氣がする。

其處へ最近に至つて、全然新しい方面から、新しい人物が紹介されて來た。それはトマス・ペインだといふ新說である。若しペインとすれば、ジユーニアスの歷史にどれほど光彩を添へるか知れない。以下そのトマス・ペインを敍してこの篇を結ばう。

八、トマス・ペイン(Thomas Paine)

ジユーニアスに關する著書が最近に二つ出た。一つは一九〇七年ロンドンで出たジエームス、スミスの著『ジユーニアスの正體(James Smith's Junius Unveiled)で今一つは米國アラバマ州バーミンガムで出たヰリアム、グレーヴスの『ジユーニアスいよいよ發見さる』(William H. Graves' Junius Finally Discovered)である。前者はジユーニアスを以て史家ギボンとしたものでこれは今までにもあつた說であるし、見たところ格別の新說もない。後者のグレーヴスの唱へたペイン論はたしかに傾聽に價する。

そもそもペインとは何者ぞや。

ペイン、名はトマス。一七三七年一クエーカー宗徒の家に生れた。初はコルセットの製造職人に仕立てられたが、傳手があつて、地方の收税吏に採用された。この税務官といふは存外書を讀み文を綴る時間のあつたものと覺えて、ロバート・バーンスもこの間に詩を書き、ナサニエル・ホーソーンも勤の片手に小説に筆を執つてゐる。ペインも格別高等教育を受けた人ではないが、税務のひま／＼に獨學でよほど勉强したものらしい。かれの文才は間もなく、儕輩の間に認めらるゝやうになつた。丁度その頃英國の税務に從ふ官吏はいづれも待遇が惡くて不平の聲が到る所に聞えた時であつたが、ペインの同僚はペインに賴んで、この窮狀を上司に訴ふる文を書かせた。この書面は非常な名文で。これを手にした上司は思はず驚歎の聲を放つたといふ。ところがこの文がペインに禍して彼は職を免ぜられた。それから二年ばかりロンドンの某女學校の敎師を勤めたが、一七六六年ペインの願によつて、再び收税官に復職せられた。この間に彼は各種の問題に關して評論の筆を執つた。

そのうち彼は當時ロンドンにゐたアメリカの使節ベンジャミン・フランクリンに知られた。これはウイリアム・ピットの紹介だとも傳へられてゐる。兎に角フランクリンはこの才の用ふべきを知つて、之に勸めて、アメリカに移住せしめた。これが一七七四年のことである。

ピットと緣故が深かつた點もジューニアスらしいが、一七七四年にアメリカに去つたといふ點も、一七七二年限りで姿を隱したジューニアスの後半生を說明するに都合がいゝ。その上アメリカに去つた後のペインの行動は、尙々以てジューニアス臭い。

アメリカに去つたペインは『フイラデルフイア雜誌』の主筆記者となつて、早くも米國文壇に知らるゝやうになつた。丁度その頃米國では英國の失政に對する不平の聲が最高調に達し、何時叛亂が勃發せぬとも測られぬ物騷な時代であつた。いはばペインの如き人には持つて來いの時代であつた。彼は空しく斯ういふ好時機を逸する者でない。果然彼は奮然として起つて、かれの名著『常識論（コンモンセンス）』一卷を匿名で公けにした。

この書は、如何にして時の難局に處すべきかを米國人に敎へたものである。その言ふ所に從へば英國と戰を交ふるの外はなかつた。この書は實に米國の獨立を唱導せる第一聲であつた。今までイギリスに對して不平はとなへながらも、如何にかして英國々王及閣臣の了解を得て、當面の問題を解決し得るものゝやうに一縷の望をつないでゐた米國全土の民はこれを讀んで愕然とした。王に叛くは叛逆であつて、叛逆は口にするを死に畏

れた所のものである。それをペインはづけ〲と何の會釋もなく言つてのけた。これは後の話であるが、英米兩國がいよ〱戰を開いて後も、ワシントン、ジエフアスン、アダムスの徒は、いつかは再び英國と和すべき時のあるものとのみ思つてゐた。獨立などいふことは腹の底のどこかに潛んでは居たらうが、公然と之を口にすることは避けた。これを公然と說いて獨立の決心を固めしたのは實にこのペインである。國名を『アメリカ合衆國』とつけたのもペインの筆に成つたと傳へられてゐる。獨立の宣言もペインの意見に依つたと傳ふる者があるが、これはジエフアスンの筆であること今さら爭ふべくもない。たゞこれと入れちがいに、『常識論』の著者はジエフアスンだらうと傳へられたことがある。

好時期の好著である。ペインの『常識論』は初版四千部またたゝく間に賣り盡して、重版又重版を重ねた。これほど賣れた小冊子もなければ、これほど速に反響のあつた書物もない。アメリカ全土の民は一人も殘らずこと〲くこれを讀んだといふ。これに依つて、彼はペンシルベニア大學からエム・エーの稱號を授けられ、アメリカ哲學協會の會員に推薦された。この書が匿名で發行された所に、如何にもジユーニアスらしい所がほの見える。

斯くて一七七五年から英米の間に戰は開かれ、ペインも劍を執つて戰に加はつた。しかし何分ヨーロッパの大國を相手の戰とて、氣ばかりいくらあせつても、金は足らず、兵器は足らず被服不足、食糧不足、到底アメリカに勝目あるべくも見えなかつた。殊に開戰の翌年に至つては窮狀は一層を加へて、兵士は跣足のまゝで戰ふといふ慘狀を呈した。戰爭は永びくし、敗北はつゞくし、追々に軍隊を棄てゝ逃げ出す者は加はるし、この末如何に成り行くことかと、一同悲觀の極に陷つた。ワシントンが現狀の不安を議會に訴へたのは、この時であつた。

その時恰も戰敗れて退却中のグリーン將軍麾下の一兵卒として活動してゐた、わがトマス・ペインは又もや猛然として筆を執つて立つた。彼は前著『コンモン・センス』をそのまゝ取つて己の假號に用ひ、『クライシス』危機）と題した小冊子を刊行して、アメリカ人に對する激勵の辭を與へた。

『世には人の精魂を試錬すべき時期あり。夏だけの兵士、日の照る折だけの愛國者（Summer soldisers and sunshine pat iots）は今日の如き危機に際して、その國家に對する任務を棄てゝおびえ走らんも、能くこの試錬に堪へ得る者は人の敬愛と感謝とを償す。それ暴政は容易に制服すべからず、併し爭が難ければ難きだけ、その勝利の光は赫々たるべし。

それ安く求めたる者は輕く取り扱はるゝものなり。高いといふ事が一切の物に價を與ふ。神の賣らせ玉ふ品々に然るべき代價をつけんことは、たゞ神のみぞ知ろし召す。自由といふが如き尊き品が高き代價をつけらるゝは正に當然也』といふが、『危機』の冒頭であつて、彼は今の如き難局に際して、隱忍自重能く堪ふべからざるに堪へて、初めて、之によりて得たる自由の貴きを知らんといふが如き意味で、米人を激勵し鞭撻した。

この書は目覺ましい成果を擧げた。さしも絶望に近かつた一國の民心を一擧に引き立てた。しぶ〲戰つてゐた者も、心から戰ふやうになつた。軍隊を脱して走つた者も歸つて來た。ペインの片々たる小冊子に依つて、あはや倒れんずる自由の大義を旣倒にかへした。一に全くペインの文章の力であつた。

この冊子は『コンモン・センス』と同じく、その雄渾なる筆と、その剛直なる意氣とによつて、アメリカ全土の民に愛讀せられた。恐らく初は一回きりでしまふつもりであつたらうが、彼は之を手初めとして、二回三回相次いで、その續篇を公にし、いよ〲戰勝つて又危機を說くの要なきに至るまで、書き續けて、總數十六卷、頁數二百三十に及んだ。

この書の賣上部數五十萬を越え、賣上高二十五萬弗の巨額に上つたが、彼はその内から僅かな發行實費を引き去つたのみでほとんど全部を擧げて軍資の中に獻じた。ペインが文筆の上のみならず物質的に援助を與へたことは、この一事に止らぬ。革命軍が悲境に陷つて、軍資補給の急を告ぐるに當り、彼は率先して私財五百弗を投じ、廣く天下に義金を募つて、能く一百五十萬弗の大金を集め得たこともある。又戰の將に終らんとする頃ローレンス大佐と共に佛國に使し、國王ルイ第十六世から二百五十萬弗の金と兵器とを借り出して來たこともある。彼は文武兩道の外にも、斯くして獨立の戰を助けたのである

その金錢に淡泊な點もジユーニアスとペインは相似て居るが、さしも自分の書いたものが一世の評判となつてゐるにも拘はらず、依然として匿名をつゞけて、その筆者をあらぬ人に歸せられてゐても平氣でゐた點がやはり兩者相似てゐる。しかし、それよりも一層似てゐることは兩人の文體で、今ジユーニアスの書簡集とペインの『クライシス』とを讀み比べて見ると、そのきび〲した調子と、恐れず憚らず人に喰つてかゝる意氣込とは、どうしても同じ人としか覺えぬほどに似てゐる。ただ此處には双方の文を原文のまゝで此處に披露して、その相似たる點を示し得ざるを遺憾とする。

グレーヴスがジユーニアスをペインと疑ひ出したのは古い話

である。一八五三年、彼が高等學校の業を卒へて、大學に入る迄の休暇に小父の宗に客となり、其處の書庫で双方の著書を偶然讀み比べる機會を得て、その如何にも似て居るのに感づいたのから始まる。その以來グレーヴスはあらゆる書物を渉獵して、具さに研究を重ねた結果、いよ／＼これと見窮めて、その意見を發表したのは一九一七年である。尤も一八七二年に『ジューニアスの假面をはいで』(Junius Unmasked)といふ著が匿名の著者によつてワシントンで發行されてゐて、これにはグレーヴスと同じく、ジューニアスをペインと斷じてある。思ひ立ちの日からいふと、グレーヴスの方は早いが、發表した日附からいへば、グレーヴスの方がおそい。それを氣にしてグレーヴスは色々辯解してゐるが、辯解はむしろ無用の事で、己れの前に同じ意見の發表されたものゝある事は、つまり己れが意見をたしかめるものと見て宜い。先人の意見を竊んだものと疑はるゝことを恐るゝが如きは、そも／＼末だ。

グレーヴスは兩者の相似た點につき、實例を擧げて、色々辯じてゐるが、くだ／＼しいから一々此に引用しない。その經歷とその文とその想の相似た點を一應明かにし得れば、私はそれ以上に立ち入る資格もないし、又希望もない。私は一七七三年にぴたりと火の消えたやうに英國から消えてなくなつた者が、その翌一七七四年に突然米國に現はれたとする事に、限りなき興味を覺える。それが如何にもジューニアスのしさうな事に思はれて、さう考へる事がジューニアスの名を辱しむる所以でないと思ふ。どうもフランシスなどよりもペインをジュニアスにしておきたいやうな氣がしてならない。ペインのその後の動靜を見るに及んで、ます／＼その感を深くする。

然らばペインその後の動靜は如何。

日本なら山田長政、支那ならば魯仲連、イギリスならばバイロン卿、南アメリカならばボリーヷーなど、いづれも自分の國よりは他國の世話をやくことに浮身をやつした者であるが、わがトマス・ペインも亦此の類の人であつた。

彼は飄然イギリスを去つてアメリカの獨立を助け、アメリカの獨立全く成るに及んで、又飄然としてフランスに去つた。一七八七年四月十六日のことである。フランスに留まつた間に佛國革命の進行を目擊し、それから又英國に歸つた。その時エドマンド・バークが例の『佛國革命の考察』(Reflections upon the French Revolution)を書いて、手ひどく革命を攻擊したのを見て、革命を米國にも佛國にも實見して來た彼は、直ちに二百七十餘頁の『人の權利』(The Rights of Man)なる一書を著はして、これに答へた。これには流石のバークも完膚なき迄に

やりつけられた。初はバークの書も相當の好評を博してゐたがペインの書一度出づるに及んで、忽ちこれに厭倒されてしまつた。バークの書が一千部賣るゝ間にペインのは一萬部賣れるといふ始末であつた。ペインのこの書はペインのあらゆる著作中の最大傑作と稱せられてゐる。

ペインはこの著中に共和政を辯護して、王政及英國の王政に痛撃を加へた爲、イギリスの國王も内閣も議會も且つ驚き且つ怒り、この書に關係ある者はそれぞ〵禁錮罰金の刑に處せられた中に、ペインは著者として起訴され、審理され、而して有罪の判決を受けた。即刻彼を逮捕すべき手續は運ばれたが、その時恰も(一七九二年九月)彼はフランスのカレー選擧區から佛國國民議會の議員に選擧せられたので、彼は急ぎフランスに出かけた。若しペインが英國の領土をはなるゝこと今半時後れてゐたら、恐らく彼は捕へられて、終生をロンドン塔の獄裏に送つたことだらうといはれてゐる。

佛國議會に於ける彼が前途は必ずしも薔薇の咲いた道ばかりではなかつた。例の王政顛覆と共にルイ第十六世を死刑に處すべしとの議が起つた時、ペインは前日米國の軍資を王の手から借り得た恩義を忘るゝこと能はず、極力王の爲にその助命を請うたが、この事仇となつてペインはマラ、ロブスピエールの徒から猜疑の目を以て睨まるゝ事となつた。すなはちロブスピエールの命によつてすべて英國生れの國會議員は禁錮せらるゝことゝなり、ペインもルキサンブール監獄に拘禁せらるゝこと一年に及んだ。その内世は『恐怖時代』に入つてルキサンブール獄中の囚人一齊に首刎らるゝに至つたが、彼は不思議な事から不思議な命拾ひをした。ペイン自身の手記に依れば、すべて斬首さるべき者に對しては、夜中その獄舍の戸に記號をつけおき、翌日この記號のある者だけ引き出すことになつてゐたが、丁度獄吏がペインの所へ來た時、幸にも監房の戸が開いてゐたので、獄吏は夜陰にそれとも知らず、戸の裏面に記號をつけて行つた。後にこの開いた戸を閉ぢたから戸の表に何等の記號も見えなかつた爲、ペインは危き命を免れたと書いてある。

それから幸か不幸か、ペインは獄中でひどい熱病に罹つて約一個月何にも覺えなかつた。それが爲死刑が段々延期されて、正氣に歸つた時は、もうロブスピエールが失墜した後であつた。折よく其處へ米國大使モンローが新に就任して佛國政府にペインの引渡を求めた結果、ペインは許されて、モンローに引き取られた。

しばらくモンローの客となつてゐるうち、議會が滿場一致を以てペインの復職を求めた。そこでペインは又もやその意に任

せて議員の席に着いた。若しロブスピエールが權勢を振つてゐた頃、議會がペインの穩健なる意見に聽從してゐたら、左しもフランス革命の最後を汚した慘虐なる『恐怖時代』は出現してゐなかつたかも知れない。

議會を退いて後、彼は尙フランスに留まつて著述を業とした。アメリカに歸らうと企てた事がしば〳〵であるが、英國が監視してゐて、途中に彼を捕へやうとするため、思ひを果すこと能はず、やつと一八〇二年の九月、彼は十五年ぶりで故國に歸ることを得た。その時は知ると知らざるとを問はず、アメリカ人は心から彼を歡迎して、盛大な歡迎會が打ちつゞいて開かれたといふ。不在中、かれの財產は友人の保管する所となつてゐて、其の額時價六千ポンドに上り、その利息が一個年四百ポンドもあつたので、彼は生活に不自由することはなかつた。斯くて彼はこれを以て靜に餘生を送り居るうち、フランスの獄中生活が甚しくその健康を害してゐた爲か、遂に一八〇九年を以て、七十餘歲の高齡でその變化極まりなかりし一生を終つた。

グレーヴスの著は必ずしも名著でない。編纂の體には遺憾の點は數々ある。同じやうな事實を幾度もくり返したり、くり返す每に少しづゝ前のと違つてゐたり、その他ジョージ第三世の年を誤つたり、ジューニアスの書簡の數を勘定し損つたり、粗漏といへば、隨分粗漏がある。この故に精密の上にも精密なるべき考證的の著書としては、私としても非常に行き屆いた作といふには躊躇する。たゞ私は考證價値の如何を問ふよりも、何となくペインをジューニアスとすることに言ふべからざる興味を引かれる。

忽然として來り、忽然として去り、世に在ることわづかに六年（正味は三年）にして他が四十年五十年に成し得べき名を成し、一意英國國民の權利を擁護せんことを念として、何等知られんことを希はず、利を求めんことを欲しなかつた、かれジューニアスは、英國を去つて後、忽然として米國に現はれ、彼が前日英人の敵として攻擊したる、その同じ國王と內閣と議會とを、今度は米人の敵として相手に取り、筆に劍に奮鬪の限を盡して、事成るの後は又何等求むる所なく佛國に走り、佛人の爲に生死を賭して戰へる後、此處でも亦何等求むる所なくして米國に立歸つた。かれペインと、何處やらに相似た趣があるではないか。

嗚呼ジューニアス消えて此に百五十年。百五十年つひに再びジューニアスの如きを見ず、ジューニアスの如きを必要とする時代はしば〳〵ありながら。

（註の一）Lord Chief Justice を假に斯く最高法官と譯しておく。

大法官（Lord Chancelor）のことには非ず。日本に類のないものゆゑ何と譯して見たところが耳らぬ。

（註の二）この文に限らず、總じてジューニアスの如きクラシカルな文は、丁寧に逐字譯を施すのが然るべき所であらうが、それでは却つて意味の通じ兼ぬる所が出て來ると思つて、すまぬ事とは知りながら、處々多少の增減加除を加へて相當自由な譯を試みた。それでも原文の趣が傳はらぬか、意味が分り兼ぬるかの二つに一つで、我ながらまづいものだと恐縮してゐる。さりとて一々原文を引用するのも煩雜を加ふるばかりだから、短いものゝ外は一切見合せた。大方の寬恕を祈る。

（註の三）このウッドフヲールは、ヘンリー・サムスン・ウッドフヲール（Henry Sampson Woodfall）といふ。『アドバタイザー』を父よりうけ次いで、記者としても經營者としても成功した。その父はヘンリー・ウッドフヲールとて第十八世紀中葉の新聞經營家として知られてゐる。彼が弟のキリアム・ウッドフヲールは兄よりも有名な記者で、『記憶ウッドフヲール』の名は英國の新聞史上に高い。彼は議會の傍聽筆記の許されなかつたその時代に、何時間でもぢいと坐つて、食事も取らずに、目をつぶつたまゝ議事を傍聽し、新聞社に歸つた後、一行のノートにも手よらず、一に只彼が强様なる記憶のまゝに、その議事の傍聽記を起草して、幾人の演說でも、何時間の議事でも殆ど間違なく傳へ得たといふ人である。この傍聽記は彼が勤めてゐた『モーニング・クロニクル』の聲價を高めて、一時は兄の新聞と競爭の姿であつた。

（註の四）ジューニアスが一七六九年以前に用ひた變名

Popricola; Anti-Sejanus, Jr.; A Faithful Monitor; Correggio; Y. Z.; Downright; Mnemon; Anti-Stuart; C.; Q in the Corner; Bifrons; Valerius; Fiat Justitia; Pomona; L. L.; Lucius; Atticus; Brutus; Why?; Junius; Moderator; Anti-van-Teugue; Insomnis; Cleophus; Temporum Felicitas.

（註の五）ジューニアスが一九六九年以後ジューニアスの名と同時に用ひた變名

Junius; Philo-Junius; Simplex Amicus Curiae; Junia; Augur; A. B.; Messala; X. X.; Y. Y.; Domitian; Moderatus; A Labourer; Grey Cooper; Testis; Teticulus; Phalaris; Anti-W.; Vindex; An Englishman; G. W.; A Whig; Henricus; An Innocent Render; Anti-Fox; Cumbriensis

（註の六）ジューニアスが一七七二年ジューニアスの名をすてゝ後用ひた變名

Anti-Belial; Juniper; Veteran; Scotus; Arthur Tell-Truth; Nemesis

（註の七）ポープの『エッセー・オン・マン』は人の知る所であるが『エッセー・オン・ウーマン』は、その頃のカンタベリー大僧正の道樂息子トマス・ポッターたる者の作つたパロデーである。ポープの『マン』は『人間』の意だが、故さらにこれを『男』の意にとつて、『ウ

ーマン(女)』を之に對せしめた所に技巧がある。『エッセー』も『オン』もポープとは似ても似つかぬ意味に取つたもので、標題だけ聞いてもいかゞはしいものたることは察せられる。餘りに馬鹿〳〵しいから、わざと譯せずにおく。斯う申しても氣のつかない方は字引を御覧下さい。

(註の八) Bontetort と書くが、何と發音するのか、私ははつきり知らない。言葉がフランスめいて居るから、假にフランス風に發音したが、何大方の敎を待つ。

(註の九) ジューニアスと疑はれた三十九人

Colonel Barre; Hugh Macauley Boyd; Edmund Burke; Bishop Butler; Lord Camden; Lord Chatham; Lord Chesterfield; M. Delolme; J. Dunning (Lord Ashburton) Samuel Dyer; Philip Francis, D. D; Sir Philip Francis; Henry Flood; Edward Cibbon; Richard Glover; Henry Crattan; William Greatrakes; George Grenville; James Grenville; William Gerard Hamilton; James Hollis; John Kent; Sir William Jones; General Lee; Charles Lloyd; Laughlin Maclean; Duke of Portland; John Roberts; Rev. Philip Rosenhagen; Lord George Sackville; Earl Shelburne; Earl Temple; John Horme Tooke; Horace Walpole; Alexander Wedderburn (Lord Loughborough) John Wilkes; James Wilmot, D. D.; Daniel Wray, Thomas Paine

(註の十) この事バーカーの『サー・フイリツプ・フランシスを以てジューニアス書面の筆者とする說の否認』(E. H. Barker's The Claims of Sir Philip Francis to the Anthorship of Junius Letters, Disproved)といふ恐ろしい長たらしい下手くそな標題の書物に出てゐるさうだが、私はまだその書を見たことがない

山房内外

島木赤彦

斯ることもあり

幼子が母に甘ゆる笑み面(おも)の吾(あ)をも笑まして言(こと)忘らすも

秋去冬來

秋ふけて色ふかみゆく櫟生(くぬぎふ)の光寂しく思ほゆるかも

山の上(うへ)の段々畠に人動けり冬ふけて何をするにやあらむ

この眞壁硝子の窓の青むまで小春の空の澄みにけるかな

赤岳温泉行途上

皆がらに風に搖られてあはれなり小松が原の桔梗の花

わが馬の歩み自ら止まりて野中の萩の花喰ひにけり

秋の日の日でりを熱み草の中に入りてぞ歩むあはれわが馬

馬を下りて苺を食めり野の末に遠ざかる山の低くなりつる

野苺の赤き實いくつ掌にのせて心清しく思ひけるかな

野苺の赤實の珠は露をもてり心鮮けき光といはむ

斯くゆゑに我は山に來野苺の一つの實にも光沁むもの

山かげに深山雀といふ鳥の蜩に似て鳴くあはれなり

山の上に殘る夕日の光消えて忽ち暗し谷川の音

温泉より千段瀧に至る

白藤垂る木のたたづまひ皆古りて心に響く瀧落つるなり

谷かげに苔むせりける仆れ木を息づき踰ゆる我老いにけり

温泉數日

沸かしたる山の朝湯に蜘蛛も蛾も命終りて浮びゐにけり

山の上に寂しく見ゆる大岩を道心岩と名づけそめけむ

岩崩えの赤岳山に今ぞ照る光は粗し日に沁みにけり

板縁はいたく穢れたり一しきり通り過ぎたる雲と思ひしに

栂山の茂りは暗し横さまに雨脚見ゆる風立ちにけり

栂の葉に音する雲は折りをりに小雨となりて過ぎ行かむとす

雲疾(はや)み現れ出でし山の上の空さやかなり七日月の影

雨霧の中に見えつる七日月あやしく明(あか)し晴れゆくらむか

山深く起き伏して思ふ口髭の白くなるまで歌をよみにし

かへらざる我に悔あり山ふかく心静まりて思ひ出でつも

栂の茂りただに黒める谷の入り恐れをもちて戀ひ思ふなり

高山ゆ雲を吹き下ろす風止みて鷽鳥(うそどり)の聲ややひゞくなり

明日立たな心惜しみに出でて見つ月さへ照れり谷川の水

谷川の音を惜しみて出で來(こ)しに月ののぼるは何の幸(さき)ぞも

湯の窓につづく白檜(しらべ)の葉の光霜と見るまで月照りにけり

黑瀧山

古泉千樫

大正十四年十一月二十一日、西上州に遊ぶ、病後初めての旅なり

岩山並の裾の家々軒くらくこんにやく玉を干しにけるかも

家々に掛けつらねたる蒟蒻だまの匂ひさびしく午すぎにける

冬日和こんにやく玉を粉に搗くと白きほこり立つ水車小屋の上

この道にいくつかめぐる水ぐるま蒟蒻だまわ搗きて居るらし

ことごとく蒟蒻だまは堀り取りし岩山畑に日の照りにけり

したたかに軒に掛け干す蒟蒻だま日かげすでにあたらずなりし

磐戸村佐藤氏宅に泊る

み山よりただに引くらしこの庭の筧の水のあまたらましも

山がはの鳴りひびきつつ夕ぐるるこの道のべにひとり立ち居り

二十二日、黒瀧山に向ふ

わが歩みかろきが如し朝川の鳴りてひびかふ道を行くなり

わたり行く南牧川(なんもくがは)の橋のべに赤くみのれる柿の木高し

泥鰌賣

うしろから泥鰌屋(どぢやうや)きたりぬ栗落葉(くりおちば)つもる山路をわが越え行けば

山がひの蒟蒻（こんにやく）どころの小春日に泥鰌（どぢやう）になひて賣りあるくなり

隣り信濃から來し泥鰌賣ゆすりゆすりと呼びゆきにけり

こんにやく玉掛け干す庭に泥鰌賣大き盤臺（はんだい）をおろしたりけり

夕（ゆふ）つかたまた逢へる翁（おきな）この里によく賣れけんや泥鰌賣るをぢ

黑瀧山

ふかぶかとつもる雜木の落葉の上朴の落葉の大きさびしさ

家いでてわれ來にけらしこの山の深き落葉を踏みつゝぞ行く

しづかなる初冬（しよとう）の山を戀ひくれば楓のもみぢ赤くのこれり

山のみ寺に近づきぬらしたかだかと大き靑杉日に照れり見ゆ

この山の寺の境内（けいだい）にそびえ立つ三つの甍（いらか）に天つ日てれり

あまそそる巖の黒岩のいただきゆほそく光りて瀧落ちにけり

山の上の冬日あかるし瀧の水ほそく落ちつつ音のさやけさ

天つ日はしづかに照りて黒瀧の巖の高岩ぬれかがやけり

さらさらと光りて落つる瀧の水わがたなそこに受けて飲みつも

冬日かげふかくさしたる山のみ寺の疊の上に坐りけるかも

山くだるわれをあはれみ寺の僧つつじを伐りて杖にくれたり

しづしづと山をくだりぬ黒瀧のみやまつつじを杖につきつつ

さわやかに岩ばしり鳴る川の音ききつつぞ來し君が家邊に

まがなしき現身持ちて山の道ここだもわれは歩みたるらし

山の村の冬きたるらし消防の演習處々に見えにけるかも

冬立つ廚

釋迢空

くりやべの夜ふけ　あか〱火をつけて、鳥を煮　魚を焼き　ひとり樂しき

はしために　晝はあづくるくりやに、鍋ことめかす　この夜ふけかも

米とげば　手(タ)ひら荒るれ、今はもよ。この手を撫でゝ　誰かなげかむ

年かへる春のあしたは　四十(ヨソヂ)びとぞ　と思へど　我はたのしまざらめや

物ら喰(ク)ひ　腹のふくれてたふれ寢(ネ)る　われをあはれぶ人　或はあらむ

人の世の嫁がとりみる寒き飯(イヒ)　底(ソコ)れる汁に　飽かむ我かは

物見れば、見る物ごとに喰はむと思ふ。むべ　わが幸も　喰ふに替へつる

前の世の我が名は　人にな言ひそよ。藤澤寺の餓鬼阿彌は　我ぞ

腹はれて魂おとす我なれば、餓鬼とよぶとも、苦しと思はじ

過ぎませる左千夫の大人は、牛の腹の臓腑を貪り　喜び給ひき

物喰みの「一切病ひ」に足らへども、かそけく　心うごくことあり

胃ぶくろに滿たば、嘔りてまた喰はむ。あまりちひさく　造られてけり

となりの音

うつり來し　ひそかごゝろはもりがたし。隣の家にあらがふ　聞けば

はらだちて　めをとのゝしる聲聞けば、我がいきのをの思ひ苦しも

生きの身の　しゝむら痛くひゞき來る　人うつ人のたなそこの音

さしなみの隣の刀自（トジ）のいき哮は　ひきはたかれて、響きけるかも

ひたすらになげうつ物の音響き、隣しづかになりて居にけり

あまりにも　隣しづかになりにけり。疊の上を　わが見つめ居り

怒り倦み　泣きつかれつゝ寢たりけむ　隣のめをと　明日は顔見む

あらそひし心なごみに　眠るらし　隣びとをや　さびしみて居む

くりやに　水音高く落したり。隣人らよ。さめろ　と思ひて

出勤前

この日ごろ　心もはらになりにけり。とる箸の色も、ありがたくあり

白飯（シライヒ）の湯氣立つ朝の　まだ暗き部屋に對ひ居、箸とりにけり

金太郎よ。今日のゆふげは早く來よ。きそも　をとゝひも　飯(イヒ)冷ゝて居し

わが家や　朝の飯にも、なまぐさきそへ一くさは　缺かれざりけり

もの忘れ

をとめらと　ことゞひ羞づること知らず、若き三十(ミソヂ)は　ありにけるかも

いとけなく　我とあそびしをみな子を、あはれと思ふ時は來にけり

あるき來て道にたゝずみ　思ふことあり。大きもの忘れを　しける我かも

冬來る庭

山茶花のはな散りすぎて、庭のうへに　あたる日の色　濃くなりにけり

庭に掃く木々の葉音の、つばらかに　今日は　心のかなひゆくかな

鳴門瀾潮記

中村憲吉

鳴門途上

阿波の海に潮立ちそめぬ打ちいでゝ淡路島を見れば磯もしら波

紀の海へ潮の落ちゆく刻ならし大毛の島の磯あらふ波

磯に出て鳴門を見ればうごきくる青海ばらにしら波のとぶ

鳴門よりながれ出でくる春しほのひろがり早き海となりぬる

絶えずして鳴門の波の打ちあらふ大毛の浦は松の砂濱

旅びとの我が行く靴に波ぬらし磯はあげたる藻の屑もなし

眼のまへに淡路のかすむ甚ふかさ阿波大浦回には潮とよむ音

淡路島向きて大きしその磯の潮のとよみも聞けばきこゆる

春汀旅情

春の日の鳴門の濱に旅ごころ我れにおぼゆる濱のうへの風

磯なみの高くしぶけば聲あげて淡路の島を呼ばむとぞおもふ

孫崎へ弓なりの渚の磯づたひ潮かひの波に旅びと我れは

嬉しくも磯の潮香に胸ゆらぐ鳴門へむかふ春日の旅に

旅びとの我れのみかはや磯づとふ里人も鳴門へ春の潮見に

春まひる渚にはゐると思ひしに鳴門からすの何處にも啼かず

すでにして潮のひきゆく阿波の門に波のあらさう音ぞたかみぬ

春潮俯瞰

我れも來て櫻散りがたの岬山に目したの海のいろを嘆かふ

岬山の小松の風がさやぐなべ迫門のうしほのはやくなる音

鳴門の瀨上の海はひろびろし波高みつつ潮のながれ來

天にひびく渦の鳴門と戀ひしかどただ海なかの川にしありけり

狹まれる鳴門にあれど海ばらを兩つにわけて內外ひろ庭

漕ぐ舟も下にたゆたふ阿波の門は海を瀧瀨の大河にせり

河のごと迫門にさわがふ潮見れば淡路の岸へわたる舟もがも

淡路の伊賀利山にもひびけやも鳴門のおとの今は大きさ

山ちかき淡路をまへにこの迫門をつぎつぎに下る大帆かけ船

潮の飛びいよいよ早し阿波の濱や淡路の阿萬も潮ぞひびける

騷ぎあふ潮瀨のしもは白なみの外邊につきて釣る舟あまた

山川の潮はつばめ飛ぶこの迫門の岩瀬は島の下りぬさぶしさ

海にして岩瀬あらはれ川となる迫門がうれしさ淡路をまへに

潮ひかば海ひくみかも淡路島磯ひと筋に濡れしあと見ゆ

夕渦潮

裸島へ下りゆきて見れば潮の干し岩秀へかかり落つる白なみ

鳴門の岩瀬が塞きし海ばらは二段になりて落ちて居りぬる

迫門ぐちの潮瀬に水の擦り合ひて卷く渦のあり湧きてながれへ

春の日の夕づきそむる飛島のめぐりに渦は大きくなりぬ

阿波灘にあらさう潮のなほ鳴れど逆しほはすでに廣くめぐらふ

飛島は潮流ののそとなり此處をしも渦と云はめや靜かにひろし

夕づく日淡路の島の磯なみの音もきこえず寂しくなりぬ

あらはれし鳴門の岩瀬染みて照る春のゆふ日は今日我れかなし

鳴門の大毛が島の山のうへゆ春の夕日を惜しみ去りぬる

海中の岩

阿波の門をわたりて居れば四國なる山へ落ちゆく春日の大きさ

暮れてゆく阿波の水門に鯛びとと言惜しみ別る我が旅今日を

日のくれの船もてとほり寂しけれ海なかの岩に潮あげて居り

鳴門よりて戻りてわたる撫養のうみ潮のながれは北へかはりぬ

かへり見る鳴門のおくは廣やかに海の庭みゆ夕日の波に

ゆふ潮と海は滿つらし遠きへの鳴門もいまは潮飛ばず見ゆ

しかれども海の眞なかはなほ早き潮のながれや我が船かたぶく

日のくれの鳴門をよぎる我が船の舳のこだまし波にとよもふ

船のなかに今日の陸路のつかれ出て海はさみしく波よばふこゑ

淡あはしく暮れゆく空をひとつにて淡路へかかる阿波山の雲

渾沌

齋藤茂吉

一、折に觸れたる

娑婆苦より彼岸をねがふうつしみは山のなかにも居りにけむもの

うそさむく夜ふけゆきてかりがねの鳴けるを聞けばかなしくもあるか

今しがた空たかくして鳴ける雁ひとつならずとおもほゆるかも

めさめゐてひとりぞおもふいつしかもかりがね來鳴くころとなりにし

かりがねは遠くの空を鳴きゆけり夜ふけし家にかなしむときに

燒あとにほしいまゝにてしげりにし雜草もなべてうらがれにけり

あらはにてうづたかかりし落葉には今朝みれば霜ぞいたくふりつる

いいりさへ今はたえつつ小夜ふけしくらやみのなかにわれ立てりけり

うつしみは苦しくもあるかあぶりたる魚しみじみと食ひつつおもふ

まどかなるわがをさなごのねむりさへかへりみずして幾日か經たる

二、摺針越抄

かぎろひの春山ごえの道のべに赤がへるひとつかくろひにけれ

木の間がくり湧きでしみづはおのづからここの坂路にながれ來たりし

近江路の夏の來むかふ山もとにひとりぞ來つる漆を摘みに

番場いでて摺針越をとめくればいまこそ萌ゆれ合歡の若葉は

游歐雜記

歸來(一)――藝術の社會的地位に就いて

阿部次郎

「前に圖する芝居町と、後に出はす處の深川其外の料理茶屋水茶屋、また宿場の飯盛女と吉原町とをさして、世に惡所場とす」(寛天見聞記)

「寛天見聞記」は寛政以降天保にいたるまでの世相の變遷を、その經歷目睹するところに從つて說いたものである。その撰者は不明であるが、一說に從へば國學者齋藤彥麿がこれに擬せられてゐるといふ。從つてこの一說が直接に證明し得るところは、德川後期に於ける「惡所」の觀念に限られてゐる。併しこのやうな思想が既にこの時代の初めから準備せられてゐて、幾許もなく遊廓と共に劇場も亦この觀念の中に包攝せられたことは、多少にせよこの時代の雜著に親みを持つほどの人の、誰でも看取することが出來るところである。故に吾々は、德川時代の大部分に通じて、芝居町と吉原町とは――これを全國的に見れば京の島原と大阪の新町とも亦――代表的惡所と考へられてゐたと見ることが出來る。當時の倫理的觀念は、表面上、この二つのものを惡所として併せて擯斥した。併し惡所として擯斥せられた劇場と遊廓こそ、正に德川時代の平民文化を多產にし、特色づけ、流動發展せしめた二大源泉であつたのである。若し劇場と

遊廓とを、當時の觀念のまゝに、惡所であるとすれば、この時代の平民藝術は實際「惡の華」でなくて何であらう。この二つのものを惡所と考へる思想の中から、如何にして此等の惡の華は吹き出でることが出來たか。寧ろこれ等のものを惡所とする思想にも拘らず、何故に「惡所」はあのやうに多彩な惡の華を咲かせることが出來たか。此處に吾々の解かなければならぬ謎がある。

思ふに惡所が惡所としてひたすらに排斥されるのみであるとき、惡はその「華」を開かしむべき生産の力を獲得することが出來ない。ただ第一には惡所が、表で擯斥されて裏から歡迎せられるとき、第二には「惡」が深く人性に根ざす一種の業として、鮮血淋漓たる惡との戰ひの間に於いても、猶その力と深さとの崇高が承認せられるとき、それは始めて特異な花として咲き出でることが出來るであらう。德川時代の惡所文化は主として第一の種類に屬する。實際、この時代の意識は、これを全體として見れば、惡所を「惡」所として心の底から擯斥し去るほど倫理的ではなかつた。さうして假に彼等がこれを欲したにしても、極めて有力な社會的事情が、恐らくはこの倫理的意志の徹底を妨害したであらう。――其處には「惡所」でなければその心の華を開かしめるに由ない人達がゐた、その心に莟みを持ち始めたものを自由に咲き誇らしめるためには、惡所に奔る以外如何なる途をも塞がれてゐる人達がゐた。約言すれば政治上社會上隷屬の位置に甘んずべく定められた人達がゐた。而も此等の人達こそ當時の社會に於いて最も活氣ある、最も實力ある階級に屬してゐたのである。人は彼が自由にその肺臟を開いて呼吸し得る場處を、又彼がその鬱積する活力を放つて遊ばしめ得る土地を、心から呪ふことは出來ない。それは强健な肺臟と橫溢せる心力を有する人にとつて特にさうである。かくて德川時代の平民は、一面に於いては、彼等が教へ込まれた道德的觀念に從ひ、又彼等自身の體驗の歸結に從つて、戲場と遊廓とを憎むべき――といふよりも寧ろ身を滅すものとして功利的に恐るべき――惡所と考へながら、一面

に於いては又、これを善見城として、歌舞の菩薩の住み給ふ極樂世界として、渇仰隨喜することを禁じ得なかつた。美と自由とを求める彼等の心は、窮屈袋を腰に纏ふ彼等の頭の道德に反抗する。更に嚴密に云へば、頭に於いては必ずしも惡所を「惡」所とする倫理を否定することなしに、彼等の心はこれと離れて別に自己を放つて遊ばしむべき穴を捜し求める。彼等の心の生活に必要なるが故に全然否定し去ることを得ぬ半公式の世界、而も彼等の倫理意識によりて充分に是認せられ得ぬが故に結局非公式な穴の世界――此の如き世界として「惡所」は發達する。惡所とこれを中心として發達せる德川時代の平民藝術は、倫理的向上の意志ときり離された自由と、第一義の道德とは別にその領土を開拓せる美との住むべき國であつた。さはらば破れぬべき勸善懲惡の輕羅を、申譯にだらしなくその身に纏ひながら、彼等はその目的とする美と恍惚との世界に向つて足を早める。彼等にとつては、道義の世界とは野暮に馬鹿正直に正面衝突を試みて突破すべき敵國ではなくて、たゞ忌避し敬遠し妥協してその妨害を免るべき異國に過ぎなかつた。善と美とが原理上の一致を發見することなしに一つの流れを狹んで平行せること、而も善が流れを渡つて惡所の美を征服し盡すほど性急でもなく、美がこれに反抗して獨立を宣言するほど野暮でもなく、兩者が衝突する場合には固より美が忍從し回避しつゝ、對岸の火災ほどの意味に於いて相互に否定せむとする意志を持續せること――この狀態が德川時代の文化の一種特異なる矛盾と分裂とを形成する。若し兩者の孰れかが流れを越えて他を征服し盡さむとするほど野暮にして徹底せる意志を持つたならば、恐らく其處には全然これと趣を異にせる惡の華が咲き出でることが出來たでもあらう。さうしてそれはこの火に燒かれて惡を弄ばむとする意志から淨められることが出來たでもあらう。併し事實はさうではなかつた。この第二の意味に於いて惡の華を開かしむべき使命は、擧げてこれを後世に殘される。充分に心の要求を聽かうとせぬ頭の固陋、窮屈な頭の命令を回避する心の放埒、かくて生ずる頭と心との分離と、頭の惡とするところを喜びとす

る心の戯れと、このやうな地盤の上に德川時代に於ける惡所の花が咲き亂れた。而もこの惡所の花が、皮肉に、光を避けつゝも、猶あのやうな不思議な美しさを持つてゐるのは、一つにはこれを創造せる心に、美に對する非凡な素質があるためであり、二つには心の表現の欲求が他の方面に於いて堰かれて、惜氣なく此處にのみ注ぎ込まれたためであると云はなければならぬ。

20

劇場は何故に惡所場の中に數へられなければならなかつたか。それは劇場が既に出發點に於いて遊廓の雙生兒であり、時の進むに從つて益々遊廓との提携を密接にして來たためである。さうして「深川其外の料理茶屋水茶屋」等はただ吉原新町島原等によつて代表せられる遊廓の、派出處であり、補足であり、變形であるに過ぎなかつた。故に遊廓こそ實に惡所場中の惡所場である。德川文化に於ける惡所の意義を討ねむとするものは、どうしても遊廓の問題に觸れることを避けることが出來ない。

然らば德川時代の遊廓は如何なる社會的使命を持つてゐたか。それは單に、出來るだけ無事に、出來るだけ弊害少なく、性慾を充す機關として認容されたに過ぎなかつたか。元和三年幕府が元吉原の開設を許可したときの五ケ條(後出)によれば、當局の意志はこれに附加するに犯罪者捜索の便宜を目的としたぐらゐのところに過ぎなかつたやうに見える。併し性慾を充す機關は性慾の滿足と共にその使命を了へる。それが積極的にその時代の文化を動かす勢力となるためには、何等かそれ以外の動機がこれに附加せられなければならぬ。さうして德川時代の遊廓は、實際、當局の豫期したところを超えて、性慾の滿足以上の動機を持ち、この動機によつて遂に或歷史上の使命を果すことが出來た。遊廓

が近松の夕霧伊左衞門を産み、春信の青樓美人合や歌麿の青樓十二時を描かしめ、新内の明烏や蘭蝶に主旋律を與へることが出來たといふ事實は、たゞこの動機を眼中に置くことによつてのみ、始めて說明されることが出來るであらう。

固より遊廓は遂に「遊」廓であつて、決して敎化の機關ではない。從つて私が玆に云はうとするもう一つの動機も亦人間の性慾生活を離れたものでないことは斷るまでもないであらう。併しそれは性慾を離れずして而も性慾の滿足以上のもの、夜鷹歌比丘尼等によつては到底充され得ぬもの、即ち性慾生活の美化であつた。性慾生活の中に複雜な情味や、わけ知りの矜持や、物の哀れや、氣品々格をさへ求めようとする慾求の旺んな點に於いて、德川時代の平民は、平安朝の貴族の——源氏物語によつて代表せられる平安朝の貴族の——正系である。さうして遊廓はこのやうな色道修業の根本道場として、正に中世の貴族の邸宅と別業とを、世話に砕いて代表したものと云ふことが出來るであらう。吾々は種彦の田舍源氏を讀むとき、彼が六條御息所を年增の遊女に置き換へる構想に一度は驚かされる。併し顧つて再考すれば、この方面に於ける平安朝と德川時代との差別は、畢竟六條御息所が遊女阿古木に變形することによつて最もよく代表されるやうな性質のものではないであらうか。さうして德川時代の遊廓は、六條御息所の後身を其處に收容し得るところに、文化的生產力の胚種を含んでゐるのである。

私は德川時代に於ける遊廓の文化的生產力として見た「性慾生活の美化」を、戀愛による性慾生活の倫理化——この倫理化より生ずるその美化と嚴密に區別する。後者は西洋藝術が殆んど傳統的に踏襲する槪念であつて、處女の崇拜、戀人に對する不觸不犯の理想は、その唯一の形ではないにしても、少くともその最も純粹な型式と見做さるべきものであろ。この意味に於ける性慾生活の美化は、日本開關以來明治以後になつて初めて起つたと云つても、恐らくは大過がないであらう。これが眞劍な問題となり得るためには、從來女性を人格として見る思想の發達があまりに後れてゐた。

從來の原始的神道は固より、儒教も佛教もこの意味の戀愛思想を誘起するためには、あまりに自然的、功利的、若くは非人格的であつた。平安朝から德川時代を通じて流れてゐる性慾美化の思想はこれとは全然立脚地を異にする。それは性的接觸を根本假定とするものである。さうして一夫多妻若くは多夫一妻の事實と必ずしも兩立せぬ理想ではない。それは性的接觸を個々の部分的の現象として切り離すことを——卑言葉を用ゐて露骨にこれを云へば「床急ぎ」を——輕蔑して感覺的の意味に於いても、人情的の意味に於いても、これを全的に象徵的に享樂せむことを要求する。固より「粹の粹ほど張りも強く」（新内「明烏」）「戀愛はこの立脚地から見ても結局中心的地位を占めることに歸着するとは云へ、それは人情的純化の極致であつて、超越的倫理的高處に立たむことを求むる前者の崇高に比較すれば、遙かに謙遜に、自然に、可憐に、人間的である。特にこのやうな戀愛の花が「金につまるはある習ひ」（「戀飛脚大和往來」）の遊廓に咲き出でるとき、心中は殆んどその必然の歸結として、あらゆる諸わけ知りの心に、同感と哀憐と——崇拜の感情をさへ喚起せずにはゐないであらう。心中藝術の盛行は、恐らく此の如き英雄化（英雄は憧憬の代表者である）の心理を背景としてのみ理解し得るところである。併し性慾生活の美化は必ずしも其處まで行くことを——彼等の頭の判斷に從へば、行き過ぎて運命の陷穽に陷ることを必要としない。多くの健全な粹人は、「ただなつかしさ逢ひたさに愚痴になるほど」の戀に溺れた男女をば、美しく櫻の花の散るやうに心中して逝くに任せる。さうして彼自らは三味線に合せて空想の中に彼等の死を味ふことに滿足して、自分自身は「程よく」戀と命との中道を踏みわけて行く。さうして彼がこの中道を擇びとることは、決して色道の修業者たるの名をはづかしめることにはならないのである。

かくて德川時代に於ける遊廓の理想は、出發點に於いて戀愛を假定せずに、たゞこれを一種の歸結として將來に豫想するもの、從つて或程度まで戀愛と切り離すことの出來る性慾の美化であつた。それは十二分に感覺的でありながら歡

的に墮することを擯斥するもの、あらゆる官能を通じて感覺の享樂を求めながら、而もこれに人間的情味と品格とを與へむとするものであつた。このやうな性欲生活は、縱令情死に導くまでの高揚と緊張とに到達することは出來ても、眞正の意味に於いて「宗教的」と呼ばれ得る藝術を生產することは恐らく覺束ないであらう。併しそれは性慾そのもの丶直接の美化として、世界の文化現象中に獨得の地位を占める。さうしてそれが部分的生活の全體化、象徴化の一種として、藝術衝動を喚起する力を持つてゐたことは、德川時代に於ける演劇や浮世繪や音曲を代表する傑作の大多數がこれを證明する。

私はこの事情を更に徹底的に明らかにするために、この節の最後に一例を附加することを敢てする。おそくづの繪——漢語を用ゆれば春宵秘戲の圖、砕いて云へば和じるしと呼ばれるもの——のうちに、眞正な美術的價値を持つものがある點に於いて、恐らく日本は世界獨歩と云つてい丶であらう。春信や淸長や歌麿あたりのこの種の作に較べれば世界に有名なポンペイの壁畫の如きは、なまで機械的で殆んど見るに堪えないことを覺える。刺戟を目的とするこの種の繪にまで、ほのかな、和かな、霞のやうに現實を包む情趣を行渡らせる力は果して何處から湧いて來たか。寧ろ浮世繪美人畫の美を徹底的に理解せむとするとき、遡つてその根原をこの邊まで求める必要があるほどの緊密な關係は如何にして生じたか。而もこの種の繪の半公式な權利——「日本繪師」菱川師宣はこの類の作品に署名し、俳優畫を恥辱としたといふ春信や歌麿はこの種の繪を得意とした——は如何なる社會意識から生れて來たか。德川文化の不思議を解かうとするものは、問題をこの邊まで掘り下げることを餘儀なくされる。さうして遊廓に關する觀念を考究することが或程度までこの問題を解く鍵となるであらう。私は猶暫く此處に低徊して、この問題を考へたい。これは一體に德川時代の考察が自分の手に餘るうちでも、最も手に餘る問題であるが、今自分の座右にある畠山箕山の「色道大鏡」と、柳澤淇園

の随筆「ひとりね」とが、多少の手がかりを與へてくれるであらう。

附記

誤植について一言する。雜誌の誤植を一々氣にしてゐてはきりがないが、九月號十月號ともに相應の誤植があつた。十一月號になると、如何に察しのいゝ讀者でも事實を知らなければ嘘を覺える危險のあるものがあつたから、それだけを訂正して於く。その他は御推讀を請ふのみである。

七三頁上段十三行　隱者大宰春臺とあるのは　勿論　儒者太宰春臺

七四頁上段十行　Imitation は Initiative

同上十五行　碇屋　は　淀屋

七五頁上段初行　銀金の商人　は　銀座の商人

七七頁上段十四行　出雲本國　は勿論出雲お國

七八頁上段三行　五代家綱　とあるのは五代綱吉（これは原稿の書きあやまりらしい）



芳野山と大島沖

幸田露伴

大島沖

一月五日。船を僦ひて泉津（伊豆大島）を出づ。四挺丁艣なれば船は飛ぶがごとし。磯荒く波高けれど、快晴にして富嶽海上に玉立せるを見ながら走らす心地、また儔無く嬉し。磯はいづくも巖さかしく物恐ろしかれど、就中行者が崎おそろし。巖鼻に鵜の鳥の五六羽、何を見るとも知らねど、頸さし伸ばして淋しげに居たる、大觀の畫なんどの如し、荒凉のさま、打向ひ見る心の中に食ひ入るやうなり。おうばん根といふところに至れば、巖壁削立して石脚また水に入る。二三年前、風烈しく潮怒れる日、外國汽船こゝに觸れて、忽ち粉碎せししにて、汽罐やうのもの、猶碧浪の底に見え、鐵板のいと大なるが仰ぎ見る高き磯石の間に打寄せられたるまゝ、赤く銹びて遺り留まれるも見ゆ。當時乘り居し船員は、かしこの巖を傳ひて陸に上りしといふ。其巖を望むに、人の攀づべくもあらぬ直ぐだちの岩なり。死生の二一〇

鞭におびやかさるゝ時は、天に梯せるやうのところをも、かよわき人の手脚にて、爬き上り躋みのぼりもするものよと、そゞろに生を欲する慾の深く鋭きに感ず。鵜はこゝにも神寂びたりとやいふべき姿して、とぼんと海天相接する萬里の果を眺め居れる、おもしろし。それより漸く南するに、日のありかの故か、海水紺琉璃のごとくなりて、古の畫家の群青を用ゐて水をゑがけるも道理なりとおもはしむ。かみの澤といふところ、人家少し見え、ふなうといふところ、小さき瀧ありて直に海に落つ。此の瀧の流れは大島第一の眞水のながれなりといふ。眞水の少き島なるかな。本村なんどは夏天の日照つゞきには、五六里の海を渡りて、伊豆の伊東より水を乞ひ得るとぞ。島民憐愍すべし。たゞまさに多く杉を種うべきのみ。お鯛根の沖にかゝりて、陸を望めば、屏風の如く立ち連りたる高き岸の中に、紅色の岩ありて、鯛を畫がけるがごとく見ゆ。名の由りて來る所以なるべし、其の下に離れ巖ありて水を抽く。筆島といふ。鯛の背にありといふ神山を畫がけるを望むがごとく、鵜の糞の白きは瀧のしら絲かゝるかとも見ゆ。禽にして鶴ならんには、いかばかり繪にもせまほしからんとおもふ。されど朱冠縞衣の客ならずして、翠眼玄翮の主の棲めるも、また物寂びて悲しげにふさはしきさまなり。柁かけ根といふ根あり。行舟あやまちて、柁を引かけたるよりの名なり。根つゞきの礁巖の鼻に、人五六あり。手々に長竿を取りて釣を垂るゝさま、狩野家の畫に魂魄の入りて浮出でたるがごとし。薪ほどなる大さの浮子(うき)を力の限り遠く抛げて、滄浪白波の間に機心を潮沫の消ゆるに任せたる、見る眼もすゞしくいと長閑に、南海のかゞやける日の光、六合を包みて浮世のちり埃もこゝには絶えたりとおぼゆ。舟一同暢して、港口の難破船の二百噸ばかりなるが、船腹を斜に露はして、礁上に横はれる傍を過ぎ、濱の形も松の蔭もおぼえある波浮(ハブ)の澗に入り、松下屋に着く。

千早島遊同行者は釣に出でたるよしにて在らず。宿の女房は嶮々島道の峻しくて勞れたまひしならんなどいたはり慰

めぐる。さんまのさしみを珍らしと賞し、やゝおくれたれど寄餉す。橙酢をば我が新意にてさんまに澆ぎて食ふに、甚だよろし。秋刀魚昨夜大に獲れしよし也。

千早歸り來て、得意げに釣のことを語る。我が出でし後、數々港外に根づりを試みしが、海深く魚大にして、洪濤巨浪間に游鱗を抽くに、或時は縱木ほどの太さの鈎伸びて之を逸し、或時は紙捻より太き綸斷えて恨を遺すなど、さまざまなることとありしと、雜談つきず。予もまた一遊を試みんと欲す。

夜セールメーカアの來、將棋を挑む。自ら稱す、技初段に近しと。對局するに趙括たるのみ。

六日。西風少しく凪ぐ。千早漁夫と共に港外に出づ。延繩（ハヘナハ）するとの故をもて予は出でず。近傍を散策す。

七日。風猛にして港外に出づべからず。港内にて釣を試む。小魚四、蛇鰻一を得たるのみ。趙括連夜來戰ふ。終に孟獲となりて屈退す。

八日。好晴。微風。漁夫力丸と千早と三人して港外に出で、差木知（サシキヂ）沖にて根釣を試む。初め釣るところ、水深三十尋ばかり、予先づ蛇鰻の太さ大蘿蔔ほどなるを得たり。人を咬みて害を貽ること甚しきものなれば、聊か困ず。次にアカゲの一尺ほどなるを得たり。形はアイナメの如く、全身紅色、錦魚よりも麗はし。千早また一を得。又ボウタの小なるを得。アカウの如くして斑あり。又別の根にて釣る。水深六十餘尋。大なるボウタを力丸獲たり。六七百匁ほどなるべし。予も千早もまた獲たり。根釣といふは初めて試みたることながらいと易き釣也。たゞ水深く礁嶮なれば、沈子と釣

予とはやゝもすれば岩礁にかゝりて、綸を斷ち具を失ふ。ハタは生餌釣に上らず。およそ根釣の釣に上る魚、アカウ、ボウタ、イシナギ、ノドクロ、ブダヒ、クシロ、クロヨ、ハタ、アラ、アヤメ、サヽヨ、アカゲ、メダヒ、イサキ、タヒの類也。ハタ、アラ、イシナギ、メダヒ等大魚なりといへども、蓋し微綸急流にして鱸を釣るの興なし。アヤメは美にして佳なる魚也、千早之を獲たり。釣ること二時ほどにして歸る。潮流風候、長く釣る能はざればなり。

夜に入りて烏賊釣舟出でんとす。力丸樓下に來り、叫んで曰く、君烏賊釣を難んぜざらば舟に上れと、予直ちに答へて曰く、行かんかなと。宿の老夫婦傍より注意して、烏賊は潮を吹き墨を噴く、衣を更めたまふべしとて、おのが夫の古き羅紗の鯉口を貸して與れぬ。よつて其を着て濱に下り立てば、舟の中には人々既に乘り居て哮り騷ぐ。出漁に臨みて心も逸り居れるなるべし。生活の業とするものの邪魔にならぬやうにと、艄の小高きあたりに坐す。烏賊を釣るには胴の間最も利あるよしを聞き居りたればなり。やがて舟を押して水に放つとともに、人々舟に上り、艫櫓脇櫓、櫓のかずすべて七、人は予を倂せて十人、エンヤ〳〵と暮色はや濃き中を押して出す。先んじて出てたる舟あり、後れて出づる舟あり、皆競ひごゝろに港外さして出づ。日頃は江上悠々の客となりて釣りしが、今日は海上營々のまことの漁夫となりしやうの心地して、ひそかに自ら物好の過ぎたるを笑ふ。舟ハヤンノーと俗に呼ぶ漁船なり。肩幅も窄からず、猶多くの人を容るゝに足る。港外に出づるとやがて予が座の傍の帆箱より帆を取り出して張る。手揃なれば突差に事すみて、西風を斜に孕み、波を切りて進む。首を回して四方を望めば、烏帽子形せる利島、一段になれる新島は、手元は既に暗けれど、沖は猶明るければ、鮮やかに見ゆ。三原の山と利島とに考へ合せて釣るべき位置を定むるとおぼしく、口々注意もし、論議もす。彼のお鯛礁の筆島の沖、半里強もあらんとおもはるゝところにて、帆を下して躑躅す。人々竿を取出し、釣支度す。予も一竿を借受く。竿長さ三尺ばかり、綸は天蠶糸の二子撚にて、鉤は例の角也、ただ烏賊の皮を被

ひあるを異なりとす。綸の長さは竿を擡げて鈎元の指に觸るゝほどなり。技あるものは右手に二竿左手に一竿を把る。予の如きはたゞ一竿を取るのみ。別に長竿あり、手釣あり、長竿は之に手にせず、竿尾に麻繩ありて、舟の胴梁に縛し、竿をしておのづから水平ならしむ。魚中れば取りてまゝ放つに、麻繩あれば自在にして、便宜よし、手釣は眞餌を用ふ。餌はタカベあり、蛇鰻の肉あり、他の魚肉あり、おもひ／＼の餌を裝す。予は西風の漸く吹き荒む洋中の闇に、短きヤギを手にして、眞の餌にもあらぬかゝる擬餌に、いつ魚のかゝる事ぞと思ひ屈してゐることしばらくしけるに、來たぞ／＼と人々の叫ぶ聲のしたるとおもふ間も無く、彼方にも此方にも竿の上げ下ろし忙しくなりて、人々忽ちにして各々五尾六尾を釣る。竿は電光のごとく閃めき、烏賊は墮ちたる物を拾ふがごとく手に入る。烏賊の噴く潮は空にしられぬ時雨を呼びて、吻と啼くが如く氣を吐く聲は、一種の寂しみを忽忙の光景裏に交ふ。魚の聲をなすもの、海にはギチあり、河にはギギウありて、かねて知りたれど、烏賊魚の聲は、今夜はじめてきゝぬ。プス／＼といふ聲哀れに淋しく、又思ひ取りかたにては滑稽にも聞ゆ。闇の沖烏賊魚の屁消えて哀れなり、これは何にもならずと、心忙しき中にも思ふ間あらせず、予が竿にもまた物觸るれば引揚ぐるに、をかしきその姿の主也。慌てゝ鈎をはづしてまたヤギをふるへば、復一尾を獲たり。かくてたゞ二尾を得たる間に、魚群(ナブラ)一たび去れば、滄波沈々としてまた、一物の鈎に中る無し。人々は各々十五六尾乃至二十餘尾をも得たり。慣れたると慣れぬとの差、いと大なる釣なり。其の後また魚群にあふこと二度、心をおちつけてよく視るに、魚群の來る時は、海の底より白く光るものむら／＼と湧き上り來、其の光るものは盡く烏賊魚なり。燐の光るとは又別に見ゆ、光るもの愈々浮びて水面に近づけば、必らず鈎に中る故に、來たぞ來たぞとは先づ叫ぶなり。魚群にあへる時の漁夫等の働きは、一瞬爭ふもの故、まことに敏捷を極む。其後魚群にあはさることと久しく、人々たゞ舷に憑りて海を見る。月出でなば、また大に來たらんとて待つに、陰暦十九日の月なれば急には

上り來らず、西風やうやく荒びて、艫押しをするもの力屈するに至り、頗る舟の位置を保つに惱めるさまなりしが、九時過ぎて後、海明るくなりて月終に出てぬ。お伽話の盤の挾みて持ちもすべきもの丶やうなる形して、赤々と洶湧せる波間に出でたる、いかにも物悲しく寂びたる景色なり、海はたゞ玄く、星たゞ輝きて、月やうやく上りたれど、魚群はまた來らず。寒威夜風と共に加はりて、絶望の人々死したるが如く動かざりしが、十時に近くなりて、さあもう仕方が無い、歸らん〳〵と、と云ひ出づるものあり。寒いは、寒いは、樫の木を着やうと云ふものあり。衆議一致して忽ち櫓を取り下す。樫の木を着るとは櫓をこぎて暖を得んとの意なり。語甚だ佳趣あり。人をして破顔せしむ。乃ち總員皆「かしの木どてら」を着て、エンヤ〳〵と押し出す。勇威凜々、烈風狂浪をものゝかずともせず、予ひとり船首に坐して將監顔したるはよけれど、衆人予をして「どてら」を着せしめざれば寒きこと甚し。十一時には早くも松下屋に着き、一浴して眠る。千早曰く、風こだちて屋角に聲あるに至りたれば、叔父上いかがしたまひけんと氣づかひたりしと。

九日。昨夜烏賊釣船の中にて、此の風明日も吹きつゞきなんに、汽船の喜び知るべし、と漁夫の言へるを聞きて、島より東京横濱へ薪炭を輸送する帆船の西風を得れば容易に走り着くことを知り、これにて便船せんの心起りしが、今朝果して拔錨出帆せんとするの模樣ある船あり。宿の主人に議るに、主人は帆船便乘の事、風都合だに宜しき時は利多かれど、然らざる時はいともどかしきものなれば、可否を申難しといふ。風よくば朝出でゝ夕には着かんといふに心進み、汽船の來るを待たんとする氣無く、慌たゞしく出發せんと、釣り得し魚など荷造りさする折から、一船ありて既に動きはじめぬ。急ぎ小舟に乘り、漕ぎつけて便乘をたのみ聞え、たゞちに乘り移る。席定まるや定まらぬに、はや港外に出

で、滿帆の風心地よく馳る。乘り心は汽船に比していとよろし。船は千代清丸といふ。然るに大島を離れんとする頃、風凪ぎて船すゝます、悶々の情、ことふるに物なし。晝餉の代りにとて、船員椿の油にて餅をあげて供し呉る。淡甘にして賞するに足る。夕に至りて風なほ吹かず。「凪と嵐の中」といふ語あるよし、實に船員の困ずることは、風雨も凪も同じことなり。大根の切干の煮つけ、香の物にて夜食す。船員の食事、大抵かくの如きものなるよし、千早の談にて知り、其の境遇をあはれむ。夜に入りて北風來る。逆風なれば間切りて進む。船舶の中に心ゆるく日記をものす。相客無くて嘈々啾々の雜談を耳にせぬ、いとよし。千早に船員生活の談をきゝて大に得るところあり。

十日。眼さめて起き出づれば既に横濱の本牧沖に在り。されど風また止みて船すゝます、如何ともすべからず。船員三人、船十九噸、積荷は新炭四五百圓ほどなり。船員と雜談を交ふ。船員の一人繡眼兒十羽を一籠に飼ひ置けるが、之を問ひたゞすに、島にて捕りて東京にて賣るなりといふ。芳野の駒鳥なんどの如く、大島の繡眼兒も凡ならずとなり。新船々員のする事としては俗に遠きことなるかなと一笑す。日暖に風無ければ、籠の内なる汚物を清めんとするに、換籠なければ底を取りはづす時、あやまちて數羽を逃しぬ。されど禽は船を去らねば苦もなく復捕へられたり。いぶかしみて之をたゞすに、およそ小禽船中にて籠を逃するも、陸遠く山遙にして、飛翔の力、能く海を踰ゆる無しとおもふ時は、決して妄りには飛び去らぬものなりと云ひて、談餘日露戰爭當時、靈鷹の軍艦に降りし如きも、靈鷹にはあらで、實は疲鷹ならんのみと笑ふ。これを聞きて靈鷹はとにかく、深く小禽の智に感ず。晝に至りて微風出たれども、出し風にて横濱に入る能はず。夜に入りて港外に達す。小傳馬を下しもらひて山下町に上る。光景俄然一變、電車走り、街燈輝ける文明の地に入る。流石に心も浮き立つやうなり。かりそめの島遊びに、多く日數を費して、身もまた島人となり

しごとき感あり。停車場へ車を走らせ、十一時頃新橋へ着き、直に家に歸る。

（明治四十五年）

芳野山

十一月二十日。午後、名柄より芳野口へ向ひ行くに、東の方に南より北へ去れる一帯の小丘あり。東山といふ。即ち巨勢山つゞきなり。寺田、宝、條を過ぎ、其の東山を越えて、芳野口停車場に至る。宝は孝安帝皇居のありし地にして、秋津島宮といひしはそれなり。孝昭帝御陵有る筈なれど拜せずして濟ましぬ。芳野口は即ち巨勢にて、今の西山と稱ふるものは即ちつら〳〵椿をよみたる巨勢山なり。今猶椿多きやと問へば、里老訝りながら答えて、山の事なれば椿もさうらうべしと云ひたる、いとをかしかりし。曾我川は細き川なり。今木に允恭帝皇子坂合黒彦王御陵を拜しぬ。車坂いと長々しけれど道はよし。下淵に至り、日向を過ぎて六田に着く。六田の渡しも今は橋なり。芳野川幅濶く流清し。川を渡りて吉野山にむかふ。日暮れかゝりたれば、近道を問ひ、谷通りを行く。佐曾より日暮れ清治坂（あて字也）に一ト汗絞り、終にかくれ松あらはるゝ冬の芳野に入り、大橋黒門を過ぎて銅の鳥居前なる辰巳屋にやどり、はじめて昨夜のつかれを休めぬ。

二十一日。昨日の時雨氣味ありしに引かへて朝日美しく東の山々の間より出で、欄に憑りて望めば、近くは三船山にたつ雲も晴れ、遠くは宇陀富士の姿もあざやかに、高取りの峰々連なり亘りて天を割れる、氣象雄偉に、眼前千嶂の秀で、萬壑の穿てる、まことに心よき眺めなり。宿の男を道しるべに伴ひて近きあたり一覧に立出づ。

よし野山花なき折に見ておかむ來む日の春は目もまようかに

藏王堂、仁王門、共に朽ちよろばひて、椽廻りなど支柱を見苦しく立てたり。忽に倒潰すべくはあらねども、修繕の時既にいさゝか後れたり。堂の形巧ならねどもよし。本尊は二丈五六尺、脇士と共に行基作といへども如何にや、疑ふらくは康正年間再造の時の作ならむ。寺も行基の開くところと云へども、金峰山寺は小角創立にかゝるならむ。小角櫻本坊に寓し、角乘角仁等を從へて大峰を開くと傳記の殘れるをおもふに、櫻本坊といふもの、其昔はなかりしにせよ、當時はやく此邊に寺めきたるものを建てしなるべし。すべて宮堂等の縁起は、まことの創建の時より遙かに後に至りて成るものなれば、盡く之を信ぜんには眞を失ふべし、吉野山舊記も其心して讀むべきなり。堂前四本櫻は元弘三年護良親王戰餘に宴を張り箭を被り血を灑らし、悲憤激越立ちながらにして大盃の酒を仰ぎたまへば、相模は敵首を劍鋒に掛けて、高歌躍舞せしところといひ傳ふ。冬山閑寂、今たゞ飢雀の鳴くを聞くのみなれど、感慨おのづから催される。吉水院に至る。こゝも小角姑息の庵の跡にして、後に寺となれるものといふ。坊主宗信、後醍醐帝を迎へて、假の御座所となしたるところ、今猶玉座を存す。源義經又こゝに潜み居しといふ。義經の室といふは古拙にしておもしろく、他日これを學びて一室を營まんにも倣ひやすければ見取りて畫くに左の如し。(圖は略す。)

上段一段高きところは天井の平座と異なりて、後の半は窓やうになり居り。正座しての左手の、棚になり居れるもをかし。上段と傍の一疊との間には壁あり。一疊には辨慶の居たりと云傳へたる特に笑ふべし。すべて小板の添ひ居れる、はじめより是のごとくなるか、後の慶の都合にて、かくしたるか不明なれど二疊三疊の小室ならでも、小板を添へたるは却つてよし。又圖には示さねど天井の廻り縁(ブチ)と鴨居との間に吊支柱(ツリヅカ)の通りてはあらはれずして、今樣ならば鴨居に添ひてあるべき長押やうのものゝ鴨居には添はで却て廻り縁に近く二三寸ほど離れたる所にわたり居り、吊支柱(ツリヅカ)は其の

長押と鴨居との間だけに現はれ居れる、心得がたくもあり、面白くも見えたり。山崎の妙喜庵の書院の態なども思ひ合されて、中古の後の建築を覗ひ知りたき心燃えぬ。寶物數々、よろしきもの、由緒あるものも有り、又うなづき難くおもふものもあり。金輪寺は實城寺即ち金輪寺御所にて作らせ玉ひしものながら、今こゝに藏弆せらる。南帝御宸筆いろいろ拜見す。理源大師筆と稱するものを觀る。理源大師は又一巨人なり。其一代の跡を覗ひ知るべき理源講式一卷は我が邦叙事詩の中にての長きものなり。今まで大師筆蹟を見たる事なければ、眞否のほどは別ちかねたれど、弘法大師の心經の如き堅き文字にて美はし。霜天に鵰翮瘦せて。風曉に梅枝健なる勢、細字ならぬだけに好まし。小角六十二才の像といふものあり。見定めがたし。

院を出でゝ塔の尾の御陵に至る。途中賤の男の鉈を用ゐたるを見しに、鉈の形いたく異なりて、其の頭より指を屈めし如くに體出でゝ、しかも尖れり。刃をして土石なんどに觸れしめざらしめんが爲に、烟管の首の如くにまがり出でたる頭したる鉈はかねて知りしが、其のさきの尖れは知らざりし。これを問ふ時に、時には木材なんどをそれにて引掛け、鈎の如き働きをなさしむるが爲にかゝる形を用ゐるとなり。名を尋ぬれば「シツ鉈」といひぬ。

塔の尾御陵は如意輪堂上にあり。御陵守の叟の落葉を掃ひ居れる、神官の參拜を終りて折柄下向せる、石だゝみ塵なく淸らかに、寒林人少く、山猿風靜かなるさま、時に取つて四方の景色も身にしむやうおぼえぬ。世泰親王御墓、また聊か離れたるところにあり。恐れ多きことながら、延元帝は英偉の御氣象餘りありて謙抑の御工夫足らず、民心の歸向を繫し玉はざるより、藤房は世を遁れ、高氏は時に乘じて、終に御劍を按じて山里に崩れさせ玉ふに至り、紛々戰亂、忠臣義士の肝腦を徒らに焰刃兇鋒に塗らしめ玉ふに及びぬ、悲しと申もおろかなることにて、新葉四綴、いづれのところか涙の痕ならざらん。花にだに觧けかるべき芳野の山陵に、枯葉かさりと落ちて石に響ある日詣り合せて、御長離の

前にたゞ一人ぬかづきて拜みまゐらせたる、胸の中、閉ぢ塞がるやうの心地ぞしたる。

如意輪堂の扉を見るに、胸の中また酸きやうの思す。正行死する時、年わづかに二十三、忠孝兼備はる、其の快く死をして忍んで生きざるを貴むる能はざるなり。惜む可く、悲む可く、恨む可く、長歎泣洟すべきのみ。あゝ小楠公、公を小説戯曲の材とせんことは、我が爲す能はざるところなり。歌を詠じて美人を受けず、涕髻を留めて直に死門に入る、其淡水清の氣品、火烈鐵堅の心肝、眞に敷島のやまとの國の人といふべし。之を深く論ずるは酷なり、人情に近からず、言當るといふともまた何かせん。

寺に藏王權現の木像あり、小角の作るところといふ。眞否は定めがたきも、作品たるは疑ふべからず、長二尺八寸、龍も又よし、像の附屬品等は損ぜるも、本體は全く、刀法柔にして、意圖は剛、圓熟の技と、勁烈の情とを表示して遺なし、此にして眞に小角の作ならば、他の小角の作といふものは、疑はし、扉に延元帝の御筆の讃あり。とにかく人意を留まらしむ。正午頃なりし、宿に歸り着きて晝食を取り、小憩してまた立出づ、亭主もまたもてなし心にて共に出立ちたれば、三人打語らひながら上る。井光の井と云ひ傳へたるを、町の人家の後、小山の下に探る。今埋もれて殆ど滅せんとす。舊は小祉もありしといふ。大和志に赤井とあるものこれなり、土人赤井ともいへばなり。袖振山の裏に當る。井光の故蹟は碇村の方信ずべきに似たり、碇は井光の約訛なり。喜藏院は熊澤蕃山の僑居のあとなり、其の前を過ぎて、今の櫻本坊、もとは密乘院といひし寺の前を過ぐ、小學校に假用せられて、兒童群れ騒ぎ、門庭はいたく荒れたり。こゝに一堂ありて、山内癈滅に歸したる坊堂の佛像を修め藏すといふ。竹林院に至り其の庭を觀る。幽齋利休合作といひ傳ふるが、さまでは感興を惹かず、日藏開基の寺として、椿山寺ともいふとぞ。日藏も一巨人なり。笙の窟のものがたり、人の知るところなり。尾州竹林流弓術ここに由緒あり、御書吉水院に陳ねありたれば既に寓目しぬ。布引櫻、

猿樂、中の千本、奥の千本、瀧櫻も春ならねば、想ひて觀るのみ。横川覺範の首塚、佐藤忠信が花矢倉、いたづらに行人の情を衝きて動かすも、浮雲一過、山色舊に依る。獅子尾阪のはづれの雲井の櫻、こゝにても御詠の詞花は心眼にうつりて、老樹蒼稍下に、無限の感なき能はず、州水分神社を拜するに、社殿は廣大ならねど、流石に古色あり、哲樣めでたし。拜殿に西行木像を晒らし置きたる、なさけなく似つこらしからず見えたり。橋本雅邦かつて西行富士を賞ずるの畫を作しに、其貌笑を帶びて、いさゝか異様に感ぜること、人々評し合ひしが、此の像の貌を取れりとおぼし、像はもと安禪寺か西行庵かに在りしものなるべし。金峯神社もむかしはいざ知らず、今は形ばかりにて、しかも荒れはてたり、こゝに至る前の路の左、高城山の溪谷を「逃の谷」といふ。義經塔を蹴やぶりてより其の谷路を下り傳ひて逃れしといふ。菅笠日記の歌にて考ふれば程も遥の谷かけて立つづきたる花のしら雲とあれど、今はたゞ黒ばえなり、(黒はえとは土語、杉檜の類の遠望すれば黒みて見ゆるといふ。葛城にても聞く。をかしき言葉なり。)又路の右手の遥に遠、に、家一二軒見ゆるあたりを岩倉谷といひて、むかしは岩倉千軒、芳野千軒といひ、山中人家少からざりしと云傳ふ。げに中古よりかなたは、邦人の山居するもの多く、高山幽岳にも住む民多かりしが、世開けて後に山は却て荒れたる也。今は又世いよ〳〵開けて、地方はいよ〳〵荒るる也。世未だ開けずして、山中と村里と、其の生活の狀態に、さまで文野の懸隔なければ、山に棲むも里に住むもさして享樂に異なること無く、却て人少きところに住めば、自然の與ふる與資草木、山禽溪魚の天賚も多くして、原人生活の安適も有り。人多きところに住めば、衣冠の力に壓せられて、受氣負屈の厭はしき思もせざるを得ざる傾も有り、これによりて割合に山中には住む者おほく、道跡なんどいふものゝ影しき物貨を出入せしめざる以上は、おのづからに踏みならしたる山徑にて埒明くものにて、慣るれば脚筋の發達するがまゝ、險峻もさまでは苦にならぬものなること、山國の者の東京に出でゝ、平地のみなる故に却て疲るゝといふが如き

例にて知るべく、傾斜地に住まぬ者は、脚のあがること少く、傾斜地に住める者は、脚のあがること高き習の身につけるより、都の者は山阪に悩み、山里のものは平坦に倦むことなれども、いづれも脚筋の發達の差によるのみ、荷車を用ゐることだに少くば、細逕山路もさのみは苦にならぬなり。されば今を以て古を論ずれば訝しく疑はしきやうなれど、各地の山嶽をたゞにすに、いづくにも古の時住民多かりし痕あり。東京近くにても秩父の山なんどの如し。今は甲州武州との間の歴阪の如きは甚しく荒れたれど、信玄の頃には通路も繁くて、信玄の武州に働けるは其の路によりたること明らかに、秩父の今より古の開け居たるは徴證少からず。此の芳野なんども、早く大和朝廷の頃に大に開け居たりしは、神祠佛寺の草創年代に徴して知るまでも無く、義經の頃、南朝の頃にも、民多く人繁かりたればこそ、潜みもし、頼まれ參らせもしたるなれ。信濃越後出羽陸奥のおそろしき山中も、思ひの外に古くより開け居たりしにて、却て後に至りて、人文發達して、村里の生活の享樂多きより、漸々に山を捨つるもの多くなりて、山は荒れたるなれ。今はまた都會に開けて、享樂甚だ厚ければ、人やうやくに地方を捨てゝ、都會にのみ集まるやうになり、地方はやうやくに荒れまさるなり。人はたゞ天を樂しみて身を終るべし。電話も電車も劇場も活動寫眞も、まことは榮耀の餅の皮になすくりつけたる青粉紅也、有らば有りて苦しからず、無くは無くて差支へなし。眞實をいはゞいらぬものなれども、時代の生ずる幻影にこがれて、都戀しとおもふも人の情なり、咎むべくはあらず、もつともなることなり。若し我が思ふがまゝに論ぜば、世進みて樂多き今に當り、走るに自働車あり、居るに石室あり、暖爐は冬をしりぞけ、溫室は春を奪ひ、織毳の衣は肌に適して、機具の巧は鬼を役す、魯西亞のカヴイア、南洋の鱶の筋、佛朗西のケパス、朝鮮の薊と、千里異邦の草菜を食ふ、文明の恩惠は少からぬにあらねど、畢竟文明といふも玩具と奢侈品との馳競べごつこに過ぎずして、人間の高漫心の上に課せられたる税の金を以て、惡魔王の肆より玩具を買ひ居るが如きのみ、岩倉谷に人多かりし古の其又

古かし、かの山河に一戸、こゝの川曲に一戸、日出でて木の實を採り魚を取り野獸を狩り、日入つてころりと横になりたる頃の人間と、今の人間といづれか幸多かるかを知らず。ただそれ水は流るる也、時は過ぐる也、世態かくの如し、人情かくの如し、強ひて古を慕ふもまた理に通ぜず、今の幻影の幻影なるを知つて、古の幻影の消えたる者を慕はんも癡なり。古に復り、原人に近づかむなどゝは、夢にもおもはされども、世は兎しても角してもあり得しものをと、谷はるかに藁屋の一二軒あるを望みて、一ト休みの間に古今の生活の變をおもひめぐらしぬ。

義經の蹴抜塔は去る三十九年に燒失して、今は其趾のみ也。塔の南に聳ゆるを青根といふよしなり。青根、白根は古き稱にて、雪を頂ける時多き高峰を白根といひ、常綠樹しげりて雪を頂ける時少き山を青根といふならむ。白根が岳、青根が嶺などは重言なり。されど早く萬葉あたりより青根が嶺などいへり。すべて地名には重言おほし。犬吠崎式根島のごときも、犬吠式根とのみにて足ることとなり。吠はハエの轉にて、ハエは岩礁のこなたより水に入るものをいふ。土佐に普通語として遺り居れるに考へて知るべし。根は岩礁のかなたにて立てるをいふ。岩礁をもまた根といふ。何根何々根とい地名甚だ多し考へ知るべきなり。塔址のうしろに飯高山安禪寺の址あり。寺は役行者の草創、寶塔院、正面堂、愛染堂、多寶塔等ありしといふ。今皆亡し。四條隆平奈良縣知事たりし時、某といふもの愛染堂のごときはことさらに燒燬したりとか語り傳ふ。兩部の教を迫害したる當時の狀おもひやらるることにて、愛染明王も劫火には敵しかね玉ひたるとか一噱を發す。そこより又少し奥に入りて、西行が「われに事足る」といひける山の井あり。苔清水といふもの即是也。四境閑寂、左右皆山、前に杉のむら立あり。近頃植えたるなるべし、櫻は多く若木にして、草蕪の中に老幹の僵れ横たはりて苔蒸せるを見る。清水は小さき巖を傳ひて、今も猶とく〳〵と落つ。眼に當るもの何一なく、清水の滴り流るゝに、有るか無きかの音あるのみ。水の下は砂白く淸淺く、青苔あたりをおほへり。禽さへ啼かず、地陰森たり。枯草に坐し

て、男をして杉の落葉を拾ひ集め、火を作らしむ。たき火をおもはしむるまでに山風の微風うそ寒くして、清水の冽きに胸冷ゆれば也。やがてうがひ手水して、携へ來りたる盃を取出さしめ、杉の灰の雪の如く白きに淸め洗はせ、さて齎らさせたる麥酒を斟みて、心ゆるやかに六百年の古をおもふ。男の嚢の中より柿の紅きをとりてこれを皮むき、路の栗を清水に浸めて搔敷（カイシャ）にして座前の草の上に置きつ薦められたるも、時に取りて美しく興あり。一飲一想、寂然として語を絕し、嗒焉として獨り肆にす。冬の天濃く碧にして、閑雲徐ろに流るゝを觀つゝ傍に人あるをも忘る。意況蕭然として、しかも安適、我また吾を忘れんとす。亭主の男も心あるにや、浪りに談り掛けなんどせず。終に三人二罎を盡して、興猶盡くるに至らず、幽趣綿々歸るを欲せさらしむ。やがて、罎に清水を滿たして、いざとばかりに立出づ。

事足ると君がいひけん山の井の水とこしへに淸くもあるかな

すゞしさを何といは間の苔淸水汲みて淸きを家土産にせん

一町も距らざるところに西行庵といふありて、近頃建てたるものながら、在りし昔の址にしつらひたるなりといふに、導かれて其處に到る。小やかなる草堂にて、風流めかしたれど厭はしき作りざまなり。山樵木挽などの所爲にや、淺ましくも燒火したるあと見え、らうがはしくして、腰うち掛くべくもあらず。堂前に新しき碑ありて詩を刻す。文字も先づなつかしげ無くて、說法鬻文覺、談兵服賴朝、の首二句、人をして胸わろからしむ。文覺賴朝なんどをば鬻かしたりとて服したりとて、そも何かあらん、二人の如きは釜中の狂魚と壇前の牲牛とのみ。碑を建て古をしるさんとならば、上人の「花散りなば」の詠にても刻さまほしきなり。それも無きには若かさらむ。思を風雲に托し、跡を山林に埋めたる人のために、建碑なんといふことは、いと幼くて、淺間なること也。こゝまで來つれば、蜻蛉が瀧をも見玉へかしと、宿の主人のいふに、道のほどは、と問へば、いくほども無しといふ。さらばとて溪谷を下り流に沿ひて行く

に、思のほかに路遠くて、瀧のほとりに至れる頃は日やうやく暮れんとす。瀧は水を何事かに引けるため、いと細くなり居たれど、巖のさま、瀧壺のさま、流石に物さびてよし。歸路に就く、やがてに日暮れ天暗くなりて、土倉某が生し立てたるしたゝかなる杉の林の木下闇、黒きが上にも黒く、たゞ星の光りをたよりて歩む。左は深き谷、右は山の岨、折々土なだれのところに逢へば、心冷ゆるばかりなるに、夜氣はやく凄じくなりて、寒さも身にしみ入るほど也。辛くも無事に神社下の一軒家に着き、提灯をかりて下る。寸燭の人をたすくる、功德廣大、破闇の威光をたのみて、こたびは勢よく走り馳けり、宿に歸ると直に一浴に疲れを流し、一醉に魂をゆるめて、無何有の鄕に入りぬ。

二十二日。天いよ〳〵晴れ、日いよ〳〵鮮やかなり。蕨杓など土產に少しもとめ、下山の路につく。わらび杓は、柄をまげて、兆僅に柄杓の合をつくれるさま、蕨のごとくなれば名づく。一寸をかしき形也。水分神祠の宰、其の食客某をして芳野誌を編ましめ居れり。草稿一覽す。藏王權現に關する記事は舊記を寫せるだけに古をおもはしむ。其他は地名辭書の拔萃などなり。歸路黑門、大橋、吉野神社などよく見て下る。黑門の傍に柵無し。これ今古の異なり。吉野神社は南帝を祀る。新しく出來たる也。六田の一ノ阪の上に女仙都藍尼の墓ありと聞きたれば、女仙の身の末は終るところを知らずとこそ有りたけれとはおもひながら、すき心に道の左へわざ〳〵上り入りて尋ぬ。聞きしに違はず墓は少々有りたれど、皆土民の古からぬものゝみと見え、それらしき碑碣も無ければ、打笑つて下るに路のほどに時はずれの霧島の花の大なるが、いと美しく咲き居たり。記念にと折りて懷冊子にさしはさみ歸る。六田より下淵にかゝり、又車阪を過ぐ。阪をのぼり切りたるところに、皇后宮御小憩のあとあり。そこより望めば大峰をはじめ、伊勢路の山まで、連山重疊、天を支へて峙てるさま、いと雄壯に見ゆ。巨勢に至り、晝食をすませて、汽車に打乘る。(明治四十四年)

幸田露伴著

幽秘記

（菊判上製）

定價貳圓五十錢
書留送料貳拾四錢

新刊

現下文壇を重からしめるのは露伴博士の存在である。放膽闊壯の筆致と構想とは我國に類例がない氏が生涯中での苦心の大作「運命」は建文帝、永樂帝の詭秘幻異を題材としてかかれたもので、文壇的價値は不朽であり、加之幽夢、眞眞、師師、樓船斷橋の諸篇皆これ絶代の名作である。天子の雲水生活、詩人の謀叛、學徒の虐殺、詩人の校書等支那特有の題材は我國の今迄の小說に見られざりし文壇の一異彩として永久に光芒を放つ大名著。本書は大正創作壇の泰山北斗だ。

大正小說界に聳立する巨作出づ

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

奔流の如く

刷れる新聞　米國アール・ホー會社製の高速度輪轉印刷機六台、マリノニ式九台が一時間六十萬枚の印刷能力を發揮して一齊に回轉する、その壯觀け激流の狂奔するにも似るか

賣れる新聞　大正十四年新春發行部數七十二萬に達しその後更に數萬を増したその賣行の旺んなる、奔流の平原を席捲するにも似るか




月刊タイムス
北海タイムス

谷崎潤一郎著

痴人の愛

定價貳圓
送料廿壹錢

此一篇を以つて其價値を世に問ふ意圖を抱いて滿二ヶ年間碎心苦慮して出來した堂々六百枚の谷崎氏唯一の長篇力作。『西鶴以上』の或種のおもしろい、魅力多い筆致の持主が、今世紀の尤も新しい不思義の戀愛と、性に對する特異の男女を拉し來りて縱橫にモデル臺に立たしめ、世にも怪奇の愛慾を描く。恍惚として一卷を一氣に讀了せしめる文豪の名筆は當代隨一であり、その面白さ、深刻さは現代に群を拔く。若しそれ、その世紀末的男達の糜爛錯交せる愛慾に對する筆の冴えは曉の星の如く獨りきらきらと輝く。

新刊

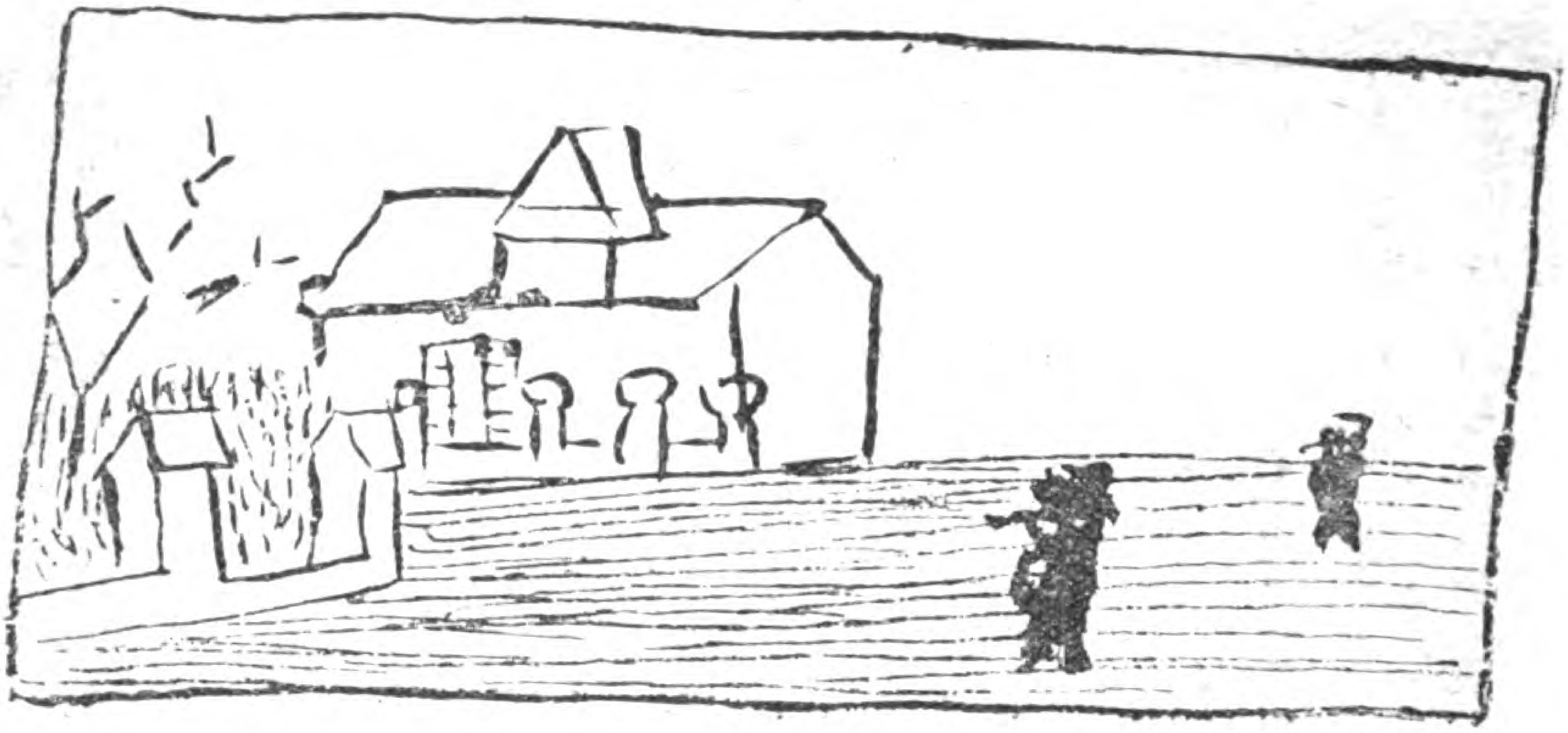
谷崎潤一郎著
新選谷崎潤一郎集
四六判上製 定價五圓五十錢 送料三十錢

谷崎潤一郎著
戲曲 **愛すればこそ**（百一版）
四六判上製 定價一圓六十錢 送料十八錢

谷崎潤一郎著
戲曲 **愛なき人々**（卅二版）
四六判上製 定價二圓 送料二十錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

新年號創作特別附録



戯曲

愛慾（四幕）

武者小路實篤

人物

野中英次（二十九）

野中千代子（二十五）

野中信一（三十六）

小野寺夫婦

第一幕

一、（英次の室、午後一時頃）

英次。僕のことは安心してくれ玉へ。僕は自分のことは自分で考へたいのだから

友。君は短氣なことはしまいね。

英次。誰が短氣なことをするものか。僕はそんな人間に見へるかね。—

友。なんだか君は非常に淋しいやうに見へる。

英次。淋しくないとは云はないが、しかし今の世に生て淋しくない人間がゐるかね。暗のなかに一人でおつぼり出されたやうな氣のしない人間がゐるかね。一體、今の人は何を信じたらいゝのだ。しかし何も信じることが出來ないでも死ぬやうなことはない。僕はまだ僕に見切りをつけないからね。之から何か面白いことをしやうと思つてゐるのだから。

友。それをきいて僕も安心したよ。僕達は君の未來を信じてゐるからね。君に今死なれることは僕達にはつらすぎるからね。

英次。ありがたう。しかし僕は死にはしないよ。死ねれば樂かとも思ふが、中々この世に强い執着をもつてゐる。何にしても始まらない氣もするが、何にもしないでも始まらない。僕は今に君達によろこんでもらへるやうな仕事をするつもりだよ。

友。是非やつて見てくれ玉へ。

英次。出來るか、どうか。

友。君なら出來ると思ふね。

英次。何か僕の内に生たがつてゐるものがあるから、僕はそれを生かす迄は死ねない。

友。皆は君に感心してゐるよ。

英次。さうかね。僕は皆に笑はれてゐると思つてゐたよ。

友。わかる人にはわかる。

英次。しかしわからない人が多いからね。そして僕自身だつて自分の取つてゐる態度がいゝと許りは思つてゐない。あまり意氣地のなさすぎる話とも思ふよ。怒るのが本當ぢやないかとも思ふのだ。それを怒らないのは意氣地がないからとも思ふよ。

友。しかし皆は君を信じてゐるからね。たゞ君が淋しさの前に力をおとすことを恐れてゐる。

英次。それは大丈夫だ。僕だつて他人の出やうで自分をまげやうとは思はないよ。他人がどう出て來ても、自分を生かすこと切り考へないよ。その點僕はエゴイストだよ。それは僕だつて一時參つたよ。皆が感づく前に僕は感づいてゐたからね。半信半疑ではあつたがね。しかしその御かげで皆が感づいた時分には僕の度胸はきまつてゐたよ。そして物好きな奴をよろこばすわけにはゆかなかつた。僕はなほ勇氣を得たね。僕はなほ決心をしたからね。そして僕は兄や妻にも同情してゐる。無理はないと思つてゐる。僕は獨身の生活をしてゐるつもりになればいゝのだ。

友。君の決心をきいてうれしく思つたよ。皆もさぞ安心するだらう。それでは失敬する。

英次。それでは皆によろしく云つてくれ玉へ。僕のことは心配しないでほしいつてね。僕の氣になるものはたゞ兄に食はしてもらつてゐると云ふ點だ。その點で僕は兄に怒れないのだと思つて皆に輕蔑されてゐるやうに僕はついひがむのだが、まあさう思ひたい人にはさう思はしておく、事實、まあさうだからね。

友。それでは失敬する。

英次。又來たまへ。

友。ありがたう。

（二人退場、英次まもなく登場、おちつかない形、信一登場）

信一。英次、一寸話したいことがあるのだ。
英次。なんですか。兄さん。
信一。千代子さんは何處にゐるか、知つてゐるなら教へてほしいのだがね。
英次。千代子はお兄さんと一緒ではなかつたのですか。
信一。千代子さんは一昨日一寸僕の處へ顔を見せたきりだ。
英次。僕の處へは一昨日から歸つて來ません。お兄さんと一緒だと思つてゐましたよ。
信一。千代子さんにへんな所はなかつたかね。僕は心配してゐるのだよ。
英次。僕は千代子の番人ではありませんからね。法律上では千代子の夫かも知れませんが、事實は僕は千代子とは赤の他人ですからね。千代子のことは知りませんよ。
信一。千代子はいつもお前のことをほめて話してゐる。
英次。千代子はお兄さんのことは僕の前でほめたことはありませんよ。
信一。さう一々皮肉には出ないでくれ、俺がわるいのだから仕方がないが、今日は俺は本當に心配してゐるのだ。
英次。僕はお兄さんを尊敬してはゐますが、お兄さんが策略をつかう人だと云ふことを僕は知つてゐるのですからね。僕はお兄さんの云ふことを眞正面には信じられないのです。たとへばです、角までお兄さんが千代子と來てゐながら、お兄さんは今お兄さんが云つたやうなことを平氣で云へる人だと僕には思へるのですから、僕は、お兄さんと一緒になつて千代子のことは心配出來ません。
信一。お前にさう言はれても一言もないが、しかし千代子さんは、

英次。千代子さんなんぞとは云はないで下さい。尤もさんをつけたければおつけになつてもかまいませんが、わざとらしくなく云つて下さい。僕は千代子をお兄さんの妻だと思つてゐるのですからね。

信一。それならもう千代子さんの話はよさう。しかしお前は千代子さんのゆくへを本當に知らないのかね。何か恐ろしいことが何處かで行はれたやうな氣がして仕方がないのだ。今にも千代子が血みどろになつて出て來はしないかと思ふのだ。

英次。この椽の下からでもですか。

信一。さうだとは云はないが。

英次。さうでないとも思へないのですか。

信一。千代子はお前を恐れてゐたよ。

英次。千代子の恐れてゐたのはお嫂さんです。

信一。たづ子をお前は疑つてゐるのか。

英次。あなたのゆかゝ下を疑つてはゐませんよ。だがお兄さんが本氣になつて千代子のことを心配してゐらつしやるのを見るのは僕には意表外ですよ。僕は千代子なんかお兄さんにとつては十數人の女の一人にすぎないと思つてゐましたよ。

信一。そんな男に見へるかね。

英次。何しろお兄さんは一代の人氣役者ですからね。女には不自由をなさつたことはないでせうからね。

信一。僕は千代子さへ死んでゐなければいゝのだ。

英次。お兄さんは本當に千代子が死んだかも知れないと思つてゐるのですか。誰かに殺されたとでも思つてゐるのですか。

信一。さうは思つてゐないよ。だが昨日へんな夢を見たのだ。

英次。千代子のですか。僕は千代子はお兄さんと一緒だと許り思つてゐたのですよ。

信一。夢だと、千代子はお前に殺されたやうに云つてゐたよ。この室でね

英次。この室で殺さうと思つたことはありましたよ。だが殺すわけにはゆきませんでした。

信一。夜中にお前が短刀を見つめてゐたのを千代子は見たと云つてゐたよ。

英次。そんなこともあるかも知れません。其處まで思ひつめると、僕は千代子を全部的に愛することが出來るのです。千代子の缺點も皆。千代子はその時、その時で全部的に動いてしまうのですから、あいつが私を愛してゐる時には、その心を疑ふことは出來ないのですから。

信一。たしかにあいつはお前を愛してゐる。お前がもう少し嚴重に見張つてゐてくれたら、こんな所におちこまなくつてもよかつたのだといつか云つてゐたよ。

英次。あいつはどんなことだつて云ひますよ。私は何度あいつに死ぬことをのぞまれたでせう。女は後家になるまでは樂が出來ないと云ふのはあいつの口ぐせです。あいつは又お兄さんの死ぬことをのぞんでもゐました。僕はあいつに殺されはしないかと思つたこともありましたよ。だがあいつは又氣がよはいのですから、僕が一寸指に負傷でもすれば、まるで僕は生命にかゝはるやうな大負傷をしたやうにさわいで、そして泣いて心配してくれるのです。あいつは死ぬやうなことは出來ませんよ。

信一。だが誰かに殺されさうな氣がすると云つてゐたよ。
英次。それはあいつの自惚れです。そんな事が云つて見たいのがあいつのくせです。
信一。それならお前はあいつが生てゐると思つてゐるのだね。
英次。勿論、生てゐると思ひますよ。だが死んだつてお兄さんは別に困りはなさらないのでせう。
信一。死なれては困るよ。お前は死なれてもいゝのか。
英次。死んでくれたら、それも反つていゝと思ひますよ。ですが、僕にとつてはともかくあいつは唯一の女です。浮は氣ものであつても。
信一。お前の畫を見せないか。
英次。だめです。
信一。だめでもいゝから見せないか。
英次。それなら見せますかね。
信一。中々うまくなつたね。
英次。それはお世辭ですか。正直に云つて下さい。
信一。俺には畫のことはわからないが、前よりうまくなつたことだけは分る。
英次。まあ、少しづゝはうまくなるでせうが、中々ものにならないものですね。
信一。なんだつてさうだよ。さうらくにものになるものぢやない。
英次。だが最初の作から、何處かに天才のひらめきがなくつてはものにならないと思ひますね。お兄さんの始めの輧盜

を見た時から、僕は感心したものでしたよ。自分のものにはそんなひらめきがないやうに思ふのですがね。

信一。不意に出てくるものだね。お前はものになると思ふね。

英次。それは僕だつてものにならないと思へば畫はやりませんよ。僕は他のことにはなほ望がないのですから、畫だけにかぢりつくより仕方がないやうなものですがね。しかし僕は自分がせむしに生れたことを後悔はしてゐませんよ。それだけ僕は運命にハンブルになつて、自分の仕事を一心にやつてゆけばいゝと思つてゐますよ。女のことなんか、僕は考へるだけでも身の程知らずだとも思つてゐるのですよ。

信一。さう云はれると一言もないがね。

英次。僕はお兄さんを一面憎んでゐるかも知れませんが、しかし僕はお兄さんを天才として尊敬してゐるのですよ。お兄さんの藝は日本の傲りだと思つて、よろこんでゐるのですよ。その他の點は別としても、お兄さんの藝のます〳〵進んでゆくのには感心し切つてゐますよ。

信一。お前にさう言はれると本當に嬉しいよ。僕は世界の内でお前の前にだけ頭をさげたいのだ。

英次。そんなことは云はないで下さい。お兄さんは空高くとんで下さい。女のことなんか氣にしないでね。僕のことなんかも氣にしないで下さい。僕は地にしがみついて何か其處からほり出して見るつもりです

信一。僕はお前を心から尊敬してゐる。二人は一面敵かも知れないが、一面は實に尊敬しあふ。この上ない兄弟だと思つてゐる。

英次。お兄さん、僕は一つの覺りをひらいてゐるのですよ。他人は自由たらしめよ。よしそれが妻であつても、自分の自由になると思ふな。自分の自由になるものは自分だけだ。それも許された小さい範圍内の話ですがね。僕はその範

圏内で出來るだけ、立派な人間になるつもりですよ。僕の手を見て下さい。決して血によごれてゐません。僕は千代子も可哀さうな人間と思つてゐるのですよ。お兄さんも、お嫂さんもね。人間と云ふものは、さう出來てゐるのですからね。

信一。さう云はれると一言もないよ。

英次。お兄さんは藝だけを大事にして下さいよ。そして皆に純粋な藝術的よろこびを知らしてやつて下さい。僕は一人になつて靜かに書がかきたくなりました。

信一。それなら又くるよ。今日は失敬する。

英次。千代子の消息がわかつたらすぐ知らせますよ。

信一。生てゐることだけでいゝよ。

英次。正直なことをおつしやつてもいゝでせう。お嫂さんによろしく。

(二人退場。まもなく英次登場)

英次。俺は他人の出やうで自分の生命をあげさげはしないぞ。

(友、登場)

友。さつき手帳を忘れたのでとりにきたよ。

英次。さうか。兄にあつたか。

友。あつたよ。

英次。君は兄を知らないのかね。

友。君の兄さんは舞臺で見たゞけだ。

英次。僕の兄弟とは思へないだらう。兄弟にもいろ〳〵あるものだね。

友。しかし何處か似てゐるよ。

英次。口が似てゐるだらう。

友。口が似てゐる。

英次。兄は母に似てゐる。そして僕は父に似てゐる。その上に一人女の子があつたが死んでしまつた。僕はせむしでなかつたら、もう少しのび〳〵育つことが出來たらう。そしたら兄にもつとよく似たかも知れないが、感じがまるでちがつてしまつたよ。よく父に兄は鶴に比較され、僕は蟇に比較されたよ。隨分ひどい比較だが、あたつてゐる。

友。…………

英次。返事が出來ないかね。あたつてゐるからね。だが僕はさう云はれてもあまり腹が立たず、ます〳〵兄を崇拜したものだよ。子供の時はね。今になると僕には又僕のいゝ處があると思つてゐるがね。たゞ他人に通じないだけの話だがね。しかしこんな僕に女難があるとしたら滑稽だらう。あるわけもないが、僕は身の程を知れば幸福になれるのだよ。僕は僕に相當な仕事をしてゐればいゝ。僕にだつて、僕相當な仕事はいくらでもある。

友。…………

英次。君は僕を同情してゐるかも知れないが、僕は一人で心のどこかに畫がかける、自分の心に感謝してゐるよ。僕は之でも一方間抜けた呑氣ものらしいよ。誰か來たらしい。

（英次退場、まもなく登場）

英次。だれでもなかつた。僕は賢者には悲劇がないと云ふことを聞いたことがあるが、自分も出來るだけ賢者になるつもりだ。蟲のいゝ要求を出しさへしなければ悲劇は起らずにすむ。僕だつてさうだよ。妻が僕に滿足しないと云ふのは當然すぎることだ。妻が僕の處へ來たのがまちがひだ。だからそのまちがひからなほしてゆけばいゝのだ。處が僕は妻の美しい肉體に愛着を感じてしまつた。其處で悲劇が起りたがるが、悟つて見ればなんでもないことだ。何處に風が吹くと思へばそれでいゝはづだ。だが中々口で云ふ程うまくはゆかないがね。しかしいくらうまくゆかないからと云つて、事實をまげるわけにはゆかない。僕は依然としてせむしで、依然として竈だ、そして依然としてあまりさばけない。いや味な男だ。だが僕は畫をかけば、僕のいゝ處が出てくれると思ふのだよ。僕だつて人間だ、いゝ處は持つてゐるからね。其處で僕は花や、果實を相手にしたり、山や水を相手にしてゐると心のどかに仕事が出來るのだ。だから僕は自分を不幸だとは思つてゐない。誰か來たやうだね。

友。氣のせいだよ。

英次。さうかね。僕は妻が歸つて來たのかと思つたよ。僕の兄は妻を僕が殺しはしないかと思つて心配してゐるのだよ。一寸無理もない處もあるが、僕だつて一思ひにやつてやらうと思つたこともまるでないとは云へないからね。だが人殺しするには、あとのことが目に浮びすぎるし、無理心中するには、自分に仕事がありすぎるからね。だが妻は僕に殺されるのを怖がつて逃げてゐるのかも知れない。馬鹿な奴だよ。だが自分の知らない内、夢遊病者にでもなつて妻をやつけて氣がつかずにゐるのかも知れないがね。それは冗談だよ。今に妻は歸つてくるよ。だが僕は妻のとなんか何とも思つてゐないのだ。久しぶりに君と碁でもやらうかね。どんなに僕がおちついてゐるか君に示して見やう。

（碁をやり出す）

幕

二

（英次の室、妻千代子三味線をひき、英次はうたをうたつてゐる、友登場）

英次。よく來たね。妻は昨晩おそく歸つて來たよ。矢張り自家は忘れなかつたと見へる。

妻。小野寺さん。隨分あなたに御心配かけたさうですみませんでした。私はなんだか不意にうちへ歸るのが怖くなつて箱根へ逃げていつたのですが、金がなくなつたので、まあ殺されたら殺された時と思つて歸つて來ましたら、主人がよろこんでくれたので、私は生きかへつたやうな氣がしましたよ。

英次。俺も生きかへつた氣がしたよ。首でもくゝられちや寢ざめがわるいからね。そのかはりこいつがゐると畫がかけないで困るよ。

妻。たまに歸つて來ると、すぐ畫がかけないなんて云ふのですからね。

友。畫なんかかけなくつたつていゝでせう。

妻。私が生てゐたのをよろこんでくれたかと思ふと、すぐ又畫がかけないが始まるのですよ。

英次。何しろ朝から三味線をひき出すのだからね。

妻。三味線をひけとは誰がおつしやつたの。

英次。さう云はすやうに持ちかけたのは誰かね。何しろ畫ももう一息でものにならうと云ふ處なのでね。だが氣持が呑氣になつてしまつたので、今朝、一寸やつて見たが駄目になつてしまつた。

友。その内には又うまくゆくよ。

英次。又こいつが逃げ出してくれるとか。

妻。私はもう逃げはしなくつてよ。いくら逃げてくれとおつしやつても。

英次。だれも逃げてくれなんて云はないよ。

妻。誰が出來ないでもいゝの。

英次。又ちがう誰が出來るさ。

妻。あなたは私が居ても居ないでも一向平氣だからいやになるわ。

英次。そんなことはないよ。だがお前を座敷に押し込むわけにもゆかないからな。

妻。押し込んで下さればいゝのだわ。私のやうな人間はほつたらかしておくと何するか自分でもわからないわ。

英次。困つた奴だな。自分で自分を制御することはお前には出來ないのだね。

妻。あつと思ふと、もうすべつてゐるのですから罪はないわ。

英次。(怒らずにて、馬鹿。

妻。私を座敷牢に押し込んで、御馳走食はしてくださらない。さうすれば私は反つてらくだわ。

英次。それも三日とはつゞくまい。

妻。あなたの方がね。あなた酒上らない。

友。僕はのめません。

英次。トランプでもしやうか。

友。今日はよさう。もう一時間程するとゆかなければならない處があるから。

英次。何處へゆくのだ。
友。山田と約束してあるのだ。
英次。山田つて小說をかく奴か。
友。さうだ。
英次。君はあいつを知つてゐるのか。
友。知つてゐる。
英次。逢つたら敬意を示してくれ、僕はあいつのものをいつか一つよんで感心したことがあるよ。だがあんな處へゆくよりはうちにゐろよ。今日はね。僕は何となく愉快なのだ。それに二人切りになるより三人がいゝのだ。トランプやらう。
友、山田と君の兄さんの芝居を見にゆく約束したのだ。
英次。芝居にはまだ時間があるよ。山田は僕の兄貴のことを何か云つてゐたか。
友。ほめてゐたよ。あの位いあかるい人を見たことはないと云つてゐたよ。
英次。さうか。兄は藝にかけては天才だ。女にかけてはならず者だが。人間と云ふ奴は不思議な同居人を二つ持つてゐるやうなものだね。兄貴の藝は僕は誰にも負けずに讃美するが、兄貴の品性はほめるわけにはゆかない。尤もあゝ女にもてれば誰だつてあゝなるかも知れないがね。兄貴の内の愛すべきものを殺さずに、兄貴の内の憎むべき方面だけを殺すことが出來たらな。僕は兄貴の半分を殺してやるのだがね。
妻。そんな話はおやめなさいよ。

英次。やめやう、やめやう。折角いゝ氣持がこわれては馬鹿氣てゐるからな。だが俺の兄弟程、面白い兄弟はないだらうな。僕は子供の時から兄貴の讃美者だが、いつも兄貴を憎んではゐたやうだ。よさう、よさう。さむけがするよ。

妻。そこの戸が開いてゐるからよ。本當にあなた身體を大事にしなくつては駄目よ。私はあなたが大事で大事で仕方がないわ。

英次。それも本音でないとは云はないが、次ぎの瞬間には俺が生てゐなければいゝと思ふのだらう。

妻。あなたの内には意地の恐ろしくいゝ處と、わるい處とあるわ。

英次。お前にもさう云ふ處はないかね。お前のことを思ふと、大がいの人間はすてたものではないと思ふよ。

妻。よくつてよ。

英次。わるくつたつて仕方がない。俺はお前が誰よりも可愛いゝが、誰よりも憎い。

妻。醉つたのぢやないの。

英次。醉ふものか。だがもう酒もなくなつたね。

妻。あんまりのむといけないわ。

英次。だがあと一合位いはのんだつていゝだらう。一寸とつて來てくれ。

妻、およしなさい。よした方がよくつてよ。

英次。そんなこと云はずにとつてこいよ。今日は久しぶりだからね。

妻、それならとつてくるわ。(退場)

英次。どうだい。あいつを見て君は惡人と思うかね。

友。思はないよ。

英次。善人ぢやないが、惡人ぢやない。僕はあいつを見ると自分が僞善者のやうな氣がすることがある。あいつ位い辭骨に自分の心のまゝにふるまう奴はないからね。

友。君は細君をもう少し束縛する方がいゝ。一人で歩かさずに、一緒に出あるくがいゝ。

英次。このセムシぢやね。

友。君位いなら別に氣がつく人はないよ。よしあつたつてかまわないぢやないか。

英次。そんなことはどうでもいゝ。僕の不名譽にはならない。エピクテートもセムシだつたさうだね。セムシを僕は恥とは思つてゐないよ。だが見ていゝものぢやないが。しかし僕はあまり出歩くのは嫌ひなのだ。又他人を束縛するのも嫌いだよ。僕は千代子を妻とはよんでゐるが、妻だとは思つてゐない、友達だと思つてゐる。妻だと思へば腹が立つことも、友達と思へば感謝出來る。僕は自分を一人ものと思つてゐるよ。僕は自分の仕事を持つてゐる人間だからその他のことは問題にしてゐない。

友。それだつて君の細君自身のために君は暴君になる必要がある。あの人は自分で自分を束縛することの出來ない人だ。

英次。他人なら束縛出來ると云ふのかい。

友。たしかに君の細君は君に束縛されたがつてゐる。

英次。それも嘘ぢやあるまい。だが僕があいつを一度も束縛しなかたと思つてゐるのかい。あいつは束縛されゝばおとなしくしてゐると思つてゐるのかい。又僕を細君の番人そのものにしたいのかい。僕はもうそんなことにはあき〳〵

した。來るものは來るがいゝし、去るものは去るがいゝ

友。それで君は滿足してゐるのかい。

英次。それで滿足しなかたらどうすればいゝのだ。

友。しかし夫婦つてそんなものぢやないだらう。

英次。人によるよ。一緒にゐてお互に信じあへる夫婦、疑ひたくとも疑へない夫婦、たまにははなれてくれるといゝと思つてもいつもくついてゐる細君をもつ夫。そんなものも世間にはいくらでもあるだらう。しかし僕はそれを羨やましいと許りは思はないよ。どつちもいゝ處と、わるい處とある。僕は他人は他人だと思つてゐるよ。自分のわきに居たくない人間をわきに居させやうとは思はない。

友。本當にさう思つたことはないのかい。

英次。君は察しがあまりよくないね。だが僕は自分の細君だつて獨立した一個の人間であることを疑ふことは出來ないよ。ある程度の嫉妬や、束縛や、いたわりあいは必要がないとは云はない。それ等をわるいとは思はないが。しかしお互に生てゐるのがいやになる程束縛する必要があるとは思はない。お互に嫉妬や、嫉妬されることや、束縛から解放されて、一人の人間の味を嚙みしめるのもわるいものと思はないよ。

友。どつちにころんでもいゝのか。

英次。さうだよ。本當にころがつた者は起き上る時は何か得をしてゐるものだと云ふのが僕の主義で、まちがいがないと思つてゐる。僕は太平な夫婦生活を讃美するよ。だが特種な自分の結婚もわるいと許りは思つてゐない。その內に面白味があるよ。歸つて來たかな。ちがうらしい。もう歸つて來さうなものだ。それとも又逃げたかな。

友。逃げても平氣かね。

英次。平氣でなければならないと云ふことはない。平氣でないから何か共處から美しいものが生れると云ふこともあるものだ。他の人が見たら僕程、あまい馬鹿者はないと思ふだらうな。だが僕には僕の生き方がある。逃げたら又あの聾がつゞけられる、わるくないなあと思つてゐる。それにしてもおそいな。一寸見てくるよ。

友。酒屋はそんなに近いのか。

英次。すぐその角だよ。十間もあるまい。一寸見てくるよ。

（英次退場、まもなく登場）

英次。兄貴と角で話してゐたよ。（無理に笑ふ）兄貴の奴、へんに心配してゐるのだよ。僕があいつを殺しはしないかと思つてゐる。馬鹿な奴だよ。兄貴も、あいつには本氣に參つてゐるのかも知れない。馬鹿な奴だ。（無意識に酒をのもうとしてカラなのに氣がつき）早く酒をとゞけさせりやあいゝのにな。自分で持つて歸らなくつたつていゝのに。（間）僕の性質が君にのみこめるかね。淺ましい境遇にゐて、おちつきはらつてゐる氣持がね。さう云つても君は信じまい。一つ三味線でもひいて一つ奥の手でもきかして上げやうか。（三味線をとる）何をやらうかね。（何か唄ひかける）

（千代子登場）

英次。お待ち兼ねだ。

千代子。遲くなりました。一寸酒屋の上さんに話しこまれたので。

英次。さうか。それは運よくあへてよかつたね。

千代子。あの酒屋のお上さんは中々器量よしですね。

英次。さうかね。
千代子。何かやりませうか。
英次。やつてもいゝね。だが酒をのんでからにしやう。
友。僕は今日は之で失禮するよ。
英次。もう少しゐたまい。もう十分、いやもう二十分程居たまい。人間は時々二人切りになると危險な時のあるものだ。僕の氣分がおちつくまでゐたまい。
千代子。氣持がわるいの。
英次。わるいこともないが、いゝともゆかない。
千代子。それなら酒はおやめになつた方がいゝわ。
英次。ともかくのもう、そして何か靜かな氣持のいゝ唄でもやつて、小野寺君に聞いてもらはう。(酒をのみながら)英雄閑日月ありと云ふが、僕には僕の心の修業がある。靜かに、靜かに、心のどかに、この一日をおくりたいものだ。
(三味線をとりあげ、ひき出す)

三

(夜、英次千代子の姿を鉛筆ですけつちしてゐる。千代子そばで着物をぬつてゐる。)
英次。書をかく呼吸がのみこめて來たやうだ。
千代子。それはよろしいね。

英次。こんな天下泰平な日がつゞくとは思はなかつたよ。
千代子。私もすつかりおちつきましたわ。
英次。あらしが過ぎたのだね。
千代子。本當ね。
英次。もう嵐が來ないといゝ。
千代子。あなたもさう思つてゐらつしやるの。
英次。思つてゐるよ。そして畫もうまくゆきさうだ。之から畫も賣れ出すかも知れない。
千代子。賣れたら、何か買つて頂戴ね。
英次。買つてやるよ。だがいつのことか。
千代子。ですが、賣れないでも、いゝ畫が出來れば私うれしいのよ。
英次。どうして。
千代子。でも、あなたの御機嫌がよろしいもの。畫が出來損なうとすぐ癇が起りますからね。あなたの癇は本當に閉口よ。
英次。もう、癇なんか起さないよ。俺も少しは利口になつたよ。
千代子。本當に、あなたはこの頃へんにおちついていらつしたわ。
英次。人間は持つてゐるものを一ぺん皆すてゝしまうと利口になるのだな。自棄を起し切りに出來ない人間はいろ〳〵の目にあふのも惡いと許りは云へない。
千代子。あなたにとつてはなんでもいゝのね。子供が出來ない、それもいゝだらう。私がゐなくなる、それもいゝだら

う。私が歸つてくる、それもいゝだらうでしよ。

英次。さうなれゝばいゝと思つてゐるのだよ。いろ〳〵のことにぶつかるたびに自分の心が研かれてゆけばね。だが俺は癇持ちだからまだゞめだよ。自分でもどうすることも出來ない時がある。

千代子。あの時、あなたは本當に私を殺さうと思つてゐらつしたの。

英次。かつとした時は何をし出かすか、俺の内には恐ろしい血が流れてゐるのかも知れない。俺の大祖父さんと云ふのは自分の子供があんまり泣くと云つて石の上にたゝきつけて殺したと云ふ噂がある。本當かどうか知らないが、恐ろしい話だ。そしてあとでその子のこと許り云つては泣いてゐたさうだ。實際その子を一番愛してゐたのださうだが、話には少し誇張があると思ふが、俺にもどうかするとその血が流れてはゐないかと思ふと怖くなる。その血と戰ふのが自分の一つの修業のやうな氣がしてゐる。

千代子。氣ちがい筋なのね。怖いわね。

英次。だから僕の兄は僕を恐れ、僕は兄貴を恐れてゐるのだ。

千代子。なんだか氣味がわるくなりましたわ。

英次。本當は今のはつくり話だよ。そんな奴が先祖にゐはしなかつたかと一寸思つただけだよ。だが氣違ひにどうしてもならないと云ふ人間はないやうに思ふね。ただ氣違ひになりやすい人間と、なりにくい人間があるだけだね。

千代子。あなたは氣違になりやすいの。

英次。俺のやうなのは反つてならないと思ふがどうかね。この前お前が目をさました時、短刀を見てゐたと云ふのは、お前を殺さうと思つてゞはなかつたが何となく短刀が見たくなつた。俺の内には矢張り武士の血がのこつてゐると見

べる。

千代子。いやな血がのこつてゐるのね。

英次。血のせいではないかも知れないよ。誰でも一寸夜半に短刀が見たくなると云ふやうな氣持は持つてゐるものぢやないですかね。

千代子。どうですかね。そんなことはないでしよ。

英次。お前は夜中に鏡が見たいと云ふやうなことはないか。

千代子。夜中に鏡を見るのはなんだか怖いわ。

英次。怖いからなほ見たいと云ふやうなことは。

千代子。あなたと話してゐると世の中が何んだか凄くなつてくるわ。

英次。お前は幽靈と云ふものは認めるかね。

千代子。そんなものはないものでしよ。

英次。お前も人殺しはしたことはないと見へるね。

千代子。あなたは人殺しゝたことがあるの。

英次。そんなことはないよ。だが人殺をした人は幽靈の存在を信じるだらうと思ふのだ。殺した人の姿が見へるだらうと思ふのだ。壁を見ても、天井を見ても、窓を見てもその人の姿がまざ〳〵と見へると思ふのだよ。殺した時の姿がね。

千代子。氣味がわるいわ。

英次。だから人を殺さないものは仕合せだと云ふのだよ。

千代子。死ぬつてどんなものでせうね。
英次。深い眠りだね。さめない。
千代子。それなら悪くないものね。
英次。死の恐怖さへなければね。それに死の苦痛も大變だと思ふね。生命と云ふ奴は中々生きたがるものだから樂には死ねないね。
千代子。首しめられるのは樂ですつてね。
英次。女の肉づきのいゝ手で靜かにしめられるのは樂かもしれないが、息が出來ないのは樂ではあるまい。
千代子。だが私の兄が柔道をやつて、よく喉をしめられたさうですが、なれるといゝ氣持になると云つてゐましたよ。
英次。お前の兄は噓つきぢやないかね。
千代子。だつてそれは本當だと思ふわ。
英次。噓ぢやないかも知れないが、本當とも思へない。呼吸が出來ないのが氣持がいゝとは思へない。雞の首をしめるのだつていゝものぢやない。
千代子。見たことあつて。
英次。見たことはないがね。
千代子。あなたの話は、皆想像ね。
英次。だがまちがつてゐるとは思はない。何時かな。
千代子。八時よ。

英次。まだ早いな。だが誰かくると厄介だから、今日は早くねるかな。
千代子。えゝ、寢ませう。
英次。お前のうしろに誰か居るよ。
千代子。あつ。
英次。あはゝゝゝ。
千代子。いやな方。びつくりしたわ。
英次。あはゝゝゝ。
千代子。あなたの後ろにたつてゐるわ。
英次。影法師だらう。
千代子。女らしくつてよ。
英次。背むしの女かね。
千代子。あなたは又そんなことをおつしやる。
英次。セムシと云ふ言葉をきくだけでもいやかね。
千代子。あなたのそんなことを云ふ氣持がいやなのですよ。
英次。いやかね。この姿の方は嫌ひぢやないかね。
千代子。わざとそんな風をしなくつたつていゝわ。
英次。したつていゝだらう。俺にはお前のいやがるのが面白いのだよ。

千代子。いやなくせね。
英次。毒蛇の感じもわるくないね。
千代子。私大嫌ひよ。あなたのその趣味は。
英次。さうかね。お前に似合はないね。俺は今晩、お前を殺してやる。
千代子。そんな冗談は云はないものですよ。
英次。安心するがいゝ。殺すと云ふ時は殺さないからね。
千代子。殺さないと云ふ時は殺すの。
英次。それはどうかわからないよ。
千代子。あなたは私をおどかすのね。
英次。どうかね。明日の朝がくれば許してやるよ。
千代子。あなたのその目が私は怖いわ。
英次。俺の背中が怖いと云ふ方が本當だらう。
千代子。もうそんな恰好するのはいやよ。
英次。あはゝゝ。お前の顔には死相があらはれてゐるよ。
千代子。あなたの顔には氣違ひ相があらはれてゐるわ。冗談はよしませうね。冗談から駒が出ると大へんですからね。
英次。さあおいで、今日はお前と俺の生死の戰ひだ。
千代子。ゆくわ。死んだつていゝわ。

（千代子英次にとびかゝらうとする幕）

第二幕

一、小野寺の室、西洋間

（小野寺、何かかきものをしてゐる。細君芳子登場。花をもつて來ていける）

小野寺。いゝ花があつたね。
芳子。あんまり奇麗だつたので買つて來ました。
小野寺。本當に美しいね。矢張り秋の花は何處か秋らしいね。
芳子。今日はいゝ天氣ね。何處か散歩なさらない。
小野寺。行かうかね。
芳子。私をつれていつて下さる。
小野寺。それはつれてゆくよ。
芳子。うれしいわ。何處へゆきませう。
小野寺。何處へ行かう。
芳子。何處でもいゝわ。あなたとなら、あなたは
小野寺。俺も何處へでもいゝよ。お前となら。
芳子。まあ。

小野寺。こんな天氣なら何處へ行つたつて氣持がいゝ。郊外に出さへすれば。

芳子。本當ね。そんなら私、着物着かへてくるわ。

小野寺。そのまゝでいゝよ。

芳子。羽織だけかへてくるわ。(退場)

(まもなく芳子登場)

芳子。それなら出かけませう。誰かくると出かけられなくなると困りますから。

小野寺。それなら出かけやう。

女中。郵便が參りました。

(小野寺うけとる、女中退場)

芳子。何處から。

小野寺。野中からだ。

芳子。なんて。

小野寺。こないだいつた禮と、いたつて無事だから安心してくれ、紛もかけるから安心してくれと云つて來た。

芳子。それはよかつたわね。野中さん夫婦は無事におさまるでせうか。

小野寺。それはわからないね。

芳子。私、野中さん氣味がわるいわ。あなたの親友の惡口を云つてはすみませんが。

小野寺。氣味のわるくないこともないな。あいつは隨分いゝ所をもつた男だが、少し趣味が病的だよ。なんだか不安心

な所がある。あまり思ひつめる質なのだね。

芳子。あゝ云ふ人は呑氣になれないものですかね。

小野寺。呑氣に酒のんだり、三味線をひいてゐる時でも、何處か不氣味だね。

芳子。それではゆきませう。

小野寺。行かう。だが一寸野中にハガキをかいてからにしやう。

芳子。どなたもその間にいらつしやらなければよろしいけど。

小野寺。來たつて出かける處だと云つて斷ればいゝ。

（女中登場）

女中。野中さんと云ふ方がゐらつしやいまして一寸おさしつかへがなかつたら話したいとおつしやいました。

小野寺。野中が來たのか。

女中。いつもの野中さんとはちがいます。大へん立派な方です。

小野寺。それなら野中の兄さんが來たのだらう。お通しゝてくれ。

女中。はい。（退場）

芳子。お通しするの。

小野寺。野中の兄さんぢや仕方がない。

芳子。私大嫌ひよ。色魔なんか通さなければいゝのに。

小野寺。何にわるい奴ぢやないよ。

芳子。それだつて私大きらいだわ。

小野寺。嫌ひで幸ひだよ。

（二人笑ふ）

芳子。まあひどい。（退場）

（信一女中につれられ登場。女中退場）。

信一。始めてお目にかゝります。いつも弟が世話になりまして。

小野寺。いゝえ、僕の方こそ。どうぞおかけ下さい。

信一。僕は一寸急ぎますから、用事だけ短刀直入に云ひますが、失禮な所や、聞き苦しい處がありましたら、許して下さい。

小野寺。どうぞ遠慮なく。

信一。實は弟のことですがね。君も御存知の通りの人間で、僕は弟を誰にもまけずに信用し、又尊敬すべき點は尊敬し、望みをおくべき處には望をおいてゐるのですが。

小野寺。本當に英次さんはすぐれた才をもつた方として、僕達は尊敬してゐるのです。

信一。ありがたう。兄としてあゝ云ふ弟をもつてゐることは一方傲りにしてゐるのです。

小野寺。敬次さんもあなたのことをいつも自慢してゐらつしやいます。

信一。耻かしい話です。僕は弟に天才的な處のあるのを認めて、それをどうかして生かしてやりたく思つてゐるのです。しかし御存知のやうにあいつは變りもので、一方非常にあかるい、すなほな氣質を持つてはゐるのですが、その

反對の性質も強くもつてゐるのです。その性質がこの頃、頭をもたげて來てゐるやうに思ふのですが、どんなものでせうかね。

小野寺。さう思へばさう思へないこともないと思ひますが、今もハガキを戴きましたが大へん氣持がおちついて仕事も出來ると書いてありましたから。

信一。さうですか。それを伺へば安心ですが僕は弟の妻からへんな手紙を出しなに受けとつたのです。それをうけとつたので實は急にあなたの處に伺ふことにしたのですが、弟の妻から是非あなたにあつて相談してくれとかいてありましたから。

小野寺。さう云つては失禮ですが、千代子さんのおつしやることはそのまゝ信じていゝでしやうか。

信一。あれはたしかに病的な處があるかも知れませんが、しかし弟の妻の云ふことも滿更うそだと許りは思はないのです。弟は妻と僕の間を疑つてゐるやうですが、又疑はれても仕方がないと云へば云へないこともないのですが、弟の思つてゐる程深か入りしてゐるわけでもないのです。尤もあの細君は僕に始め近づいて來、僕を愛したために弟も愛したと云つてもいゝのかも知れません。僕は弟のことをあの人にほめて話しましたからね。今になつて見るとそれがよくなかつたのですね。あの人と弟の性質がどんなにこんがらかりあふか、僕は考へても見なかつたのですし、考へやうとも思はなかつたのです。第一弟の妻になるなぞとも考へてゐなかつたのです。しかし二人が夢中に結婚したがつた時、僕は弟のためによろこんだものですがね。まあそんな話はすんだ話ですが。弟の妻の手紙には、どうも近い内に殺されそうな氣がして仕方がないと云ふのです。そして君と僕とで、どうか助けてほしいと云ふのです。自分が死ねば弟だつて一生を棒にふるにちがいないと云ふ意味のことがかいてありました。自分も死にたくないが、逃げ

れば殺されさうだし、一緒にゐても殺されさうだと云ふのです。それに逃げることも出來ず、一緒にもゐられない。どうしていゝかわからないとも書いてありました。
小野寺。それは嘘ではないかも知れません。こないだあつた時はさとつたやうなことを云つてゐましたがね。坂をころがりおちたがつてゐる大石を藁繩でやつととめてゐると云ふ感じが何處かにしてゐました。
信一。どうしたらいゝかと道々考へたのですがね。轉地でもしたらどうかと思ふのですがね。あの家はよくないと思ふのですよ。
小野寺。たしかにあの家はよくありませんね。
信一。それに私の考へでは、弟の畫が少し賣れたりしだすと、又氣分がかはるかと思ふのですがね。金は僕が出してもいゝのですが、君や僕が買はさしたとしたら反つて侮辱されたやうに思ふでせうからね。あれは同情されることを實に嫌つてゐますから。
小野寺。本當にあの意こ地な處が英次さんのよくないくせですね。
信一。あれがあるので生きてもゆけるし、仕事も出來るのでせうが、困つたものです。
小野寺。轉地すると云へば何處ですかね。
信一。心あたりはないのですが、あかるい、あかるい、眼界の廣々した、つまらないことにこせ〳〵してゐられないやうな、そして誰にも氣がねせずに、二人で日なたぼつこでも出來るやうな。
小野寺。さうですね。そしたらいゝかも知れませんね
信一。葉山あたりはどうですかね。

小野寺。いゝでせう。
信一。今度あつたらおすゝめ下さい。
小野寺。おすゝめしませう。しかしその前にいゝ家があるかどうか、さがして見ませう。
信一。お氣の毒ですが、どうぞよろしく、私が暇な身體ですと家位いさがしにゆけるのですが、一寸今、急がしい最中で。
小野寺。こないだ芝居、拜見に上つて感心しました。
信一。いやどうも。
小野寺。畫を買ふ方は僕の友達の山田次郎が買ふかも知れません。
信一。あの方、御存知なのですか
小野寺。先日山田と芝居見に行つたのでした。山田もほめてゐました
信一。あの方にほめられゝば光榮です。いつかあの方のものをやりたく思つてゐるのですが。お逢ひでしたらよろしく。
小野寺。山田も、あなたにやつて戴ければよろこぶでせう。
信一。弟のこと、何分よろしく願ひます。試に申し兼ねますが早い程、結構なのです。もしものことがあつてはとり返しがつきませんから。
小野寺。今日之から葉山へ行つて見てもよろしい。
信一。それではあまり……

小野寺。いや別に用はないのですから。

信一。本當に感謝します、弟夫婦がおちついてくれないと僕もおちつけないのです。弟の妻の手紙を持つてゐますから、一度よんで戴きますか。

小野寺。かまいませんか。

信一。あなたを僕は絶對に信用しますから。

（小野寺よむ）

小野寺。之は少しひどすぎますね。英次君も。

信一。火と油と一緒になつたやうなものですからね。へんに執着する質が二人よつたのですからね。それに私の家には氣狂ひすぢがないことはないのです。この三代程は出ませんでしたが。

小野寺。英次さんはあんまり優しすぎるのですね。呑氣になれないのですね。

信一。困つたものです。それは弟の妻の云ふことにも誇張はあると思ひますが、夜なかに短刀を研がれたりしたら、一寸ねむれませんからね。

小野寺。あんまりいゝ癖ぢやありませんね。今度短刀は僕がもらつてくることにしませう。

信一。さうして下されば本當に僕も安心します。

小野寺。それでは之からすぐともかく葉山へ行つて見ます。

信一。本當になんとも御禮の申しやうがありません。それでは之で失禮いたします。

小野寺。いづれ二三日の内に上つてお話しします。うまくゆくことをのぞんでゐます。

信一。萬事よろしく願ひます。さよなら。

小野寺。さよなら。

（二人退場、芳子登場かたづける。まもなく小野寺登場）

小野寺。之から葉山にゆくことになつたよ。

芳子。どうして。

小野寺。野中が今の家にゐては碌なことがないだらうと云ふのでね。野中のために家をさがしてやらうと思つてゐるのだ。

芳子。まあ、それでは散歩はやめになつたのね。つまらないわ。

小野寺。そのかはり葉山へつれていつてやるよ。

芳子。葉山につれていつて下さる、本當？

小野寺。久しぶりに一緒に海岸を歩かう。そして今夜は月がいゝだらうから一緒に海岸へ出て月を見よう。

芳子。それなら本當にうれしいわ。久しぶりに海を見ることが出來るのね。野中さん夫婦のなかは面白くないの。

小野寺。まあ、大したことはないと思ふが細君が殺されさうに思ふのださうだよ。

芳子。あの方は少しへんね。

小野寺。だが野中も一寸氣味のわるい處があるよ。

芳子。一寸すごいのね。あんな方は執念深いでせうね。

小野寺。よくはわからないがね。あつさりはしてゐるとは云へまい。

芳子。野中さん兄弟はまるで反對ね。

小野寺。だがあれで何處か似てゐるよ。野中がセムシでなかつたら。

（女中登場）

女中。野中さん御夫婦がいらつしやいました。

小野寺。お通しゝてくれ。

（女中退場）

小野寺。うわさをしてゐると影と云ふが、何んだか氣味がわるいね。野中が兄さんと逢はなければよかつたが。

（小野寺夫婦迎ひにゆき、二人をつれてくる。）

小野寺。どうかおかけ下さい。

英次。それなら失禮して腰かけたらいゝだらう。

芳子。どうぞおかけなすつて。

千代子。ありがたう。

（四人腰かける）

英次。今、兄が來たらう。

千代子。嘘ですわね。

英次。合圖はよせ。兄は君の所へよくくるのかい。

千代子。兄によく似た人が角をまがる後ろ姿を見て主人は兄だと云ふのですが、私はそんなはづはないと云つたので

す。
英次。そんな云ひわけはしないがいゝよ。僕は兄と小野寺と仲よくなることを望んでゐるのだ。兄が君の處へ來た用がなんだかも僕は大がいわかつてゐる。だから遠慮なく云つてくれ玉へ。兄は何しに來たのだか。
小野寺。君のことを心配して來られたのだ。
英次。僕のことかい。まあそんなことはどつちでもいゝ。どんなことを心配してゐたのだ。
小野寺。君の兄さんは君がもつと明るい、氣持のいゝ處に住むことを望んでゐられたよ。
英次。兄らしい考だね。そして君は贊成したのだらう。
小野寺。贊成したよ。
英次。（冗談らしく、しかし皮肉に）それで僕達は何處ですめばいゝと云ふことになつたのだ。
小野寺。葉山から三浦の方にかけて何處かいゝ處はないかと思つたのだよ。
英次。君はうれしいが、僕は當分あの家からどかないつもりだよ。僕は引越は考へたゞけでも閉口だ。それに淋しい處へ行つていゝかどうか。
小野寺。しかし東京をはなれるのも惡くないと思ふがね。
英次。それたら君達こそ東京をはなれたらいゝぢやないか。僕は東京をはなれたくないのだ。また僕は兄にそんなことまで心配してもらいたくないのだ。僕は今の家で滿足してゐるし、妻だつてあの家は氣に入つてゐるわけだ。さうだらう。
千代子。あまり氣に入つてもゐませんわ。

英次。葉山の方がいゝのかい。近所に家もなく泣いたり、わめいたりしても聞き手のない所がいゝのかい。

千代子。ですけど、明るい氣持になれますわ。きつと。

英次。僕は何と云つたつてゆきたくない。お前一人でゆくなら勝手だが。

千代子。私一人で家なんかもてませんわ。

英次。お前は持てるよ。

千代子。だつて一人では怖いわ。

英次。だが俺と一緒にゐるよりは怖かないだらう。千代子は僕を人殺しのやうに思つてゐるのだからな。

千代子。まさか。

小野寺。君のそんな考へ方はつまらないと思ふね。

英次。僕だつていゝとは思つてゐないが、しかし僕は當分あの家から去りたくはない。

千代子。こないだ引越したいと云つてゐらしつたわ。

英次。兄がどうしてそのことを知つたのだ。（急に何か思ひついたやうにおとなしく）お前が兄に手紙を出したのだね。

千代子。出しはしませんわ。

英次。夫婦なかに秘密があるのを君の前で知らせるのは不愉快だから。そんな話はよさう。君だから別に知らせたつて恥とは思つてゐないがね。僕は他人の秘密にはふれたくないし、他人に嘘をつかせるやうに持ちかける自分の趣味をいゝものとは思つてゐないのだが、白々しくやられるとつい皮肉に出たくなるのだよ。誰もうとは思つてゐるが。

小野寺。引越したいと云ふ話があるとは君の兄さんは云つてゐなかつたよ。

英次。君も嘘つき仲間かね。君の方が僕よりくわしいだらう。細君の心理を夫より他人の方が知つてゐると云ふことに平氣になりたいと僕は思つてゐるのだよ。

小野寺。君の考へ方は、君が普通の人より神經が發達してゐるからと思ふが、あまりいゝとは思はない。もう少し呑氣になれないかね。

英次。僕もなりたいと思つてゐるのだよ。探偵の眞似はいやだからね。君は境遇もいゝが、昔からその點君に感心してゐるよ。君は氣がついても氣がつかない顔してゐる。だから馬鹿な人間は君を馬鹿にして組みやすく思つてゐるが、しかし君をだませる人間は少ないことを知らない。お世辭つかはれてよろこんだ顔して、相手の腹をのみこんですまして馬鹿にされてゐる點に感心してゐるが、僕だつて大がいのことには平氣でゐられるが夫婦となると、赤の他人のあつまりと思つても、つい要求が過大になるからね。君達の前だから、かくしてもおいつかないから云ふが、僕は今後君の忠告を入れて何處へ出かけるのもなるべく二人で一緒に出かけることにしたよ。疑惑の入る餘地をつくつて、くるしむのは馬鹿氣てゐるからね。

小野寺。僕は海岸へゆくのはわるくないと思ふがな。

英次。僕は浪の音がひどいとねられない質なのだ。

小野寺。さうかね僕は浪の音をきくと氣持がいゝがね。それなら山へ行つたらどうだ。

英次。僕は淋しい處は嫌ひなのだ。それに引越は厄介だよ。引越し好きの人の氣持は僕にはわからない。

小野寺。さうかね。尤も僕でも一寸は何處かへ行かうとは思ふが、この家から出たいとは思はないから。

英次。兄はあの家にはいやな連想をもつてゐるらしい。あの僕の床下から血にそんだ千代子の死骸が出て來た夢を見た

のださうだよ。

千代子。いやよ。そんな話。

英夫。（冗談のやうに）あんまりいゝ夢ぢやないが、そんなことが起らなければ僕もいゝがと思つてゐるよ。

小野寺。そんな冗談はよくないね。

芳子。冗談にもそんなことをおつしやるのはよくないわ。

千代子。主人はあんなことを云つて人をおどかすのがすきなのですよ。主人は今度兄をよんでうちにあるトランクを室において、そのトランクに兄をこしかけさして、そのトランクのなかには私の死骸が入つてゐるやうな暗示を與へていつて、兄をおどかすことなんか想像してよろこんでゐるのですよ。

芳子。まあいやな方ね。

千代子。私はなんだかそんなことが本當に行はれてそして私の死骸が本當にトランクのなかに入れられてゐるやうな氣がすることがあるのですよ。

芳子。まあ。

小野寺。それは本當によくない趣味だよ。

英夫。僕のなかには、兄に似て役者の血が流れてゐるのかも知れない。

小野寺。活動にでもやつたら面白いかもしれないが。

英夫。活動は僕は見たことがないよ。だがカバンに死骸が事實入つてゐないで、カバンのなかに御馳走でも入つてゐたら、一寸兄をおどかして兄がどんな表情をするか見るのもわるくないね。兄にとつたつて芝居の時の參考にもなるか

らね。
小野寺。狂言としたら面白いかも知れない。
英次。君も贊成するなら、一つ端役をつとめないか。
小野寺。本當にやる氣なら是非やめてほしいね。
英次。まだ本式にやつて見やうとは思はないがね。千代子、芳子さんにお願ひして買ひ物に行くなら一緒にいつて戴いたらいゝだらう。
芳子。何處へいらつしやるの。御一緒に參りませう。
千代子。それでは失禮ですけど、おさしつかへがありませんでしたら、お伴さしていたゞきませう。
小野寺。天氣がいゝからどこへでもいつて來たらいゝだらう。そして歸りに果實のいゝのがあつたら買つて來てもらはう。
千代子。それでは失禮いたします。
芳子。一寸行つて參ります。
英次。どうもありがたう。
（千代子、芳子退場）
英次。僕はね。千代子がこの頃へんに可愛いくなつて來た。僕は今迄、あいつを愛することを恐れてゐた。愛すれば逃げられた時に困るからね。逃げられても困らない程度でとめておかうと思つた。しかし僕はこの二三日の内に不意にあいつをもうどうしても失ひたくなく思ふやうになつてしまつた。僕は困つてゐるのだ。

小野寺。困ることはないぢやないか。

英次。いや、玉も下らないと思つてゐる間はキズがさう氣にならなかつたが、玉を愛すれば愛するほどキズが氣になり出した。僕はキズがあるから自分のものになつたと云ふことは百も承知しながら、そのキズがます／＼自分をくるしめるのだ。そして僕はこの頃、今迄よりも兄が憎くゝ、その上に兄を恐れるやうになつた。兄はあいつのことを忘れてはゐないのだ。あいつも亦兄を愛してゐるのだ。

小野寺。そんなことはないと思ふね。

英次。いや、たしかにさうなのだ。僕は二人の愛をうたがへないのだ。二人は僕にせかれるので。ます／＼愛してゆくのだ。そして妻も兄もそれを恐れながら、どうすることも出來ないのだ。妻は僕に殺されることを恐れてゐるのは、僕から逃げやう、逃げやうと思つてゐるからに過ぎないのだ。兄はまたあいつの死ぬことと許り心配して、どんなことでもして、あいつを生かしたがつてゐる。その氣持が僕にわかりすぎるから、恐ろしいのだ。僕はあいつを失なつていゝのなら、何にも問題は起らない。僕は斷じてあいつを失ひたくない。僕はこの頃はすつかりおちつかなくなつた。夜もあいつの逃げ出す夢を見てびつくりして目をさますことが何度あるか知れない。僕はたう／＼地獄の人間になつてしまつた。愛慾の奴隷になつてしまつて、一人ですが／＼しくくらしたいと思つても、その力がなく、嫉妬と憎惡が時々僕の胸をはりさくやうに苦しめる。そしてどうすることも出來ないのだ。僕はおちつきがなく、とう／＼あいつの看守人にまで墮落してどうすることも出來なくなつた。僕は之にかつ方法はたつた三つ切りない。あいつを殺すか。兄を殺すか、自分を殺すかだ。僕は三つの内どれを撰ぶかね。僕が死ぬのが本當かも知れないが、僕が死んだら誰が僕の仕事をする。僕は自分の仕事のために死ねない。兄を殺すことも考へるが、下手人が僕だと云ふことは

すぐわかるだらう。兄の行衛がわからないでは誰もすませないからね。旅行してゐると云つてごまかすわけにはゆかない。僕は兄を殺して一生を棒にふる氣はない。それならあいつを殺すより他仕方がないことになる。だがあいつを失はずにあいつを殺すことが出來ない。そしてあいつなしには僕は生きられなくなつて來てゐる。僕はどうしたらいゝか見當がつかないのだ。君にも見當がつくまいな。

小野寺。旅行したらどうだ。二人で。

英次。同じことだよ。あいつが逃げることを信じてゐる間は、いつかあいつは逃げる。それはまちがいのない事實だ。僕が殺してしまはない限りはね。僕はあいつを愛すれば愛する程あいつを信用することが出來ないのだ。この氣持は家庭幸福な、貞淑な妻をもつ君にはわかるまい。いくら小說家でもね。僕は一瞬でもあいつから目をはなすことが出來なくなつた。少しの疑惑も僕は入る餘地をつくりたくない。しかしあいつに嫌はれたくもないから、手紙をかくぐらいの時間はぬすまれたかも知れない。あいつはすばやしつこいのだから。君は斷じて兄とぐるになつては困る。君だけは僕は信じてゐるのだからね。僕は疑惑を一番恐れる。こいつは魔物だからね。正體をつかめない處にはいたる所に姿をあらはす奴だからね。

(芳子千代子登場)

芳子。唯今。

英次。どうもありがたう。買ひものはすんだかね。

千代子。すみました。

英次。それなら失禮しやうかね。

千代子。え丶。
芳子。まあい丶ぢやありませんか。
英次。之から又時々二人でよせて戴きます。
芳子。どうぞ、又いらつして下さい。
千代子。ありがたう御座います。
英次。それぢや失敬する。
小野寺。さうかい。
（四人あいさつ退場）
小野寺。本當に困つたものだな。
芳子。千代子さんてい丶方ね。
小野寺。中々い丶人だね。だが何處か運のわるさうな所があるね。
芳子。隨分よはつてゐらつして。すぐ涙ぐんでゐらつして困りましたわ。
小野寺。どうかしたいな。しかし他人の夫婦の間のことは手の出しやうがないね。
芳子。だまつて見てゐるより他仕方がないわね。
小野寺。お前はどう思ふ。野中が細君を殺すか。殺さないか。
芳子。それはわかりませんね。
小野寺。殺される前に逃げ出すか。逃げ出す前に殺されるか。俺にもわからない。

芳子。不和におさまるわけにはゆかないのですかね。お二人ともいゝ方ぢやありませんか。

小野寺。二人ともわるい奴ぢやないが、一寸困るね。あゝ執着してはね。氣がめいつてしまつた。散歩でもしやう。

芳子。果物を買つて歸つて來ましたわ。

小野寺。それはすつかり忘れてゐた。歸つてから食ふことにしやう。（退場しやうとする）　幕。

第三幕

一

（英次の室。英次書をかいてゐる。千代子小説を讀んでゐたが、不意に泣く）

英次。馬鹿。小説をよんでそんな大きな聲出して泣く奴があるか。

千代子。だつて悲しいのですもの。

英次。身につまされたのだらう。

千代子。さうよ。身につまされましたの。

英次。だから小説なんかよむなと云ふのだ。

千代子。小説でもよまなければなほ淋しくなりますわ。

英次。何か働くといゝのだ。

千代子。女中もおかずに働いてゐるぢやありませんか。この上働いたつて、金が出來るわけでもありませんし、さきにたのしみがあるわけでもありませんものね。

英次。お前は子供が出來ないと云ふのは本當かね。

千代子。醫者はさう云ひました。子宮がどうとかしてゐるつて。子供が出來ない方が仕合だと思つてゐますわ。

英次。なぜだ。

千代子。子供がこの上出來たら私の身體はつゞきませんわ。

英次。お前は死にたがつてゐるのぢやないかね。

千代子。あなたは私が死ぬ方がいゝのでしよ。

英次。俺の手から逃げられるよりはね。

千代子。私だつて今のやうな生活を一生つゞける位いなら死んだ方がよろしいわ。

英次。今に俺の畫が賣れるやうになる。一つ二三百圓にね。

千代子。一つ十圓にだつて賣れる時は來ないと私は覺悟をもうきめてゐますから。そんなことをおつしやつたつて信じ

ません。

英次。まあ見てゐるがいゝ。

千代子。それにいくら金持になつたつて、私はこんな生活はいやです。

英次。それならどうしようと云ふのだ。

千代子。ゆきたい所にもゆけないやうな。

英次。お前が信じられないやうなことをするからさ。

千代子。私はもうあなたの顏や姿を見ても胸がわるくなりましたわ。

英次。とう〳〵本音をはいたね。
千代子。もうあなたなんか怖かないのですもの。私は死んだ方がいゝのです。こんないゝ天氣にそとへも出られないでこんな所にとぢこもつてゐる位いなら。
英次。お前は俺が早く死んでくれゝばいゝと思つてゐるのだらう。
千代子。まあさうね。私は自由にとび歩きたいのですよ。あなたが自由さへ下されば、私はあなたの所へ歸つてくるにきまつてゐますわ。ですがあなたのやうに私を殺すと云つておどかして私の自由をすつかり奪はれてしまへば私だつていつかとび出して見せると腹の底で思はないわけにはゆきませんわ。
英次。何とでも云ふがいゝよ。蛇は見込んだ鼠がどんな泣き聲を出したつて逃がしはしないぞ。
千代子。あなたは本當にひどい方ですね。
英次。どつちがひどいのだ。
千代子。それは元は私がわるかつたかも知れません。だが今はあなたの方がわるいのです。ずつと〳〵わるいのです。私はあなたを憎惡し切つてゐます。人を束縛するにも程があります。
英次。俺が好んでお前を束縛してゐると思つてゐるのか。俺の苦しい氣持はお前だつて知つてゐるはづだ。
千代子。それを知つてゐるので今まで我慢して來たのです。
英次。もう我慢出來ないと云ふのか。
千代子。私だつて生なければなりません。
英次。俺を殺してもか。

千代子。あなたは死ぬやうな方ぢやない。私を殺したつてあなたは死ぬやうな方ぢやない。あなたは心中なんか出來ない方です。私を殺すことは出來てもね。私の死ぬのを笑つて見ることは出來てもね。

英次。それはさうかも知れない。俺は今死んでは俺の仕事はものになることを誰にも示すことが出來ないからね。俺の仕事が後世にのこしても心ある人に笑はれないだけにはしておきたいからな。

千代子。あなたは私を殺しても罰がかければいゝのでしよう。あなたはさう云ふ方です。

英次。それはあたりまいのことだ。

千代子。なにがあたりまいです。くやしい。

英次。泣けるだけ泣け、誰が同情してやるものか。

千代子。あなたに同情なんかしてもらいたくありません。私はもうあなたを私の夫だとは思つてゐません。あなたは暴君です。恐ろしい暴君です。

英次。小説にそんなことでもかいてあるのか。

千代子。小説がなんです。私は出てゆきますから。

英次。出る勇氣があるなら出て見ろ。

千代子。出ますとも。

英次。もう一ぺん云つて見ろ。

千代子。何度でも云ひます。出ますとも。

英次。よく云つたな。

（英治、千代子にとびかゝらうとする。小野寺登場）

英次。よく來たね。今（苦笑して）喧嘩してゐた所だよ。誰かくればいゝがと思つてゐた所だよ。

小野寺。夫婦喧嘩は犬も喰はないと云ふが、僕も喰ひたくないよ。

英次。まあいゝよ。あんまり人を馬鹿にするから。

千代子。小野寺さん。きいて下さい。夫は私を朝から晩まで看視して、そして私に少しの自由も與へてくれないのです。夫にはそんなことをする權利があるものなですからね。妻の生るよろこびを全部奪つてしまふやうな。そして自殺しないではゐられないやうな目にあはせるやうな。

英次。俺はお前をよろこばしたくどんなに思つてゐるか、お前は知つてゐるはづぢやないか。君だつて知つてゐてくれるね。

小野寺。知つてゐる。

英次。それなのに、こいつは、こいつは僕を呪つてゐるのだ。そして僕と一緒にゐる位いなら死んだ方がいゝと云ふのだ。夫にとつてこんな侮辱があるだらうか。（泣く）

千代子。私だつてどんなにあなたを愛さうとしたでせう。だが私にはその力はないのです。あなたの要求が無理すぎるのです。

英次。それなら出てゆけ。

千代子。出てゆきますとも。

小野寺。奥さん、そんな馬鹿なことは云ふものぢやありません。

千代子。それだつて出てゆけと云ふのですもの。私だつてこゝで死ぬのはいやです。

英治。僕だつて男だ。出てゆけ。

小野寺。君もそんな馬鹿なことは云ふものぢやない。千代子さんにゆくさきのないことは君だつて知つてゐるぢやないか。

英次。ゆくさきはいくらだつてある。もう行くさきが出來てゐるから、俺に喧嘩をふつかけたのだよ。

千代子。そんなことはありません。私はゆくさきなんかなくたつていゝのです。

英次。ゆくさきの心あたりがなくなつてお前は出かけるかい。

千代子。あなたゞつて、私にゆくさきがあつたら出てゆけとはおつしやらないでせう。

(二人顏を見合せて苦笑する)

小野寺。だから夫婦喧嘩は犬も喰はないと云ふのだよ。よかつた。よかつた。どつちがわるいのか知らないが、兩方から折れるのだね。

英次。誰が折れるものか。

千代子。私だつて折れはしません。

小野寺。あはゝゝゝ。面白い。もつと喧嘩したらいゝだらう。

英次。こんな餘計なじやま者が入つたから、僕は折れてもいゝから、お茶でも入れておいで。

千代子。はい。

英次。一昨晩菊を買つて來たのを一つ見やうか。

小野寺。あゝ。

(二人退場)

千代子。(獨白)あゝゝ。もう少しの處でのがれられる所を私はまたくもの巣にかゝつてしまつた。

(幕)

二

(同じ室、數日後の午後千代子一人で掃除してゐる。英次入つてくる)

千代子。どうでした。

英次。いやすばらしいものがあつたよ。この頃は畫かきになつたことが時々心細くなつたがいゝものを見ると矢張り畫かきの仕事程たのしい、立派な仕事はないと思ふね。僕は今日程、たのしく畫を見たことはこの頃まるでなかつた。支那には實にすぐれた畫家がゐると思ふが、日本だつて中々馬鹿に出來ない。今日二つ見た雪舟なぞはさすがにすぐれたものだつた。雪舟でもあんないゝ畫を見たのは始めてだつた。金があつたら買ひたかつた。あいつを買つてかけておいたら隨分仕事に刺戟が出來ると思つた。兄貴が東京にゐれば買ふことをすゝめるのだがな。北海道ぢや仕方がない。畫かきはその人の本當の價値がすぐ世界的にわかるし、後の人にもわかつて、少しのいつはりもゆるさないから氣持がいゝ。畫は言葉とちがつて嘘がつけないから氣持がいゝ。留守に誰も來なかつたか。

千代子。だれもいらつしやいません。

英次。俺は立派な畫かきになりたい。山がかきたくなつた。久しぶりに旅行して見たいな。金はいくらある。

千代子。三十圓程、ためてあります。

英次。感心だな。それとも逃げる用意かね。
千代子。もうあきらめましたわ。逃げてゆく處もありませんものね。
英次。その三十圓をもらつてもいゝかね。
千代子。えゝ。
英次。それなら久しぶりで旅行して、山でもかきにゆくかな。
千代子。その方がおよろしいわ。身體のためにも。
英次。留守はどうする。
千代子。弟に來てもらいませう。
英次。それはいゝだらう。それなら明日出かけるよ。
千代子。急ね。
英次。善は急げと云ふからね。之から一寸小野寺の處へ行つてくるよ。そしてあいつに俺の元氣な處を見せて、よろこばしてくる。
千代子。小野寺さん御安心なさるでせう。私も御一緒に行つてはいけなくつて。
英次。行から。行から。
千代子。えゝ。
英次。俺はさう柄にないことは考へずに、一心に繪をかいてゆきたくなつた。
千代子。あなたは本當に立派な畫家になるわ。

英次。大へんおだてるな。

千代子。（媚びるやうに）だつて何となくそんな氣がするのですよ。

（二人退場）　幕

三

（同、信一と千代子話してゐる）

信一。英次からたよりはまだありませんか。

千代子。ありません。

信一。どうしてゐるのでせう。

千代子。いろ／＼考へてゐるのだと思ひます。私と本當に別れたがつてをりました。御仕事に夢中になつてゐらつしやるのかも知れません。

信一。それでは又來ます。

千代子。まだいゝぢやありませんか。

信一。僕はこの室であなたと二人切りでゐるのはおちつかないのです。英次がいつ歸つてくるかわかりませんから。

千代子。大丈夫よ。主人は本當は病氣してゐるのですから。

信一。病氣ですか。それであなたは見舞にゆかないのですか。

千代子。ゆきたくも金がありませんから。

信一。金ならじきにかしますよ。

千代子。本當は私も病人なのですよ。明後日まで、あなたが東京にゐらつしやる間。

信一。それはよくありませんね。

千代子。それだつて仕方がありませんわ。尤もあなたが私にどうしても主人の處へゆけとおつしやれば、私、死んでもゆきますけど。私だつて生きてゐるたのしみが少しはなくつては。私はもう主人のそばにゐるのにはもう本當に閉口してゐますの。さう思ふのは惡いと思ふのですが、愛さうとすればする程、嫌氣がさして來ますの。どうしたつてもう辛抱は出來ませんの。ですが何處もゆく處はありませんものね。それに殺し兼ねない樣子を見せるのですから。あなたの兄弟でゐながら、あなたとまるでちがつて私に執着し切つて下さるので、私はありがたいとは思ふのですが。

信一。僕だつてあなたを愛してゐなかつたらこんなに苦勞しません。今度の旅興業は隨分あたつて、次ぎ次ぎと申し込みがあつたのですが、あなたのことが氣になつて、やつと六日の暇をつくつて歸つて來たのです。之から又青森の方へ出直さなければならないので、皆私の歸ると云ふのに反對だつたのですが、私はそんなことはきくわけにはゆかなかつたのです。

千代子。私が死んだら泣いて下さる。

信一。僕はあなたを殺したくないのです。そのためにはどんなことでもします。

千代子。私はあなたと一緒に死ねたらとよく思ふのですが、あなたはそんなことを考へたことはないでせう。

信一。僕はあなたと一緒に生ることは考へますが、死ぬことは考へたことはありません。

千代子。私は幸福に生きると云ふことを考へたことはありません。もとはありましたけど。始めてあなたにお逢ひした

時はね。私はあんなに嬉しいことはありませんでした。あれからいろ〳〵のことが起りましたわね。

信一。僕はあなたにあやまりたいことだらけです。

千代子。そんなことはありません。あなたが生きてゐらつしやるので私は生きてゐられるのですから。それにこゝに來たのも、私が意久地がなかつたからです。あなたの家庭と名譽と人氣を氣にして、私の愛したのはあなたの弟さんだと見せかけやうとしたのがいけなかつたのです。しかしすんだことは仕方がありませんわ。あなたは別としても、私達の不幸は虚僞な愛からうまれた結果にすぎないのです。狂言の仕損ひです。誰もうらみやうはないのですが。

信一。もうそんな話はよしませう。だがなんだか私はこの室はおちつかないのです。

千代子。あなたは氣がよはいのね。あなたは幸福だからだわ。私は生きてゐるのがつまりませんから、何にも怖いものはありませんわ。

信一。英次の病氣は大したことはないのですか。

千代子。えゝ、大したことはないのです。私は二三日の内にゆけると思ふと手紙を出しておきましたから安心ですわ。あなたが不意に歸つてゐらつしたことを聞いて私はどんなにうれしかつたか、あなたにはおわかりにならないでせう。何しろ私は監督ずきであなたとはもう一生、お目にかゝれないだらうと思つてゐました。

信一。まだ私達は若いのですから。

千代子。だつて私はなが生きは出來ないと思ひますわ。今のまゝでは、主人が私が居なくつても生活が出來る時が來なければ私は本當に生きてゐるのが、いやになりますわ。

信一。英次はいゝ人間ぢやありませんか。

千代子。私だつてそれはよく知つてゐますわ。ですが人のわるいあなたのお顔を見てゐると私は時間のたつのを忘れてしまうのに、あの方の顔や、すがたを見ると本當に見ぶるいしてしまいます。人間にとつて何が不幸だと云つて、毛蟲や蛇と同じ室にすむ程いやなものはないと思ひますわ。私は二三ケ月前まではそれ程にも思はなかつたのですが、この頃は本當に顔見るだけでもさむ氣がしてしまいます。之は嘘ではないのです。わるいとは思つてゐるのですけど。主人のすることなすこと、又主人の云ふ一言一句私を病的に不愉快にしてしまうのです。どうしてゞすか、私にはわかりませんが。

信一。それは困つたものですね。それが本當なら別れるより仕方がないでせう。

千代子。私もさう思ひますの。ですけど別れてどうしてい〻のか。

信一。別れたさきのことは心配しないでい〻でせう。しかし別れる時が心配ですね。

千代子。別れるだけなら私はどうにでもなると思ふのです。

信一。僕は弟がどんなによはるか、そのことを考へないわけにはゆきません。僕は弟を愛してゐます。自分は弟を苦しめすぎてそんなことを云ふのは蟲がよろしいがね。

千代子。主人はあなたの死ぬことをのぞんでゐます。

信一。それは本當ですか。

千代子。本當です。主人は三人の内誰か死な〻ければならない。そう云つてゐます。そして第一にあなたの死ぬことをのぞんでゐるのです。

信一。それも無理はありません。だが僕は今死んでやるわけにはゆきませんよ。

千代子。主人は私の死骸をこのカバンに入れたやうに見せかけてあなたをおどかすことをいつか眞劍に考へてゐましたよ。そしてあなたが私をどの位い愛してゐるか見たがつてゐました。

信一。一種の復讐でもしやうと云ふのでせう。あいつならその狂言をうまくやりこなすでせう。なんだか、不氣味な所がありますからね。舞臺の上でそんな所をあいつにやらしたらもつとうまくやるだらうとよく考へたことがあります。

千代子。私は主人のことはすつかり忘れてしまいたいのです。

信一。あなたは隨分やせましたね。

千代子。みにくゝなりましたね。

信一。あなたを僕は本當に幸福にしたかつた。

千代子。主人もよくさう申します。

信一。あなたこそ、弟のことを忘れることが出來ないのですね。

千代子。思ひたくないと思ふとなほ思ひ出します。あの人が死んでくれたらと私はよく思ひます。しかしさう思へば思ふ程、あの人は丈夫になります。あんなに心の强い人は滅多にありませんね。呪はれても、呪はれても生きかへつてくるやうな方ね。時々氣味がわるくなりますわ。あなたの弟さんにあんな方があるのは不思議ですね。

信一。誰か來たのぢやありませんか。

千代子。鼠の音ですわ。何にも怖いことはありませんわ。二人切りでお話出來る時がくるとは思ひませんでしたわ。私の本當に心の底から凍りついてゐた淋しさが、だん〳〵とけて來ましたわ。人間はこんなにもうれしくしてゐられる

のに、毎日毎日、いやな思ひして生きてゆかなければならないのでせうか。

信一。そんなことはありません。

千代子。私は地獄におちてもいゝわ、あなたとなら。主人と一緒に極樂にゐるよりどんなにいゝでせう。

信一。そんなことは云ふものではありませんよ。

千代子。いつまでもゆつくりしてゐていゝのでしよ。私、お酒を買つて來ますわ。

信一。今日は早く歸りますよ。

千代子。そんなこと云はないで下さい。せめて今晩だけは私生命の洗濯がしたいのですから。

信一。何かたしかに音がしましたよ。

千代子。大丈夫ですよ。鼠ですよ。あなたに似合はないのね。

信一。僕は世界中で弟が怖いのですよ。あいつの顏を見ると、魂が氷りつきます。

千代子。私の魂はいつでも凍りついてゐるわ。（笑ふ）

信一。たまりませんね。

千代子。私を一緒に旅行につれていつて下さらない。

信一。弟はどうします。

千代子。主人は男ですから自分で生きてゆくでせう。

信一。それでも病氣の時逃げるのはよくありませんよ。

千代子。今逃げなければ逃げられませんわ。私だつて死ぬのはいやですわ。今逃げなければ私はきつと殺されますわ。

信一。………
千代子。私が死んでもいゝの。私はもう死にものぐるいですわ。私はもう死んでもこゝにゐるのはいやです。私を助けて下さい。私を生かして下さい。どうぞ私を見殺しにしないで下さい。(信一の膝に泣きふす)
信一。さう泣かないだつていゝ。私もあなたを殺すわけにはゆかない。あなたの決心が强いなら私も覺悟をきめます。弟だつてまさか死ぬやうなことはしますまい。
千代子。ありがたう。ありがたう。それで私本當に生きかへりましたわ。それたら今日之から私、用意しますから、明日の朝さそいに來て頂戴ね。それまでにあと始末しておきますわ。
信一。承知しました。それなら今日は之で歸ります。
千代子。それなら明日の朝九時頃きつと來て頂戴ね。
信一。えゝ、來ます。それでは又明日。
千代子。本當に私うれしいわ。それでは又明日ね。
信一。それではさよなら。
千代子。それなら私も其處までゆくわ。
(二人退場、英次登場。)
支那カバンの上に腰かけ、氣味のわるい笑ひをする。千代子いそ〳〵登場。始め氣がつかないが、ふと氣がつき、聲をあげておどろく。辛じて氣絶せず、勇氣を奮ひ起して戰ひをいどむやうに口をきく)
千代子。いつお歸りになつたの。

英次。（つめたく）さつき。
千代子。（反つて度胸をすへ）御病氣どう。
英次。お前の病氣はどうだ。お前の病氣が氣になつて無理して歸つて來たのだ。
千代子。それはありがたう。
英次。俺が歸つて來たのをうれしく思つてゐるのかい。
千代子。そんなことは云はなくつたつてわかつてゐますわ。
英次。どうわかつてゐるのだ。
千代子。あなたのおよろしいやうに。
英次。お前が病氣だと云ふ電報を受けとつてどんなに心配したか。俺はお前の病氣がなほるやうにどんなに神に祈つたか。そしてあんまり心配になつたので無理して歸つて來た。そして俺は何を見せられたのだ。
千代子。（冷靜に）私だつて生きたいのです。
英次。俺を瞞しても生きたいのか。なぜ正直なことを云はないのだ。
千代子。正直なことを云つて逃がして下さるとは思へませんからね。
英次。兄をよびよせたのか。
千代子。それはちがいます。信一さんは私のことが心配になつたので、不意に歸つてゐらつしたのです。ですがおそかれはやかれ私は今日のくるのを知つてゐました。又待つてゐました。
英次。お前は私のことはなんとも思はないのだね。

千代子。あなたはあなた一人で生きてゆける方です。
英次。俺の病氣の最中に逃げないでもいゝぢやないか。
千代子。あなたの御病氣もケ病だと云ふことは知つてゐました。
英次。俺の病氣はケ病ぢやない。
千代子。それだつて旅行が出來ないから來てくれとかいてあつたのは嘘ぢやありませんか。
英次。醫者はぢつとしてろと云つたのだ。だが俺はお前の病氣だと云ふ電報を見たら、何んだかお前が死にはしないかと思つたのだ。
千代子。あなたが歸つてゐらつしやらなければ、私は死ぬやうなことはありません。
英次。俺はお前が淋しく一人でねてゐると思つたのだ。
千代子。信一さんが歸つていらつしたことを、お友達からでも知らせてもらつて歸つてゐらつしたのでせう。
英次。馬鹿！　それは嘘だ。
千代子。あなたは私の死ぬことをのぞんでゐらしつたくせして。（泣く）
英次。勝手に泣け、泣いたつて誰が同情してやるものか。俺にはお前の心はもうすつかりわかつてしまつた。
千代子。それなら奇麗に別れることにしませうね。
英次。（言葉は冷たく）お前が兄と手を切ることが誓へるなら俺はわかれてやつてもいゝ。
千代子。そんなさきのことはわかりませんわ。

（二人默つてにら見合ふ）

千代子。そんな顏したつて、ちつとも怖かありませんわ。

英次。(立ち上り) お前はどうしても俺からわかれる氣なのだね。

千代子。それより他仕方がありませんわ。

英次。俺がそれを許すと思つてゐるのか。

千代子。許すも許さないもないわ。私はどうしたつて出てゆくことにきめたのですから。

英次。俺が承知しないでもか。

千代子。えゝ。

英次。出られるなら出て見るがいゝ。俺もお前を許せるだけ許さうと思つたが、そしてお前の氣持を察してやれるだけ察してやるつもりだつたが、もう俺もお前の侮辱に我慢が出來なくなつた。

千代子。我慢が出來なければどうしやうと云ふの。私を殺さうと云ふの。私を殺して生きてゆけると思つてゐるの。牢屋に入つてもいゝの。皆に笑はれてもいゝの。それとも無理心中でもしやうと思つてゐるの。私を殺したあとのことを考へて見ても、私を殺さうと云ふの。

英次。…………

千代子。妻は夫のものなの。妻は夫の奴隷で、夫が殺してもいゝの。又夫が妻を箱のなかに押しこんで、逃げると殺すなどと云つてそれが夫の權利のやうに思つてゐるの。私だつてどの位いあなたを愛したく思つたかわかりませんわ。ですけど、それは神樣が許して下さらなかつたので、私にはどうすることも出來なかつたのです。私はそれを仕方がないと思つてゐます。私はあなたに隨分すまない氣もしないことはありません。ですけど、私は決心しました。それ

では之からおいとまします。お身體を大事にして下さい。

（千代子、靜かに退場しやうとする。その後ろ姿を憎惡の目で見おくつてゐた英次はとう〳〵辛抱が出來ずにとびかかる。氣違ひのやうに、なぐる。千代子も遂に抵抗する。その内に發狂したやうになり英次千代子の首をしめる。千代子死んでしまう。それでもまだしばらくしめながら。へんな笑ひ聲を出す。暫くしてやつと立ち上る）

英次。（死骸を見つめながら低い聲で）俺のしたことはやむを得ないことだ。之より他、どうすることも出來なかつた。お前は殺される資格のある奴だ。誰も俺のしたことを尤と思ふだらう。靜かに死んでゆけ。

（英次はおちつかないやうに歩きながら氣違ひのやうに頭をふつたり、たゝいたりして、又死骸の前に立ちどまり、千代子の死に顏を見つめる。英次不意に泣き出す）

英次。（低い聲で）お前は不幸な、不幸な女だつた。俺はどんなにお前を幸福にしてやりたかつたか。だが俺には他にどうすることも出來なかつた。南無阿彌陀佛。々々々々々々……。

（急に英次は千代子の死骸にかぢりつきなほ一層泣き、顏を見、急に生きかへらしたくなり人造呼吸をやつて見、ます〳〵あはて出す）

幕。

第四幕

一

（翌朝、同じ室、英次落ちつきを失なつて室のなかをうろつき、カバンの前へ來て頭を壁にすりつけるやうに御辭儀をしてしのび泣き、頭髮をかきむしつたりする。外で信一の「千代子さん」と呼ぶ聲がする。英次の態度急にか

はりカバンの上に腰かける）

信一。千代子さん（とよびながら登場、英次と顔をあはせる）

（沈默、お互に心をうかゞう）

英次。千代子は今朝早く出かけましたよ。お兄さんの處へでもいつたのかと思ひましたよ。（沈默）

信一。お前はいつ歸つて來たのだ。

英次。お兄さんはいつ歸つて來たのです。

信一。二三日前だ。

英次。私は昨晩おそく歸つて來ましたよ。お兄さんが東京に居らつしやることは少しも知りませんでした。千代子は何にも云ひませんでしたから。

信一。それで俺の處へ來たと思つたのかい。

英次。お兄さんの聲をきくとすぐさう思つたのです。千代子はゆきませんでしたか。

信一。來なかつたよ。

英次。本當ですか。

信一。來れば千代子さんなぞと呼びはしないだらう。

英次。わざとお呼びになつたのかと思つたのですよ。

信一。嘘つくのはお前の方が上手らしいな。

英次。芝居をすることではお兄さんには叶ひませんよ。

信一。どうだかね。千代子は何時頃に出かけたのだ。
英次。六時頃でせう。
信一。何て云つて出たのだ。
英次。一寸、其處までゆくと云つて出かけたまゝ、まだ歸つて來ません。
信一。それは本當かい。
英次。どつちですかね。何しろ千代子は居ないのです。
信一。さうか。（退場、まもなく登場）千代子の下駄があるよ。
英次。他の下駄をはいつて行つたのでせう。まさか足袋裸足では出かけないでせうから。
信一。お前は昨夜、ねなかつたね。
英次。僕は病氣なのですよ。大したことはありませんが。
信一。それはいけないね。
英次。醫者に旅行することは禁じられてゐたのですが、千代子から病氣だと云ふ電報が來たのでびつくりして歸つて來たのですが、反つて身體にはよかつたやうです。少しもわるくはならないやうです。
信一。千代子さんは病氣だつたのか。
英次。お兄さん御存知ないのですか。もう千代子も病氣はいゝさうで、今朝早くから起きてさむいのに外へ出てゆきましたから、さう悪いことはないのでせう。
信一。千代子さんはお前に殺されることを恐れてゐたよ。

英次。自分に疚しいことがあるからでせう。
信一。お前は千代子さんをどんな人間と思ふかね。
英次。それはお兄さんに聞きたい所ですね。しかしわるい女とは思つてゐません。あまり正直すぎる女とは思ひますがね。人間はまだ正直になり過ぎてはいけないやうですね。
信一。おそすぎたかね。
英次。何がです。
信一。俺は千代子を生かしておきたかつたのだよ。
英次。千代子は死んではゐませんよ。
信一。(よろこんで)本當かね。まさかそんな嘘はつくまいね。
英次。あはゝゝゝ。お兄さんは僕が千代子を殺したかと思つてゐるのですか。
信一。どうも俺にはさうとしか思へない。
英次。あはゝゝ。お兄さんは千代子が僕に殺される資格があると思つてゐるのですね。僕に人殺しが出來ると思つてゐるのですか。僕は今日のやうな場面に何度も逢つたやうな氣がしますよ。それにしても千代子の歸りはおそいですね。
信一。喧嘩でもして出て行つたのか。
英次。少しは云ひあいをしましたよ。僕が歸つて來ても少しもよろこばないのですからね。反つて迷惑さうな顔をしてゐましたからね。僕だつて氣持ちよくは思ひませんでした。それでつい荒いことを云ひ、少しは手荒いことをしたの

ですが、いつものことですからその内歸つてくるとは思つてゐるのです。

信一。何處へ行つたか、あてはないのだね。

英次。僕にはあてはありません二三十圓の金は持つて行つたかも知れませんがね。どうせすぐ歸つてくるのでせう。

信一。許してくれ、俺はお前が本當に殺したのかと思つたのだ。しかし千代子さんは生てゐてくれたとは、ありがたい。僕はお前に心から禮を云ふよ。俺はお前の顏を見た時、ぞつとしたよ。おそすぎたと思つたよ。どうしていゝかわからなかつた。

英次。お兄さんは千代子を僕の手から奪はふと思つてゐるのでしよ。

信一。そんなことはない。僕は千代子さんを愛してゐないとは云はない。しかしそれ以上、千代子の死ぬことを恐れてゐたのだ。あんまり殺されさうなこと許り云つてくるのだからね。俺も氣にならないわけはゆかなかつた。千代子さんをお前に世話したのは俺だから、俺に責任があるやうな氣がするし、それにお前を人殺しにするのはいやだからね。人殺しになつてはたまらないからね。お前がそんなことをする人間とは思はないが。さつきのお前の顏にはおどろいたよ。

英次。だつてお兄さんは、私の留守なのを知つてゐらつしやるはづなのに、千代子の名を云つて入つていらつしやつたのですからね。

信一。わるかつたよ。わるかつたよ。昨夜なんだかいやな夢を見たのでね。夢は忘れてしまつたがね。あんまり氣になつたので。

英次。お兄さん。お兄さんは死にたいと思つたことはありませんか。

信一。別にないね。
英次。お兄さんは仕合せな方ですね。私なんかよく死にたいと思ひますね。
信一。死んではいけないよ。
英次。お兄さんは私の死ぬことを望んだことはありませんか。
信一。お前はどうだ。俺の死ぬことを望んたことがあるだらう。
英次。御同樣でせうよ。お兄さん死は一たいどんものだと思つてゐます。
信一。死のことはよくわからないな。
英次。死んでしまつたら幸福でせうか、不幸でせうかね。
信一。死んでしまつたものは幸福だらうね。
英次。どうしてゞす。
信一。二度と死なゝくつていゝからね。
英次。お兄さんもさう思ひますか。死んだものは幸福だつてね。
信一。だが人殺がいゝとか自殺がいゝとか云ふのぢやない。生てゐる人間は死ぬのが嫌ひなのは當然だからね。
英次。だが死の關所をこしたものは平和だと思ひますね。死んだものを生かすと云ふことは、生てゐるものゝ執着としては尤ですが死んだものにはありがためいわくですね。
信一。だが生き返つてしまうと、生き返つたことを又よろこぶのが人情だね。
英次。それはもう生きてしまつたからでしよ。死んでしまつて生きかへらないものを時々僕は羨やましく思ひますよ。

信一。千代子さんが歸つて來たらしいね。

英次。千代子に何か用があるのですか。

信一、いや一寸歸つて來たかと思つたのだ。

英次。もうぢき歸つてくるでせう。九時頃に一寸用があるやうに云つてゐましたからね。

信一。さうか。もうぢき十時になるよ。

英次。何處へ行つたのですかね。もうぢき歸つてくるでせう。

信一。本當に千代子さんは生てゐるのだね。

英次。お兄さんは疑ひ深いのですね。

信一。お前の表情の内に、俺の腑におちないものがあるからね。お前は正直もので、いつもお前の表情と、言葉とは一致してゐたが、今日のお前の表情は四分五裂してゐる。

英次。お兄さんにたいする私の感情がどんなものか知らないからです。僕はお兄さんを憐んでゐる。そのくせ愛してゐる。輕蔑し切つてゐる。そのくせ又尊敬し切つてゐる。正直に云つて僕はお兄さんの顏を見たくないのです。そのくせお兄さんのことが氣になるのです。お兄さんがこゝにゐることを僕は嫌つてゐる。だがお兄さんがこゝから出てゆけば、千代子と何處かで逢ひさうな氣がしてお兄さんをいつまでもこゝにひきつけておきたいのです。僕の表情が一つでないのは當然です。私の留守にお兄さんはいそいで歸つてゐらつしたのですから。

信一。お前が留守だと云ふことは俺は知らなかつた。

英次。本當ですか。

信一。それは本當だよ。

英次。でも僕の留守にこゝに來て上つていつたことは事實でせう。僕の留守を知つてこゝに上り込んで、僕の歸つてくるのを恐れていらつしたことはないとは云へないでせう。私はこんな空想をすると、身を八つさきにされるやうですよ。男と女、夫婦、他の人の立ち入ることを絶對に嫌ふ氣持、お兄さんはさう云ふ氣持はおわかりにはならないでせう。泥猫のやうにしのびこんで、あとで口をふいておけばいゝと云ふ流儀は僕は嫌ひなのです。ましてそれが血がつゞいてゐる人だとね。なほ我慢が出來ないものです。僕は嫉妬はいゝものだとは思つてゐませんがね。肉親のそれも不具の弟に嫉妬させるのは罪が淺いとは云へませんね。ね、お兄さんさうはお思ひになりませんか。僕は一度思ひ切つていろ〳〵のことをお兄さんに云つて見たかつたのですよ。ですけどはつ切り證據をつかんだと云ふわけでもなかつたのですし、そんなことを疑ふのは男として恥づべきことゝ思ひましたから、辛抱出來るだけ辛抱したのです。お兄さん、この僕の氣持を、十二分に味はつて下さい。

信一。……

英次。お兄さん。お兄さんは僕を人殺しと云ひましたね。

信一。そんなことは云はない。

英次。さつきさうおつしやいました！

信一。人殺しはよくないと云つただけだ。

英次。それなら姦通はいゝのですか、姦通は。

信一。よしてくれ。そんな風をして強迫するのは。

英次。私が精神上にうけた苦痛にくらべれば、お兄さんの罰は重いとは云へませんよ。

信一。なんとでも云ふがいゝ、お前がさう云ふたい度で出るなら、俺も正直に云ふよ。俺はお前に同情して千代子さんをお前にやつたのだ。それが俺の一番のしくぢりだつたのだ。自分を愛してゐる女が、愛してゐない男に世話した。それが僕の一番の罪だつた。その他の罪はその結果にすぎない。お前はそれを知つてゐたはづだ。それでもお前は結婚したがつたのだ。それがお前の罪であり、罰であつたのだ。一人の男は二人の女を愛することはよくない。そのために愛しない男に世話した。二人の女を愛する方が罪が重いか、愛しない男に女を世話する罪が重いか。お前にはわかるかね、俺は道樂者かも知れない。しかし自分を愛しない女を自分のわきにカン禁したことはない。それこそ一番、男らしくないことだと思つてゐるよ。

英次。あはゝゝゝ。理窟はどうでもつくものですね。しかし僕は妻は、僕を嫌ひながら矢張り僕を愛してゐてくれたと思つてゐますよ。お兄さんがいくら何とおつしやつたつてね。千代子は矢張り僕のものです。お兄さんのものではありません。

信一。千代子さんを殺さない限りそんなことは出來ない。

英次。それなら千代子を殺す許りです。

信一。千代子を殺す? そんな馬鹿があるか。千代子を殺したらお前だつて生てはゐられないぞ。

英次。餘計なお世話です。僕は生てゆきますよ。僕には大事な仕事がありますからね。

信一。人殺しと云ふ名に、どの位い恐ろしい名か知つてゐるか、その名が一生お前についてはなれないぞ。どんな時でも、一人ゐる所では殺された者が生て來て、その人の目に姿を見せるだらう。そして全世界はその人に向つて叫びか

けるだらう。人殺し、人殺し、人殺しつてね。（强迫するやうに）人殺し、人殺し、人殺し、人殺しつてね。人間の生命、それも若くつて、生たがつてゐる生命を無理にたち切つたものは、一生呪はれるにちがいない。人殺し、人殺し、人殺しつてね。

英次。いくら呪はれたつてかまいません。僕は千代子をあなたにはわたしません。

信一。（靜かに）。お前は人殺しだね。お前は千代子をやつけてしまつたのだらう。

英次。そんなことはありません。

信一。それなら、そのカバンをあけてくれ。開けることは出來まい。

英次。そんなおどしにはのらない。

信一。それなら訴へてもいゝか。

英次。千代子が生てゐたらどうしますかね。

信一。そしたら、俺はお前になんでもやるよ。

英次。いのちもですか。

信一。千代子さんがそれでなければ生てゆけないと云ふなら生命でもやるよ。

英次。そんなに千代子をお兄さんは愛してゐるのですか。

信一。俺はどうしてか、あいつが可哀さうで仕方がないのだ。今死してはあんまり可哀さうだ。

英次。でも死んでしまへば同じですよ。

信一。英次、許してくれ、たのむ、あいつは生かしてやつてくれ。俺はあいつに死なれては本當に困るのだ。

英次。大丈夫です。殺すやうなことはしませんから。

信一。ありがたう。それをきいて安心したよ。それなら又あとでくるよ。

英次。千代子にもしお逢ひでしたら、私はもう怒つてゐないとさうおつしやつて下さい。そしてすぐ歸るやうにさうおつしやつて下さい。

信一。承知したよ。本當にお前には何と禮を云つていゝかわからない。之で俺も安心して旅興行に出られる。

英次。いつ行くのですか。

信一。明後日はどうしてもゆかなければならない。

(信一退場、英次送つてゆく。英次登場)

英次。あゝ、つかれてしまつた。もう何にも考へる力もない。(ぶつ倒れるやうにねる)

二、

(悪夢の場、うすぐらい塔の一室、英次塔のなかに迷ひ込んでくる)

英次。(あたりを注意しながら)こゝまで逃げれば安心だ。(奥へ入らうとする扉自づとしまる。英次おどろいてたちどまる。扉に大きく、「人殺し!」と云ふ字があらはれる。同時に室の壁に、「人殺し!」と云ふ字が、あつちこつちにあらはれては消える、まもなく全部消える。)俺はとう〳〵人殺しになつてしまつた。俺の歴史には人殺しの燒印がつよくおされてしまつて、いくらどうしても消すことが出來ないのだ。あつ、俺の手に血がついてゐる。血がつくわけはないのに。あゝ水があつた。(大急ぎで洗ふ)消えない、消えない、益々はつきりしてくる。神樣、神樣、

お許し下さい。お許し下さい。この手の血をけして下さい。（あはてゝ洗つては明りの所へもつていつて見る。ますく手が赤くなる。氣がくるふやうに手をあらう。始め片手だつたのが、兩手まで赤くなる。）許して下さい、許して下さい。あゝゝ、どうしたらいゝのだらう（又人殺し！の字があらはれたり消えたりする。手はますく赤くなる。ますくあはてる。人殺し！人殺し！人殺し！の聲が聞へてくる。逃げやうとするが、四方の扉がかたくとざして逃げ道がない。駈けづりまわる。）助けて、助けて！（この時一人の女うづくまつたまゝの姿をあらはす。英次氣がつき、不氣味に思ひ注視する。女泣いてゐる。英次そばにより同情して）

英次。何を泣いてゐるのです。何か悲しいことがあるのですか。

（女默つて泣いてゐる。英次肩に手をかけて慰め、）

英次。どうしたのです。どうしたのです。

（女、顏をあげる、目も鼻もない）

英次。あつ。（あとずさりする）

女。人殺し、あはゝゝ人殺し、あはゝゝゝ。

英次。助けて、助けて！（逃げ廻る）

（不意に扉あく、英次其處からのがれやうとする。千代子眞蒼な顏して其處に立つてゐる）

英次。（その前に跪づき）許して下さい。許して下さい。

千代子。英次さん。私は最後に私は矢張りあなたを愛してゐると云ひたかつたのよ。それなのにあなたは私の喉をしめて私に何にも云はさなかつたのね。私が云ひたくつて云ひたくつて仕方がなかつたことをね。

英次。許して下さい。許して下さい。
千代子。だつていくら私が許してゐると云ひたくつたつて、あなたは喉をしめて私に一ことも云はしては下さらなかつたのね。
英次。許して下さい。許して下さい。
千代子。さあ許してあげるわ。だから私についていらつしやい。(手を出す)
英次。いやです。いやです。僕は死にたくないのです。
千代子。英次さん。私だつて死にたくはなかつたのよ。さあ一緒にいらつしやい。
女。人殺し、人殺し、おはゝゝゝ。
英次。あゝ。(倒れやうとする)
(千代子、英次を引ばりこまうとする、英次のがれやうとする。その爭いの最中菊の花と紅葉が散つてくる。千代子少しうれしさうな顏になる。この時小野寺あらはれて手をとり)
小野寺。しつかり〳〵
(小野寺英次を千代子よりひきはなす。千代子消へる)
英次。小野寺、よく助けに來てくれた。(小野寺の腰に抱きつきなく)

三、

(英次の室、英次倒れたまゝ。信一と小野寺登場)

信一。あつ。
小野寺。どうしたのです。
信一。（英次のそばにかけよる）英次！英次！
小野寺。どうしたのです。
信一。なんでもないやうです。
（英次、うなされる）
信一。英次！　いや、英次はこのまゝにして今の内にカバンをしらべて見ましよう。千代子さんは僕の處へも、あなたの處にも來なかつたとすると、どうも僕の恐れてゐたことが起つたとしか思へません。
小野寺。そんなことはないでせう。
信一。千代子さんは何かことがあつたらあなたの所へゆくはづです。それがあなたの所へゆかない所を見ると、そして弟のさつきの表情とてりあはすと、百が百まで僕の想像はあたつてゐます。
小野寺。それでもあなたをおどかすやうなことを云つてゐました。
信一。それは千代子さんから聞きました。しかしあれがもしおどしだつたら、弟は役者として天才以上です。僕なんか足もとにも及びません。人間に、あんな狂言が出來るとは思へません。カバンをあければ、十が十まで私の想像があたつてゐます。思ひ切つてあけて見ませう。
小野寺。あけて見て何か他のものでも入つてゐたら。
信一。そしたら私はどんなによろこぶでせう。なんでもあなたにおごりますよ。僕は死んでもいゝから、あいつは生か

しておきたかつたのです。しかし恐らく生てはゐません。
（カバンをあけやうとする。あからない。中を注意して判斷しやうと思つてあけて見やうとする）
信一。何處かにカギはありませんかね。
小野寺。英次君が持つてゐるでせう。
信一。さがしてくれませんか。
小野寺。どうも氣になります。
信一。しかしもしこのなかに死骸が入つてゐたら、このまゝでおくわけにはゆきません。どうにかしなければ、英次一人ではかつぎ出すことも出來ません。僕は英次の一生を人殺しとして葬りたくありません。
小野寺。どうも氣がひけますがさがして見ませう。死骸が出て來ても、あなたは英次君を憎みませんか。
信一。それは憎みます。復讐がしたくなるかも知れません。ですが、僕は死んでしまつたものにとつては復讐は何にもならないことを知つてゐます。それにエゴイストの話ですが、僕の名譽も重じます。復讐する勇氣はありません。もしものことがあれば弟だけでも助けてやります。
小野寺。それを聞いて安心しました。
信一。あなたも矢張り、僕と同じ考へですか。このなかに死骸が入つてゐるとあなたも思ひますか。
小野寺。十が八までは思ひます。
信一。十が八までゞすか、まだ望みがあると思つてゐるのですか。
小野寺。えゝ、僕はまだ望みをおいて居ます。今にも千代子さんが歸つてくる。

信一。千代子さんが歸つてくる。僕はもうそんな望みはすてゝゐます。カギはありませんか。
小野寺。ありました。右の手にちやんと持つてゐます。
信一。持つたまゝ倒れてゐるのですか。いよ〳〵望みはありませんね。

（英次うなされる）

小野寺。あの聲をきくと望がありませんね。
信一。いよ〳〵恐れてゐたことが來たのですね。とう〳〵來たのですね。
小野寺。（カギを持ち）あなたがあけますか。
信一。僕にはあける勇氣はありません。どうかあけて下さい。
小野寺。僕だつてそんな勇氣はありません。
信一。どうか、そんなことを云はないで。
小野寺。ともかくあけずにすませると云ふわけにもゆきませんから、あけて笑ひ話ですめばよろしいが。
信一。そんな希望のあることは云はないで下さい。
小野寺。（カギをあける）ふたをあけますよ。
信一。まつて下さい。私はとり亂したくありませんから。（目をつむり祈る）どうか。
小野寺。（あけて）あつ！
信一。矢張り、矢張り、矢張り本當でしたね。あゝゝゝこんな、こんな目を見やうとは。（泣き出す）不幸な奴だ。本當に本當に不幸な奴です。弟も馬鹿すぎます。だが之も皆、僕がわるかつたのです。僕はどうしていゝかわかりませ

ん。(泣く) 仕方がありません。すんだことです。とり返しのつかないことが出來たものです。生きかへる見込はないでせうね。

小野寺。(口をしらべたり、他をしらべたりしてゐたが) ありません。もうお死にゝなつてから十時間以上たつてゐるでせう。

信一。馬鹿です。馬鹿です。まさかこんな馬鹿なことはしまいと思つてゐました。ですがやむを得ません。私達は生きてゆかなければなりませんから。(死骸に禮拝する。死骸の前に兩手をついてお辭儀する) 許してくれ。千代子さん。あなたをこんな目にあはした、不甲斐ない私を。(泣く)

小野寺。これならふたをしますよ。

信一。どうか。

小野寺。どうしませうかね。

信一。之は僕がもらつてゆきます。

小野寺。大丈夫ですか。

信一。大丈夫です。僕にはいろ〳〵の仲間がゐます。英次のことはあなたにお任せします。自働車をよんで來ますから。

(退場)

小野寺。あゝゝ。こんなことが前世に起つたことがありさうだ。今の時代の話ではなささうだ。千代子さん。千代子さん。皆を皆を、許してやつて下さい。そしてどうすることも出來なかつた私達を許して下さい。

(英次うなされる)

小野寺。しつかり、しつかり、氣をたしかに。

英次。(やつと半ば目をさまし)あゝ小野寺、來てくれたのか。

(二人顏をあはせる)

英次。君はみんな知つたのか。

(小野寺、合點して見せる)

英次。それで君は僕をすてないのか。

小野寺。ますく捨てない。

英次。ありがたう。

(英次、小野寺の膝に泣き伏す)

小野寺。英次君！　英次君。

(額にさはつて見、おどろいて瀧閑を出して來て、きせ、水をくんで來て頭をひやす。信一、菊の花と紅葉したもみぢの枝をもつて登場、默つてカバンをあけ、花と葉でうづめ、默禱し、カバンのふたをし、かぎをかけ)

信一。さあ、やつて來て手つだつてくれ玉へ。

(男二人登場)

男。このカバンだ。

(男默つてカバンを運んで退場)

信一。熱がありますか。

小野寺。隨分高いやうです。

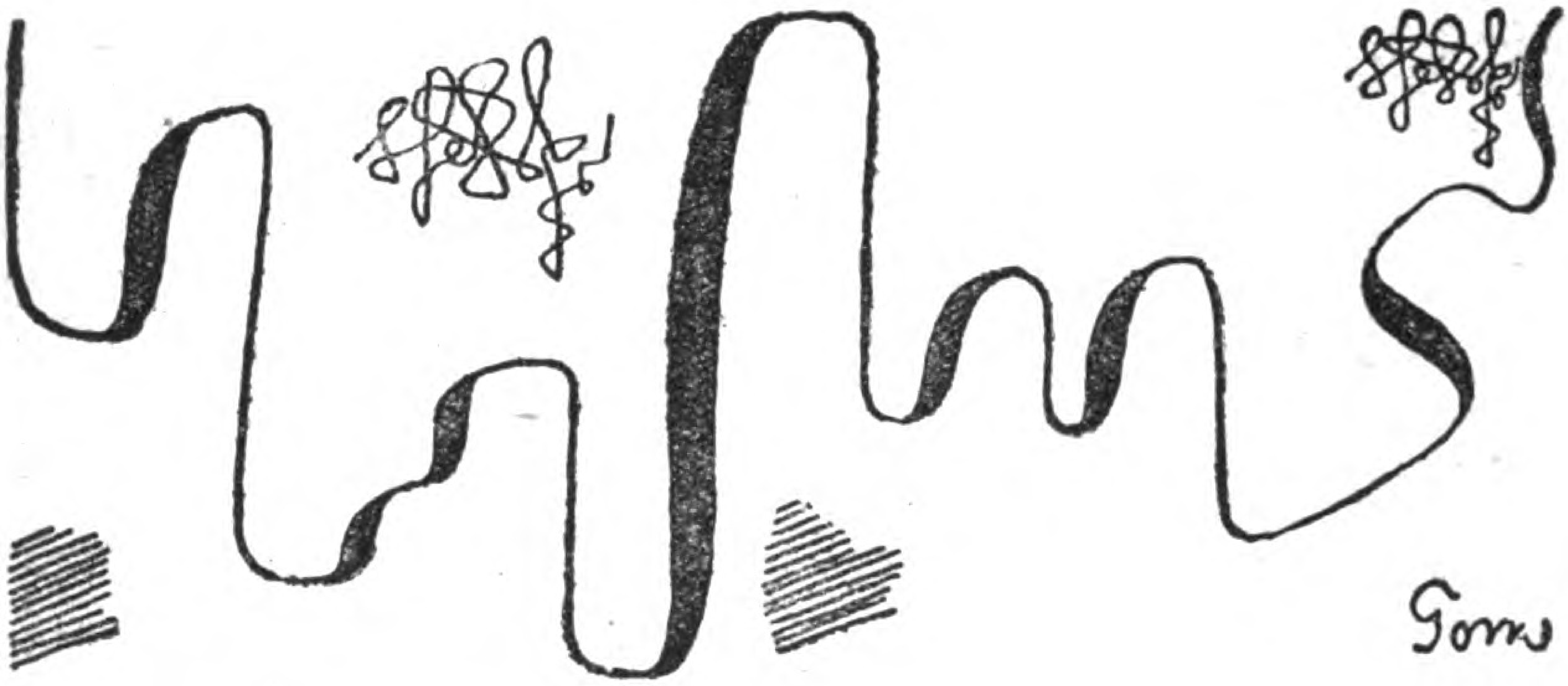
信一。それなら僕の友人で信用出來る醫者がゐますからすぐ來てもらふやうに電話をかけませう。何んでもうちあけて安心な男です。弟は大馬鹿ものですが、生かしてやりたく思ひます。よろしく願ひます。

小野寺。出來るだけはやります。(看病しながら)

信一。それを伺つて安心しました。それでは失禮します。

(二人丁寧にあいさつする。信一退場)

幕。



リユ・ド・リイル廿八番地まで

（續コキユーの嘆き）

武林夢想庵

六月二日より八月三十日までの間
Chatenay, Seiua.
104 rue chateaubriaud,
Maisou Coiffard. にて

『――あともういくらあるの？
――ちようど百磅ぐらいのものだらう。
――百磅といふといくらになるの？
――さうサ。日本金にして千圓、フランにして一萬フランかね。
――さうすると、それであと幾月かうしてゐられるの？

――できるだけ儉約して五ケ月だね。

――その間に日本から原稿料でも來る見込みがあるの？

――さア、どうだかなア、………萬一來て見たところで知れたものだらうよ。

――それぢや仕様がないぢやないの。

――まつたく仕様がないよ。

マルセイユへ上陸した時は、正金銀行の信用狀に四百四十六磅なにがしあつた。で、月に五十磅づつつかふとして、約九ケ月、そのうちには五百枚やそこらの原稿は書けると思つた。とすると、一枚五圓として二千五百圓、そのうちには、それをまとめて單行本ができる、印税がはいる、さうして怠らず日に平均四五枚がところ書きつゞけて行きさへしたら、巴里だらうがどこだらうが、親子三人の生活費だけはどうにかなつてゆくものと、例のノンキに高を括つてゐた。その考が根本的に裏切られて了つたわけだ。わたしにはそれだけの腕がなかつたのだ。

――兜をぬいだよ。

――兜をぬいだぢや困るぢやないの。一體どうするつもり？

――いざとなつたら、又どうにかなるだらうよ。

――それがどうにもならなかつたら、どうするの？

――さア、親子三人枕を並べて餓死だね。

――餓死？！

妻は顏色をかへた。

――あんたは本氣でそんな事を考へてゐるの？

――本氣にも冗談にもそれよりほかに仕樣がないじやないか。

――呆れたもんだわねえ……斷つて置くけれど、餓死のおつきあひだけは御免を蒙るわ。どうしても餓死しなけりやならないなら、あんた一人でして下さい。

――さういふと、お前には何か餓死しなくてもいゝ成算がありさうだね。

――別に成算があるわけでもないけれど、かりにあんたといふものがなかつたとしたら、さうすりや又おの字からどうにかなる道もついてゆくでせうよ。

――なぜ？

――考へて御覽なさい。あんたといふ誰が見ても立派な御亭主がついてゐればこそ、人はわたし達がどんなに困つても、どうにも一寸手の出しやうはないけれど、これが若し巴里のまん中でまる〳〵わたしとこの子供二人きりだとなれば、いくら冷淡な世間でも、まさかにそのまゝ見殺しにはしても置かないでせうよ。

――なる程ね。さう云へば或はそんなものかも知れないなア。

夫婦の間でこんな情ない問答しなければならぬやうな日ばかりつゞいた。それが去年の八月ごろの話。』

これも反古にした。

『もう三つきごし間斷なくふりつゞけてゐた皚々たる雪の中で、男の子がひとり生まれました。

・

十年まへまでは、そこはまだ天然のまゝなる寒帶植物の大森林が、幽邃にひろがり横たはつてゐた原野の一部でした。その中に繁茂する荊棘と同じやうに、のびるにまかせた頬髯や髮の毛のおくで、大きな兩眼のキラ〳〵光つたアイヌ族が、山をわけのぼつては熊狩をしたり、川を徒渉しては鮭をつきさしたりして、そこ爰にのどかな平和な小部落をいとなんでゐるに過ぎませんでした。で、日本人といつては、春は雪どけの濁流があふれ、夏は一面の小石河原のまぶしくてりかへす、大きな河の渡守をして、うるさい本國から人知れずのがれて來てゐる一家族だけでした。

が、海を越えた北方の大陸に、そのころ大きな鷲のやうに翅翼をひろげてうかがつてゐた強國にそなへるため、新たに權力をにぎつた若々しい政府の一團が、勇敢にこの大森林をきりひらいて、そこへ市街地を建設することに一決して以來、動きはじめた本國の日本人は、續々とこの土地へ入り込んで來るやうになりました。

生まれた子供の兩親もさういふ人々のうちでした。

そとでは吹雪がふりしきつてゐました。吹雪をくゞつてはスツ〳〵と橇がいくつも通りました。小さな開爐裡でわづかに暖められた部屋の中で、子供は初湯をつかはされました。母親は十八でした。父親は二十六でした。彼等は併しこの家の主人ではありませんでした。天井の低い六疊に足らぬこの一室だけが、主人から彼等に許された唯一の安息所だつたにすぎなかつたのです。

主人夫婦には子種がありませんでした。それゆゑにこの子供の生まれたことが、同じ家根の下で起き臥しする彼等にとつて、どの位意外なよろこびをもたらしたものか想像がつきません。何となれば、主人夫婦は二人とも世にも淋しい淋しい過去の生活をしよつて來た人々だからでした。

主人は自分自身の實の父母が果してどういふ人間であつたかまつたく知らない孤兒でした。又その妻の方は、三歳の

時、安政の大地震で生みの母親にわかれ、さうして十九になるまでまるで父親のゆくへを知らずに、つめたい他人の家ばかりに轉々して生ひ立つた婦人でした。

人生で一人の子供がこの世の中へ生れでた位大きな事實はありません。いゝにつけ、わるいにつけ、子供は兩親の運命を決定します。たゞに兩親ばかりでなく、時としてはその子供の周圍をとりまく人々の生活をも左右することがあるのです。

雪の中にうづもれたこの一軒の移住者の家で、師と徒弟との關係をもつた二夕組の夫婦の上に、たゞひとりこの小さなものが附け加へられたといふだけの事實によつて、どういふ新しい生活の歩みかたが、いつとなし彼等自身の魂の底の方に、根ぶかく將來づけられて了ふやうになつたか、それがこの物語の發端であります。

これも反古にした。

『放浪の極はのたれ死だ。放浪を志して日本を出て來たのだから、のたれ死は當然の結果であると云はなければならぬ。が、さて、さうは云ふものゝ、いよ〳〵その當然の結果なるものが、のツぴきならず目前に迫つて見ると、苦しい。どうにかして食だけはつなぎたく思ふ。さうして生きられるだけ生きたく思ふ。

『妻を思ふ。子を思ふ。また歡樂の夜の巴里を思ふ。さうして思へば思ふほど、同時にこの屈辱の現實がいよ〳〵ますます〳〵たへがたくなる。

『現實の世界に沒頭して戰ふべく、わたしの心はあまりに弱く生まれつきすぎてゐる。現實の世界には、わたしに所有

をゆるすべき何物も殘されてゐない。もてるものは悉く奪はれる。さうしてもたぬものまでその上に誅求される。』

これも反古にした。

『疲れた。

なにをするのも懶い。ゴロリと仰のけに臥そべつては、靄々と雜念の浮かびあがるにまかせる。と、すぐねむくなる。いつのまにかうと〳〵と夢の世界へはいる。この世に於いてたゞ一つわたしに殘された自由郷はそれだ。それだけだ。』

これも反古にした。

かれの目のまへには白紙がある。三十年來の白紙がある。さうして年毎にます〳〵愛着の念のまさりゆくかれ自身の生命をば、どうかして永遠にその上に書きとゞめたくてたまらぬ白紙がある。

——こんなことを書いたつて何になる？

一枚書いて、讀みかへすと、かれはきまつてさう思ふ。さう思ふと同時に、かれのペン先はかならず電氣を感じたやうに痺れる。さうして反古にする。白紙は依然として白紙のまゝに殘る。

無想庵は白紙に惱みつかれた。

無想庵も五十歳にちかづいた。

孔夫子も同じやうに、十有五にして學には志したが、三十にして立たなかつた。立たなかつたのではない、立てなか

つたのだ。のみならず、四十にしていよ〳〵惑つた。さうして惑ひに惑つたまゝ、かれはとう〳〵かく天命を知らなければならないほどの年齢にまで達して了つた。

まア、どうなつてゆくものか、行つて見ろ、行つて見ろ。

いよ〳〵この世からおいとまがでるまでは、できうるかぎり例のアタラシキシアといふ卑怯者には至極御都合のいゝ態度を維持することゝして、生きられるだけ生きつゞけて行つてやれ。

なアに、ものゝ十分か二十分、ちよツともがき苦しめば、そのあとは、きツとかうやつて生きてゐるよりは、はるかに楽になるにちがひなからうとは思ふのだけれど、なんにしろ一度あつて二度ない命なんだからナ。いくら生きても生きても、死ぬにはどうも惜しい。

まア、どうなつてゆくものか、行つて見ろ、行つて見ろ。

さう思ひ〳〵爰まで來た。

爰はフランスだ。詳しく云ふと、デパルトマン・セイヌのシヤトネエ、リユ・シヤトオブリアン百〇四、ヴル・ドゥオルネエ・エ・ヴレエ・オー・ルーとも、又メーゾン・コアツフアールともいふ、青葉の中の川面びたオテル　レストランの一室だ。

爰で三ケ月くらした。

妻は一人になつて原稿を書けと云つた。自分でもそのつもりで爰へ來た。さうして三ケ月くらしたが、原稿は一枚も

書けなかつた。まじめに原稿に沒頭すべく、あまりにわたしの心がおちつきを失つてゐたからだ。

妻だからとて、覺束ないわたしの原稿ばかりアテにして、いつまでもそれだけで生活をつゞけてゆくつもりでもなかつた。又なかなかそんなシミつたれたことで滿足のできさうな妻ではなかつた。わたしと云へどもその點では同じことだが、妻の未來にはいつも美しい夢がある。

Maison Meublée. 28 rue Lille. (Parisyme) にて

——九月七日

なるやうになつて來た。さうして一文なしになつた。一人ぼつちになつた。

妻はわたしに顏を見せるなといふ。わたしは妻のいひなり放題にならうと思つてゐる。わたしといふものゝ生存はもうよほど以前から妻には必要がなくなつて了つてゐる。それはわたしにわれ〳〵親子三人の生活を保證し得べき資格も能力もなくなつて了つたからなのだ。妻子を養ふはさて置いて、わたしには今わたし自身の衣食さへどうすることもできぬほどさし迫つた身の上になつてゐる。なぜさうなつたか？

九月十二日。

アンリ・ベロオのソビエット紀行を讀み、クレマン・ヴォテルのモン・フイルムを讀み、フレデリック・ブテエのアングラチイテユードを讀み、それからキォスクで窒息して死んだ二人の無宿者の記事と、セエヌ・エ・オアズのシャトルアンジといふ村で老人夫婦が縊死した記事を讀むと、急にこの日記が書きたくなつた。

このジユルナールといふ新聞は、日本の時事新報のやうに、貸家さがしには巴里では一番いゝ新聞だといふので、去年の二月はじめ巴里へ着くと、毎日この新聞を買つては、そのプチット・アノンス欄に目を通して、そこへ出てゐる貸家をば、一生懸命にさがしあるいたものだ。リユー・ローリストンのパンション・マルタにゐた時のことだ。

リユー・デユパンの家はその新聞でさがしあてたわけではなかつたが。毎日〱その新聞を讀んでるうちに、その第一面をかざつてゐるクレマン・ヴォテルのモン・フイルムが面白くて、しまひにはもう〱たゞそれが讀みたいばつかりで、新聞といふと、どうしてもル・ジユルナールを買はざるを得ない點にまで深入りして了つたものだ。

モン・フイルムは日本の新聞にもある。「天聲人語」とか「机の塵」とか云つた性質のものだが、その內容は日本のものとは大分にケタがちがふ。わざ〱その小隨筆を讀むために、その新聞を買ひたくなるほどの新聞は日本にはない。

かうしたオリジナルの文章をば他のそれぞれにオリジナリテーを有する文章に比較するのはまちがつてゐるけれど、さうしてそのオリジナリテーを比較するわけでは無論ないけれど、クレマン・ヴォテルを讀むごとに、わたしはいつも必ず莊子を思ふ。これから枕草紙を思ふ。徒然草を思ふ。西鶴を思ふ。齋藤綠雨を思ふ。水島爾保布を思ふ、さうしてたまらなくうれしくなる。

モン・フイルムにはその時〱の社會問題が、その大小に拘らず、その深淺に拘らず、その廣狹に拘らず、勝手次第

に採用されて、それ等が悉く一貫して、徹底的にクレマン・ヴオテル化された小說になる。まづ岡本一平の漫畫といつた趣きがあつて、通俗哲學者としては、フランスではこの人の右に出る作家は一寸なさゝうだ。

クレマン・ヴオテルは巴里中のコンシエルジ（アパルトマンの門番）を悉く讀者にもつと云はれてゐるが、若しさうだとすると、巴里のコンシエルジなるものは、はなはだ哲學的の頭を持つてる人種だと思ふ。さうしてわたしもその愛讀者の一人であるところから推すと、わたしの頭は決して巴里のコンシエルジ以上に出ないものかも知れぬ。

けふはプロフエツサア・リシエといふ人の、「肉は生のまゝで食ふべし」といふ說に對して、或一人の醫者がその駁論を披瀝してることが書いてあつた。

――何となれば人間は火をつくる動物だからである。人間は煮た食物を食ふ。さうして庖厨がその犧牲者を貪る猛獸のそれから遠ざかれば遠ざかるほどそれが文明となる。文明は火の娘である。ラグーとかヴオ・マレンゴオとかプーレ・ローチイとかいふものは、吾人の物質的道德的完成の尤もよき證左である。最も發展せる民族は最もよく煮たる食物を食ふ。

――さうすると、燻製の豚肉やアメリカのビフテキは？うまいものですが……

――原始野蠻時代の痕跡です……

これは或日レストンで記者とこの醫者とがビヤン・セイニヤンのアントルコツトを待つ間の問答だらうである。ビヤンセイニヤンとは「充分に血のしたゝる」といふ意味だ。

クレマン・ヴオテルの文章はいつもこのサゲで光る。

「その店には二つの陳列箱（ヴイトリン）がある。右の方には法王冠（テイアル）がある。聖體器（シボアル）がある。聖櫃（タベルナクル）がある、觀示臺（アスタンソアル）がある。左のそれのうちには、鎌と槌との規定の章（しるし）をぬいつけた赤旗がある。ソヴイエツトは壁上に、「宗教は人民の阿片なり」と書いてゐる。彼

はこれ等の驚くべき信心家の商業に眼をとぢてゐるのか？」アンリイ・ペロオはモスクワの町でこんな觀察をしてゐる。

——禮儀だとか道德だとか、定收入(ラント)のある時にはそれはいゝものですよ。

フレデリック・ブーテーのスケッチに出て來る待合のお神さんがさう云つてゐる。

* * *

こんな新聞記事に面白がつてウカ／＼してゐられるやうな身分ではないのだ。愛する妻子は他人に奪はれ、その日その日の生活費は妻から惠まれてゐるといふ、屈辱の極にある身の上ではないか？人間の皮を着たら、一刻だつてこのまゝでは生きてゐられぬ筈ではないか？自殺するなり、姦夫姦婦をぶち殺すなりして、ヘロイックの行動に出なければどうしても愛はすまされぬところではないか？それだのに、なぜかう意久地なくグヅグヅのだらしない生活をつゞけてゐるのか？自分でさへ全く自分の氣がしれぬ。

* * *

要するに、わたしはたゞグウタラな人間にすぎないのだ。卑屈であまんじてゐられるやうな本當の小人に相違ないのだ。ミゼラーブル・デゼスペレ、そんなフランス語に相當する人間の精だ。

* * *

——九月十三日。

目があくと午後十二時半だ。慌てゝ起きる。毎日食事を共にしてゐる舟橋さんのところへゆく。叩いても音沙汰がない。靴ふきの下をさぐると鍵があつた。舟橋さんはゐない時にはいつもかうして置いてくれる。室内へ這入つて殘飯を貪ふ。少しセーヌの縁を散歩してかへると、又ゴロリと臥床の上に倒れる。いつの間にかねむる。眼があくと五時だ。何といふ生活だ。併しまだ／＼これでは本當の放浪とは云へぬのであらう。こんな生活でも今月一杯はまだわたしにはゴロリと臥られるところがある。腹がすけば殘飯のくはしてもらへるところがある。けれどもいつまでこんな生活がつづけ得られるであらうか？

* * *

ポン・ロワイヤルから十二番の電車にのる。きのふもよつぽど乘らうかと思つて爰まで來たけれど、一週間に一度ぐらゐより來るなと云つた妻の言葉が頭にあるので、さうして三日前に行つたばかりなので、氣怯れがして、電車をやりすごして了つた。さうしてルーヴルの前をあるいて、ポン・キヤルツセルをわたり、そのまゝ歸つて新聞をよむと、この日記をつけはじめたくなつたものだ。

この十二番はパッスイまでしきやゆかぬので、ミニエットで降りる。日曜なので、沿道は大變な人だ。

ダヴイウーの家では妻が一人きりで仕事をしてゐた。

——茶目は？　ときくと、

——コンシエルジとどこかへ遊びに行つたよ。けふは朝からカツラの島田を結はうとして、いろ／＼工夫して見たけれど、どうしても出來ない。きのふは桃われを結つたところ、それはよく出來たのだけど……と妻が云つた。

妻は近々モンマルトルの一流の料理屋をさがして、そこへさま〴〵な日本の女の風俗をしては、踊りを見せ。それから花や扇のやうなものをば、そこへ集まる世界中の最も贅澤なお客達に賣らしてもらはうと計畫しつゝあるところなのだ。

去年の九月、リユー・デユバンに於ける親子三人の巴里生活がゆきづまつた結果、妻は料理屋を巴里に出す相談のため倫敦へ行つたが、行つた先の主人とすぐ關係して、親子三人水入らずの生活は同時に破壞したが、その代りリユー・ケプレルへ日本料理店を出す事にはなつた。けれども土壽がわたしの目をくらまして二人がしきりに密會する事にばかり精を出したので、料理屋は無論うまくゆかず。その上倫敦の本店まで潰れる結果になつた。それが今年の二月頃の話。その間には妻がその男の子を妊んだり、それを××××××とそのあげく死ぬ病氣になつたり、又その後、若い學生をそゝのかして、二月の中旬から、四月の末まで、南フランスから瑞西方面へ、さまよひまはつたりしたものだ。わたしも寒い間は子供を暖かいところに置きたいのと、それからどうかしてこの新しいいまはしい生活を脫却したいのとで、いろいろ傍にゐて氣をもんで見たけれど、學生の力があまりに貧弱であつたために、わたしの境遇はます〳〵デスペレートなものになつて了つた。わたしの妻のやうな女に貞操を求めるのは間違ひだけれど、妻だつて人間なら、子供の爲には夫婦協力して事に當る方がどの位いゝか分らない位の道理はわかりさうなものだと思つてゐたものだ。それがつまりわたしのうぬぼれで、一文なしになつて、妻子と同棲しようと望む方が、よつぽど愚かでもあり、蟲がよすぎた考でもあつたといふ事が、その後の事實でだん〴〵と證明されて行つたわけだ。けれども無邪氣な子供だけは、どうしてもパパ公〳〵と云つては、しきりとわたしと一緒にゐたがる。妻の同棲者はしきりに妻をつツついては、どうかしてわたしと妻子との間を遠ざけやうと、それにばかり骨を折つてゐる。妻だけはその色男めの希望どほりになつたけれど、子供は不思議とわたしの事ばかりやい〳〵云ひくらす。それにひかされて、わたしも屈辱をあまんじては、つひ〳〵妻子の顏

を見に行かざるを得なくなるわけだ。わたしの妻のやうな女には、わたしのやうな夫をもつよりは、それは無論その色男めのやうな男を夫にした方が却つて或は自然なのかも知れないけれど、いかにせん、子供があるので、萬事がうまく解決がつかぬのだ。わたしにしても妻を離別するのはわけのない話だけれど、子供までもすてる氣がどうしても起らぬ。まア、この先どう事件が解決されてゆくか知らないが、わたしの精進努力がわたしの心身に復活し、さうしてわたしに自分でどうにか飯の種にありつける境遇に移る幸運さへ來たら、子供だけは恐らく一緒に生活できるやうになるであらう。併し今のところはかうした屈辱にあまんじて、呉に捉はれた越王勾踐の心意氣であくまでも臥薪嘗膽の忍從をつゞけなければならぬのだ。金さへ握られゝば、女なンぞはいくらでも自由になる。併し子供は金では買ふ事はできぬ。

＊
＊　＊

子供がねたので、すぐかへる。色男めに惚れて、わたしに對してはもう寸毫も愛情をもてぬやうになつた妻とさし向ひでゐるのは苦しいからだ。實際のところ、わたしはわたしの妻に對して生命をすてる氣が起らない。妻ばかりにかぎらない。一切の女に對して、生命をすてるまで愛する心にはなり得ないのだ。わたしは二十年間×××と關係してゐた。さうしてそれがために普通の家庭生活を營むことができずじまひになつた。それほどまでにして實××と關係をつづけたけれど、死ぬ氣には一度もなれなかつたものだ。又××がひの×にも關係して、とう〳〵子供まで生ましたけれど、さうしてその××がひの×とわかれるのは隨分つらかつたけれど、要するに死なずにすんだ。今度はアベコベだけれど、どんなに妻からあいそづかしをされても、死ぬほどまでにくやしいとは思はぬのだ。恐らくわたしといふ人間は普通人よりはよほど愛情の點に欠陥があるのであらう。ひよつとすると、さういふ點に關して、わたしは先天的痴呆性を

有してゐる精神病者かも知れない。

* * *

――あしたの晩は小森さんが來るから、御飯をたべに五時頃からお出でなさい。と妻は云つた。

それは親切からではない。いろ／＼飯の用意をするについて手傳はせやうとするにすぎぬのだ。それでもわたしは喜んで行かうと思つてゐる。

* * *

――なぜパパ公とまつてはいけないの？と、子供は妻にきく。妻はいやな顏して返事をしない。子供が大きくなつた時、かうした生活を思ひ出せる余裕ができたなら、なぜ母親がいやな顏したか、さうして返事をしなかつたか、恐らくわかるであらう。併し母親のやうな生活はたぶん繰返さぬほど利口な女に成人するにちがひなからうと思ふ。

――あした起きたらすぐ來なさい。コーヒーをのんだらすぐね。と云つて子供はねた。さうしてすぐ行つたら色男めが又けむたさうな顏して、あとでグズグズ妻にあたるであらう事などはまだ全く想像する餘地もなく。

何しろ、今のところはその色男めがわたしの妻に惚れきつてゐるので、さうしてたゞ／＼妻の愛情をつなぎたさ一杯で、わたしの生活費まで心よく出さゞるを得なくなつてるといふやうな境遇の中に、われ／＼三人は生活してゐる有樣なのだから、自分の事ながら、實際言語道斷だ。言語道斷、心行處滅か、これで法華經の極意にかなつたものとしたら、佛説ほど世の中に有難いものはない。

* * *

——九月十四日。

——九月十五日。

ゆうべは横になると、つひ睡つて了つたので、日記を休んで了つた。日記を休むのは、從つて日記を書く氣も又書くひきもないほど心もからだも落ちつかなかつた證據だ。きのふはつまりさういふ日であつたわけだ。起きてきものを着かへると十時半、珈琲をのむ氣になつて外へ出る。ル・ジュルナールとシラノを買つてポン・ロワイヤルの角のいつもゆくキヤフエのテラスへ陣どる。さうしてクロワソンをかぢりキヤフエ・オー・レーをのみながら新聞をよむ。のみをはるとすこしケーを歩く。ケーのブキニストで古本や古版繪を見る。着かざつたマリイ・アントワネツトがいつでもブラさがつてゐる。又よりどり一フラン半の本の中にスコツトのウエヴレイ・ノヱルだのバルワー集だのムーア集だのがある。英語の本だ。百年前に流行したもの丶痕跡だ。いくら安くても買ふ氣の出ないところが面白い。併し版繪の方はほしいものが澤山ある。十八世紀の宮中の風俗を描いたものが多いが、美女がスポリと尻を出して、侍女に灌腸させてゐるところを、窓からソツと男がすき見してゐるのなんかは、至極ノンキなものだ。すべて革命以前のデカダン味を發揮したものだ。日本でも徳川末のものが一番面白いが、わたしにはどういふものかさうした時代のものばかりしきりに眼についてしかたがない。すべて破滅前の爛熟が興味をひくのだ。歸つて新聞のつゞきをよむ。ネツプマンに對するペロオの感慨は同感だ。なるほどこの調子ではモスクワもい丶加減なものだと思ふ。人間の矛盾性はどこまで行つても主義や哲理の實現を拒絶する。自然のまゝの虚僞と貪慾の生活が勝利を占める。クレマン・ヴオテルはシラノで名文を書いてゐる。戰爭をやめて了ふためには、外交家、經濟家、政治家、大鐵商、軍備供給商、新聞記者のたぐひをば、戰爭の起つた場合に、先づ戰鬪の第一線へ立たせるといふ法律を設けるにかぎると云つてゐる。ノーベルはダイナマイトを發明してそ

の非を悟り、罪業消滅のためにノーベル賞金などでごまかさざるを得ないことになはつたさうな。さもありなんと思ふ。モン・フイルムの方ではアクション・フランセーズのやり口をひやかしてあつた。舟橋さんのところへ行くと今日もゐない。鍵が置いてあつたから、這入つて又残飯をくふ。食後そこに置いてあつた猥褻な新婚第一夜の描寫された本を二十ページほどよんだが、下らなくなつて出る。ポン・ロワイヤルからブスのMにのつて、ブルヴール・モンマルトルで降りる。パリジアナで一フラン半出し、活動寫眞の立見をする。パリジアナは安いのでよく這入るが、愛の寫眞はブルヴール中で一番フランス趣味にとんでゐる。マドレーン・シネやサル・マリヴオの高いところのは、金ばかりかゝつて人間味の乏しい寫眞ばかり多い。前週の「苦悶」と題するのやきのふの何とか云ふのは非常に手ぎわよく寫してあつた。すべてソシエテ・シネマトグラフイツクの作品だ。畫家の妻君が役者と姦通して畫家が苦悶するといふのや、貧の爲に心なく金持の息子に貞操を蹂躙された娘が豪農の息子と清い愛情の下に結婚してその貞操を蹂躙された事が原因でいろ〳〵な波瀾を生じさま〴〵タツチングな場面を見せて結局愛の勝利を得るといふやうな平凡きはまる筋のものだが、そのとり扱ひ方が緻密ですこぶる藝術的なものだ。フランスは活動寫眞でも藝術化しないではゐられぬ國だと思ふ。民衆藝術とは恐らくこんなのを云ふのであらう。

* * *

――九月十六日。

きのふもおとついの日記を書きかけて、船橋さんのところへ晩飯をたべにゆくと、そのまゝ船橋さんとオペラ・コミツクへお客の切符を買ひにゆくお供したり、又船橋さんのところへかへり、高松丸尾の兩君と四人で夕飯をたべ、おとか

らやつて來た住友の技師の人と、食後オランピアの地下室へ行つたり、カルチエ・ラタンのノクタンビユールへもどつたりして、とうとう夜中の一時半まで、五人づれでブラつきまはつたゝめ、くたびれきつて、そのまゝ寢て了つた。

* * *

一昨日活動を見ると、ブルスからA Bのブスでミユエツトまで行き、アヴニユ・モザールを一寸さがつて、すぐヴイウーへ這入る。妻子のゐるアパルトの梯子段の途中で、オペラの女役者とつれ立つた小森さんに逢ふ。

室内に這入つてきくと、

――スペインのサン・セバスチアンといふところへおどりの口がかゝつたので、小森さんとオペラの女優と二人で勧誘に來たけれど、六日もかゝるといふので、ことはつた。と妻がいふ。

――六日位かゝつたつていゝぢやないか？なぜ行かないのだ？

――モンマントルへ出る方がそれより肝腎だから、その仕度の時間をとられるのが惜しいからサ。

――お前は男にはまつて、一日でもその傍が離れたくないのだらう。

――そんなことはないサ。何しろ飯に食ひはぐれてはこの際一番困るんだから、何んとか眼鼻のつくまでは仕方がないよ。

――こんな生活をつゞける位なら、二人共かせぎの原稿にでも精を出した方がましぢやないか。

――食ふや食はずの飯ぢやつまらない。もつと贅澤な飯がくひたいからね。

――そりやそうサ。

妻とこんな問答をしてるうちに、リユツクスの生活を夢み〳〵、だん〳〵と頽廢の底へ落ちて行きつゝあるわれ〳〵夫婦のミゼラーブルな最後をあさましく想像する。

子供は活動へつれてゆけとせがむ。妻は子供の顔色がわるいからボアへつれてゆく方がいゝといふ。子供と二人でボアへゆく。人のゐない林の中で、二人はかけつこをしたり、草花を摘んだりしてかへつた。

* * *

巴里見物の住友技師にきくと、川田は製鋼所の重役になつたといふ。自分の目下の境遇とひきくらべて、いかに川田が利口な人間で、いかに自分が愚かな人間であるかゞよく分るやうな氣がした。さうして人生はどうしても利口な人間でなければ生き甲斐のないところであることをしみ〳〵思つた。

* * *

——九月十七日。

ゆうべは雨がふつてゐた。殘飯を舟橋さんがオジヤにして、高島屋の人と三人で食ふ。食後高島屋の人がどこかへつれてつてくれといふ。舟橋さんは新聞を見て、どこにしようと考へる。ゴーモン・パラースへ活動を見にゆかうかと云つた。高島屋の人は何でもいゝから建物の立派なところへゆきたいといふ。新聞の廣告を見てゐるうちに、ロシニのギヨーム・テルのウヱルチユノアといふ大きな字が眼にはいる。モガドルの活動だ。そこへゆく事になる。五フランから二十フランとある。

——安いとこならお供してもいゝが。といつて、あたしもお供することになる。

ロシニは面白かつた。この小屋は立派なものだが、去年コラ・ラパデルシエールとか、何とかいふ金持の詩人夫婦の所有になつたが、それが又モガドルといふ町名にかへつて、今度は活動寫眞になつて了つた。寫眞は平凡なものだが、オルケストラがよかつた。余興にライオンつかひなどあつて、とりあはせが變だつたが、とにかく氣樂に一夜をすごした。十二時半ごろかへつてねたが、一文なしの境涯にもかゝはらず、いゝ氣になつて人におんぶしながら、活動なんぞを見てゐるダラシのない自分の心境をかなしく思ふ。

* * *

——九月十八日。

舟橋さんのところからルナンの耶蘇傳を借りて來て讀みかけたが、今はとてもルナンのやうなラショナルな學究的な靜寧な心境には一致できないのでやめる。夕飯後はスタンダールの赤と黑、ロスタンのシラノ、ポール・モランのウーヹール・ラ・ニユイを借りて來る。モランを讀みはじめる。グン〱ひきづられて讀む。一千九百二十一年の歐羅巴の動搖せる表面とそれに對するモラン氏の感傷とがなま〱しく鏤刻されてゐる。先日この人のユーロツプ・ギヤランといふのを讀んだが、非常に氣に入つた。それは二十四年度の歐羅巴だ。ポール・モラン氏のアンテルナショナリズムははじめから一貫した何物かを持つてゐる。殊に「トルコの夜」と題するのにウランゲル時代のコンスタンチノプルに於ける露西亞亡命貴族がいたましく描き出されてあつた。アンリ・ベロオのソギエツト紀行にもこの文中にある“on ne comprend pas la Rnssie avec Ca raison on, ne peut que croire à la Russic, といふイタリツクが引用されてあつた

が、ペロオの文章と並んで、わたしにはこの人の筆法がうれしく共鳴される。

＊
＊＊

書物を讀むにつけても、自分のフランス語がいつまでたつても幼稚なところにとまつたきりになつてるのが齒痒くなる。ペロオやモランを讀みながら、その一字一句の妙味がどうしても日本語を讀んで觸れ得る域までに達しがたい。どうかしてそれがわかるまでこの國にとゞまりたいと思ふ。

＊
＊＊

南岳思禪師は乞食して法華經を暗誦したといふ。さうして隨自意三昧を書いたものだといふ。天台の止觀はそれからヒントを得てできたものだといふ。わたしのフランス文學もその意氣で究められるところまで究めたいと思ふ。わたしはまだ日本語と同じやうにフランス語を讀めも書けも話せもしないけれど。もう十年もたつたら、どうかしてさういふところまで達したいと思ふ。文藝と語學とはちがふけれど、その國に起臥しその國の生活につかりその國を愛するかぎりその國の文藝をばその國の作者達と同程度にまで體得味得したいと思ふ。それがこの世に於けるわたしのレーゾン・デートルだと思ふ。

＊
＊＊

六年前妻と一緒になつて以來、フランスとは密接になつたけれど、妻の生活の發展のために、わたしは今日まで自分

自身の慾望を充たすことをさまたげられて來た。併し若し妻の生活とわたしの生活とが結びつけられなかつたとしたら、わたしはフランスとかうまで密接にならなかつたかも知れない。よしさうなつたとしても、わたしはきつとアメリカへ行つて、妹と一緒に住むやうになつたらう。さうしてフランスへはきつと來たには相違ないけれど、現在とはまるでちがつた形式でフランスと交渉することになつてゐたらうと思ふ。又妻にしても巴里で子供をうまなかつたら、さうしてよし生んだにしても、はじめの考どほり、田舍へあづけて了つてゐたら、決してかうはならなかつたにちがひない。けれども事實は子供を中心として二人がそれ〴〵の慾望をばそれによつて發展してゆく氣になつた點に歸着して了つたわけだ。われ〳〵夫婦の間にはもう愛情はなくなつて了つてゐるのかも知れない。しかし生活は子供を中心にして不思議な形式でかく展開しつゝゆくのだ。若しわたしに今金があつたら、この形式はこのまゝでは殘るまい。一文なしであることが他人に妻子を自由にされてまで妻子をすてるわけにはゆかない狀態をつくつてゐるのだ。それがます〳〵フランスとわたしとを結びつけてゆく原因をなしてゐる。

*
* *

——九月十九日。

きのふは終日妻のところにゐた。さうして見るも蟲づが走ると云つたやうな妻の態度を氣の毒に感じてかへつた。子供はパヽ公の歸るのはいやだとベソをかいてゐた。妻と色男めとはお客さんを送り出すやうにして私を送り出した。けふは舟橋さんところのお客達とボカルデイへ夕飯をたべに行つた。さうしてそのうちの一人とブルヴアールを散歩してわかれた。舟橋さんと高島屋の人はオペラ・コミツクへ行つた。わたしは又パリジアナでプロムノアルをきめたが、ユブ

ド・ウエイの光」と題するアメリカ物でつまらなかつた。併し活動に盛られた社會道徳は古今一貫したものである事をしみ〴〵考へた。

*
* *

さうした古今東西に一貫した社會道徳なるものに照しあはして見ると、今日までのわたし自身の生活なるものは、全く不道徳きはまつたものだ。さうして若しわたしがわたし自身のことをまつ正直に書きのこして死んだとしたら、社會はそれを讀んで、わたしのかくまでみじめな死に方をしたことをばなるほどさうした男がさうして死ぬのは當然なことだときつと頷くであらう。幸にしてわたしにはジヤン・シヤク・ルツソオのやうな根氣のいゝ天才をもちあはさない。又あらゆる天才達のやうな自信がない。それゆゑいかに書きたくても自分自身の生活をばまづ正直に書くことが出來ない。若し書けたらきつと批難攻撃を矢の如く受けもしようし又同感を表してくれる人も澤山に出て來るであらう。さうしてそれを寶物にして一ト儲しようといふ山師まで現れてくれるであらう。希望としてはわたしはしきりにさうなることにあこがれてはゐるのだが、いかんせんわたし自身の素質が天才にうまれついてゐないことが正に疵だ。さうして自分にだまされて筆にまかせて書けば、この通りのしまりのないたゞだら〳〵とした日記しきや書けない。これではいかに天才として世の中へかつぎ出したくても、山師も一寸手のつけようはあるまい。從つて文章で一文も金はとれないといふ結果となる。從つていよ〳〵妻が見はなしたら餓死よりしかたがないといふことになる。オスカア・ワイルドもこの近所のジヤコブで餓死したが、餓死した人間の數は天才の數より多い。それゆゑにたゞ餓死した事だけでは天才の證據にならない。天才をもたぬ人間の書く文章位世の中で無用の長物はあるまい。人生には無用の長物はかぎりなくある。併

しその無用の長物のうちから眞に有用なものを發見し出すところに人間の天才といふものがある。妻の今日の生活にとつてはわたしの生活は明らかに無用の長物だ。何をさせてもわたしには妻の間にあはないのだ。それに反して色男めの方は何の間にでもあふ。まづ第一に男妾の資格がある。それから長い間旅役者をしてゐた男だから、妻がこれからやらうとしてゐるモンマルトルの料理屋へ出てやるおどりの類をつくつたり衣裳をこしらへたりすることに至極、間に合ふ。のみならず博覧會へ料理屋を出して金を五六萬フランもうけてゐるから當分の衣食にはさしつかへがない。もつとつきつめて云ふと、妻はこの男の才能を發見して、この男と同棲することに、凡ゆる人生の幸福を發見しつゝある最中だ。それゆゑこの男から遠ざかることが妻にとつては生命の次に一番大變なことゝなる。それにはわたしの生存が妻には最も邪魔となる。どうかしてわたしからデバラツスしようとする努力はやがてどうかして色男めと離れずにゐようとする努力なのだ。おどりを覺えることもモンマルトルの料理屋へ出ようとすることもすべて色男めへの心中立からだ。さう考へて來ると、わたしも本當に妻を愛するならば、どうかして妻の幸福の爲めに妻の最も邪魔になるものをとり除いてやらなければならないことになる。云ひかれればどこかの山奥か谷底か森の中かへ行つて人知れず自殺してやらなければならないことになるわけだ。北海道の父親はわたしの地面を賣ることが父親自身の首を父親自身でしめることになるといふことをいつてよこした。さうしてわたしの文章が金にならないで餓死しても恐らくもう一文だつてわたしに送つてよこす氣づかひはあるまい。父親はわたしを見殺しにできる。妻はわたしに自殺をうながす。友人は面白がつてわたしの生活をながめてゐる。さうして金をかりにやると返事もよこしてくれない。まア、まア、併しこれが本當の人生と云ふところなのだ。このほかには人生といふところがあるわけのものではないのだから、わたしは彼等をにくまない。さうでもしなければ彼等は自分達の幸福がたもてないやうにつきつめて考へてゐるのだから、できるだけわたし

は彼等の要求を入れてやりたいと思ふ。さうして死ねるものならどうかして死んでやりたいと思つてゐる。併しわたしにはまだ不幸にしてそれだけの社會道德的熱情が出て來ない。さうしたファナチツクになりきれない。從つてかうして未練らしくグズ〳〵に生きのこつてゐる。自殺のできる人はまつたくエライ。乃木大將はエライ。ハラキリは本當に日本人の最大美德だ。わたしのやうな日本人のつらよごしはあるまい。腰ぬけ、憶病者、人道の敵、寄生蟲、うじむし、ゲジ〳〵、凡ゆる人間の屑を罵る言語をあびせかけてもわたしの社會的不道德を攻擊するにはまだ足るまい。

* * *

わたしもいつまでこんなひがみといやみと皮肉とこの淺薄な無趣味なたゞがみ〳〵した調子の、いかにも物ほしさうな心境にゐたくはない。さうして一日も早くそんな醜痛からのがれ出て、本當の「詩」と稱する「美」と稱するやさしい清らかな愛らしい又雄渾な崇高な埃及や印度やバビロニア以來唱はれ描かれ刻まれ踊られ考へられ組み立てられた今日で云はゞ大ブルジョアの南歐に於ける別莊生活のやうな心境に這入りたいと希望してやまない。さうしてバルザツクのやうなシエキスピーアのやうなダンテのやうなさうした大詩人と同樣な域までこぎつけたいものと憧憬してやまない。併し又一面から考へると、そんな下らぬ事を思へばこそ、そんな大まかな粗つぽい幼稚なアブストラクションが頭のシンからぬけきらないために、かう變にいぢけて、馬鹿正直にひがんだりすねたりいやみをならべたりしなければならなくなつてゐるのかも知れない。と同樣にこの小論理癖がわたしをしてどうしても惡趣味世界から脫却させてくれないのだ。

* * *

——九月二十日。

——九月二十一日。

きのふは金がなくなつたので、又舟橋さんがゐなかつたので、フラ〳〵とダヴイウーへゆく。一階目の梯子段をのぼりはじめると、子供がコンシエルジの部屋からとび出して來て、いきなり手をにぎる。

——イヽ公、今コンシエルジのとこでお飯をたべかけてゐるところよ。

——さうか。そりやいゝ。たべておいで。

——ウン、たべて來る。

子供は又コンシエルジの部屋へ引返した。子供をコンシエルジへあづけて、妻と色男めとは出て行つたんだナと思ひながら、鍵をもつてるので四階の戸をあけると、お召の日本服を着た妻が、十二分に化粧して、丁度色男めと共に出かけるところだつた。

——何しに來たの? と、例のいま〳〵しさうに云ふ。

——飯をたべに來たのさ。それから金が一文もなくなつたからもらひに來たんだ。

——たべるものなんぞ何にもないよ。わたし達はこれから博覽會へたべにゆくところだよ。茶目はあとで皆と一緒に博覽會へ來るさうだ。

——何もなくたつていゝ。そばがあるからあれで澤山だ。

そんな問答してるところへ色男めが出て來て例のけむたさうな顔しながら、

——ぢや、そばをすぐこしらへてさしあげませう。と、いそ〳〵と臺所へ行つた。

——かういふ髮にしたんだけれど、をかしかないでせう？と、妻は鏡へ顔をうつしながら、箱へ入れ毛をしたおかつぱさんのやうな新發明のコワツフエをてれかくしにわたしに見せる。

公々然と亭主を無視して妻がこれから色男めと二人づれで意氣揚々と出て行く姿のいゝわるいが無視されてる亭主に品評できるものかできぬものかそんな事は一切おかまひましに云ひ得るところが妻の身上だ。

子供があがつて來る。

——マルセルが早く來いと云つてるからすぐ行くんだ。ブーロンニユでお祭りのお馬にのせてくれると云ふんだ。

——下で何をたべた？　と妻がきく。

——いろんなものをたべた。レーザンもたべた。これをパパ公にやらうと思つてもらつて來た。これはショコラぢやないよ。フロマージだ。グルイエールのフオンデユだ。

そばが出來たといふのでたべる。妻も、

——うまさうだからわたしも一口たべよう。と、わたしにおあいそをするやうに、小さな茶碗で一杯たべる。で、

——わたし達はでかけるわ。あんたまだゐるんでせう？

——さア、お湯に這入つて、ついでに晩飯も又そばを愛でたべておから。

——お金あげるわ。と紙入れをあけて、百フランしきやないから、これをもつといでなさい。

——舟橋さんに銀貨百フランやらうと思つてゐるのだ。まア、それだけでもいゝ。

——さう、それぢや足りないね。と、寢臺へ引つこんでゐた色男めをよんで、

——あんたお金もつてゐる？舟橋さんに飯代をあげるんだといふから、と戶口へ行つて、二人でボソボソやると、や

がて五フラン十フランとりまぜて五十フランもつて來る。

――これだけあつたらいゝでせう？

――飯代の外は煙草代だけありやいゝんだ。これぢや多すぎる。

――さう〳〵、イヽちやん、お小づかひがいるね。と云つて、そのうちの十フランをとり、子供の手ににぎらせながら。

――これを下へもつて行つて、お馬にのるおぜゞだから、マルセルにわたしておいで。

子供は十フランの札をふりまはしながら降りてゆく。

――それぢや、でかけるわ。

と二人は出て行つて了つた。ピシヤンと戸をしめると、二人は顏を見あはせて、やれやれといふ表情をかはしたであらう。

しばらくすると、子供が一人であがつて來た。

――綺麗な外套を着て來いと云つたから出して。といふ。

寢室へ這入つてアルモアルをあけると、綠色のマントがあつたので、それをきせてやる。

――コンシエルジがパパ公はかはいさうだと云つてたよ。と、本年四才と九ケ月になる子供が云ふのだ

わたしの眼には思はず淚がにじみ出た。

――ママ公がばかだからだよ。といふと、

――ママ公はバカぢやない。とたしなめるやうに子供がいふ。

——ママ公はバカぢやない。お利口だ。馬鹿なのはパパ公だよ。と云ひかへると、

——パパ公もバカぢやない。と子供はキッパリ云ふ。

——ぢや、△△さんがバカか。

——△△さんはメシヤンだ。

子供心にもよほどわたしがみじめに感じられたと見えて、いろ／＼な話をして、下へ行かうとしない。

——マルセルが待つてるんだらう。早くお馬へのりに行つてお出で。と云ふと、一人出いて行くのを氣の毒さうにして出て行つた。

……かうして子供と二人で遊ぶ機會もなくなつて行くのか。と思ふと、わたしは彼等にわかれて、出來ることなら勞働者になりと何なりとなつて、どこか一生彼等と顏をあはせずにすむ境涯をさがしに行きたい氣がした。さうしたら彼等二人はさぞかし肩の荷を卸したやうに思ふであらう。或はピストルでも買つて來て、彼等二人をうち殺し、罪人になつてやらうかとも考へた。併し子供一人が孤兒になる事を思ふと、母親はどうしても殺すわけにゆかないのだ。それにつけても、子供の顏だけはどうかして生きてる間は始終見てゐたい念が、なか／＼心の底から離れさうもない。

——やッぱりこのまゝ成りゆきにまかせるより仕方がない。と思ふ。

十月の末博覽會がすんだら、彼等御兩人は子供をつれて、きつとニースへでも行くであらう。さうしてそれを機會にわたしからテバラッスして了ふつもりでゐるであらう。さう考へると、その時がひよッとすると、この世の見をさめになるやうな氣がしきりにする。

——いや、そんな弱い氣を起してはいけない。何でもかまはぬから。書いて／＼書きまくらなければ、いけない。人

間が本當に一生懸命になつて自分一人の飯代ぐらゐかせげないことはなからう。死ぬ氣なら何だつてできない筈はない。弱音のでるのはまだ一生懸命になつてゐない證據だ。

そんな事をくりかへし／＼考へて、そこによみかけてあつた「世界を家として」をよんでゐるところへ、いつのまにか時間がたつたと見えて、子供がかへつて來た。

――イ、公ね、これからみんなとパヴイヨン・ジヤポネーへ行くんだから、着物をきかへさせて。といふ。

――さうかい。どんなきものを着てゆくの？

――ジヤポネーだ。

日曜なので博覽會に人出の多いところへ、妻は子供と二人日本服を着て、色男めのやつてる料理屋に景氣をつけるのだ。さうしてそれをコンシエルジ一家に見せたり又御馳走したりするんだなと思ふと、あんまりいゝ氣持はしなかつた。併しわたしに月千圓以上の收入がない以上妻は決してわたし一人を夫として穏しく納まつてゐる氣づかひはない。のみならず余裕ができればできるに從つてさま／＼な工夫をしては美しく着かざつて人中へ出ないではゐられぬやうな女にうまれついてゐるのだから、あゝした女を良妻賢母にする氣もなくしようとしてる自分の方がよつぽどまちがつてゐる事にすぐ氣がついて、女にさういふ事を望む小ブルジョア根性が、今度は自分ながらウンザリした。

八時ぢかくなつても子供がかへつて來ないので、そばをこしらへ、たべると、表へ出て了つた。さうしてフオリー・ベルジエールへ行つてはだか踊りを見て、一時ごろかへつてねた。

＊
＊＊

――九月二十二日。

――九月二十三日。

二十一日の夜は舟橋さんにつれられて、いつもゆくボン・ロワイヤルの角のキャフヱへゆくと、そこの常連であるところの飛行大尉や領事さんや又舟橋さんも同じ番地に住む一人のマダム達がバスチルのそばのリユ・ド・ラペーといふ小さな町のバル・ブスクラで面白いダンスがあるからそれを見に行くのだと騷いでゐた。舟橋さんはわたしともう一人舟橋さんところへ來てゐた生物學の留學生とを人々に紹介してその仲間へ入れてもらふ事になつた。何でも女郎屋の休日だとかで、その女郎達が踊るんだと云つたが、行つて見れば何の變哲もない安價な踊り場にすぎなかつた。一度踊るごとに二十五文づゝ拂ふといふ。領事さんの言によると、これが本當のありのまゝなる佛蘭西人の生活ださうな。併しわたしのやうなダンスに一向興味のない外國人には、かうしたありのまゝはサッパリ面白くなかつた。それでもかうしてフランス人達と一緒に夜ふけてから未知のカルチヱへ遠征なんぞに行つたのは始めてだつたので、それだけはいゝ事をしたと思つた。

*
* *

わたしには舟橋さんのやうにはまだとても自由自在にフランス語が話せないから、人々の面白をかしく語り合ふのをまじ〳〵と默つてきいてゐるのだが、それにしても耳が一向進歩しないので、話題や大體の話の筋途だけはわかるが、一々細かなところはどうもわからない。前後通じて二年半にもなるのだが、これでは仕方がない。もつと密接にフランス人と交際しなければ駄目にきまつてゐるけれど、妻にさへ打ちとけては碌々話しも出來ぬやうに生まれついてゐる極

端にテイミツドな性質のため、それが思ふにまかせぬのだ。つまり本當に氣の合つた人とでないと、わたしは進んで話をする氣にならない人間なのだ。今のところこの世の中で進んで話のできるのは四才九ケ月の自分の子供とだけだ。それからまづ妻だけれど、この妻がかうした際なんだから、こちらでいくら打ちとけても、妻の方で何もかも話しにくい關係にある。それゆゑ子供を除いては廣い天地にわたしには本當の話相手といふものがない。わたしに若しフランスの若い女が關係してくれたら、わたしのフランス語はきつと上達するであらう。併し子供の外に話相手のできぬやうなわたしに、どうしてそんなフランスの女が關係してくれるであらう。全く不可能のことだ。それゆゑ會話としてのフランス語はわたしには到底見込みがないといふ事になる。

* * *

領事さんはいろ〳〵お話をしてゐたが、文學のことになると、自分はフランシス・カルコを知つてると云つた。さうしてカルコの書くものは詩的すぎると評してゐた。

——ピエル・ベノアは？　と舟橋さんがきくと、トレ・ビヤン・トレ・ビヤンと何をきつては、しきりに首をふつて答へた。さうして自分は小說家の中では、バルザックとスチヴンソンが一番いゝと思ふと附加へた。領事さんは普通のフランス人なのであらう。

* * *

きのふは夕刻から又妻のところへ行つた。さうして珍らしく「親子三人」で夕飯をたべてかへつた。

――とにかく曲りなりにもだん〳〵目的へ近づいて行く。と、モンマルトルへ出る着物をぬぎながら云つた。

――一日も早く大金持の集まるところへ顔をさらすことだ。さうしてブツからなければいけない。とわたしは答へた。

妻は頷いてゐた。

そこへ色男めが博覧會から歸つて來た。と、妻の態度がすぐ變る。併しそれは女の本性として變るのだ。妻は果してわたしを欺いてゐるのであらうか？たゞしはその色男めを欺いてゐるのであらうか？ かうして双方をあやつつてゆくところに妻の生活があるのだ。さうして恐らく妻が愛し得られる相手は子供だけであらう。或は彼女自身だけかも知れない。

又十六番へ乗つて、ブルヴールへ行き「カリヨン」で「ジーグフリードの死」を見てかへる。このワグネル物の活動寫眞は立派なものであつた。「女の虚僞のために汝は汝の最も忠實なるものを殺した。」とグルテン王に向つてグルンヒルドが哄笑する場面には、ひどくうたれた。

* * *

――九月二十四日。

「カメオ」でギヨーム・テルを見る。シルレルの原作は讀んだことはないが、一生のうちに一度は讀む機會がありさうな氣がしないが、急に見たくなつたものだ。先夜のワグネルが面白かつたので、それにひかされたわけだ。有名な林檎の場面は涙が出た。「殿様は子供をお持ちにならぬからお存じないも無理はありませんが、どうか父親の心をお察し下さい

ルがゲスラーの脚にすがつて歎願すると、子供が父に向つて「おとうさん、あんなメシヤンな人に頭をさげるのはおよし。」とけなげに云ひ放つた。そこで涙が出たのだ。さうしてわたしは心の底で、メシヤンな一切に對しては決して頭をさげまいと思つた。寫眞は古いものらしく又うつし方も上手ではなかつたが、スヰスの實景とテルに扮した役者がよかつた。さうして機會があつたら、自分の子供にテルの話をして、キヤトル・キヤントンの湖水へつれてつてやりたいものと思つた。妻は色男めをふみ落とし、モンマルトルへ踊りに出て、それから色男めに料理屋を出させ、金もうけをして、この世に於ける充分に榮華な生活をしたいと熱望してゐるのだ。さうしたら子供も又わたしもきつと幸福になると信じてゐるらしい。今日のやうな世の中では、妻の考にもまつたく一理ある。何物かを賣らなければ生活のできぬ世の中だ。それには××××××ことが一番近道だ。併しそれには又人間の過去現在未來にわたる道徳をすてなければならぬ。道徳をすてゝ人は果して幸福かどうか？ 妻の考は果して妻自身の良心に對してやましくない道徳にもとづいてゐるものかどうか？ 良心などゝいふものよりも目前の物慾に捉はれて生きる方が人間らしいといふ妻自身の確信からやつてゐるものとすれば、それもたしかに一箇の道徳に相違ない。わたしは妻子の傍にゐる事が無論幸福であるに相違ないけれど、かうして寂しい生活の中で周圍にさまたげられずにほしいまゝ物が考へられることをば決して不幸とは考へてゐないのだ。寂しいのは肉が寂しいのだ。肉の寂しささへたえさへすれば、あとは妻子と同棲してゐるよりは幸福にも考へ得られる。活動から歸へるとロスタンのシラノを讀む。大學時代英語で一度よみかけたものだが、そのまゝになつてゐたものを、今度は佛語の原文でよむ事になつたわけだ。思はず第一幕をよみをはる。歐羅巴の文藝は十四年の大戰前に十九世紀のはじめ以來發展したそれが爛熟しきつたものだ。シラノはたしかにその芳醇な成果の一つだ。それゆゑにこれも過去の產物としてクラシックの中へ數へられるものだと思ふ。二十世紀はまだ若い。それゆゑから

した爛熟した藝術は決して味へない。文藝は食物と同じくそれなしには人間が生きられぬものとすると、熟さぬ食物ばかりたべてもゐられぬと同樣に、かうした熟したものもたべずにはゐられぬと考へる。デカルトのメトードにも一寸手をつけて見る。これは十七世紀のはじめに生まれた食物だ。中世のスコラ哲學に迷はされて方針を失ひ、さうしてデカルト自身から發足した哲學を立てる氣になつたものだ。デカルトは數學に立てこもることになつたが、人生の一切に迷つてかく根本的に方針を失つて了つてゐるわたしは果して何物の城廓中に立てこもつたらいゝのであらう。

デカルトは確實性から離れずに一生を送ることができた。わたしは果して確實性を失ひきつてしまつたものなのであらうか？金より外にこの世の中に確實性を有するものがないのであらうか？世の中の大部分の人はみんなさう考へてゐる。わたしだとてお多分にもれてゐるわけではないが、さうしてそれゆゑに妻の云ひなり放題になつてはゐるのだが、わたくしは心の底から金以外に確實性の存在を信じないのであらうか？わたしはこれからそれをつきつめて考へて見たいと思つてゐる。

＊
＊　＊

――九月二十五日。

野菜と汁と鹽鯖とクルヴエツトで舟橋さんと二人ひるめしをたべはじめたところへトントンと入口の戸をたゝく。あけると妻だ。

――けふは買物に行つて、かへりによつたところよ。おなかがすいてたまらない。さつそく飯がいたゞきたいといふ。

に…へはダビウーで大騒ぎだつたさうな。何でも小森さんと一緒に西班牙のサン・セバスチアンへ行く筈であつたオペラのダンサーズなるブルガ嬢が急に前金がもらへなければゆくのがいやだと云ひ出したのださうだ。サン・セバスチアンの方へは女優と二人で日に七百フランで承諾の返事を出してしまつたので、若しブルガ嬢が行かないのなら、是非妻に行つてくれと嘆願したわけだ。ところが來週に妻が何とかいふ有名な活動寫眞製作者と約束して、マックス・リンダーとマックスデアリーがやるヤスール・シエ・マキシムに各國人の出るところがあるから、それへ妻を使つて見たいとその人が云ひ出したので、その試寫をやらなければならぬので、一寸巴里は離れられない、と妻はことわつた。小森さんがガツカリしてしまつた。そこでブルガ嬢に前金千三百フラン貸すことにして、けふ午後七時小森さんを立たせることになつたといふ。それにモンマルトルはシヤ・ノアルの横の文士や藝術家のよく行く小さなキヤフエで二階へ踊りをやる料理屋を出させてくれさうな話になつてゐるところでもあるのださうな。

――茶目は？ときくと、

――買物に出たんだから、コンシエルジへ頼んで來た。といふ。

要するに色男めの生活を中心として、一切をこの鼻息からわり出しつゝある妻の行動だ。それほどまでにしなければ所謂獨立の生活ができないと考へるところが面白い。もつとも妻のやり口ではさうやる方が自然だらう。小森さんと同行して日に三百五十フランもうけるよりは、その色男めと二人で二人自身の生活を營む方が急務にちがいない。又その色男めも一人では到底料理屋を出すだけの力がない。妻が顔を出さなければ到底ものにはならないのだ。さういふ風に考へると、その色男めの鼻毛をよむ方がたしかに妻としては利益に相違はない。舟橋さんと二人でダヴイウーへ行く。ピアニストと小森さんとがまつてゐた。

――パパ！と云つて子供がとんで出て來た。

越後獅子の踊りの稽古がはじまる。わたしは子供をつれてボアへ遊びに行つた。六時半頃かへつたが誰もゐない。そこで二人で夕飯をたべようとするところへ、色男めと妻と舟橋さんがかへつて來た。寫眞屋へ寫眞のうつしなほしにゆき、それから料理屋をやらせてくれるとかいふキヤフエへよつて來たのだといふ。みんなで鬪ちりをして夕飯をたべる。子供をねかしつけると、わたしは舟橋さんと二人でかへる。

* * *

金がないといふことは不思議な生活を表現してゆくものだ。花賣りに出ようといふ大原女の扮裝してうつした寫眞や又舞妓の姿した妻のそれを見ると、はなはだ悲哀の感を催す。これが日本で子供服の宣傳してゐた時の妻かと思ふと、人間といふものは境遇でずゐぶんあくどく趣味が變つて了ふものだと思ふ。殊に子供の寫眞を見ると、一層かなしくなる。さうしてこの趣味の源泉はみんなその色男めの心身の反映としきや考へられぬ。殖民地の旅役者の趣味だ。妻はどうせかまはしないとしても、子供だけはさうした影響から脫却させたいと思ふ。が、幸にして妻だつて若しモンマルルでもまれるやうになつたら思ひきつて田舍くさいニユーアンスからは自然とのがれでるやうになるであらう。さうして色男めの惡影響をばできるだけ子供に感染させる事を防ぎ得るやうになるであらう。すべてに於いて全く無能力なわたしはたゞ〳〵指をくはへてその日の來るのをだまつて待つより仕方がないのだ。

* * *

コンミユニズムの何物かもわからず、又文藝のいかなるものかも解せず、浪花節と十年前の歐羅巴の寄席藝人趣味だけを發揮したものを目前にまきちらされるのはさすがに助からぬと思ふ。併し何事も食ふためだと考へると、この資本主義の下層社會がまつたくのろはしくなる。

※
＊＊

――九月二十六日。

午後ケーをぶら／＼あるき、リユー・ド・セーヌから折れて、セナちかくまでゆく。一冊二十五文としてある古本の並べてある店の前に立ちどまつて、その二十五文のところだけ見る。ジユール・クラルシイのマンサルドといふのがあつたので買ふ。オデオンの外廊下を一周して新刊本やリユツクス本の裝幀を見る。又クラシカといふクラシツクの叢書から四冊ばかり撰り出して買ふ。オデオンではけふサフオをやる廣告が出てゐた。大學にゐた時、中西屋で買つた英譯本が面白くて、それを譯す氣になつたものだ。それから七八年たつてとう／＼一冊の本にすることができたが、語學が充分でないのと、フランスが皆目まだ初歩すぎたのとで、一頁に二三箇所づゝも誤譯のあるものであつた。フランスといふ國、殊に巴里といふ都會の何物であるかといふ概念を與へられた本だ。さうして文士や藝術家の生活がこの本によつてあまり好もしくなくなると同時にかうした小說の出る國が羨ましくも思へた。その後又十年ちかくたつて、本物の巴里へ來たが、語學の勉强のため、まづこの本を擇み、いかに自分の飜譯が誤譯だらけであつたかといふ事をたしかめたものだ。そんな思ひ出があるので、この芝居は一度は見たいものと思つてゐる。併し今日一文なしの身分で芝居どころでないとも思ひかへしたり、又それほどの紀念があつて、見たところで要するにそれだけの話だとも思つたり、とにか

くまだこの芝居とわたし自身の心とが充分に熟した因縁がつくられぬものと見えて、結局その前を通りすぎると見たくもなんともなくなつてしまつたわけだ。サン・ジエルマンへ出て又本屋の前へ立ちどまり、同じクラシカ本をジエラノル・ド・ネルヴルを二冊買ふ。これは辻潤がラプソデイア・ボヘミアナといふ隨筆の冒頭で書きはじめてゐた著者だ。その隨筆は麹町九丁目時代の辻潤がわたしの家にゐた時の事を書いたものだが、さう云つた因縁で一度よみたいと思つてゐる本なのだ。ネルヴルは首をくゝつて死んだ文士だ。女房に裏切られた辻潤の運命と首でもくゝりたいと思ふ辻の心持とにスツカリ共鳴した爲に買ふ氣になつたものであらう。歸つてねる。七時に夕飯をたべに舟橋さん方へ行く。お客をするのだとかで牛肉と野菜を澤山買ひ込んであつたが、お客さんが來ないので、二人ではじめようとスキ燒にかゝるところへヒヨツコリわたしの妻が這入つて來た。先日ケー・サン・ミツシエルへ浮世繪をかりに行つたが（妻は大原女や遊女の姿をそれで研究したものだ。）それを返しに行かうと思つたが家がわからなくて來たといふ。さうして三人で夕飯をたべた。子供はときくと、けふは晝も晩もコンシエルジのところでたべたといふ。モンマルトルでフラース・ピギヤルに一軒小さなブテツクがあいたので、そこで色男めは支那料理を出さうかと云つてるさうだ。さうして若しそれができるやうになれば、妻は近所へアトリエを借り色男めとは別居し子供と二人きりで住み毎晩踊り場へ働きに出るのだといふ。さうしたら子供と二人位の事なら食つてゆけるだらうなどゝ云つてゐた。すべてその時〱の感情でものを云ふのだからあしたは又どんな事を云ひだすかわからないが、いづれにしても今のまゝでは長つゞきできぬにはきまつてゐる。しきりにみんな別々に働くのだと云つてゐるが、それが實現される日の來る事をわたしは望んでやまない。が、モンマルトルへ出るやうになつたら、妻は又必ず新しいパトロンをさがし出すであらう。さうしてなけなしの色男めの金はしぼらずに依然として色男めは色男めとして可愛がりつゞけてやり得るやうになるであらう。その間に立つ子供が可

愛さうだが、それを可愛さうでなくするためには、要するにわたしが金をとるやうにならなければだめだ。さうしてこんな日記ばかりつけてゐるやうではいつまでたつてもウダツのあがりツこはない。なぜわたしは金をとるために奮發する氣になれないのであらうか？　ヌーヴエル・リテレールを見ると、ダニエル・デフオーの事が書いてあつた。デフオが金に困つた時、ロビンソン・クルソーができたとある。舟橋さんと二人で妻をテユイレリのメトロまで送つて行つてかへる。妻はわたしにはもう直接口をきかない。すべて舟橋さんへ向つて云ふのだ。考へて見ると、今の妻とわたしとの間には到底普通の言語で交渉し得る何物も存在しない特殊の心理狀態が構成されてゐるからだ。妻にもわたしにも子供の事をのぞいてはお互に口をきく氣になれないのだ。わたしは長い間話相手を求めた結果、三萬圓のアブクゼニのおかげで妻と一緒になつたが、アブクゼニが消え失せると、話相手をも同時に失つて了つたわけだ。さうして子供だけが殘ること丶なつた。ストリントベルヒにもまだかうした皮肉は見當らぬやうだが、これを書いて文藝にできなければ文士としての生命は全くない。谷崎の「愛すればこそ」がエリセーフの佛譯となつて出た。谷崎も妻に裏切られてこれを書いたのだ。谷崎は常識にとんでゐるからあんなにしたがつてゐる洋行をせずにゐるが、それにも拘らずその著作は國境を越えてゐる。わたしは二度も洋行して書く文章は日本でさへ一文にもならぬ。さうしてそれがために妻にあいそをつかされることにをはつた。人生とはいろ〳〵なものだ。

* * *

——九月二十七日。

五時すぎに妻が舟橋さんのところへ來たがけふも子供をつれて來ない。やつぱりコンシエルジとどこかへ遊びに行つ

たんださうな、子供ももう母親のあとを追はなくなつたものと見える。子供よりは色男めのことが氣になつてならない證據だ。すべてが自然だ。金やおしろひの匂ばかりで人生をごまかさうとする心は現在の子供にだつて愉快を與へないのだ。子供はあたゝかい心の方へ傾くものだ。コンシエルジの家の方がよつぽど感じがいゝと思へばこそ母親と一緒にゐたがらなくなつたのだ。妻は悧口でチヨコサイだが、もうすこしあたゝかみがあると思つてゐた。目前の小利慾のほか全くわからなくなつて了つてはカラ價うちがない。けふも舟橋さんとわたしとを伴つてビギヤルへ支那料理をやらうといふ家を見に行つたが、ソワ／＼して色男めのところへばかりいそぐ樣子がいかにも物あはれでならなかつた。爰に金の一萬圓もあればあゝしたガツ／＼した妻の心を滅却させることができるだらう。さう思ふものゝ過去五年間の經驗に徴すると、それはやはり貧乏性に生まれついた妻の氣の毒な性格の一面であるらしい。モンマルトルでもまれもまれたあげくでなくては落ちついた本當の母親らしい心持が出て來ないであらう。クレマン・ヴオテル氏のところへ召使として働きたい由を書いて出す氣になつた。けふのモンフイルムがスツカリ氣に入つたからなのだ。いづれそのうちには自分の飯代は自分でかせがなくてはならなくなるだらうから、どうせプロレタリアになるなら、さうして婢僕の職業をするより仕方がないのなら、すこしでも心持のわかるところで働きたいと思つたからなのだ。

* * *

九月二十八日。

深草の少將を思ひだす。舟橋さんはけふ四時ごろブルジエへいくといふ日本の飛行家を迎へにゆく。一緒にメトロへのり、マルバフでわかれる。わたしはきのう妻の買つた朝鮮團扇を屆けに行つたものだ。おどりのうちに布ざらしにつ

かふ例の長い絹の柄にするのだ。けふは色男めはもう出かけたあとで、妻は子供とさし向ひで、シユーフラーで日本流の米のめしをたべてゐた。色男めがゐないと、妻はわたしに對して、それほどいやな顏もしないのだ。六時ごろまで子供に子供雜誌フイエットに出てゐる繪入おとぎ話しをしてきかす。子供は音樂とそれから話をきくことが一番すきだ。フランスの子供雜誌は日本のなどゝは大變におとなツぽいもので、その中の說明の文章が外國人にとつてはフランスの、内生活を研究するのに甚だ有益にできてゐる。さすがは世界一の文藝國だと讀んできかせるたびごとにしみ〲感心する。もちろん今日のこの國を支配してゐる小ブルジヨア主義にみち〱てゐるものだが、まつたくよく熟したくだものを味ふやうな氣持がする。主義としてはプチイ・ブルジヨアジイはむしろ敵としなければならぬものだけれど、主義は子供に强ふべきものでないと思ふ。もちろん主義はそれが正しいと信ずるかぎり子供のうちから陶冶しなければならぬものであらうけれど、人間の生活はどうしても人間の考へだした主義よりはもつともつと根ぶかいものゝやうにも思ふ。それゆゑ社會の實相にできるだけ近い話の數々は子供は喜んで耳をかたむけてきく。子供には生活の實相が直覺的に一番よくひゞく。なんだかだと云つても人間は生物學的の約束に從つてミリユーに順應して動いてゆくものだ。「境遇は人格をつくる」とはマルクスの言ださうだが、かうしたおとぎ話はいかに今日のこの國の子供がこの國現在の生活に順應しなければならぬかといふことをしきりにほのめかしつゝ話が選ばれてゐる。そこをうれしく思ふ。妻はきものをきかへて出て行く。夕飯までにかへるかどうかわからぬから、もしかへらなかつたら子供と二人でたべてくれ、などゝ云つて出たが、むろん色男めと二人例の博覽會のレストランでたべるにきまつてゐる。子供はボアへ行くといふセルツオをもつて二人でゞかける。六時半なのでミユエットにはもう人影もない。それでも三十分ばかり二人して草の上をかけまはつてかへつた。コンシエルジがセーヌの川魚を子供に見せて、すきかときく。子供は又コンシエルジのところ

でたべるといふ。コンシエルジの娘さんで妻のアパルトへ働きに來てゐるジエルーメンが、

――けふは上でたべなさい。それでないとパパが一人でさむしいから。と云ひきかしてゐた。

子供をのこして一人部屋へかへり夕飯の支度をしてゐると、やがてコンシエルジの息子が、子供をつれて、川魚のフライとマカルニをすこし持つてあがつて來た。夕飯後、蓄音機をかけて二人してきく。そのうちに子供はねむくなる。一緒に床の中にはいつて、桃太郎、カチ〱山、舌きり雀などをくりかへしくりかへし話させる。わたしの養母も養父も無教育の人で又話しべたな人達であつたからわたしは養父からおとぎばなしをきいたおぼえがない。それゆゑ桃太郎でもカチ〱山でも充分に頭の中へはいつてゐない。いゝ加減にこしらへて話すのだ。それでも子供は滿足して何べんも〱話させる。ゲーテの母やモーパッサンの母を羨ましく思ふ。さうした母親にこの子供を教育させたいものだなどゝ思ふ充分に學識があつて、本當の母性愛にめざめて、人間として一番高い思想をもつた母親に育てられた人が一番この世の中で尊いと思ふ。妻は果してさういふ母親であらうか？子供に對してさういふ母親達にまけないほどの眞の母性愛に充實してゐる女であらうか？さうでないとわたしには云ひきれぬ。さうであれかしとわたしは熱望してやまない。十時すぎて妻は一人でかへつて來た。子供がねたのですぐにかへらうとすると、外套にコテをかけてくれるといふ。又そこらのホコロビをぬつてくれたりする。

――寒くなつたからこの外套ではいけない。と妻が云ふ。わたしの外套はこの四月に財政學の學生の金でわれ〱一家がニースからベルンへ出る途中イタリヤのミラノで學生がわたしに買つてくれたものだ。その學生は二月から四月にかけてわれ〱一家のために費消した金額四千五百圓の證書と、それから、北海道の地所をそれが爲に處分してもいい證書をまで書かし、實印まで預つて日本へかへつたが、その後どうしたかまだ音沙汰がない。

——この雨外套は冬だつてかまはない。ボロかくしにはこれで澤山だ。寒さは下へあついシャツが澤山あるからそれをきればいゝ。たゞズボンだけもしかへたら一つ買ひたいものと思つてゐる。とわたしは答へた。

——五十フラン位であつたらおかひなさいそのズボンはあんまり見ともない。

このズボンはその學生の夏服のそれだ。ニースでわたしのからだにあわせて修繕したものだ。

——買へたら買はう。

——冬外套はいくらするだらう？

——百五十フランも出せば古着であるだらうが、なアにこれで澤山だよ。

——外套をきたまんま寢ころびなさるなよ。と、外套にコテをあてながら妻がいふ。

——なアにそんなことはしないが、夜さむいので毛布の上へかけるのだ。

——毛布は澤山あるから一枚今夜持つてお出なさい。

——電車へのるのに邪魔だからナ。

——なあに小さく包んだら大した荷物にはなりやしない。もつてお出なさい。

——妻の修繕してくれた外套をきて、毛布の包みをもつて十一時半ごろ妻の家を出た。

すべてが食ふためだと思ふ、食ふためであればこそだと思ふ。われ／＼親子三人はわたしにその衣食住を保證し得る定收入ができぬかぎり、當分のうちはどうしても××××××しなければ食へぬのだ。さう考へると、妻の行動は決して色戀ばかりのためではない。さうしていよ／＼となつて子供をすてるか夫をすてるかといふ際には、もちろん夫をすてるのがあたりまへだ。色男めと同棲したいためばかりでかうしてゐるわけではない。さう考へるそばから、なアに、この位の程度でわたしを鎭靜させて置いて、子供のねたあとで、××××××××××××××のだ。などゝいふ念がムラ／＼と心に浮ぶと、わたしのやうな腰ぬけは實際世の中にはめつたにない。どうしてこの屈辱を復讐

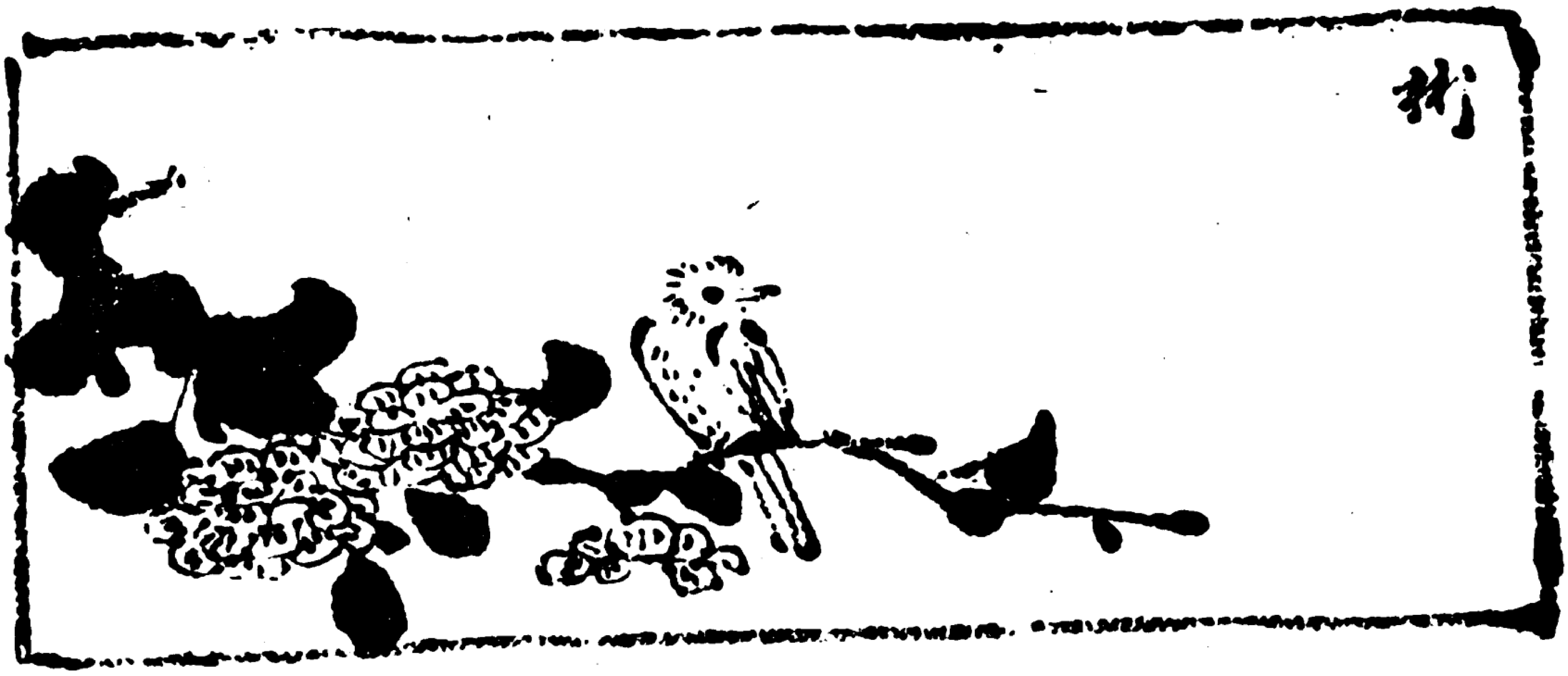
してやらうかと考へる。わたしはもう一年間そんな事ばかり考へつゞけて來た。さうしてこれからさきまだ何年こんな事ばかり考へなければならぬのであらう？傑作だ。傑作だ。さうして一躍して全世界の大家となり、一日も早くこの屈辱から脱却しなければならぬと思ふ。さうしてさう思ふわたしの頭は人並はづれたカラッポなダラシのないものだ。とすると、のたれ死にだ。のたれ死にだ。まづ、それよりほかにわたしの身には將來決してのぞまれる筈のものではないのだ。さうしてそんな考も二十年まへから心の底から離れぬのだ。二十歳の時からわたしは×××犯してどうしてもその關係からのがれることができなかつたのだ。わたしは運命を信じない。けれどもわたしの一生はファタリテでばかりつくりあげられて來てゐるのだ。かうしてわたしもまた一切の生物と共に自然と枯死しなければならぬ時が來て枯死するだけの話なのだ。これが生物としての運命なら致しかたはない。生か死か。さうして生死の問題を根本的に忘却したところに人間自身の余計な五欲煩惱がある。わたしにはもう何もわからない。何も信じられない。ただ腹がすいては食を乞ひ、寒暑に接しては衣服を乞ひ、その日／＼の走屎行尿だけが問題になつてゐるばかりだ。さうして妻子を思ふことは依然として深刻になつてゆくばかりだ。できるだけ妻子に勝手な生活をさせたければこそアダルテリイ位何とも思つてゐないのだ。それほどまでにしてわたしは妻を愛することのできる男なのだ。妻にはそれがわからない筈はないのだが、そんな徹底的の愛情はあまりに人間ばなれがして到底面白をかしい男女の享樂にはならぬから、そこで普通の人間なる色男めをば××××××××にしなければならないといふ事になつたのかも知れない。何となればわたしには××になるだけの本質も技巧も全くもちあわせぬからだ。これがウソいつはりのない人間ありのまゝの生活なのだ。さうしてこのほかにわたしには生活はないのだ。何と云ふ人生であらう？

＊
＊＊

——九月二十九日。

…………………………

(終)



養子

瀧井孝作

ひるすぎの二時頃、叔父の一行五人は、玄關より上つた。叔母、繁二郎、叔父の得意先の娘でおしなちやんと、モ一人女の人と、この客は、座敷にすわると緣側に迄ハミ出た。

客は、軒に掛つた小鳥籠をうち仰いで「何の鳥や」「うちらに居つたのと一つや」「キンパラや」「そや〳〵」とこんな風に、客はそれにやゝ面白がつた。一向無藝の小鳥のキンパラは啼き方もヘタに低い奴だ。

自分は、毎日受身の弱つた氣分でゐた折柄で、五人の客に、矢張ギゴチナイ應對だつた。叔父叔母二人、龍川の紅葉狩のついでに寄るやうなしらせで心用意はあつた。が、叔父叔母の他は心づもりの外であつた。それを直ちに自分は奈何すると云ふことはなく、五人の客に、心持は只曳ズラした。

「叔母さん先日はいろ〳〵」と、自分の妻は、先日寶塚にいつた折の禮を云つた。

「はい」叔母はうなづいた。寶塚は、築地小劇場の芝居にいつたが叔父が其日の入

川をオゴッた。
自分は體は抜きであつた。心では思つても言葉で云へば際立つ様に思はれて、六ケ敷く、あとより云ふ體は何時でも得云出さぬ男だつた。
叔母は
「高山から昨日來た栗、おすそ分け」と、一と鍬澁皮のとれた栗をくれた。また、手提袋の中より取出された、小籠にはその茹栗はあり「高山の栗は甘い、おりん、あんた一ツ」というた。叔父は亦「こゝらの栗はソクマセに煮、やつとくへるが、高山の栗は鹽茹でけつこういける」とこんなに云つた。
その茹栗は國にて糅栗（ひぐり）と曰ふと憶ひ、自分は一ツ取つた。自分は「うまいぞ」と、妻の前にまた小籠はおいた。
自分の子のトシコは、晝寢の小布團の上で目醒、皆を見て、ボケ貌で這出た。ねをきにキゲンのよいトシコは、すぐに、彌（いや）叔父である繁二郎にだかれた。自分はそばの繁二郎に叔母に、肉身のへだてなき心持はあつた。
叔父は元大工だつた繁二郎の手造りの神棚を近頃まつり、そこで、春日神社の御札を受けに繁二郎をやつた。「大は、うちらのあれに入らんやろで中のお札を」と、繁二郎の背に曰ひかけた。それは「へい」と素直に出ていつた。
叔父はまた、此方の子供の土産に二圓くれた。繁二郎より女連の膝に移つたトシコは、女連の一括りの紅鬼灯は手に握り、抱かれて外にいつた。
叔父は奈良の自動車代の大阪とくらべて高いことをば不服の面で
「それだけのネウチがあれば文句はいはんが」といつた。自分は
「奈良は春、秋の書入れ時には、料理屋や車代は、ふだんより一様に高くなる様だ」といつた。

自分は何か話題と思ひ、モミヂは早紅いか尋ねると、叔父は大和に生れて龍田は初でと日ひ、叔母はうなづいて、箕面よりも木の古い、往來の堤、川、龍田の地理などを手眞似入れて語つた。二人は問はれるまゝに志貴山、龍田、法隆寺と見物した今日の道順を日つた。自分はこの話の跡で自分の先の盤においてある、鼻紙にくるんだ一枝のうす楓に心付くのだつた。盤に楓はおいてあるのを尋ねた自分は愚かだつた。

叔父は横たはり、「あすはどこぞに行くといふ其晩はいつも、えゝ眠れんくせで」と寢不足だつた。「少しお休みやしたら」と叔母。「否、他家へ來て寢たらいかん」と叔父。自分はその夫婦仲を見た。

叔父は大儀になつたがまたおきて、

「借りた隣りの二階はこんど目、返やす様な工合でナ、したの嫁ハンにお目出度が近づいたんで、明渡せと云はれ、否は云はれん、昨年隔ての壁を拔いて普請代はこつちで半分受取り、二階は元へ返やした」と、また「揃えたる道具はこつちの二階に運ぶやらナ、ぽツつり〳〵買ひ込んだ品が今ヨケあつて、小さい家は叶はん」

といつた。ふくれ上つた生活につれて叔父は其長屋住居に弱る風だつた。

叔父は、ブツ〳〵低く一寸分りにくい詞で、今に繁二郎の嫁取る時他は一軒近い所に家を持つ、そこにはまた別な商法の方針も立てると、こんなことを、叔母に向いては「お前は知らんが」などゝ一人言風に云出た。

「けど、僕は現在の家を死場所とキメて居る」と、叔父は此方に向いた。

自分は眞面目に首肯いた。兎も角やり上げた家だし、叔父の云ふこの詞に力があつて、それは手堅いやり方の心持だと思つた。

——自分は一年程前に、叔父のよい所が今頃分つたと思つた。叔父の腹にとりつけないであふと弱つた時代より見た

ら、今はさうではなく差向ひに迷惑にはならず、面白味を覺えて來たと思つた。これは、妻子を作り、苦い鹽もいくらかなめて、さう云ふ自分の心持の錬れたせいだと思つた。叔父は實世間で戰つて或る築き上げたものを持つて居た。一と口に云へば、昔くさい道德、義理人情の精神で、それはさう云つた所のものだつたが、自分はこの叔父よりその方の生きた學問をしたと思つた。

叔父は人に訴へたい心持があり、が自分は前にも背いたがこの日は只受身だつたし、また自分からさ程に話す方でなかつたから、叔父は不滿足に思つたゞらう。――

叔母と自分とは國の方の話題があつた。繁二郎の妹がしらせたといふ、土野の葬式。「お前は嫌つてた人やろ」と叔父は叔母に向ひたが、叔母の從姉に當る人で、此方も文通せなんだが死んだときけば寂しい。外より戻つた繁二郎はあとで自分に土野氏のことをつげた。「うん、叔母さんにきいた」「さう」と繁二郎は云つた。

茶の間の支度されると、そこに叔父はすぐに來た。

ハガキで……カシワ二百目程心配致置被下度、と叔父の云付けたカシワ鍋と、自分の妻が前日より何にせうと心用ひた手料理と、叔父は「手の付かぬ鮓一折、おりんお前にやろ」と取つておいた他に二折の肴と、さう云つたかざりけ拔きの食卓だつた。カシワは割に多くて叔父は「この鳥二百目でいつツもくれるなら大阪へ持つて行つて商賣になる」と笑つた。

子供をだいた女連は戻つた。子供は木の馬の玩具を手に持つた。おしたちやんは叔父に「店の前へ行つたら買つてくれつて、きかんので」と曰ひ、自分はトシコは未だそう物をねだらない子だが、これは女連の心用ひと思はれた。

トシコはお母さんの乳よりすぐにはなれてお客さんの方に附きたがり、多勢の賑ひにひきこまれてゐると思はれた

が、食卓のまはりあちこちして五月蠅い。と繁二郎は「どれ〳〵」と守役になるのだつた。

叔父は「繁二郎はいつも漬物ばかりたべる、貧乏性やで」と、さきに仕舞ふ子に云つた。叔父は二人の女児を見ては「正直者で子供の様な顔だが、これで婆さんやで僕のさかさまだナ」叔父は五十二だつた。女連は少食ですぐに食卓よりはなれた。

叔父は、例のブツ〳〵と低く「並大抵でない、こんなにお客をする様になつたん」こんな一人言は出た。又酔ふと己れの身の上自慢のくせで、それは聞とれない位のつぶやきだが、「……うちらは小さい家だが、なかはちやんとやつてあるで、僕の遺言状、この婆さんが一番よけとつて一萬圓、繁二郎が五千圓、他に……、拾一圓の家賃で月々の雑用は五百圓づゝかゝるで、尤も毎月旅へ商ひに出る費用もいれて、婆さんと四月は安藝の宮島へナ、七月は紀州の湯ノ崎へ入湯やつたナ……今年は不景氣ではや千圓くひこんだ……これで税金は何ぼ出してると思ふたつた七圓だ……」と脱税の自慢話まで出た。

自分はこの叔父の持つ可笑味（ユーモア）を見て居た。

叔父は「繁二郎も八月、九月、十月と之で三ツ月連れて旅に出て見たが、矢張埒あかんのでナ、僕は腹立つてなぐりつけたい様に思ふ時もある」といつた。何か彼の商用の失策の例を云つたがその例は他の話で途中から切れた。叔父は前にも書いた「別の一軒で何か商法をやり出す」と言ふ一人言も繰返へして、それにつけて子の役立たぬにはいら〳〵して居た。

「繁二郎に、君でも云つてくれなければ他に云ふ人はないで」と叔父が自分を見て云ひ出すと、叔母は「サア」といつた。

「婆さんはそれでいゝと思ふのか、そんな風ぢや内の婆さんがいかん」叔父はしつつこかつた。

子の出來ぬ叔母は三年前國の大工だつた甥の繁二郎をたつてと云つてもらつた。其時叔母は知らせを田端の方へよこして、叔父さんに立代つて旅に商ひに出られるか今の所分らぬが、人物が固いので第一番によい、と書いてゐた。自分は人物が固いと云つた叔母の手紙は良かつたので忘れない

自分は、叔母は「サア」と今云つたがあきらめてゐるわけでなくて、己れのたよる子を叔母は見抜いてゐる所があるんだらうと思つた。

自分の妻は熱い酒を持つて出た。

「もしそないにのんだらあかんて」と叔母は止めた。「鳥もモウ入れたらあかんて、鍋に殘るとあとは困るで」

「いえ、殘つてもかまいませんわ」妻は笑つた。

「そりや犬がたべるやろかいな」

叔母が笑うと、叔父はまた揶揄した。

「家のばさんみたいな猫きちがいはあるまいて、猫畜が子の樣に可愛がり『玉や、玉や、』て阿呆かいナ、自れのくふものえらくはんと猫にやりをる」

「そやかて畜生やかて、生き物だすが居れば可愛いが、貴方そないなこと云やはつて嫉妬(りんき)してなはる」

「何に嫉妬(りんき)、嫉妬やと、アハ、ハ、ハ、」叔父は體は捻れ、叔母の膝に崩れ相だつた。

「貴方そないにいやはつても相手は畜生や、そないにリンキせいでもよろし」

にぎやかな食卓になり、自分の妻まで、食事しながら何か云つて、輕くハシヤギだ。

叔父は、此方がいけぬので一人で醉つて、尙歸途何處かに立寄る樣なイヤガラセを見せたりしたが、漸としまひに「僕は、飯をたべたらもうあかん」とキチンと坐り直して飯三杯、芋とろ二椀、菜もぺろ〲美事にたべた。健啖家だ。叔父は食事がすむとすぐにもう歸ると云ひだした。

座敷へ移つた叔父は、札入れよりさつ一枚出して「あつちへ」と叔母の手に渡した。自分は「それはいらん」と云つたが、叔母は持つて行き、妻はもらつた樣子で座敷の方へ來た。

皆寄つて來て歸り支度だつた。自分は便所から戾つて來て、元の所に坐つた。客は賑やかに立上つた。と、叔父は繁二郎をにらんで

「何だ、サア〲つて何だ、繁二郎はそれだからいかん、お父さんもうお歸りになりますか、と云ふ所だ、サア〲とは何だ、旅先でも、いつもかうで僕は腹が立つんだ」

叔父は再び坐つて「僕は他へ行くで、おみたちだけ、歸れ」と、意地惡るく云つた。

みんなはまた下に坐つた。叔母、女連二人、自分と妻そんな中で、繁二郎は眞向から打たれて居る樣な男に見えた。自分ならカーツと仕さうに思はれた。よく辛抱すると思はれた。叔母もしほれた。

「僕は他へ行くで、おみ達だけ歸れ」叔父は動かぬのだつた、叔父は悄々しかつた。

この日弱い氣分だつた自分は、その時、軒に掛つた薄暮の小鳥籠をうち仰いで、これを入れてやれ、と妻に云はふと思つたが、一座の白けた氣分と凡そ似合はぬ樣で、それは云ふのを止めた。

叔父は自分を見て「その家でおこつた事だから、君が裁いてくれ」と云つた。自分は取成しせうと思つた時だつた。繁二郎は背後(うしろ)の自分に、手は私かに動かしてある笑顔で、それは弱い氣持から酒のせいの樣にとつて、取成を賴んだ。

自分は叔父の眞正面に出ていつて何か云はうと思つたが、其も際立つので、居た儘、叔父に向いて「繁二郎君も惡氣で云つたのではない。にぎやかな皆につられたわけで、今日はこらへて下さい」つづいて繁二郎に「平生の氣構えが丁としないから、さう云はれるんだ、心構えに自分で氣を附ける樣に」といつた。自分は恥かしく稍堅くなつた。

叔父は

「そんなら君は、今後、繁二郎の保證するか」と、手强く云つた。

自分は一寸だまつて暫時して

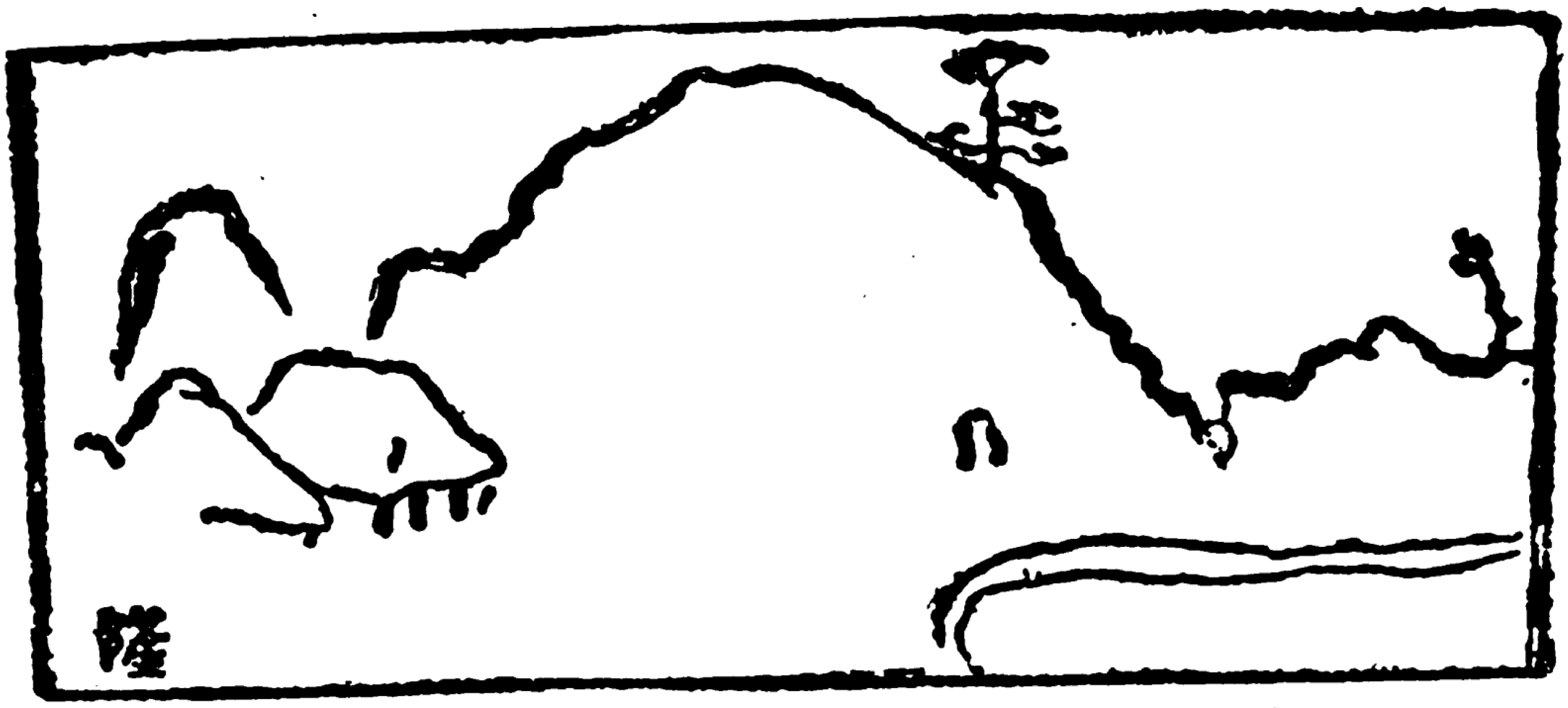
「保證する」と答て、叔父の顔をにらんだ。

「それでい、ア、、それでさつぱりした、ぢやア歸らうか」と、叔父はにつこりして云つた。

皆、寂しい乍ら和らいだ。叔父は皆を引連れて立つた。皆の心持は繁二郎はいたわられた。

自分は、叔父は繁二郎の用向でやつて來たのだと思つた。そんならもつとうまく云つたら宜かつたと思つた。從弟は人が善いが、人の善い計りで能のない、ヘタすると太皷持の樣な人間になるかも分らないと思つた。彼んなになつてもいけんと、自分は知合の大阪の、人の善いばかりの馬鹿な男〇〇クンを憶ひ合せた。

(十四年十一月)



赤い靈魂

倉田百三

くれなゐの魂の旗たてにけり
この條の上ぞ奥津城どころ

第一部

人物

博士　大學教授
令孃
家政母
青年　その息(後に靈魂の旗手)
N子　タイピストの女、金澤の私生兒
勞働運動指導者
女工
金澤　鑛業家　富豪

少年　その息
教授Ａ
教授Ｂ
助教授
教授Ｂ夫人

時　現代
處　地方の都會Ｆ市

第一場

（博士の家の一室。ヴエランダ。芝生のある庭。樹かげにベンチ。鉾杉の並木にくぎられてテニスコート（見えず）横手令嬢の部屋から石段を下りた處に樫の木一本。五月の晴れた午後。）

（令嬢、白の洋裝。卓に就き、本をめくりつゝノートに書き抜きする。）

令嬢。ロセツチのは熱い。燃えるやうだ。「爾自らを報酬となしたまへ」（考へる。再びつゞける。）深い淵のやうな魂から出る嘆き――アウグスチヌスは苦しんでゐたのだ。（又書き抜く）だがテレシヤのが一番惠まれてゐる。靜かな夕空のやうだ。もつと集めてみやう。

家政母。（登場）何をやつてゐます。お研究（しごと）は？

令嬢。祈りの言葉を集めてゐます。昔から今までの――

家政母。いゝお仕事です。

令嬢。いろ／＼な文獻から――聖徒や、詩人や、農夫や、男のも女のも…………

家政母。みんな一つのものを求めてゐるのです……いろ／＼の仕方で――いゝものになりますやうに。

令嬢。身を入れてやつてみませう。學校を出てからの最初の仕事として……まとめたあとで私の論文をつけませう。

家政母。發表なさい。

令嬢。いゝえ。私はそんな事はちつとも考へてゐません。仕事は自分だけの樂しみです。

家政母。發表なさい。プブリクームを待ちなさい。私は安心し度い。あなたの初めての仕事の發表を見て。私の肩が輕

ろくなるでせう。

令嬢。（首をたれる。）

家政母。（考へ乍ら）私はあなたを御預りして來た。私の心配や樂しみが今果を結ぶ――

令嬢。（熱心に）さうなれますやうに。母は私の爲に宗教に就いてこんなに豐かな文庫を殘して呉れました。私がこの仕事を思ひついたのも………

家政母。お母さんはきつとお悦びになる。（勵ますやうに）お母さんはまた强い方でもあつた。

令嬢お聞きしやうと思つてゐました。母はジャン・ダークが好きでしたか。藏書の中に傳記が澤山あります。

家政母。さうです。（指ざす）そのためあの樫の木の下に座つて御祈りするくせがあつた程です。（間）その頃あの樫の木はまだ若かつた。

令嬢。（沈默）劍を持つて鬪ふ事が信仰と調和するだらうか。………私にはよくつかめない。母の氣持ちが――

家政母。あの方には烈しいところがあつた。

令嬢。でも私には解る。私はお母さんの血をうけてゐる。私はそれを應へねばならぬ。劍と血とは神様がお嫌ひになる。何處までも愛――憎みはいらない。

（裏のテニスコートで球を打つ音）

家政母。誰ですか。

令嬢。父とあの方（面を赧らめる。）

家政母。（微笑する）倅が來てゐるのですか。

令嬢。ええ、さつきから。あなたが金澤さんへいらしてお留守の間に。

家政母。啊は仕合は世者です。先生に愛されて。金澤さんが今晩お見えになります。それで仕度をしなければなりません。

令嬢。金澤さんが？

家政母。金澤さんは今度大學に理化學の研究所を寄附しました。先生が大變悦んでゐられる。

令嬢。お手傳ひ致しませう。

家政母。いゝえN子さんに賴みませう。お客は先生のお友達二三方と金澤さんの親子きりです（退場）

令嬢。（暫くじつと考へる。やがて再び書き拔きをはじめる。）奥には奥がある。魂が掘つて行つた溝の深さ――

（N子一束のタイプライトした紙を持つて登場。）

N子。先生は？

令嬢。テニスコート

N子。やつと打てた。學會の講演の草稿――わたしの手は痺れた。朝からぶつ續けに打つた。綺麗に出來上つた紙束が今私の手にある。これを先生にお目にかけやう。（行きかける。）

令嬢。あとになさい。父は今に歸ります。少し話しませんか。

N子。（機械的に眼をかける。傍白。）わたしの手は痺れてゐる。

令嬢（傍白）五月だ。鉄砲百合が匂ふて來る。この人はふらんねるを着てよく似合ふ。

N子。（傍白）わたしは悲しい。

令孃。（傍白）今の球はあの人が打つたのだ。

N子。（傍白）わたしは淋しい。外がもつと暗ければいゝ。

令孃。タイプライティングはむづかしいの？

N子。いゝえ。

令孃。わたしに敎へて下さい。

N子。どうなさるんです。

令孃。なんでも習つて置きたいのです。タイプライティングでもミシンでも——

N子。お止しなさい。

令孃。わたしは縫へる。わたしの部屋の窓掛けの飾りを。クションの縁とりを——タイプライティングを敎へて下さい。

N子。（微笑する）お止しなさい。指がかたくなります。

令孃。わたしは習ひたい。わたしは働く事に慣れてゆきたい。

N子。（皮肉に）眞似事はお止しなさい。これはしなくてはならない者がするものです。

令孃。（傷ついて）あなたの言葉には刺がある。わたしはあなたが好きだ。けれどこれだけはいけない。わたしはやさしくあなたを叱ります。

N子。わたしはひねくれてゐる。

令孃。なぜです。わたしにだけは素直にして下さい。わたしの心は解つてゐて下さる筈です。

N子。ごめんなさい。わたしはひねくれてゐる。出來るだけわたしは素直にしてゐる……あなたには。でも長い間に出來た癖なんです。

令孃。(親しさうに側に寄る。)なほして下さい。その癖を。お願ひです。そしたら私たちは一等お友達になれるんです。

N子。(首を振る)なか〳〵癒りはしません。

令孃。わたしたちの力では。でも出來るかも知れない。きつと出來る。あの力でなら。日向に雪が溶けるやうに、あなたの魂の意固地なところを直すことが——

N子。あなたは信仰の事を言つてゐる。さうでせう?

令孃。(うなづく)恵みの力は——

N子。(さへぎる)わたしの魂は曲げられた。海邊の松が風に曲るやうに。あなたにはとても解らない。一朝一夕に出來た癖ではない。(悲しさうに)今日迄わたしはどうして暮して來た? いばらの中を通つた。暗い谷の底を。臭いどぶの邊りを……

令孃。それをわたしに話して下さい。

N子。話しますまい。あなたのために—— それをお聞きになつたら、あなたは生きて行かれなくお成りでせう。今のやうに快活には。

令孃。暗の中にこそ光がさす。(ノートを開らく。)わたしは昔からの祈りの言葉を集めてゐる。暗い惱んだ魂たちが叫んでゐる。光を求めてゐる。(讀みかける。)

N子。（手をあげる）わたしは拒みます。あなたの御親切を。あなたの心は解つて居る。あなたはわたしに信仰の空氣を吹き込まうとしてゐる。わたしはそれが我慢が出來なくなりさうです。

令孃。…………

N子。わたしが固意地なのかも知れない。でもさうばかりとは思へません。

令孃。え〻。え〻。それはわたしの力が足りないからです。

N子。（涙ぐむ）唯我儘なN子として可愛いがつて下さい。でなければ寧ろ唯のタイピストの女として――　あなたのお父さんに雇はれてゐる………

令孃。（動搖して）妹のやうに………何かの狂ひでいびつになつた妹のやうに――

N子。タイプライティング一つ習ふのにもわたしにはどれだけの事だつたか。一生懸命の生きる道だつた！　打つ事は生きる事――

令孃。（沈默）

N子。わたしは苦しい。あなたがよくして下さるから。わたしは二つの心持の使ひ分けをしなければなりません。あなたはわたしをお嫌やにおなりでせう。その一つの心持をあなたが知つたら。

令孃。い〻え決して！　わたしは掴んでゐます――あなたの本質を。それは貴いものです。

N子。わたしはお暇を願ひませうか。二重の心持に板挾みになるのは苦しい………

令孃。いけません。N子さん。わたしの家にいらして下さい。いつ迄も……　わたしの心はあなたに引き付けられる。それをあなたは知つてゐる。さあ話して下さい。その二重の心持と仰つしやるのは？

N子。申しませう。心の内で嘘をついてるよりましでせうから。一つはあなたの愛に對する心からの感謝。然しも一つはあなた方に對する一般的な憎み――　わたしは申しませう。何もかも――　わたしは憎みを持つてゐる。わたしを雇つてゐて下さる先生に對してさへも！　わたしを裁いて下さい。でもこれは本當です。

令嬢。どういふ憎みですか？

N子。階級の憎しみです。あなた方の階級の不正に對する憎しみです。

令嬢。階級の不正？　それがわたしの不正なんですつて？　わたしは何時その階級に屬したんでせう？　何時わたしの自由意志で――　わたしの身に覺えのない事です。

N子。覺えがなくても事實そうなんです。

令嬢。わたしよく呑み込めません。わたしは人間同志としてあなたに對してゐます。その他になにも知りません。

N子。それを知らないでゐると言ふ事がもう不正なんです。澤山な人達の苦しみに關はりを持つてゐないんです。冷淡なんです！

令嬢。冷淡？　わたしは本當に冷淡でせうか。

N子。わからないかも知れません……　わたしもそうでした。三年前にある一人の人に會ふ迄は。その人がわたしに何を憎むべきかを教へて呉れました。それ迄はわたしはあんなに苦しんでゐ乍ら、何がわたしたちを苦しめる敵であるかを知らなかつた。

令嬢。その人は誰ですか。あなたに憎みを教へた人は。

N子。わたしの恩人です。虐げられた人達の爲に命を捧げて働いてゐる人です。

令孃。なぜ憎まなければならないのでせう。なぜ總てを愛してはならないのでせう。

N子。それは虚僞だからです。憎む事が出來なくなつた愛は死んだ愛です。

令孃。いゝえ憎みの交らない愛こそ本當の愛です。そのうへ惠みは愛や憎みよりももつと高い――

N子。(進る)わたしは夢みる事は嫌ひです。わたしはそれを捨てました。

令孃。(沈默)朝を待ちませう。ですけれどあなたわたしの家を出て行つてはいやですよ。N子さん。

N子。(うなづく)

令孃。お約束して戴けて？

N子。(考へながら)えゝ。ですけれどわたしを感化しやうとする事だけはよして下さい。

令孃。感化？わたしそんなおせつかいは致しません。唯ある見えない力が働いてあなたにある變化が起る事を望んでゐるだけです。

N子。わたしはそんな力を信じません。それがいやなんです。

令孃。でもあなたはわたしが神樣にお祈りする事をお止めになる事は出來ますまい。

N子。(考へて)それはあなたの自由です。それにあなたにある變化が起るやうに願つてゐるのはわたしだつて同じです。

令孃。よくつてよ。わたしたちをお憎みになつてもかまはない。いつまでもわたしの家にいらつしやい。金澤さんのお子さんが來ました。

N子。(心もち靑くなる)

(少年庭から登場)

少年。テニスをしませんか。彼の人はどこです。
令嬢。裏のコート。父とやつてゐます。
少年。僕彼の人にスペクトラムの實驗を敎はるんだ。先生の部屋の機械で。
令嬢。さうですか。
少年。お父さんが今晩來るんでせう。
令嬢。えゝいらつしやいます。
N子。(突然顔色を變へて立ち上る)
令嬢。もつとお話しなさい――どうしました?
N子。(無意識に腰を下ろす)
令嬢。何か話しておあげなさい。あなたの小さい崇拜者に。
N子。(かすかに震ひ乍ら)金澤さんはこの家に來た事があるんですか。
令嬢。いゝえ一度も。今度大學に理化學研究所を寄附しました。その御禮の心持で父が今晩お招きしたんです。
N子。先生は……それを感謝してお受けになりました?勿論――
令嬢。えゝ隨分喜こんでゐます。大變研究の助けになります。
N子。(沈默)
家政母。(ドアを開けて顔を出す。令嬢に)一寸いらしつて下さい。今晩の御相談があります。
(令嬢退場)

(二人沈默)

少年。(悲しさうに)僕コートへ行かう。(行きかける)

N子。(突然)お待ちなさい。わたしも一緒に行きますから(庭に下りる)

少年。(嬉しさうに)二人で組んで先生たちと仕合しませう。

N子。やりませう。

少年。あなたのきつい球には彼の人だつて參つてゐる――

N子。(素早く少し離れた木蔭のベンチを見付けて)此處にいらつしやい。

少年。(並んで掛ける)

N子。あなたに少しお聞きしたい事があるのよ。よくつて。

少年。えゝなんでも。

N子。あなたのお父さんはいつも何していらつしやいます。

少年。しよつちゆうせわしく家にゐる事は少いんです。

N子。お母さんとお父さんとは仲がよくつて。

少年。(苦しさうに沈默)

N子。いやでせう。こんな事を聞いて。でも應へて下すつて?

少年。えゝあなたにはなんでも言ひます。お父さんはお母さんを餘り可愛がりません。それに大抵留守なんです。お母さんは可愛相です。

N子。あなたは一人きりでしたね。

少年。えゝ。

N子。（躊躇して後）あなたは思はない？若し姉弟（きやうだい）があつたらとは……――

少年。よく思ひます。でもつまらない。そんな事ないんだから。

N子。若しあるとしたら。

少年。（N子の顔を見る）なぜそんな事を仰つしやいます？

N子。いいえ、けれどもわたしたちが姉弟のやうに仲よくしたらいゝでせう。

少年。（うれしさうに）えゝ。

N子。（涙ぐむ。少年の手を握る）

（沈默）

N子。あなたはお父さんを愛しますか。

少年。えゝそして父は僕を隨分可愛がります。

N子。でもあなたのお父さんは隨分ひどい事をなさいます。それに惡い遊びを――

少年。それは言はないで下さい。僕だけは可愛がつて呉れます。惡くても僕のお父さんです。

N子。（少年の手をはなす）わたしはあなたのお父さんは嫌ひです。

少年。（固くなつて沈默）

N子。（激しく）わたしはあの人を憎んでゐます。輕蔑してゐます。あの人が自分の子供を可愛がるなんてそれは嘘で

す。

少年。でも僕だけは本當に可愛がります。

N子。他人からむしり取つて積み上げた金を讓るものが要るから

少年。でも父は色々な慈善事業によく寄附します。

N子。ふん。狡いやり方！　こゝの先生迄虜にしてゐる。

少年。（涙ぐむ）なぜあなたはそんなに惡く言ふんです、僕の父を。僕の前で。いくらあなたでも—あなたにまるで怒つて了ふんだ。僕の父の事にさへすれば。

N子。…………

少年。僕はなぐつてやるんだが。惡口を言ふものがあなたでなかつたら。

N子。（ぢつと少年の日にやけた顔を見る。次第に和らいだ樣子になる。）御免なさい。あなたはお父さんとは別ですもの。

少年。もう言はないで下さい。父の事は。あなたに關係した事ぢやないぢやありませんか。

N子。（責める）えゝ。えゝ。わたしに關係した事ぢやありません。

少年。そんなに變にしないで下さい。お願ひだから。

N子。えゝ。もうよくつてよ。テニスをしに行きませう。

少年。（勇んで）先生達をやつつけてやりませう。

N子。（獨語のやうに）そうだ。うんとやつつけて——わたしの鋭い復讐の球が防げるかどうか見てゐるがいゝ。（少年の肩に手を懸けてテニスコートの方へ退場）

（令孃と家政母話し乍ら登場）

家政母。それがわたしに解つてゐないとお思ひになつて。

令孃。（少し甘えるやうに）わたしだつて──學校へ上る迄あなたをママちやんとお呼びしてゐたんですもの。

家政母。（やさしく）わたしは考へてゐる事がある。おなかの中で。

令孃。（首を垂れる）

家政母。わたしは幸せです、あなたたちを信じてゐる事が出來るから。（間）わたしは困る……N子さんにこの家にゐて貰ふ事は。

令孃。あの人はいゝ人です。正直な人です。

家政母。わたしは困る。あの人はこの家と調和しない。シリヤスな意味で惡い結果になるだらう。

令孃。そんな事はありません。わたしあの方が好きです。父も氣に入つてゐます。

家政母。利巧で役に立つから。だがあの人には反抗心がある──敵意が。わたしは恐ろしい。それに觸れるのはいやです。

令孃。わたしは引き付けられる。あの人のその點に。あの人の本質が純粹な爲です。それにわたしたちの信仰はなんと言ふ力のないものでせう。若しあの人を受け入れて同化する事が出來ないとしたら。

家政母。危險なものを飼つて置くやうな事にならないでせうか。わたしは長い間預つて來たこの家の平和を大事にしたい。それにわたしには氣にかゝる事がある。あの人と金澤さんのお子さんとの間は──

令孃。信じていゝと思ひます。

家政母。（頭を振る）若し清いものをスポイルさせるやうだつたら――

令孃。わたしが責任を持ちます。わたしにはよく解るのです。あの人の心の働き方が――

家政母。もつとよく考へてみませう。ですがわたしはこの意見については少し頑固ですから――

令孃。わたしも同じです。お父さんが歸つていらつしやいました。

家政母。（退場）

博士。（汗を拭き〳〵歸つてくる）さんざんやられた。若いものにはかなはない。はゝゝゝ。（ヴェランダに上り椅子に腰掛ける）いゝ氣持だ。

令孃。いゝお天氣が續きます。

博士。裏の籔で鶯が鳴いてゐた。

令孃。南の國は違ひます。空の色も空氣の薫りも――T市ではとてもこれ程穩かではありません。

博士。F市はいゝ所だ。松林と不知火――こゝでみつちりと學問をやりたい。（ポケットからタイプライトした草稿を出して目を通す）

令孃。今年の學會では何の講演をなさいます。

博士。光の干渉と星の測度に就いてだ。お前の仕事は大分はかどつたかね。

令孃。えゝ。この頃はそれで夢中です。

博士。うんとやるがいゝ。信仰でも學問でも魂を打ち込んで精進する時めぐまれる。わしは昨日も星を觀測し乍ら思つた。わたしたちの魂は言はゞレンズのやうなもんだ。天から來る光を通すやうにいつも氣を付けて磨かねばならな

い。聖人の魂は屈折率の高いレンズだ。

令嬢。色々な人の祈りを見ますとその人たちの魂がどの高さ迄昇つてゐるかゞよく解ります。これ以上の祈りはもうあるまいと思ふ。するともつと深いのが又あるのです。

博士。さうだ。眞理の海には限りはない。段々深く鉛を下ろす——

令嬢。わたし聖書からこう言ふ言葉を見付けました「海の深所も神の住家なり。山の頂も亦神のものなり」——

博士。山の頂も亦神のものなり——實にいゝ。敬虔だ。魂を清く高くするんだ。そこからは天の星が近い。

令嬢。山の上の嵐——孤獨な魂が雷の中で神に祈つてゐる……わたしはさういふ所を何時も夢みるのです

博士。（令嬢の顔を見る）わたしはあれの事を思ふ——お前のお母さんの事を。スウイスの山のホテルでひどい嵐に遭つた事があつた。その時あれは少しも驚かないで窓から稲妻のする谷を見てゐた。

（間）

令嬢。お父さんはお淋しくはないのですか。

博士。わしには學問がある。それにお前がゐて呉れるからな——お前は當分こちらにゐて呉れるのだつたね。

令嬢。えゝ。ずつとお側にゐますわ。

博士。T市に行つて見たくはないか。今イタリーのオペラが來てゐるやうだね。

令嬢。別に行つて見たいとは思ひません。こゝで——お母さんからのこして貰つた部屋で靜かに勉強したく思ひます。こゝは氣に入つてゐるのですから。

博士。（微笑する）それがいゝ。お前は幸福さうに見える。わしは滿足だ。やりかけた仕事をしやう。（退場）

令孃。（椅子から離れて、空を仰ぐ。やがて庭に下りる。芝生の上を何か空想し乍ら歩く。横手の櫻の木の下に行き、氣が付いたやうに立止まり、櫻の木を見上げる。數秒間沈默。やがて櫻の木の下に坐る。考へに耽る。）

（間）

青年。（上着を脫いだシャツの儘ラケットを持つて歸つて來る。令孃の姿を認め靜かに近づく。）

令孃。（氣が付かずに考へ込んでゐる。）

青年。そんな所で何をしてゐるんです。

令孃。なんでもありません。（赤くなる）わたし本當はジャン・ダークの事を思つてゐましたの。

青年。さうですか。だがあなたはジャン・ダークとはどうも似てゐないやうだ。（芝生の上に腰を下ろす。）

令孃。どうして？

青年。あなたはもつと靜かです。

令孃。わたしには劇しいところがないと思つて。

青年。さうではない。だがジャン・ダークには敵と言ふものが目安にあり、劍を持つて立つたんだから。あなたは惱みと言ふものを認めない筈だつた。もつと明るい惠まれた心を持つてゐるのでせう。

令孃。（うなづく。）本當はわたし素直にしてゐれば自然に明るくなるんです。どうして鋭く、暗くならなければならないのだか——どうもぴつたり解りません。

青年。あなたは明るくてゐらつしやい。

令孃。どういふものでせう。わたしはさつきジャン・ダークのことを考へやうと思つても、いつかテレシヤのことを思つ

てゐるんです……あなたがいらした時わたしが何を考へてゐたと思つて。

青年。さあ。わかりません。

令孃。わたしが死んだら薔薇の雨を降らせよう——わたしテレシヤのそう言つた言葉を考へてゐました。

青年。それはすばらしい。空想もそこ迄行けばこの世離れがしてゐる。

令孃。空想でせうか。

青年。空想ですね。少くとも夢だ。僕のやうに科學をやつてるものなどには猶更です。

令孃。でもわたし夢と實際との境目をそんなにはつきりとさせたくは御座いません。それにわたしにはこの世界がそう見えるのですもの。

青年。（ある感じを罩めて）それでいゝ。僕だつて薔薇の花であなたをうづめたい氣がするんだ。今の僕たちがそれだけの事を空想する事が許されなかつたら、この世界はあんまり貧弱過ぎるだらう。

令孃。心をきれいにして惡いものや、みにくいものを考へないやうにしてゐれば、この世界が明るくなるのではないでせうか。

青年。そうです。僕は窮屈な考へ方をするのはいやだ。僕は貧乏だがいぢけたくない。暗い研究室で、一口分光器をいぢつて暮してゐるが、人が晴やかに暮してゐるのを見るのは嬉れしい。

令孃。だけどあなたは神樣をお信じにならないのでせう。

青年。僕は信じません。プリズムで何千萬哩離れた空の星から來る光を分析して見る。するとそのスペクトラムの性質で、その星にどんな物質が存在するかを知る事が出來る。僕はその時嚴粛な氣がする。人間の理性の神祕を驚ろ

く。それ以上僕は別に神祕なものを假定しなくても滿ち足りるのです。

令孃。わたしそれがあき足りません。それでいつ迄も淋しくならないものでせうか。

青年。先きの事は解りません。だが事實僕は現在淋しいとは思ひません。（燃えるやうに令孃を見る）僕は充分に幸福です。あなたはそうではないのですか。

令孃（伏目になる）わたしも幸福で御座いますわ……だけどわたしはそれを惠みだと思ひたいのです。

青年。あなたはそれでいゝ。多分あなたの魂が僕のより高尚なのでせう。僕はもつと實質的な性質です。ずつと貧乏して來たんですから。惠みと言ふものを感じるにしても、あなたよりもつとサブスタンシャルなものになるでせう

令孃。パンの苦しみを知らないのがわたしの一番ひけ目です。わたしの家はつましく暮しては來たんですが――わたしはどんなにそれを負ひ目に感じるでせう。だけど自分でその苦しみを避けて來た譯ぢやないんです。わたしが氣が付いた時にはもうそうして育つて來てゐたんです。

青年。その通りです。そんなに氣にするには及びません。わたしは寧ろ物質の事で汚れずに清く育つて來たあなたを祝福します。

令孃。みにくいものの影でわたしの心を少しでも曇らせたくない――出來ますならそれがわたしの願ひです。

（間。）

青年。どうなるんでせう。僕たちの運命は。

令孃。………

青年。僕は暗い事は考へられない。又そんな譯もないんだ。今は五月だ。空も地も明るい――

令嬢。明るく、清く、——神様にお任せして……

青年。（ラケットを突いて立ち上る。）僕は生命の喜びを受け入れよう。のびのびと生きるんだ。あなたはいぢけないで、それこそ薔薇の雨を降らす事でも考へてゐて下さい。

令嬢。えゝ。だけどわたしN子さんの顔を見てゐると心がおしつけられるのです。青年。僕はN子さんと隨分議論しました。僕は彼の人の物の見方には不贊成です。純な人だがいぢけてゐる。僕に向けてはN子さんだつて貧乏の味を知らないとは言へないでせう。道を歩いていぢけた花を見つけたら人の心は暗くなる。N子さんはそう言ふんだ。

（近くの屋根から白い鳩が飛んで來て二人の側に下りる。）

令嬢。決心した鳩……わたしはいつ迄も鳩で居りませう。（鳩を抱き上げる。）だけど若しも鳩がどんな穢れにもその羽根を染めず、自分を殺すものの手の中でも淸らかな目付きをしてゐたら、誰も傷る事は出來ますまい。

青年。そうです。いざとなつた時には力を出しませう。だがいつもは平和に暮したいものです。

令嬢。（鳩を放つ）わたしの部屋へ行きませう。あなたに見せて上げるものがありますわ。

青年。なんですか。それは。

令嬢。まああとで。待つていらつしやい。

（二人令嬢の部屋に退場）

家政母。（登場）N子さんはゐませんか（ベランダ迄出る）N子さん。N子さん（つぶやく）今頃何をしてるんだらう。忙しいのに！（退場）

（N子と少年手をつないでコートから歸つて來る）

少年。僕くたびれちやつた。あんまりきつくやるんだもの。

N子。なんです。つまらない。さあベンチのとこ迄驅けつこよ。

少年。よし。

（二人一生懸命走る。少年の方が一歩先に着く。）

少年。どうだ。

N子。（ベンチに掛け、息をはづませ乍ら）あなたは男子だもの。

少年。（並んで掛ける）やあい。息を切らしてらあ。N子さん。

N子。（突然少年を抱く）N子さんと言はないで姉さんと仰つしやい。

少年。そう言つてもいゝの。（N子の腕の中で）姉さん。

N子。えゝ。えゝ。（少年の頭を撫でる。）あなたの髮はやはらかできれいだ（やがていら〳〵して立ち上り、少年を放す）さあ今度は向ふのヴエランダ迄。

少年。いやだよ。あなたは今日どうかしてるんだもの。

N子。どうもしてはゐませんよ。

少年。もうぢつとしてゐませうよ。今日はちつとも落着いて話して吳れないんだもの。僕の言ふ事をよく聞いて吳れないんだもの。

N子。（ベンチに掛ける。）落着いて話しませうね。なんでも仰しやいな。

少年。なんでも言つていゝの。

N子。えゝ。

少年。さつきの事はどう言ふ意味なの。

N子。なんですか。

少年。姉さんと言へと仰つしやるのは。

N子。あなたはわたしの弟だからですわ……そう思ひたいからですわ。

少年。僕はこれから本當にそう言ひますよ。僕は學校でも、いつでも姉さんの事を思つてゐる。

N子。わたしもあなたとお話しするのが一等好きですよ。

少年。今度僕の家へいらつしやらない？お父さんはゐませんよ。

N子。（眼を光らす。）あなたの家へ？えゝ行きますよ。わたしあなたの家の様子が知りたいんだから。

少年。どうして？

N子。あなたの廻りの事は何でも知りたいの。あなたなんでもかくさずに話して下さるんでしたね。

少年。姉さんには何んにもかくしません。

N子。（鋭く）秘密でも……あなたの家の？

少年。（やゝ躊躇しつゝ）えゝ。

N子。（再び少年を抱く）ねえ。あなたわたしの言ふ事聞いて呉れて？

少年。あなたの言ふ事だつたら何でも聞きます。

N子。本當ですか。

少年。（きつぱりと）えゝ。

N子。ぢやあなたは姉さんと一緒だつたら何處へでも行つて吳れて？

少年。（眼をまるくする）何處へ行くの。

N子。何處かへ旅行するの。二人きりで…………誰も來ない所へ。綺麗な川の流れてるところへ。

少年。僕行きたいんだけれど…………誰にも默つて？

N子。（頷く）えゝ。逃げ出すの

少年。…………

N子。いやですか。今と言ふ譯ぢやないの。いさと言ふ時が來た時…………

少年。…………

N子。いやなんですね！あなたは。

少年。（頭を振る。）

N子。わたしと逃げて下さつて？

少年。（うなづく。涙が落ちる。）

N子。（少年を引き寄せはげしく頰に接吻する。）

令孃。（部屋に登場。ちらと二人を見る。二人離れる。そつと机の上の本とノートとを取つて退場。）

少年。（立ち上る）今日は僕歸ります。

N子。そうを。
少年。歸つてよく考へてみます。胸が苦しくなつちやつて。
N子。今言つた事忘れてはいやですよ。
少年。(きつぱりと) えゝ。
(少年退場。N子ベンチに腰を掛け、ぢつと考へる。やがて立ち上り、落着かない樣子で庭をあちこち步く。)
令孃。(靜かに庭を廻つて登場。) N子さん。わたしあなたに話したいことが……
N子。…………
令孃。かけませう。
(二人ベンチに掛ける。沈默。)
令孃。率直に申します。あなたにですから。
N子。(うなづく)
令孃。あなたとあれとはどう言ふ間柄なんですの。金澤さんの息子さんと……
N子。…………
令孃。どうか彼の人を傷付けないで下さい。
N子。(青ざめる。唇が震へる。)
令孃。あなたのやうな方が……わたし本當に解りません。
N子。(吐き出すやうに) あれはわたしの弟です。わたしの腹ちがいの弟です。

令孃。…………

N子。わたしは金澤の私生兒です。

令孃。それは………それは本當の事ですか。

N子。本當です。今日までかくして居ました。金澤が十九年前に一人の女に手を付けて生せて、捨てたのです。

令孃。(青ざめる)なんと言ふ――

N子。驚きになるのは尤もです。然し動かしやうのない事實です。

令孃。それだつたら猶更――どうしてあなたはあの少年と……

N子。わたしが考へてゐる事はあなたなどに思ひも付かない事なんです。あなたは氣絶してお了ひになるでせう。

令孃。言つて下さい! かまひません。

N子。復讐です。弟によつて父に復讐する事です。

令孃。(立ち上る。)N子さん! それは――

N子。いゝえ。それはわたしの強い強い欲望です。わたしがF市へ來たのもその爲でした。憎む可き父に自分のした事の價を知らせてやる爲でした。

令孃。あなたの實のお父さんに……

N子。父はわたしの敵です。一番深い恨みのある――わたしと母とがどうして暮して來たか? 母がどうして死んだか? どんな罰を與へても過ぎる事はありません。

令孃。愛は――お父さんへの愛はおこらないのですか。

N子。わたしは父を見た事もないのです。一度もわたしを抱いて呉れた事もない父。（涙をこぼす）わたしの爲に一日も祈つて呉れた事もない――わたしの敎育の爲に一字も――數を數へる事さへも敎へて呉れた事のない父を愛しろと仰しやるのですか。わたしの母は父に捨てられてから困つた擧句わたしを連れ兒にしてあるコックと一緒になりました。それがわたしの父でした。亂暴な、淫らな、その獸のやうな男が！　それは母が金澤から貰つた手切れの金を少し許り持つてゐたからです。母はその男に一生涯ぶたれ續けて死にました。その間に繼子のわたしがどんな風にして育つたでせう。それでもその男は兎も角わたしを育てゝ呉れたのです。金澤よりかずつとましです。十三の年にわたしは或る曖昧屋へ奉公にやられました。勿論賣られたんです。或る一人の人がわたしを救ひ出して呉れる迄――わたしは闇の中に生きてゐました。わたしは父を憎みます。（手をあげる。）父に禍ひがありますやうに――

令孃。あゝ。あなたは自分のお父さんを呪ふのですか。

N子。長い間わたしが朝夕考へて來た事は何んだつたとお思ひになります？　それはどうして父に復讐しやうかと言ふ事でした。こちらへ來ればその機會があるかも知れない！　わたしはさう思つてF市へ來たのです。

令孃。なぜその人はあなたに愛を敎へないのでせう。

N子。不正を憎む心に燃えてゐるからです。何がわたしたちをこんなに虐げるのか？　その對象をはつきりと見拔いたからです。それは金澤がその眞先に立つてゐるあなた方の階級です。父はわたしには二重の敵です。今の世の中での正義――一つの大きな愛の爲には何物をも――親子の情實をも捨てねばなりません。憎みが何んでせう！　その愛を燃やす爲の油になるのなら。それは許されていゝ――

令孃。弟さんに何の罪があるのです。あの羊のやうな少年を犧牲にする權利はあなたにありません！

N子。彼の少年は——弟は可愛想なそなへものです。わたしは復讐の此上ない機會を摑みました。それは弟によつて父に復讐する事です。父は弟だけは盲目的に愛してゐます。わたしが弟に毒をつぎ込む。弟を墮落させる——若しも彼が自分の可愛い息子が獸のやうな罪に陷つて、それが解つて、心がづたづたに引き裂かれてゐるのを見たら……

令孃。（身顫ひする。）

N子。わたしはそれを思ふと喜びに顫へるのです。その時こそ父は自分の惡の償を知るでせう。

令孃。弟さんのその時の苦しみは一體なんの償なんですか？　N子さんそれを考へて下さい。

N子。それは……それはわたしにも解りません。

令孃。それは恐ろしい、恐ろしい事ではありませんか。

N子。恐ろしい事です。然し事實の力が仕方のない勢になつてゐるのです。わたしにとつては正義と復讐とは一つになつて燃えてゐるのです。

令孃。あなたは弟さんを可愛いとは思はないのですか。

N子。……

令孃。姉さんらしい心は起らないのですか。あの素直な清い少年を誰が愛さないものが居りませう。他人のわたしでさへも弟のやうな可愛いのです。それに親身の姉さんが……

N子。わたしは可愛いのです。あれを抱く時に清い清い姉弟の愛が湧き出るのです。今日もわたしはそれを感じました。あの子の丸い手を握つてゐる時わたしにはなんとも言へない悅びが……母のやうな心さへ——

令孃。N子さん、考へて下さい。それが本當の心です。あなたはそれを無理に裏切るのです。弟さんは素直な心であな

たに身をゆだねてゐる。するとあなたはあの子を抱き乍ら、心では恐ろしい事を考へてゐる——

N子。（顔を被ふ）

令孃。お願ひです。それだけはよして下さい。弟さんがそれを知つた時の無慈悲な苦しみを思つて御覽なさい。本當にそれは恐しい事です。

N子。わたしは……わたしは可愛い弟をそなへものにしやうと思つたのです。わたしたちの大きな戰ひの爲に。

令孃。たとひ弟さんをそなへものにする事が出來ても、あなたの魂をそなへものにする事は出來ません！　わたしが一番恐れるのはそれです。弟さんが絶望的に苦しんでゐるのを見た時に、あなたが御自分を支へる事が出來るでせうか？　とてもあなたのやうな方に出來る事ではありません。

N子。（すゝり泣き乍ら）どうすればいゝのです。わたしの位置に立つたとしたら。それをわたしに言つて下さい！

令孃。N子さん、わたしにはその力がありません。わたしはそれが解りました。あなたからお聞きした事はわたしの胸をかき破りました。わたしのやうに悩む事の少いものが、どうして今のあなたに力のある助言をする事が出來ませう。それは僭越な事です。あゝ、わたしは知らなかつた。あなたは今わたしには寄り付けない程に見える。あなたが通つて來られた大きな悩みの爲に尊く見える！

N子。わたしは父を許すことは出來ません。わたしの憎みを抑へる事は出來ません。

令孃。わたしはお赦しなさいと言ひたい。だがわたしに力がない！　わたしの足場がくづれた氣がする。N子さん唯わたしはあなたにお願ひします。訴へます。どうか弟さんを救つて下さい。罪のない魂を道具にする事だけは止して下さい。それは正しくない事です。それは今のわたしでもあなたと何處迄も爭ふ事のできる事です。

N子。……

令孃。あなたの姉らしい愛にかけて――あなたの魂の一番深い所にある愛に訴へて――わたしはあなたの前にひざまづきます。（ひざまづく。）

N子。（沈默。きつぱりと）止めませう！

令孃。ありがとう！N子さん。

N子。あゝ、然しわたしは武器をなくしました。唯一つの……

令孃。淸い武器を使つて下さい。

N子。わたしになんの力がありませう。向ふは金と地位と社會的勢力とを持つた男子です。わたしは貧乏な職業婦人です。わたしがどんなに手向つたにしても、彼はぞうさもなくわたしをふみつぶすでせう。內から責めるより方法はありません。彼が若し私に對して父らしい心を持つてゐるのなら、一つの方法があります。それはわたしの慘めな有樣を父にまざまざと見せてやる事です。然し彼はわたしを知らないと言ふでせう。わたしが死んでやれば不安の種がなくなつて喜ぶでせう。

令孃。あなたに同情します。あなたの憎みがわたしにも燃え移りそうです。あなたは本當に苦しいでせう。わたしはちつとも知らなかつた。彼の人を立派な紳士だとばかり思つてゐました。

N子。わたしが一番腹だゝしい事は他の人達が彼を非難せずに受け入れる事です。尊敬すべき人達でさへも彼と平氣で握手する……あゝ先生でさへも！

令孃。（ショックを感じて沈默す）

N子。何處に正義があるんでせう。誰がわたしたちの爲に惡人を責めて呉れるのでせう。

令孃。父は彼の人と席を同じくしてはなりません。父に交りを絶たせます。

N子。……

令孃。父は彼の人の寄附を受けてはなりません。わたしはそれを拒絶させます。

N子。貧しいものからむしり取つた金で……それで學問の保護者としての名聲が買へるとしたら——わたしは嘲笑したくなります。わたしは今晩父が招かれて來る事を聞いた時に心が煮え返りました。彼をもてなす爲の仕度をわたしがしなければならないとしたら。何と言ふ恥辱でせう。わたしは今晩限りこの家を出て、弟と聯落しやうと思つてゐたのです。

令孃。（青ざめる）あぶない時だつた（間）恐しい事が起りかけてゐる時に…………わたしは安らか過ぎました。歩み過ぎてゐました。醜くい、きたないものが足もとにころがつてゐるのにわたしはそれを見ずにゐました。あなたは兄さんを損なふ事を思ひ止つて下さいました。わたしの家から出て行く事をやめて下さい！

N子。わたしにそれが出來るでせうか。

令孃。わたしのために、N子さん！

N子。でも、父がパトロンのやうな顏をしてこの家に出入りするのを見なければならなかつたら。

令孃。誓つて父に彼の人と絶交させます。寄附を拒絶させます。

N子。（涙ぐむ）わたしに執着のあるのは唯あなただけです。復讐の道がなくなつた今、わたしを引き付けるものは此處には何も御座いません。

令孃。わたしの家にいらして下さい。わたしは益々あなたに引き付けられます。あなたによつてわたしに新しい芽が——未知の世界が開けて行くやうに思へるのです。

N子。…………

令孃。それに今のあなたをこの儘遠くへやる氣にはなれません。傷ついた、荒んだ心で——たとひわたしがそれを明るくする力は持たなくても、あなたの暖かい友として…………

N子。やめますわ。(涙ぐむ)だけどわたしを可愛想だと思つて下さい!

令孃。(N子を抱く。)可愛想なN子さん!わたしはあなたの味方です。待つてゐて下さい。わたしを臆病な、たよりない娘と思つて下さいますな。わたしが決心して立ち上つた時、どんなにあなたの強い味方になれるか!その日が今に來るでせう。

N子。わたし本當は…………あなたとお別れするのはつらいのですわ。

(二人抱き合ふ。)

第二場

（令孃の部屋。淸楚な洋室。窓掛けもテーブル掛けも皆白い。部屋の一隅の書棚の上に小さな畫風の扉のついた箱が開かれ、十字架と緋のマントウをつけたマグダラのマリアの跪いてゐる姿が見える。令孃テーブルについて考へてゐる。惱みと興奮との表情が見られる。軈て立ち上り部屋をあちこち歩く。）

令孃。わたしの欲ひは何だつた？心の内も身のまはりも淸淨にすること、美しいものを夢みること……それが間違つてゐただらうか？醜いものゝ影さへも觸さぬやうにわたしの魂を守る事……それが間違つてゐるのだらうか？（立ち止まる）でも醜いものがわたしの足もとにころがつてゐる。わたしの家の中に、庭の上で、部屋の隅で！それをわたしは見ない事が出來るか？（身慄ひする）醜い事の中でも一番みにくい事だ。眞黑な事だ……

青年。（ドアをあけて登場。）とう／＼出來ました。

令孃。（沈默）

青年。さつきのいばらかくしは出來ました。

令孃。（默つてテーブルにつく）

青年。あなたはどうしたんです。ひどく顏色が惡い。

令孃。わたしもう遊ぶ事が出來なくなりました。

青年。何故です。三十分前あなたはあんなに快活でした。この部屋で、この机であなたは明るく笑つてゐた。

令孃。わたしは快活をなくしました。

青年。僕たちは天國の遊びの事を話しました。あなたはいばらかくしを僕に解けと言つた。僕は先生の研究室でそれを一生懸命解いた。分光器で分析するやうな熱心でね……あなたの心の秘密をみつける事が出來ると思つたからです。それは豫期した通り甘い秘密だつた。あなたの天使のやうな惡戯に僕はすつかり幸福にさせられて、直ぐに飛んで來たのです。僕はあなたがどんなに無邪氣な冗談で僕を迎へて下さるかと思つてゐたのです。

令孃。（顔をいがめる。）許して下さい。

青年。どうしたのです。あなたは。

令孃。三十分の間にわたしは恐しい事を知つたのです。闇がわたしの心を捉へて了つたのです

青年。（令孃を凝視する）話して下さい！何をあなたは見たのです？

令孃。わたしは惡魔を見た。（身慄ひする）

青年。惡魔？そんなものは居ません。いや御覽なさい。（ドアをしめる）もう這入つて來る事は出來ません。こゝは僕たちの世界です。僕たちが居る時こゝは天國です。

令孃。いゝえ。もうこの部屋の内に這入つてゐるのです。

青年。何を言ふのです。あなたはさつきこの部屋の事を「淨い部屋」だと言ひました。明るい窓と白いカーテン――あの十字架とマグダラのマリア――あなたはあの燃えるやうな緋の衣をあなたの魂の色だと言ひました。

令孃。わたしはもうその誇りをなくしました。すべてはきれいな趣味でした。わたしはさつき迄こゝに腰かけてから自分に言つてゐました――あのカーテンは白くて美しい。雪のやうだ。あの緋のマントゥはわたしの心臟、高い天井と清楚な机……すべてが淸らかだ。そしてわたしもまた淸い……だけどもうわたしはさう思つてもちつとも滿足で

はなくなりました。

靑年。あなたに起つた事を話して下さい！　それ程あなたを打つたものは何です。

令孃。話す事が出來ません。

靑年。なぜです。

令孃。人の秘密です。眞黑な——それも直ぐ側にゐる人の……その人の爲に默つてゐなければなりません。

靑年。（沈默）秘密をあばく事を勸める事は出來ません。だが僕は言ひます。それがどんな事であるにもせよ、あなたのこれ迄の態度は間違つてゐない。どうか快活をなくしないで下さい。

令孃。わたしは醜いものを見たのです。わたしの心は暗くなつて了ひました。

靑年。あなたの明るさはあなたの尊い性質です。それをなくしてどうしますか。それは實に惜しい事だ。

令孃。でもわたしは惡魔を見たのです。それは實に醜い、いやな姿をしてゐました。わたしはどうしてもこれ迄のやうに快活に生きては行かれません。

靑年。負けてはいけません。醜いものは今初めてあるのではない。光は暗よりもどんな場合でも高いものでなければならぬ——あなたはそう言つたではありませんか。僕はそれを信じてゐます。

令孃。わたしはさう申しました。それだのにわたしの心にはもう力がないのです。それが拔けたやうに感じるのです。

今はその言葉がおぼつかなく自分に聞えるのです。

靑年。しつかりして下さい。僕はあなたに快活を失はせたくない。それは尊いものなんだ。僕はあなたの快活な顏を見るのがどんなに愉快だつたでせう。僕はそこにこの世のものに穢がされてゐない淸淨なものに觸れる氣がしてゐま

した。それは本當にあなたに似合ふのです。

令孃。尊いものは苦痛——悩みの經驗ではないでせうか。

青年。その通りです。だがそれはそれ自身に尊いのではないでせう。それが悦びを呼び出す時だけ尊いのです。本當の悦びは一番高い——

令孃。悩みを知らない悦びに價値があるでせうか。若しも光に暗を破るだけの力がなかつたとしたら？

青年。そうではありません。現に僕はあなたによつて僕の魂の闇を破られてゐたのです。あなたは自分に氣が付かずにそれをしてゐたのです。僕はあなたに觸れる事でどんなに清くされてゐたか知れません。

令孃。いゝえ、わたしにはそんな力はありません。

青年。あなたを信じて下さい！

令孃。でもわたしさつきそれを知つたのです。あなたに打ち開けて相談出來ないのがわたしは悲しい。そうしたらあなたも解つて下さるでせう。待つてゝ下さい。今に解りますから。

青年。えゝ待ちませう。然し僕はそれを聞いても僕の考へが變るとは思ひません。確かにあなたの明るさは正しいのです。

令孃。本當の正しさがわたしは欲しい！　この世の中にはなんと言ふ醜い事があるのでせう。ひどい苦しみをうけてゐるものがゐるのでせう。

青年。僕は苦しみや醜くさを知らないとは思つてゐません。然しそれは決してあなたの思つてゐるやうに、悦びや光りのやうに尊いものではありません。あなたは未知のものを誇張して感じるのです。若しもこの世に醜くさと苦しみ

が多いからと言つて、光りや悦びに價値がないやうに言ふものがあつたら、それこそ大きな冒瀆です。それはいぢけた考へです。僕は醜くさと苦しみとを知つてゐるだけに、光りと悦びとを一層讃美したくなるのです。

令孃。それはあなたのお苦しみが未だ足りないからではないでせうか？

青年。（沈默）それは恐しい問ひです。僕はそれに對しては謙遜であるべきでせう。然し僕はどうしても固執せずにはゐられません。僕の考へは少くともこの點だけでは間違つてゐません。どうかあなたの明るさをなくしないで下さい。それをなくしたらあなたの一番いゝところをなくするのです。

令孃。でもわたしはもうそれをなくしたやうに思ふのです。

青年。そんな事はありません。僕は實に殘念だ。（ある感じをこめて）僕と言ふものがあなたを明るくさせるだけの力がないものだとしたら！

令孃。（赤くなる）そうではありません。

青年。ではもつと快活にして下さい。もつと樂しさうに——愛し合つてゐるものが二人でゐる時にするやうに……

令孃。（なやましく呼吸する）でも……

青年。僕はさつきから感じてゐるのです。激情を——愛の嵐を……

令孃。（默つて手を與へる）

青年。（手にキズする）

（沈默）

青年。僕たちは幸福だ。

令孃。でも私は幸福なのが恐い！（そつと手を引く）大きな悩みが他の人たちにある時に二人の幸福に浸つてゐてもいゝものでせうか？

青年。大きな問題です。僕は深く考へませう。ですが僕が言つた事はそれより決して小さい事ではありません。僕はあなたがそれをなくしたらあなたのために惜しむ——解つて下さるでせう。僕は貴い石が、若し自分のものだと思ふのでなかつたら、こんなに頑固には言ひません。

令孃。解りましたわ。わたしも考へませう。でも今は許して下さい。わたしの心が壓しつけられてゐますから。もつと靜かになりますまで——

青年。（うなづく）では靜かにしていらつしやい。（退場）

令孃。（しばらく考へてゐる。立ち上り、カーテンを開ける。若葉と外光）

N子。（憂鬱な顔付をして登場）弟にどうしませう——打開けるべきでせうか……私は？

令孃。……

N子。わたしは迷ひます。この儘默つて今迄のやうにはしてゐられない。と言つて總てを知らせたら——どんなに驚くでせう、弟は……色々考へてみました。けれど決心がつきません。

令孃。今は知らさない方がよくはない？　あの蠟のやうな頭にこんな恐しい事を烙き付ける……あんまりひどい事です。

N子。わたしもそれを思ふのです。弟には打撃が強よ過ぎるでせう。あの子がそれにたえられるかどうか……

令孃。も少し時を待ちませう。

N子。そうしませう……わたしも勇氣が御座いません。でもどうしたらいゝものか――これたゞ徒……

令孃。斷然おやめにならなければなりません。これ迄のやうにあしらう事は――

N子。でもわたしは後始末をしなくてはなりますまい。わたしがやつて來た事の――打ち開けずにそれをするのは難かしい事です。

令孃。勇氣を出して――やつて御覽なさい。出來ない事も御座いますまい。

N子。でも今度は又二重にあしらう事になるでせう。心にもない事を言はなくては――

令孃。わたしもそれを恐れます。でも弟さんの爲に――今他に道は御座いますまい。

N子。一つの僞りがある時あとからあとから僞りをつけ足さなければならなくなる。本當に誰がこんな事をわたしにさせるのでせう？　惡を造つたものは知らずにゐる。他人(ひと)がどんなにその後始末をしてゐるかと言ふことを！

令孃。（沈默）

N子。（いらいらする）わたしが母とあゝして苦しんだ――それはみな父が作つた惡の後始末ぢやありませんか？　あの繼父にぶたれて寒い緣端で泣いてゐると、入日が沈んで……お母さんの咳の聲を障子の影で聞いたとき、私はも少しで料理用のナイフをあのコックにぶつつけやうと思つた――あの時も父は知らなかつたのだ。そして今度はわたしと弟とが苦しい思ひをするのです。

令孃。何と言つていゝか……虔(つゝ)しんで聞いてゐるよりありません。

N子。申しますまい。自分の苦しみを負つて生きませう。（涙ぐむ）わたしは思ひはしなかつた。自分の怨みを人に言はうなどとは。それよりも私は思つてゐた。唯行爲にわたしの全身の惱みを打ち込まうと――けれどあなたが餘りや

さしくて下さるので……

令嬢。同情するなんて申しますまい。今のあなたに何の役に立つでせう？ 寧ろあなたの心に一ぱいある悲しみや怒りをお洩らしなさい。私はそれを鞭のやうに受けてゐたい。少しでもあなたの胸が透くのだつたら……

N子。ごめんなさい。わたしあなたの明るい世界を暗くして了つた。汚ないものを掴み出して、あなたの目の前にぶちまけた。あなたが見ずにはゐられないやうに押しつけて……

令嬢。いゝえ、見るべきものを見させて貰つた……私はそれを感謝しています。さうでなかつたら、わたしは自分のこしらへ上げた美しい世界に、いゝ子になつてゐたかも知れません。でもあなたの仰しやる事は本當です。さつきからわたしは違つた世界に喰込まれて了ひました。わたしはきれいな世界を毀しました。こゝにかうしてゐても、一時間前とはまるで違つた氣持です。

N子。（沈默）

令嬢わたしさつきから思つてゐます。あなたの生活はどんなに決心したものでせう。それは充實してひきしまつてゐるやうに見える――わたしはそれをわたしのと較べずにはゐられません。

N子。わたしは一つのものを欲つてゐます……一人の人に捧げてゐます。それがいゝか悪いかは知りません。唯それはわたしの止む事の出來ない慾望です。

令嬢。（緊張する）それを話して下さい！

N子。わたしの欲ひはわたしたちの敵を倒す事です。それはわたしの欲ひです……又あの人の欲ひです。

令嬢あなたの敵が何であるか――わたしはあなたから聞いて知つてゐます。でその一人の人に捧げてゐると仰つしやる

のは？

N子。…………

令孃。話して下さらない？

N子。わたしを救つて呉れた人です。

令孃。あなたは――その人に……捧げていらつしやる……？

N子。その人はわたしに本當の生きる慾望を與へてくれた。生きることの意味を與へてくれた。わたしは總てを捨てゝ悔いません――その人の事業のために……

令孃。あなたはその人を愛してゐらつしやる……？

N子。………

令孃。それでその人の事業の爲に……

N子。（うなづく）

令孃。（沈默）話して下さい。N子さん……わたしを信じて下さい。

N子。（赤くなつて）わたしはたゞ一つの事業の爲に働きます。それはあの人のもので、わたしのもの……そして人類のもの――

令孃。仕事があなたたちを結びつけた――そして總てを捧げた強い愛が生れた……心からお祝し致します。

N子。（急に憂鬱になる）違ひますわ。わたしは一人で――心の中で捧げてゐるのです。

令孃。（驚ろく）ではお心も……お打ちあけにならないで。

N子。（涙ぐむ）事業に捧げるのはあの人に捧げるのだと思つてゐます。

令孃。ではあなたは淋しいでせう。遠くにお離れになつて――

N子。えゝ。でもわたしたちは仕事を大事にしなければなりません。わたしたちは闘つてゐるものです――あの人はそう言ひました。あの人はわたしをこちらに勇ましく送つてくれました。わたしが立つ時に波止場に送つて來てくれました。（間）あの人は强い――わたしはとう〳〵得言はずに別れました。

令孃。でもその人も屹度あなたを――

N子。（首を垂れる）わたしは幸福ではないのです……多分それはわたしに來ないやうに思へるのです。

令孃。そんな事はありません。待つてゐらつしやい！　望みをもつて――

N子。わたしは生きませう。弱くなつてはなりません。（立ち上る）同情はわたしを弱くします。わたしは決心してゐるのです。世の中の娘の願ふやうな事を願つてはならないと――

令孃。願ひなさい！　それはあなたに許される事です。何ものもそれをあなたに止める事は出來ません！

（二人沈默）

N子。（耳を傾ける）弟が來ました。庭で口笛を吹いてゐます――今朝弟と會ふのは苦しい。

令孃。勇氣をお出しなさい――うまくゆくでせう。

N子。やつてみませう――あの子の爲に辛抱しませう。（出て行く）

令孃。（數秒間沈默）決心した人――淋しい愛……苦るしい。張り切つた世界に生きてゐる。（部屋を步く）わたしたちは――力が足りない。（窓の扉をしめる）わたしが本當に拜めるやうになる迄――二度とこの戸を開くまい。

博士。（登場）お前は何をしてゐる。

令嬢。お父さんにお願ひしなければならない事がムいます。

博士。なんだ。お前は大變興奮しておいでのやうだ。

令嬢。お父さんは金澤さんと絶交なさらなければなりません。

博士。（落着いて）どういう譯だ。突然に。（鏡をかける）話してみなさい。

令嬢。金澤さんは恥知らずです。紳士ではありません。あの人とお交りになるのはお父さんの恥です。

博士。なぜだ。

令嬢。簡單に申します。穢い塵溜を掻きまはしたくはムいませんから。あの人はある女を弄んで子を産ませて捨てたのです。その子がN子さんです。

博士。（沈默）

令嬢。もうよろしうムいませう。今晩あの人をお招きになる事は止して下さい。

博士。確かな事實か。

令嬢。確かです。N子さんから聞いたのです。

博士。（考へてゐる）

令嬢。勿論お父さんは絶交なさいますでせう。

博士。いやもつと考へて見ねばならん。

令嬢。何も考へる事は御座いません。事實は明かなんです。あの人をこの家から斥けて下さい。

博士。未だ早い。事實が未だはつきりしてゐない。又どんな複雜な事情がひそんで居るかも知れない。

令孃。（興奮して）事情はもう解つてゐます。一刻も早く絶交して下さい。研究所の寄附も直ぐに拒絕して下さい。

博士。落着きなさい。俺はそんな輕卒な事はしたくない。人間一人の名譽を潰す事なんだ。

令孃。（激して）名譽ですつて？ あの人に名譽があるでせうか。あの人は斷じてそれを持つてゐません。わたしはお父さんが直ぐにわたしに同意して下さると思つてゐました。わたしは失望しました。

博士。わしは事實に嚴肅になる。未だこれだけではそれだけの處置をとるには不用意だ。

令孃。N子さんから詳しく聞いたのです。

博士。一方だけ聞いたのでは解らない。

令孃。でもあの人は自分の娘を十八年間も捨てて置いて見向きもしないのです。N子さんが何を考へてゐるとお思ひになります？ それは自分の父に復讐する事です。本當に恐しい事では厶いませんか。

博士。恐るべき事だ。（間）それだけ愼重でなければならん。事實は複雜なものだ。

令孃。お父さんはあの人をこの儘お許しになるのですか。交りを續けるお積りなのですか。

博士。事情がはつきりする迄はきめられない。男と女との爭ひでは男に同情す可き場合も少くない。母親が娘に復讐の精神を吹き込んだと言ふやうな――

令孃。（強く遮る）N子さんの場合は決してさうでは厶いません。それはもう解つてゐるんですから。それはあんまり可愛想です。あなたは何故もつと金澤さんの罪惡をお責めにならないのです。

博士。（娘の顏を見る）もつと冷靜になれ――俺は學者だ――お前はかはつておいでのやうだ。お前のこれ迄の立場をど

うしだ――お前は他人の罪を裁いてもいいのか。

令孃。或る變化が――劇しい動搖が今日わたしの心に起りました。わたしは罪を憎まずにはゐられなくなりました。裁く事を知らない赦しは無力なものではないでせうか。なぜと言つて、今の場合、わたしは赦すよりも裁く時にわたしの魂が力づきますから。わたしが今赦すと申しますなら、それは生まぬるい僞善になりませう。

博士。わしは感情よりも、もつとしつかりしたものに頼る。お前は今搖らいでおいでだ。わしはお前について動くことは出來ない。

令孃。お父さんはどちらにもつかない――中立的な態度をおとりになるのですか。もつとはつきりどちらかの味方をして下さい。

博士。わしはもつと確かな世界を求める。惡を憎む事を知らないのではない。それに金澤は今後悔してゐるのかも知れない。お前は今裁く心に充ちておいでのやうだ。誰も他人の罪に對して同情の位置に立つてはならないのか？わしが偏れた限りでは金澤は未だ人の好い紳士としかうつつてゐないのだ。有態に言へば、わしは彼の人を普通の人間以上に尊敬してはゐない。だがそれ以上に我々が他人に要求する權利があるだらうか。

令孃。お父さんは市民に對する愛の事をおつしやつていらつしやるのでせう。ですが、あの人は普通の市民でせうか。自分の娘を一度も抱いてキスしてやらなかつた一人の平凡な市民がございましてで？それにわたしは人の好い紳士と言ふものを非難せねばならない事は今は切に感じます。無神經で、云はゞ魂のめぐりが惡い爲に、肥つて上機嫌でゐる紳士――自分がした事の爲に他人がどんなに苦しんでゐるかを知らずにゐる呑氣者――そう言ふ人の一人としても、あなたはあの人に對してもつと嚴しくなさるべきです。

博士。わしは金澤に對して丁度相當した態度をとりたい。事實が要求する處置をとりたい、それが正義だ。お前は激した感情の中で考へておいでだ。わしは公平に考へる――未だ早い。事實が揃つてゐない。

令孃。わたしは殘念です。お父さんの冷淡なのが淋しうムいます。

博士。わしは輕卒な事は出來ぬ。殊にまはりのものが興奮してゐる時にわしが沈着を失つてどうする。齒車が一分違つても機械は役に立たないのだ。

令孃。わたしは正義の齒車に訴へるのです。犯かされた罪惡が罰せられない事を怒るのです。

博士。お前のお言ひの事を考へて御覽。お前は昨日迄言つた事と反對を言つてゐる。どんな罪でも赦す惠みはどうしたのだ。

令孃。………

博士。わしはお前に反對するつもりではない。だがわしには異樣に聞える。お前はいつ、どうして立場を換へたのか。わしらの仕事ではそういふ飛躍は許されない。

令孃。生きた經驗が――魂の惱みの訴へがわたしの胸をつらぬいて!

（劇しいノックの音）

令孃。N子さんです。

博士。又あとにしやう。よく考へてみて。早やまつてはいけない。（別の入口から退場）

令孃。（扉を開ける）

N子。（興奮して這入つて來る）とても我慢出來ません。わたし本當の事を言つて了はなくちや――

令嬢。どうして？も少し忍耐出來ませんか。

N子。わたしはやつてみたのです。出來るだけ平氣をつとめて——だけどとても駄目です。あの子は知らずにわたしを思つてゐるんですもの。今日から急にからまつて來だしたんです。

令嬢。………

N子。無理はありません。わたしがさうなるやうにし向けたんですから。

令嬢。（溜息をつく）そこをなんとか出來ませんか。弟さんが若し知つたら——

N子。そう思つてやつてみるんですが。いくら恥知らずでも、あんなにむきになつてるものに、しらばくれた態度はとられません。可哀そうに弟はをこり出しそうになつてゐるんです。

令嬢。でも本當を知つた時の苦しみと較べれば——

Z子。言つて了ひませう。どうせ解らずにはをかないのです——事實の命令です。

令嬢。弟さんの小さい心臓が此の眞實を背負ひ切れるでせうか。

Z子。やつて見ませう。一と思ひに——

令嬢。（沈默）この上あなたに嘘をつけとは勸められません——弟さんは何處にゐるのです。

Z子。彼の方の部屋にゐます。今にこゝに來るでせう。（顔が硬ばる。）今度はづばと此の子の胸を突き拔いてやりませう。

令嬢。あゝ神樣！罪のないあの子がなぜこんな目に遭はなければならないのです？

（ノックの音）

Ｚ子。あの子です。
令孃。では席をはづしませう。
Ｎ子。（自信を失つたやうに）困つた時には助けて下さい。あなたも一緒にあの子に話してやつて下さい。そして勵ましてやつて下さい。（顏色が惡くなる）でも出來るか知ら。
令孃。勇氣を出してやつて御覽なさい。必要な時には私を呼んで下さい。（退場）
少年。（登場）
Ｎ子。（堅くなる）
少年。（ぷりぷりして）姉さんはひどい。僕もいやだ。さつきから急に變にするんだもの。
Ｎ子。…………
少年。ちつとも譯を言つてくれないで（Ｎ子の顏を見る）あゝあなたは怒つてるんですね。何が腹が立つたんです。言つて下さい。僕が惡かつたのならなんでもあやまります。
Ｎ子。さうではありません。
少年。あなたは泣いてゐる。どうしたんです。姉さん。（Ｎ子に抱きつく）
Ｎ子。（思はず少年を抱きしめる）
少年。僕が決心しないからそれであなたは悲しいんでせう。それならもう泣かないで！　僕は決心しました。何時でも姉さんと逃げます。姉さんと二人で何處か誰も居ない處へ行つたらどんなにいゝだらう……僕はさう思ふんだ……それでもういゝでせう。

N子。えゝえゝ。

少年。ではもう泣かないで機嫌をよくして下さい。

N子。もう泣きはしません。

少年。僕はもうお父さんやお母さんの事はかまはない。何處へでも二人で行く。（燃えるやうな目つきをして）僕は姉さんの言ふ事を聞いたのだから、姉さんも僕の言ふ事を何でも聞いてくれるでせう。

N子。えゝなんでも聞きますよ。あなたの言ふ事なら。

少年。それではねえ――

N子。えゝ。

少年。（益々堅く抱きついて）僕をキスして下さい。（N子の胸に顏をうづめる）

N子。（青ざめ、目を閉ぢ、そつと少年をはなす）

少年。……

N子。許して頂戴。

少年。僕は歸ります。（駈け出さうとする）

N子。（少年の兩手を握つて自分の前に坐らせる。涙がぼろ〳〵落ちる）

少年。どうしたんです。どうしたんです。

N子。驚かないで頂戴。しつかりして居てわたしの言ふ事を聞いて頂戴。あなたはわたしの弟なんです。わたしの本當の弟なんです。わたしたちは本當の姉弟なんです。腹異いの――

少年。（N子の手を振り離し立ち上る）

N子。びつくりするのは尤もです。あなたのお父さんが十九年前に或る女に手をつけてわたしを産ませたのです。

少年。（青ざめる）そ……それは本當の事ですか。

N子。本當です。今日迄わたしは隱してゐました。赦して下さい。でももう默つてはいられません。

少年。僕は……僕は知らなかつた——そんな事があり得る事だらうか

N子。赦して頂戴。姉さんがあなたにしかけてゐた惡い、惡い事を！

少年。（突然啜り泣く）

N子。わたしはなんと言つていゝか解りません。わたしの内には色々なものが沸り返つてゐるのです。あなたをびつくりさせまいと思つて、色々考へました……でもこの上嘘をついてはゐられません。

少年。（泣きつゞける）

N子。しつかりして下さい、この眞實を負つて下さい。いくらいやでも事實を換へる事は出來ません。

少年。（床の上に倒れる。泣き聲が段々高くなる）

令孃。（ドアを開けて登場）あなた……あなた……

少年。……

令孃。しつかりして下さい。驚いたでせう。でも今はあなたの一生の一番大事な時です。勇氣を出して耐えて下さい。

少年。（身を起す）僕は……僕は何んにも考へられない——世界が眞暗になつた。

令孃。驚いたでせう。もつともです。でももう泣いてる時ではありません。（聲を勵ます）あなたの全身の力を集めて下

さい。この事實を踏みしめて下さい。そしてこれからあなたの本當の姉さんと新しく生きる道を見つけて下さい。

少年。僕の父が僕の知らぬうちに穢らはしい事をやつてゐた……僕の本當の姉さんが何にも知らない僕に恥かしい事をしかけてゐた——そして僕にそれを我慢しろと他人(ひと)が言ふ——

N子。赦して頂戴。姉さんはお父さんが憎いばつかりに、可愛い、可愛いあなたを犧牲にしやうに思つたのです。

少年。(突然)姉さん、逃げて下さい！僕と一緒に何處かへ行きませう。僕はもうあんな家へは歸りたくない。

N子。…………

少年。さあ逃げませう。僕は決心してゐます。今となつては僕はその方がどんなにいゝだらう。誰もゐない所へ行つて二人で仲よく暮らしませう。

令孃。それはいけません。今そんな事なさつては駄目です。

少年。でもほかにどうするんだ？僕はそれしか考へられない。さあ姉さん、僕と逃げて下さい。勿論あなたはそうしてくれるでせう。

N子。待つて頂戴。わたしの事はかまはないが、それではあなたが——

少年。僕はかまひません。

N子。でも……

令孃。(N子に)そんな事なさつてはいけません。

少年。姉さんはいやなんですか。

N子。(沈默)

少年。なんだ！皆して僕を臺無しにするがいゝ。僕はもうどうなつたつてかまうもんか。（駈け出す）

令嬢。（扉口迄追ひかける）あなた……あなた……

N子。あゝ。どうしませう。弟は死ぬでせう。弟は死ぬでせう。

令嬢。あゝ。（顔を抑える）

N子。待つておくれ！わたしも行くから……お前一人やつて、わたしがどうするものか（後を追ふ）

令嬢。N子さん。N子さん……あゝ。（両手をしぼる。向ふに青年の姿を見つける。）あなた……早く來て下さい！

青年。（登場）どうしたんです。

令嬢。二人を止めて下さい。N子さんと弟さんとが出て行きました。二人は死ぬかも知れません。

青年。弟さん？　どういふ譯で――

令嬢。譯はあとで話します。二人を止めて下さい。早くして下さい！裏のコートの方へ……

青年。（急いで出て行く）

令嬢。（眞青になつてソファに倒れかゝる）

第三場(夢の場)

(ピース。岩が多い。所々に灌木。灌木は花咲き、下草が美しい。川めぐり流る。川を隔てゝ向ふに緑の草丘。今太陽が出たところ。娘赤いスカートの付いた白の服装で、岩の上に腰をかけ、太陽の登るのを見てゐる。)

娘。日が登つた。金色の箭が野山を射る。川は喜ろこんで流れ、草地には緑がもえる。露が光つてこぼれてゐる。わたしは歩いてみやう。(歩き廻る。向ふの森から鳥の群が空に飛びたつ)お寺の塔の風見が光つてゐる。朝の鐘が今に鳴るのだらう。(川岸に出て川上の方を眺める)向ふの向ふの方から川が流れて來る。限りなく、膨れて、流れて來る。生命(いのち)の流れだ。太陽は丁度川上の眞向ふにくるめき乍ら燃えてゐる。ケルビムや、セラフイムが金色の光の中から踊り出して、流れに飛び込むやうにみえる。(川下に向く)何處迄流れてゆくのだらう……川下の瀬が鳴つてゐる。(川岸にそうて下る)こゝに樫の木が立つてゐる。すらりとして未だ若い。(樹の肌をなでる)こんもりした親しい陰がわたしの心をひく。座つてみよう。(草の上に坐る)下草がきれいだこと。星のやうな小花の簇り……(うつとりとして空想に耽る)わたしはジヤン・ダークだ。わたしは厳かで誰も近寄れない。(又考へに耽る)おや、わたしはテレシヤの事を思つてゐる。そうだ。わたしはやさしい娘だ。(夢中で叫ぶ)わたしは薔薇の雨を降らしたい。此の野に一ぱい赤い薔薇の雨を(ふら〳〵と立ち上る。草の上を歩く、やがて岩の上に腰をかける。沈默)わたしは淋しくなつた。わたしの魂は何かを欲(ほ)つてゐる。わたしのスカートが露にぬれて紅くにじんでみえる。そうだ。七汐も八汐もぬれるといゝ。(立ち上る。灌木の花を歩き乍らつむ。――うたふ。)

私は灌木の花をつむ。

私はそれを環に貫く。
だが私はそれを川に流すまい
あの人は川上にゐるのだから

（白鳩が空から舞ふて下りてくる。娘白鳩を抱き上げる。）

娘。可愛い使ひ。さあ、わたしはお前を放つ。川上に飛んでおゆき。あの人の處へ……

（突然ピストルの音。白鳩が血に染まつて地に落ちる）

娘。（叫ぶ）誰です。わたしの白鳩を撃つたのは！

（一人のぼろ〳〵になつた勞働服を着た、がつしりとした體軀をした男、顏色青ざめた黑服黑袴の女工を背負つて現はれる。女工は左の手に赤い旗を持ち、右手にピストルを握つてゐる。）

工女。わたしが撃つたのです。

娘。なぜ私の鳩を殺したのです。

工女。（冷笑を浮べる）わたしは憎んだから！

娘。なぜ憎むのです。

工女。わたしのこの血の氣のない顏色が見えませんか。黑いがさ〳〵した着物が——埃だらけの髮が……（悲しげにうたふ）

うちが貧乏で十二の年に
うられて來ました此の會社

一番なつたら起こされて
二番なつたら身の仕たく
三番ふいたら工場よ
何の因果で綛掛習(なろ)た
たまに殘るは骨と皮

娘。わたしはあなたに同情します。あなたはわたしの姉妹です。

工女。そんなものはいりません。旗とピストルとを持つて、わたしたちについていらつしやい。あなたの妹を助ける爲に！

娘。ピストルを持つて？あなたは人を殺すのですか。わたしは總てのものを愛します。

工女。（何か言はうとする）

男。（目くばせして制する）戰ひだ。俺たちはいそがしい。

工女。夢をみていらつしやい。

男。（工女を背負つた儘無言にて川を渡り初める）

娘。待つて下さい。わたしも連れていつて下さい！

男。（返事をせず。大聲に岩を踏みしめて、川を渡つて退場）

（暗轉）

第四場

（令孃の部屋。第二場に同じ。令孃がベットに寢てゐる。N子がその側の椅子に腰をかけ寢顔を見守つてゐる）

令孃。（かすかにうなり聲を立てる）

N子。（搖り起す）

令孃。（目を開く。ベットの上に起きる）

N子。あなたうなされました。

令孃。（夢のあとを追うてゐる。）

N子。如何です？

令孃。（ベットから離れる）わたしは起きます。もういゝのです。

N子。かまひませんか。

令孃。あまり驚いたので頭がふら〳〵しただけですから。

N子。心配をかけました。

令孃。いゝえ――わたしは弱い――駄目です。

N子。（沈默）

令孃。あなたはわたしを笑つたでせう。

N子。（首を振る。）いゝえ、あなたが淸いからです。私の心臟は咒められてゐる。恐しいことにも驚ろかぬやうに。そ

れでもさつきは驚きました——弟をなぐさめて家へかへすのはなか〱でした。

令孃。（暗然として）酷い事です。あなたにお詫びせねばなりません。あなたの秘密を他人にあばいたことを……

N子。止むを得ません。

令孃。あゝ。私たちのまはりはもう汚れてしまつた！

N子。（冷やかな微笑）わたしさつきからあなたの寢顔を見てゐました。きれいだと思つて。でも御免なさい。わたしにはある悩みに似たものが起りました。

令孃。わたしの夢はその通りでした。

N子。赦して下さい。わたしはあなたを愛してゐます。でもやつぱり反感が起きるのです——あなたがはつきりわたしの味方だと思へたら……

令孃。わたしはもうあなたの味方です！

N子。本當にですか。

令孃。あなたの悩みがわたしに燃えつきました。父の冷淡が一層わたしに惡を憎む心を湧きたゝせました。あなたにお約束した事を父にさせる事が出來なかつたのは實に面目がありません。でもわたしはそれによつてあなたの大きな欲望を捨てさせたのです。あなたの目的を犧牲にさせたのです。父は公平と言ふでせう。然しわたしは思ひます。どちらにも組しない態度が公平と言ふものなら、それは熱情のない冷淡ではないでせうか。

N子。そうです。わたしはそういふ立場があり得るとは思ひません。わたしたちが一つの強い欲望を持つとき、わたしたちはそれに熱情をもつて傾いてゐます。わたしたちの味方でないものはわたしたちの敵です。その中間はありま

せん。

令嬢。わたしは夢みる事がいやになりました。あの小さい弟さんを奪つた運命は決して夢ではありません。生々しい現實です。醜い、眞黒な塊りです……わたし一人が美しい考へに耽つてゐる事が出來ませうか。

N子。わたしの味方をして下さい。わたしたちのために立つて下さい。わたしが一番悲しい事は――腹だゝしい事はわたしたちの姉妹がわたしたちの苦しみを傍見してゐる事です。どうしてわたしたちを助けるために立ち上つてくれないのでせう。そう思ふとわたしは憎みが起る。甘い、白粉臭いあの人たちの考へを嗤ひたくなる――

家政母。（登場）N子さん、すぐにいらして下さい。手が足りませんから。

N子。（答へない）

家政母。隨分いそがしいんです。お客様に失禮になります。

N子。わたしはいやです。さつき申した通りです

家政母。（憎みの目付を以て數瞬間立つてゐる。やがて去る）

N子。わたしがあの席へ出られるでせうか。出ないのはまだましでせう。（あざけるやうに）若し出たら、それこそ集りは臺なしにならずにはおきますまい！

青年。（登場）あなたは起きてゐる……一寸出ていらつしやい！

令嬢。わたしは失禮致します。

青年。客があなたの事を度々訊きます。先生が困つてゐられる――で僕は呼びに來たのです。

令嬢。わたしは出ません。出られません。

青年。なぜです。あの席にゐる客は金澤さんだけではありません。尊敬していゝ教授たちもゐます。

令孃。わたしは殘念です。あなた達が惡人の肩をもつのですか。

青年。僕は惡を憎む。だが僕は先生の言はれる事が少くとも今の場合正しいと思ふ。僕は先生の立場を同情するのです。

令孃。N子さんには同情しないのですか。

青年。勿論同情します。然し僕はまはりに裁くものばかりがゐる時には赦すものになりたい氣もする——

N子。（突然）わたしは同情して要りません。わたしは何處迄も裁きます。告訴します。

青年。赦すものは誰も居ないのですか。

N子。卑怯者！

青年。卑怯者？　あなた方が赦す時僕は裁くだらう。だがあなた方は裁きに充ちてゐる。あなた方はもう報いを得た。誰がN子さんや弟さんに同情しないでゐられるか。だがN子さんはそれを拒む。お父さんに禍ひをのぞむ。無關係な他の人をまきぞへにする。僕は正しいとは思へない。

N子。ふん。（冷笑する）又一人公平な立場を振りまはす人がゐる。彼の名は冷淡だ！

青年。あなたはひねくれてゐる。僕はあなたに同情する點では——

N子。（遮る）わたしは同情して要りません！

青年。それは僕の自由だ！

（沈默）

令嬢。今夜はわたし本當に不幸な氣がする。あちらではお父さんがわたしのお願ひもきかないで、わたしの嫌な客とテーブルを挾んでいらつしやる。こゝではわたしの信じる友がわたしの愛する人と爭つてゐる。

青年。あなたかたは運命と言ふものを思はない。運命の不調和を個人の責任に歸して了はうとする。それは不聰明ではないだらうか？

N子。わたしはそういふ考へ方はとくに捨てました。それは人間を不正に對して無氣力にさせる――

青年。あなたは不正、不正と言ふが、僕はそれが心におちない。何處かに僕の魂が肯んじない所がある。僕はその言葉に對して心から頭が下らない。

N子。不正とは何ですか？それは不正を受けてゐるものに初めて解る事です。その言葉を正しく用ひる事の出來るものは被害者だけです。わたしはもうそれを腹の底から知つてゐる。だから、初めからあなた方の階級には期待しないです。ブルジョアは敵、インテリゲンチヤは中立……あの生ぬるい、わたしたちが敵よりも未だ輕侮してゐる連中です。ブルジョアは力を持つてゐる。爪のある虎だ！だがインテリゲンチヤは恐ろしくもなければ頼みにもならない。わたしたちはそう言ふ人達を無視してゐる。

青年。人間を無視する事は出來ない！靈魂を持つてゐるものを輕侮するものは僕の敵だ。それと較べれば他の事はまだ小さい。あなたは階級を見て人間を見ない。僕は人間を見て階級を見ない。いや僕は行爲さへも見ない。もつと奥にある人間そのものを見る。魂を！一つの罪のある行ひをしたものがそれをせぬものより必ず惡いとは僕は思はない――金澤さんがどれだけの裁きに價してゐるか？それはその人間の如何できまる――僕は未だそれを知つてゐない。

N子。では傷つけられたものはどうするのです。その受けた害の償ひは？

青年。それは僕には解らない。だがそれは何等かの爲方で償はれるべきものだと思ふ――

N子。そうです。わたしたちの叫びはその要求から起るのです。あなたはその方法を知らないと仰つしやる。ではあなたは何も私たちに向けて仰しやる權威はないではありませんか。

青年。（沈默）

N子。わたしたちはその方法を握つてゐるのです。

青年。僕は握つてゐない――あなたは握つてゐる……それは本當だ。だがあなたが握つてゐるのは眞理ではない。

N子。（冷笑する）眞理とはなんでしたつけ。

青年。（興奮する）それは僕が求めてゐるそのものだ。僕がその爲に全力を盡してゐるそのものだ。

N子。わたしにはつきり解つてゐる事はあなたがわたしたちの救ひ主でないと言ふ事です。あなたや先生は眞理をさぐる選ばれた人でもありませう。ですが權威者ではない。眞理を握つてゐないものはわたしたちを救ふ力はありません。

青年。何處にそういふ權威者がゐるのだ？

N子。（非常に熱情的に）一人ゐる！それはわたしの救ひ主です。あの人はわたしのキリストだ！

（沈默）

N子。（突然）わたしは失禮します。（劇しくドアを開けて出て行く）

（沈默）

青年。あなたは出席しないのですか。

令孃。わたしは今晩は出る氣になれません。

青年。僕が呼んでもですか。

令孃。……

青年。僕にはそれだけの資格はないのでせうか。

令孃。N子さんに對してそれは出來ません。

青年。僕は殘念だ。

令孃。わたしも殘念です。わたしはあなたが今晩わたしの味方をして下さらなかつたのは本當に失望しました。わたしはいつも思つてゐました。正しいものに味方する事でわたしたちの愛を燃やす事が出來ると。その機會が來ました。ですのにあなたはわたしにその喜びを與へて下さいませんでした。

青年。僕はあなたがもつと自分を守る事が出來る人だと思つてゐました。あなたに僕が一番期待してゐるものをあなたは示して呉れませんでした。僕はもつとあなたらしいやり方があらうと思ふのです。

(沈默)

令孃。あの人は燃えてゐる……何かをしつかり握つてゐる。

青年。僕は實に淋しい……二重にも三重にも——僕はあなたには正義に味方する事の出來ないものとして見られてゐる。N子さんには實力を握つてゐないものとして扱はれてゐる……だが僕は一番正しい態度を取つてゐる。

令孃。あの人のする事は内から充實してゐるやうに見える。父にもあなたにもあれだけの充實をわたしは見る事が出來

ません。これはわたしにとつて本當に殘念な事です。でもわたしにはどうしてもそう感じられるのです。

青年。あなたはN子さんに影響され過ぎる。

令孃。でも何故でせう。あの人はわたしをぐいぐい引つぱつて行くのです。

青年。今の時代では善良な人は、只自分が幸福であるといふ事だけで良心が傷つくのだ。だがそれは決して素直な事ではない。あまりに自信のないことだ。

令孃。……

青年。もつと確乎としてゐて下さい。暗示にかゝらないで下さい。

令孃。あの人は暗示をかけるだけの力を持つてゐます。然し他の人はそうではない。尊敬してゐた父は今は嚴しさの足りない人のやうに見え出しました。そして――

青年。解つてゐる。僕は權威のない人間のやうに見える――あなたはかう言ひたいのだらう。それは僕の痛い所に中つてゐる。僕は確かに未だ權威を摑んではゐないから。（唇をかむ。）

令孃。………

青年。僕は孤獨を感じる……だが僕は他人の承認を強いるには自負心を持ちすぎてゐる。若しその爲に僕があなたにとつて價の少ないものになつたのなら、僕はいさぎよくそれをお受けします。

令孃。そうではありません。だから私は淋しいのです。でもわたしはわたしの心の內で敗れたやうな氣がするのです。その感じをどうともする事が出來ません。あの人は言ひました。わたしは救ひ主を持てゐる。キリストを持つてゐると――

青年。（默然になる）僕はこゝにゐる事が出來ません！（涙を含んで退場）

（沈默）

令孃。わたしたちは負けた。何故？（考へる）惱みが足りないのだ。苦痛の經驗が——

少年。（思ひに惱んだ顏付にて登場）僕には解らない。僕はどうすればいゝのだ？

令孃。……

少年。姉さんと別れて家へ歸つて見た。お母さんが着物を用意して僕の歸りを待つてゐて呉れた。今晩お呼ばれに行くのだからと言つて。お母さんは青白くて影のやうだ。優しくて時々泣いてゐる。お母さんはちつとも惡かあないんだ。お父さんがにこ／＼して今晩連れて行つてやると言つた。僕の顏色が惡いと言つて心配してゐた。僕はお父さんの顏を見た。この人がそんな惡い事をした人間だつて？　太つて人のよさそうな、にこ／＼してゐるこの人が……僕は家へ歸つてから又逃げ出す氣が挫けた。だつて一日でも僕がゐなければお母さんは泣くだらう。お母さんに罪はないんだ。僕は父の罪を責めてやらうと思つて歸つた。だがお父さんの顏をみると僕は氣が抜けた。「お前は顏色が惡い。病氣ではないか。餘り勉强すな——」これが僕が憎んでゐるお父さんが言つた言葉だ。僕は直ぐ姉さんの事を思つた。僕は泣くにも泣けなかつた。なんと言ふ事をお父さんはしてくれたんだらう！　僕は唯なさけなくなつて家を出た……敎へて下さい。一體僕はどうすればいゝの？

令孃。お母さんを大事にしてお上げなさい。あなたは家を出てはいけません。

少年。姉さんは……苦しい姉さんはどうするの？

令孃。姉さんは强い。自分で苦しみを負つて行きます。

少年。僕も强い。僕だつてお父さんとたゝかへる。でもお父さんは僕を可愛がつてゐんだ。自分を可愛がつてくれるものを憎んでもいゝの？

令孃。(沈默)

少年。僕は家にゐるのなら姉さんの事を默つてはゐられない。そんな事が出來るものか。お父さんやお母さんの顏を每日見てゐて知らぬ顏が出來るものか。なんと言つてお母さんに話したらいゝの？　お母さんは怒るだらう。いや怒りはすまい。お母さんはなんでも怺へるから――

令孃。お母さんには今話さない方がいゝかも知れません。

少年。そんな事をしろと言ふのですか。僕に嘘をつけと言ふのですか。僕だつて强い。やつてはみる。でも僕はきつと苦しい顏をするだらう。お母さんが心配する。何時もそれを訊く。そして僕は知らぬ顏をしてゐるのか？

令孃。(沈默)

少年。僕がお父さんを責める。するとお父さんがもうあの家へは行くなと言ひ出すだらう。姉さんに會はせないやうにするだらう。でもそんな事が出來るものか。僕はどうしたつて來る。姉さんはこゝにゐられなくなる。ぢや僕も家を出ずにはゐられない。

令孃。あなたが出てはいけません。さみしいお母さんはどうなさるんです。

少年。ぢやどうして姉さんと會ふの？

令孃。そつとわたしの家で――

少年。お父さんに言つて了つたらそれは駄目です。でも言はずには僕は居られない。

令孃。たとひしばらく會はずにゐても――あなたたちは強いのでせう。

少年。(脣を噛む)僕の事ならやつて見る。でも姉さんを一人ぼつちにして置かれるものか。

令孃。………

少年。姉さんはこゝにはゐられなくなる。姉さんは行つて了ふだらう。

(沈默)

少年。みんなよくする事は出來ないの。姉さんはお父さんの子ぢやないの。だからお父さんは姉さんを僕のやうに可愛がればいゝ。お父さんは惡い事をした。だからそれをお詫びすればいゝ。そしたら姉さんだつて赦すだらう。お母さんにも話して了まはう――そしてみんな仲よくしたらいいぢやないの。

令孃(涙ぐむ)それが本當です……そう出來さへするなら!

少年。なぜそう出來ないの。なぜ本當の事が出來ないの。

令孃。「信仰薄きものよ……」も一度この聲がわたしに強く響いて來れ……なぜわたしには力がないのだ……

(二人沈默)

N子。(考へ乍ら歸つて來る)わたしはもうお別れしなければなりません。

令孃。どうして?

N子。もうその時が來てゐます。

令孃。そんな事はありません。

N子。わたしにははつきり解ります。すべての事情がそうなつてゐるのです。

令孃。家のものとの關係なら氣にしないで下さい。秘密が解つた事はあなたの不名譽ではありません。あなたは氣の毒な被害者です。傷つけられたものがその上にそれを恥ぢねばならないでせうか。

N子。いゝえ決して！でもわたしにはすべての事がリアリスチツクに解るのです。事柄はあるべきやうに起りはしません。あつてはならないやうに起ります——わたしはお別れせねばなりません。

少年。歸らないで——姉さん歸らないで。

N子。歸りたくはない……でも仕方がありません。

少年。姉さんが歸るなら僕も家にはゐない。僕も一緒についてゆく。

N子。あなたは家にいらつしやい。さつきも言つた通りです。

少年。いやだ。いやだ。僕はどうしたつてついてゆく。

N子。家を出てどうするのです。誰があなたを養ひますか？　どうして勉强するのです。

少年。僕は十六だ。なんだつてしてやつてゆく。

N子。お母さんはどうするのです。あなたのために何もかも怺へて生きていらつしやるお母さんは？

少年。……………

令孃。N子さんも一度やつてみませう。未だ道が殘つてゐないとは言へません。本當の事が、本當にあるべき事が起らないとは言へません。弟さんがそれを言つた時わたしは本當にそう思つた。お父さんが悔ひ改めになり、あなたがそれをお赦しになり、父と娘とが愛し合ふこと、姉と弟とが親の前で睦み合ふこと……そしてみんながよくなること…………

N子。(頭を振る) 未だそんな事を考へていらつしやる。それがあなたたちの空想なんです。さう出來るものなら私だつて——(涙をこぼす) 本當にわたしはもうそれがはがゆい。その美しい考へが腹だゝしい……御免なさい。(涙を拭く)

令嬢。でもそれは弟さんの願ひ……人間の願ひ……ぢやありませんか。

N子。その通りです。けれど出來ない願ひをいつまで空想してゐられませう。今の世の中では本當の事は起る事が出來ません。總てがやり直されない限り——あゝそんな望みはもう起こして下さいますな。

令嬢。待つて下さい。あなたとお別れしないですむ爲に、弟さんを助ける爲に私はも一度やつてみませう。あなたとお別れするのはつらい……今となつてはあなたを一人遠くへやれないのはわたしも弟さんと同んなじです。

少年。姉さんお願ひです。待つて下さい。僕を救つて下さい。お父さんと姉さんとの間に挾まつて僕あ苦しんでるんだ。(令嬢に) どうかやつてみて下さい。みんながよくなるやうに……どうしてそれが出來ないんだらう?

N子。(溜息をつく) どうしてそれが出來ないんだらう? わたしはそれを百度も自分に訊いて見た。だがやつぱり出來ないのだ。それが事實といふものなんだ。

令嬢。事實はさうです。でも願ひは……やつてみませう。少くとも父にも一度考へを飜へさす事は出來るかも知れません。そしたらあなたはわたしの家に居て下さるでせう。そしてその他の事も段々よくなる……

少年。やつてみて下さい。やつてみて下さい。

N子。(あきらめ切つた調子で) お別れを三十分ばかしのばす爲に……わたしは待つてゐませう……もう來るにきまつてゐる悲しみに——わたしは唯用意するばかりです。

令嬢(目を閉ぢ、祈るやうな樣子) やつてみませう。(ドアをあけて去る)

少年。(一瞬間沈默)姉さん行かないで……行かないで……

N子。可愛さうに。(弟を抱く)もうぢきお別れが來るのです――あなたの願ひはかないはしない。

少年。駄目でせうか。

N子。わたしには解つてゐる……もう覺悟をして下さい。あの方が甲斐のない努力をしてゐらつしやる間……わたしたちは別れを惜しみませう。

少年。姉さん行つてはいや。行つてはいや。

N子。なにも言はないで。何も言はないで。(抱きしめる)凝つとかうしてゐませう。(眼をつむる。)事實は默つて受けとるものです。

(月が窓からさし込み二人を照らす)

第五場

（食堂。長方形のテーブルをかこんで正面に主賓として金澤。その左右に教授A。教授B。助教授。教授B夫人。主人側として博士と青年。家政母は脇に立つて居る。金澤の側の少年の席と博士の側の令孃の席は空いて居る。——食後。卓上に花と果物。茶菓。あけ放たれた扉から樹木と月光。）

教授A。なにしろいゝ仕事（アルバイト）を澤山出してる點でこちらの大學は誇つてもいゝかと思ひます。

助教授。（煙草に火をつける）國内よりも外國での方がこちらの大學は寧ろ有名なのです。

金澤。F市は昔から殷賑な都會でしたが、今日では我が國の西南部の最も重要な中心地です。その上未來は無限と言つてもいゝ程豐富です。その潜勢力と言ふものは——例へばわたしが關係してゐる炭鑛の事業にしても——いや何しろあらゆる方面でF市の將來は目覺ましいものだと思ひます。

教授A。（紅茶を飲みながら）いゝ夜だ……何か匂つて來るやうだ。

家政母。アカシヤの花でムいます。

教授B。五月だから——空氣が氣持よく濕めつて居る。

教授A。あなたの鑛山迄鐵道がない事は甚だ不便ですね。

金澤。實はそれで事業のはかどる上に可成り支障があるのです。今では私もF市から山の事務所迄十里の道を自動車で往復してるやうな次第で——

教授B。輕便鐵道を計畫されたらいゝでせう。

金澤。それです。貨車だけのでもと思つて考へてゐるのです。その際は何れ御相談致しますから、どうぞよろしく。
教授A。さうなさい。お勸めします。さ迄困難な工程ではないでせう。
教授B。（新聞をひろげて見る）おや又坑内で瓦斯が爆發しましたな。
夫人。（眉を寄せる）坑夫三十五名死傷、四十七名行衞不明……酷い事です。
教授A。不祥事だ。だが仕方がない――犧牲者だ。俺たちの間にもかういふことはある。T市の大學のM教授は化學實驗中、藥品が爆發して盲目になつた。
（沈默）
金澤。（新聞を一寸見る）時々かう言ふ事が起つて困るのです。なんとか方法はないもんでせうか。
教授B。天然に起るのは……今の所未だどうも――然しこの問題も我々が研究すれば今に防ぐ方法が見つかるかも知れません。そう言ふ點から言つても今度の研究所を寄附して貰つた事は結構な事です。
金澤。いや色々御世話になつて居りますので――それにかう言ふ事は實業をやつてるわたしどもの義務です――時に御令孃はお見えになりませんですな。
博士。少し氣分が惡くて……我儘な奴ですから……
夫人。お孃さんがいらつしやらないとなんだか淋しう御座いますわ。わたし久し振りにピアノでも聞かして戴けるかと思つて樂しみにしてゐましたのに。
家政母。お孃さんもその積りでいらしたのですが……生憎おもてなしも出來ませんで。
博士。（青年に何か囁く）

青年。（退場）

助教授。（窓をあける）月だ。矛杉が仄青く煙つてゐる。

金澤。（ウエーフアをつまむ）倅はどうしたかな。

家政母。お見えになりせんですね。

金澤。あとから直ぐ來る筈なんですが。

家政母。電話を掛けてみませう。（去る）

博士。御子息はたちがよくて皆に可愛がられてゐますよ。

金澤。（にこにこする）なにしろ一人でしてな……直ぐ來ると言つてゐたんだがな。（時計を出して見る）

家政母。（登場）もうとつくに家を出られたさうですが。

金澤。はてな。

夫人。お孃さんに一寸でもお目に掛れませんでせうか。なんだか物足りなくて……

博士。（家政母に）御挨拶にだけ出るやうに。

家政母。はい（當惑の樣子にて去る）

教授A。學會の講演の準備は出來ましたか。

博士。大體出來ました。君のは三體運動に就いてでしたね。

教授A。さうです。今年は議論が多いでせう。

教授B。ぱき／＼論爭するんだな。容赦なしに。

助教授。そうです。いつ迄もＴ市の大學の古い人達に遠慮する事は要りません。
教授Ａ。學問の新しい、鋭い空氣を起さねばならん。
青年（登場。博士に囁く）
博士（渋面をつくる）
夫人。さつき庭を通つたのはあなたの息子さんのやうでしたよ。
金澤。（不審さうに）さうですか。
夫人。裏の方へ廻られたやうです。
金澤。今に此處へ來るでせう。どうもわたし位になると側に子供が居ないと淋しうムいましてな。あいつが側にゐて物を食つたり何かやつてゐるのを見てゐると變に氣持がよろしいのです。
夫人。でもそんなお年でもありませんね。
金澤。いや、奥さん。これでわたしは子供は可愛い方でしてな。
家政母。（登場。心の動搖を抑へ乍ら）お嬢さんが一寸先生にお話しがムいますさうで。
博士。みなさん一寸失禮します。（去る。）
金澤。（家政母に）悴が來てゐませんでしたでせうか。
家政母。（どぎまぎして）はい。見えてゐるやうでムいました。
夫人。なにかお取り込みがあるやうで……
家政母。いゝえ……別に。

（沈默。面が白らける。隣室で博士と令孃と言ひ爭ふ聲。

家政婦。一寸御免遊ばして（去る）

（教授たち顏を見合はせる）

夫人。（夫に）もう失禮致しませうか。

教授B。うん。

（興奮した令孃と青ざめた博士と這入つて來る）

博士。どうも失禮しました。

金澤。お取り込みがあるやうで。失禮致しませう。

博士。いやみなさん席にお着き下さい。

令孃。（立つた儘で一言も發しない。）

博士。（娘に目くばせする）御挨拶をなさい。

令孃。（沈默）

博士。（額に汗をそゝぐ）みなさんに失禮ではないか。

令孃。みなさん失禮致しました。わたしはみなさんに申し譯なく思ひます。然し殘念ですが、わたしはこの席に着く事が出來ません。

夫人。どうなさいました。

（突然ドアの外で二三人の激しい足音と言ひ爭ふ聲　それに混じつて少年の啜り泣く聲）

金澤。あれは伜だ。

令孃。父はみなさんをふさはしくない集りにお招き致しました。こゝに一人紳士でない人が席に着いてゐます。

（列席者一同立ち上る）

博士。（青ざめる）

青年。（令孃を制する）あなた――それは正しくない……

令孃。（益々昂奮して）その人はみなさんと席を同じくする名譽を持つてゐません。

助教授。それは誰です。

家政母。（飛んで來る。令孃を制する。）あなた……あなた……

博士。失禮千萬な。何んたる事だ！

令孃。わたしはあなたにお願ひしました。今晩の集りを呉れ〴〵も中止して下さるやうに。でもあなたはお聞き容れ下さいませんでした。わたしはお父さんの爲めに惜しみます。

博士。お默り。皆さんどうか席にお着き下さい。（令孃に）事柄は實にシリヤスだぞ！

令孃。そうです。人間の運命にかゝはる眞面目な事です。だからこそわたしは彼れ程お願ひしたのです。お父さんは餘りに嚴しさが足りません。

博士。（嘆息する）お前はもう發言して了つた。この上はもう名譽の證しが立てられねばならぬ。

敎授A。名譽の證しが立てられねばならぬ。

助敎授。我々は潔白だ。

教授B。我々の中誰が名譽のない人間なのか？

令孃。今晩の主賓です。

金澤。（立ち上る）名譽の證しが立てられねばならぬ。

（ドアの外に劇しい足音。續いて言ひ爭ふ聲。ドアがガタンと開けられ、少年がN子の手を引張つて飛び込んで來る）

N子。（少年を制し乍ら續いて這入つて來る）

家政母。（少年を抱き止める）

N子。（慄え乍ら突つ立つてゐる）

（一同立ち上る）

教授A。この女の人は誰です。

博士。わたしの助手です。タイピストの女です。

令孃。これは金澤さんのお孃さんです。

金澤。（色を失ふ）わたしはこの女の人を知りません

少年。（泣き乍ら）お父さん。姉さんです。姉さんです。

N子。いゝえ、わたしはあの人の娘ではありません。わたしは一人の職業婦人です。この家に雇はれてゐるタイピストです。

金澤。その通り……（慄へ乍ら）わたしは見覺えがない。

令孃。（渙昂して）それは本當です。このお父さんは自分の子の顏を一度も見た事もなければ抱いてやつた事もありませ

ん。キスしてやつた事も――その生ひ立ちを祈つてやつた事もありません。

N子。（唇を嚙む）わたしにはお父さんはありませんでした。

令孃。そう言ふお父さんが若しあるとしたら、それは名譽のある人間でせうか？

教授達。そうではない！

令孃。皆さんはそう言ふ人と握手する事を潔しとなさいますか？

教授達。俺達はしない！

助教授。裁きはどうなるのだ？

教授A。訴へられたものは見覺えがないと言ふ――本人も子供ではないと證言する。（冷めたく微笑する）それで明白ではないか。

夫人。この上裁きをする事は必要で御座いません。また賢くも御座いません。

教授A。我々の名譽の證しは立つた。もう引き取つていゝだらう

教授達。我々は失禮しやう。（各々帽子を取り夫人と共に沈默の儘退場）

（沈默）

金澤。わたしもこれで失禮します。

令孃。お待ち下さい。（父に）お父さん、あなたのなさるべき事が殘つて居ります。

博士。（默然として居る。）

令孃。お願ひしたやうになさつて下さい。研究所の寄附を拒絶して下さい。罪が償はれるまで二度と握手せぬことを宣

言して下さい。私はN子さんのために訴へます。

博士。（沈默）

少年。（家政母の手を振り切つて父のところに突進する。）お父さん。姉さんを認めて下さい。罪をおわびして下さい。

金澤。（沈默）

少年。姉さんを知らないなんて言はないで下さい。自分の子を――姉さんはそれは難儀をして育つたんです。

金澤。わしには名聲が要る。

少年。名聲が何ですか。それさへ捨てゝしまへば自分の娘が抱けるんぢやありませんか。

金澤。わしは生きねばならぬ。

少年。お父さん、お願ひです。姉さんを認めて下さい。僕を可愛いと思つて下さるなら姉さんを――姉さんを――

金澤。わしは生きねばならぬ。わしは社會のなかに生きねば……

少年。おわびして下さい。此處に居る人はみんな善い人ばかりです。お父さんがおわびさへなされぱみんな赦して下さるのです。

金澤。社會のなかに――

少年。おわびして下さい。悔い改めて下さい。

金澤。社會の……

少年。（父の足下に跪いてすゝり泣く。）

N子。（突然ヒステリックに笑ふ。）はゝゝゝゝ。

(ショファが一度を通過する。沈默)

N子。すべての虛僞が此處にある。甘さが、滑稽さが此處にある。

(沈默)

N子。卑怯で懶惰で此處の空氣は臭い。殉情で妥協で此處の空氣は甘酸つぱい。

(沈默)

N子。高い廉潔――それは此處にはない。義しい非難――それも此處にはない。正直な懺悔――それも此處にはない。

(沈默)

N子。無氣力が、腐敗が此處にある。窒息が。卑しむべきものが――すべてのブルジョア的のものが此處にある!

金澤。(呻く)社會が……

N子。社會が此處にある。その缺點のすべての面をさらして――怒りは、誠は此處にはない。苦しむものと幼いもの。只それだけが消い。それだけが人間だ。それだけがたましひだ!

(沈默。少年の痛ましく哭く聲。)

N子。幼いものよ、お泣きでない。お前の涙はむだに流れるから。もうそれは硬い心臟を動かしはせぬ。大人の心は――ブルジョアの心は化石してしまつたのだ!

少年。お父さん。お父さん。

N子。お父さんは私にはない。敵が私にはある。私のお父さんは私の敵! お父さんは私を知らぬと言つた。では私も言はう。私はお父さんを知らないと。でも私は見た。私の父と敵とを一どきに。これが私の憎む敵なのか。でも私

は愛します。これが私に生命をあたへてくれた父なのか。此のゆたかに肥えた、髪の少し白い立派な人が。でも此の人は私を抱いてはくれぬ。私を知らぬと言ふ。何て冷めたい言葉だらう。知らぬとは……

（沈默）

N子。でも私は惜しんでやつた。此の人に名譽を惜しんでやつた。此の人が社會に生きて行かれるやうに……（泣く）

令孃。あなたの耳には入りませんか。此の聲が、訴へが。あなたが捨てた赤ん坊は立派な娘に生ひ立ちました。あなたに愛を求めて居ます。なげいて居ます。

金澤。わしは社會に生きて行きたい。社會はわしのいのちだ。わしにも人の心がある。だがもう遲い。社會はわしの心に喰ひ入つた。社會をはなれてわしは生きて行けぬ。人間はわしをゆるすかも知れぬ。だが社會はわしを赦さぬ。

N子。左樣なら！　私は行かう。もう此處には何も殘つてはゐない。

少年。姉さん行かないで。行かないで。

N子。私は行く。行かねばならぬ。事業が私を待つて居る。左樣ならみなさん。

令孃。あなたは行きますか。私はもうあなたを止める勇氣がない。此處で――私たちの側であなたは不幸だつたでせう。私はそれが悲しい。私はあなたを引き止めたのだから――でも許して下さい。私はあなたを私の側に置きたかつた。あなたと別れたくなかつた。

N子。わたしも別れたくない。でも私は行かねばならぬ。何ものかゞ私に命じます。私は此處を搔き亂しました。あなたの明るい世界を泥足でふみ汚しました。――許して下さい。

令孃。あなたは私の眠りをゆすぶつてくれた。あなたは苦惱の息を吐いた。熱風があなたと共に來て、私の家のなかで

吹いた。それは私たちの安心した生活には强い刺激だつた。あなたに反感を持つものもそれは感謝せねばならぬ。あなたは私たちに要求した。生きることの苦しみにもつと拘はりを持つことを。あなたは要求した。社會の不正義をもつと烈しく憎むことを――私たちの內誰も感じないものはありますまい。もつとなやんで、決心して生きねばならぬと言ふことを――

博士。わしは抗議する。お前たちのやり方は充分に正しくはなかつた。時も處も得ては居なかつた。不用意と粗野、そして無智――(令嬢に)わしは言ふ、お前の態度は今晚決して、ふさはしくはなかつた。令嬢らしくはなかつた。

令嬢。私はN子さんのために訴へたのです。N子さんのなやみが私の立腹に代はつたのです。私のしたことは禮儀にかなはなかつたかも知れません。ですが禮儀は正義よりも重いものですか?罪惡は不作法よりも輕いものですか?此處に害を受けて惱んで居る人間がある。そして誰もその人のために悲しんでやらないとしたら?誰がその人のために訴へてやるのですか?告訴者は確かにゼントルではありません。ですが愛と憎みはカルチユアよりも重い――

靑年。罪人の告訴者が同時に敎誨者であることが出來るか?衆人の前で恥を與へたものが其の人に悔ひ改めをすゝめることができるか?僕は問ふ――僕は先生を辯護する!

令嬢。………

N子。冷淡な!被害者でないものが、被害者と悲しみを頒けないものが告訴者の心理を理解することが出來るか?

博士。(令嬢に)お前は少し出過ぎた。わしは今晚お前が幾分パリサイらしく見へたのが殘念だ。

令嬢。(赤くなる。)私はお父さんのために悲しみます。何故あなたはもつと惡をお憎みにならないのです?自分を淸くなさらないのです?罪に汚れた手がまだ淸まらない內にお握りになつてよろしいのですか?學問は――あなたの

神聖な學問は惡人の保護によつて支へられねばならないのですか？それは卑怯です。不名譽です。さあ、お願ひしたことを茲で宣言して下さい！

金澤。いや。それには及びません。私は自分で處置します。私は寄附の申出を撤回します。皆さんの寛大によつて。私はまだ公式には名譽を無くせずに居る。私はまだ社會に生きて行かれる。いやお孃さん、御安心下さい。私は二度とお宅にはあがりません。これで失禮します。（退場）

（沈默）

博士。（ぐつたり椅子にかける）すべては苦々しい。あゝたまらなく不愉快だ！

青年。高い空氣が缺けてゐる。一番高いものが此處にはない！その結果がかうなるのではないのか。憎みと裁きとが第一のものとして支配する世界では……

博士。祝福を――胸の透き通るやうな光を！

N子。もつと憎め！もつと裁け！

青年。誰も赦してはならないのか。惠みはないのか。

N子。呪だ。――惠みではない。被害者が求めるのは。呪だ！祝福ではない。――虐いたげられたものゝ訴へるのは。私は呪ふ無花果の樹を。春がめぐんでも實を結ぶな。建物の下には穴を！樹の根には斧を。街には火を――復讐だ。復讐だ！

青年。あなたの父をあはれめ。――復讐はもう充分ではないか。

N子。冷淡な――でなければ公平な（皮肉に笑ふ）裁判官さん！

青年。裁く者は他にあるのだ！
N子。左様なら！
令孃。N子さん。お待ちなさい。私もあなたと一緒に行く。
博士。お前。
令孃。私は決心しました。私は行きます。此處はもう私の育つ處ではありません！
家政母。あなた……あなた……
令孃。今日まで私は育てゝ貰ひました。明日から、ですが、私は世界に出ねばなりません、荒い海へ、疾い風へ！私はあまり安らかに生きて來た。あまり美しく夢みて來た。私の魂は欲します。もつと辛い事實に衝きあたることを。もつと濁つた泥の中を渉ることを……
青年。考へて下さい！あなたは間違へては居ないか？激情に足を浚はれるのではないか！
令孃。私はもう決心しました。
青年。あなたの本分は何處にある？あなたのエレメントは？あなたは光りの使ではないのか。祝福の鐘ではないのか。これまであなたは僕にとつてさういふ者だつた。其處に居る時あなたは一番鮮やかしい。あなたのたましいが麗はしく花咲く。其處から離れるときあなたは邪道に入るのではないか？自分の影を見失ふのではないか？
令孃。いゝえ、私はいばらの道に入るのです。悲しみの谷路に進むのです。それが邪道でムいますつて？私の肌は破れて血が出るでせう。私は岩角で骨を挫くかも知れない。でもそれは天國へ通じる道ではないの？賢い人がそれを私たちに約束しませんでして？

青年。賢い人は憎みを教へましたか。裁きと復讐との道が天國に導きますか。
令孃。でも焔と刄とを彼は投げました。反逆の魂を彼は吹き込みました。紅の鞭と呪ひと厨の掟を置きました。ソドムとゴモラよりまだ恐しく燃える街を――
N子。燃える街を！
令孃。「復讐は我れにあり、我れ必ず報いん」と。
青年。復讐は彼にある、人間にはない。
N子。復讐は人間にある。彼にはない。いつ彼は手を下すのですか。いつ彼は高い見物席から下りて來るのですか？
令孃。テレシアかジアン・ダークか？私は久しく迷つて來た。薔薇の雨か硫黄の雨か――私は今選ばねばならぬ！
N子。古い、我々の合言葉を知らないのか？「革命は薔薇の水では洗禮されない」と――
青年。自分の魂を失うものは一生を失うものだ！
令孃。母の血が私の血管の中で眼醒めたやうだ。お母さん！あなたは樫の樹の下で何を夢みたのです？無數の旗が林のやうに砲烟になびく戰陣に大衆を率いて進擊することではなかつたのですか？劍をとつて正義の戰の先陣に立つことではなかつたのですか？
N子。私たちのために立つて下さい！
青年。復讐のスピリツトに憑かれるな！
令孃。（一瞬間眼を閉ぢて立つ。彼の女は心内の聲に耳傾くるもの丶如く見える）
N子。私たちにいらつしやい！私たちは悅んで同志としてあなたを迎へる。虐いたげられてゐる我々を助けてくれ。我

々は生きた機械にされてゐる。あなたの姉妹をあはれめ。私たちは淫賣婦にとられて行く。私の母も私も汚された――あなたはそれを傍見して座つて空想に耽るのですか。斷簡集を編むでゐるのですか？本を捨てゝ下さい。私たちの仲間に來て下さい！

青年。目的はわかつてゐる。手段はどうだ？暴力の不正を憎むで立つものが暴力を用いやうと言ふのか？敵はパンを奪つた、だから我々は血を流さうと言ふのか？

N子。苦しい一日もない。一時間も！百人の女が今日汚される。千人の母親の乳が今日止まる。萬人の娘が今日石婦になる！！

青年。階級の壓制と人間の利己心とどつちが赤いのだ？どつちが源なのだ？どつちが我々の本當の敵なのだ？敵の正體を摑め！

N子。階級が敵の正體だ！

青年。利己心が敵の正體だ！！

N子。私たちは鞭の下で感ずる。彼等は机の上で考へる。私たちは着物についた火を消さうとするのだ。彼等は川の向ふの火を見てゐる！階級が敵だ！私たちはしつかり摑んでゐる。私たちは砲火を集めやう。私たちの敵に。階級に！

令孃。私は行く。

青年。あなたは行くのか？

令孃。經驗が私に缺けてゐる。未知の世界が私を招く。私は行かねばなりませぬ。私は弱い方に從はねばならぬ。それは生命の必然です。二つの靈が私の心の内でたゝかふ。

青年。愛はあなたを牽かぬのか。二人がなかの幸福は？　それはすぎてしまつたのか？

令嬢（なやましく）すぎてしまつたのか？　永遠にそれは過ぎはせぬ！

青年。僕の側に止つて下さい！　あなたが僕に光りをくれる。僕があなたに力をあげる。窓の下で庭の上で私たちは幸福だ。日日は黄金のやうに二人に來る。

令嬢。（數瞬間夢見るやうに立つて居る。）

N子。私は行かう。事業が私を呼ぶ。事業は愛より强い。いや愛と一つだ。

令嬢。私を行かして下さい。愛はすぎはせぬ。永遠に――それは私の魂の内で生きる。大きくなる。私たちの愛は眞理と結びついてゐた。眞理をまげて樂しむ愛ではなかつた。今眞理がわたしを旅に驅る。人生の廣い旅に――

青年。眞理は僕の側にある――僕はあなたを砂漠にやりたくない。

令嬢。先づ荒野に行かねばなりません。彼のやうに――試みがわたしに要ります。其處で本當に人間であることを學ばねばならぬ。

青年。あゝ。僕は殘念だ。僕にはあなたを止める力がないのか？　僕は信じる。眞理の星は僕の道を照してゐることを。だが僕はまだそれを摑んでゐない。それが僕を無力にする。――あなたを失はねばならないのか。

令嬢。私には力が要る！　今私は何よりそれが欲しい。力は何處から來る？　經驗から、苦惱から。私はそれを知りました。――私は行かねばなりません。

青年（沈默）私たちの道は別れた。僕はそれを承認する。

令嬢。あなたと別れて私は弱るでせう。私はそれを知つて居ます。でも私は行きませう。――私は今くだけてはなら

ぬ。

青年。もう止めまい。運命が命じるのだ。

家政母。これが別れか？　十五年間育てあげた私に此のやうにして別れが來るのか？　私の娘――私の嫁……私はさう思つてゐた。(涙を拭く)

令孃。(家政母を抱く)許して下さい。あきらめて私をやつて下さい。大きなものが命じるのです。

青年。僕は力には服從する。力は嚴肅だ！

家政母。(憎みの眼を以て)私が恐れた通りだつた。此の人は魔をつれて來た。そして天使を奪つて行くのだ。

N子。私は奪つて行く。私は掴んでゐる。私は力を持つて居る！

青年。僕は奪はれた。(聲高く)だがよく覺へて置くがいゝ。あなたは決して此の人の魂を貰つたのではないぞ！

N子。覺へて置きませう。あなたが私よりも強くなるなら……

青年。

N子。力は神聖だ！

(敬虔なる沈默)

令孃。わたしは慄へるやうだ。新しい感覺が私の身うちを貫く。未知の人生の旅がこれから初まるのだ！

博士。俺は止めぬ――俺は弱くはない。

令孃。(ひざまづく)許して下さい。

博士。お前はさまよふて行く――俺はさう思ふ。だがお前は止まるまい。人生は遠い――やつて見るがいゝ。お前が眞の自己を見出すまで――

（沈默）

博士。俺はお前に婦人の最高の教養を與へた。今俺はお前を人生に放つ。思ひのやうにするがいゝ。——俺の名を辱かしめな。

令孃。誓つてお父さんのお名を辱かしめません。

博士。（瞑目）お行き。

令孃。私は行きます。……これからお淋しいでせう？

博士。（淋しき微笑）俺の身を氣遣うのか？俺は安泰だ。誰よりも確かな世界に居る。神秘な學問の塔の中で、まつたく安全で、お前たちのさまよひを見て居やう。

令孃。では行きます。——左樣なら。

博士。お待ち。（令孃立ち止まる）一言——お前が傷き、破れたら俺の所へ歸つておいで。——行け。

令孃。（涙ぐむ）お大事に。——左樣なら。

（N子と令孃月光の中に出て行く）

少年。僕も行く。一緒に姉さんについて行く。

（後を追はんとする）

青年。待ち給へ！

少年。姉さんは行つた。姉さんは行つた。

青年。待ち給へ。君は一緒に行くべきではない。君には他の務めがある。君はお父さんの側に居ねばならぬ。誰がお父

さんを守るのだ。彼の人たちは裁いた。我々は愛さう。誰が君のお父さんの靈魂を惡から守つてあげるのだ?それは君の役だ。もつと尊い役だ!

少年。(泣く)可哀さうなお父さん!僕はさつきお父さんが慘めに見へてたらなかつた。

青年。僕たちはもつと高尙な事をしやう。もつと深い、内からの務めを──僕ははつきり知つた。彼の人たちのした事はまだ本當の道ではない。眞理はあの先きにある!それを僕たちはやらう。

少年。さうだ。お父さんはまだ悔い改めてはゐない。罪を淸めてはゐない。姉さんとお父さんとがあれきりになることはたまらないことだ。恐ろしいことだ。

青年。さうだ。君は姉さんとお父さんとの間を和らがせねばならぬ。その仲解者の役は君でなくて誰れにつとまる!

少年。僕はお父さんにも姉さんにもあんなに愛されてゐる。それだのに二人は敵同志だ。僕はお父さんと姉さんとを抱き合はさせなくては!

青年。さうだ。それが君に與へられたつとめだ。それをやりたまへ。

少年。僕はやらう。お父さんの事が急に氣にかゝりだした。お母さんはどうしたか知ら?僕は家に歸つて見やう!

青年。さうし給へ。君はお父さんから離れるな。君は平和の使だ。鬼を守る童子のやうにお父さんに喰つついて居給へ。

少年。(走り去る)

青年。(月あかりを走り去る少年の影を見送つて立つてゐる)

博士。(ソフアに深く、身を埋め、眼を閉ぢて居る。)

(沈默)

家政母。先生、悲しいことになりました。

博士。いや、起るべき事だつたのだ。(間)あまり傷まぬがいゝ。

家政母。あまりお氣の毒で。

博士。わしの事なら、わしは健勝だ。娘のことは氣にかゝるがわしは落ちついて居れる。わしには確乎たる世界がある。明日からまた仕事をはじめやう。(間)書齋に行つて少し靜かにしてゐたい。(立ち上る)

家政母。(頭を垂れ後に從ひ、博士と去る。)

青年。(ドアをあけベランダに出る。月光。沈默)俺は敗けた。奪はれた。俺は敗衄を承認する。(間)だが俺は信じる。眞理は俺のものだ。俺はきつとそれを摑む。俺は苦く敗れたが、未來は俺のものだ。俺はきつと勝つ。何故俺は敗れたか?其の原因はすでに捕へた。俺は決心して立つ。俺は靈魂の鬪ひを初める。(間。月を仰ぐ。次第に肢體から力が拔け、くづれるやうにうづくまる。)明日から俺の日は淋しい。俺のたましひは悲しみの鐘を撞く。あゝ。(面を掩ふ。彼の後姿は泣いてゐるものゝ如く見える。)

家政母。(非常に悲しい、喪のやうな面つきをして登場。しづかに青年に近づく)

青年。(身を起こす。)

家政母。お前に悲しみの言葉を言はねばならぬ。お前の花嫁は失はれた。

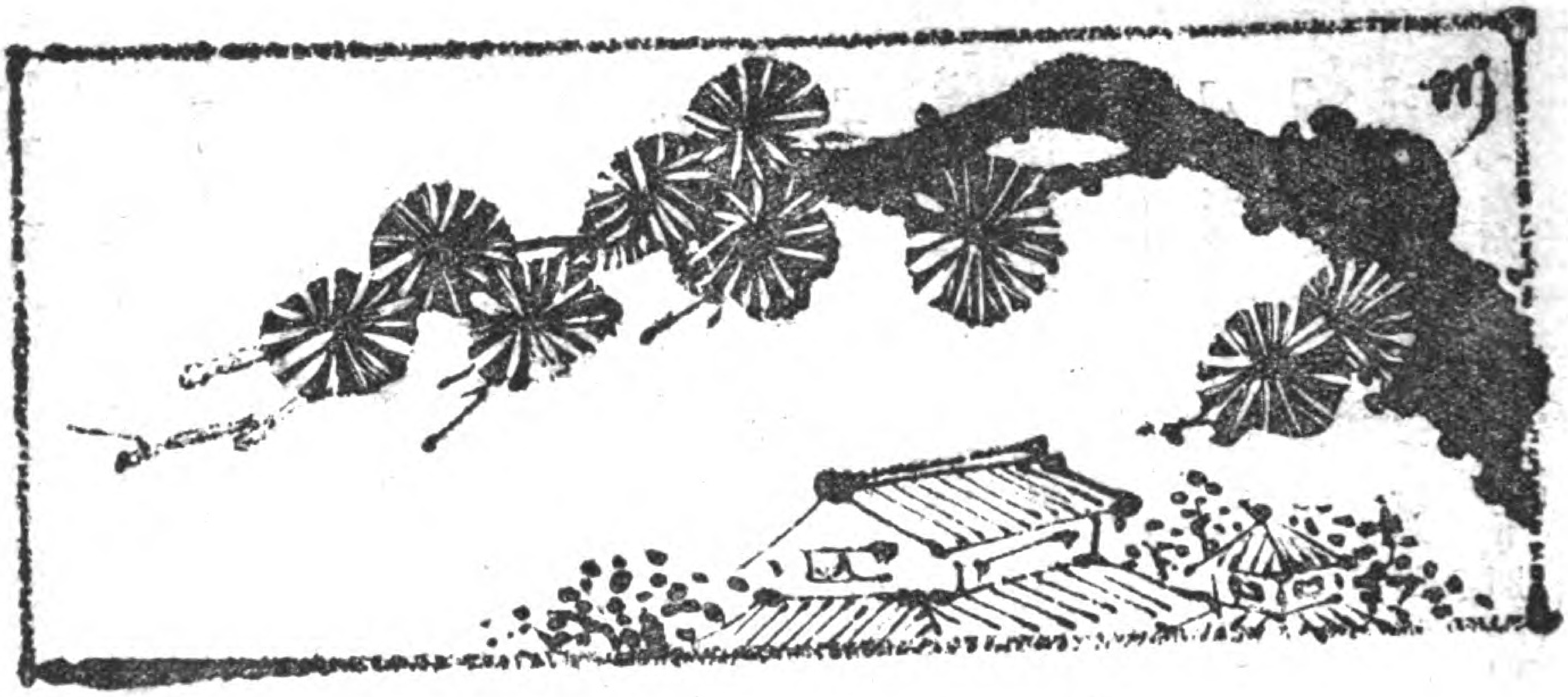
青年。(沈默)

家政母。(急に強い憎惡を浮べる。)私の花嫁は奪られた。敵をとつておくれ!

青年。（沈痛に）俺たちはまた見えるだらう。靈魂の戰の野に！新しいトロイに——其處で俺は奪られた彼の女をとり返すだらう。眞實に、彼の女の魂を購うだらう。

——幕

（第一部おはり）



この三つのもの

佐藤春夫

六

出迎へた女中は、客が北村だつたと見ると一禮を殘して玄關の次の間へ這入つたが、そこの帳場にゐた竹中の細君が、女中の知らせで改めて出迎へた。得意の客の送迎の用意のために、彼女はもう早仕度に夕化粧をして美しかつた。お八重よりは二つぐらゐは年とつてゐるらしい。彼女は家業柄で、下町風のつくりをしてゐたけれども、お神さんといふ風體ではなく、自づから奥さんらしい品位があつた。彼女は北村の連れを一瞥して、それが赤木だつたと知ると、あでやかな愛嬌笑ひを赤木にむけながら、

「おや、お珍らしい。暫くでございました。よくお出で下さいました」

腰をおろして靴を脫いでゐた北村は、こごんだままで先づ笑つて言つた、

「フ、フ、フ。奧さん、あなた赤木にはついこの間、有樂座で逢つたぢやありませんか」

有樂座で？　赤木がさう言はうとするひまもなく、竹中の細君は北村に言つた、

「あら—　いやな方。失禮な事ばつかり」

彼女はどうしてだか顏を赤くしたまま、逃げるやうに奧へ這入つてしまつた。

この問答も擧動も、赤木には一切わからなかつた。赤木は脫げやすい靴だつたので、ぼんやり上り口に立つて北村を待つてゐると、北村はやつと靴を脫いで上るなり、女中に言ひつけた。

「どこか、一つ、靜かなところへね。——この男と少し用談があるんだから」

彼等は二階の廊下を幾つか曲つて奧まつたところへ案內されつつあつた。そこを步きながら赤木は言つた、

「僕にいつ有樂座で會つたつて？　竹中夫人が？」

「フ、フ、フ。なに、それがをかしい話なんだよ、實にをかしい……」言ひかけて、北村は導かれた部屋へ這入つた。さうしてそこへ赤木を座らせると、

「僕はちよつと竹中に顏を見せて來るからね」

北村は出て行つたが、しかし、五分と經たないうちに歸つて來た。

「竹中が君によろしく言つたよ」

「何をしてゐた」

「ひとりで碁を並べてゐやがつた。退屈してゐるものだから、ここへ來たさうだつたがね。斷つたよ。」言ひながら北村は座つたが「ここに、ひとり別嬪の女中がゐるんだぜ。僕の氣に入つてゐるんだ。今に見せるよ、來るから。竹中にさう

言つて賴んで置いたからね」

赤木のだんだん氣が滅入つて來るのとは反對に、北村は快活さうに喋り出すのであつた。しかし、彼の氣輕げなのも仔細に見たならばわざとらしいものであつたか、若しくは自然でこそあつても病的なものであつたかも知れないのだ。赤木は、けれども、そんなことには氣づかないで、北村の快活げなのを多少小憎らしく思ふと同時に、一面には彼がこんな場合にそのやうな闊達を示すことが出來うのに服しないでもなかつた。

赤木は心持を變へて言つた、

「竹中夫人がいつ、僕に會つたつて」

「さう〳〵。有樂座の一件か。それがね實は奇々怪々なのだ。ハ、ハ、ハ、ハ」北村は話しもしないで先づひとりで笑つてから「つひこの間、さうさ、もう一ケ月も前だらうな。名人會か何か聞きに行つたんだね。さうして幕間でない時にトイレツト・ルウムへ行つたんださうだ。すると廊下をうろ〳〵してゐる男がゐて、それが一緒になつて彼女と同じ方へ歩いて來てね、その時には別に何とも思はなかつたが、さて用がすんで部屋から出ようとすると、さつきの男がちやんと扉の前に――婦人便所のなかへ侵入して來てゐてね、竹中夫人の這入つてゐる扉の前へ突立つてゐるんださうだ。夫人が扉を開けるのを待ち兼ねてゐて、いきなり唯ならぬけはひで夫人の方へ突入して來たんだつて、夫人は力一杯で突き飛ばして逃げ出したさうだが、痴漢だね、所謂。ひどい奴さ、そんな場所で、そんなことをする奴がゐるのかと思つて、どんな風體の男だといふと、何ちやんとした紳士らしい裝をしてゐるんだつて。顏はといふと、フ、フ、フ。夫が赤木さんかと思ふほどそつくりなんだつて――そんな事を君に言つちやいかんが、と、竹中夫人が言つたがね。アハ、ハ、ハ、ハ。旅行中でなけや嫌疑でもかけさうな勢だつたよ、ク、ク、ク、ク」

「くだらない、馬鹿な」赤木はさう答へたきり、それでも北村がいろ〳〵な聲を上げて他意なく笑ふのを聞くと、つひつき合ひに苦笑しないわけにはゆかなかつた。

靜かに襖間が開いて、ひとりの女中が大きな盆へ一面に小菜を運んで來て、それを卓子の上に並べ始めた。この女中はさつき、彼等をこの室に導いたものとは違つてゐた。北村は待ち兼ねてゐたやうに箸をとり上げると、女中が並べる片端からもう手を出して、むしやくしやと始めながら、眼つきでは赤木にむかつて、今來てゐる女中を見よといふ注意をしてゐた。

「御酒は？」手をついて女中がさう尋ねると、

「いらない」と北村は口にものを頬張つたまゝ答へてから「君もいるまい」と赤木をかへり見た。

「あゝ無用だよ」

「あとをなるべく早くだよ」

問答をする間も惜しいやうに口を動してゐる北村と、その性急とを女中はもう見慣れてゐた。さうして笑ひながら立つた。その後姿を北村は、やつぱりものを頬張つたまゝで貪るやうに見送つた。

「どうだい、あれだ」と北村は言つた。

「うん、僕はどうもよく見なかつたが、あくのないくつきりとした顔立ちだね」

「豊國の繪にあんなのがあるよ」

「さうかい、江戸末期といふ感じではあるね」

「さうなのだ。それが近ごろ殊にさうなつて來てね。聞けば茶の者か何かと出來てゐるらしいのだ。この家はそんな事

は存外やかましいので竹中が意見をするんだが、聞かないんだつて。だんだん傳法になると言つて、竹中がこぼしてゐるよ。惜しがつてゐるよ、あれでよく氣のつく賢い女なんだ。君は見たことは無いかも知れんが、豐國にあれによく似たタイプがあるぜ。あれならば器量も氣質も、僕は女房にして見てもいいね」

「僕は豐國はきらひだな。浮世繪ではやつぱり春信がいいね――靈的なところがあるだらう」

「さうだ、さういふ點は春信が第一だ。しかし僕は何と言つてもやつぱり浮世繪では――」

「――豐國かい」

「いいや」と言つてしまつてから北村は赤木の冗談に氣がついて笑ひながら「やつぱり、歌麿が第一さ。春信とは對立する世界だが。豐麗で……」

北村はまるで、彼等が今日ここへ出かけて來た用向を、しかも重大なものを忘れてゐるかのやうに見えた。そこで赤木は言つた。

「浮世繪論はいづれ後日に讓るとして――」赤木はお八重のことを言はうとして、ふと躊躇した。北村が問題にしてゐないのを、赤木だけが言ひだすといふ事が、別に理由なく赤木をためらはせたらしい。赤木はさう氣がついた時に、眞面目に言ひかけた言葉を輕くぼかして言つた、「で何かい。さつきの豐國なら女房にするが、お八重ぢや貰つてしまつてゐるものだが我慢が出來ないものかね」

それに答へて北村が口を開かうとする時、廊下の外で足音が消えて、さつきの女中が再び室へ這つて來た。赤木と北村とは默つて彼女の動作を見てゐた。

彼女が出て行つた時、箸と口とを動かしながら北村は言つた、

「よく見たらう。え？」

「うむ。君が氣に入るのは判るよ、あだなところがあるね、なか〳〵。惜むらくは少し背が低い」

「低いものか」北村は抗議した「あれが日本の女の普通だよ。そんな事を言へや、お八重なんぞあ……」

「お八重の方が高いだらう」

「高いものか。――あんな事を言つてゐら。惚れた欲目だね。お八重は、君、藝者などをしてゐたから、着物の着こなしなどでごまかしてゐるんだよ。裸になつてみたまへ脚の短い――」

「裸になつたところまで俺は見たことはないもの」赤木ははにかむやうに笑つた。

「見たいと言ふのかい」北村は快活さうに聲を出して笑つた。キャツ、キャツといふ音とカラ、カラといふ音との間のやうに響くのである。その笑聲が、ふと北村自身を淋しくした。さうして彼は押默つてひたすらに食つてゐた。赤木もやつぱりその間に食ひながら、その沈默を惧れ妨げるかのやうに、

「これはうまい」

と、ひとり言を云つた。

北村は箸を置いて、相對してゐる赤木の顏を見た。それから言つた――今までとは全く打つて變つた言葉つきである。

「君に聞くがね、一たい、君はお八重に頼まれたから仕方なしにこの相談を僕としようといふのかね。――それなら、僕も單に君の負はされた義務に對して申わけが立つやうな、簡短な返事をするよ。それをお八重に傳へれば君の役目だけはすむやうにね。それとも君は、もつと本當に積極的にお八重のことを心配して、必要ならばいつまでも、お八重の相談相手になつてやつていい程の心持が君にあるかね。それならばまたそれで、僕もそのつもりで君と詳しく何もかも

話し合はうと思ふのだが……」

　赤木は顔を上げて、北村の顔を見た。言葉つきもさうであつたが、北村の顔は不思議なほど改つた表情であつた。赤木は珍らしさうに北村のその顔つきを見つめてゐた。こんな表情がふだんは、北村の顔のどんな部分に裹み込まれて、匿されてあるのかを誰しも疑ふだらうと思ふほど、實に律氣極まるそれ故に好意をもつて眺めることの出來る顔つきであつた。しかし、この顔つきを赤木は今までに三度ばかりは確に見た覺えがあつた、いづれもお雪の事に關してではあつたが。――一度は四年ほど前の夏、お雪の世話はもうやめることにしたと言ひ出した時の北村の顔である。もう一度は、三年前の冬にどうしたわけであつたかお雪が突然に自ら進んで下谷の妓籍へ身を投じてしまつたことを、赤木に打明けて相談した時の顔であつた。もう一度は、二年前の晩春に、橘繁雄がお雪を妻にしたいと言ひ出した時、その意を橘とお雪との代りに傳へた赤木に對して見せた北村の顔がやつぱりこれであつた。一年に一ぺん見せる顔だ。お八重の爲めには始めて見せた顔だ。赤木は記憶の閃光のうちに浮び上る北村のこの顔つきをぢつと見守りながら、相手の言葉の意味を考へつつあつた。

「君の言葉の意味は、どういふのだか知らないが、僕はお八重のために盡してやりたい氣持は本當に持つてゐるよ。頼まれたからといふ義理だけぢやない。その場かぎりのものぢやないつもりだ。假に、萬々一、君がここでお八重をこのままうつちやらかしてしまふやうな事でもあるとすれば、尚の事、僕はお八重の力になつてやらなけやなるまいぢやないか。――義理としてもだが、それよりももつと僕の心持として、ね。因縁事見たやうな氣もしてね――さうだらう」

　赤木の答へも、北村の言葉つきに似て眞面目で自づと誠意が籠つてゐた。

「さうか」北村は言つた。滿足げであつた「それでいいのだ――僕が君に聞きたいと思つたのもそこだよ。それでは君

は、つまり、場合によつては、いつかもよく冗談らしく言つてゐたやうだつたが、お八重を女房にしてもいいほどの氣持まであるんだね」

「さう、その點だがね、そこのところを」赤木は言ひながら、食ひもしない東坡肉の一片を箸につまんで、しかしすぐそれをもとの皿の上へ殘しながら「そこのところを、實は僕も昨晩から考へてみてゐるのだ。が、どうも今がちやうどいい位のところらしいね——」

「——といふのは？」

「——つまり、自然の勢でさういふことに、お八重が僕の女房になるといふやうなことにだね、さうなるのが自然の勢ならば、僕は喜ぶだらうよ、僕ひとりとしては。が、それが若し、さうならなかつたからと言つて別だんひどく悄氣てしまひさうにもない。今のところ僕はお八重に對して戀といふよりもまだ同情の方らしい。その同情ならば深いつもりだが」

「なるほど、Pity akins to love だね。Pity から love への曲り角のところかな。それぢや、僕は君に打明け話をするが、僕の考へはもう決つてゐるんだ」北村はちよつと句切つてから微笑らしい表情をした「君、遠慮なくその同情を戀の方向へむけるのだね——僕はお八重を捨てようと思ふ。君は喜んでお八重を拾ふかい」

「でも、お八重は、お八重は君に捨てられて僕に拾はれる運命を喜ばないだらう。君の氣持は僕にも判る。僕の氣持なら僕が知つてゐる。だが一度はお八重にもなつて見ようぢやないか。今日出がけにも、君が便所へ下りたひまに、お八重はくれぐれも言つたよ。きのふは、君の相手がお雪なら自分はあきらめて手を引けるやうなことを言ひはしたが、子供のことを考へては、どうしても君に捨てられたくはない、氣に入らないところがあるなら、たとへ叱り飛ばしてでも

言つてさへくれればどうにでも直す、とさうくれぐれも言つたよ」

「君まで、竹中か何かのやうに、そんな事を今更言つちや困るな」北村は面倒げにさう答へた「──女がそんな際に、そんなことを言ふのは、君、それやただのセンチメンタリズムで、極り文句だよ。そんなことを一々とり上げてゐられないさ。缺點があれば直すなんて、それがおいそれと直る筈のものぢやない。根本から氣質が合はないのだから。そんなことは君が見てわかつてゐる筈ではないか。あの女は、君、馬鹿だよ……」

「──どういふ點が馬鹿なのだ。君は、いつも二言目にはさういふやうだが、僕もお八重と立入つた口を利くのはきのふが始めてぐらゐだし、君のいふのを默つて聞いてはゐたが、昨日今日のお八重の態度を見て、僕はお八重の馬鹿なところは發見出來ない。──もつと、とり亂したり、もつと馬鹿を發揮したりする女はいくらもあるだらう──こんな際なら、尚のこと」

「さういふ意味ぢやない。平生が馬鹿なのだ。昨日や今日馬鹿を現はすわけはないさ、女にとつては一生懸命な瀬戸際だもの」

「それぢやお八重も一生懸命になれば、馬鹿ではないわけぢやないか。平生だつてお八重を一生懸命にさせるやうに君が心懸ければ、彼女は馬鹿ではないわけぢやないか」

「それは理屈だよ、ただの。──それが僕には出來ないのさ。女だけではない男にしても、僕は氣の利かない人間とは一刻も居られない。一體にくど／＼と口を利くのが僕の性には合はない。だから、僕はたとひ藝術談などにしても、君がするやうに子供みたやうな人間を捉へて事をわけて言つて聞かすやうなのは嫌ひでもあり、うるさくもあり、第一出來ない。君が折々やつてゐるのを見かけても馬鹿々々しくなるほどなのだ。君にはさういふ柄にない親切げがあるやう

だ。だから、お八重などだつてさう苦にもやまずに傍へ置くことも出來るかも知れないよ。だが僕はさうはいかない。殊に生活の様式にしたつて君のやうに手輕るぢやないんだから、氣を利かしてほしいことがいくらでもあるんだ。手輕るな例を上げれば、僕が外出すると言つても、お八重は僕の外出に要するものを一とほり取そろへることすら出來ないのだ。ハンケチと言はなければハンケチは無い。カラが汚れてゐても言はなけやそれを取換へることも知らない。それで何かを出せと言へば、きつとそれの在處を發見するのが大へんなのだ。家中の抽出しをのこらずかき廻さなければならない騒ぎだ。出かけにいつもそんなことをされちやその不愉快は言語道斷なのだ。それなら、そんなにうちが忙しいのかと言へば君も見るとほり何の用事もありやしない。………」

「そんな事ぐらゐ」赤木は口を挾まうとするのを、北村は皆まで言はせうとせずに引取つた――

「些細な事だと思ふだらう。だが君、考へて見たまへ。日常の生活といふものはそんな些細な累積(つみかさね)なのだ。家庭(ハウス)の妻(ワイフ)の仕事と言へば、だから、そんな些細な事ばかりなのだ。それが出來ないとなると、つまり大部分、妻としての資格を欠ふ事になるぢやないか」

赤木は言つた「さうかと言つて、お八重は家のなかをいつもきちんと整理して居るぢやないか」

「それは然うだ。さうだとも。不しだらと言ふのぢやないよ、決して。寧ろ、それの反對だ。それだのに何も出來ないのだ。だから馬鹿だといふことになるのだ。つまり、僕の性格なり生活なりを、五年にもなる今だにまだ嚥み込めないのだからね。あれは氣質としては非常に家庭的な女なのだ。それでゐて家庭的のことが充分に出來ないのであつて見れば、全く女として何の取柄もないではないか。――まあ。子供が好きなぐらゐが取柄と言へば取柄だが、それにしたつても子供が十四五にもなれば、あれではやつぱり子供に對しても母としての權威が保てまい。僕は今までにも時々、お

八重のことを考へて見ては、あれが僕たちのやうな家庭ではなく、下町の商家か何かの平凡な家庭にゐたら幸福なのぢやなかつたか、と空想してみる事もあつたが、それでもやつぱり滿足にはつとまるまい。それにあの女はあれで育ちに似合はず心持にも大様な品位だけはあるのだから、それが家庭によつちや却つて向かない。だから結局、お八重の間に合ふのは、まあどこか大家の女中としてぐらゐなものだ。それもちやんとした賢夫人に使はれてね。女中としては女中頭ぐらゐの――いや、やつぱり駄目だらう。さうなるとやつぱり同輩を統率するに相當なだけの智惠が必要だからね。たつた一つ、これだけは不思議なことにあの女は料理だけはうまいよ…………」

北村は聞き耳を立ててから、ちよつと話を區切つた。北村は廊下で人が立ち留つたやうな氣がしたのだ。果して、北村の言葉が切れると、中であまりに熱心に話してゐるのに躊躇してゐた女中が、三度、料理を運んで來た。

「まだあるのなら一ぺんに持つて來給へよ、面倒だから」

「はい」

北村と女中とがそんなことを言つてゐるのを見ながら、赤木は、北村の今までの話を考へてゐるうちに、ふといつか北村が「文學をやるのに誠實などは無用だ。唯、聰明を要するのみ」といふ意味を言つたことがあつたのを思ひ浮べた。さうして今日とても北村は場合によつては「妻となるには誠實は無用だ。唯、聰明を要するのみ」と言ひさうな氣がした。さうして彼がその妻の問題に於て、妻がどれだけその夫卽ち彼に愛情を注いでゐるかは、一向に念慮のなかに無ささうなのを氣づいた。聰明のない誠實などは無いと、北村は冷たい哲理を述べるかも知れないやうな不滿を、赤木は感ずるのであつた。

「料理などは上手でも」と北村は言つた「君には一向用がないな。君はうまいもまづいも知らないのだから。この點、

彼女が君の妻となることは惜しいものだね、その代りには、時々僕が行つて賞味してやるよ」北村は、さつきのつゞきを半ば冗談によつてつゞけた「馬鹿で料理の名人といへば、ここの板場にもさういふのがひとりゐたんだよ、つひこの間まで、ねえ、君」

まだそこにゐた例の美しい女中に、北村は一言だけ話しかけた。女中は、客の言葉に同意するしるしの笑顔を、白い歯並に現はしながら出て行つた。

「それでは君は、お八重には何の愛情をも持つてゐないのだね」赤木は、他に人のゐなくなるのを待ち兼ねたらしく言つた。

北村は答へた「さうだ。――それは可愛さうとは思はないではないが」

「その Pity を love の方へ導くわけにはいかないか」

「ところが、それは love の方へ行くべき Pity とは違ふのだ。まあ。言はゞ青年がわからずやの親父やおふくろなどに時々持つやうな、そんな種類の不憫だね。まあ、Pity だけが勢一杯だ。それ以上どうにか考へてゐると、なまなかその感情があるだけに腹立しくなるぐらゐなものだ」

「さうして、君はお八重が君に對して注いでゐる深い愛情は認めないのだね」

「それはまあ、認めてもいいが。………それだからと言つて僕にも、それに答へる同じやうな愛情が湧いて來なけや、これは仕方があるまい。――要するにただうまが合はないのだよ。何から何まで。理屈はない、ただそれだけの事かも知れない。それがしかし男と女――夫婦の場合にはどんなに困ることだか、デリカアなところは、やつぱり君にも判らないだらうなあ」

「しかし、捨てられたお八重はどうすのだ。――その君に對する愛情をだよ」

「そんな事は心配することがあるものか。あの女はそんな深い悲しみなど持てる女ぢやないよ。ただ柔順なだけの家畜見たようなものだ。靈性などはありやしないのだ。その點も僕には氣に入らないのだが、靈性どころか、人間らしい意地も張りもあるやうなのぢやない。せめて、そんなものでもあれば、きつと僕は少しはお八重を愛しただらうに、しかしあれは、唯もう愛せられたいばかりに、何でもいい、打たれようが蹴られようが、びく〳〵しながら尾を振つてゐるやうなものだ。それだけの事さ。――それや僕に捨てられれば悲しむには違ひないさ。家畜だつて主人を見失へば悲しがるからね。しかし次の主人が別に出てくれば、前のなどは、けろりと忘れてしまふのだ。現にお八重にはさういふ例があるんだ……」

北村はもつと話しつづけさうであつたが、その例といふのは直ぐには言ひ出しもしなかつた。それがどういふ事であるかは判らなかつたけれども、赤木は北村がお八重に對して、そのやうにひどい批評を下してゐるのを聞いてみて、北村の感情がいかにお八重から遠いかを、今更のやうに痛切に感ずると一緖に、却つて赤木自身は自分で思つたよりもつと多くお八重を愛してゐたのにも氣づくのであつた。といふのは、北村のお八重を許し去る言葉が赤木に憤を感ぜしめたのだ。その憤は、しかも、この男は何の權利があつてあの女をかうも傷け得るだらうかといふそれよりも、自分の愛する者が輕んぜられるのを聞く人の怒の感情に近かつた。

「ふむ。それぢや、君が愛するお雪には立派な靈性があるとでもいふのかね」言つてしまつて赤木は、自分の語氣を柔げるためにつけ加へた「――餘計な事かも知れないが……」

北村は、しかし相手の言葉などを受付ける樣子もなく、闊達げに答へた――

「お雪か。あれは、君、猛獸だよ。しかし僕は家畜よりも猛獸が好きだ。我儘でいき〳〵としてゐる。同じ獸なら家畜よりも僕は猛獸を擇ぶね。たとへ嚙み殺される惧れはあつてもね。いや、その怖れのためにもつと猛獸を愛するかも知れない。恐怖といふものは一種の强い魅力だからな」

北村の言葉は昂然たる響を持つてゐた。赤木はかつて、北村にお雪と同棲することの危險を折にふれて說いたことがあつた。それは北村の生活を搔きみだし、藝術に對する精進を妨げ、つひに遠くない未來には、お雪は平然として悄然たる北村を捨てて、新らしく青春を持つてゐる男へ走つて行くだらう。さうして、その時、始めて北村にはお八重が思ひ出されるに違ひない。さういふお雪を、さういふ北村を既に目に見るやうな氣持さへする。――以前に北村に對して赤木が言つたこれらの言葉を、北村は思ひ出してゐたから、赤木がお雪のことを何か言ひ出しさうなのを知つて、北村は、再びそれを言はすまいとしてゐるのである。敏感な赤木はそれを推察した。同時に寧ろ猛獸を擇ぶといふ言葉にも、恐怖は魅力だといふ考へにも、北村らしさを認めなければならなかつた。

「それでは、君はお雪と同棲するつもりなのか」

「いや、それはこの際必要のない事だ。決定しない事だ。しかしお八重と別れることだけはもう動かない決定だ。さうだ、もしお八重がお雪のことを聞いたら、何もかも言つてしまつてくれ給へ――さうして、これから後のことは、まだわからないつて、ね」

赤木は默つてしまつた。大して意味のない溜息が思はず出て、赤木はひとり言のやうにつく〴〵と云つた――

「お八重には何の缺點もないのだのになあ。溫い純粹な心持を持つてゐる女だ。快活でもあれば柔順でもある。何よりの事には人を疑ふといふことを知らないのだ。馬鹿かも知れないが偉いやうな氣持がする……」

「そんな事を言ひ出したつてしようがないではないか」北村は一瞬間當惑に似たやうな顔付をした。が直ぐに「要するに家畜だからさね」さう言ひ直して今度は多少、赤木を揶揄するやうな口調になつた「さういふ風に君が思へばこそ、女房にしてもいいやうな心持にまでなるのさ。」北村の口調は三度變つた。最後には稍しみ〴〵とした心持を帶びてゐた「——また事實、お八重には何の缺點もないのだ。それは全く、君のいふとほりの女だよ。それならばこそ僕は、ともかくもまる五年も我慢した來たのだからね」

(君は、決して我慢はして來なかつたぢやないか！ 唯、お八重をだまして來ただけぢやないか！) さう赤木は言ひたかつた。若し北村がしみ〴〵とした調子に變らなかつたならば、赤木も或は言つたかも知れない。けれども一たいに弱氣なところのある赤木は、北村に對しては今までの交際から自づと一層遠慮勝ちになつてゐた。

一たい、赤木を不遇のどん底から拾ひ上げて光榮を浴びさせたのは、北村その人であるといふ事實を、赤木はいつも念頭から失はなかつた。さうしてさまざまな感情に於て容易に人を許さない赤木には、一たん許す段になると最も深く感銘する氣質があつた。事實は囘を改めて、いづれ說かれる筈だけれども、肉身の弟に對してさへさういふ點にかけては冷い北村が、赤木の出世のために盡した友情に就ては、世人がさうであると同じように赤木自身、不思議に感する程である。それだけに、赤木が北村に注ぐ感謝と敬愛とは自ら深かつた。さうしてただ藝術上の自尊と從つてその議論との外では赤木は、一切、年長の北村にひけ目を感じてゐた。自ら遠慮がちであつた。また、世俗を無視して飽くまでも自我を屈しまいとする北村の氣魄を、赤木は自分の弱氣に比べていつも畏敬してゐた。

默つてしまつた赤木の疲れた頭のなかへ、……痛いのです。ここのところです。とさう叫んで胸を指して泣き崩れたお八重が、ふと現はれて消えなかつた。お八重を思ひつめてゐる赤木を北村は、直覺した。

「君は」と北村はちつと赤木のひどく中高な顔を、今更のやうに珍らしさうに見ながら言つた「本當にお八重を愛してゐるらしいね、君は」

目を上げた赤木に對して、北村は重ねて言つた。眞心のある調子であつた「この場合、君があることは、お八重にとつて實に幸福だよ。僕にとつてもだ。君もいろ〳〵と今までに女には苦勞をしたらしいが、その點はお八重なら大丈夫だ。君もきつと幸福になるだらう。それにお八重と君とは氣質も合ふよ。いろんな趣味が一致するだらう。さうして君のやうな對社會的な欲求の少い文人氣質を、お八重は多分よく理解する――といふよりは、さういふ人間の忠實な妻としては向く。それに君はあんまり馬鹿をうるさがらないたちだからな」嘲ける意味はなく北村は笑顔を示した「君にならば、僕は安心してお八重を托せるやうに思ふ。僕だつてもそれぐらゐの心配は、してゐるんだよ――お八重の後の爲めぐらゐはね。僕は以前よく、お八重を離縁してしまつて、遊藝の師匠にならせようと思つたりした。それなら、あれにも出來さうだし――大した才能はないまでも、とにかくさういふ社會にゐただけに趣味はわかつてゐるから、手ほどきぐらゐは少し稽古すれば出來るだらう。出來ないうちはどうにでも補助するとして、そのうちには師匠ぐらゐはつとまるだらう、とさう考へたが、お八重の馬鹿なお人好しなところを考へると、さういふ生活にともなふ危險や不幸が案ぜられた。いろんな人間が出入してゐるうちに、惡い奴にだまされさうな氣がしてね……」

「君が何故そんなにお八重を嫌ふのだか、それが僕にはわからない。第一、歸つてお八重に報告のしようもないではないか」

「それは、今までに述べたではないか。ただうまが合はないのだ」

「しかし捨てられたお八重はどうするだらう。君に對する愛をどういふ風に片づけるだらう。僕がお八重を愛して、お

八重が僕を愛する氣になれないかも知れないではないか――ちようど、お八重が君を愛しても、君が、お八重を愛しないやうにさ、運命といふものはいつに限らず意地惡く出來てゐるものだから。――僕は、昨晩のお八重をさつきから思ひ出してゐるんだが、いろんな不安なことが考へられるのだ。――あんなことはいつもあるのかい」

「大丈夫、大丈夫。まさか死ぬものかよ。そんなことがあるものか――死ぬやうな女なら、もつと早く何もかも知つてゐるさ。昨夜のはただのヒステリイの發作だが」

「時々、あんな事がある？　あんなヒステリイが癖になつてゐては、いかに君の推賞でも僕も考へ直すがね。――僕はもうヒステリイには、美代子で參つてゐるからね」

「美代子などとは違ふよ――あれは見るからのヒステリぢやないか。あれのなかにあるのはせいぜいヒステイ、、、美（ビユティ）ぐらゐなものだ。お八重は本來ヒステリイどころか、實にのんきな腹の立つほど無神經な女だ。ヒステリイだつて神經的のヒステリぢやない。生理的のヒステリイ――妙な言ひ方だが。つまりね――」北村は言ひかけて、ちよつと躊躇してから「性的亢奮（セキシユアルエキサイトメント）の變態なのだ。…………僕はあれとはもう半年近くも夫婦のことは行はないのだ。あの女は、僕にどうしても、さういふ心持を起させないのだから。何の心持もなしにさういふ行爲が出來るものか。嫌はれてゐると知りながら、さういふ要求を持つといふことが第一、間違つてゐるのだ……」

「それは理屈だ」と赤木が口を挾んだ「だが、それはやむを得ぬ事ではないか」

「何故」

「だつて、こればかりは自分の事であつて自分のせゐではないやうなものだ。生きてゐる力の一つだからね。背負はされた重荷の一つだからね。――君自身は一たいどうだ。さうは感じないか。況んや、そんな永い間。君は女房を尼にし

ぜ選ぐやもりがなら」[illegible]

「それならそれで、嫌はれてゐる亭主などより、別に相手を求めればいいではないか。――男でも何でも勝手にこしらへるさ」

「それなら、君は、お八重にさう言つたがいい」

「まさか」北村は苦笑した「しかし、言つてそれが出來るやうな甲斐性のある女なら、それはまたそれで面白いのだ」

さう言つた北村の言葉には案外眞面目な樣子があつた。

赤木は北村の矯激な言葉に今更多少おどろきながら、彼等は夫婦間に於ける性的生活に就て立入つた談話を交した。夫婦の生活に於て性的生活も亦、決して閑却出來ない一面だといふことを彼等は感じてゐたからである。北村と赤木とは、今、不幸な一對を論じてゐる。

「君は」と北村は言つた「to make love-scene といふ言葉を知つてゐるかね」

「それがどうした？」

「お八重には、つまりそれが出來ないのだよ」

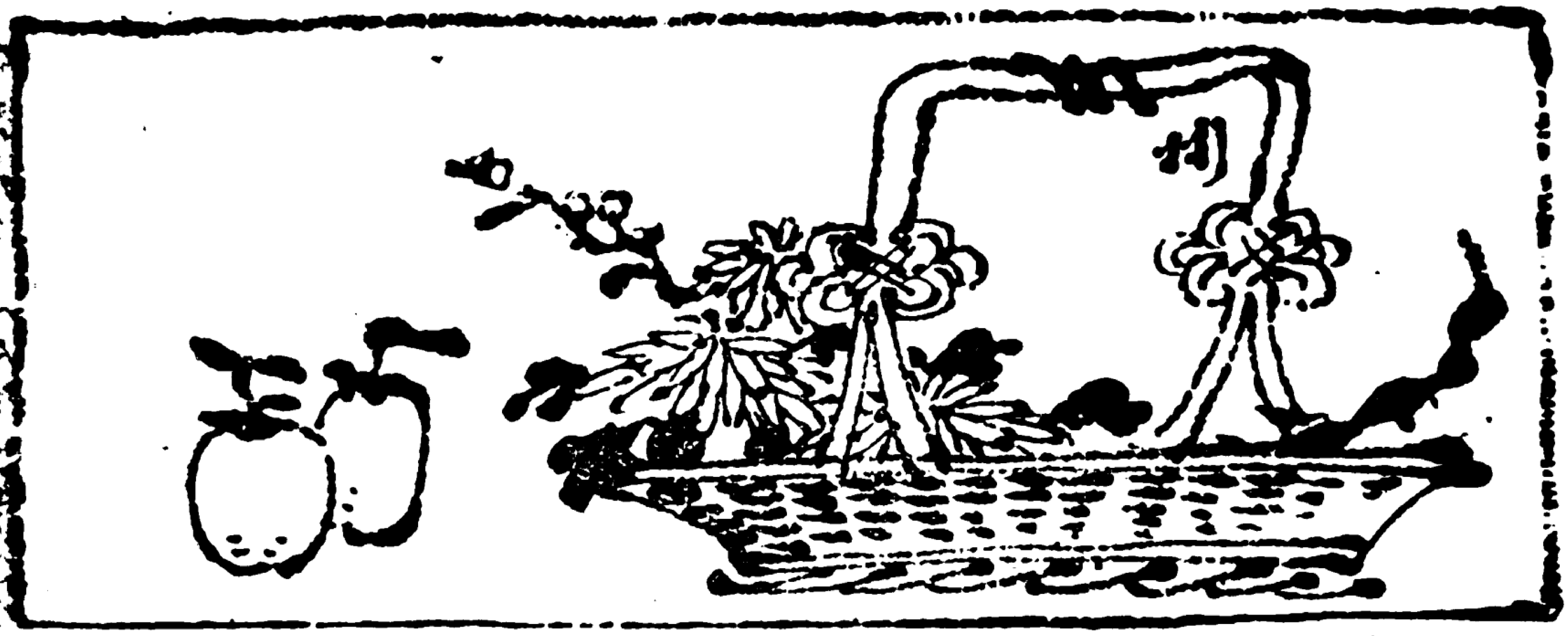
北村は口早に小聲で、いつに似合はない恥羞の色を示しながらさう言つた。さうして彼自身の性的生活に關する告白を始めた時、罪は決してお八重にはあり得なかつた。赤木は相手の語るのを聞きながら、好んで異常な性慾を取扱ふ北村の作品が、ただクラフト・エーピングなどの研究報告書などからその取材を見出した以上に、もつと因つて來るところがあつたのを知ると同時に、よく彼と一緒に入浴するやうなことがある時に見る北村の體格を思ひ浮べたのである。それは女性の骨格を見るやうに全く扁平な胸を持つてゐた。そのことを赤木が言ふと、北村は更に自分の頭部や耳

などに就て自ら言及した。さうしてそれが、ロンブロゾオの說によると犯罪者乃至變質者のものに相當してゐると言つた。彼の言葉に依ると、彼の祖父の兄弟か何かにあたる人に此上なしと言はれた放蕩家がゐて、北村の血のなかにはさういふ人の性格が生きてゐるを自ら認めると彼は告白した。彼は性的昂奮を恰も人生そのものの祝祭のやうに感ずるらしい口吻があつた。又、彼は女のなかには肉體の外に精神もあることを失念してゐるらしかつた。さうしてお八重の典型的女性を侮蔑する代りは、お雪の驕慢と放縱とを愛した。寧ろ禮讃した。北村にとつて世にお雪の足ほど美しいものはないかのやうであつた。それがいかに美しいかを言はれて見ても、赤木はそれを思ひ出すことさへ出來なかつたのに。北村は美人の鞋（くつ）を盞にして飲むといふ金蓮盃の瘋狂をさへ解せないかのやうに、赤木には思へた。食慾に於て美食家であり大食家である如く、北村は色慾に於てもそのとほりだと、自ら言つた。かつて赤木が美代子の事件から受けた精神的の苦悶から生じた神經衰弱と焦悴とを、房事過度の結果だと北村が觀察した事があつたが、それは赤木をよりも寧ろ北村自身をより多く語つてゐたらしい。

「僕が」と北村は言つた「異常に食を愛するが如く色に於ても亦然りといふ、這般の消息がわからなければ、結局君には僕たちの夫婦關係の眞の問題はわからない事になるのだ。君は××氏が近ごろ古い妻君を捨てたといふ話を知つてゐるかね。それもあの年になつてさ。××氏はしつかりしたプロフエッサアでもあり、一見謹嚴な英國流の紳士だ。さうして女の問題では今までも時々そんなことを耳にするのだが、僕はあんな人のなかにも、ずゐぶん異常な性的生活の人がゐるのぢやないか。それが案外に離婚の眞の原因であつたりすることがあり得るやうに思ふ――××氏の事はよく知つてるわけぢやないが。一たいを言へば、僕はもつと早くお八重と別れるべきであつたのだ。いいや、結婚した事さへ既に間違つてゐた。しかもそれは結婚すると直ぐに氣づいた事なのだ。僕がお八重を離婚したいといふのは、永い間の

懸案なのだ。へんな關係で結婚をしてしまつて、へんな工合で離緣する時機さへ失つてゐたのは恨めしいと言ひたいくらゐなものなのだ。をりにふれては、斷片的に君にも話したことはある筈だが、そも〳〵のことから改めて、この際君にも話した方がよささうだ——お八重といふ女の身の上や性質などもよく判るのだから。その意味でも、お八重を女房にしようといふ君ではあり、一應聞いて貰ふのがいいやうに思ふ……」

北村は煙草を一本とつて火をつけながら、再び例の律氣な仔細げな表情で煙をおもむろに吐き出しつつ、腦裡に往來する過去をもう一度よく見定めるかのやうにしばらく沈默した。さうしてやつと彼は語り出した——



戯曲

生きもの(一幕)

犬養健

人物

杉惣二郎　六十四五歳　ある邸の執事

村野安夫　二十五六歳　同書生、大學生

あい　十八九歳　同女中

中島　四十三四歳　私立探偵所員

時　大正三年ごろの九月下旬

場所　東京山手

ある邸の書生部屋。正面左端にあらい鐵格子を入れた二枚障子の窓。障子開いてある。窓の外に大きい銀杏の幹[illegible]

窓際に机。机の上に硯箱、會計簿二三冊。机の左の壁に電話器、電話番號帖など。[illegible]電話器の横に大學生の制帽かけてある。

正面右手寄に襖、襖少し開いて奥の小さい部屋見える。奥の部屋、こつちの閾近くに執事杉惣二郎の病床。但し襖の陰になつて枕元のごく僅かしか見えない。枕元には氷嚢を釣る道具、藥瓶を載せた盆。盆には白い布。病床は全く靜か。

手前の部屋の左側面は格子窓。窓は帶の如き形で壁を横斷してゐる。障子開き、外の植木見える。——右側面は襖にて他の部屋に通ずる。

村野、机に肘つきながら電話器に向つてゐる。袴をはく。あい、その近くに座つてゐる。桃割、小柄な娘。

幕開きの會話は、奥の部屋にどこか遠慮した心持あつて行はれる。

黄昏に近し。障子に西日。村野の電話の音。

あい　（印を額の高さに擧げ、昂奮の面もちであらためてゐる）

村野　（受話器を耳にした儘）探偵所で感心するよ。

あい　（今更驚くやうに）うまく似せたものねえ！

村野　九分どほり出來上つたつていふところかな。はあ〳〵。話中。

あい　もう四五日も分らずにゐたら大變だつたわね！

村野　そのかはりすぐに捕まつたさ。何年位くらふのかなあ。（顎で指す）まあ、使はないうちに卒倒したのが爺さん

には幸運だつたのさ。もし〳〵。もし〳〵。林田醫院でいらつしやいますか。(混線)――どうしたんだ。

あい　ほんとねえ。(首をかしげる)でもわたし、今朝驚いたわ。

村野　(控へ目な冗談)僕は學校へ行つてゝ助かつた。

あい　さうよ。あなた居ないんですもの。奥様はすぐに、年寄のことだから電報をうつて仰るんでせう。わたしたち、杉さんの證人のところなんて知らないものだから、すつかりあはてゝしまつて……

村野　(片手で輕く机をたゝいて見る)よくこれが鍵なしで開いたね。君がた手際がいゝや。

あい　何云つてるの。そつちの曳出し、錠前がわるいのよ。それでなくつちや。(笑顔)

村野　(制す)おい〳〵。(奥の部屋を顔で示す。それから曳出しをわづか開け閉てして見る)古くなつたんだ。壊れた曳出しに入れて置くなんて、杉さん運がわるかつたね。

あい　(印をつまむ)ひよつこり出て來たのよ。おたねさんがね、これはお奥の小切手のに似てゐるつて云うんでせう。(無邪氣に)わたし何だか身體が震へてしまつたの。

村野　七年間、何してゐたかな。(電話の音)なんだ、切れないのか。(對ふ)はあ〳〵。左樣でございます。はあ。先生へどうぞおつなぎ下さいまし。

あい　(稍々庇ふ心持)救世軍つていへば、信者でせうにねえ。

村野　救世軍だつて、どういふ風に轉げ込んだものかなあ。それに古い話だもの。(制す)一寸靜かに。――もし〳〵。(あいに)君、その唐紙(からかみ)を閉めといてくれないか。(あい閉めて來る)――はあ〳〵。あゝ林田先生でいらつしやいますか。どう[illegible]只今[illegible]安靜に[illegible]居[illegible]ます。

はあ、容態はまだあまりはつきり致しませんやうですが。――はあ、今しがた計りました。（あいに）熱は何分だつたつけね。

あい　四分ですよ。

村野　七度四分ださうでございます。――鎮靜劑を。――承知いたしました。それから先刻一寸お話し申しあげました中島さんの件ですが、――中島さん。（多少遠慮して）私立探偵所の――タンテイ所の中島さん。――はあ、實は只今お見えなのですが、本人との對談は今日はいかゞなものでございませうか。――はあ、はあ。――（間）わたくしもさう考へますのですが。――明日まで。――はあ、承知いたしました。どうも有り難うございました。では明朝お待ち申しあげます。（電話を切る）

あい　先生は何ですつて。

村野　こみ入つた話は、あしたもう一度診察してからの方が、まあよからうとさ。

あい　さうよ。ぐつと上氣せて、どうにかなつたりしたら……

村野　それほど重くもなさゝうだが。（控へ目な揶揄）心配かい？

あい　（ある嫌惡）いゝえ。

村野　僕はまたおあいさんの事だから……

あい　（首をかしげ卒直に）わたしね、あの人何だか恐いの。でも、あんまりそんな風に思つてゐたもので、氣の毒なやうな氣がしてゐるの。

村野　何となく得體の知れないところで、いけないんだなあ。――でも明日調べられちやあ。やれ／＼。

あい　（やはり不安を見せてしまふ）その儘、警察へ連れて行かれるかも知れないんですか。
村野　そんな事はないさ。
あい　ぢやあ探偵所つていふと。
村野　それあ頼まれた事を調べるだけさ。——奥さんはそんな事あなさりはしないよ。
あい　（考へる）さうでせうねえ。
村野　旦那様お留守中だしな。
　時計、六時半を打つ。（觀客に見えぬ方よし）
あい　（仰向く）あちらでお話の濟む頃ね。行つてませう。
村野　（印を指す）それを持つて。それから今の電話のことを。
あい　えゝ。（印を帶に入れようとして）何か、これを包んであつた紙がありはしなかつて。
村野　うん？（一寸見廻す）その儘でいゝさ。
あい　さう？わたし次手（ついで）に藥局へ行つて來よう。處方の紙はこゝでしたわね。（机の端の會計簿の頁の間から處方箋を引き拔く）
村野　（疊の上を片づけながら）うん。その鎭靜劑つてやつは、ほかの藥とはどのくらゐ時間をおいたらいゝのか、聞いといて貰ひたいね。
あい　えゝ。（猶も會計簿の或る頁の間を覗いてゐる）村野さん。こゝにあつたぢやないの。
村野　え。

あい（[illegible]）（會計簿の間から、手紙の書き反古のやうなものを抜き、熟視）これ變なのねえ。（再び讀む。不安な聲）これなあに！

村野　（振り向く）どれが。

あい　これ、判をつゝんであつた紙でせう？だけれどこの文句はなあに。（讀む）「小生只今は…………」

村野　（あいを直視）――おい。

　村野、工合のわるい顔

あい　（不安に）どうしたの。村野さん。

村野　おい。君は爺さんに思ひ遣りがあるから話すが……

　奥の部屋で夜具の裾の襖にぶつかる音。低い咳。

あい　どうしたんでせう。（襖を開ける）杉さん。どうしたの。

　杉恕二郎こつちへ寝返りを打つ。短い半白の頭髪。半白のまばらな髭。意識不明瞭の顔付。

杉　（眼を開く。聞えない表情）何だね。

あい　（聲を高めて）どうかしたんですか。

杉　咽喉がかはいたよ。

あい　（コップに水を注ぎながら村野に）このくらゐ？

杉　（焦々と）早く呉れよう。（眼をつぶつて飲む）

あい　これ、取り替へてあげませう。（氷嚢を外し、枕元で氷を缺く）

杉　村野さんもそこにゐるのかい。
村野　ゐますよ。どうだい、少しは納まつたかい。
杉　もつと大きい聲で云つてくれ。
村野、(聲を高めて)少しは鎭まつたかい。
杉　あゝ。だが頭が痛くて、耳がよく聞えないよ。
あい　わたしが今、お藥とつて來てあげるのよ。
杉　(低く)村野さん。
村野　えゝ?
杉　さつき電話をかけて居はしなかつたかい。
村野　ゐたよ。なぜ。
杉　(紛らせて)なに、わしが寢込んで、急に用が多くはないかと思つてな。
村野　そんな心配はないよ。――さつきのは君のことで、醫者にかけてゐたんだよ。
杉　醫者か。どこの醫者だね。
村野　なぜ、そんなに根掘り聞くんだい。
杉　なに、いゝ加減な醫者だと困るからなあ。少しかゝりが要つてもな。
村野　(稍々嚴しく)林田醫院だから安心したまへ。
杉　(聞えぬ振する。欠伸)

あい　（氷を入れた氷嚢を持ちあげて見る）少ないわね。もう少し缺きませうね。（氷を缺く）

杉　（急に不機嫌に）もういゝ。もういゝ。頭の上でさうキン〳〵やられて堪るかい。

あい　はい〳〵。

杉　今度から向うでやつておくれ。

あい　（氣立よく）ぢやあさうしませう。（氷嚢をつけてやり、氷を入れた桶を持つて立つて行く）

杉　（舌打ち）足音が響くなあ。こゝを閉めてくれ。

あい　（愛らしくあはてゝ）はい〳〵。（引返さうとする）

村野　（强く、杉に聞えるやうに）僕が閉めるよ。おあいさんは早く行つて來たまへ。（あいに）一々あんなにおど〳〵しなくつたつていゝんだよ。

あい退場。村野机に向ふ。西日かげる。村野立つて電燈をつける

杉　（眼をつぶつた儘）村野さん、居るのかい。

村野　ゐますよ。

杉　こゝを閉めてくれないか。

村野　君、鬱陶しいつて云つて開けさせたぢやないか。

杉　足音がうるさくつて眠られないよ。

村野　閉めたらばつちり、眼を開けるんぢやないかい。

杉　え？

村野　唐紙(からかみ)のそつち側で、こんどの事の後始末をゆつくり考へるんぢやないかい。
杉　(聞えない振り)え﹅?
村野　(鋭く)君は見かけより、頭がはつきりしてゐるらしいね。
杉　(誤魔化す)
村野　(早口に)僕にあさう用心しないでもい﹅んだよ。僕は林田先生にだつて君のほんたうの様子は――
杉　(遮つて)病人にさうつけ〳〵云ふなよ。
村野　誤魔化さないでくれ給へ。君は少くも、こみ入つた事を考へると發作がぶりつ返すほどの容態ぢやないらしいね。だから今のうちに話さう。人の來ないうちに話して置かう。(傍へ寄つて行く)
杉　(避けて寝返りを打つ)もう少し放(ほ)つといてくれ。
村野　間違へちやいけないよ。僕はむしろ君の味方なんだ。出來れば君をどうにかしてやりたいんだ。その證據にはさつきだつて、君の手紙の書きそこなひを……
杉　(溜息)頭がどうも痛い。放つといてくれ。
村野　(青年らしく)そりや狡(ずる)い。(同情的に)おい杉さん、君は感が早いから、もう自分の身を警戒しはじめてゐるんだらう。ところが君の感のとほりなんだ。君はあの實印の一件が曳出しから……
杉　(振り向く)誰が俺の机を開けた。
村野　そんな事を云つてる場合ぢやないぜ。今朝は君の年が年だし、家ぢうで心配したんだ。それで君の證人のところにも電報をうたうと思つて机を開けたら……

杉　（苦しげに）あれあ俺の仕事ぢやない。

村野　それを調べる人は明日來るよ。だがその人の來ないうちに、僕にだけ話して置かないと取り返しのつかない事が、君にはあるんぢやないかい。病氣よりももつとその事が、君の心で荷厄介になつてゐるんぢやないか。（紙を取り出す）ねえ、これを僕に說明してくれたまへ。僕だつて事情さへ分つたら、君のために何とかしよう。

杉　（漠然と）うーん？

村野　「小生只今は杉惣二郎と申し」――この文句は？

杉　（頭を擡げ、村野を視る）

間

村野　「只今は杉惣二郎と申し」――あと消してあるね。「只今は」も何もない筈ぢやないか。――これ、おあいさんにも讀まれたぜ。

緊張せる間

杉　（急に弱々しく）眩暈（めまひ）がする。勘辨してくれ。あんまり頭をつかふと死ぬかも知れない。（頭を枕につけ、眼をつぶる）今死にたくないよ。

村野　（樣子を見る）さうか。仕方がない。君は工合のいゝ特權を持つてゐるんだからね。君の容態はひどく重いとは思はれない。しかし萬が一、重くなるかも知れない。――ぢや、よさう。

杉　（向うに寢返りをうち、病苦を裝つた溜息）

足音

村野　（覗き込み）明日の朝までに打ち明けたまへよ。（襖を閉める）

あいと私立探偵所員中島登場。中島は脊廣、濃い短髭。黒い鞄を持つてゐる。

あい　（病室に注意しつゝ）探偵所のかたが。

村野　（辭儀する）

中島　（會釋）お醫者様の御意見を、あちらで伺ひました。

村野　はあ。（あいに）君いゝから藥局へ行つて來たまへ。

あい　（退場）

中島　（奥の部屋を指し）そちらですか。

村野　このくらゐの聲なら大丈夫です。

中島　早速ですが。机は——片方の曳出しは鍵のかゝつた儘になつてゐるんですね。

村野　さうです。

中島　お立會の上で、それを開けさせて戴きませう。

村野　今ですか。

中島　はあ。今日中に獻立をすつかりして置くのです。

村野　すると鍵を……

中島　壊して戴きませうか。

村野　（其れぢやあ）壊しませう。（取りかゝる）

中島　わたくしはその間に、こちらの曳出しを拜見します。

村野　（机の下を覗きながら）はあ。

中島　（片方の曳出しを拔いて、なかの物を手早く調べながら）どうも救世軍の方は、無斷で出て居られるものですから。或ひは――兎に角本籍の方の役場に問ひ合せて見ませう。

村野　（やがて頭を擧げ）――開きました。

中島　はあ。それをこの間に置いて戴きませう。（村野曳出しを二人の間に置く）そこでと、わたくしは目をとほした來信をこゝへ選り分けます。恐れ入りますが、差出人の住所を一應お控へ願ひます。

村野　はあ。（鉛筆と紙をとる）

中島　（曳出しから用、不用のものを敏捷に分けて行く）こゝに一つありました。（印を示す）

村野　（苦笑）彫りかけですか。

中島　（無表情）さうです。（仕事を續ける。むつつり言ふ）なに、銀行關係の方はすつかり手廻してあります。何事も起つてゐません。――（或る書類を取り上げる）本籍、埼玉縣――救世軍の控へに載つてゐるのと同じですな。（考へる。突然）あなたこの保證人といふ男を？

村野　いや、會つたことはありません。

中島　現在の居どころは。

村野　それを調べようとして今朝騷いだくらゐですから。――東京ぢやないらしいです。

中島　（强く）こいつに何かありますよ。（冷靜な微笑を浮べながら村野を見る）あなた、老人の出來心といふ風に同情

なすつちやいけませんよ。

村野　(無表情)はあ。

中島　(もう仕事を續けてゐる。曳出しの底から手紙の反古を小さく丸めたもの、澤山現はれて來る。それを彼、一つ一つ擴げて行く)ふむ。だいぶん諸所に手紙を出さうとした形跡がありますな。——(突然)これはどうです。(そのうちの一つを示す)こゝにもある。(他の二三片の反古を示す)——あなた、これまでに思ひあたるやうな事はありませんでしたか。

村野　(顏色變る)僕は今しがた、それを疑つたんです。

中島　ふむ、ふむ。突きとめて見ませう。(參考になるものをまとめて鞄に入れる)

村野　寫しました。(手紙の差出人の番地の寫しを出す)

中島　(調べる)すつかりですな。

村野　はあ。

中島　恐れ入りました。(懷へ入れる)そこで、今御本人の意識の程度は。

村野　さあ。

中島　(首を傾ける)失禮します。(突然襖に近づく。聲をかける)工藤さん。——工藤さん。

返事なし

中島　(襖を少し開ける)

部屋に充ちた靜かさ。

中島　（村野に）ちよつとあなた起して御覽なさい。

村野　（近づく）杉さん。――杉さん。

意識不明瞭の氣配。

中島　（立つた儘、枕元の體温表を取つて見る）

村野　（低く）女中がつけた表ですから。

中島　（體温表を元へ返す。やがてゆつくり襖を閉める）で、お醫者樣は明朝何時においでになります。

村野　九時といふお話でした。

中島　（考へて）わたくしも同刻にあがりませう。大變散らかしまして。（鞄をとる）

村野　いえ、片付けます。（送つて行く）

中島　（懷中時計を見）これから救世軍へ廻ります。その結果で、或ひは電話をおかけするかも知れません。（次の部屋への閾のところで）あなた――氣を許しちやいけませんよ。――年をとつてると、つい同情を惹きますからな。

村野　はあ。（會釋して送り出す）

中島退場。村野、不快な事を終へた顏付。それから曳出しを片づけ、机に納める。表で砂利の音。

あい　（鐵格子の外から）行つて參りました。

村野　御苦勞さん。

あい　濟んだの。

村野　……うむ。

あい　あのお藥ね、三十分も間をおけば、あとはいつ飲んでもいゝんですつて。（格子の間から杉の方を覗かうとして）今どんな風なの。

村野　眠てるやうだよ。

あい　ぢやあ、今のうちに御飯どうですか。

村野　うん。食べて來ようかな。

あい　（健康に）そとは今いゝ氣持よ。（去る。聲だけ響く）それはいゝ氣持よ。

村野、考へながら退場。西日もう全く落ちてゐる。美しい夕闇。やがて提灯を點した人力車、左側の格子窓の外を通り、銀杏の前を出つて右手へ去る。中島の歸る俥である。砂利に響く轍の音消える。靜か。

奥の部屋で急に電燈點く。光こつちに鋭く漏れる。それから押入れを開ける音。次に物を取り出す音。最後に押入れの閉まる音。又靜か。

杉　（襖を開け、帽子を阿彌陀にかぶり、羽織を着、書幅二函を重さうにかつぎ、足を踏みしめ、前方をぼんやり見たまゝ出て來る。空ろな眼付、傲慢な口元。——彼はそろ／＼歩いて右手の部屋に通ずる襖を開ける。彼の大きい影。）

襖の向うのあいの聲　（怯えて）まあ、杉さん。——あなた——どうしたの。

杉　（凝視）

あい　（恐る恐る入つて來る）あなた何處を見てゐるの。（わづかに杉を抑へる）氣でも違つたんぢやないの。お座りなさいよ。そんな事してゐて身體にさはるぢやないの。

杉　退け、邪魔するな。（あいを突きのけ、自らも力なく座し、箱を抱え切れずおろす。あらい息づかひ）

あい　そしてこの箱は一體何なの。――これ、お邸の掛軸ぢやないの。

杉　俺のだ。

あい　（よく見る）山田家十六號。（少女らしく咎める口調）嘘おつしやいよ。

杉　（低く呟く）知らん癖に默れ。旦那樣に貰つたんだ。――貴樣たち隠しても、俺に暇が出るくらゐ分らないでどうする。變な奴が出入りしやがつて。――愚圖々々してると貰つたものまで取り上げだ……

あい　ぢやあ、あなたはそれを表へ賣りに行く氣だつたのね。今の身體で、その重たいものを持つて、そんなに息ぎれのするくらゐに力を出して。――何て前後を辨へないんでせう。

杉　（獨り言のやうに）貴樣邪魔しやがつた。自分は樂に暮せる癖に。

あい　だつてあなたこれを賣つたりしたら、それこそほんたうに泥棒になるぢやないの。

杉　（次第に昂然と）どうせ何とか云ひがかりをつけて暇を出すんだらう。だから俺の方で手遅れにならないうちに始末をつけるんだ。俺はいつも自分獨りでやつて來た。邪魔になる奴はみんなやつつけて來た！（息きれる。昂奮のあとの空虚な心持。――呟くやうに）片方だけで四十圓にやなる。――貴樣損させやがつた。――どうしよう。――（弱る）少しでも餘計に貯めて、養生しないと、わしは長持ちしないんだ。

あい　（感動して）それならわたしの持つてるものをあげるわ。きつとあげてよね。（悸へる）あなたこれ以上わるい事をすると、本當に取り返しがつかなくつてよ。

村野登場

村野　どうしたんだ。――どうも聲がすると思つたら、やつぱりさうだな。

杉　（視線を避け）床をこゝへ運んでくれ。疲れた。
村野　連れてつてあげよう。立ちたまへ。
杉　行く力がない。床を運んでくれ。
村野　はあ。人の出入りが多いんで、用心にこゝへ移らうとしてゐるな。もう遅いよ。杉さん。
杉　（焦々と）さう責めないでくれ。
村野　この函はどうしたんだ。
杉　旦那樣に貰つた字だよ。
村野　（讀む）杉君還暦記念。——こつちのは？
杉　さう一々訊くなよ。
あい　（床を引つぱつて來る）
杉　（その上に倒れる）
村野　（同情的に）持ち出して貰らうとしたね。
杉　（その言葉に惹かれ）さきが心配だからな。自分の力ぢやないやうに歩けたんだ。
村野　金の事だと君は偉い事をやるなあ。——殊にこつちのは、いつの間にか土藏から出して置いたね。これあ明日僕が戻して置くよ。
杉　君そつちのを貰つてくれ。
村野　卑しい事を云ふな。

杉　暇が出ると荷厄介になる。それに田舍ぢや踏み倒される。

村野　これは君、旦那様が君の還暦を祝つて下すつたんぢやないか。もしも君が使ひ果したら、その時は仕方がない、君の賴つて行く人に貰つて貰ひたまへ。

杉　いや、あいつはすぐに捲きあげる。

村野　あいつつて誰だい。

杉　わしを救世軍からこゝへ世話した奴だ。

村野　證人か。馴れあひだつたね。

杉　そいつは惡黨だ

村野　それも知つてる。惡黨ぢや自慢にならないね。

杉　こゝに住はせてくれた恩があるからな。

村野　前科を默つてゝくれる恩もかい。

杉　何とでも云へ。

あい　村野さん。それはあんまり云ひ過ぎやしない事。

村野　（あいに）僕は圖に乘つて杉さんを苦しめてゐるんぢやないんだよ。（杉に）たゞどんどん詰りまで誤魔化さうといふ君のその量見をすてゝくれたら、僕は安心して奥さんに寛大な處置をねがはうと思つてゐるんだ。それをさつきから云つてるぢやないか。君、明日になればもう探偵所で……

杉　（異樣な歎ひ）あの小僧は探偵所か！

村野　警察でなくつて安心したかい。——でも、埼玉縣の役場を調べるつて云つてたよ。戸籍のことを一寸。

杉　（歎び登る）

村野　郷國の警察の方がいゝかね。——（強く）僕のする事はおせつかいぢやないだらう。

杉　（吃る）うむゝ。（半身起き上つて來る）

間

村野　君の經歴は大てい分つたね。

杉　（厭な顔する）

村野　君は不思議な人物だなあ！

杉　厭がらせを云ふのが寛大かい。

村野　奥さんが穏便に出たんで落着いたね。

杉　わしを表沙汰にして得な事があるかね。

村野　損もないね。甘く見たね。——おやあ工藤眞吉つて誰だい。

杉　（烈しく）知らねえよ！（急に疲れを裝ふ態度）うゝむ。うゝむ。おあいさん。わしは腹が減つた。牛乳をわかしてくれ。

あい　（村野を見る）今ですか。

村野　今——（あいに合圖する）それもいゝだらう。

あい　來てるかどうか。——見て來ませう。（退場）

間。ごく遠くで番犬の聲。

村野　さあ、君とは差し向ひになれたんだ。――おあいさんの前で、人に頭を下げたくなかつたね？今のうちに話さう。

杉　（無言）

村野　君は誰かほかにゐると、つい僞がる癖が出るんだからなあ。――それで、君の本名はどうも……

杉　（顏を顰める）その話か。その話ならそこを閉めてくれ。（窓を指す。或る恐怖）誰か暗やみから顏を出しさうな氣がして仕方がない。

村野　閉めたら話すかい。（障子をしめて來て座る）

杉　（弱々しく）さうだよ。――君の推量したとほりだよ。――工藤禎吉つていうんだ。（感動して來る）あゝやつて口に出されると變なものだな。（天井を向き、顏あか／＼と電燈に照らされる）わしは働きざかりだつた。――救世軍で案外疑はずに置いてくれた時は、有り難かつたな。（村野に）君は若いから、わしがこれまでどの位安樂な暮しの出來るやうにと焦つたかは、分るまいな。

村野　安樂な？ぢやあなぜ、此處で穏和しくしてゐなかつたんだい。

杉　奴から強請られどほしで、遣り切れなくなつたからさ。

村野　どんな風に。

杉　わしの月給で出來る事ならいゝ。そりや我慢する。だが出來ない相談は、こいつは辛い。

村野　すると、自分から變な氣を起した事はなかつたといふわけかい。

杉　（躊躇）

村野　（突きとめる調子）さういふのかい。

杉　……わしのは小さいんだ。ごく〳〵けちな遣り方なんだ。

村野　（一瞬淋しい顔付）なんで又、そんな奴のところへ行かうとするんだ。君にはまつたくのところ、身内がないのかい。

杉　（首を振つて紛らせる）わしはほかの古い知り合にも、手紙を書いては見たんだ。かう強請(ゆす)られどほしぢやあ、先が案じられるからな。だが其奴たちには、わしは杉惣二郎ぢやあ通じないのだ。わしあ書いちや破りした。書きにくかつた。君に讀まれたのが惡運だとも言はれないよ。どうせそんな工合で、此處にあと何年とは身體を置いて居られなかつたらうからな。——だがかうなれば、わしは差しあたり杉で通る所へ行くより仕方がないよ。

村野　（落着いて）ほかへ行つたらどうだ。

杉　（同情されて圖に乘る調子）いや、あいつとは腐れ緣さ。離れてゐればまた難題を持ちかけて來るからな。

村野　（やはり落着いて）そんな奴はわれ〳〵でやつつけて遣らう。ひとの晩年を脅かすやうな奴は。——其奴の痛いところをね。どうだい。

杉　止してくれ。よかれあしかれ、わしが一所に年をとらうつて奴だよ。

村野　可怪(おか)しいね。君が庇ふのは。——一體そのくらゐの奴が居候を歡迎するかい。

杉　（自尊心を傷つけられる）わしだつて只とは云はないよ。

村野　しかし散々しぼられて、君に殘つてるかい

杉　(誇張)いや、ないな。

村野　(鋭く)あるわ。

杉　(弱々しく)ないよ。調べて御覽。わしあなんにもないよ。

村野　ぢや、そいつ、何を當てにしてるかな。――お暇の時の手當か。

杉　(動搖)いや、わしあ……

村野　ちやんと勘定に入れてるね。(急に)僕が奥さんに反對したらどうだ。

杉　(哀れに)君、わしはそいつの家で年をとらせて貰うんだ。

村野　(同情を隱して)ほかへ行き給へ。――そりや祿なことはないよ。――君のやうな人をすつかり落ち着かせてくれる場所がありさうなものぢやないか。救世軍は歸りにくいとして、もつと他にいゝ場所がありさうなものぢやないか。

杉　あればな。

村野　(若い心持)なけりや間違つてるよ。

杉　捜してくれるか。

村野　さうすれば老人らしく暮すか。

杉　舊惡、舊惡つて、うるせえ事を云はないやうにしてくれゝばな。あいつは無病息災だ。ぴん〳〵してやがる。(顏を顰める)あいつを押へつける事はわしにはもう……

村野　そんなに氣になるかい。君のやうなねばり强い男でも。

杉　安心して喰へなくつちやな。(多少皮肉に)わしだつて生きものだからな。

村野　(突くやうに)幸福になりたいか。
杉　許してくれ。
村野　きれいに片をつける氣が起つたかね。
杉　(首肯く)もう寢かしてくれ。寢ていゝだらう。
村野　君の彫つた判はあれだけかい！
杉　うむゝ。(枕に伏す)彫りかけが一つある。
村野　そりや知つてる。
杉　それきりだよ。(疲れたやうに顏を枕に埋める)君にまかせる。――わしの自慢はみんな嘘だ。――わしあけちな事しか出來ないんだ。――行李なり何なりすつかり調べてくれ。――わしは喰へればいゝんだ。喰へて、から、働いてゐればいゝんだ。
村野、淋しい顏。夜氣滿つ。次の部屋で鍋の音。
村野　(氣が付く)おあいさん。牛乳來てゐましたか。
あい　(低く)えゝ。
村野　ぢやあ持つて來て下さい。
あい　(返事なし)
村野　それから杉さんは大ぶん疲れたやうだ。さつきの藥をあげて見ませう。
あい　(低く)はい。(やはり立つて來ようとしない)

村野　(氣短かに)おあいさん、怒つちやつたのかい。
あい　(やうやく笑ふ口調)いゝえ。
村野　(杉に笑顔)おあいさん子供だなあ。
杉　(愛情をもつて)おあいさん、持つて來ておくれ。
あい　只今。(牛乳を入れものに注ぐ音)
村野　そこで、僕はこれから奥さんにお願ひして、埼玉縣へ紹介する事はやめて戴かう。ね。
杉　うん。さうして吳れ。(再び顏を枕に埋める)うゝむ。うゝむ。
あい　(牛乳と藥を載せた盆を持つて來る。眼ぶた子供つぽく腫れぼつたし。村野に)やすんでらつしやるの。
杉　(はつきり)いや飲むよ。(はじめは寢ながら飲み　飲みにくいのでだんだん起き上る。牛乳の咽喉をとほる音)あゝ生きかへつたやうだ。(茶碗を振る)あゝ。
村野　(優しく)君疲れたんだらう。――僕がムカムカして。――これを一所に飲むといゝよ。
杉　何だい。それは。
あい　鎭靜劑よ。
杉　(考へて)止さう。厭だ。
村野　でも林田先生が言ひ置いて行つたんだよ。
杉　(不機嫌に)止さう。止さう。
あい　そんな事云つちや、なほ身體にさはつてよ。

杉　わしは今夜起きてる。眠るのは何だか氣味がわるいよ。

あい　そんな事。杉さん。

村野　いけないよ、君、そりあ。——もう話は大體濟んだんぢやないか。今夜は安心して、その藥でぐつすりやすみ給へ。

杉　(獨り言のやうに)まはりで、誰がどんな相談をするかも分らずにかい。それあ厭だ。

村野　(不快な顏)君、まだ僕たちにそんな事を云つてるのかい。

杉　(益々不機嫌に)こんなものを飲んで、今朝倒れたやうに凝つとこゝへ寢かされて　(自ら冷やかされ來る)わしはどうしても自分で奥さんに會つて來る！(立ち上らうとする)

村野　馬鹿な。(押へる)困るなあ。

杉　俺の事を俺がするんだ。(村野以外の何かに抵抗するやうに力を出す)明日ぢや遲い！

村野　なにを云つてるんだ。子供のやうな事を。(床へ倒し、寢かしつける)いゝ齢してこの位の判斷がつかないのか。(杉抵抗をつゞける)まだ分らないな。(持て餘す。あいに)その藥をとつてくれ。(あい躊躇する)鎭靜劑を取つてくれ！この儘にしておいたら、もう一度發作が起るかも知れないぢやないか。(あい藥を渡す)こつちの手を！(あい、情けない顏する)押へてくれ。(あい押へる)これを飲みたまへ。腕に力を入れながら出す聲)飲みたまへ！飲まないか。(無理に乘りかゝつて飲ませ終る)

あい　(泣きかける)まあ村野さん。——何てことをするの、村野さん。わたし何てことをしたんだらう！

杉、あきらめて靜かになる。

村野　（コップを持つた儘怒つたやうに）これでいゝんだ。（立ち上り、杉の様子を凝視）今夜はそこへ穏和しく寝たまへ！それでなくつたつて發作のあとで――長話(ながばなし)して――疲れてゐるんぢやないか。――僕が長話して。（昂奮から聲變る）僕が負け嫌ひを起して長話しちやつて。（出て行かうとする）

あい　（顔を擧げ）どこへ行くんです！

村野　（振り返らずに）奥さんのところへ。

あい　（彼を見ず、ほとんど罵るやうに）行つてらつしやい！

村野　（退場）

遠くで番犬の聲。間。

あい　（再び顔を擧げ）杉さん。

返事なし

あい　杉さん。

杉　（眼をつぶつた儘）いやな啼き聲だなあ。（寝返りをうつ）

あい　ぐつすりおやすみなさいね。

間

あい　明日はずつとよくなつてよ。

番犬しきりに啼き續ける。

（幕）

（十四年十二月作）



白霧

中條百合子

(一)

凝つとして居ると、うら〳〵揺れる陽炎でいつか體も心も包まれるやうな光線が、ぱつと部屋の中まで射し込んで居た。

「――え丶天氣ぢやのう……」

直き七十になる佃の老父は、心持よく麗かな太陽を浴び、微かに漂つて來る都會の雜音を愉しむやうに云つた。

「同じ日本國中でも、偉う違ふもんぢやのう。……私が彼方を立つ宵には吹雪がしとつたのに――東京は、はやすつかり春ぢや」

「………今日は、でも特別のお天氣ね、眩しいぐらゐだわ…………」

伸子は、眞正面から日を受けて、顏を伏せるやうにし乍ら、傍の老人を顧みた。

「――まあ、お堀の光ること」

「はゝは、これも厄介な奴ぢやて」

老人は、胸元を見下し乍ら右手の指を擴げて裏から梳くやうに白髯を扱いた。枯れた、指の間を滑つて、さら〳〵支那素麺のやうに清らかに髯が光つた。

「何かで御洗ひになりますの？」

「放つて置くと矢張り穢くなりをるで、玉子の白味で洗へと云はれてな、伸したては珍しいもんぢやで根よくやつたが私のやうに山歩きの好きな者はどむならん——髯も日に燒けます、すぐ又しよむない色になつてしまひをる……」

老人は、又靜かに髯を扱いた。……長閑だ。……伸子は、自分の祖父と日向ぼつこして居るやうな氣持がした。

襖をあけて、佃が入つて來た。

「一寸電話をかけて來ます」

「ほう」

「何か用はありませんか」

「さて——どうでわが身も後で何處ぞへ出て見んならんと思ふとるから……」

伸子は、佃のちゝむさく着こんだ厚い黑マントや毛絲の襟卷を見て笑つた。

「大變ね。——もうあついことよ其ぢやあ外は」

「其那ことはありません…………ぢやあ一寸、行つて來ます」

佃の學校は、學年末の休暇であつた。上野には博覽會が開催され、英國皇儲が來遊されるといふ、事の多い賑やかな三月下旬であつた。

佃は、手間をとつて戻つて來た。仲子は、日當りのよい八疊から來ると、暫くは物がよく見えない四疊半で、洗濯物を引出しに仕舞つて居た。老人は、獨りで新聞を讀んで居る。その方に行かず、佃は

「たゞ今」

と云ひ乍ら、仲子の後に立つた。

「おそかつたわね、郵便局？」

「――いつものことだのに、若い者が計算をぐず〳〵して居るから」

「電話だけぢやあなかつたの？……」

仲子は、振向いて良人を見た。彼の顏が、何か、ぼんやり一種の感情を現して居るやうに見えた。

「どうして？――只今をしていらつしやいな、お父さんに」

佃は、ぐるり、ぐるり、首を廻して襟卷を脫ぎ、前の卓子の上にかためて置いた。

「――會社に電話をかけて來た」

仲子の父の會社といふ意味であつた。

「さうなの！　默つてゐらつしやるから何處かと思つたわ、何か用がおありんなつたの？」

「――金曜日の夕方から親父と一緒に上りますが御都合はどうかと伺つて見たんです」

仲子は、不意打ちを喰つたやうな變な氣がした、彼女は、或猶豫期をもつて

「そしたら？」

と訊きかへした。

「多分いゝとは思ふが、確かな返事は明日するから、又電話をかけて見て呉れろと仰云つた」

「――」

父の性質で、さし當り左樣しか返事の出來なかつたのは、仲子によく領けた。其にしても、佃が何故電話をかける前一言自分に相談して呉れなかつたどらう。彼が、家を持つて初めて滯在に來た老父に、佐々との不快ないきさつを知らせたく無いことは、仲子によく分つて居た。尋常に、妻の兩親に會はせたいのは、極めて自然なことであつた。けれども、佃と仲子の母親とは、去年の秋衝突して往來を絕つたまゝ、何の諒解もなく今日まで半年近く來て居る間柄であつた。仲子だけ、祖母の理屈ぬきに懸命な心遣ひに双方動かされて春から出入りし始めた、歪んだ關係にあつた。和解も出來て居ない家へ、いきなり電話一通の、而も押しつけがましい氣のする前觸れだけで、老人を連れて行かうとする佃の態度は、仲子にも明かに缺けて居るものゝあるのが感じられた。いやな心持が強くした。

つい鍵の手に曲つた緣側の彼方では、老人が背中を日に暖められ乍ら二人の聲を無心に聽いて居る。仲子は、云ひたいことの半分も口に出しかねた。

「私に一應話してからにして下さるとよかつたわね……其だけぢやあどうせ濟まなくてよ」

佃は、默つて仲子と眼を見合はせて居たが、軈て

「まあいゝ」

と斷念したやうに云つて踵を廻した。

「明日又かけて見りやあ分るでせう」

座敷から、父子問答が聞えた。

「今日は一つ上野へ出かけて見ませうか」

「偉い人なこつちやらうな、然しいつと云ふてすいた時はあるまいから――」輕く、乾いた咳「……仲子さんはもうおいきたのか？」

「まだです……餘りすきでないんでせう」

「おいきたらいゝだらう一緒に。折角天氣も此那えゝし………」

氣が滅入つたが、仲子は一緒に博覧會見物に出かけた。御所の土手に蒲公英が咲き、濠端の櫻がすつかり色づいて居た。爍々する水淺黄色の空の下を、電車が白い塵埃の小さい渦を巻き立て乍ら、花簪や揃ひの手拭で目じるしをした田舍の陽氣な團隊を滿載して疾走して行く。

會場で、老人は、各縣から集つた材木や、農産物に深い興味を覺えるらしかつた。

「同じ農業と云ふても近頃は、私の若かつた頃とは萬事ころりと違ふな、稲の種類も、こんなに今は澤山になつたが、眼目は何かと云ふと、早う、澤山收獲せうと皆が狙ひをる。――早う、澤山獲れる種類ほど、味ないな、どうも…………」

臺灣出品の樟腦で拵へた宮殿は、仲子も珍しく綺麗だと思つた。二重廻しを着、毛皮の古風な帽子をいたゞいた白髯の老人と、悠くり材木の間や、赤リボンで飾つた硝子壜づめの麥粒の見本などを眺めて歩くのは面白い。けれども、仙はひどく氣をせき、老父や仲子の先に一人離れて進んだ。ひとりでに、彼等二人もいそぎ、老父は、處々で仙が

「こゝも見ますか？――彼方にも在つたな、此那陳列が」

と立ち止ると、遠慮さうに

「もうえゝ、なんぼ見てもまあ、大同小異と云ふもんぢやらう」

と通り過ぎた。

「なるたけなら、第二會場の方も見てしまひ度いと思ひますからね」

仲子は、老人が、氣を張つて足を早めたり、見たいかも知れないのに強いて詰らないものと定めたりするのが、いやであつた。たつぷり、土産話にもなるやうに滿足するだけ見物させたかつた。彼女は、杖がはりの洋傘を持ちなほし、せつせと佃のあとに跟いて人波を拔けようとする老人に云つた。

「私共は、悠くり參りませうよ、迷兒になつても大丈夫よ…………お疲れになつてよ」

仲子がすゝめて、萬國街と云ふのに入つた。舞臺には、椰子が青々生えた海邊の背景の前に、すつかり裸體で草で拵へた腰簑だけつけた女が二人現れて居た。黑い縮毛の頭に、ネロのやうな花環飾をいたゞき、胸にも同じやうなのを吊つて居る。傍に腰かけた男の音樂者たちが、バンジョーとウクレリーで、南洋的な、情慾的な音樂をやるのに合せ、彼女等は手を叩いたり、片脚で足ぶみしたりし乍ら、腕を動して踊の姿勢をとり、ぶる〳〵、うね〳〵體中の筋肉を顫はせる。卅越して居る肥つた方の女の體は人間離れしてよく動き、腹のところなど、遠くからでさへ、上へ下へ、右へ左へ、ラッグ・タイムの音樂につれて奇怪に蜒り廻るのが見えた。舞臺の隅に「埃及筋肉顫動ダンス」と書いた札が出て居た。

「變な踊ぢやのう——」

仲子は笑つた。

「全くね。——埃及ぢやあない、ハワイの女らしいわ…」

佃が、苦々しげに呟いた。

「——下劣だ」

舞臺の上の、半裸の女達は、故郷の海邊に居ると同じに、數百人の見物に面しても呑氣で、原始的であるらしく見えた。歌を二言三言唄つて仲間同志巫山戯るかと思ふと、急に本氣に、熱心に、腹や腰を捩らせた。

彼等は、七時頃疲れて家に歸つて來た。

（二）

羽織を着換へただけで、仲子は臺處をした。三人分の食器を洗つて居ると、門が開き、誰かゞ、臺處の横窓の下に來る氣勢がした。

「今晩は——」

仲子は、曇硝子の障子をあけて覗いた。片明りで、髮を丸めた女の不鮮な横顏しか判らない。

「今晩は」

「あの、お向ふの山下でございますが——先程佐々さんから御電話でございました。上りましたら御留守だつたのでさう申上ましたら、お歸りんなつたら直ぐ彼方へ掛けるように、と仰云つてゞございました」

少女は、成程、山下の女中であつた。

「あゝ、どうも有難うございました、おいそがしいところを度々——御苦勞さま」

——この取次は、仲子にとつて、不意なやうで不意でなかつた。朝、佃から會社に電話をかけた事を告げられた時から、

彼女の心には、たゞでは濟まないといふはつきりした豫期があつた。何とか動坂から云つて來るに違ひない。今日中でなければ、きつと明日。一種重苦しい感情を作つて、博覽會場を歩き乍らも考へて居たのであつた。

仲子は

「――動坂から電話がかゝつたんですつて」

と云ひ乍ら、八疊に行つて見た。老父と佃との間に、東京地圖が擴げられて居た。頭をさしよせて、何處か郊外の部分を說明して居たらしい佃は、一箇處を指で押へたまゝ顏を擡げた。

「……………？」

「さつき。――歸つたら直ぐかけろと云ふんですつて……………」

佃は、何だか仲子が其時急にむつとした程、空々しい何氣ない聲を出した。

「――かけて來たらいゝでせう？其なら」

老父が、眼鏡をはづし乍ら、二人を見較べた。

「何ごとぢやろ、今頃」

「さあ……」

仲子は、下駄をはき乍ら、佃が何とか、面倒さうに一口說明し、直ぐ話を元の地圖に戻して行くのを聞いた。

電話には、多計代が出た。仲子が思つた通りの用向きであつた。

「父樣がおかへりになつて初めて話を伺つたやうなわけでね、是非話したいことがあるから、今から來て呉れないかい」

仲子は、電話口で當惑した。

「もうおそいし、今日は博覽會のお供をして隨分草臥れて居るから、明日ぢやあいけないこと？」

彼方では、電話の傍に父も居るらしい樣子であつた。仲子の云つたことを繰返す母の聲がした。

「それでもいゝけれどね、明日私は御悔みに行くところがあるんでね、都合がわるいし、金曜日と云へば——左樣だつたらう？……もう日もないしするから、その前にすべき話はして仕舞はないと、お前も迷惑だらうと思ふから……」

「——ぢやあ上りませう……少しおそくなるけれども、どうか待つて居らしつて頂戴」

仲子は、淋しく暗い横通りを一跨ぎで戻つて來た。入口をあけると、直ぐ老人の、眞面目に不安さうな聲が訊ねた。

「何事でした？　御病人か？」

仲子は、突嗟の思案が出ずに返事をした。

「いゝえ、病人ぢやありませんでしたけれど……行つて參りました」

彼女は、輕く手をついて老父の前に頭を下げた。そして、二人のうち孰ともつかず云つた。

「あの……私これから動坂へ行つて來なければならないんだけれど……」

佃は、萬事承知して居る者が裝ふ、不自然なところのある平靜さで

「さう」

と云つた。

「そんなら、寒くないやうにして被行い」

「——御苦勞なこつちやのう、今頃から………」

仲子は、老人が、心の中では何事だらうと深く訝つて居るのをはつきり感じた。彼は、遠慮から其を口に出さないだけ

なのだ。そのまゝ、何處か他人行儀な、隱し立てのある風で出かけなければならないのが、仲子には可成辛かつた。

「……歸るのがきつとおそくなりますからどうぞお先へおよつてゐらしつて下さいまし」

仲子は、自分達の部屋に來、衣桁にかけて置いた羽織に再び手を通した。戸棚から毛織のコートを出した。手袋をはめて仕舞ふまで、仲子はわざと時間をかけるやうにして、良人を心待ちにして居た。年寄を謂はゞ胡麻化して出て行くことも、草臥れて居るのに又電車で一人ぼつち行かなければならないことも、彼女を悄げさせた。出かける前に、たつた一言でいゝから――否、言葉もいらない、手の觸りだけでも、眼つきだけでもよい。彼の蕊の、打ちあけた、結び合つた心持を感じ合つて家を出たかつた。襟卷をするばかりの裝になつて、仲子は部屋の眞中に立ち澱んだ。柱にかけた鏡に、電燈の明りで紺コートの下半分と眞白い足袋が映る。――、仲子は、

「一寸」

と高く良人を呼んだ。

「――電車の切符を頂戴な」

彼女の願つた通りに佃は此方に來ず、八疊に坐つたまゝ答へた。

「僕の外套の、いつものポケットにあるでせう」

外套は、玄關の折釘に下つて居る。仲子は、仕樣ことなく、玄關に出た。

「――ぢやあ行つて參ります」

「何時頃歸る？」

「今時分から行くんですもの……でも歸つては來てよ、どんなに晩くなつても」

（三）

伸子が、動坂の家から出たのは、十二時ほんの少し前であつた。俥を命じて呉れた。伸子が十ばかりの時、上野までよく父の膝の間に立たされて乘つて行つた、やはり其時の俥宿の亭主であつた。この男は最近女房に死なれた。大抵の店が閉まり、通りはがらんと廣く家並みがその左右で急に低くなつたやうに思はれる深夜の電車道の上を悠くり俥け乍ら、俥夫と彼女とは時々話をした。

「追々時勢が變つて參りますから、どうも斯ういふ商賣はいけません。――一つ私も今に旦那樣がたから資本でも拜借し、自働車屋でもしたいもんで……」

初めのうち、受け答へをして居た伸子は、段々道が進むにつれて默り込んだ。動坂から、赤阪まで俥では隨分退屈な長道中だ。彼女は搖られて行くうちに、晝間の疲勞が出て眼を瞑りたくなつた。瞼を透して街燈の刺戟を感じる度に外を見ると、俥は牛込邊の堤にかゝつて居るらしい。松――松――左側は何時まで行つても太い松ばかり、星空を覆ふて續いて居る。提灯が瞬く。ゴム輪が、彈力ある微かなブツ！ブツ！といふ音で小砂利を飛ばす。…………

體こそ眠くでもありさうに、がく／＼搖られては居るが、伸子の頭は案外冴えて動いて居た。彼女は、あれから行つて親達と、佃のかけた電話について話して居るうちに、或事でひどく慚愧を覺えた。親たちは、伸子がどんなに心から恐縮して

「それはまことに惡うございました。佃もわるいが、勿論私が充分／＼わるかつた！」

とあやまつたか、恐らく想像もつかなかつたらう。彼等は、娘が奇麗に自分の理に折れただけで、もう許しすぎる程寛大ないゝ心持になつて呉れたのだから。佐々の兩親の云ひ分は至極尤であつた。但が、いつ永別するかも知れない父親に、落膽させまいとして、家に來たがるのは無理もない。其は理解出來るが、これ迄の事は其なら如何うするか。假にも男が一旦、では上りますまいと云つて足踏みしなかつた以上、何とか其處にけじめをつけるべきであらう。自分の都合次第では電話一つでどうにでもなると思ふのは間違つて居ようと云ふのであつた。勿論、その點は仲子も同感であつた。但が、一存で電話さへかけなかつたら、彼女も略同樣の意見で彼に何とかもう少し折目正しい行動をとらせることが出來たのだ。仲子が、斯うして俥で搖られ乍ら思つても、矢張り先刻と同じ愧しさを感じるのは此事ではなかつた。

彼等は、其年の始め、赤阪へ引越した。新しい家が定つた晩、仲子は良人に云はれるまゝに動坂へ自働電話をかけた。

彼女は、活氣づいた亢奮から、落付いても考へず、

「あゝ、母樣？——今日ね、急にいゝ家が見つかつたのよ」

と云ふ調子で、手傳に書生を借して欲しいことや、運送屋のことや、出入の大工を廻して貰ふことやを頼んだ。何か、さつぱりしないところは在るやうであつたが、兩親は仲子が頼んだ事を皆承知して呉れた。仲子は今でもはつきりその夜の會話を思ひ出すことが出來た。但が向ふの角まで來て居た。自働電話の箱を出た彼女に近より

「どうだつた」

と訊いた。仲子は、得意さうに莞爾ついて

「いゝつて」

と答へた。

「——君がかけた方がいゝ——だから」

仲子は、それが當時、如何那印象を親たちに與へたか、今晩まで驚くべき大ざつぱさで考へもせず過して來た。明日、早速仙が動坂に來るように相談を定めた時、母の多計代が云つた。

「——今度のことに限らず、どうも仙さんは妙なところがあるね——古いことを云ふやうだが、引越しの時にしろ、何故お前に、あゝいふ電話をかけさせたのだい？　お前はお人よしだから、ぢやあ掛けるわ、と云つたんだらうけれど……私はひどく不愉快だつたよ、つまり仙さんの遣り方がね。自分は出入りも仕ない、その方はそつくりそのまゝで、お前を使つて都合のよいことでは此方を利用しようと云ふやうだもの。——私達は、お前が氣の毒で、困るだらうと思ふとあゝいふ場合斷れないんだよ。その情を、巧く仙さんが見拔いて利用するかと思ふと、二重にいやだ。」

仲子は、これ等の言葉を聽いて居るうちに、すつかり自分自身に愧ぢ入つて仕舞つた。彼女には、皆が何と云つても仙に、明瞭な利用してやれと云ふ程の意志があるとは考へられなかつた。在ることが確かなのは、ぐうたらな身勝手さだ。前の電話にしろ、その判斷のない、女々しい得手勝手から思ひついて、出來たらその方がよい位の考へで自分を勸めたのだらう。仲子のなか／＼下らない頸骨が心から下つて

「私が充分／＼惡かつた！」

と云はせたのは、仙のその淺はかな狡さにいゝ氣になつて自分が乘つたといふ反省であつた。自分さへ確かりした判斷を持つて居たら、仙にも下らない眞似はさせず、兩親にも、更に彼にする疑惑を深めるやうな思ひをさせずに濟んだのだ。いざとなると、自分達二人の不甲斐なさは互にちつとも違ひはしない。同じだ、全く同じだ。——仲子は不圖、良人が自分の知らない、自分の耳に決して批評の屆いて來ない同僚達の裡で、どんなに振舞つて居るか、不安な可怖い氣

がした。

梶棒が下りた。伸子は俥夫に心づけをやつて門に鍵をかけた。そーつと格子をあけた。外の電燈で、ぼんやり帽子掛が見えるばかり、家ぢゆうの灯が消えて居た。伸子は、寂く感じ乍ら音をさせないやうにコートを脱いだ。すると、さつと、右手の襖の隙から光が射し出した。佃が目を覚したらしい。伸子は、そろ／＼後手で襖を閉め、夜具の裾を廻つて良人の寝床の横に座つた。

「たゞ今」

佃は寝返りを打ち、一眠りした揚句の暖かさうなぽつとした顔色を伸子に向けた。

「おかへり………どうだつた？」

「どうつて………貴方明日おいそがしくつて？」

「………何故？」

「斯うなのよ、動坂ではやつぱり私も考へて居た通りの意見なの、あの電話だけでは餘り押しつけられるやうでいやだつて云ふ――折角お父さんを御呼びするんなら、その前に一度會つてよく話し、さつぱりしてからにしたいと云ふの、私尤なことゝ思ふわ。――貴方明日一寸行らつしやらない？私と………」

「――私にあやまれと仰云るんですか？」

隣室に眠つて居る老人を目醒すまいと、低く顔を下げ、息が苦しい位の小さい聲で話して居た伸子は、力を入れて頭を振り顔を顰めた。

「さうぢやあないのよ！あやまれなんぞと云ふんじやあないの、話し合つて、お互に――………まあさつぱりしてから

お招きしようといふんだわ」

仲子は、良人の耳の中に囁いた。

「貴方がお父さんにいざこざを知らせたくない心持は、あちらでもよく理解して居てくれるのよ」

佃は、白布をかけた枕の上に仰向き、天井を見て居たが、そのまゝの姿勢で眸を動さず云つた。

「さうすれば君が幸福になるといふんなら仕ますよ——何でもする……」

仲子は、變に悶へた感情を覺え、良人を見た。

「私の幸福つて……少し妙ね」彼女は笑ひたいやうになつた。「何だか……貴方……つまりね、貴方のなさり方が一足飛びだつたから、順序を踏むといふことなのよ。あちらだつて、何時までも根に持つて變な狀態で居ようといふのぢやあないんだから……」

「……」

佃は不滿げであつた。

「——一應話し合つて、又駄目なら駄目でその時のことぢやあないの……私だつて、勿論貴方のお父さんだつて、道理のないあやまりなんぞして欲しいとは思つて居やしないわ」

「……」

「——何故默つてゐらつしやるの」

「だから……君が其を望むんなら、行きますと云つてるでせう」

「其那の！　私いやよ」

どうして？」

「わかり切つて居るわ。　—貴方、あんな風にして電話なんかで交渉したのは適當なやり方だと思つてゐらつしやる？　それきりですむと思つてゐらつしやつたの？」

「…………」

仲子は、腹が立つて來た。

「——さうぢやあないでせう？　それなら、いやに恩になんかお着せにならないでもいゝぢやあないの。貴方が當然することをするのぢやあないの」

「——君が行けと云ふから、私は其に從ふだけです……」

「御自分ぢやあ、どつちがいゝとお思ひになるのよ！本當に…………」

「…………」

「——もつと眞直だつてよかあないの……私、へまよりさういふ、何だか變な持つて行き方がまるでいやだわ」

胸の奥から、苦い汁が湧くやうで、仲子は涙をこぼした。

「私決して行つて下さいと云ひやしないことよ」

涙が後から〱出た。

「私——腹が立つの、さういふのは。——嫌いなの、其那——僞善家くさい——」

翌朝、仲子は、老人に朝の挨拶をする時、微に極りわるかつた。始めのうちこそ、小さい〱囁きで話して居たが、涙が出ると、いつの間にか充分隣りで聞える聲を出してしまつたのがわかつて居た。本當にぐつすり眠りつゞけたのか、

年寄の智慧からか、老父はいつも通り穏やかであつた。仲子は、今日動坂に行く行かないについては、沈默を守つた。

一時頃になると、彼は老人に云つた。

「――今日、動坂へ見舞に行かなくちやならないことになりましたから、一人で其邊でも歩いて來てくれませんか」

「ほゝう――矢張り誰かおわるかつたのか」

「ふむ…………お母さんが一寸…………大したことぢやあないんです」

「さよか…………辨慶橋はじきぢやつたのう――私はあの邊なら昔もよく行つて分つてるから、あすこいらぶらついて來よう、心配せいで、ゆるりと行つておいで」

「――ぢやあ仕度しませう――」佃は仲子を促した。「髮はもうそれでいゝの？」

電車の中で、二人は殆ど口を利かなかつた。動坂には、四時過まで居た。仲子にとつて、辛い數時間であつた。兩親と佃との間に交はされる言葉を傍で聽いて居ると、頭が變になつて、焦々した。丁度、焦點が狂つて居るレンズで映される活動寫眞でも看て居るやうな切なさであつた。双方の一々の感情の輪廓が皆ぴたりとせず、ぼやけて、二重で、曖昧にぶるついて居る。對談は、愉快な諒解によつてゞはなく、寧ろ果しない、捕へどころのない言葉の循環に、彼が倦怠して、打ち切られた。佃の老父は、初めの通り金曜日の晩食に招かれることになつた。佃と仲子とは、又並んで、默りこくつて家に歸つた。

平常着に着換へると、佃はさものう〳〵としたやうに體ぢゆうで伸びをした。そして、どしりと、深く机の前の椅子に腰を卸し、頸を捻つて後ろの方に居る仲子に云つた。

「……僕が死んだ母親のことを云つたら、お父さんは泣いてゐらしつたね、お母さんは泣かれなかつたが…………お父さ

んは確に涙をこぼして居られた……」

まるで、それは、まだ口に遺つて居る美味いもの丶後味を憶ひ出して、舌舐ずりをするやうな調子であつた。仲子は、眼に恐怖の表情を現した。彼は、自分が子供のうち生みの母親に死なれたこと、その限りない淋しさを、仲子の兩親を愛すること丶愛されることで充さうと樂しみにして居たのに、圓滿に行かず此那悲しいことはないと、自身、涙に咽び乍ら云つたのだ。――彼那情に迫つたやうに云ひ乍ら…………仲子は、滿足さうな良人の背中が徐々えみわれて、裡から見も知らぬ陰險な人格がのし出て來るやうに感じた。彼は、では、其那に冷靜であつたのか。涙の効果をちやんと測定して、やつたことであつたのか。さうであつたのか。――

仲子は、悲しい、荒々しい自棄を一刹那感じ、自分自身にも、何にも、これに關係ある總ての者に向つてフム！と唸りたい氣がした。

(四)

老父が滯在して居ることは、心持の上で仲子に却つてゆとりを與へた。女中が、娘の病氣で暇をとつたところであつたから、彼女の用は殖えた。けれども、佃とだけ顏を合はせて居たのでは堪らない感情を、枯淡な老人が和らげて呉れた。仲子は、老父にくつついて泉岳寺へまで行つた。

或午後、佃や老人が各々の出さきに家をあけた後、仲子は一人で机に向つて居た。頻繁な外出などで、二三日日記もつけなかつた。其から片づけようとペンを執つたが、四六版縦罫つきの狹い紙面を見ると、仲子は、たつた此つぽつち

のところには、迚も自分の心にあることを書き切れなく感じた。恐らく、机ほど大きな紙の百枚綴ぢをあづけられても、彼女は結局やつぱり、書き切れない氣がしたゞらう。

　彼女の胸一杯になつて居る氣持は——つまるところ一番云ひ表すに難しい、感じるしかその存在のわからない氣持であつた。自分達の生活から湧く辛い、情けない、縛りつけられたやうな意氣悄沈が、心の中で渦卷いて居た。それから、實際自由にならうとするなら、今は意志的な決心だけが必要なのを、仲子は自覺して居た。夫婦の生活態度の詮索や、それから生じる結論の反芻はもう澤山だ。精神を昏迷させるばかりだ。さうちやんと判つては居るのだが、いざとなると、彼女は石にでもなつたやうに重い、動きのつかない未練を自身の裡に感じるのであつた。

　兩手の指を左右から組み合はせ、筏のやうにした上に顎を載せ、考へ込んで居た仲子は、玄關の人聲で立ち上つた。

「御免なさい——おいでですか」

餘り聽きなれない聲であつた。訝り乍ら障子をあけた。三和土に、イムバネスを着、何か本を小脇に抱へて立つて居るのは、横川であつた。

「——珍しい方だつたのね……どうぞ」

「ぢやあ一寸……つい其處に△△社つて云ふ本屋があるでせう、彼處へ來たもんですから——」

横川は、イムバネスを脱いで掛け乍ら、耳が少し遠いので、丸い背をかゞめ、首を曲げて訊いた。

「おひとりですか？　佃さんは？」

「今日は一寸出かけたの……でもぢきかへるでせう」

「お休みぢやあないんです、

「お休みはお休みなんだけれども、近いうちに學校へ宮様がいらつしやるんですつて、その相談」
「あゝさう……」
横田は、部屋を見廻すやうにして、幾度も自分自身に頷き乍ら重ねて
「さうですか」
横田といふ人は、どこか變つた男であつた。彼の妹が、仲子の父の會社に勤めて居た青年と結婚した。或時、その夫婦が兄の横田を連れて仲子の處へ遊びに來た。それから、極偶に數時間立ち寄るのであつたが、横田自身の話によると、なまぢつか種々の語學が出來るので、創作よりつい翻譯をして却つていけないと云ふ境遇に居るのであつた。
彼は、頻りに仲子の机の方を見乍ら話した。
「近頃何かお書きですか?」
「何にも。……貴方は?おいそがしいの?」
「下らないことに追ひ廻されてね……どうも……」
「何か面白い翻譯でもしてゐらしつて?」
「なあに別に大して面白いつて云ふものもありません。……そりやあたゞ讀んで居りやあ面白くも樂しくもあるけれど、譯さなくちやあならないとなると、ぞつとしませんね」
彼は體格に比べると輕い、どこやら弱い響の笑聲を立てた。
「今、なに?」
「アンデルセンの卽興詩人です……私は、あれの原本を、第一版で持つて居るんだが……面倒くさいんでね、獨逸

語のと對照してやつて居ます……」

「あの人の自叙傳と云ふのは面白いの？　およみになつて？」

「あゝ、——何とか云ふのがありましたね」

彼は不圖、傍机に、丸善の包紙のまゝ一冊の本が載つて居るのに目をつけた。

「何です、あれは」

伸子は、笑ひ出した。

「目が早いのねまるで」

雜談の末、彼は、

「どうです、家をお持ちなさると、仕事をするのがなか／＼困難でせう」

と云ひ出した。

「——男のひとは、どう？」

「さあ、どうだかな、私は經驗がないからわかりませんね、だが——勿論負擔が殖える點はわるいが、概して落付けるらしいですね」

そして、横川は、獨りで幾度も頷いた。

「それは、ちやんと奥さんが獨身時代よりよく世話をしてあげるからでせう？　時間でも氣持のゆとりでも出來るわけね——女の人の方は、立場が何と云つても逆だから」

「いけませんか？　どうも」

「斷言は出來なくてよ、絕對に駄目だなんていふ——。けれども、自分でも可笑しいと思ふことは、例へば下らない家の掃除のやうなことでもね、私一人で生活して居て、何か仕たいことがあれば平氣で放ぽり出して置くわ、誰が來たつて平氣。——ところが細君になると、其那ところが何だか變つてね、私は悶々しいから、矢張り放つては置くけれど、平氣ぢやあない——氣になるのです。………………滑稽でせうそれが、本來の私が心配するんぢやなくて、やゝ凡俗な妻君氣質が氣を揉むんだから——いろ〳〵さういふ點で澤山の危險があるわ」

「——難しいもんだな」

伸子は、我知らず本氣になつた。

「本當に難しいものよ——誰でも一應むづかしいとは知つて居るけれども、實際はもつと〳〵複雜ね。だから獨身の方がいゝつて云ふ人があるけれども——」

伸子は、頭をかしげ乍らつゞけた。

「仕事があるから、リーベも仕ないなんて云ふ、其那ぎごちない生活は私には變だわ。其かと云つて——細君になつた方がいゝとは云へないし………——男女に關はらず、當人にとつて自然な、自由な生活をして居る人は、數が少いのぢやあなくて實際」

「さう——さうです、窮屈だからな、特に日本ではね………全くさうです」

其處へ、佃が歸つて來た。伸子は玄關に出た。

「横田さんが來てゐらつしやつてよ」

「あゝさう」

佃は、眞直部屋に入つて行つた。

「いらつしやい」

「やあ――お留守に上つて居ました。いかゞです？　おいそがしいらしいですね」

佃は、帽を振つて、深く椅子の背に片肱をかけた。

「いやどうも――相變らず貧棒暇なしで痩せて居ます――貴方はよく肥つておいでゞすね」

丁度、茶を持つて來た仲子に、それが何だか角だつて無愛想に感じられた。

「――ぢやあ、私や貴方は得な性分でいゝわけね……」

横田は、聲を出さず、はあと口を開いて上を向き笑ふやうな顏をした。つぎ穂ない、沈默が生じた。用談の切り出されるのでも待つて居るやうであつた。横田は、やがて顏を顰め乍ら懐をさぐつて、一枚の原稿紙の疊んだのを出した。

「――若しお暇があつたら、一寸お訊きして見ようと思つたんですがね――これ……」

「なんです――希臘語ですか」

「こんな風なことだらうと見當はつけて居るんですが、どうも曖昧だから」

「詩らしいですね――何かに引用してあるんですか」

横田は仲子を顧み

「どうも西洋の學者は、何ぞと云ふと直ぐ羅典や希臘をかつぎ出すから厄介です」

「おいそぎですか？」

「いや、いそぎません」

「ぢやあおあづかりして置きます」

又、話が途切れ、居心地わるくなつた。横田は

「ぢやどうぞよろしく」

と、程なく歸つた。

（五）

二人で見送つて、再び部屋に戻ると、佃は、一向重きを置かない風で、横田の置いて行つた紙片を卓子の上からどけて、本棚にのせた。

「大丈夫？　其那ところに置いて——なくなると困つてよ」

「無くなりなんかしませんよ。…………いつ頃から來て居たの？」

良人の顔を見ると、伸子の唇から殆どひとりでに

「何故？」

と、わざとらしいきゝ返しが出た。

「何故つて…………又君の邪魔になつたらうと思つてさ」

——伸子は、肩を揺つた。彼女は意地わるい心持になつた。佃は、彼女の友達に、恐らく唯の一度もと云つてよい位、愉快な對手となつた事がなかつた。彼が現れると、來た人は歸り仕度をする。女の人でも同じであつた。今も、彼は明

かに腹の中では嫉妬して居るに違ひなかつた。其をまともに表はさず、親切らしいお爲ごかしの言ひかたをする。其が仲子の癇癖に觸つた。内心に在るものを、いきなり刺し通すやうに、彼女は

「ちつとも邪魔どころぢやあなかつたわ、面白くてよかつたわ」

と答へた。佃は大股に次の部屋に去つた。仲子は、その後姿を見ると、盲目的に衝動がこみ上げて來るのを感じた。彼をもつと苦しめ、もつと苦しめ、參つて本音を吐く迄執念く追窮してやりたい――。佃は彼女に後を向け、充分仲子が居るのを知り乍ら知らないやうに、脫いだ洋服を衣裳簞笥に懸けて居る。皮肉な、毒々しい眼付で、良人が振向くのを待ち構へて居た仲子は、不圖、自分の口許が變に歪んで居るのに氣がついた。左の脣から頰にかけ、捩れたやうに斜に歪んで居る。猶心付いて見ると自分は、心の眞直な人間が立つやうに立つて居るのではなかつた。敵意に滿ち、しぶとく、叩きのめされても此處は退かないぞと云ふやうに立つて居るのだ。――仲子は、自分の中に相搏つ烈しい二つの力を感じた。一つは頑固に、いや、いやと、理性の手を振りはらつて只管喧嘩したがつて居る兇猛な情熱。他の一つは、情けながり、熱心に、止めた方がいゝ、さあ、彼方に行かう、此處に居てはよくないと勸めるもの。――佃が、ガチリと簞笥の觀音開きを閉めた。その拍子に、仲子は、辛うじて惡體をつかずに歩き出した。

程なく老人が戾つて來た。

臺處をし乍ら、先刻の凄じかつた氣持の記憶が仲子の頭から離れなかつた。瓦斯の火や湯氣やで臺處は暖いのに、彼女は心寒かつた。仲子には、自分が彼那心持になつたのが、油斷ならぬ一つの墮落に思へた。自分が若し本當に良人を尊敬し、愛して居るなら、彼那惡體な、天が眼を逸しさうな氣持になれたゞらうか。優しく、眞心からの苦痛や悲しみを感じたに相違ない。良人として敬愛しないとしても、眞實仲子の心が、健全な人らしい狀態にあつたら、彼那風にはな

らなかつた筈だ。これ迄、彼女は佃の考へ方に同化しないやうに、同化しないやうにと努め乍ら、彼には出來るだけ、正面から、公道から必要な論判は遁ばうとする眞面目さを失はない積りであつた。其が大いに怪しくなつた事を、伸子は今日の心持で自覺せずに居られなくなつたのであつた。彼女は、其と云ふのも、自分が意氣地なしだからだと思つた。自分には、卅何年來良人の裡に巢喰つて居る種々な化物を、一息に追ひ散す電雷のやうな力がない。然し、すつかり許し認め、自分もそのやうに化して行くことは、此又絕對に出來ない。自分に對する焦立たしさ、良人の憎さ可愛いさ、ごたませになつて彼那ことになるのだ。――

伸子は、煮魚を皿に盛り生薑をつけ合はせて居た背中をぐつと延し、深い大きい息をついた。あゝ、自分も變つて來た。――以前の彼女であつたら、きつと今頃はもう良人のところに行き、自分にさつき起つた心持を話して、

「御免ね」

と云ひ乍ら、擧手の禮でも仕て居たゞらう。けれども、現在の彼女は、迚も其那氣が起らなかつた。獨りで、板の間に額をこすりつけて淚をこぼしても、佃に許しを乞ふのは堪らなく思へた。自分がさう云つて彼のところに行けば、佃は、如何にも伸子だけが後悔するのが當然であるやうに、自分は聖き小羊のやうに汚れなき者でゞもありさうに、指を延して彼女に祝福を與へるだらう。それを想ふと、伸子は再むか〳〵つとして來るのであつた。そして、又、それが彼女を傷めた。こうやつて、自分も到頭醜怪な捩くれ者になり終ふせるのであらうか、と。

（六）

英國皇儲の來遊は、一般の好意を呼び醒して居た。仲子達は老人づれで、日比谷から、歡迎門の出來た馬場先まで見物に出た。夥しい群集とアーク燈の光とで、お濠の松の格恰までいつもと違ふやうに見えた。彼等は、廣場の小砂利の上の人群に混つて宮中の饗宴から退出される皇太子を遠くから見た。自動車の中で、禮裝をした若い皇族は、退屈なやうな、生眞面目な顔付であつた。老人は、田舍の日常生活に直ぐ役立つ、實際的な小土産を持つて、翌々日歸國した。

佃が又いそがしがる時が近づいた。

或夜、佃は部屋の眞中に胡坐をかいて外國から來た書籍包みを開いて居た。厚い鼠色の包裝を解くと千八百何年、千五百何年といふ古い出版の本が現れた。彼は送り狀と引き合はせては、手を延して一冊づゝ傍の卓子の上に置く。仲子は、蠟引きの紐やごわ〳〵の紙を横で畳んで居た。夜になると、界隈は靜かであつた。仲子は、その靜けさを今夜殊更に感じた。

「──おや──こいつは變だ……」

古風な皺表紙の一冊をいぢくつて居た、佃がやがて云つた。

「重複したんぢやあないかしら……彼方の机の上に、この前寄來した方の送り狀がある筈だから、一寸とつて來てくれない」

仲子は、良人の部屋からタイプライターで打つた書つけの綴ぢたのを持つて來た。

「──何て云ふ本？……この前のは其の第二卷と五卷だけよ、間がとんで居てよ」

「どれ……ふうむ、さうすると今度のは一、三、四、と來るわけなんだが……一卷が無い……變だな……」

彼は、伸び上つて、卓子に載せた分を、又自分の膝の上で繰りひろげ始めた。──

仲子は、その樣子を見て居たがやゝ暫くして

「――ねえ」

と聲をかけた。彼は、大部な本の頁を檢べる方に氣をとられ、うつかりした調子で答へた。

「なに」

「相談があるの」

「何です」

「…………この間うちずつと考へて居たんだけれど、夫婦の生活といふものは斯ういふ形しかないもの？」

「さあ…………どういふ意味で云ふんだか知らないが、さうでせう」

「もつと自由ぢやあいけないのかしら」

佃は、新しい本をとり上げる拍子に、凝つと仲子の顏を眺めた。

「何故？――何か違つた形が必要なんですか」

「私、當分自分達が別々に暮して見たら如何うかと此間から思つて居るの」

「――僕はちつとも其那必要を感じません」

斬りすてるやうな語勢であつた。

「だから、御相談なのよ。お父さんがお歸りになつてから、悠くり相談にのつていたゞき度いと思つて居たの」

仲子が、別々に生活した方がよいのではあるまいかと思ひ始めたのは、夙からの事であつた。最近になつて、彼女にはさうでも仕て見るしか新生活の拓けようがなく感じられて來た。彼女には、段々良人が解らなくなつて來て居た。たゞ

解らないと云ふ單純な言葉はこの場合適當でない——つまり、彼女に斯ういふ人なのかと解る彼は、餘り情けなさ過るので、本當に彼、佃一郎といふ人の本體が其なのか、或は自分がいつの間にか、稍々酷すぎる周圍の批評に化せられて僻見で觀察するやうになつたのか、我ながら判斷に迷ふ苦しい端目に成つて來たのであつた。昨今のまゝでは、伸子に前途が眞暗に思へるだけであつた。もう、話し合ひなどと云ふことに、彼女は信用も効果も認めなかつた。彼女は事々に、良人の云ひ拔けやはぐらかしを感じた。その、齒痒ゆさと不安に焦立つて、假令彼女の氣が逆はふが、うさ晴しの大我儘で放埒の極みを盡さうが、彼は依然として、外見妻に寛大な、忍耐深い良人であるだらう。良人が、どこまで彼女が精神的に低下しようとも、程度の低い方へなら無限に寛容であることは、實際伸子に恐ろしかつた。伸子は、自分の意志の弱いことや、不確な人格がたよりにならないのをよく心得て居た。彼女に必要なのは、其那成つて居ない自分さへ、比較して見れば、良人より増しに思へるといふ、けちな自信では決してなかつた。自分と云ふ未熟な一人の女にとつて、無理のない、自然な立場だけが欲しいのであつた。

生活を一緒にして居て、心持だけ影響されまいなどとは、事實出來ない相談であつた。彼の考へ方や觀かたに、釣込まれて同じようになりたくないと思ふので、餘計佃に對して神經質になり、不調和を來すのかとも、伸子は考へた。夫婦だからと云つて、無理やり、一まとめの形を繕はず、一人一人、それ〳〵に生きるところを生かしたなら、彼も自分も傷くことが少いのではあるまいか。伸子は、良人が先づ反對するのは覺悟で、相談し始めたのであつた。

「——勿論、變則なのは私も知つて居ます。けれどね、病氣になれば、私共は病院にも入るし、療養院にだつて行くでせう？　結婚生活が病氣なのよ、私共のところでは——」

佃は、不快な話が持ち出されると現はす、沈鬱な横皺を額の上に見せた。

「僕にはちつとも解らない――それは、初つから幾度も云つてある通り君は自由です。飽くまで自由なんだから、どうでも好きに仕たらいゝが――僕には其那こと出來ません」

伸子は、今はもう一種の惰力で、膝の上で紙を延し乍ら、更に自分の考へを説明した。彼女は、別々に生活すると云つても、動坂には行かない積りであること。經濟的に佃に厄介はかけない積りなことを話した。

「本氣で、各々が生活し始めたら、この變に嘘だらけのやうな暮し方の、兎に角一部分だけでもさつぱりすると思ふのです。さうお思ひなさらない？ 私共は本當によくない。胡魔化し暮しをして居るのよ」

佃は、不意に頰でも打たれたやうな眼付で伸子を見据えた。

「我々がどんな罪を犯して居ます？ 少くとも僕は、神にいつ呼び出されても、潔白な心持で、君を愛して居るし、生活して居る」

「でも……私が嘘だらけの生活と云ふのはね、斯ういふ點なの。一番手近な例は、私共は……」

伸子は、自分の云はふとすることに怖えたやうに、思はず途切れて躊躇したが、早口に續けた。

「私共は――もう永いこと腹の中で衝突して居てよ、勿論、貴方は其を御存知だわ。でも、まるで、斯うやつて私が切り出すまで知らん振ぢやあないの？ 何故？ 私はね、さういふ貴方が――厭で――……憎らしいの。さう感じ乍ら、私は又私で、正直に貴方にそれが云へない。――こぢれて居るとお思ひなさるでせう。其那にもたもたし乍ら、奇麗な顔をして奥様、旦那様になつてすまして居るのは私恥しいの、全く」

佃は腕組みをして、微に唇を震し乍ら、壓しつけるやうな聲で云つた。

「――私が、此那に眞心をかけて愛して居るのに、苦しめるのは全く氣の毒です。――然し、別に暮すなんて云ふこと

は、絶對に出來ない」

愛とか、眞心とか云ふ言葉が佃から洩れると、伸子はひどく切ない、自分の辛辣さを誘ひ出されるやうな刺戟を感じた。

「何故、絶對に出來ないの？　夫婦は夫婦なのよ、ただ生活方法だけ二人の書生にかへるのよ」

「出來ません。考へて御覧、假にも教壇に立つ者が、其那ことでどうして人に顔向けが出來ます？　折角理想的な結婚だと思はれて居るのに」

「それは變だわ」

伸子は、著しい警戒を感じて拒んだ。

「私の考へは正反對よ。人に顔向け出來ないと云ふのは、却つてこのまま互にわるくなり下つてこそよ。一寸でも好くならうとする努力に何の愧しいことがあつて？　私共のつながりに、若しちよんびりでも、理想的なものが在るんなら、其こそ互が後めたくない生活をするに必要な勇氣を與へる筈よ。いい夫婦と云ふのは、私左樣思ふの、決して、二人でいい氣持にとぐろを卷いて眠つて居るのぢやあない。見かけなんか第二よ、何處までも、どう形を變へても、人間は斯う云ふ心で生きたいといふ、それを互に守つて生かし抜く、それこそ本當の夫婦だと思ふのです」

永い沈默の後、佃は、伸子に、ひどく穏やかな樣子で反問した。

「――ぢやあ、君は、暫くでも別に暮したら二人の間がきつとよくなると云ふ信念がありますか？」

伸子は、言下に左樣だと單純に斷言出來なかつた。別々に生活することは、佃には佃自身の、伸子には伸子自身の、しんの要求、天性の自由な發言をきかせるだらう。結婚生活の、習慣だか、感傷だか、僞善だか、恐らくは其等すべてがごた〳〵本性になげかけたものの大掃除だ。伸子は、そのさつぱりした各々の上に、改めて、自然に架けるだけ濃やか

な睦しさ、嘘のない獻身を築きたい心なのであつた。別に生活する、其だけでは無意味と思はれた。その間に、如何那自分と對手とを如何う見なほすか、其處が要點で、同時に、今、良人の云ふままの意味でよくなるかどうか、彼女自身も斷定出來ないところであつた。

佃の意見は、全然逆であつた。不調和があればある程、嫌なところがあれば在る程、一緒に生活しなければならない。近くに居て、日夜糺し合ひ、矯正し合つてこそ夫婦だと云ふのであつた。

その時まで、心の均齊を保つて居たつもりの伸子は、佃がさう云ふのをきくと、胸の中が煮えくりかへるやうに感じて思はず顔色をかへた。彼女は摑みかゝるやうな眼で良人を見た。

「貴方は、ぢやあ、いつか一度でも、私が伺ふことに、淡白に、男らしく返答して下すつた事があつて？　自分の間違ひを、内心でだけでも正直にお認めなつたことがあつて？」

伸子は、良人を見据えて、瞬もしない眼からポロ〳〵涙をこぼした。

「さういふところが、我々の生活の地獄ですよ。貴方は、私が腹を立てゝ立てゝ、つい失禮なことを云ふまで、冷淡だつたり、狡かつたりなさる。あとで、私が失言を謝ると、理屈まで私が引こめたやうに、御自分の方は、それなりけり。貴方のは言葉だけ――言葉だけです」

荒々しく、涙の出るのを憤るやうに伸子は兩手で眼を擦つた。

「自分が此那に悲しいのだつて、私は癪に觸る」

伸子は、袂で邪慳に顔を拭いた。

「………私はお馬鹿だから、いつも、今度こそは、今度こそはと、思つて來たわ。もう、いや！」

佃は、濃い眉を寄せ、傾けた頭を痛ましいと云ふ風に振り乍ら云つた。

「――私の眞心をどうか信じて下さい」

「信じられないの。……………信じられなくなつたの此頃」

「あゝさうだらう、さうでなくて其那………」

一時間にも二時間にも感じられた數分の後、佃は、改めて始の問題に立ちかへつた。

「では――どうしても、別に暮したいと思ひますか？」

聲の裡に何か閃くものを感じ、仲子は、本能的にはつとした。濡れてきら／＼する瞳で良人を見上げた。蒼白い、疲れた表情の佃は、顏を反け、仲子の返事を待つて居る。仲子は、自分の言葉が、何か運命的な反響を佃の裡から引出さうとして居るのだといふことをはつきり感じた。仲子は、

「――その方がよくはないかと思ふの」

と云ふ言葉を、泥濘を歩くやうな氣の重さで云つた。佃は椅子の上で、それでよい、と云ふ風な身じろぎをした。そして、云つた。

「――ぢやあ仕方がない――一緒に生活出來ないんなら………別れませう」

「………………」

腕かけのところに片手を置き、その上に頬杖をついて默りかへつて居る仲子の顏を、今度は佃が覗くやうにして續けた。

「ね、さうしませう、左樣するしか仕方がない。――私はもう何も彼もすてゝ田舍に引込みます。――實に、實に殘念だが止を得ない」

仲子は、不可抗な力で、自分の心が一歩ふみ出すのを感じた。

「其とこれとは別問題よ」

「どうして？　どうして別問題です？　私には全部です。——だから君になんぞ解らないと云ふんだ。此那ことを云ひ出す位なら何故、何故」

佃は、仲子の手をいきなり捕へると自分の手も一緒に、髪の毛を滅茶〳〵にかきむしり乍ら、烈しく歔欷し始めた。

「初つからずつと友達のまゝで居たかつたんだ」

（七）

涙でびしよ〳〵になつた良人の歪んだ蒼白い顔、額に水死人のやうに引かぶつた髪、聲。それを思ひ出すと、仲子は二三日經つた後でもひとりでに、ぞおつとした。そして、落付かない、變な氣がした。恐ろしい眞實を瞥見したやうにも思はれ、芝居と思はない芝居を見せられたやうでもあり——佃に、この懐疑の責任はあつた。仲子は、他のどの女もさうであるやうに、男は、女より誠意をもつてしか涙はこぼれないものと思ひ込んで居た。それを、佃が、いつぞや、動坂の親達に示した成心ある感傷劇の涙で、仲子に強い感銘を與へて仕舞つた。

翌朝、仲子の机の上に、佃がコップにさして飾つて置いて行つて呉れた、時節はづれの、西洋櫻草の花からも、仲子は其に似た感じを受けた。その西洋櫻草は、裏の竹垣の根元に、先住の人が忘れて行つた根から、おくれてさゝやかな薄桃色の花を數日前からつけて居たものだ。仲子は、自分に向つて何だか表情して居るその可憐な花を見るのもいや、ど

けて仕舞つても相すむまいと云ふ、一半な心持で永いこと眺めた。

兎に角、伸子は、金しばりのやうに佃の掴みを全身に感じた。兎に角、彼は自分を離したくない。占有から解きたくないのだ」。

伸子には、佃の切ない氣持も、決して通じないわけではなかつた。二人が結婚してから、彼ばかりいゝ目を見て居るのではない。それどころか。普通一般から見れば、伸子は、随分ひどい我まゝ女房であつた。彼を一人で放ぽり出して旅行にも出た。寝坊でもあつた。さうし乍ら、伸子には、些細なさういふ日常の自由を大特權のやうに貼紙つきで與へられるといふ云ひ難い憂鬱、良人が其だけで充分足りて居ると定めて他を省みない魂の孤獨さがあつたから、これは無勘定にするとしても、彼が周圍から結婚について受けた批評は我慢ならない事が多かつた。佃は、最初から愛なくて伸子を騙して自分の社會的地位を作らうとしたやうに云はれた。その彼としては、今、伸子と別居し、世間に家庭生活の破綻を示し、從つて自分に加へられた評言を事實で裏書きするやうなことは、全く苦痛に違ひなかつたであらう。どうかして、結婚生活を形に於てだけも成功させ、それ見ろ、と冷評を覆してやりたい——本もの丶愛のあつたことを思ひ知してやりたい。本もの丶愛を欲しいのは、誰より先に伸子であつた。悲しいことに伸子は、彼の、その、本もの丶愛があると思ひ知らせたい、と云ふ二次的な意欲ばかり先に、感じた。太陽のやうに捕へ得ず、而も明るく暖い愛そのものより、伸子と自分とによつてどうにか形造られた生活の組織を、中折れさせまい、ものにしようとする中年の男の、實際的な意地ばかりが、金梃のやうに感じられるのであつた。

伸子は、折があると有耶無耶に終つた話を復活させた。種々の方面から。

「——私共は、自分達を間違へて考へて居るのぢやあないかしら。貴方、私の爲にだけ生きて居ると仰云るけれど、お

互に其那生活力の弱い者同志でせうか。私が生活そのものを愛して居るのは御存知だけれど。――若し貴方が其那氣の弱い、生存力の稀薄な人なら、彼那に若いうちから苦勞して自分の路はつけて來られなかつたゞらうと思つてよ。自分を強く守るたちなのよ。それを、不自然で、又不必要なほど、私、私と云つて下さるから、いけないんぢやあないかしら。生れつき通りになりませうよ。ね、そしたらきつとさつぱりしてよ。二人の間も晴れ〴〵してよ」

佃の返事は定つて居た。

「どうにでもお考へなさい。私の本性はこれつきりだ。――私の覺悟はもう、結婚する時から定つて居る。その決心を、自分がいゝと思つた時に實行するだけです」

斯樣な言葉も、伸子はどこまで本氣にすべきか判らず默り込むしかなかつた。すつかり本當かと思ふと、可怖くなつた。脅かされるのだとすると伸子は、莞爾して愛嬌よく

「さう？　では、どうぞ」

と云つて見たいやうであつた。――七月に成つた。

佃は、勤め先から、關西へ出張することに成つた。短い旅行の爲に入用なものがちつとも揃つて居なかつた。伸子は、互の間が不穩な、底鳴りのして居る有樣ではあつたが、其ために却つて平氣で不自由な、みつともない旅行はさせ難い氣がした。丁度あつた僅の金を持つて、來合はせた保と彼女は三越に出かけた。

暑いが、さつぱりした風に吹かれて、建物の頂上に揭げられて居る三越の赤旗が、愉快に蒼空に飜るのが見えた。一時間ばかりで買物が濟んだ。

「どうする？　これからすぐ動坂へかへる？」

中學の制服をつけ、仲子よりずつと大きい、象さんといふ綽名のある保は、柔和な顔付で往來を見乍ら答へた。

「僕どうでもいゝや」

「又赤阪へ歸るとおそくなるだらうから――ぢやあ少し銀座でも歩かうか」

保は、ひどく嬉しさうに大莞爾々々で合點した。

「うん」

日陰の丸善の側を歩いた。仲子は反對の方に花屋があるのを見つけた。

「どう？　見ませうか」

「あれ剪花屋でせう？　ぢやあつまらないや、自分のところで育てゝ居るところでなくちや。ね。ほら丸の内ビルディングに花やがあるでせう？　あすこに吉岡さんて人が居るの、その人と僕友達んなつちやつた」

「まあ、どうして？　行つたの」

「始めね、球根をきゝ合はせに行つたのさ。賣るのなんか無いつて云つたんだけれど、………可笑しいの、友達んなつちやつたら、無いけど、分けて上げますつて、いゝのくれた」

「それはお目出度う、貴方がいゝ象やさんだから御褒美に呉れたのよ、きつと」

彼等は、或家族向きの喫茶店で氷菓ソーダを飲んだ。仲子はストロウを二本とつて保に渡し、自分も同じだけコップにさした。

「やつて御覽なさい、この頃はやる飲み方よ。――一本の方を吹いてよく泡（あぶく）を立て乍らもう一本の方で飲むの」

保は、何の氣なく

「ふうむ」

と、二本一度に唇に當てがはふとしたが、

「やあ！　怪しいぞ、怪しいぞ」

と、手を離した。

「僕、すまないがよく分らないから、姉ちゃん一寸先にやつて見せてよ」

「何でもないわ、ほら」

仲子は、一本のストロウでコップから溢れる程ソーダの泡を立てゝ見せた。

「――出來るの？本當？」

保は、つい眞面目に覗いたが、忽ち、仲子が吹いて居る時にはストロウを黄色の液體が昇つて行かないのを發見すると、さも本懐さうに體を揺つてふきだした。

「ほうら！　だから僕變だと思つたのさ、息を二つに分けて使ふなんて――」

仲子も笑ひ出した。

「でも、すぐ變だと思つた？　私は本當に幾度もやつて見ちやつたわ」

「ははは、いつ？」

「ずつと先、西洋人のお爺さんにかつがれたの」

保が、上機嫌で上野行きに乗るのを見送つてから、仲子は自分もライオンの前から電車に乘つた。空いて居た。仲子は、嵩張らない包みを膝の上にのせ、開け放した窓の外に移るお濠の景色を眺めて居た。透き徹る西空の下で、威厳ある重い

石垣の線と色、軟くくすんだ芝生のつり合ひ、更に鬱葱と緑濃い老松の形などが、潤やかな、曲折ある水の面と相俟つて、如何にも調和ある日本的美しさに充ちて見えた。仲子は、さつきからの名殘りで、表にだけ少し明るさの漂ふ、沈んだ心持で其を味つた。三宅坂まで來た時、仲子は不圖、向ふ側に腰かけて居る一人の婦人に目をとめた。何處から乘つて居たのか、卅七八の品のよい夫人、母らしさの溢れるやうな人であつた、もの丶よい黑つぽい服裝で、髮の毛から低い下駄を穿いて居る爪先まで、すんなり素直であつた。洋傘も黑い。どこにもひけらかすやうなところはないのに、身嗜のよさや、洗練された趣味、矢鱈に大きい聲で子供など叱ることの無ささうな寛容さが一目で窺はれた。見て快い夫人の一人だ。仲子はそのまゝ視線を動しかけた。すると、ゆつたり正面を向き、滿ち足りた落付きで窓外を觀て居た夫人が、仲子の眼差しを追ふやうに、極自然に彼女の方を見た。計らず眼が合つた。直ぐ穩やかに逸れはしたが、それは何とも云へず朗らかな溫い視かたであつた。鷹揚で、本當に人間が人間を見るらしい眼つきであつた。

無禮にならない程度で、時々其夫人を眺めるうちに、仲子は、一種異樣な心持になつて來た。夫人は、全く見ず知らずの行きずりの人だ。其にも拘らず、心の狀態が大變いゝのが彼女にひた〳〵と感じられ、傍によつて、豊かな白い手に觸り、小さな聲で一言

「ね、私…………」

と囁きさへすれば、この頃の心の苦しさ全部がたちどころに對手に通じさうに思はれるのであつた。そして、奇蹟的に、忽ち自分の行詰つた境遇が開かれさうに思はれてならない心持がする。…………

仲子は、其那わけは無いと知り乍ら、つい屢々夫人の方に目を牽かれた。仲子がちよい〳〵見るので、自ら夫人も彼女にやゝ特別な注意を向けるらしい。微に茶がかつた瞳が、亂れない朗らかさで時々彼女の額や頰にふれた。その度に、

仲子は、思慮の外の力に引よせられ、今にも席を立ち上つて夫人のところに近づきたいやうな誘惑を感じるのであつた。實際起り得ないことは、正氣な彼女の頭が知つて居た。而も、その誘惑は如實に強く、電車を降りて仕舞ふ迄、仲子は、是非すべき事を躊躇して居るやうな不安な急き立てを自分の裡に感じた。

「——手紙を下さること？勤坂の方へ」

「さあ………其那暇があるかどうか………僕の手紙なんぞ詰らないでせう」

「………………」

斯ういふ會話をとり交して、數日後佃は旅行に出た。仲子は勤坂へ行つた。

（八）

繃帶をぐるぐる卷かれ、自由の利かない左足を、ぎこちなく横坐りにし、仲子は涼しい北の離座敷の廊下に居た。彼女の前に大きい籐のバスケットと、雜誌や反のまゝの手拭地を入れた亂箱があつた。十時過で、蟬の聲が、森とした家じゆうに響いて居た。裏の方で、勢よく水道の水をはぢかせて居る音が聞えた。父は一時間も前に出勤した。母や小さい弟妹たちは、避暑に行つて居る。其方へ書頭書生が出向く。その荷物に、注文の品々を、人氣ない奥で、仲子がつめて居るのであつた。

女中が、ハガキを一枚持つて來た。佃からであつた。彼は、彼那ことを云つて出かけたが、ところどころから、ペンで、

景色を寫生などしたハガキを寄來した。今朝のには、一寸見ただけでは何の動物か判らない、眼ばかり大きい鹿が描いてあつた。おや、奈良に行つたのかと、伸子は羨しく感じた。宛名の下に、短い文句があつた。「昨日寸暇を利用して奈良を俥で一巡しました。春日の森の中は、別天地のやうに寂しかつた。鹿がやさしい顔で幾匹もよつて來ました。此那優しい動物なら、足の痛くなるやうなこともあるまい」伸子は、苦笑ひを洩した。保と三越に行つた日、歸つて見ると、左足の鼻緒の下に當る皮膚がすりむけたやうに水腫になつて居た。痛痒く不快であつた。何でもあるまいと、素人療治をするうちに、水ぶくれの數が增え、苦しく成つた。彼女はそれの手當に、毎日病院に通つて居るのであつた。此那に糊帶された鹿が步く形恰を想像すると、少し可笑しかつた。伸子はハガキを見なほした。が、二度目に讀むと、此那優しい動物なら云々といふ文句が、變に意地惡く皮肉に感じられた。お前の心がらで、痛い目も見るのだと、云ふやうだ。

伸子は、ハガキを傍にすて、急いでつめものを終つた。書生を呼び、預つて居た旅費と父からの手紙を渡した。

伸子は着物を着換へ、病院にゆく仕度をした。俥に乘りかけて居ると、遽しく廊下を駈けて來る跫音がした。

「あゝ、一寸！お電話でございます」

「どなたから？」

「柚木さんとか仰云ひました」

伸子は、直ぐ戻つて電話口に出た。柚木さんと云ふのは、伸子の師とも云ふべき老博士に違ひなかつた。彼女は、動坂に來るつい前、長い手紙を出した。其中に、彼女は昨今殆ど生理的に持ち堪へ切れず譫言にまで出さうになつた內心の苦しさ、自由な生活への憧れを、あらひざらひ吐露したのであつた。

先方は、夫人であつた。

「もし〳〵仲子さんでいらつしやいますか、あのう宅の代理でございますが、御手紙は確に拜見致したさうでございます」

仲子は夫人に對し、極りわるさを感じた。彼女は無器用に禮を述べた。

「それでね、早速御返事申上るところでしたが、丁度興津へ參つて居りましたもんで失禮致しました。――貴女明日やはり其方においでですか」

「はあ、當分こちらに居りますが」

若し、仲子が在宅なら、あれについて面談したいから、柚木先生自身仲子のところに來て下さらうと云ふ言傳である。

仲子は、恐縮した氣持になつた。彼女は、今は足の工合が悪くて駄目だが、早晩自分で立ち上らうと思つて居る旨を云つて辭した。

「でも、どうせ小石川についでがあつて出ますのださうですから……」

では、どうぞと電話を切つた。

病院は、相變らず込んで居た。月曜日なので特に人が多く、仲子は控室にも暑苦しくて居られなかつた。廊下の突き當りに窓が開いて居る。窓から裏の内庭が瞰下せた。周りに石炭殻を敷いた、煉瓦建の離屋がつい目の下に在つた。消毒室か汽罐室と見え、小さい建物全體をその根元に吸ひ寄せるやうにして巨大な、眞黒な煙突が、彼方側から夏空に聳え立つて居た。煙は出て居ない。程なく、仲子が靠れて居る窓の下の、庇でかくれた出入口から、一人、若い、二の腕まできび〳〵白衣の袖をたくし上げた看護婦が現れた。石炭殻の上を身輕に、ひよい、ひよいと飛んで石敷の煉瓦建の入口に消えた。薄暗い入口で瞬間風にふうわりと膨らんだ純白の裾の運動がすが〳〵しく仲子の心に觸つた。なか〳〵

その看護婦は出て來ない。今度は反對の方から、上は縮の襯衣一枚で、魚河岸の若衆がする紺前垂をしめた男が來た。鼻唄まじりで、草履を引ずり乍ら雜草の生えた洗濯場の溝沿ひに見えなくなつた。

仲子は自分の背後まで追つて渦卷いて居る藥くさい空氣の中での混雜と、目前の、誰にも注意されない閑靜な一隅の光景との間に著しい對照を感じた。其邊をぶら／＼して居ると控室の人ごみを縫つて、左手に帳簿を持ち、仲子の馴染の快活な看護婦が出て來た。

「——どうもお待ち遠さまでした、どうぞ」

髯の薄い、皮膚の色の惡い、いつも懶い氣のない風で患者を扱ふので、仲子が嫌いな醫者が當番であつた。彼は仲子の挨拶に

「や」

と口の先で答へ、ちよいと人指し指を動した。繃帶をとけ、と云ふ合圖であつた。彼は、指の先で、一二ケ所、患部を押した。

「きのふの通り」

看護婦が、平手で、石膏の型でも作るやうにべた／＼仲子の足一杯膏藥を塗りこんだ。其をやつて居る間に、白いカーテン一重の隣に、眼と鼻と口のところだけ怪物のやうに穴をきり拔いた、顏ぢゆう繃帶の大男が來た。

仲子は、陰氣な表情で、厄介な荷物のやうな形恰になる足の先を見守つて居た。——さつきから、彼女の頭に一つこびりついて離れない或錯綜した感情があるのであつた。明日、柚木先生が來て下さる——來て下さる——それに對して、自分に恐縮と厚意を有難く重く感じる心持しかないのが、出がけ電話を切つた時から、仲子のこだはりになつて居るの

であつた。

柚木先生に送つた手紙に、仲子は、伽と結婚してから、自分以外の者に打ちあけた其が最初の不滿と疑惑とを、おほつぴらに書いた。數年心に溜つて居た勢だから、先生を少なからず動したゞらうことは仲子に推察された。先生は彼女が生涯の伸るか反るかの瀬戸際に居ると認め、其危期を、最も適當に處置する具體的な相談相手になつてやらうと、明日來て下さるに違ひない。ところが、自分の様子はどうであらうか。仲子は自分ながら自分の精神が不活潑なのに愕きを感じた。電話を聞いた時、彼女は、この有利な機會を力綱に、一つ深く、率直に自分の計畫を實行しようと云ふ、頼もしい勇氣を感じるどころか、却つて後じさりする怯懦な自分を感じた。先生の訪問によつて、事態が一變しさうな不安、また其處まで決定的ではありたくない未練。若し、同じ結着になるにしろ、先生の言葉に從つてした事だと、後でこの意識に苦しみさうな自分の性分の心配。理屈で云へば、抑々其なら何故、柚木先生に其那手紙を出したかと詰問されても立派な申し開きは自分にさへ立たない、矛盾した氣持が、仲子に生じたのであつた。先生にあゝやつて書き乍ら泣いて自分の苦しみや憧れを訴へずに居られなかつた心持、それも仲子に自分を僞つて居るとは思へなかつた。心が燃えて、燃えて我慢出來ずに其を命じたのだ。其かと云つて、現在の、この踏ぎりのつかない、無いとわかり切つて居る筈だのに何か大切なものを見失ふのではあるまいかと、今更遲疑する心の狀態も噓ではない。動かせない本心の一端であつた。これにも從ふしなかい。仲子は、自分が斯ういふ時になつて、いかにも女々しい、意志のない女の通りに振舞ふしかないのが切なかつた。

夕飯の時、大きい榻の卓子に、仲子は父と二人ぎりであつた。話の切れめに、彼女は稍纖穩なく

「ね父様、あした柚木先生が來て下さるのよ」

と云つた。父親は、仲子の元氣のない調子を不審さうに彼女の方を見た。

「ほほう、それは〳〵。だが、生憎阿母さんが留守で困つたな、よく失禮のないやうになさい。何時だい」

「朝のうち……多分十時頃。でもね、あしたは私のところへ來て下さるんだから、父様は御心配なくね」

「心配はしないが……」

仲子の表情が感染し、考へ深い顔つきで父親は尋ねた。

「何か特別用事でもおありなさるのか」

「私が云つて上げたことがあつたもんだから」

仲子は、迚も先生に送つた手紙のことは云ひ出せなかつた。暫く待つても更に、その先を促すやうに父は默つて居る。

彼女が、説明する氣になれないのを認めると、父は獨特の器用さで、娘のためにすらりと其點をよけて呉れた。

「ぢやあ、私は一寸御挨拶だけして失禮しよう、丁度同じ時刻に來る人があるからその方が好都合だ」

（九）

翌朝、約束の時間に先生が見えると、仲子は、愈々微かな氣後れを感じた。いつそ、病氣にでもなつてしまひたい氣がした。片方の足を厚ぼつたく繃帶し、そのやうに萎れて居る仲子が、慘めな有様に見えたのだらう。先生は、老年で幾分嗄がれ乍ら精彩のある音聲で懇ろに、彼女の健康を尋ねた。

「五月蠅いものです、宅の家内なぞも矢張りそれに類似のもので永く困却しました。…………ところで、あのお手紙は

細く拜見しましたが……何ですか……伺さんは、何處へか……御旅行ですか」
伸子は、ぶきつちように必要な答をした。
「あゝさうですか………」
先生は、安樂椅子の奥によりかゝるやうにし、考へ乍ら、右手の指で輕く大半既に白い髭を撫でた。
「お手紙で、實は意外に驚きましたやうなわけです。御母堂は、始つからなか〳〵御心配で種々お話もありましたが、貴女も御婦人である以上一度は家庭の人となられるのも結構だらうと申して居た次第ですが………御兩親にはもうお話しですか」
「……まだでございます」
云ひ終るや、否や伸子は何とも云へない極りわるさに襲はれた。彼女は、自分が答へた瞬間に、それが先生にとつて案外なものであつたこと、同時に、先生の心の裡でこの問題がすつかり初めの重さを失つて仕舞つたことを直覺したのであつた。伸子は、自分のぐうたらな態度の故で、先生が自身の偉い親切心まで、愚弄されたやうに感じられたら、それこそすまないと思つた。彼女は謝罪するやうに云つた。
「本當に筋違ひのことで、先生に御心配おかけ申すべきことでないのはよく承知して居りましたのですけれど………」
「いや、決して其那御遠慮には及びません、力の及ぶことは何なりお役に立ちませうが」
最初とは、明に變つた微かな氣輕さへ含んで、
「では、何ですな、まだはつきり斷らうと實際の計畫はお立てゞないんですな」
伸子は、意氣地なさを、座に堪へない程自覺しつゝ、ありのまゝ答へるしかなかつた。

「手紙で申上ましたやうに仕ようと考へては居りますのです、迚も今までのやうではやつては行けませんから」

「然し、このまゝずつとお別れになり切りと云けわけでもないですな、」

「…………どうなりますか」

柚木先生は、

「いや」

と、仲子の方にこごんで居た背を延し乍ら云つた。

「伺つて安心しました。御手紙の様子では大分御苦しみのやうだし、御悧溌でも御婦人だから、萬一ひよつと何事かあつてはと老婆心を起したのですが……その位考へる餘地をお持なら大丈夫です」

仲子にとつて、此等の言葉は苦しさを増すばかりであつた。氣でばかり思ひつめ、結局實行し得ない優柔不斷を、體よく指摘されたとしか感じられず、情けなかつた。けれども、柚木先生は、此のやうな仲子の心持を、まるで心づかないやうに、次第に快活に話し進めた。

「……貴女の御決心は、なか／＼健氣ですが、お若いし、御婦人の身で獨立の生活を營まうと云ふのは、事實容易ならんことです。御當人は確かりして居られても、俗世間と云ふものは、五月蠅いものでしてね……御熟考なさるが肝要です。幸立派な御兩親がお揃ひだから、私も安心だが」

其那、世馴れた人なら誰でも云ふことを、先生からきゝたくはないのだ、と云ふ聲が、激しく自分の内に起るのを仲子は感じた。が、其なら、何と云はれたいのだらう？　彼那奴は、今直ぐ、たつた今、棄てゝ仕舞へと云つて欲しいのだらうか？　それとも、飛んでもない事だ。一生從順な、盲目な妻で過せとどやしつけられでもしたいのだらうか。つ

まり自分の心が、先生に左様しか云はせないのを知りつゝ、仲子は、何か天啓的な一言、心境に大變動を捲き起す、霹靂的な一言を渇き求めた。法外な希望が滿されよう筈はない。

「かういふ事は、複雑だし、一生の問題ですから、考へて損と云ふことは決してない。一朝一夕に定まらんものです。……又、では、何か私でお役に立つことでも出來ましたら御遠慮なく仰云い。及ばず乍らお力になりませう」

絽の羽織を勢よく撥ねて俥に騎つた先生の

「どうぞ御母堂にもよろしく」

と云ふ挨拶に、丁寧に頭を下げると、仲子は急に悲しくて堪らなく成つて來た。先生の好意も、自分のよい生活に入りたい熱望も、自分から出たずるずるべつたりで、取かへしのつかなく滅茶々々にして仕舞つた氣がした。仲子は、この問題では、もう二度と先生を煩せなくなつたのを感じた。

七月下旬に、佃から歸京する通知があつた。この夏は、珍しく仲子が動坂に來たので、妻や子供達の居ない、がらあきの毎晩を、父親は比較的無聊を感じずに過して來た。彼は廿八日に歸るといふ佃のハガキを見ると云つた。

「……さて、それでは儂も十日ばかりKへ行つて來ようかな。お前もうすぐ赤阪へかへらなけりやあなるまい」

仲子は、父の足許の低い足臺(フットストール)に腰かけ、團扇で蚊遣の煙を、彼方に煽いだり此方に靡かせたりし乍ら、ぼんやり答へた。

「さうね……歸らなけりやあいけないかしら」

「まだ病院へは毎日行かなけりやあならんのかい」

「その方はもう大分いゝの、大抵なほりかけ」

「その方はいゝ、か。ぢやあ、他にどつか惡いところがあるのかい？　貧乏病なら、私が癒してやらうか」

「違ふわ」

父娘は聲を揃へて笑つた。不圖、仲子は寂しさうに呟いた。

「私も父樣と一緒に行つちまはふかしら」

「Kへか？　然し私の方は、まだこれでなか〱いつ行けるか分らんよ」

仲子は、赤坂へ歸るのがどうもいやであつた。部屋々々の樣子や、其裡で又繰返される日常生活を想ふと、厭せられるやうな氣がした。自分を離さない鐵の機械の間へ挾まりに行くやうにさへ思はれる。幸、其佃の着く朝は病院に行く日なので、仲子は赤坂に戻らないことにきめた。佃は信州の方を廻つて十時過上野に着く豫定なのであつた。

「斯うおし、ぢやあ。鈴木がどうせ暇だから停車場まで迎に出して、此方へ來て貰ふようにすればいゝ。夕飯を皆でたべてから、後はお前達二人の都合にすればよからう」

例刻に病院から歸ると、大きい玄關の沓脫石に、黑靴の半靴が一足きつちり揃へてあつた。仲子には、この艶々した黑靴が妙に意味ある人格を持つて居るやうに感じられた。仲子は、感情をもつて、草履をその傍に脫いだ。

「おかへり遊ばせ。——佃さんがおいでゞございます」

客間に眞直行つた。佃は其處に居ず、茶の間の出窓に腰かけて居た。上着をぬぎ、カラアをとつた白襯衣（ホワイトシャーツ）で、熾に扇風機をかけて居る。仲子を見ると、彼は組んで居た片脚を下して、つい先刻別れて歸つたやうに。

「たゞ今」

と云つた。

「足はどう」

頸の邊がめつきり日に焼けた彼の顏に、改つた、探るやうな表情が浮んだ。仲子も、同じ眞面目な樣子で、默つて良人に片手をさし出した。

「暑かつたでせう？　あつちは」

「あゝ、大阪は隨分暑かつた。宿屋はよかつたけれど」

仲子は、彼の横に並んで腰かけた。佃は、頭を反らせるやうにし、しげ〳〵仲子を側面から見守り乍ら、低い調子で訊いた。

「どう？」

彼女の心は如何那工合かと云ふ意味なのを仲子は直ぐ飮み込んだ。仲子は一どきにこみ上げて來る情愛と、激しく彼を反撥するものとを感じ、當惑し、首を曲げてどちらにでもとれるやうに脣をまげた。

「――今夜一緖に歸りませう」

仲子がはか〴〵しく返事をしないので、佃は彼女を抱へるやうにして顏を近づけ乍ら繰返した。

「ね、歸るでせう？」

即答が出來ないので、仲子は、つけ元氣で彼の手を持つて引立てた。

「――兎に角、まあお風呂でも浴びていらつしつたらどう――さつぱりなさらないでせう？」

糊のきいた浴衣を出して、佃を風呂場にやつた。仲子は、自分も着換へをし、さつぱり、髮に刷毛をかけて來た彼と、開け放しの、矢車草の大盛花のある客間で冷たいものと飮んだ。仲子は、簡單に、彼の留守中あつたことなどを話した。

が、彼女はその間ぢゆう、自分が他に對して變つたものになつたといふ意識で攻められた。元、廿日も旅行して來た彼を、自分はどんな大喜びで歡迎したゞらう。彼女は、大きい女の子のやうに喜んで、喋つて〳〵、うるさい程つきまとはずには居られなかつた。姿の見えない處で、その聲をきいたゞけで、もう嬉しさで有頂天な仲子の心が見徹せる程、單純で、混りけがなかつた。今、自分が左様でないのが仲子自身、悲しい程よくわかつた。急に複雜になつたやうに心が統一して働かず、良人の親しいやうなあかの他人のやうな顔を見ると、安心して可愛がられてよいのか、憎んでよいのか、決心のつかない氣づまりに捕はれる。他も、同様に感じ、本當の調子になれないのを仲子は心づいた。奇怪なことに、彼の顔をちやんと見ず、窓の青葉でも眺め乍ら喋ると、話はなだらかに進んだ。ふと眼と眼がかち合ふと、非禮に、疑ひに滿ち相對峙して讓らない本心の閃を、互に鋭く感じる。言葉が空虚に感じられ、二人は自然默りがちになるしかなかつた。他は、歎息するやうに呟いた。

「──旅行でもして來たら、君の心持もその間に變るかと樂しみにして居たんだが…………何にもならなかつた」

「ね、」

せき込んで、泣き出しさうになつて、仲子が口を挾んだ。

「自分だつて厭よ此那の、本當に厭。………でもどうにも仕方がない。──貴方、御自分にわかる？　貴方がどんなに可愛くて、憎らしい、憎らしい人だか」

仲子は、「憎らしい、にくらし──い」と節のつく程に云つて涙を落した。

午後、親戚に泊りがけで行つて居た祖母が歸つて來た。五時すぎたばかりに父が歸つて來た。彼等はやつと救はれた。父は、アイスクリームの瓶を提げて、仲子に振つて見せた。

「ほーら！いゝだらう？　佃君歡迎の意を表してね」
椅子から立つて、挨拶した佃に向つて、彼は更に愛嬌よくつゞけた。
「ホテルでゞも晩食をやらうかと思つたが、考へて見ると君はずつと洋食ぜめだつたらうと思つてね。まあ今夜は一つ胡坐でくつろいだ方が却つてよからう」
食卓では、父と佃とが種々關西の都會について話した。祖母は、息子や孫夫婦にかこまれて、至極滿悅に見えた。彼女は、突然
「貴方、御影へおいでんなつたかい？」
などゝ佃に訊いた。
「あすこはいゝところだない。知つてる者があつて五十日も厄介になつて居たが、つい近くに、えー、何ちゆう名だつたか――なかに髮結の店まである溫泉があつてない――省三、お前覺えないごんだか？」
などゝ云つた。
「溫泉と云へば…………お父さん、近くで何處かいゝ溫泉は御承知ありませんか」
食事が終る頃に佃が訊ねた。
「ありふれたところでは箱根や伊豆の溫泉だが」
父は奥羽地方の溫泉を二三擧げた。
「おでかけですか？」
佃は、曖昧に答へた。

「えゝ、……考へて來たことがあるもんで……若し貧乏書生達の懐に適ふところでもあつたら」

たゞの雜談だと思つて聞いて居た伸子は、思はず注意を凝して佃を見た。佃は、どこまでも、父との話にして云つた。

「あゝ云ふものに溫泉はいゝんでせう、どうせ旅行しついでですから十日ばかり行けたら行きたいと思つて來たのです」

「ほゝう！　それはいゝ計畫だ。君の體にだつて有益ですよ、是非いらつしやい。溫泉はいゝ」

父一流の耳學問の廣さで、溫泉による天然療法の價値を論じ始めた。

伸子は、思ひがけなさや、佃が何故直接自分に云つて呉れなかつたかと云ふ疑問を直ぐ感じたが、次第次第に其等を忘れて嬉しくなつて來た。伸子は生來旅行ずきであつた。結婚する前は、おとよさんと、範圍は狹いがよく出かけた。溫泉も一つ二つは知つて居た。佃と生活するやうになつてからは、彼の職業の關係と氣質から、三日四日の小旅行もしなかつた。夏、佃の生家へ行つたぎりであつた。それとても、多勢の家族の裡に入り、違つた周圍で東京に居てと同じ生活の反復にすぎなかつた。本當に溫泉へ今度行くと云ふなら、それは伸子にとつて初めての旅行らしい旅行、保養らしい保養なのであつた。まるで見も知らない人々の中に、二人ぎりで暮すこと、それも彼女の空想を輝かせた。父の云ひぐさではないが、自然はよい醫者だ。山々や、溫泉の匂の漂ふ軟い空氣や、晴れやかな朝の目覺めは、活潑になる細胞の作用で、精神にまで新しい力を吹きこむかもしれない。その旅で、二人が又、苦情があつても一寸喧嘩すればそれですつかり奇麗に忘られるやうにでも成れたら、如何那に嬉しいだらう。あゝ、どんなに仕合はせなことであらう！

佃にも同じ考へがあつたのだらうと、伸子は駭きと悅びとを以て推定した。彼女は、朝から、始めての心を打ち開いた調子でアイスクリームをたべて居る良人に云つた。

「――本當なの？　そのお話は」

「行きますか？」

「えゝ行つてよ！」

「ぢやあ、早速電報で問ひ合はせて見ませう」

佃は、事務的な感動のない口調できゝかへした。

「然し——もう行つていゝんですか、病院はやめていゝんだかどうだか」

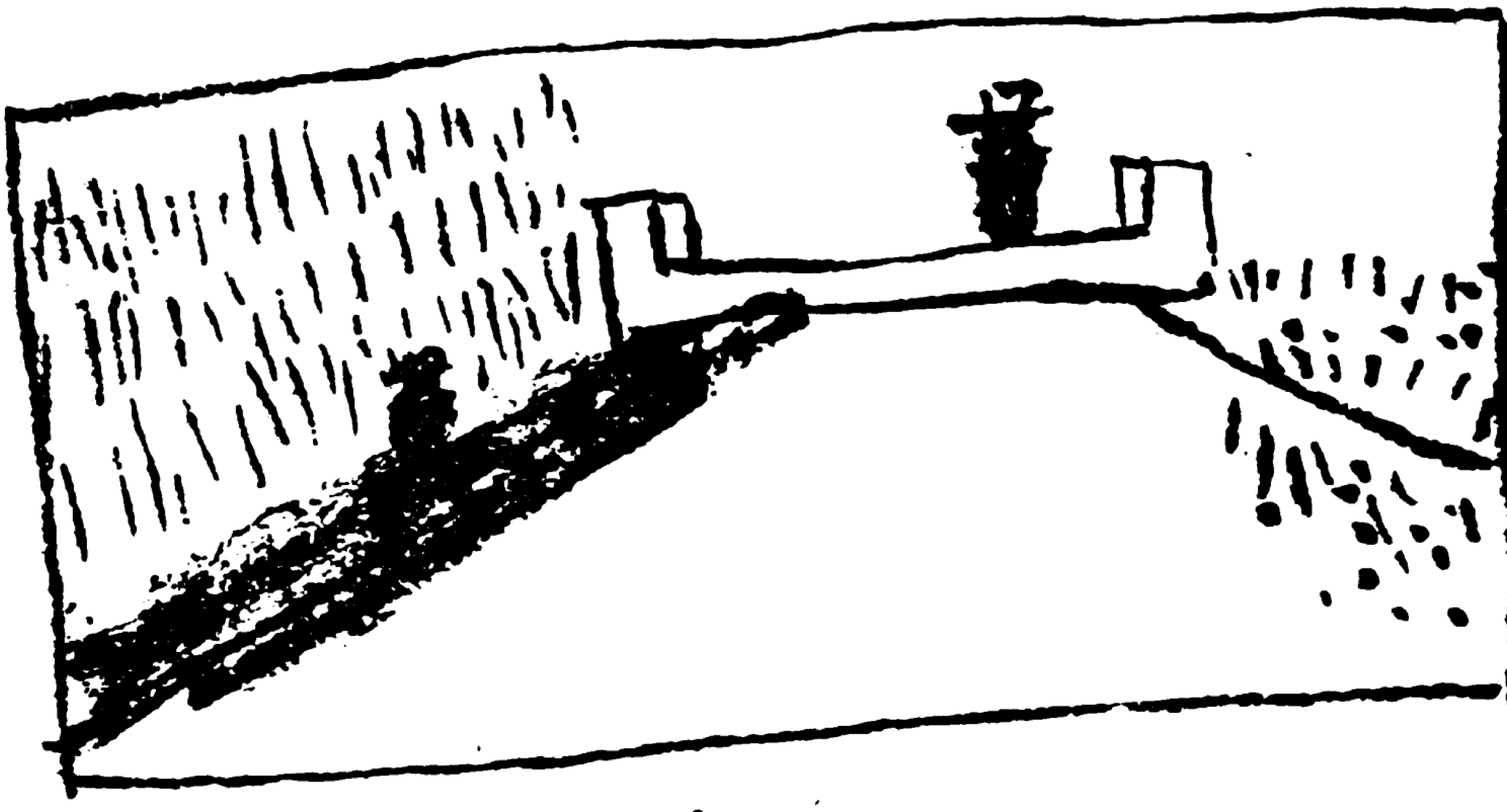
伸子は、それで中止されては大變といふ勢で遮つた。

「勿論大丈夫よ。でも、明日念のためによく伺つて來るわ。——大丈夫に定つて居るから行きませうよ、ね、やめないでね」

伸子が許可を得れば、明後日の夜行で、栃木縣下に在る溫泉に出かけることになつた。

附記。これは未完です。あと少しの部分は同題の下に、二月號で讀んでいただきたいと思つて居ります。

作　者。



山科の記憶

志賀直哉

これは既に過去の記憶だ。自分を彼と書くのが適はしい。

一

山科川の小さい流れについて來ると、月が高く、寒い風が刈田を渡つて吹いた。彼は自動車の中でつけて來た巻煙草を吸ひ了つて捨てた。自家まで乗りつける事が氣兼ねで大津への街道で降り、女はそのまゝ還えつて行つた。彼は歩きながら、今別かれて來た女の事ばかり考へた。愛する女の事を別かれて考へるのは快樂だ。二重の快樂だが、家が近づき、妻に偽りを云はねばならぬといふ豫想が起ると、それが暗い當惑となつて彼におほひ被さつて來た。流の彼方に一軒建つてゐる自家の灯を見ると、彼はいつも此の當惑を覺えた。明らかに自分が弱者の位置に立つ事が腹立たしくもあつた。

彼は妻を愛した。他の女を愛し始めても、妻に對する愛情は變らなかつた。然し

妻以外の女を愛するといふ事は彼では甚だ稀有な事であつた。そして稀有だといふ事が強い魅力となつて、彼を惹きつけた。その事が自身の停滯した生活氣分に何か潑剌とした生氣を與へて吳れるだらうといふやうな事が思はれるのだ。功利的な考へではあるがそれは一途に惡い意味には解されない。

彼は細い土橋を渡つて、門を入つた。門の戶に鈴が附いてゐる。その音にも、自分の引けた心が現はれる事を恐れた。彼は出來るだけ無心に開け、無心に閉めた。然し何がこんなに自分の心持を暗くするのだらう。自分を信じてゐる妻を欺いてゐる事が氣になるからだ。

中の灯を一杯に映した玄關の硝子戶を開けた。いつも直ぐ出て來る妻が出て來ない。彼は更に敷台から共所の障子を開けた。部屋の隅に恰も投り出された襤褸布のやうに不規則な形をして、妻が搔卷に包まり、小さくなつて轉がつてゐた。彼は妻のこんな樣子を見た事がなかつた。その變に慘めな感じが、胸を打つた。妻を自分はこんなに扱つてゐるのだらうか。妻がこんなに扱はれてゐると感じてゐるのだらうか。その感じが胸を打つた。妻は頭から被つた搔卷の襟から、泣いたあとの片眼だけを出し、彼を睨んでゐた。それは口惜しい笑ひを含んだ眼だつた。

彼は何も彼も、もうわかつたと思つた。彼は興奮した。腹が立つた。默つて妻の片眼を見返へした。妻が何かいふまでは一ト言も口が利けなかつた。

彼は隣りの座敷の電燈をつけた。丸い金火鉢によく熾つた炭火が活けてあつた。鐵瓶の湯が滾つてゐた。

「どうも變だと思つて、電話をかけて見たら矢つ張り左うだつた」

彼は返事をしなかつた。彼は二重廻を着たまゝ火鉢の脇に踞んだ。

「そんな事は決してないから…………うまい事をいつて、人をだまして…………」いひながら妻は起きて座敷へ入つて

來た。彼は怒鳴りたい氣になつた。然し何といつていゝか、その言葉を見出せなかつた。彼は險はしい眼で妻の顏を見た。妻は如何にも口惜しさうな笑ひ顏をしてゐた。が、それが異様な赤味を帶びてゐるのを見ると、發熱してゐるに違ひないと彼は思つた。

「お前は熱があるぞ」彼は傍へ來て坐つた妻の額へ手をやつた。妻はその手を邪見に拂ひのけながら、

「熱なんかどうでもいゝの」といつた。

一寸觸つただけでも熱かつた。彼は立つて自分の寢床の上に置かれた丹前をとり、妻にきせた。

妻は一生懸命だつた。日頃少しも強く光らない眼が光り、彼の眼を眞正面(まとも)に見凝めた。彼にはその視線に辟易(たじろ)ぐ氣持があつた。然し故意に此方からも強く、

「お前の知つた事ではないのだ。お前とは何も關係の無い事だ」と云つた。

「何故(なぜ)？一番關係のある事でせう？何故關係がないの？」

「知らずにゐれば關係のない事だ。さういふ者があつたからつて、お前に對する氣持は少しも變りはしない」彼は自分のいふ事が勝手である事は分かつてゐた。然し既にその女を愛してゐる自身としては妻に對する愛情に變化のない事を喜ぶより仕方がなかつたのだ。

「そんなわけない。そんなわけは決してありません。今まで一つだつたものが二つに分かれるんですもの。そつちへ行く氣だけが、減るわけです」

「氣持の上の事は數學とは別だ」

「いゝえ、そんな筈ないと思ふ」

妻はヒステリツクになり、彼の手の甲をピシリ〳〵打つた。

彼は妻に對し毛程も不實な氣持は持つてゐないといふ事を繰返えした。

「不實な氣持がなくて、左ういふ事が起る筈がないぢやありませんか」

然し彼は嘘をいつてゐるのではなかつた。そして彼は何かいへば詭辯を弄するやうになるのが自分でも不愉快になつた。

「左ういふ感情まで一生飼殺しになつてるわけにはいかない。只お前をその事で不幸にしなければいゝのだ」

「こんな不幸な事つてない」どんな貧乏でもそんな事には堪へて見せる。然し此事ばかりは何時になつても決して平氣にはなれない。

「いつも云つてる事ぢやありませんか。それを今更お前の不幸にならなければいゝ。どの口でそんな事が仰有れるの」

彼には女に對する自分の氣持が本氣だといふ所に辯解があつた。が、妻には本氣なら本氣程いけなかつた。何ういふ事にでも、割りに寛大になれる性質で、若しかしたら自分の此事にも寛大な氣持を見せて呉れるも知れぬといふ朧げな希望を彼は持つた事もあるが、それは到底不可能な事と知れた。女に對する自分の氣持を累々と述立てる事も不可能な事だつた。そして妻のヒステリーが亢じると彼にはもう云ふ事はなかつた。

二

五分程默つた。二人には思ひ〳〵の事が浮んだ。彼では女の事が時々頭を通り過ぎて行つた。

「去年病院にゐた時にも、若し先生が好きになつたら大變だ、さう考へる方なのよ。本統に貴方だけ想つて滿足してゐるのに………」妻は幾分落ちついた所で、不圖こんな事をいひ出した。

「うん 彼は不思議な氣持になつた。妻の「先生」といふ、その若者を彼は明瞭と憶ひ浮べる事が出來た。「それは分つてゐる。何とかいふ醫者だ。その事は一寸書いて置いた」

「…………」妻は急に眞面目な顏をして彼を凝つと見た。その妻の心持を彼はよく摑めなかつた。が、それに不純なものゝない事だけはつきりと感じられた。

「何といつたかね」

「…………でも、それはお父樣のお氣持なんかとは全で別なものよ。それは認めて頂かなければ困るわ」

「俺の氣持と別なものとは思はない。然しお前にいたずらな氣持があつたとは、それは決して思はない」

彼は立つて自分の机の上から一つの手帳を取つた。「Aの女がある。良妻賢母である。然しこの女の一生で只一度、はつきりとは意識せぬ戀を感じ、心をときめかした事がある。それを良人だけが感じた。それと相手の男だけが感じた。然し何事もなく、左ういふ機會もなく、其儘にそれは葬り去られた。Aといふ女も今はその事をもう忘れて居る。Bといふ女がある。この女にも同じ事があつた。然しBといふ女はその事を自ら意識さえしなかつた」此場合、Bが妻だつた。

「見て御覽。Aは〇〇さんだ」

妻は無心にそれを受取つたが、見ようとしなかつた。

「だけど、可笑しいわね」妻は自身の氣持を調べるやうな眼つきをしながらいつた。「若し私に少しでも疚しい氣持があ

れば、お父様に色々お話しはしないわね」

實際彼が見舞に行く度に、妻は浮々した心持でその男の噂をした。

「それは左うだ」

「左うよ。私の心持は親切にして下さるのをお父様にも喜んで頂くつもりだつたと思ふわ」

「然し好きになつたら大變だと思つたのは矢張りあの醫者ぢやあないか。…………俺はこれにも背いたやうに、それだけの意識さえお前にはないと思つてゐたのだ」

「…………」

「四月十六日と日が入れてある、五、六、七、八、九、十、十一、十二、八ケ月その事には少しも觸れない位だから、俺は別に何んとも思つてはしない。それもお前のその氣持に少しでも不愉快な要素があれば、却々默つてはゐられない方だが、左うは思はなかつた。俺は少しも嫉妬らしい氣持は持たなかつた。寧ろ何だかお前が可哀想なやうな氣がした。お前の氣持が左ういふものだといふ事はよく分つてゐた。病院を出る時でも、お前はガーゼの取かへに通ふといふのを、その位の事なら此所の××さんで充分だと、俺もいふし、O子さんもいふんだが、お前は却々諾かなかつた」

妻は遮へぎつていつた。

「それは違ひます。我孫子の□□さんの事を考へてゐるから、××さんの所も何んだかきたないやうに思つたのです。折角よくなつて又黴菌でも入つたら大變だと思つて、左う云つたのよ。そんな事まで變におとりになるのは、それは少し酷いわ」

「まあ事實は何方だか知らないが、O子さんも左う解つてゐたと思ふ。いやな顏をして俺の顏を見てゐた。餘りいふの

は此方も厭だから、お前の勝手にするやうにいつたが、俺はお前が意識せずに左ういふ氣持に支配されてると解つたのだ」

「左うかしら、私はさう思はないけど……」

「俺がさう思ふばかりでなく、むかふの人もそれは意識してゐたと思ふ」

「そんなら、何故、病院に通ふ事をはつきり不可と云つて下さらなかつたの。私には左ういふ氣持なかつたと思ふけど、貴方が若し左うお思ひになつたのなら、何故はつきり止めて下さらないの。それはお父様がいけませんよ」

「お前が間違ひを起す人間とは第一思はないし、それでなくても、左ういふ事を用心しなければならぬまでにはさだ、大變距離のある事が分つてゐたんだ。自分が左ういふ事に呑氣でゐられる人間でない事だつて、一つの安心の種だし、それだけの事で餘り強く何かいふのは厭な氣がしてゐたに違ひない」

彼はこんな事をいひながら自分の氣持が、その事に案外餘裕を持つてゐた事を今更に氣づいた。それは妻の氣持の純粋さが彼に反映してゐたからだと思つた。

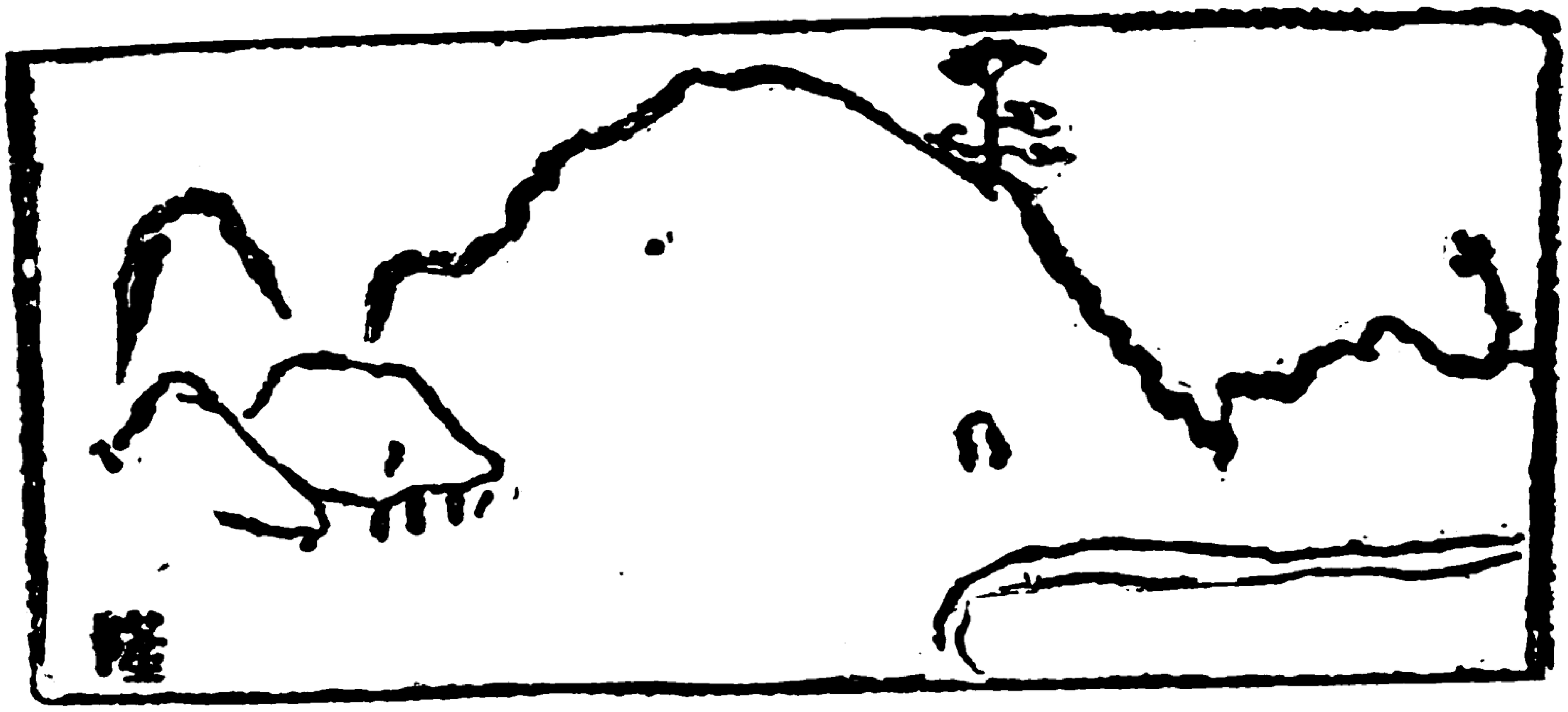
若い醫者は生々した氣持のいい男だつた。彼は殆ど口を利いた事はなかつたが、少しも惡い感情を持たなかつた。彼が妻の病室に入つて行くと、よく入れ違ひに急いで出て行つた。左ういふ時、妻は殊に快活だつた。或る時、一番下の娘が病院に泊り、夜中に急に自家に歸るとあばれ出した時、妻が自働車で、それを連れて不意に歸つて來た事がある。翌朝の診察時間までにかへるならばといつて、それを許可したのはその若い醫者だつた。妻は醫者に冷やかされた事をいつて笑つてゐた。そして翌朝早く又自働車で還つていつた。彼はその醫者にいたづらな氣持があるとは思はなかつた。然し妻の氣持に對し自分がそれに意識的である程度にはその醫者も意識的であつたやうな氣がした。

退院の時、尚外來で通ふかどうか迷つてゐたが、結局妻は厭な顏をしながら山科の醫者にガーゼの取り更へをして貰ふ事に決めた。そして翌日その醫者へ行くと、案外清潔だつたので、左う決めた事を喜んだ。

三

話か妻の事に外れた事か幸だつた。妻は落ちついた。然しそれが彼の事に對する少しでも寛大な心持をひき出す手よりにはならなかつた。妻はどうしても女と別れる事を彼に斷言さす迄は執拗に我を張つた。妻の强いのは此事だけだ。彼は一時的にそれを承知するより仕方がなかつた。

（未完）



戲曲

兩極の一致（一幕）

ある平和主義者と軍國主義者のファース

長谷川如是閑

人物

福富　讓（男爵、平和新聞社長）
駒井雪子（福富男爵娘、駒井外交官夫人）
馬込退役軍醫總監（福富の叔父）
同　俊江（馬込總監夫人）
荒澤　巖（株式仲買店員、雪子の柔道の教師）
岩井花代（タイピスト、雪子の同窓、福富男爵秘書）
其他女中、執事、

福富男爵家の書齋。左手と右手にドア、正面の窓越しに庭園を眺める。ある晩

秋の午後。

片隅のテーブルで洋裝の岩本花代が頻りにタイプライターを叩いてゐる。

卓上電話のベルが鳴る。

花代（電話を聽く）モシ〳〵。男爵？まだ平和新聞社の方に居られるでせう。……居られない？……こちらではわかりません。……そんな事存じません。……新聞社でわからないことがこちらでわかる筈はないぢやありませんか。えゝわかりませんとも。さようなら。（電話を離れて）何といふ失禮な人だらう。「何處かの待合にでも居らんか」だつて。うちの男爵を世間並の政治家や實業家連と一緒にして、無理解も甚しいわ。何物だらう、あんなわからずや。あゝ乾度貴族院の馬鹿殿樣だわ。今、男爵議員の選擧最中だから。（思ひ出したやうに）あゝ、男爵は今日は平和會館の講演會に御廻りだつたのだわ。（肩をちぼめて）「えゝわかりませんとも」はよかつたわね。でもあんな奴ちつとは面喰らわしてやつた方がいゝわ。

テーブルの上の雜誌を取り上げて、クルリと身體を廻して、手際よく長椅子に橫になつて雜誌を見る。

左手の扉にノック。花代起き直る。駒井夫人雪子現はれる。花代より少し年下の二十歲位、洋裝で、眞白な乘馬ヅボンに長靴を穿いて、手に鞭をもつてゐる。男のやうな體格と娘のやうな擧動とで、活潑に入つて來て、花代と同じ長椅子に列んでかける。

雪子　あゝあ、わたしほんとうに惱き〳〵してしまつたわ。

花代（同情したやうに）お察ししますわ。

雪子　いやな岩井さん。そんな意味ぢやないのよ。

花代　でも、駒井さんがお立ちになつてから、もうかれこれ一年ぢやないの？あなたお淋しいだらうと思つて同情してあげるのよ。でもいゝわ、あなたもやがてお出かけになるのでせう。

雪子　そんなことぢやないのよ。

花代　何ですの？

雪子　わかつてるぢやないの。うちの新聞のことよ。お父さんの平和主義よ。名前を出して碌でもないご託を列べるのだけはよして下さればいゝのにね。晩の御飯の時だつて、あんなことを云はれたら、ご飯がまづくなつて、お茶碗を投げつけてやりたい氣がするわ。『左の頬を打たれたら右の頬を出せ』の、汝殺す勿れ』のつてあれ一體何のこと。今時は、耄碌した牧師だつて、もうちつと氣の利いたことをいつてるわ。

花代　でも私いゝと思ふわ。仰つしやることは古くつても精神は新しいわ。さうぢやなくつて？歴史といふものが暴力で作り出されてゐる時代が去らない限り、お父さんの努力は意味を失はなくつてよ。殊に今の日本やイタリーのやうに暴力主義者が跋扈してゐる國では、いくら古臭い眞理でもそれを云はずには居られないぢやありませんか。

雪子　外の人のいふのは構はないけれど、うちのお父さんだけはよして貰ひたいわ。駒込の叔父さんの軍國主義で始終いぢめられてゐるものだから、その腹癒やせの平和主義なんか氣が利かないぢやないの？

花代　まあ、あんなこと仰つしやつて。

雪子　私暴力主義大好きよ。だつてさうぢやなくつて？、人間だつて神樣だつて、力といふものがちつとも現はれてゐないものが、何うして好きになれて？

花代　でもその力が暴力の形でしか現はれてゐないものは動物ぢやなくつて？

雪子　力が暴力の形でしか現はれてゐない動物なんて、荒澤さん見たいな人ね。私、でも暴力がいゝわ。

花代　わたし、暴力といふ言葉をきいたばかりで身慄ひが出るわ。

雪子　それはあなたは自分のお父さんが、軍人で腕力家でよつぱらいで、お母さんを氣絶させたり、藝者の腕を折つたりした揚句、よひ〳〵で死んだりしたのを見てゐるからだわ。それでもわたしはうちのお父さん見たいな人よりもあなたのお父さんの方がよつぽど好きだわ。あなたのお父さんはあんなに亂暴屋だつたけれど、それはあなたを可愛がつてゐたぢやないの？　あゝいふお父さんに可愛がられるとほんとうに力強い愛を感じるわ。けどうちのお父さんなんかに可愛がられたんぢや、まるで蒟蒻に可愛がられてゐるやうで、グニャ〳〵ベタ〳〵するばかりで、ありがたくも痒くもありやしない。

花代　あなたはご自分のお父さんのことがよくわかつていらつしやらないのね。

雪子　さう？　道理でお父さんはわたしのことを「わからずや」だつて。…あゝつまらない、もうよしませう。うちのお父さんの話しなんかしてゐるよりもお豆腐の話でもしてゐる方がよつぽどいゝわ。（立ち上つて）わたしこゝに忘れものをしたのだわ。そこいらに小さい箱がなくつて、咋日外務省の方が屆けて下さつた。

花代（立上つて、テーブルの上の小箱を取り上げ）これぢやない？

雪子　あゝそれ〳〵。

花代　何ですこと？

雪子　あの人からわたしにプレゼントですつて、フン。

花代　あなたはまあ、そんな大切なものを置き忘れたりして、濟まないぢやないの？　拜見ね。（あけて見て）寫眞立て

よ。まあ藝術的ね！あら駒井さんのお寫眞が入つてゐるのね。少しの間に大へん、スタイルが違つたわね。

雪子（冷淡に）立派だわね。

花代　あら、ずいぶんね。

雪子ベルを押す。

女中　お呼びでございましてすか？

雪子　岩井さんの持つてゐるあの箱を私のお部屋へ持つて行つて

花代（箱から寫眞立てを出して）さうしてね。これをかうやつて雪子さんのテーブルの上に、かうやつて置くのよ。

雪子　いゝえ、いゝのよ。箱のまゝ置いてをいて頂戴。それから、すぐと出かけるから馬を表へ廻すやうにさう行つておくれ。

女中　ハイ。（箱を受取つて退く。）

雲子　私一と廻り馳けさせて來ますけれど、もし荒澤さんが見へたら、マイナスだつていつて下さいな。

花代（不審げに）マイナス？

荒子　え、絶對にマイナス。

花代　何の事なの？

雪子　さういへばわかるのよ。（右手の前から退場。）

花代　荒澤さんにマイナス？マイナス？（不審らしく）マイナス！（急に身をふるわせて）あゝ私！

荒澤殿。商人風の脊廣姿だが、づんぐりむつくりとした體格、頸筋の太くつまつた、丸い脊中のやゝ前かゞみ

で、柔道家そつくりの風采。左手の入口からのぞきながら扉をコツ〳〵。

花代（びつくりして荒澤を見る）……

荒澤　何うしてそんなにびつくりするの？

花代　まあ、その恰好！まるで暴力團の侵入よ。わたしびくツとしたわ。

荒澤　戯談は措いて、雪子さんは御留守だつてね。

花代　知りません。

荒澤　困たな。實は一寸雪子さんに頼んだことがあるのだが。

花代　マイナスですつて、絶對にマイナスですッ。

荒澤（悄げて）困つたなあ。

花代（ムッとして進みよつて）一體あなたは何を雪子さんに頼んだの？私といふものに一言も話さずに、雪子さんとコツ〳〵何をしてゐるのです。

荒澤　まあ靜かに。實は切迫つまつて雪子さんに頼んだ譯だ。例の融通だ。

花代　雪子さんにそんなことを……あなたはまあ。

花澤　實は全く始めてといふ譯でもないんだがね。

花代　呆れて物がいへやしない。私には何も云はずに。

荒澤　あなたにはあんまり度々で……

花代　何うしてそんな他人臭いことをいふの。

荒澤　今度は少し大きいのでとてもあなたには出來まいと思つたものだから。いや決して見くびつたといふわけぢやないのだから怒つちやいけない。

花代　少しばかりなら出來ないこともないけれど。

荒澤　少しでは間に合はないのだ。少くとも千圓と纏つてゐなければ駄目なんだ。それも今日あす中にそれが出來なければ大變なことになるのだ。

花代　おきまりぢやないの。

荒澤　いやこんどこそは眞劍だ。横領背任といふので、ひつかゝつたらとても助らぬ。主人ばかりの關係でないんでね……全く切腹だ。

花代　切腹て自殺？

荒澤　飛んでもない、千圓位の金で命をしまつた日には命がいくらあつても足りやしない。切腹とは自腹を切るといふことだよ。今度はもう人の褌ぢや間に合はない。八方ふさがりでもう手も足も出ないのだから。

花代　もし出來なかつたら何うする氣？

荒澤　今夜中にも出來なかつたら逃亡だ、店にゐれば命があぶない。法律といふ奴は、いこぢな奴で、一千圓も百萬圓も見境がない。かうなるとわかつてゐたら、もつと大きくやつて置けばよかつた。大きくやつてゐたんなら、一年や二年の官費旅行もやつてやるが、こんな端た金では浮ばれない。當分跡を晦まして、その間に整理をする。

花代　わたしいやだわ。（泣く）

荒澤　僕だつていやだが仕方がない。そんな譯で、今日はあなたに暇乞ひに來たことになつてしまつた。

花代　（泣きながら）わたしいやだわ。わたしも一緒に行くわ。獨りで殘されたつて、あなたが何うなるかわかりやしない、一緒に行くわ。

荒澤　そんなダヽをこねては困る。あなたは、知らん顏で辛棒して、私の歸つてくるのを待つてくれなければ困る。

花代　一體誰れがこんなことにしたの？　あなたは、主人の用心棒で、默つて頑張つてゐればいゝのに、智慧もない癖に株なんぞに手を出すからこんなことになつたんだわ。私だつて、どんなにあなたのために……

荒澤　これさ。今そんなことをいつたりきいたりしてはゐられない。僕はもう行く。岩本さん、ほんとうに安心して居て下さい。僕はすぐと大手をふつて歸つて來て見せる。ナーニ、威張臭つてゐる奴等だつて、昔からいふ思ひして來た人間だ。虎穴に入らされば虎兒を得ずだ。憚りながら荒澤旅、こんなこと位で一生を棒にふるやうなことはせんぞ。今に見ろ、おれをフン縛らせやうとしてゐる奴等に土下座をさせて見せる。

花代（やゝ安心して）しつかりやつて頂戴よ。

荒澤　しつかりやらなくつて。糞！

花代　嬉れしいわ。

荒澤　まつたり、嬉れしいのはもう少しあとだが、然し決して悲觀することはない。たゞ金が欲しいだけだ。

花代　私少し何うかして見たいわ。

荒澤　此際少しでは間に合はないが、然し全く無いよりはいゝ。思案があるかね。

花代　少し待つてゐて頂戴、私執事のお爺さんを說きつけてボーナスの前借を賴んで見るわ。

荒澤　老人僕のゐることを知つてゐる。疑やしないか。

花代　いゝえ、此間の私の洋服はあなたのお世話で賴んだといつてあるから、その代金だつていふわ。

荒澤　名案々々、やつぱり女の方が惡智慧が多い。

花代　まあ、人がこんなに心配してゐるのに。

荒澤　失禮々々。然しあなたの顏はいゝかね。淚なんぞついちや所謂露見のもとだ。

花代　さうだつたわ（顏をなほしながら、）やつぱり男の方が用心深いわね。

退場

荒澤　（歩るき廻りながら）何うも今度といふ今度は實際弱つた。千圓位の金で大の男が逃亡。こんなことで人間一人が逃げ隱れしなければならぬといふ社會組織が怪しからん。おれも今まで、社會組織がわるいたんていふ奴の横面を何度張り飛ばしたかわからないが、かうなつて見ると、決していゝ社會組織ではない。・・が待て・・これで逃げおふせて、うちの主人公のやつたやうに、一山あてゝ盛り返しがついて、大實業家といふことになれば、あんまり惡い社會組織でもない。だがだ・・萬一・・萬一・・ひツかゝつて、・・えゝいけねへ。・・さう來た日には、よくいつて、一生電信小僧の毛の生へたのでおしまひだ。だめだ、やつぱり社會組織がよろしくない。・・然しだ、人間到る處靑山ありだ、一時屈服して、やがて一旗といふ所で社會組織が變つてしまつても困る。やつぱり此のまゝがいゝ。然し、天網恢恢踈にして洩らさずなどゝ來ては、余りいゝ社會組織ではないね。・・えゝ何方でもいゝ、金があればいゝのだ、おれは今金が欲しいのだ。それだけだ。

雪子夫人右の入口から現はれる。荒澤のゐるのに氣がついて、忍び寄つていきなり後ろから抱きつく。

荒澤　おつと、をどかしても駄目だ。

荒澤、雪子の兩の手首を握つて、身をかわすと同時に、雪子の身體を斜めに抱きすくめてキッスをする。

福富男爵花代を從へて右の扉から現はれる。此樣子を一瞥して、後戻りして、足音をさせる。

荒澤、雪子あわてゝ離れる。

荒澤　（叩頭して）今日は。（叩頭）

福富　（苦がい顏で）今日は。

荒澤　大分お暖かで。

雪子　みぞれがふつて來てよ。

福富　雪子、荒澤君に何か用事でもあつたのか。

荒澤　ハイ一寸。

雪子　いゝえ。私一寸柔道のお稽古をお願ひしたの。

福富　荒澤君、わしの書齋で柔道の稽古なんかせぬやうに願ひたい。……わしに何か用事でもか？

荒澤　はい、いや、別に。

花代は始終荒澤を睨んでゐたが、進みよつてそつと横腹をこづく。

福富　岩本さん、荒澤君をあちらへお案内して。

荒澤、花代退く。

福富　これ雪子、少し云つて聽かすことがある。こゝへ來なさい。

雪子　こゝでも聽へてよ。

福富　雪子、今の様はあれは何といふことだ。自由と平和を主義とする私がそれを十分にお前に與へたのが全く失敗だつたのか。

雪子　いゝえ。ちつとも失敗ぢやなくつよ。

福富　これが失敗でなくつて何だ。お前のザマに何んだ。早く母親をなくして、不憫だと思つて、あまやかしたのがわるかつた。叔父や叔母からそれを云はれる度にわしは、お前のためにいつも辯解してゐたのだ。親の心も分らんで何といふことだ。

雪子　御談義よりもお茶でもあがらない？私食堂で用意してゐますわ。

福富　これ雪子お待ち。お待なさいといふに。これ……。

雪子退場。福富男爵それを追ひかけて退場。

花代泣きながら、それでも四方の樣子を窺ひながら現はれる。椅子に凭れて泣く。

荒澤これも四方を見廻しながら現はれる。花子に近いて、

荒澤　岩本さん、あなたまで誤解しては困るぢやないか。あの雪子の亂暴女のいたずらなのだ。あの女はいつも、僕が何時何物に不意を喰はされても十分覺悟があるつていつてゐるものだから、時々あんなことをして試めさうとするのだ。全くそれだけの話なのだ。(花代により添ふ。)

花代(突きのけて)うるさい！もうわかつたつていつてゐるぢやないの？嘘つき！

荒澤　全くなんだ。あの亂暴女が……

花代　亂暴女に何でキッスなんかしたの！？

荒澤　だからさ、あれはあなたが戻つて來て、ふざけたのだと思つたのだよ。
花代　わたしふざけなんかしなくつてよ。わたしと間違へたなんて、手を握ればわかるぢやないの?、あんな男のやうな手でわたしの手と間違るものがあるものですか。さつきも、雪子さんは、こゝでさんざん、腕力家が好きだ〱つて云つてたわ。大びらにあなたのことをのろけでゐたんだわ。私どうしやう。口惜しいッ。
荒澤　まだわからないのか。僕は、決して噓はいはんのだ。……え、癪に障る。あの亂暴女何うして呉れやう。
花代　そんなお芝居、よして頂戴。
荒澤　芝居!よしこれほどいつてもわからなければ勝手にするがいゝ。おれも男だ。おれを理解してゐない女なんかから、百でも金なんか貰ふ事は出來ない。(紙幣の束を突き出して)この金は返す。
花代　しらない!(紙幣の束を拂ひのける。紙幣が散亂する。)
荒澤(あはてゝ紙幣をひろい集めながら)わからん女だ。……ぢや貰つて置かう。……然しこんなことをいつてゐる場合ではない。僕はもう行く。(退きかける。)
花代飛び上つて、荒澤に縋りつかうとする。
荒澤　おゝ諒解してくれたか。
花代(頭をふつて)………
荒澤　ナーンだ。
足音が聽へる。
荒澤　當分のお別れだ。身體を大事にしてくれたまへ。

荒澤退場、花代追ひかけて退場

福富男爵、悄然と現はれる。

福富　あゝ今日は平和會館で「汝殺す勿れ」といふ演題で、約三時間に亘る大演說をやつて爽やかな氣分で歸つて來て見るとあの始末だ。岩本にまで見られてゐる。恥づべきことの限りだ。あの純潔な岩本があんなところを見て、何と思ふてゐるであらう。此わしが顔から火の出る想ひをした。

ベルを押す。花代現はれる。

福富　岩本さん全く面目次第もない。穴があれば入らにやならん（花代の顔を見て、）あなた、大分顔色がわるいが、氣分でもわるいか。

花代（ドギマギして）いゝえ、別に、でもあんまりだと思ひますわ。……

福富　おゝ、それを云はれては一言もない。わしの十數年の苦勞もこれで水の泡だ。なくなつた奥に對しても合はす顔がない。（氣をかへて。）が花代さん、雪子は全く柔道の稽古をしてゐたのだと言ひ張るのだ。お互に洋服のまゝ、書齋で柔道の稽古。これはいつわりにきまつてゐる。然し、全く一時の戯れ、若い者同志の出來心ではあつたらう。それが間違ない所ぢやらう。

花代　でもキツスなんか……

福富　全くだ。一時の出來心としても十分怪しからん。が一時の出來心には違ひはなからう。でなければなんぼ雪子でもあゝ淡白にわしの小言を笑つてのけることは出來ん。

花代　でも雪子さんはいつもさうなんぢやございませんか。

福富　さうだ。いつも雪子はわしにはその調子だ。然し、一時の戯れなればこそ、笑つてのけられるだ。

花代　でも奥さんの御身分で……

福富　さうだ。夫人の身分としては如何にもあるまじき振舞ひだ。が然し荒澤も荒澤だ。夫のある婦人に對して、然も、尊敬すべき筋合の婦人に對して何といふ不埒な擧動だ。

花代　ほんとうに荒澤さんもあんまりです。（泣く。）

福富　あゝ忝けない。花代さん。わしのために泣いてくれるのはあなた一人だ。然しわしは泣くにも泣けん（泣く。）

執事現はれる

執事　馬込様がお揃ひでお見えになりました。（退く。）

福富　何、小石川の叔父さんが見へた。：悪い時に……。いや岩本さん、では此草稿をコッピーに取つて下さい。十枚ほど入用なのだ。

花代草稿を受取つて退場。

馬込老軍醫、銀髪を短かく刈り込んで、銀の針のやうに長い口髭、ヨボ／＼しながらいやにゴツ／＼として、如何にも退役軍人らしい風采。夫人の俊江、日露戰役當時の愛國婦人タイプの殘骸を固守してゐる髪形。物ごし等それに准ずる。

福富　これは叔父さんも、お叔母さんも、ようお見へでした。

馬込　あんまりようも見えんのだ。實は、今藤寺大使の處へ參つたら、——あれも近く赴任するといふでな。——處が、雪子を一緒につれて行つてやらうといふので、それは有り難いと、よく頼み込んで來た。藤寺はそのうちこちらへ

もお訪ねするというて居つたが、來月早々立つといふから、雪子にも話して仕度もさせにやならん。いや何うも、わしは、これがきまらんうちは全く氣が氣ではない。何しろ雪子と來ては、まるで蝗のやうに飛び廻りよつて一寸小言をいつてやらうと思つても、捉まへるが容易でない

俊江　わたしももう雪子には、いゝ加減根氣がつきてしまひました。

福富　何うも御心配ばかりかけて相濟みません。

馬込　一體お前がよろしくない。自由の平和のと屁のやうなことをいつて子供をなげやりにして、終ひにあの始末だ。お前の子供だからいゝが、あれが國民でゐつて見ろ日本は亡國だぞ。

福富　それは叔父さん少し違ひませう。

馬込　いや違はん。いや違はうが違うまいが雪子のあのザマは何だ。たゞ一つあれの取り柄は、いやらしいことには全く氣のない子供らしい所だ、とわしは今の今まで自慢に思つてゐたんだが、それも何うやら怪しくなつたぞ。

福富　なんぞ面白くないことでもお耳にはいりましたか。

馬込　面白くないことばかりだ。

俊江　いゝえ、なにとりとめたことではないのですけれど、人の口といふものはずいぶん煩いものですからね。

馬込　人の口が煩いのぢやない、當人の行ひが怪しからんのだ。

俊江　あなたまあさうがみ〳〵仰しやらずとも……

馬込　これががみ〳〵云はずに居られるか。雪子を駒井に世話したわしの責任として。どんな些細なことでも默つては居られん。ましてよからぬ噂を耳にすゝやうで默つて居られるか。

稲富　よからぬ……？さては……

馬込　「さては」？、「さては」何うしたのだ。何うしたといふのだ。何が「さては」なのだ。

稲富　いゝえたゞ……一寸……

馬込　「たゞ一寸」何うしたと云うのだ、雪子が何うしたといふのだ。ウン、お前は此の叔父に隠しだてをするな。よし、わしはもうお前には何も云はん、たゞ駒井家に對して責任のあるわしぢや。お前のやうなをやじのところには雪子は一刻も置いてはをけん。今日限り雪子を引取るからさう思ひなさい。

俊江　まあ、あなたさう短氣なことを仰らずに、讓さんの御話を一應おきゝなすつたらいゝぢやありませんか。

稲富　いや、實はまだお話しする時刻もない位新しい出來事で、私もつい先刻目撃したやうな譯で、

馬込　えゝ言譯はいゝから早く話しなさい。

稲富　先刻、私が歸つて來まして此書齋に入らうとする時に、こゝで雪子があの荒澤とキッスをしてゐたのを見つけたのです。

馬込　何、雪子が荒澤とキッスをして居た！これ、二人は離れ〳〵でキッスをしてゐたか。キッスをしてゐたからには抱き合つて居つたらう。抱き合つてゐたのを見たら、何故抱き合つてゐたとこを見たと明らさまにさういはんのだ。いらぬ庇ひ立てをするからいかん。で抱き合つてキッスをして居つたといふのだな。もう一遍云つて見い。いやもう澤山だ。飛んでもないことをしてくれた。(悄然として椅へ込む。)

俊江　ねえあなた、ではやつぱりあの事は私の間違ひぢやなかつたのね。

馬込　さうだ。それでわかつた。いや、つひこの間、これが雪子と一緒に風呂に入つたことがあつたさうぢやが、あと

でわしに、これが、どうも雪子のお腹が大きいやうぢやといふから、わしは、もう駒井が立つてから二年近くにもなるのに、そんな馬鹿なことがあるかつて笑つたのぢや、乳の色は何うぢやつたといふたら、やつぱり少し色づいて居つたやうぢやといふから、わしは、それはお前が、雪子に早く子供が欲しい〱と思つてゐるから眼の迷ひでそんなに見へたのぢやと問題にせなんだのだ。然し、もう外國行も近づいた故身體を見てやらうと思つて、二三日前に雪子に云うたら、どうしても見せなんだ。今の話で思ひ當つた。(憤然として)もう見る必要はない。愈さうときまつた。

福富　然し一應見ていたゞいて……

馬込　えゝ、產婆にでも見せるがいゝ。おれは見ずともわかつとる。駒井家に對して合はす顏がない。昔ならば腹を切らにやならん。今日だとて、平氣で生きて居られるか。

福富　全く以て申譯もない次第で、全く私しの不屆きから……

馬込　そんなことはきくに及ばん。あとの始末が問題だ。もうお前には任かして置けん。わし一人で片をつける。すぐと荒澤をよべ。何をぐづ〱してゐるのだ。

福富　まあ叔父さんお靜かに……、雪子はわたしの子供ですから、此の始末は私がつけます。

馬込　これは面白い。自分の子のことは自分で始末をつける？尤もぢや。では今日のうちに見事始末をつけて見なさい。

福富　今日のうち？それは何うもちと……

馬込　今日のうちにお前には始末がつかぬといふなら、わしがつけて見せる。いんや今日のうちでなければ斷じて承知せぬ。(立ち上つて)では夕刻また來る。見事始末がついてゐたらよし、さもない時にはわしに考へがある。では歸

る。お前も來い。こんなとこに居るに當らん。

俊江　それは余り……

馬込　默つて歸るのだ。

二人退場。

福富（ぐる〳〵歩るき廻りながら）今日のうちに始末をつける？…そんなことが何うして出來るか。然し何とかしないと、夕刻にはまたあの雷叔父が怒鳴り込む。さて困つたことだぞ。（何かを蹴飛ばす。拾ひあげて）荒澤から雪子へよこした手紙だぞ。さつきの騷で落して行つたな。（手紙を出して默讀。）何だと『左やうの次第にて千五百圓程の金が至急手に入らぬ時は一身の破滅ともなるべき危急の場合、』何だと『何卒貴女樣より男爵閣下へ御懇願願はれまじくや、』……『尤も御父上樣に御話しの節は、道場建築費についての不義理の借財といふやうに御話し願度』……『いつもながら貴女樣の御情にすがるやうにて誠に申譯なけれど』だと。最早疑問の餘地はない。昨日や今日の事ではなかつたのだ。先刻もこの事で會合して居つて、わしにそれを云ひ出す手筈だつたが、飛んだところを發見されたので、いひそびれて逃げ歸りよつたのだな。……千五百圓の金、……一身の破滅……ウンこれは名案が浮んだ、……これを餌に思ひ切らせて……然し、世間の噂が殘る……さうだそれもつまりは荒澤の獨身から起つたことだ。奴を結婚させる……さて相手は誰れにする……

電話のベルがなる。

福富（電話をきく）ハアわしぢや。だれ馬込の執事、さうか。……なに、荒澤がそちらに來てゐる……ウン叔父も叔母もまだ歸らん……よし、わしが一寸用事があるから、荒澤にすぐとこちらへ來るやうに命じてくれたまへ。（電話を離

れて）さあ、忙しいぞ。ウン岩本だ、花代孃だ。燈臺元暗しとはこの事だ。（ベルを押す）

花代現はれる。

花代　ご用事？

福富　大に用事がある。然し一寸急ぐ。まあ落ついて、そこへかけて下さい。でそのいろ〳〵話の順序もあるが、すべて省略して要領をいふが、あなたもいつまで一人といふ譯にも行くまい。婦人はやはり母となることが、人間本來の……秩序といはうか、宿命といはうか、……いや幸福でもあるのだ。苟も女と生れてとす、人の妻たる經驗を持たずに……

花代　それよりご用事の方を先きに承りまして……

福富　いや、これがつまり、用事なのだ。手取り早くいへばあなたの結婚の問題だ。無論異議はないと思ふが……

花代　結婚なんか私いやでございますわ。わたし一生涯殿樣のお傍で、殿樣の御仕事の御手傳ひをさせて戴きたいと存じてゐます。

福富　それは有難う。然し、わしのやうなもののために一人の立派な婦人を犧牲にするといふことは、わしには斷じて出來ん。それにもう嫁にいつた子供のあるやうなわしでも、まだ老人といふではなし、若い婦人をいつまでも傍へ引つけて置くといふと、やはり世間がとやかくいひたがる。いや世間の口といふものはうるさいものだ。あなたも早く身を固めて貰はにやわしの氣がすまん。で、たゞ漠然とさういふのではない。實は似合ひの人物があるから云ふのです。善は急げだから、年取り早くいつてしまうが、あの荒澤君だ。

花代　荒澤さん！

福富　何うだ、いやかね。先刻のやうなところを見せられては、面白ろくない男と思ふかしらんが、あれはさつきもいつた通り全く一時の出來心、若い者同士のその場合の戯れだ。それは不埒といへば不埒だが、それがより大きな罪惡に發展しなければ、一時の不心得として將來を嚴戒して置けばいゝ。といふのもつまりは荒澤君が獨身のためのあやまちなのだから、身でも固まれば自然志操も堅まるといふものだ。

花代　でもあの方、このごろ大變財政上に困つておいでのやうですわ……

福富　さう〳〵その事もうす〳〵聞いて居らぬではない。それといふのも手堅い内助の人のないためなのだ。もしも此話をあなたが承知すれば、さうして荒澤君にも異存がなければ――無論荒澤君に異存のないことはわしが受合う――その財政上の問題も、わしの手で解决をつけてやらうと思つてゐる。

花代　あの殿様が、荒澤さんの……

福富　左様、あなたさへ承知してくれゝば、その財政問題はわしの手ですぐ何うにでもする。

花代　まあ嬉れしい（泣く。）

福富（感にたへたやうに）いやあなたの同情心の深いのには全く感じ入つた。さつきはわしのために泣いてくれたが、今は荒澤君のために泣く。その尊い心で荒澤君の內助の人となれば、荒澤といふ人間一人が救はれる譯だ。人間一人を救ふ。それは全く尊い事業だ。わしなどは一生努力しても、たつた一人の人間を救ふことが出來るか何うか全く覺束ない。あゝ尊いことだ。荒澤君も喜ぶだらう。

執事　荒澤さんがお見へになりました。

福富　おゝ見へたか。ぢや岩本さんはあちらで持つてゐて下さい。

花代の退場と入れ違ひに荒澤入て來る。

荒澤　先刻は御無禮いたしました。

福富　まあかけてくれたまへ。いや外のことではないがね。至急に君に、聽いて貰はにゃならんことがあるのだ。

荒澤　はい。何ういふ御用で……

福富　やはりその先刻の御無禮の一件だが、あれを君は、一時の戯れと辯解するだらうが、然しだね、こちらはそれでは通せないのだ

荒澤　それは一體何ういふお話で……

福富　呆けても駄目だ。わし共は今日まで君を紳士として信用してゐたのだ。然るに何事である。君がわし共に出入りするやうになつたのは駒井の親友であるといふことからであつたが、君はその親友の夫人たるものと道ならぬ行ひを敢てして……

荒澤　私が……私がいつそんな……

福富　いつであるか君自身がよく知つてゐる筈だ。がそのことは、全くこゝだけの話で、君と僕との間だけのことだ、決してお互に隱し合ふ必要はない。あつたことはあつたと淡泊に君がいつてくれゝば、こちらは決して君を法律上の罪人にしやうといふのでも何でもない。たゞ將來に向つて固く誓つて貰はねばならんのだ。今後は斷然、思ひきると僕の前でさう誓つてくれたまへ。

荒澤　思ひきるつて、一體何をです。

福富　知れたことと、雪子との關係をです。

荒澤　そ、そんなことは全くの冤罪です。

福富　まだそんなことを云ひ張つて居る。君は案外、度胸のない男だ。何といひぬけやうとしても駄目だ。雪子はもう姙娠してゐるのだ。

荒澤　姙娠！雪子さんが。

福富　さう見たまへ。驚くのはわし共のことだ。昔ならば、君の一命はわしが貰ひうけにやならん。娘も成敗すべき奴だ。無論今日はそんな譯には行かん。のみならず跡始末までわしがせにやならん。そこでわしから君に頼むといふのだ。いや命ずるのだ。思ひ切りさい！

荒澤　思ひ切れといつても…………

福富　その未練を切つてすてなさいといふのだ。尤もわしの方にも、君にそれを命令するについては相當考へてゐることがある。君の一身上の難局についても多少聞いて居らぬではない。君が一言「思ひ切ります」といへば、君の急迫した問題について、わしも相當考へてゐることもあるのだ。

荒澤　あの、私の急場を……

福富　さうですとも。男らしく誓つてくれゝばだ。

荒澤　では、思ひ…思ひ…でも全く私には……

福富　思ひ切れぬといふのかね。

荒澤　思ひ、思ひ切ります。

福富　おゝよく云つてくれました。さうして眞實にその誓を守つてくれるだらうね。

荒澤　守ります。

福富　よろしい。（證書を書いて）さあ、これに署名してくれたまへ。何も躊躇することはないではないか。

　荒澤署名する。

福富　よろしい。これで先づ一段落だ。ぢや約束通り、こゝに一千圓の小切手がある。確かに受取つてくれたまへ。

荒澤　（小切手を受取つて）でも雪子さんに子供が出來たといふぢやありませんか。

福富　さうだ。がその子供の將來はこちらに任かせて貰はにやならん

荒澤　でもその子供は私のでは……

福富　だから君の子供でないとは決して云はん。がこれも諦めて貰はにやならん。これは君の子にして君の子にあらずだ。子供にも、君にも氣の毒だが、こちらで始末する。それも君がウンといふならば、こちらにも相當考へてゐることがあるのだ。

荒澤　ではそれも承知いたしました。

福富　承知してくれるか。それならよし。では、こゝに五百圓の小切手がある。

荒澤　（受取つて）これは毎度何うも……

福富　所で萬端好都合だが、まだ一つ今度は君に談判でなしに、いゝ話があるのだ。

荒澤　今までのも可なりいゝ話ですが……いや何、何ういふお話で……

福富　話といふのは外ではない。君がそんな誤ちをしたのもつまりは獨身の致す所だ。これを機會に身を堅めて、生涯を誤るやうな危險から遠ざかるのが君のためだ。是非此際結婚したまへ。

荒澤　結婚？それは絶對に御免を蒙ります。

福富　さあ、誰れも一應はそんなことをいふものだ。わしは容易とそんなことをいふのではない。君に似合はしい相手が居るから、さういふのだ。

荒澤　いやどんな相手でもその話ばかりは！

福富　まあ聽きたまへ、相手といふのは、君も知つてゐるうちの岩本花代孃だ。

荒澤　岩本？

福富　そんないやな顏をせんでもよからう。あの婦人は實は君には勿體ない位の婦人なのだ。殊に恐ろしく同情に富んで、君のやうにやゝもすれば墮落の淵に沈みかけるやうな人間一人が救はれるといふ段になれば。彼女は自分を犧牲にすることを苦もなく承知するといふ性質の婦人なのだ。

荒澤　でもあの婦人は少しわからずやのやうで……

福富　信念の固い人間は、君等の眼からはわからずやに見へる。とやかくいはずに承知したまへ。

荒澤　でも私の目下の窮狀では……

福富　それも君が承知すればわしも考へてゐることがある。

荒澤　ではお言葉に從つて岩本孃と結婚いたします。

福富　それは結構だ。ではすぐと岩本孃をよんで話を極めることにしやう。（ベルを押す）

花代現はれる。

福富　岩本さん。荒澤君も喜んで承知してくれました。こんなめでたいことはない。さあ兩人で握手してくれたま

へ。（兩人の手をとつて握手させる。兩人操つたさう。）事が急なので約束の指環といふやうなものも間に合はぬ。萬事はわしが吞み込んでゐるから、兩君は心と心とをしつかりと取かわしてくれたまへ。こゝでは工合もわるからう。あちらへ行つて自由行動をとつて下さい。

兩人退く。

福富　さあ、これで大團圓だ。話の最中に雷叔父に怒鳴り込まれては困ると思つたらいゝ鹽梅にやつて來なかつた。もういつ落雷があつても、安心だ。（長椅子に凭れて、汗をふく。）

馬込ヨチ／＼と驅け込む。

馬込　さあ何うだ、立派に始末がついたか。夕刻まで待つちや居られん。始末がついて居なければ、わしがつけてやる。

福富　いや御安心下さい。すつかり始末をつけました。

馬込　何う始末をつけたのだ。

福富　これこの通り、荒澤からは、今後きつぱりと不義を思ひきるといふ誓書を取りました。さうして世間の噂を打ち消すためには荒澤に結婚させるに限ると思ひましたから、あの花代と荒澤とに結婚の約束を取り結ばせました。

馬込　それはよい。さうして雪子の腹の子は何うした。

福富　それについても荒澤は絶對に何の權利も主張しないとこの證書で誓ひました。

馬込　その腹の子の始末を何うするといふのだ。權利の問題ぢやない腹の子の問題だ。

福富　そのことは、これから考へやうと思つてゐたのです。

馬込　馬鹿な、それが一番の大問題ではないか。荒澤が思ひ切らうが花代が結婚しやうが雪子の腹から得體の知れな

い人間が飛び出したら、萬事休すではないか。

福富　では叔父さんの御考へは？

馬込　わしの考へはいくらでもあるが、まだ出て來ないのだ。とにかく雪子の腹の子を何うするかも考へんで、もうすつかり始末がついたとは何たる囈言だ。だからお前には任かされんといふのだ。

福富　何か手術のやうなことで………

馬込　手術だと。(かつとなつて)これ貴様は何をいふのだ。帝國軍人の末席を汚すこのおれに法律の罪人になれといふのか。貴様の平和主義はあれは何だ。「殺す勿れ」は何うしたのだ。

福富　叔父さん。相濟みません。只今のは全く私の失言でした。困惑のあまりの失態。何うぞ御容赦を願ひます。

馬込　容赦も糞もあるか。貴様が如何に平身低頭したつて、雪子の腹の子が消へてなくなりはせんわい。

雪子、花代の肩につかまりながら入つて來る。荒澤後から從ふ。

福富　雪子、何うしたのだ。

雪子　落馬したのよ。

馬込　どこか痛めはせんか。

雪子　何こも痛めなかつたけれどたゞ少しお腹を打つたやうよ。(長椅子に横になる。)

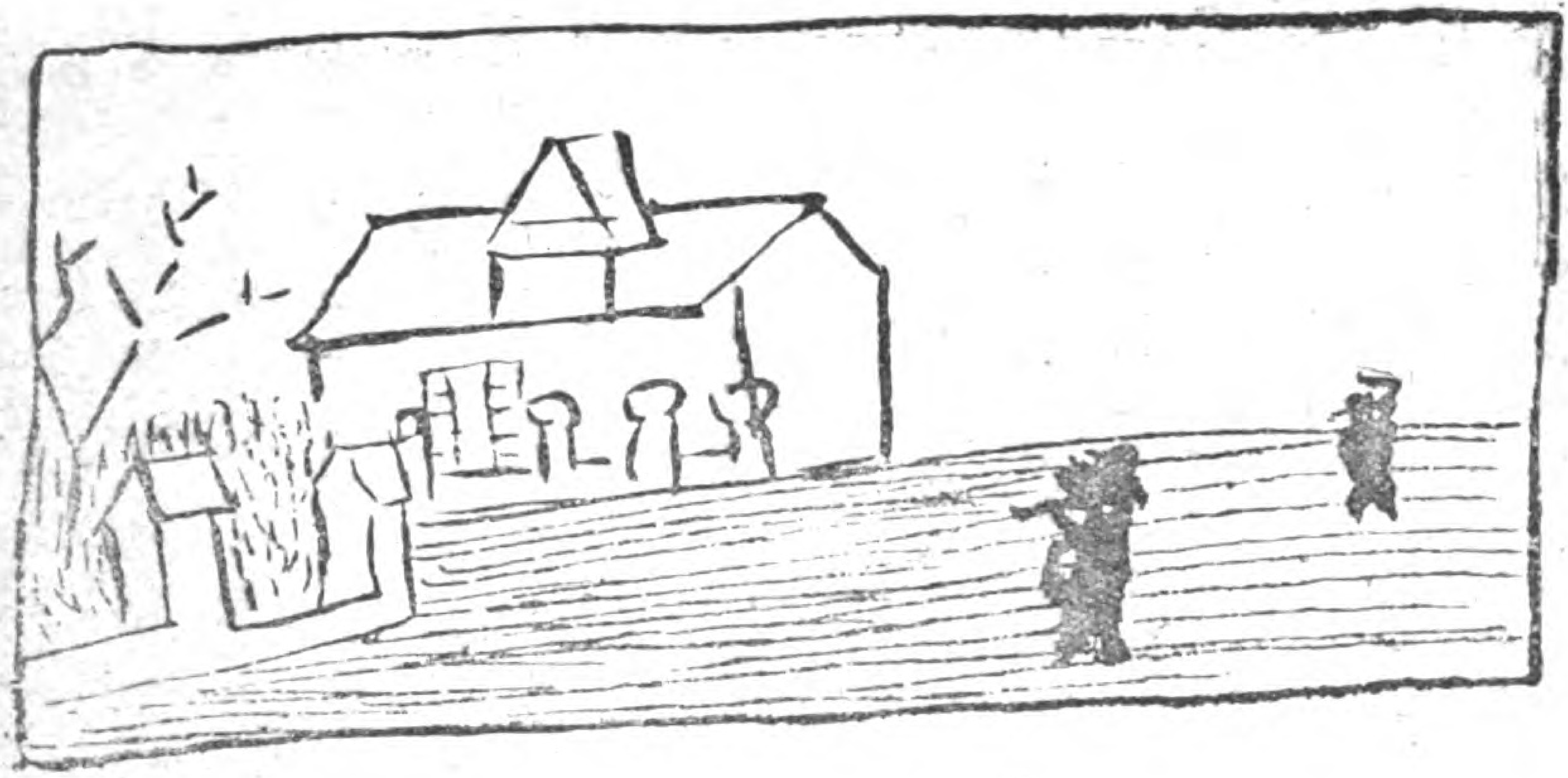
馬込　お腹を打つた？

福富　お腹を打つた？

馬込。福富　ハツハツハツハツハツハツ

荒澤　}ハツハツハツハツハツハツ
花代　}ホツホツホツホツホツホツ

(幕)



戯曲
陶淵明（一幕二場）

長與善郎

第一場　陶淵明の家

正面中央に庵。右手に空になつてゐる厩。庵と厩との間に小路があり、その先きにキラ〳〵と光つてゐる入江がのぞかれる。

左手、籬越しに畑。一人の農夫の耕してゐる姿が見える。籬の下には菊が咲いてゐる。農家らしいいろ〳〵の道具、井戸なぞ。

庵の内左手に帷が垂れ、奥へ通ずる口になつてゐる。室には机、榻、無絃琴なぞ見える。前面には病氣上りの淵明が子供を背負つて黍殼の焚き火を棒で突つつき乍ら何か考へてゐる。

庵の後ろには竹林、傍らには赤い實のついた柿や李の樹なぞがあり、枝には雞がとまつてゐる。

長閑な秋の日和。鷄の鳴く聲で幕あく。初め一寸沈默。

子供泣き出す。

淵明　よし〳〵、おしつこか。どれ、まつてろ。
子供をおろし、畑の方へ行つて小便をさせる。小便をさせながら景色をながめてゐる。
農夫（手を休めて）い丶お天氣ですね。
淵明（にこやかに會釋して）ほんとにい丶天氣だね。
農夫　もうすつかりお體はおよろしいんですか。
淵明　わしか。有りがたふ。もう殆んどすつかりい丶んだが、たゞどうもまだ體に力がないだけで。（子供唸る）もうい丶のか。
農夫　しばらく休んで、急に無理をしなすつたのが、やつぱりいけなかつたんでせう。
淵明（起つて又背負ひ乍ら）なに、無理をしたつて云ふ程動きもしないんだが。——百姓は昔からやつてた事だし、あれ位が無理になるやうな體ぢやなさけなくなるね。
農夫　そりやだつて旦那。あんたなんぞは元々わつしらたア體もつむりも出來がちがふだからね。そつくりわつしら同然にやるつたつてそりや無理ですよ。
淵明　は丶、わしは何もそんなつもりでやつてるわけぢやないよ。たゞ自分の氣にむいた事をしてるだけの事さ。（ぶらぶら歩き、菊の處へ行く）
農夫（笑つて）さうかね。まんざらさうばつかりでもねえやうだが。ねえ、お內儀さん。（と此方をのぞいて）おや、お內儀さんはゐなさらねえんか。
淵明　今一寸そこまで藥を買いに行つたよ。

農夫　燊つて、あんたのかね。

淵明　いや、お袋のさ。わしはもうこの通りいゝんだからね。

農夫　ふむ。（獨り言のやうに）飯より好きな酒を我慢してかい。親孝行だね。あんたは、まつたく。

淵明はその言葉を耳にするが、別に取り合つて答へやうともしない。十二三になる男の子、一杯に焚き木を背負つて歸つてくる。

男の子　あゝ寒い〳〵。ヤケに腹が空いちやつたんで何だか馬鹿に、寒いや。（ドサリと焚き木をおろしに座つたまゝ起たずにゐる）

淵明　おゝ、御苦勞。御苦勞。（後ろへ廻はつて焚き木をおろしてやり乍ら）くたびれたらう。

男の子　くたびれやしないけど、何しろ腹がぺこ〳〵だ。（と起つて）何か食ふものはないかね。（焚き火にあたる）

淵明　いゝものがあるよ。（焚き火の灰の下から棒で燒けた芋を掻き出して）そうら。もう丁度いゝ鹽梅に燒けてゐるだらう。

男の子　芋かい。そりや有りがてえ。（フツフと息を吹きかけて、割つて食ふ）あつつつ。（ふと空になつてゐる廐を見て）父さん。馬はどうしたんだい。

淵明　（やゝもぢ〳〵して）賣つちやつたよ。

男の子　え。賣つちやつたのかい。とう〳〵。

淵明　うむ。今朝お前が出て行くとナ、間もなく買ふ人が來て連れてつたよ。

男の子　（ぼんやり淋し相に）ふーむ。

淵明　尤もあの馬ももう齢を食つて昔のやうに役に立たなくなつてたからな。なに、又その中もつと若いいゝのを買ふさ。

妻、藥を持つて歸つてくる。寠れてゐる。

妻　これが貴方のお酒ならね。

淵明　なあに酒なんぞ無けりや無いでいゝさ。藥たア一緒にならない。さあ、早く持つて行つてあげな。

妻、能の内に這入る。

男の子（やゝいまいましし相に火をつつきながら）あゝあ、何もかもみんなおばあさんの藥になつちまふのか。

淵明（ほゝ笑み乍ら）そんな事は云ふもんぢやない。なあに、おばあさんの病氣より父さんがわずらつて長い事働けなかつたからの事さ。だがもういゝ。これから又皆で働きアぢき取り返へすさ。

妻（米を入れたザルをかゝえて出てくる。）阿母さんが貴方に一寸つて。

淵明の背中の中の子供跳ねて母親の方に手を出す。母親もわらつてザルを下において手を出す。

淵明　行くか。阿母さんとこに。（子供を妻へ渡し乍ら）ほ。どうも仕樣がないな。俺はどうせ手があいてるんだが。

——お前もちつたア休めよ。（内に這入る）

農夫　ねえ、内儀さん。お袋さんは近頃よつぽどおわるいんかね。

妻（井戸端へ來て米をトギにかゝる）いゝえ、相變らずですわ。別に心配な事はないんですけど、何しろ長いこつてすからね。

男の子　キリがないな。畑を賣つて、馬を賣つて、今度は何を賣るんだか。

農夫　に〻、なあにね、おばあさん一人位いくら長くわずらつてなすつたつて、父さんさへ都にずつとお役人をつゞけてゐなさりやア藥なんぞは何でもねえ、畑だつて、馬だつて賣るやうな事はなくつてすむんでさ。らくうに。

妻　そりや、ほんとにさうなんですけど――。

農夫　さうすりやお袋さんだつて喜びなさるし、あんた方もどんなに樂か――。さあて、わつしあこれで一つお晝にして來ませう。ちよつくら。（左手へかくれる）

妻の方で男の子らの遊びさはぐ聲聞こえる。「オーイ。竿を持つてこい。竿を。」「危ねえぞ。」「おつこちるぞ。」なぞと云ふ聲。

男の子　あゝあ。俺ア遊んで來やう。

妻　お腹がすいたゞらうね。ぢき御飯にしますよ。

男の子　いゝよ。そんなに急がなくつたつて。母さん。おらア芋を食つたんだから。（元氣よく出て行く）

又一人の農夫（農夫二）右手から鍬をかついで畑の方へ舞臺を横切る。

農夫二　今日は。きれいに菊が咲きましたな。

妻（にこりと會釋して）えゝ、菊だけは。――今年は又格別に花が大きくついたんで、この菊のお節句には一つお祝ひをしやうなんて樂しみにしてゐたんですけど――

農夫二　菊の節句つて云やアたしか今日ぢやありませんかね。（焚き火の處にくる）

妻　えゝ、でもまあ、病人もありますし、今年はお流れですわ。

農夫二（氣の毒さうに妻の様子を見て）ねえ。なんならお酒はわつしの方から持ち込んでもようがすがね。

妻（冷かし氣に）まあ、それぢやア――

農夫二　なあに、たまにやわつしの方だつて出しますア。旦那の癒つたお祝ひに一つ飲みてえとは思つてた處だからね。――だが、それやさうと、一體どうして旦那はあんないゝ役を廢めて、こんな田舍に引つ込んでしまいなすつたんかね。

妻　それがどうも性に合はないと云ふんでせうよ。どんなにお金は取れて、身分が高くなつてもあゝ云ふ窮屈な生活(くらし)よりや、いくら不自由してゝもかう云ふ田舍の百姓ぐらしの方がずつと氣樂でいゝつて云ふんですから。

農夫二　何しろ旦那は變つてなさるよ。わつしらから見りや、――餘計な世話だが――旦那なんぞは百姓したつて始まらねえ。百姓なんぞはまア誰だつて出來るだからわつしらに任せといて、旦那は都で立派な役をつとめてなさりやア、第一村の自慢にもなるし、……いや、わつしばかりぢやねえ。村の者はみんなさう云つてるですよ。あんな先生をこの村で百姓させとくなア山ん中に寶を捨てとくやうなもんで、まつたく勿體ねえこんだつてね……。

淵明出てくる。二人口を噤む。

淵明　あゝいゝ匂ひだ。この畑の匂は都ぢや嗅げないて。

農夫二　酒の匂ひとどつちがようがすね。先生。

淵明　おや、これは周さんかと思つたら趙さんか。（笑つて）されば さ。今晩に一つこの菊を肴に一杯……。あ、さうだつたナ。どうも何かと云ふと「一杯」と云ふのが口癖になつちまつて。……はゝゝ。

妻も淋しく笑ふ。その時ガヤ〱と云ふ騒ぎが裏手の方に聞こえ、小路から先刻の男の子がまつ先きに飛んでくる。

男の子　母さん。大變だよ。

お役人さんが來たよ。

他の子　都から來たんだ。

妻（おどろく）え、お役人が？

淵明（ホツとして）何だ。そんな事か。——ドキリとした。

男の子　そんな事つて、そりや立派な人だよ。父さん。きつと自家に來たんだよ。

他の子　今舟で着いたんだ。

又他の子　家來を連れてらア。

淵明（わざとおどろいて）さうか。そりや大變だ！　えらい人だナア！（笑つてその子供の頬つぺたをつつく。）

妻　まあどうした事でせう。（いそ〳〵と米のザルを抱えて庵の内に這入る）

晉の御史大夫東胤、一人の供を從へて入り來る。後から村の男女物珍らし氣について見にくる。

淵明　おう、どこの王さんかと思つたら、これは東胤さんではないか。（おどろいて起ち上る）

東胤　えゝ、田舍へ來れば私も諸侯です。（笑ひ乍ら丁重に禮をして）しばらく。

淵明（同じく丁重に禮をして嬉し氣に）本當にしばらく。之はまあ何と云ふ思ひがけない珍客だ。

供の者は丁寧に禮をする。農夫はすつかり恐惺して了つて、何とか呟き〳〵、こそ〳〵お辭儀をして後へさがる。淵明の妻は子供を置いて手を拭き〳〵出てくる。お叩頭をする。

東胤　これは御夫人ですか。（丁寧に禮をして）始めまして。私は東胤と云ふ者で、淵明さんとは古くから皆にお心易

くしてゐる者です。

妻　ようこそ。まあこんな穢ない處へ。お名前はよく承はつてをりました。――どうぞ。

淵明　どうぞと云つて上つてもらふ程の座敷でもない。却つてこの青天井の廣間の方がせい〳〵して、いゝだらう。火もあるし。

東胤（わらつて）いや、ほんとにあの埃りだらけの都から來た者にはこの山水が何よりです。道々どうも景色の美しいのにはほと〳〵感服に疲れて了ひました。これではなるほど貴方があれほど戀しがられるのも無理はないと思ひましたよ。（妻の持つて行く床几に掛け乍ら）あれが南山ですね。

淵明　さうです。いゝ山でせう。

東胤　實にいゝ山ですね。先刻から見とれてゐるんです。

淵明　私には子供の時からの友達みたいな親しい山ですよ。あの山を見さへすると私は何もかも忘れてせい〳〵した輕い心になつて了ふ。まあ、この位いに景色のいゝ處はどこにだつてあるんでせうがね。

供の者（東胤に）では私は舟で待つてをります。……これを。（と持參の酒壺を出す。）

東胤　は。何を土産にしやうかと考へた擧句、これを持つて來ました。どうも貴方にはやはりこれが一番氣に入るだらうと思つたから。

淵明　おゝ、これはなつかしい洛陽の酒だな。（手に取つて嬉し相にさゝげる）之は何より忝けない。（妻を顧みてどうだ。これこそ塞翁の馬と云ふもんではないか。

妻　ほんとうにね。まあ、何と云ふいゝお節句が出來る事になつたでせう。

供の者　（同時に禮をして「さア退つてろ〱」と見物の男女を追いやり退場す。）

東胤　相變らず菊を作つてゐでゞすね。なるほどこれは美事だ。（起つて菊を見る。）

淵明　實は丁度今日がその菊の節句にあたるので祝ひをしやうかなぞと云つてゐた處で、……丁度又貴方が私の大好物を持つて來てくれるとは重ね〲何と云ふ幸運だらう。

東胤　いや、今日が節句だと云ふ事は私も實は知つてゐたのですが。これしきの土産にさう喜んでもらつては恐縮です。（それとなく四邊や家の様子を見る）

淵明　涙ぐむ。どうも私は幸な人間で不思議に惠まれてばかりゐる。それでも酒を飲む度にきつと想ひ出すのは都で、都を想ふ度にきつと又想ひ出すのは貴方だ。貴方と酒とを一緒にするわけではないがな。

東胤　（笑つて）いや、さう云へば私も同様。たまに酒を酌んで誰か心からの話相手をほしいと思ふ度毎に想ひ出すのはいつも貴方だ。あの官舎の樓台で柳の煙る春の朧夜なぞに無絃琴をかゝへて一杯氣嫌に詩を吟じる貴方と盡きない清談に夜の更けるのも忘れたあの頃です。

淵明　では早速ながらそのお土産で一つ久々の健康を祝し合はうぢやありませんか。（妻に眼くばせする。）や、それはもし貴方と云ふ一人の友達がゐなかつたら私はとてもあれだけでも長く彼處にとゞまつてゐなかつたでせう。

淵明　いや、さうでもない。離れて考へてゐると都も中々美しい。田舎者のわしには呑氣な田舎の方が親しみはあるが、さればと云つて決して人工の美をわしは讃美しないのぢやないのだ。

東胤　（暗に試めすやうに）だがあの莫迦げた虚禮と形式づくめの俗男の手に潔癖な貴方を招いて弱らせた事は返へす〲も私のしくじりだつたと思つてゐますよ。

淵明　（心苦し氣に苦笑して）いや、さう思つてゐられては私はいさゝか迷惑だ。わしは決してそんな貴方々の考へるやうな婆婆氣の薄い淸淡虛無の男ぢやアない。名利も嫌ひでなければ、わけても都の美しい女子供には淺間しいほどに牽かれるのだ。（聲を低めて）これは女房には內緒だが、なあに正體を割つて見りや、これで中々俗氣も色氣も滿々、いろんなものにほだされてあの役につながつてゐたんですよ。貴方丈けに牽かれてゐたと云やア實は嘘さ。

東胤（笑つて）それやつまり貴方とても人間だと云ふ丈けの事だ。

淵明　それにわしはあの形式だつて虛禮だつて一概に排斥もしない。唯この野良育ちの頑なゝうなじ奴が一々それに調子を合はせるのを面倒臭がる丈けの事だ。何も淸廉だの、潔白だのと云ふそんな大さうなわけではないのだ。

　妻、盃を二つ持つてくる。二つとも少しづゝ缺けてゐる。

淵明　はゝゝ。だがまあそんな畏まつた話は止めにして、さあ、兎も角も一杯。（と嬉し相に栓を拔く）あゝ何と云ふ久しぶりだらう。

東胤（壺をとつて）いや、私が酌をしませう。貴方のために持つて來たのだ。（淵明の盃に注ぐ）私は貴方ほどに之が好物でもなし、又飮まうと思へばいつだつて飮めるのだ。

淵明（又それを取り返へして）いや、わしを喜ばすためなら貴方も飮んでくれなくては無意味だ。折角の美酒も一人では舌皷の打ちやうがない。

　と壺を妻に渡す。東胤の盃に注ぐ

東胤　なるほどこれは私が野暮だつた。（とうけて）が、それなら御夫人、貴女も一つ一緒に祝杯を傾けて下さらなければ今度は私がまづいと云いますぞ。はゝ。では。（と淵明夫妻に盃を捧げて飮む。）

淵明　いや、盃が之れ丈けしかないのですよ。お前にはわしの後を舐めさせてやる。(捧げ飲む。舌鼓を打ち)おゝ甘露。この匂ひ！(盃を妻に渡して)まあ一口やつて見ろ。田舍の濁り酒とはわけがちがふ。

妻(一口舐めて)まあ、ほんとにけつこうですことね。これがお酒かと思ふやうですね。

淵明(又受けとつて)ほめたつてもうやらないよ。わしの大事な、大事な命の水だからな。(笑つて)あゝ、これですつかり病氣もどこへか飛んで了つたわ。

東胤(又淵明に注いで)その命の水をなみ〳〵と湛へてゐる泥沼にもう一度足を突つ込む氣にはなれませんかね。淵明さん。

淵明　いやァ……それは……

東胤　閉口ですか。(笑つて)いや、實を云ふと、私は又どうもえらい迷惑な役を云ひつけられてこゝへ來たのですよ。

淵明　どうやらそんな氣もしてゐたが、――と云ふと、又わしをつかまへて來いとでも云ふのですか。

東胤　實はさうなのですよ。尤も貴方と云ふ魚は中々普通の餌では釣れないと云ふんで、この位い白川な呑氣な役はないと云ふ役を特別に作つたんです。嘘は愚か、お世辭一つ口にする必要のないと云ふ――

淵明(すつかりいゝ氣嫌になつて)なあに、わしだつてこれで中々お世辭も云ひやア、時によつちや嘘も吐くさ。さう剛毅朴訥一天張りでもないさ。

妻　いたつて如才のない方ですからね。(笑ふ)

淵明　はゝゝ。ところで一體そりや何といふ役なんです。

東胤　何と云ふと云つて別に名もないが、強ゐて附けりや、まあ宮廷詩人とでも云ひますか。唯詩さへ作つて、時々宮中の宴會で御馳走でも食つて貰やアいゝのです。

妻　まあなんていゝ役でせう。

東胤　それで俸給は以前の時より少し増さうと云ふのですからね。

淵明　どうもちつと話がよすぎるね

東胤　えゝよすぎます。だから實際はどんなものかと私は危ぶむんです。名前はいゝが、きつと又貴方を失望させて、いやな思ひを再びさせるにすぎなからうと思ふのですよ。

淵明　ふむ。——

東胤（心を引くやうに）で、私は云つたんです。とても貴方は應じまい。何と云つても多少は阿諛追從を避けられないこの官途の生活には貴方はもう一度で懲りて逃げ歸つたんだからと。

淵明夫婦は默然としてゐる。

東胤　それに此方へやつて來て見て、私はますます〳〵それが望まれない事だと云ふ信念を固めたのです。この美しい悠大な田園の中で悠々と馬を牧ひ、土を耕して諄朴な勞農の生活に自適しておられる貴方は實に、幸福な者だ。何がこの幸福から貴方を動かす事が出來やうと。

淵明　はゝゝ。これは面白い事になつた。わしはあの厭世家の屈原と同じに見られたわけだな。（又カラ〳〵笑ふ）世人皆濁つて我れ一人澄めりか。ところがこの屈原、實は却つて世人よりも濁つてゐる位なのだから困る。尤も本當に世が厭になつて避け度くなるほど清廉、潔白な人間ならそれも結構かも知らぬが、わしのはあべこべに唯自分の柄に合つ

た暮らし方をしてこの好きな生をいやが上に樂しみ度いと云ふ我が儘から出た丈けの事をやると云つたつて半分は剏なぞをいじつてゐる慰み半分の眞似だ。別に働いてゐるなんぞとは思つてゐないのですよ。

東胤　さうですかね。私は又貴方が少し働きすぎて體をわるくされたと云ふやうに聞いて來たのですが、しかしまあ、貴方のお變りない樣子を見て、安心しました。なに、結局こゝへ來たと云ふ事にさへしておきや私の役目はすむんです。

淵明　どうもこの不調法な、面倒がりの性分には自分ながら少し困る事もあるんですがね。

東胤（笑つて）いや、貴方のその我儘な處に私は又敬意を拂つてゐるのですよ。――あゝいゝ雲が出て來ましたね。

淵明（起つて空を仰ぐ）あゝあのふわりとした輕さ。孔子は不義にして、富貴なる事をあの浮雲のやうだと云つたが、わしはあの浮雲のやうな輕い輕い身の上になつて太虛に溶ける事が出來たらといつも思ふのですよ。

　　雁の高く啼いて通る聲

東胤　あゝ雁が渡つて行きますね。南の方へ皈るのでせう。さあて、私も亦用務に待たれてゐる。久しぶりの貴方との對面にお名殘り惜しい事は限りないが之でお暇をしなければなりません。

淵明　何です、もう歸るんですつて。

東胤　ゆるして下さい。どうも之も世の義務で仕方がないのです。

淵明（一寸考へさせられる樣子）それではどうも無理に引きとめるわけにも行かないが。

妻　まあ、だつてそれでは……あんまりお愛想がなさすぎますわね。

東胤　さう云ふ思ひを會ふ人毎にさせて忙しなく飛び廻はつてゐなくてはならないのが私の職分なのですから、同情

して下さい。（懷中から紙包みを取出して）どうです、貴方が萬一この朝廷の召し出しに再び應じられる場合にはと、私はから云ふ貴方の路用の銀まで托されて來てゐるのです。（淵明は「ほう」と云ふやうな顏をして妻と顏を見合はすなに、）之をお渡ししたからと云つて貴方に義理を押しつけるわけではないのです。（一歩後へさがる淵明を追つて）假りに貴方が一寸でも都へ樣子を見旁々遊びに出られるやうな事でもあれば勿論それでよし、又このまゝに貴方が欣んで了はれたところで、貴方の風變りな氣質をよく呑み込んでおられる皇帝始め、無邪氣に笑ふ丈けで誰も咎めるものはありはしないのです。

淵明　さう思はれるのをいゝ事にして此方は附け上るわけには行かないね。

東胤　まあ、貴方は病氣であつた。それで私が見舞ひに置いて來たと云つたつて濟む事です。呑氣に受けとつておいて下さい。どうせ遊んでゐる金なのです。貴方に迷惑はかけませんよ。（無理に淵明の手に握らせる）

淵明　では君の友情に甘へて預つておく事にするか。どうも少し氣持ちは重いが、助かるには助かるのだ。

東胤　どうかさうして下さい。氣持ちなんぞ重くしないで。

淵明　どうも屈原だつたらこんな穢らはしい束縛とか何とか云つて潔よく投げつける處かも知れないね。はゝ。

東胤　はゝ。投げつけて憤慨する程の代物ぢやありませんよ。それでは何れ又どうか御機嫌よく。

淵明　貴方も御機嫌よう。それでは。

三人禮をする。淵明夫婦は一寸東胤を送つてゆく。

淵明一人ぢき戻つてくる。茫然と考へに沈む。緣に腰かける。子供のはげしく泣く聲。

妻　はい〳〵。今行きますよ。（と云いながら驅けて出て來て庵に上らうとする）

淵明（起つて）舟を待たせろ。待てと云つてくれ。わしは……都へ行つてくるよ。
妻　えゝ！（おどろく）都へ？
淵明　うむ。どうもわしはやつぱり、こゝにかうしてぶら〳〵してゝもいけないやうだ。――思いきつて行つてくるよ。
妻　まあだつて、貴方、強ゐておいやな處に――。
淵明　なに、強ゐて行くわけでもない。樂大地はどこにだつてあるのだ。それにわしが行つて一寸つとめさへすれやお前達は皆又樂になるのだ。わしはちつと我がまゝすぎた。
妻（一方うれしさをたゝえて）そんな事はありませんわ。只貴方のお體がかう云ふ骨の折れる仕事には向かなかつたんですわ。
農夫二（再び出て來る。）それがようがすよ。まつたく。村の者はみんなさう云つてるです。あんた見てえな先生をこの村で百姓させとくなアまつたく勿體ねえ、まるで山ん中に寶を埋めとくやうなもんだつてね。
淵明　一寸淋しいだらうが辛棒してゝくれ。一時の事だ。金さへ出來たらぢき歸つてくるよ。
妻　それは貴方のためならいくらでも辛棒はしますけれど――。
淵明（起つて）舟をとめさせろ。俺は行くと云つてくれ！（農夫に）どうか留守を賴みますよ。（急ぎ奧へ這入る）
農夫二　お安いこつて。（妻に）わつしが行つてとめて來まさ。
　農夫走り去る。始め一寸うれし相に見えた妻は今は又沈んでぼんやり緣に腰をおろす。「おーい。待つてくれ。舟！」と云ふ農夫の聲。

第二場（前場より數ヶ月の後）

正面に遠く南山が霞みそびえ、左手からずつと入江が深く入り込んでゐる。右手の奥、小さく淵明の家が見え、それにつゞく人家が樹木の中にちら〳〵見える。ゆら〳〵と煙がそこから立ちのぼつてゐる。右手から舞台の前面にかけて道路になつてゐる。入江の岸には猫柳が芽をふき、桃が咲いて、水に泳ぐ鷺鳥の聲が聞える。そのわきで村の女達がザブ〳〵と洗濯をしてゐる。

村の女甲　でもまあ春らしくなりましたわね。水のぬるいこと。

村の女乙　ほんとにね。今日は南山があんなに霞んでゐますわ。

村の女甲　何だか山まで霞にでも醉つたやうに眠むた相に見えますわね。

淵明の妻、やはり洗濯ものを持つてそこへ來る。前の時よりは少しいゝ身なりをしてゐる。

妻　今日は。いゝ時候になりましたわね。

村の女甲（ふりかへつて）おやまあ。これはおめづらしい。

村の女乙　お内儀さん。貴女どうしてなさるかと思つてましたわ。しばらく圃の方へも顏をお見せにならないから。

妻（一緒に洗濯をはじめる）さうだつたでせうか。別に變つた事はなかつたのですけど。

村の者甲　もうそんなに野良へ出て働きなさる事もおあんなさらないでせうがね。

妻　まあ、どうしてそんな事あるもんですか。

村の女甲　だつてもう隨分お樂だらうぢやありませんか。旦那はあんな立派なお役についてなさるし。
村の女乙　ほんとにようござんすわね。
妻（顏を赧らめてしかしうれし相に）まあ、ちつともいゝ事はありませんわ。さみしくつて。
村の女甲　それはお淋しいでせうけど、だつてお樂しみですわ。お金はどんどんお取れんなるし、——まあ、なんて綺麗なお召しでせう。やつぱり都のですの。
村の女乙　ほんとにめづらしいきれいですわね。見た事もない。
　二人の女もの珍らしげに妻の洗濯ものを見る。
妻　えゝ去年の暮でしたかしら。でももうすつかりよごして了いましたわ。
村の女甲　ようござんすわね。旦那はいつ歸つてらつしやるんですの。
妻　さあ、いつですか分りませんわ。
村の女乙　しよつ中便りをお寄來しんなるんでせうね。
妻　さうでもありませんわ。始めの中こそ少しはまめに呉れますけど……やつぱり居て見れば都は面白いんでしよ
村の女甲　ほんとにお金があつて都で遊んでゐたらどんなにいゝでせうね。一度行つて見たうござんすわね。
村の女乙　だつて女ぢや仕方がありませんわ。いくら綺麗な女がゐたつて。（少し意地わるく笑ふ）
村の女甲　ほんとに男つてものは浮は氣なもんだから——でもおうちの旦那なんぞはお堅いんでしよ。
妻（苦笑す）どうですかしら。知りませんわ。でも主人は變つてるんで、此前の時も都の暮らしが面白くないからつて歸つて來たんですから。

村の女乙　やつぱりお自家が戀しくつてね。おや／＼アテられますわね。
村の女甲　はゝ。でもあたしだつたら一寸いやですわね。そんな事を思ふと、亭主を都へやるなんて……。いくらお金は取れたつて。取れば取れるほどどうせ碌な事はしないんだから。
　一人の男　釣り竿を持つて通りかゝる。
男　いくら貧乏してゞも田舎にゐる方が安心でいゝかい。
村の女甲　（見上げてにつこり會釋し）ほんとにさうだわ。
男　は、安心してろい。誰もおめえの亭主なんぞを都へ引つ張つてきアしねえから。
村の女乙　（笑ふ。）それもさうだね。
男　ほんとに田舎は安心だよ。お前みてえなすべたが多いからな。
村の女甲　にくらしい。おぼえといで。
男　（笑つてそこに腰をかける）だが田舎だつてまんさら馬鹿にや出來ねえ。淵明さん見てえな人もゐりや、あんた見てえな御婦人もゐる。ねえ、お内儀さん。
村の女乙　（いやしく笑つて）はゝゝ、お内儀さん氣をおつけなさいよ。この男は空巣狙いなんだから。左様なら。
男　妬くねえ。お前の處なんぞ空いたつて狙やアしねえよ。
村の女甲（歸り仕度して にくらし相に）何だい。その竿は。女を釣る竿かい。
男　釣つて貰いてえだらう。お生憎く樣。おめえなんぞは釣つてやらねえよ。
村の女乙　誰が釣つてもらふもんかい。このごろつき奴。（石をぶつけて逃げ去る）

男　さつさと歸れ。鬼瓦奴。はつは。だがお內儀さん、おら思ふに、淵明さんは又遠からず歸つて來なさるね。

妻　妾もそんな氣もするんですけど——。

男　いや、歸つてきなさるときつと案外早く。あの人のこつたからね。

妻　さうも思ふんですけど……そんな事何とも云つちや來ませんわ。

男　此前だつてだしぬけだつたぢやねえかね。あの先生、氣まぐれだからね。ひよつと思ひ立つと今日でも急に歸つて來なさらねえたア限りませんや。

妻　まさか。——でも妾そんな事思はない事にしてるんですの。（と云い乍らふと沖の方を見る。ハツとして何かに眼をとめる。が、又何でもないと思つたらしく眼を落とす）

男　一體どう考へても淵明さんはお役人さんて柄ぢやねえからね。

妻　ほんとにそれはさうですわ。變り者ですから。

第一場に出る農夫一出る。桶を擔いでゐる。

農夫一　（にこ〳〵して男へ會釋し）何か釣れたかね。

男　これから釣るだよ。どうもあんまりぽか〳〵するんでいゝ氣持ちんなつてつい眠つちまふだよ

農夫一　はゝゝ。まつたくこの陽氣ぢや働けねえや。陶さんの旦那でもゐりや又何とか云つて一杯やるところだが。（と云ひ乍らふと沖を見る。手を翳す）はあて。へんな舟が來るな。

男　（手を翳しそつちを見る）なるほどな。この邊の舟ぢやねえや。

妻もそつちを見る。

農夫一　沖にや風があると見えてえらく早く此方へ走つて來るぜ。あの見當ぢやどうしたつて此處へ着くだが。

男　何だか此前お役人さんが乘つて來た舟とそつくりおんなじやうだな。都の方から來たのかな。

妻　でも人が二人程しか乘つてゐませんわね。

農夫一　どうも妙だな。はあて、事によると、こりや……旦那ぢやねえかな。

妻、心の動揺を抑へかねて、まつ赤になる。上つて來てながめる。

男　さうかも知れねえよ。今もこゝでその事を云つてゐたんだが。——お内儀さん、ほんとにさうかも知れませんぜ。

妻　（わく〳〵し乍ら）だつてまだ分りやしませんわ。

農夫一　いや、さうですよ。ほうら、手を振つてますぜ。

男　さうだ〳〵。あの舳にゐるのがたしかに淵明さんだ。

妻　何處か、さうらしくもありますわね。

農夫一　いや、さうにちげえねえ。あの丸るい恰恰を見りや分りまさ。

妻　（にこ〳〵して）まあ、ほんとにさうらしいわね。

男　そうら御覽なさい。此方をむいて、起ちましたぜ。淵明さんだ！

農夫一　（呼ぶ）おゝい！（手を振る）

男　（高い處に上つて手を振る）おゝい！

かすかに「おゝい」と呼ぶ聲が聞こえる。

農夫一　ほしら返事をした。もうまがいもねえ、淵明さんだ。（桶の上に立つて）おゝい！

妻　まあ、ほんとにあの人の聲ですわ。どうしたつて事でせう。（喜びを包みきれず夢中になつて手を振る。布を振る）

唐子人形のやうな村の子供達多勢、右手の奥から走り出てくる。

子供一　ヤーイ。舟が來たーイ。舟が來たーイ。

子供二　ヤア小父さんが乘つてらア。小父さんだーい。

子供三　父さんだ！父さんだ！

子供三　父さんが歸つて來たーイ。父さんが歸つて來たーイ。

子供四　ばんざーい！ばんざーい！（皆手を上げて囃す）

男の子　（走つて來て）母さん。父さんが歸つて來たよ。父さんが歸つて來たよ！（抱きついてはしやぐ）

妻　ほんとにさうかい。ほんとにさうかい。

農夫と男とは急ぎ右手の方に行く

男の子　ほんとだとも。ほんとだとも。母さん、あれが見えないのかい。

妻　見えるよ。見えるよ。まあ、なんてうれしいだらうねえ。（興奮する）

子供達喜び興奮しておどる。

男の子　ほう、もう着いたよ。

妻　まあ、お待ちよ。（いそ〳〵とそつちへ行く）

再び「ばんざーい！」といふ聲と一緒に淵明の舟着く。淵明は舟から陸へ飛びたつて子供達を抱きしめる。妻とも抱き合ふ。そしてにこ〳〵した顔で小さい子供を抱つこしたまゝ此方へ來る。村の者達ワイ〳〵云つて後

をついて來る。

淵明　（役人のなりをしてゐる。子供を妻へ渡して喜し相に）なあに逃げて來たのさ。こつそりと。まともに願つたつて中々ゆるしちやくれないし、面倒だから、一昨日の晩一晩中考へて、翌朝暗い中に抜け出して來たのさ。

妻　（喜びにあふれて）まあ、そんな事なすつて、

淵明　東籬さんに置手紙をおいて來たから大丈夫だ。それでも何だか後を追つかけて來さうな氣がして少し怖はかつた。別に泥棒をして逃げて來たわけぢやないかなあ。（笑ふ）

皆笑ふ。

男　先生の事だからきつと又氣が變つてひよつこり歸つておいでなさるだらうなんてね。實は、今しがたも此處でお噂してた處なんですよ。

農夫一　それでもまあよく……

淵明　皆さん。變りはなかつたかい。村は。

農夫一　變りはありませんや。只冬が行つて又春が來た丈けでさ。はゝゝ。

淵明　ほんとに春が來たな。あゝ田舍はいゝ。わしはほんとに自家に歸つた氣がするよ。宮庭では皆がわしをおどろく程丁重に扱つて呉れるが、それはまるで金銀の細工の壺に鯉を放したやうなもんだ。野良育ちのわしには金銀の有り難さを知らないで唯壺の中の窮屈さ丈けが感じられるのだ。

農夫一　その壺の中にはさぞおいしい酒があふれてゐるのでせうがな。

淵明　さうさ。それを又何千と云ふ美人が代る〳〵掬んでくれるのだよ。はゝゝ。だがその夢のやうに浮いた歡樂の

後の淋しさ。まばゆい程華やかな夜な〱つゞき酒の後口の苦がさ。胸の空虚さ。思つてもぞつとする。

男　さうしてそのためにいろんないかめしげな偶像に頭を下げなければならないのでせう。

淵明　いや、それもまだいゝ。わしの金で持たない才能の持主に對してはわしはどんなものにでもそれ〲相當の禮を拂ふ事は別に苦痛でもない。だが自分を賣る事だけはな、我慢が出來ない。

妻　あの東胤さんのやうなお友達があつても。

淵明　あの人の寛大さ、どんな濁りの中にも身の清さを捺し失はないあの公明さには私も感服する。感謝する。だが、何と云つてもわしに無くてならないものは自然だ。自然と云ふものなしにはわしは陸へ上つた魚も同然全く息が吐けないのだよ。（起き上つて）あゝこの田園の香い。あの鶏の啼き聲。犬の吠へる聲。あの無細工な驢馬の聲。あの靉々とした遠くの家の煙り。なつかしい靜かな山々。水。雲。皆何と云ふ親しさだらう。金もいゝ。富貴もいゝ。だがこの樂しみ。この靜かな、大地の底から谷の清水のやうにじやく〱と湧き出てくるこの自然のよろこび。このしんみりと落ちついた力。あゝ何を之に代へる事が出來やう。

妻　あゝどうぞ貴方、田舍にゐて下さい。自家にゐて下さい。

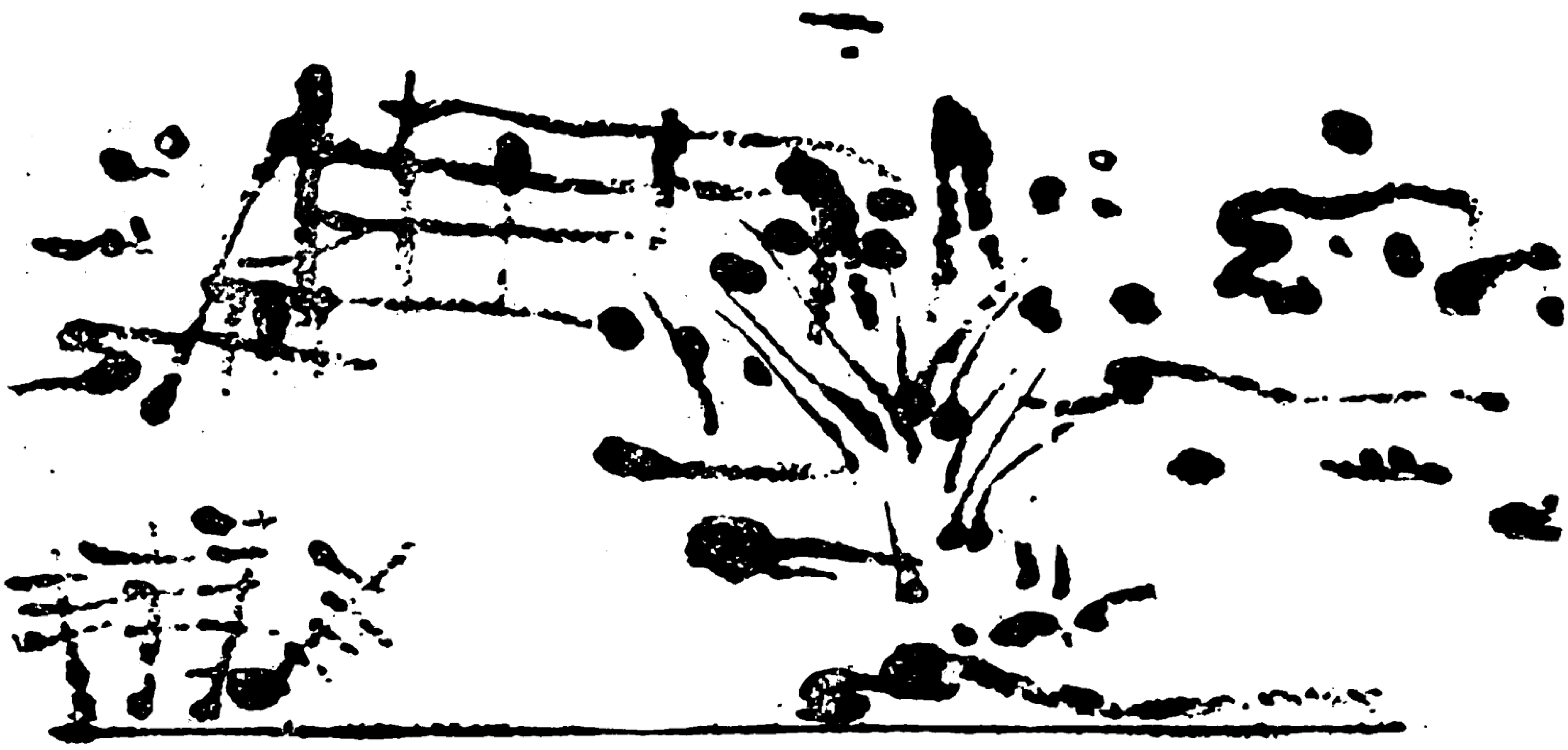
淵明　（笑つて）あゝなんでわしが又こゝを去らう。他の土地をあこがれやう。自然こそわしの墓だ。樂園だ。あゝ無一文の裸になつてももう再びわしはこの土から動く事はないぞ。

妻　あゝ、ゆるして下さい。あたしが馬鹿だつたのです。つい少し困るとこぼすまいと思つてゐる愚痴を色に出したのが貴方を行かせたのです。もう決して……

淵明　いや、馬鹿だつたと云へばわしがさ。だ自分を知りきらなかつたのが馬鹿だつたんだ。だがわしももう今度こそ

眼をさました。何もかも味を噛めて知り盡した上なのだ。もう何かわしを誘つても二度と捕はれるやうな事はない。
あゝなつかしい南山。君はます〳〵美しく見える。（禮をする）
農夫二　（笑つて）へ、そんなにいゝのですかね。こんなつまらねえ處が。
農夫一　ところで旦那、お土産は。
皆笑ふ
淵明　土産？（笑つて）それ丈けは忘れないさ。舟においてある。さあ、早く皆で行つて久しぶりに一つ皆の健康を祝さう。さうしてあの南山や、湖水や、馬や、鶏や、柳の健康をもね。
皆の賑やかな笑ひ聲の中に幕

——二五、一一——



劍舞

(AN IRONY――餘りに正直なる人々の爲に註す。)

久米正雄

「……どうです、其後は？　隨分暫らくお目にかゝらないね。えゝと、此前會つたのは何日だつたかしら。たしかヴアレンチノの假裝會があつた晩だつたから。もう彼是半年近くなるね。――ほんとに其後どうしたの。一人で銀座なんぞぶらついてゐる所を見ると、御同樣、さう面白い事も無ささうだが？――」

私は、ほんとに久しぶりで、彼女を銀座の双葉屋の店先で拾ふと、兎も角も一人散歩の氣紛らしが出來たと思つて、無理に喫茶店ホワイト・パーラーの階上に誘つた。そして取り敢へず熱いレモン茶を命じて置いて、そんな話を初めた。

「さう見えて？」

彼女、――唐津秀子は、眼の縁を隈取つてゐるのかと思ふ程、烏渡西洋臭く深い下瞼を、きりゝと張つて眼を大きく見せ乍ら、毎もの、叔父さんに甘へる調子で、さう反噬した。

「さう見えてつて、さうぢやないのかい。」

私は思はずゾンザイな調子で云つた。半淑女の、半女優の、半處女の、そしてことに依ると半娼婦(デミモンド)かも知れない彼女とは、私が内外活映の企畫部長をしてゐる時代から、半ば友達として知り合になつてゐるのだが、別にこれぞと云ふ特別な關係もなしに、そんなゾンザイな言葉を半ば混ぜて使ふ程、親しくはなつてゐた。向うでも恐らくは自分を、半叔父の、半友達の、半活動會社の人として、確に半ばは利用する積りで、つき合つて來たに違ひない。出鱈目な話をする相手として、時には惚氣を、時には愚痴を、時には財政的の窮狀を訴へるに、私と云ふ人間は、硬軟非常に重寶に出來てゐるらしかつたから。……

「さうね。」彼女は澄まして、眞つ白に寒々と塗つた、此の部屋の天井の隅を、わざと眼を瞬いて仰ぎ乍ら、「さう云へば銀座を一人で歩いてる人は、とても淋しい一人ぼつちの人か、でなけれやア非常に幸福な人ね。」

「ぢやア憚り乍ら唐津秀子孃は、その後者に屬するつて譯なんだね。さう云へばどうりで、其後、研劇協會の此間の公演にも出てなかつたやうだし、何處でも見かけないと思つた。尤も此頃は方々の舞踏會が無いんで、會ふ機會は尠くなつた譯だけれど。——あれやア嘸君たちに取つては打擊だらう。あのダンス場閉止は。飛んでもない劍舞なんぞ演られて、僕らはいゝ氣味だと思つてゐるが、どうだつたい、君はあの場に居合せやしなかつたかい。」

「えゝ、居たわね。大居だつたわね。——」

彼女はさう云つて、生々と紅で彩つた頬の眞ん中を凹ます位に、にツと意味ありげに微笑んで見せた。

「どうだい、少しは吃驚して、改心したかい。」

「改心したわね、とても。したのしないのつて段ぢやない位よ。あれ以來ふつつりダンス場通ひなんか、私、しなくな

つたわ。」と、彼女は益々笑顔を深めて、いたずら好きらしく喘む聲を落し乍ら、甘く囁くやうに云つた。「だつて、あのおかげで、私、ダンスなんぞより、もつと嬉しい事があるやうになつちまつたんですもの。」

「へゝえ、どうして？」

……唐津秀子が、その晩、手提げ袋の古びが氣になつたので、田屋と關口と資生堂と、先づ所謂其處らで代表的な、——と思ひ込んでゐる唐物屋を、三軒が三軒とも冷かして、結局自分の財力と比較して、氣に入つたものが無かつたため、そのまゝ山下町の方へ歩いて、ホテルの一人づゝ入る廻轉ドアを押したのは、もう九時近かつた。

どうせホテルの定食を、今更畏まつて食ふのも氣が効かないし、彼處で飲めるのは珈琲だけだなぞと、毎も半可通を云つてゐるが、其癖矢つ張り金がかゝるのが、一番苦手らしい上條と、八時半頃、食事が濟んで舞踏の初まる少し前に、玄關の廣間の隅で落合ふ約束をしてあるのだが、少し遅れたかなと思つた。そして其處らに屯してゐる西洋人たちよりは、所々に立つてゐる日本人に、鳥渡壓迫を感じ乍ら、毎もの通り虚勢を張つて、裾捌き輕く二段の階段を駈け上ると、憶面なく廣間の方々を見廻した。が、何處にも上條は居ないらしかつた。

そして、却つて左手の一番大きな喫煙椅子に、田中や杉村や淺川なぞと言ふ、富豪の息子たちの仲間が、例に依つて吉川久美子や、橋田夫人なぞと一緒に、舞踏場の開くのを待つてゐた。秀子はそれにも、近づきたいが近寄れないやうな、一種の壓迫と憧憬とを感じた。そして誰にともなく、輕く濟まして默禮すると、其處を通りぬけて、成るべく廊下

に近い方の、空いてゐる椅子を求めようとした。彼らは彼ら同志の話を平氣で續け乍ら、其中の一人だけが、只ひよいと首を窄めるやうな默禮を、彼女に返したきりだつた。何だか滿たされない思ひで、彼女は彼らを背ろ向きに、暗い中に灯を受けて、噴水のしよぼ〳〵上つてゐる、植村園みたいな中庭を眺めてゐた。

何だ、あんな奴等！　と彼女は心の中で、虛勢を張つて舌打をした。どうせ仲間に入れて吳れなくたつて、此方は此方で關やしない。それやア彼女の相手(パトナア)である上條たちだつて、富豪や華族の息子ではないかも知れないが、もとは相當な實業家の息子で、片手間の道樂仕事に、フイルムや器械のブローカーなぞこそしてゐるが、洋行もして來た一本立ちの紳士だ。其上踊りにかけては、定評がある位上手い。彼さへ居て吳れゝば、何でもないのだ。……

が、併しさう思ふと共に、彼女は又上條が、物質的にも精神的にも、餘りよくして吳れないのを思ひ出した。彼の友達たちに聞くと、氣を付けろよ、赤坂の方に何か出來たらしいぞ、そして其奴に踊りを仕込んでゐるつて話だぞ。なぞと惡戲半分彼女は警告されてゐた。が、彼女の方でも、それならそれで又よかつた。どうせ、もとをたゞせば踊りが上手いから、出來て了つた仲なんだし、今では少し倦きも來てゐた。何かもつと賴りのある、機會よくば玉の輿めいたものに乘れさうな、若いお金持の青年紳士か何かと、新らしい仲になつて見たい。……ふと其處迄考へると、彼女は、背後の少し遠くにゐる、彼等の一團から、ふと嘲笑されてゐる樣に感じた。

さう思ふと、勿論禮を失はない程度だが、聲を立てゝ彼らは談笑してゐる。自分の事を何か云つてるんではなからうか。――彼女は鳥渡睨み返してやる積りで、その方を眞面に向いて見た。別に彼らは、しよんぼり人待ち顏に、柱廊の近くに立つてゐる彼女を、指笑してゐる樣子はなかつた。たゞ向うの此方から眞向(まむか)の低い椅子に、小原と云ふ青年紳士が、廣い肩と小太りのした身體を、ぐつたり埋めるやうにし乍ら、話を聞き〳〵此方を眺めてゐた。それも注意してゞ

はなく、見るともなしにと云つた風で。――彼女にその少壯紳士とは、前に一兩度紹介されて、踊つた事があつた。踊りはさう大して巧い方でなく、此方が却つて氣の毒な位、後生大切なおとなしい踊り手で、方向轉換のサインなぞは、ぐつと固く捻ぢ曲げられる程固いけれど、體格が堂々としてゐるので、引ッ攫はれて行くやうな感じが、好感を與へたのを憶えてゐる。――彼は、可なり大きな實業家の息子だが、もう部屋住でなく、後を嗣いで堂々とやつてゐた。其上、獨身で、――尤も何處とかの花柳界に、馴妓があつて同棲同樣にしてゐるのだが、親族たちが其結婚を許さないのだ、とか云ふ話も聞いたが、――金も身體もあの中では、地位こそ低いが一番きくらしい。それに何よりもあの立派な身體が、廣い肩が。……あれをあのだらしのない橋田夫人や、猿のやうにほそ〳〵と紅く顏を彩つた吉川男爵の娘なぞに、任せて置くのは癪に支る。……ふいと彼女はそんな事を、不良な胸で上下すると、自分で自分をフンと苦笑した。そして少し自分を情けないやうな、腹立たしいやうな風に感じた。

が、さればと云つて向うが相手にして吳れないのなら、此方からも相手にはしてやらないばかりだ。……それにしても上條はほんとにどうしたのだらう、彼が來ないばかりに、自分はこんな事を考へなければならないのだ。……

もう九時は目睫の間に迫つて、食堂は片づけ初められてゐた、舞踏はもう直ぐ始まるだらう。波多野バンドの連中が、忍び音に調子を合せるのが、階上のオーケストラ席から聞えて來るやうだ。

人々は、西洋人も日本人も、立つべき人は立ち上つて、みんな舞踏場の方へ行き初めた。

彼ら御曹子の一團も、同じやうにやをら立ち上つた。そして襟やチョッキの裾を直し〳〵、何かまだ面白さうに談し續け乍ら、吾が物顏にゆつくり〳〵舞踏場の方へ歩いて行つた。

舞踏の初まるのを待つてゐる人は止宿客の西洋人以外に、今夜も可なり多かつた。何處にゐたのか氣が付かなかつた

が、浦田の春野るり子が、毎もの踊り場の連中と一緒に、和服で來てゐた。秀子は其の仲間の方へ進んで行つて、一緒に舞踏場へ入らうかと思つたが、何だか拗ねたやうな心持が、一人で彼女を其處にぢつと止まらした。まア兎も角、上條の來る迄待たう。一人で割り込んで行くのも、あんまり情け無さ過ぎる。……彼女はさう思つて待つた。

が、上條はまだ來なかつた。

其中に、とう／＼九時になつた。そして舞踏場では、バンドが待つてゐたやうに、第一の曲を奏し初めた。輕燥なツンステップだ。彼女はそれを聞くと、もう待つのが堪えられない氣がした。もう玄關を上つた廣場には、何か用談でもしてゐるらしい外人や、野暮な日本人が二三人ゐるきりで、みんな階上の舞踏場に上つて了つた。彼女はつか／＼と、玄關の口のところまで行つて、外の闇を透し乍ら、彼が來さうか否かを確めたが、徒らに向うの遠い步道を、自動車が前燈の光をさつと奔らして、眞つ直に通過するのみなので、業を煮やした氣持の中に、くるりと踵を返すと、ぽく／＼する敷絨氈を踏みしめて、さつさと舞踏場へ行く事にした。ひよつとすると、もう何處からか、上條は其方へ行つてやしないかとも思はれた。

階上へ上つて見ると、今は一同のアンコールが初まつて、人々は既に汗ばみ初め乍ら、薄暗く感ぜられる間接照明の中を、足早にステップしてゐた。先づ最初のウオーム・アップ。人々はさうした氣分で、潑剌と且つぎごちなげに、直線的に右往左往してゐた。

秀子は立つたまゝ、椅子席を見渡した。其處には、踊るべき人は皆踊りに出て、四分の一位の人數しか殘つてゐなかつた。夕飯を食ひに來て、見物して歸る日本人の一家族、男ばかりの西洋人連れ、――それらは見物するよりも、たゞさうした空氣の傍で、無駄話をお互に享樂すると云つた風の、――さう云ふ人々しか居なかつた。そして勿論上條の姿は、

どの隅の椅子にも見付からなかつた。

却つて、彼女の眼は、不思議な日本人の一團の上に、何氣なく吸ひ寄せられた。それは五六人の、和服を來た壯士風の人達で、中には黑紋付を着てゐるのが、三四人肩を怒らしてゐた。そして二人ほど、どう云ふ譯か小さな子供が交つてゐた。彼女はそれを見た瞬間、ふいに場所錯誤と、何とはなしに氣の毒なやうな感じを覺へた。見物に來てゐるのかどうか知らんが、嘸自分たちを顧みると、ぎごちないだらうと思つた。其中の一人が、ホテルの副支配人を捉へて、隅の方で何か頻りに話してゐた。恐らくは彼らは、今日政治家の會か何かゞ宴會場の方にでもあつて、そのなぐれに、見物に來て說明を求めてゐるのだらう。——さう思つて、彼女はそれつきり、わざと氣にも止めなかつた。そしてそれよりも何より、自分が淋しい思ひと、上條の違約を怒る思ひで、胸を一ぱいにし乍ら、一隅の、空いてゐさうな椅子へ、腰を下した。

輕噪なワンステツプは、もう止せばいゝのに、三度目のアンコールをされて、續けられてゐた。秀子はムヅ〱するやうな思ひと、腹立だしさでそれを眺めた。和服の、だらりとした乍らに、裾捌きの妙に色つぽい橋川夫人が、身をくねらせ乍ら、同じ位の背の高さの杉村に引き寄せられつゝ一巡して群の中へ吸ひ込まれた。吉川久美子孃が、さツさツと先廻りをするやうに、厭が上にも輕く見せようとして、身を翻し去つた。春野るり子が、ワルツのやうにぐるり〱と廻されて、眞ん中あたりを泳いでゐた……

「……今日は一人？」

ふと秀子は、耳許でさう言ふ、鼻にかゝつた親しげな聲を聞いた。そしてハツとして振り返つて見ると、其處に小原が、大きい上半身をのしかゝるやうにして、笑顏を覗き込ませてゐた。若い癖に、やゝ頰のあかりに贅肉めいたものが

出來かゝつて見える程、福々と鷹揚に微笑し乍ら。

彼女はハッと思つて、やゝ警戒的な感情を浮べたが、其他意ない笑顏を見ると、直ぐ一種の媚笑を以て、それに酬ゐずには居られなかつた。

「えゝまだ。」彼女は笑つて答へた。「上條さんと約束したんですけれど、まだ來ないのよ。」

「さう？」小原は身を反らせて、秀子の視線を追ふやうに階段の上り口を見やつたが「それはお氣の毒ですね。だが、たまにはいゝだらう。待つ身になつて見たつて。」

「でも、本當に失禮だわ。人を一人で寄越して置いて。――」

彼女はわざとぷり〳〵して見せた。

「まア〳〵、さう云ふ中に來ますよ。」と、小原は急に悪戯らしい笑を、寧ろ近くで見ると童顔とも見える顏に浮べて、そして意地悪く續けた。「尤も、上條君も此頃はなか〳〵忙しさうだから、どうだか分りませんがね。」

「そんな事、私だつて知つてますわ。でも私上條さんと別に何でもないんですもの。そんな事は關ひやしませんけれど、此處の約束は約束ですもの。――私もう、來たつて踊つてやるまいかと思つてるのよ。」

彼女は眼だけ笑はして、冗談らしくさう云つた。

「おや〳〵。それやア大變御立腹ですね。ぢやアどうです。上條君が見える迄、兎も角もツナギに、僕と踊つて頂けませんか。此次に。――尤も其間に上條君が來たら、僕はよすとして。」

「えゝ、よござんすわ。御一緒に踊りませう。上條が來たつて。――」

彼女は少し媚ぶつた聲音で、さう見上げ乍ら答へた。

「さうですか。ぢやア兎に角、此次のをお願ひします。」

さう云ふと彼は取つてつけたやうに、慇懃に御辭儀をして、向うの自分たちの卓子へ去つた。第一回のワン・ステップを、踊らないのは仲間で彼一人らしかつた。彼も恐らく正式の相手を持たないのだらう。

その中に、ワン・ステップは濟んで、人々はぞろ〳〵と卓子や、椅子の方へ戻つた。短い休らひだ。其間も秀子は今上條が來はしまいかと、時々階段の方を顧みては待つた。來て吳れゝばいゝ、そしたら小原と約束があるからと云つて、踊つてやるから、そんなことを彼女は考へ、そして必然に、瘠せぎすで髮のちよつぴりした、どうしても背伸びをして上流紳士の、仲間入りをしてゐるとしか思へぬ上條と、堂々と若くして重役風を備へた、憎げのない坊ちやん風の、しかも西洋人じみてさへ見へる位立派な、血色のいゝ小原とを、無意識に對照させてゐた。が、併し小原と彼女とは何だ。それこそ全く一時の、一回きりの相手ではないか。……

その中に、樂手たちは立ち上つた、第二回のフォックス・トロットは、先づ弱い調子で彈き初められた。

秀子はもう一度、階段を振り返つた。上條の姿はまだ現れさうもなかつた。それもいゝ、さう思つて彼女は、向うの小原たちの居る席を見やつた。小原が、素早く立ち上つて、笑顏で肯き乍ら、此方へ誘ひに來るのが見えた。彼女は立上らずに、彼の近づくのを待つてゐた。

彼は眞つ直に來て、そして叮嚀に御辭儀をして云つた。

「ぢやアお願ひします。――まだおいでにならないやうですね。」

「來たつてお約束ですわ。」

彼女もその眼を見合せ乍ら、立上らうとした。

其途端だつた。妙に舞踏場の足音が、亂れ止つたと思ふと、

「……諸君！」

と大聲を張り上げたものがあつた。見ると、先刻目についた、卓子の端に居た一團の、一人と覺しい男が、舞踏床の中央に立つて、さう押し止めるやうに叫んだのだつた。彼は兩手を伸ばして、演說するやうに云つた。

「滿場の諸君、暫らくお待ちなさい。」

三組四組、既に踊り出した仲間は、ぴたりと足をとゞめて、其場も去り得ず、怪訝さうに其男を眺めた。バンドも、何事が起つたかと思つたらしく、各々ぴたりと手や口を休めた。人々の中には、ツト立上るものもあつた。

「諸君は、吾が國步艱難の時に當つて、かくも輕佻浮薄に、相擁し相抱いてダンスに耽つてゐるが、それは吾が日本に、日本固有の踊りのある事を、まだ知らないからであらう。今、吾輩は此處にそれを紹介する。――さア、初めい！」

其の壯士は一喝するやうにさう命じた。

と、何時の間にか用意した、黑紋付に角刈りの頭へ、白い鉢卷を凛と結んだ一人の男が、刀を挿し乍ら進み出て來た。

忽ち、すつくと立つた彼らの卓子の一團から、一人の吟聲が起つた。

『孤軍奮闘、圍みを破つて還る。……』

「……エイツ！」男は白刃を、薄暗く籠つて、八方から蔭に集る間接照明の中で、ぎらりと拔いた。それは妙な亂反射で、銀蛇のやうに閃めいた。前方の卓子にゐた西洋婦人が、其途端に妙な叫び聲を上げた。

『一百里程壘壁の間、

吾劍既に折れ、吾馬倒る、
秋風屍を埋む故郷の山。……」

男は曲の進むにつれて、彼は縱橫無盡にそれを打振り、床の上を馳驅した。もう其處には、踊りに出た人も、すごすご隅の方へ引込んで、それでも席へは收まれない氣持で、まだ立つて見てゐた。と、彼らは遠慮なく、卓子の方まで近寄つて來ては、其處にゐる西洋人の鼻の先に、白刃をさつと空を切らした。併し彼らも勢ひに吞まれて、もう聲を立てるものも無かつた。

劍舞は、息詰まるやうな緊張裡に、一つ濟んだ。向うの端の方に、三人ばかり居た男ばかりの西洋人の一人が、終るとパチ〳〵手を拍つた。それが脈に取つてつけたやうで、白けた恐怖めく沈默を誘つた。

「さア、もう一つ。——鞭聲肅々！」

今度は二人の少年が、袴立ち甲斐々しく、進み出て來た。が、何となく漲つて來た殺氣に、人々は觀るのをやめて、妙にザワツき出した。女連れの西洋人たちは、そろ〳〵逃げるやうに、席を立ち初めた。ボイたちが、四方からどやどやと驅けつけて來たが、どうする事も出來なかつた。

その一團は、其中で平氣に、朗々と詩を吟じ、劍を振つて縱橫に跳躍した。

副支配人が、その首領らしい男に近寄つて、何か云ふのが見えた。が、彼は頭を振つて、何事か閙く抗辯して聞かなかつた。

「やれ〳〵！」「いやツ！」

さう云ふ懸聲が、却つて其一團の、別な連中から發せられた。彼らの眞意は、もう瞭然とした、

副支配人が、さすがに青い顏をして英語で何かを宣告した。舞踏を此處で閉ぢると云ふのらしい。

秀子は、立上つたまゝ棒立ちになつて、いつの間にかひたと小原に凭り添つてゐた。初めは、鳥渡餘興的で、直ぐ鎭まるだらうと思つたのが、妙に殺氣立つて來たので、彼女は恐怖に顫へ初めた。そして何か事があつたら、小原の陰に隱れようと、其方へ寄つて行つたのだ。

副支配人は今度は日本語で云つた。

「甚だ遺憾ですが、都合に依りまして、今日は是でボールを中止します。皆さんもどうぞ直ぐお引取り下さいますやうに。萬一間違ひでもあると困りますから。」

さすがに狼狽してゐ乍らに、その語調は責任を帶びた人の冷靜を失つてゐなかつた。

この言葉に、二人は思はず顏を見合せた。秀子の顏はすつかり蒼ざめてゐたが、小原は、さすがに血色は變へずに、たゞ不快げな唇をぎゆつと結んでゐた。

「あら、どうしませう。」秀子は少しおろ〳〵聲で云つた。「私一人で。——迚も歸れやしませんわ。」

「兎に角仕方がない。向うへ行きませう。御差支がなかつたら、僕が自動車でお送りしますから……」

さういふ小原の鼻にかゝつた聲も、其の時ばかりは、如何に騎士的に秀子には響いたことか！……

朗々たる。併し心做しやかにてれ氣味な詩吟の聲は、まだ續いてゐた。

『本能寺溝の深さは幾尺なるぞ、

吾が大事を爲す今夕にあり、

糭粽手に在り篠を交へて食ふ、

四疊の梅雨天墨の如し……』

「……ふうむ。さうかい。」私はやゝ呆れて、椅子の背へのけ反り乍ら、彼女の顏を見凝めて、微苦笑を禁じ得なかつた。

「それで君は、其儘無事で君の家へ送り屆けられたと云ふのかい。」

「えゝ、まアさうなの。」彼女はわざと厚顏に、かう答へ續けた。「で、それからと云ふもの、私はあの時、劍舞をして下さつた國化社とかの方へは、足を向けて寢ないことにきめたわ。尤も何處にその本部があるんだか知らないけれど――」

「馬鹿。呆れた奴等だな。君たちにかゝつちやア、迚もどんな猛者でも敵はないんだな。イヤイヤほんとに呆れた奴等だ。打ち殺しでもするより、外に仕方がありやしない。」

「殺されたつて、化けて出るわよウ……」

かう云つて彼女は、呆れてゐる私の前で、黑も赤も白も鼠も猫を食へと云はんばかりに、見事に唇を尖らして見せたのである。

(大正十四年十二月)



十二月八日

廣津和郎

十二月八日。

『自分もこれは、結局創作上のスランプに陷つたといふところかな』

十一月の半ばから、毎夜毎夜徹夜して、たうとう今日になつても、一行の文章も書くことの出來ない自分は、その夜もいつか明けて、窓の捲き上げカアテンに朝日が當り始めた時、大きく溜息をしてから呟いた。この捲き上げカアテンは自分が最も好まない茶褐の色をしてゐる。それがために其の茶褐のカアテンに日が當ると、部屋の中は、昔の石油ランプ時代を思はせるやうな、赤黃ろい光となる。――赤黃ろい光といふ奴は、疲れた眼には一番いけない。自分はそのカアテンを沈んだ綠色に全部變へようと始終思ひながら、やつぱり下宿住ひのかりそめの宿と思ふせるか、それだけの努力をも惜しみ勝になつてゐる。

先日或雜誌の『本年の自作について』といふ題の下に、澤山の創作家達が、めいめい思ひ思ひの回答を寄せてゐるのを拾ひ讀みした時、或溫厚な小說家が、『今年は

創作上のスランプに陷つて』云々と云つてゐたのを自分は讀んだ。創作上のスランプ、創作上のスランプ――野球好きな自分は、强打者達が、或時期が來ると、どうしても打てなくなる場合がある、さういふ時期を打者がスランプにかかつてゐるとか陷つてゐるとか云ふのを、知つてゐた。恐らくその小說家も、野球好きだから、野球上のテクニツクから思ひついて、『創作上のスランプ』と云つたに違ひない。――で、自分は早稻田の誰々がスランプに陷つてゐるとか、明治の誰々がスランプに陷つてゐるとか始終云つてゐたものだが、併し實際はスランプといふ字の明確な意味を調べてはゐなかつた。そこで、その小說家の囘答を讀むと、不圖その言葉の意味をはつきりして置きたくなつた。

自分は手許にあつた簡單な英和辭典を引いて見た。

(1)沼池、おちこみ、(2)ばちやんぼこん（落ちる音）(3)暴落、がら落ち（株などの）

などと出て來た。沼池からおちこみとなつて、ばちやんぼこんとなつて、暴落になつてがら落ちとなる。……爆笑させる。この外に、野球の打者の打てない時期に陷つた事を云ふといふやうな意味は、或は亞米利加あたりの新しい辭書には出てゐるかも知れない。打擊力のがら落ち、創作力のがら落ち、株の用語から轉嫁して來たのも面白い。……今後、新しい英和辭典の編纂者には、創作家が創作を書けない時期に陷つた事をも云ふといふ意味を、このスランプの項に附加へて貰はうか。

が、それはそれとして、或場合には、或氣持を表すに適當な一つの言葉が見つかると、その言葉が一層その氣持をはつきりさせてしまふものだ。その言葉が見つかる前には、未だ混沌としてゐて、どうやらそれ以外の氣持の方へも、動けば動けない事がないやうに思はれたやうな、一つのくるくると渦卷いてゐた氣持が、それに一つの名がつくと、今度ははつきりとその名の通りになつてしまつて、てこでも動かない程その氣持が結晶する。――『創作上のスランプ』

から云ひ切ると、單に『どうも近頃は頭が惡くつて』とか、『どうも筆が動かなくつて』とかいふやうな漠然としたものではなくなつて來る。『創作上のスランプ』——ピチンとなる。心にピンとはつきり響いて來る。それぢや書けないのも無理もない、といふ氣になつて來る。

自分は辭書を引かない方が自分の心持の上には好かつたのかも知れない。それよりも、あの溫厚な小說家が『創作上のスランプ』などと云ふ言葉を使つてくれなければ好かつたのに、といふやうな事を、てこでも動かない自分の頭を持扱つてゐる場合、つい呟かずにゐられないと云つても誇張ではない。——毎夜毎夜徹夜して、そして書けなくて、どうとも仕方がなくて、みじめた、じりじりした氣持になつて、夜が明けて、それから自分が大きく溜息をして、結極呟くのは、最初に書いた一つの言葉だつた。

『自分もこれは、結局創作上のスランプに陷つたといふところかな』

*

その晩、自分はYの處女創作集出版祝賀會に行つた。かういふ會合は一時はやつて、中頃少し下火になつて、近頃は又盛んにはやり出した傾向がある。自分は大體澤山の人々の會合を好まない。それだから、そんなに度々はかうした會合に出かけない。一年に一度ぐらゐは、ひよつとした氣持で、出席して見たくなる。

それでこのYの出版祝賀會に出席したといふ事は、その一年に一度ぐらゐの自分のひよつとした氣持によるとも云へるのだが、それと共に、Yだから出席しようといふ氣になつたといふ理由もあるのである。何故かといふと、Yの文學的努力は隨分長い間だつた。自分も創作によつて飯を食ふやうになつてからもう十年近い日が經つが、Yは自分よりも

先輩だと云つても好かつた。唯Yは新聞記者をやつてゐて、その間——十五年位の間に、ぼつりぼつりと書いてゐたものが、丁度一冊の短篇集となつたわけなのである。Yの小說は今まで自分が讀んだところでは、小說に渾身になつてゐない人間の、深入りしてゐない憾みはあつても、その明るい、異常に正直なユーモアは、かなり稀らしいものであつた。が、そんなYの小說の批評などを書いてゐるのが、自分のこの文章の目的ではない。自分はYの小說の中に『駈出し作家』といふのがあつたのを讀んだ記憶がある。それは彼の七八年前に書いたもので、その小說の中で、『駈出し作家』たる主人公が、その當時の新進作家を摑まへて、『自分には文學といふものが未だ解らない』と云つて訴へるところがある。するとその新進作家はそれに對して不得要領な返事をしてゐたが、それを『駈出し作家』は、『あの男だつて、解つたやうな顏をしてゐるが、實は、ちつとも文學が解つてゐやしないんだらう』と考へる。——自分はそこが、今でも記憶に殘つてゐる。そしてそれが記憶に殘つてゐるのも無理ではない。その駈出し作家はY自身で、新進作家は、この自分をモデルにしたものだつたからである。

自分はその當時それを讀んで苦笑した。なるほど、文學、文學と、毎日それにばかり首を突つ込んでゐるつもりでゐながら、さて、考へて見ると、文學といふものが、確に解つてはゐない。それはその當時でも、今でもさうだ。『文學が解つてゐるか』と云はれたら、今だつて解つてゐるなどとは答へられない。だが、これは『人生』と同じ事で、『お前には人生が解つてゐるか』と眞向から聞かれたら、誰だつて一寸どぎまぎするものなのかも知れない。解つてゐるやうで解らなくて、解らないやうで解つてゐるものなのかも知れない。

兎に角、Yのその祝賀會は、自分に取つては昔の、いはゆる青春時代を思はせてくれたりする、一種なつかしいものでもあつた。そこに自分の一年に一度のひよつとした氣持が手傳ひ、それに又二進も三進も行かない所謂『創作上のス

ランプ』の氣分轉換の希望も手傳ひして、それで出かけて行つて見る氣になつたのである。

自分のゐる下宿から程遠からぬ本郷のE軒。型のやうな洋食。集まつたもの、七八十人。――こんな會でもなければ、會ふ事のない人々に會ふといふ事も惡いものではない。自分は自分の比較的親しい友人達と並んで、フォークを取つた。作家からアナァキズムの方へ這入つて行つて、今はさうした運動の方により深入りしようとしてゐる、快活なEに會つたのも久しぶりだつた。青ざめて、瘦せつぼちで、ひよろひよろして、神經でばかり生きてゐたやうなEが、丈夫になつて、肥つて、生々した顏をして、にこやかな顏付になつてゐるのも稀らしかつた。――彼は二三年前から、暇さへあると那須の溫泉に行つてゐた。彼は那須の溫泉の効能をしきりに說いてゐた。

扨てデザトコースに這入つて、型の通り五六人の人間が、かはり番こに立上つて、この祝賀會の挨拶をしたが、自分はいろいろな人間の當らず障らずの、さうした挨拶をゆるやかな氣持で聞いたり、菓物の皮を剝いたりしてゐた。

その時、國家社會主義者のTが立つた。瘦せて黑緣だつたか何だつたか忘れたが眼鏡をかけて、黑い背廣の肩を隼のやうに張つて、短い口髭のある唇を少し突き出すやうにして、元氣のある聲で、

『僕はY君と親交のあるわけではない。それに僕はかうした會には滅多に出席する事はない。然るに、今度案內を受けて、出席して見たいと思つたのは、Y君の小說に感心したわけでも何でもない。唯、この會の發起人――發起人と稱する顏觸がズラリと六十何人並んでゐたのは興味を感じたからだ。ところが來て見ると、この通り澤山の人間が並んでゐるが、誰が誰だか一向解らない。一つみんなで土俵入でもして、名乘り上を上げて貰ひたい。今後惡口を書くのにも、顏を覺えてゐると、便利だから……』

そんな事を云つて、腰を下ろした。自分は頰笑んだ。このTは三四年前、改造社主催の賀川豐彦歡迎會の時、パッリ

スタの三階で、小說家のMと机を叩いて議論をしてゐたことがあつた。議論がどんな議論だつたのか自分は知らないが、その時も痩せた肩を隼のやうに張つて、唇を突き出して、黒縁の眼鏡の下からぎろりとした眼を光らして、びしびしと相手に突つ込んで行つた。――して見るとTはいつでもこんな風な物の云ひ方をして生きてゐるのかも知れない。毎日毎日あんな風に元氣の好い物の云ひ方で生きてゐるのかも知れない。江戸ツ子――乃至は關東人だなと自分は考へた。性質といふものは面白いもので、かうした多數の人間が集まつてゐる中でも、ああ云ふものの云ひ方をするのは、やつぱり彼の外にはないらしい。

すると次に、日本共産黨の大立物Sが立つた。Sは童顔のままに、もういつの間にかかなりの老人になつてゐた。短く刈つた髮も薄くなつて、赤い肌が透けて見えるやうな感じがした。丈の低い、がつしりした彼は、頑健そのもののやうな感じで、顔も頭も圓い――つまり血色の好い圓い丸が、がつしりした背廣の胸の上に生えてゐるやうな氣がした。

自分は或雜誌に最近Sが書いた短文を愛讀した。それは『明後日のユウトピア』と云ふ雜誌社の課題の下に彼が書いたもので、近く彼は共産黨事件のために入獄する事になつてゐるので、その入獄生活をユウトピアと假定してユウモラスな感想やら注文やらを述べたものだつた。自分はこの老人が、これから寒くならうとする冬に、禁固されるといふ事は、隨分氣の毒な事だと考へた。

そんな事を考へながら、自分は立上つたSの顔を、Sから十四五人離れたテーブルに腰かけて見てゐた。

ところが、Sの言葉を聞いてゐる中に、自分は不愉快になつて來た。

Sはかうした人々の前で喋るのに馴れた、餘裕のある口調で、少年時代のYの事から說き出して、今度の創作集出版の事に及んで來たが、最早壯年に近からうとしてゐるYの收穫として、こんな創作集の一つ位、名譽でも何でもない。

と云ふやうな事を云つた時は未だ好かつた。いや、好かつたばかりではない。お座なりの祝辭を述べた連中の多い中に、かうした事を無遠慮に云つてのけたといふ事は、悪い感じではなかつた。それからSの立場として、Yが創作なんていふものを後生大事に考へるのが面白くない、それだから文壇なんか見下してしまつて、もつと大きな高い事を考へて欲しいと云ふ意味の事を云つたのも、無理はなく感ぜられた。——だが、云つてゐる事は、Sの立場として、而もYが社會運動にも多少心の動いてゐる男であるだけ、そんな風に注文するのは無理もないが、Sの云つてゐる言葉の裏には、そこに集まつてゐる文學者連中に對する、何か意地の悪い、相手の感情を害さうとする語氣が感ぜられた。

『文壇なんかに志望を持つなどといふ下らない——いや、これは云ひ過ぎたから取消しますが』Sは自分の云ひ過ぎを感じたのか、それとも、彼の言葉の味を逆光的に強く響かせようとしたのか、こんな事も云つた。

自分は五六年前、友人Mの創作集の出版記念會に、Sのテーブルスピーチを求めた事があつた。その時もSは所謂『文壇』といふものを見下げ果てたやうな事を云つた。そんな事を思ひ出して、Sがいつになつても、重箱の隅を突つつくやうな物の云ひ方を止めない若さ——何か一人物として成熟し切らないといふ意味の——に驚嘆した。

文壇——かういふ言葉は、我々文學に携はつてゐる人間にでも、時とするとひどくとぼけた、滑稽なものに思はれる事がある。文壇人といふ言葉はイヤな言葉だ。だが、さて考へて見ると、文壇なんていふものは、實際には我々にだつてよくは解りはしない。正體の掴みどころのないものだ。君は文壇人だよと云はれると、へえ、そんなものかねえ、と云つて見たくなる。誰だつてそんな事を考へてゐて、『へえ、自分が文壇人といふものかね、もつと他にあるんぢやないか』と云ひたいやうな連中の集まりで、文壇が出來上つてゐるのかも知れない。これも、例の言葉が出來てから、一層はつきりしたもので、文壇などといふ言葉がなければ、もう少し掴みどころのないもので濟むのかも知れない。

が、Sが文壇――といふ意味には、居並ぶ文學者達を眞直ぐに指して云つてゐるといふ事が明瞭である今、Sの言葉が自分に愉快を與へよう筈はない。――まあ、Sさん、そんなに始終敵役見たやうな顏をし給ふな。文壇といふものは、君なんかにこそはつきりした形に見えるもので、我々には實はよく正體が掴めないんだ。遠くの方から見るとはつきりした形のある雲に見えて、その中に這入ると、唯朦朧としたものなのかも知れないが。――だがそれよりも、脈味に聞えるやうなものの云ひ方が、何か御自身に愉快を與へるわけなんですか。あなたのさうした物の云ひ方はよく聞くが、我々文學者が、昔の美學の教へるやうに、人生最高の職務などと自惚れてゐるわけではないんですよ。いや、自惚れはあるさ。併し自惚れはあつても、その自惚れを相對の世界に照らして見る位のおちつきは、今の文學者は持合はせてゐるんだ。――その自惚れは寧ろ、あんたの方がありさうぢやないか。我々に解らない文壇なんか、あなたには解り切つたものだし、さうさう、Yが解らないと云つて、我々にも未だに解らない文學なんていふものが、あなたには解り切つてゐるらしいし、文學よりも高い大きなものが解つてゐるらしいし、おまけにその高い大きなものに御自身は立つてゐる自惚れがあるらしいし。――まあ、そんな事を云つて互に爭つてゐてはキリがないが、我々だつて、今の社會などを喜んだり賞め稱へたりしてゐるわけではないんです。それだのに、文學をやらうといふのは、屹度あなたより文學が少し好きなんだらう。少しばかり好きなんだらう。――まあ、文學が少し好きだからと云つて、目の敵にして下さるな。どうせ自分の思ふ通りの傑作が書けもしないのだが、それでも、これでその道に這入つて見ると、どうともかうとも仕方がないものに打つかつて、テコでも動きの取れない氣持になつてゐるんだ。實際Yの言葉ではないが、自分には文學は解らないのぢやないか、と今更思つたりして、困つてゐるんだ。物好きは物好きだが、人の物好きなど一々責め立てる必要もないでせう。――併し貴君の人生の解つたやうな、唯物論で割切れたやうな其の自信に反したもんだ―

自分は腹の中で、こんな事を呟いてゐた。理由がなく、時も構はず、如何なる事があらうとも、いきなり並居る人間を侮辱するのは悪趣味だ。それが戰鬪的精神とでも云ふのであるか。——自分は今の行き詰つた社會を、遂つた、行きづまらない新しき社會に變へようと骨折つてゐる人々に、十分な敬意を持つてゐる。その努力に贊成もしてゐる。だが、人の心を打つ代りに、人の心におりを殘すやうなSの物の云ひ方は好まない。

今食べた洋食が、あんまりうまくない洋食であつたが、それが今更胸に閊へるやうな變曲を自分は感じて來た。耳に快くない音響などを聞くために、出席する必要もなかつた、おまけに『明後日のユウトピア』を讀んで、厚意と共に素直な同情を持つてゐたこの社會運動の先覺たるSに、今更不快な印象を受けるために出席する必要はなかつた、と考へた。

Sが坐ると、司會者がTを名ざした。Tは現代の日本文壇の老大家であり、二十何年か地味な文學的仕事をコツコツとやり遂げて來た人である。——自分はSの言葉が、若い自分などよりは、この誠實な老大家に一層氣の毒だと云ふ氣がした。

Tは苦笑を浮べがら、『もう澤山でせう』さう云つて立たなかつた。

と、別段名されたわけではなかつたが、Kが立つた。髮も髭も茫々と延びたKは、瀟逸な調子で、Yの方を向きながら、今のSの言葉には何の不快も受けた樣子はなく、

『僕はあんたの「子を打つ」といふ小說だけを、今さつき讀んだですよ』さう云ひかけると、どうしたためか、Yがそれに對して何か返事をしようとしたためだつたつたか、立上りかけたので、『まあ、どうぞ、そのままに、そのままに』とKはおどけた風に手振りをして、云ひながら、『あれを讀むと、あんたは實に子供を可愛がり、いとほしんで居ます

ね。庇つて、大切にしてやつて、舐めるやうにして可愛がつてゐますね。僕、ほんたう、そこを感心した。……僕も七年前、初めて「子をつれて」といふ小說集を出して、こんなやうに會などして貰つたが、「子をつれて」などといふ小說を書いても、どうも子供をそんなに可愛がつてゐるわけではないでせう。あつは……なかなか子供をいぢめて、打つて、冷淡で、まあ要するに、餘り子供を可愛がらないですな。ところが、あんたは可愛がつてゐる。――だが、何とかしなければいけないのは、あんたは子供を可愛がつても、あれでは、行きづまつてゐますよ。どうも動きが取れなく行きづまつてゐますよ。僕は子供をいじめても、行きづまつてゐる。あんたは子供を可愛かりながら行きづまつてゐる。僕は子供を可愛がらずでも行きづまつてゐる。お互に行きづまつてゐますな。はゝはゝゝ。――そこでこれから何とかしなければいけませんな。お互に』

Kは凜々として、そんな事を云つて、笑つて、それから又喋つて、尻切りとんぼでぺたんと腰をかけてしまつた。

自分は笑ひ出した。腹の底から笑ひ出した。こいつは眞實だと考へた。そして淚が出るほど、横つ腹をかかへて笑つた。そしてKの言葉に感心すると共に、Kのさういふ言葉が、Sの言葉で爨躇にされ、へんにむすぼれてゐた自分の心持をほごしてくれた事を感謝した。



乾板を碎く

里見弴

どしや降だつた。雲の厚みに、空は薄暗かつたが、夏らしい太い雨は、氣味の悪いほど光り、眞直に落ちて來て、耳近く幌をうつ音がすさまじかつた。

ほどなく義兄が、玄關から自働車までの四五間の隔りを、持つた洋傘も擴げずに、背なかを圓くして、ホ、ホ、ホ、と云ひながら跳んで來た。

「や、お待たせしました」

「どういたしまして。……ぢア、すぐ上野へ……」

運轉手に聲をかけて置いたから、隣にドシンと尻を落した義兄の方へ、體ごと振り向いて、「どうも、えらい天氣になつちまひましたね」

「駭いたね」

義兄は、兩手で、寢足りないやうな、腫ぼつたい顏ぢうを撫で廻した。さうしたあとには、いくらか血色が浮いて短く刈り込んだ髭の白さが目立つて來た。永いあひだ氣忠實に染めてゐたのを、近頃からよして了つたとみえて、一時に白くなつた

髪や髭が、珍らしいものに眺められた。

「お氣の毒ですね」

「なアに、君、ほかにも用事があるんだし……。昨夜(ゆうべ)の様子ぢや、こんなにならうとは思はなかつたからね」

夏の朝の、それももう六時を過ぎてゐたが、天候の加減か、人通りは少なかつた。白つぽくしぶき返してゐる路面を、搖れ走る自動車の前方に眺めながら行つた。

「然しなんだぜ、降が強いだけに、存外午(ひる)ごろになつてあがるかも知れない」

「さうですね」

「あツ、あ、あア」

義兄は遠慮なく欠伸(あくび)をして、「よく君、早く起きられたね。こんなことに、年に何遍と數へるほどでせう」

「起きたんぢやなくつて、寢なかつたんですよ」

「おや〱それア大へんだ。相變らず、仕事は夜(よる)やるの?」

「どうも、惡い癖で……」

「若いうちはいいが、年をとつてから困りやアしませんか。年をとると、時間にしてたんと寢るわけぢやアないんだけれど、それで寢のたりないのが一番こたへる」

「さうですかね」

「まだ貴方がたの年齢(とし)なら、隨分無理が利くけれど……」

「いやさうもいきませんよ。おまけに、人一倍こらへ性(しやう)がないんだから」

「然し一つは馴れだね」

「えゝ、それアもう二十年來の朝寢夜更で……」

「アハゝゝ、金箔つきか。アハヽヽ」

可笑しい可笑しくないは別として、笑ふべき場合だから笑ふ、といふやうな、謂はゞ概念的な笑ひ聲をたてるのが、この義兄の癖だつた。「金箔つきの朝寢坊は驚いたな」

「その代り、お通夜つていふと、みんなして、私のことを、まるでその方の係りのやうに云ふんです」

「成程、お通夜係りにはいゝね」

「ちつともよかアありませんよ」

出來るだけ親類交際を避けてゐる私は、この義兄ともめつたに遇ふ機會がなかつた。で、たまに顏を合はせると尙更話の種もなかつたが、さうかといつて、無理にそれを考へ出さうと努めるやうな、別にそんな氣兼も要らなかつた。

上野の驛へ來て、新聞を買ひ、待つ間もなく七時の汽車に乘り込んだ。がら〱にすいてゐた。

窓のそとに、靑田や桑畑の上などに、いつの間にか糸のやうになつた雨が、しと〱と、所詮あがりさうなけしきもなかつた。――普段からさう詳しく讀む癖のない新聞を、二度目に把りあげて、棋譜の上に目をさらしたりした。

「よく眠くなりませんね」

「うつかり寢ると風邪をひきさうですから……」

「寒い？」

「今はさうでもありませんけれど、これぢア、あつちへ行つてから、ちよつと困るかも知れない」

「あつちへ行けばなんかありますよ、僕のシャツかなんか……。然し、寝るんなら……。かうつと、……あゝ、僕の雨外套をはおつたらどう？　あれだつていくらかたしになる」

世話好きの義兄は、すぐ立つて、網棚へ手を伸ばした。

「いゝえ、よござんす、よござんす」

「さう？　大丈夫？」

どうかすると、そんな女のやうな口の利きやうをした。「ぢア、もし寝たらかけといてあげよう」

汽車のなかででも寝て置かないと、あとで困ると思ひ、さうなるやうに氣持や姿勢を用意してみたが、相憎一向眠むくなつて來ないうちに、却つて義兄の方が、コツク／＼舟を漕ぎだした。それまででも、さう喋つてはゐなかつたのだけれど、話相手がなくなり、新聞も見飽きたので、自然私は、自分一人の思ひに耽つた。

二月ほど前に、うちの兄が、好きな女と二人、死ぬ覺悟でこの同じ線路の上を乘つて行き、さうして遂に歸らなかつたのだが、――その車行中の自分たちを、遺書の一つに、「子供のやうに嬉々として戯れながら」といふ風に書いてゐるのだが、私には、その有様を、乘客の少い車室の一隅に思ひ描かうといふ興味も感傷もなかつた。兄については、もう考へられるだけ考へ盡して了つたあとだつた。私は、主に、自分自身のことを考へてゐたやうだ……。

雨に煙つた妙義山は、眺めて飽きなかつた。義兄も目を醒して、またポツリ／＼話しながら碓氷へかゝつた。かうして、山深くはいつて行くことは、私には久振りだつた。

「いゝな」

夙い秋の氣が、雨に頸垂れた薄の穂にも動いてゐた。岩にからんだ蔦なども紅くなりかゝつてゐた。

「兄さんが、もう一度秋を見てから死にたいつて云つたつていふが……」

「山はいゝなア」

私には、義兄の云ひかけた言葉が氣に入らなかつた。それ以上、この場合としては忌々しかつた。「たゞ、東京から一二時間のところにいゝ山なんぞがあつてくれないから……。あれば、無論山に住むんだがなア」

「それア山はいゝさ」

獨言の氣持で云つてゐる私の言葉に、義兄は、どうでもいゝ合槌をうつてくれた。

留守番の男に迎へられて、義兄の別莊に落ちついた頃には、可なり腹がへつて來た。急いで取りよせた仕出屋の料理が、馬鹿にうまく食へた。

廣緣を薄暗くしてゐる葡萄棚から、火山に近い地方の、輕石じみた砂地へ、ビツシヨリ／＼雨垂が落ちてあちこちに小穴が掘れてゐた。新築後擧て來た私は、可なり間數のある別莊の、人氣のない部屋々々を見て廻つて、最後にその廣緣に戻つて來て、そこに据へられた卓の上で、義兄と相談しい／＼札の包みを拵へた。——死後一月ほどして、兄の死體が、家の別莊の一室に發見された時、いろ／＼世話をしてくれた人たちに、挨拶し、禮を返すのが、その日の私の役目だつた。腹がはつて、眠氣ざして來た私は、けうとくとろ／＼しながら、禮物の上包に文字を書いたりした。

別莊番や出入の大工などは、義兄の權柄で、そこへ呼び出されて來た。役場や、町の方の、關係の薄い方面は、代理人ですますことにした。

霧雨になつたところで、つい裏山の中腹にあるうちの別莊の方へあがつて行つた。道々、別莊番の男は、事件後、そこを尋ねて來る若い男女がいかに多いか、といふやうなことから、もし建物を取り毀して了ふのなら、町の青年會で、

集會所に建て直したがつてゐる、といふやうな話を持ち出した。

六七年前に、母や兄と一緒に、私もそこで一夏すごしたことのある建物の前に來た。入口といふ入口が、嚴重に釘や鎹でとめてあつた。

「ほゝう、釘づけかい」

義兄の言葉に、案内にたつてゐた別莊番が、鄭重に一足退つて、

「さうでもいたしませんと、見に參ります連中が、なかへはいつてみたがりますし、それに警察の方からも御注意がありまして……」

「さうかい。いや、それアちつとも差支ないんだがね」

「もしなかへはいつて御覽になるやうでしたら、金槌でも取つて參りますれば……」

「どうします」

「いえ、もう結構」

「まだ少し匂ふね」

「どうも……。隨分消毒いたしましたのですけれど……」

「うん。……ひどいもんだな」

實際臭かつた。遺留品の一部を燒き捨てたといふ灰は、砂の上を、まだ黑々と地取つてゐた。——私には、たゞ穢らはしい、といふ氣持ばかりだつたが、雨戸の隙には、そこらに咲いてゐる月見草や、名を知らない灌木の花などが、夥しく挿し込んであつた。云ふまでもなく、みんな「參詣者」の志だつた、供物だつた。やたらに寫眞を撮つて行くとみ

えて、フイルムから引きちぎつた黑い紙が、家の周りに澤山ちらばつてゐた。

ほどなく、私たちは、義兄の別莊へ引き返して來て、そこに用意されてあつた自働車で、もう一つあとに殘つた用件を片づけるために、町の警察署へ向つた。――それは、かう云ふことだつた。死後一月を經て發見された兄の屍體は、生前をよく知つてゐる別莊番の男でさへ、それと見分けかねるほど腐爛してゐた。それ故、ほどたつて別室から遺書を見つけ出すまでは、どこの誰とも知れなかつたので警官は、法規の處置として、屍體の寫眞を撮り、今にも役場に假埋葬を命じるまでの手筈をつけて了つた。その、不用になつた寫眞の、印畫はもとより乾板まで、總てこの世から取り除いて了ひたいといふ遺族としての希望を、署長に逢つて懇談してみようといふのだつた。

い、按配に署長がゐて、すぐ應接間に通された。私たちが持ち出した希望は、誰が聞いても尤であり、また法に觸れるところもなかつたとみえて、快く承諾して貰へた。署長は、必要がなかつたから、印畫は一枚も作らなかつた由を述べてから、自分で立つて行つて、新聞紙に包んだキヤビネ型の乾板を持つて來た。

「これです」

と、卓の上へさし置いて、「こゝにみんな一緒に包んでありますが……」

「あゝさようですか」

「貴方がたの御覽になつてる前で毀しませう」

さう云つて、髭のある口尻に、なんともつかぬ笑皺をよせ、私たち二人を交互見やつてから、いきなり、右を拳固に固めて振りあげたが、「然し、一應御覽になりますか」

「いゝえ」

即座に斷りかけて、義兄は私の方へ振り向いた。「……どうします、それとも、見ときますか」

「よしませう」

すらりと、簡單に答へて了つたが、私の氣持はそれほど簡單でもなかつた。

(ひとつ、見てやらうか!)

遺された血族らしくもない、荒々しい、一種、復讐的と云つてもいゝやうな感情が、ピカ〱ツと閃き過ぎたりした……。

「よろしう御座いますか」

署長は、もう一度念を押すやうに、私たちの方を見た。――私の裡に、良識が克つて行くのを感じながら、靜に頷き返すと同時に、卓の上の乾板に、拳の第一擊が加へられた。不愉快たことには、それはビシリとも云はなかつた。

「あぶない! 手がア……、切るといけませんよ」

義兄が、何がな、と思ふらしく、あたりを見廻し、衣嚢に手を差し込んだ。署長の拳固は、然し、その間にも、續けうちに下つた。――私は、もう少しで噴き出しさうになつた。それを誤魔化さうとして、

「卓の角へぶつつけたらどうです」

「いや」

署長は強情だつた。

「あぶない! それアほんとにあぶない!」

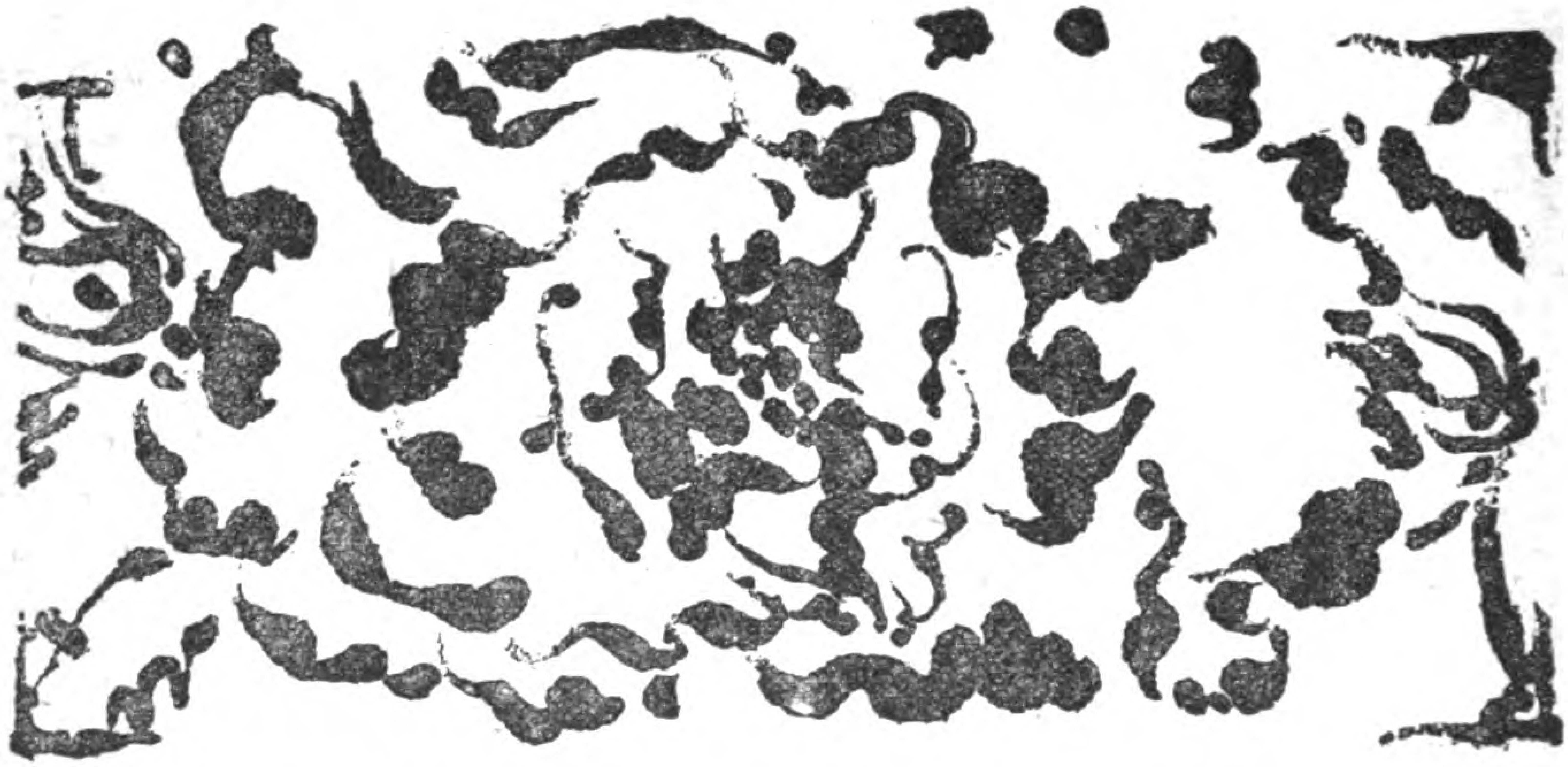
義兄は、見てゐられなくなつて立ちあがつた。

「なか〳〵丈夫なもんだな」

たうとう署長も我を折つて、そこに出てゐた茶盆の上から、青磁色をした厚手な安茶碗を鷲掴にして、糸底でゴツン〳〵とやつた。――それで、やつと割れたが、執念深く、こな〴〵になるまで、碎き續けてゐた。――この光景が、私には、なんとなく可笑しくつてたまらなかつた。……

厚く禮を述べて、そとへ出てみると、夕霽らしく、地平線近くが明んでゐた。薄墨色の雲は、一塊々々の形を見せ、高原の起伏も、いやにクツキリ輪廓を現して來た。水たまりが光つた。

四時何分に間に合はふとして、待たして置いた自動車を、眞直に停車場へ急がせた。



戲曲

澤村田之助

菊池寛

人物

澤村田之助
女房　おくに
弟子　鰕十郎
弟子　銀次郎
ひゐひ客　有馬屋重助
吉原のたいこもち　善孝

時、所　明治十一年淺草田甫千束村富士下

澤村田之助の住宅の奥座敷、十疊以上の廣間、中央に田之助の病床が取つてある。

四肢を斷たれた田之助が寢て居る。女房のおくに、弟子の銀次郎、鰕十郎等が病床を圍んで居る。女房おくにがうちわで絶えず田之助をあをひでゐる。ふ

とんを幾枚も重ね、頭に高い枕をさせ寢ながら人と話せるやうになつてゐる。銀次郎箸で西瓜を食べさせてゐる。

(芝居國の用語特殊の言葉などは全然之を無視せり)

田之助。おい氣をつけろ、露がまた落ちたぢやねえか。(口調は險しいが聲低く力なし)

銀次郎。濟みません、旦那。

田之助。濟みませんぢやねえや、てめへは一體手を何本持つてゐるんだ。

おくに。太夫、そんな憎まれ口を利くものぢやありませんよ。

田之助。憎まれ口は俺の生れつきだ、思ひ存分憎まれ口を云はねえうちは死にやあしねえぜ(田之助一寸苦しげに身もだへする)

おくに。それ御らん、腹を立てると直ぐそんなに苦しがるぢやないか。氣をのどかに持つて下さいよ。

田之助。べらぼうめ、氣をのどかになんか持つちやゐられねえや、おいら、手も足も一本もなくても芝居がしたくてたまらねえんだ、こんなさかさまになつた龜の子のやうに放り出されてゐるなあ、何よりもくやしいんだ。

おくに。そんなどうとも出來ない無理を云つたつて只私達を困らせるだけぢやないか、太夫だつて今までに五人前も十人前もいゝことをして來たぢやないか、お名殘狂言の時だつて堀の藝者と、柳橋の藝者がほめ言葉を舞台で言つて呉れたなんて、芝居道でも前代未聞と云ふぢやないか。太夫なんか冥利に盡きた方だよ。

田之助。だからおいらあ、そんな不足を云つてるんぢやねえんだ、只芝居がしたいんだ。おいらああの團十郎の奴の鼻を明かすやうな芝居がしたいんだ。おいらああいつがのさばつてると思ふと死んでも死に切れねえんだ。

おくに。それもお前、時世時節ぢやないか。

田之助。その時世時節が、おいらあ癪にさはつて……

おくに。そんなことはお前病人の考へる事ぢやありませんよ。そんなことよりも氣晴しに志津葉さんを呼んで清元でも聽いたらどう？

田之助。人のすることを聽いたり見たりするなあおいら厭だ。自分で何かしたいんだ。南部先生がいゝ義足をメリケンへ注文すると云つて下すつたがまだ出來ねえのかなあ。

おくに。（だまつてゐる）

（女中が這入つて來る）

女中。あの神田の有馬屋樣が入らつしやいました。

おくに。これはありがたい。これで太夫の機嫌が直ろうと云ふものだ。

（おくに弟子達と一緒に玄關へ出迎ひにゆく、有馬屋、六十前後の太つた品のいゝ老人、先きに立つて這入つて來る。田之助それに挨拶しようとする心持ちで頭をしきりに動かす）

田之助。旦那入らしやいませ。何時もこんなみつともない恰好ばかりして失禮いたしやす。

有馬屋。そんな會釋が要るものか。どうだ太夫、少しやあ氣分がいいかなあ。

田之助。相變らずでムいますよ。だがこうして生きてる内は旦那たちのお見舞にもあづかれると云ふ譯でそれだけお樂しみでございますよ。

有馬屋。太夫が何時も喜んで呉れるので、もつと繁々來ようと思つてるんだがこの頃は商賣の方が忙しくつて。千束村ちやあ一寸寄り道と云ふわけにもゆかぬえのでな。

田之助。御尤もでございます。だが旦那の御商賣の御繁昌は何より嬉しうございますよ。旦那には澤村座でえらひ御担をお掛けしましたからな。

有馬屋。何をお前そんな氣の弱い云ひ譯をするのだ。何時もの田之さんらしくもねえぢやないか、何時もの樣に今月の狂言の惡口でも聞かうぢやないか。

田之助。今月と云ふ今月には、わつしやあ、惡口も利きたくありませんや。何ですつて、西鄕戰爭の芝居だと云ふぢやありませんか。歌舞伎役者が、毛唐人の洋服なんぞ着て芝居をするなんざあ、舞台で生き恥を晒すやうなもんじやございませんかなあ、わつしや、そんな芝居をするよりも、斯ふして手足をもがれて寢てゐる方が、いくら氣が樂だか分りませんや。何が九代目團十郎だ。何が隨市川だ。わつしや今度寺島でも來て呉れたらうんと云つてやらうと思つてるんですよ。西鄕さんの人氣のおかげで、客を呼ばうなんて、こりやあ役者の恥ですぜ。

有馬屋。うむ。尤もだ。

田之助。わつしやな旦那、人の人氣を踏みだいにしたこと一度だつてありやしませんよ、ねえ旦那、あれやあ、明治六年でしたかね、旦那に建てて貰うた澤村座のこけらおとしでさあ、あの時はもう兩足ともありませんでしたねえ。唯船の中へ座つて、拾つた文箱の中の文を讀むだけであんな大入でしたぜ。西鄕さんの威勢を借りるなんて役者の恥ぢやありませんかね。

有馬屋。恥だとも、大恥だよ。だがこのごろの座元は金より他に眼が無えんだからな。

田之助。役者だつて變りはありませんよ。藝を見せるよりも金を取りたいんでさあ、わつしやあ、あの堀越なんかあ、この頃では大臣參議のおやしきへ、ぺこ〳〵出入りをしやがつて、それを鼻に掛けてると云ふぢやありませんか。

芝居の分らねえ、薩長の田舍者に有難てえ歌舞伎芝居見せてそれが何の手柄になりますかねえ、旦那、わつしやあ芝居は一文なしでもいゝから、芝居の解る江戸つ子に觀て貰ひてえんだ（苦しげに息をする）わつしあ、江戸つ子に江戸の芝居を見せてやりてえんだ。それを思ふと、わつしあこんな恰好でもいゝから思ひつ切り舞台の上をはひ廻りてえんだ。

有馬屋。尤もだよ、尤もだよ。金で自由になる事なら太夫さんの足一本手一本に一萬兩づつ出してやつてもいゝのだがな。

田之助。ありがたうございます。有難てえ。わつしやあ、旦那のやうにわしの心持ちが解つて下さる方が一人でもあるうちは死ななくてもいゝと思つてるんだ。ねえ旦那、さうでせう。

有馬屋。うん、生きてゐて貰ひ度いとも。わつしやあ、太夫の話を聞いてるだけで氣がせひせひするのだ。西南戰爭のだんまりを見てゐるよりか、よつぽど助からあ。

田之助。旦那、舞台で仕掛花火を使つてると云ふぢやあありませんか。

有馬屋。それが又大相な評判だよ。

田之助。兩國の川開きだと思つてゐやがるんだなあ。それが御時世に遲れねえと云ふんですかなあ、ねえ旦那、本當の藝は時世なんかに遲れるもんぢあねえでせう、さうぢあありませんか、ねえ旦那、本當の藝は何時まで立つても本當の藝ぢやありませんか。ねえ旦那さうでせう、さうだと云つて下さい。（田之助非常に苦しげなり）

有馬屋。さうだとも、さうだとも。

田之助。ねえ旦那、わつしやあ外に望みはちつともねえんだ、たゞもう少し體がよくなつたら。死んでもいゝからもう一度舞台を勤めたいんですよ。一度でいゝから、這ふだけでもいゝから出て見たいんですよ。南部先生の云つた義足

は何時來るのかなあ。

有馬屋。義足もいゝが內臓の方もよつぽど弱つてると云ふぢやあねえか、其の方の養生も肝心だぜ。

おくに。本當にそうなんでございますよ。旦那よく云つて聞かせて置いて下さいまし、食ひ物の無理許り申して困るんでございますよ。

田之助。何を云つてやがるんだ、こう寢つころがつてゐりやあ、食ふより外に樂しみはねえぢやねえか。

有馬屋。尤もだ、だが太夫あんまり食ひ過ぎて胃腸をこはしたりなんかすると只さへ弱つてる體を一倍悪くするやうなものだからな。氣をつけて養生して、もう一度俺たちのやうなひゐき客に、やんやと云はせて呉れ。

田之助（うれしそうに）がつてんです。がつてんです。今に屹度快くなりますぜ。今度舞臺へ出るときは女勸進帳をやりますぜ。わつしやな本所の師匠に賴んで勸進帳の向うを張る女勸進帳を書いてもらひますよ。そして堀越の奴の鼻を明かしてやりてえんです。（田之助苦しげに息する）

有馬屋　いつも聞いてゐるがいゝ趣向だよ。西鄕戰爭なんか、ぶつ飛ばして了ふ狂言だよ。（田之助苦しげに息をしてゐる）

おくに。太夫お前、今日あんまりしやべりすぎてるやうだよ。晩にまた熱が出るといけないからね。

田之助。何、大丈夫だ。折角、有馬屋の旦那がゐらしつてゐるんだ、おいらのしやべれるだけ、しやべつて、しやべり溜めておきたいよ。

有馬屋。ハハハハ。

おくに。本當に旦那がゐらつしやつて下さると甦つたやうに元氣がよくなるのでございますよ。旦那がゐらしつた當座

二三日は本當に機嫌がよくて、みんなが大助かりなんでございますよ。
有馬屋。そうかね。そいぢやあもつとせひぜひ來る事にしようよ。
おくに。本當にお忙しいのに御迷惑でございますわね。
有馬屋。何の迷惑なものか。わしも太夫さんの顏を見て昔のことを思ひ出すのも樂しみだからなあ。
(右側の障子を開け、たいこ持の善老あはたゞしく這入つて來る)
善老。太夫さん今日は、(有馬屋のゐるのに氣がついて)有馬屋の旦那もゐらつしやるんですか、それやあ丁度いゝ、
有馬屋。どうしたんだい。何か出來たのかい。
善老、旦那、わしやあ、今日程口惜しい事はねえんですよ。わつしや口惜しくつて、口惜しくつて、腹が立つて、腹が立つて、昨晩は一時頃から一ね入りも出來ねえんですよ。
有馬屋。どうしたんだ、どうしたんだ、わけを云つてみろ。
善老。旦那、わつしやなあこれを太夫さんのお耳に入れやうか、入れまいかと考へたのですがね、わしやあ、あんまり腹が立つて口惜しいから何もぶちまけて申しますがねえ。
田之助。(殺氣立ちて床の中に身を動かしながら)ああ云つて呉れ。云つて呉れ。
善老。實は、わしは昨夜角海老へ行つてゐたのでございますよ。本場の旦那衆のお座敷でございました。すると十時過ぎに九代目がお見えになつたのでございますよ。
田之助。うむ。
善老。すると四方山の話しのついでに、旦那衆の一人が、九代目さんに、おい田之助は此頃どうだいとお聞きになるし

やございませんか。
田之助（うなる）うゝむ
善孝。すると九代目さんが、まだ生きてゐるやうでございますよ、と斯ふ云ふぢやあございませんか。
田之助（歯を喰ひしばる）……。
善孝。わつしやあ、それだけでもカチンと來たんですよ。處が其のあとがとても辛抱が出來ねえんです。
おくに。善孝さん、お前つまらないことを言つてお呉れでないよ。
田之助。馬鹿を云へ、だまつてろ。善孝云つて呉れ。おいらあ首が飛んでも聞くぞ。
善孝。太夫さんも、旦那も聞いて下さい。そのあとで九代目さんがこう云ふんですよ『どうもあれにも困つたものでございますよ。あれひとりがゐるために、役者はみんな、あんな因果なものと世間様に思はれるのも、口惜しいから、一層早く死んで呉れるがいゝと思つてゐるのでございます』とこう云ふぢやあございませんか。わしやあ旦那衆さへゐなかつたら、九代目さんの頭を一つくらはしてやり度い位、腹が立ちましたよ。
田之助（極度に激昂する）そんなこと云つたか。ほんとうに云つたか。（田之助床中に身をもだゆる）
おくに。善孝さん、お前飛んでもない事を云つてお呉れだね。
善孝。濟みません。だつて口惜しいぢやありませんか。
田之助。おゝ、善孝、よく云つて呉れた。よく云つて呉れた。口惜しい口惜しい。堀越の野郎奴、誰か行つて彼奴を呼んで來て呉れ。
有馬屋。口惜しいなあ、もつともだ。だが仕返しの仕様はあるよ。わしがきつと見つけてやるよ。今、いきり立つても

仕様のない事だよ。
田之助。いや、今呼んで來て貰ひたいのだ、わつしやあ、一時も辛抱がならねえのだ。
（田之助眞赤になつて激昂する）
おくに。太夫さん氣を沈めてお呉れ。お前がそんなに腹を立てるのは却つて自分で身を亡ぼす樣なものぢやないか。後生だから靜まつておくれよ。
田之助。死んでもいゝ。死んでもいゝから堀越を呼んで來て呉れ。俺は彼奴に、一言、云つてやらねえうちは死に切れねえのだ、何が因果だ、何が因果だ、役者が、舞台の怪我から、かたわになるのが何の因果だ。西郷さんになつて、サアベルをつるす方がどんなに因果の恥知らずだか解らねえのだ（田之助、うめきながら苦しがる、低く）な彼奴には。ああ苦しい、苦しい。
おくに。それ御覽なさい。腹を立てるから苦しいんですよ。
銀次郎。親方、かんべんして下さい。この恨みは乾度おれたちが晴しますから。
蝦十郎。そうですとも。そんな事を本當に云つたのなら、わしやあ、杉山半六のやうに舞台の上で九代目さんに、きつと仇をして見せますぜ。
田之助。（半ば狂せる如く）手前達のやうな意久地なしに、何が出來るものか。それよりも彼奴をここへ呼んで來い。銀次郎、蝦十郎、行つてここへ呼んで來い。
有馬屋。それやあ無理だよ。平生から仲違ひのお前の家へ只で來るわけはねえよ。
田之助。（うゝむ、うめき乍ら考へる）あゝ、わしはいゝ趣向がついた。一世一代の狂言だ、彼奴の家へ行つて、今澤村

田之助が息を引き取つたと云つて呉れ。さう云へばいくら不人情のあいつだつて、かけつけて來ねえ譯はねえ、おいらあ、死んだふりをして待つてゐて、彼奴が來たら、はね起きて、うんと恨みを云つてやるんだ。あゝ、苦しい苦しい(うめく)胸が苦しい。

有馬屋。おい太夫氣を靜めて呉れ。

(おくに泣き出す)

おくに。太夫さん後生だから氣を靜めてお呉れ。そんな、あざとい狂言が出來るものかね。

田之助。いや、呼んで來い、呼んで來い。銀次郎、行つて來い、行つて來い、行つて來い。俺は死んだ眞似をして待つてゐる。俺はふとんを被つて待つてゐる。

(田之助、もだへながらふとんを被る、苦しいうめき聲だけが續く。有馬屋、おくに耳打ちする。おくにうなづいて銀次郎に耳打ちする)

有馬屋。ぢやあ、銀次郎、太夫がせつかくあゝ云ふのだからお前行つて來い。あまり、世間を騷がせないやうにな、いゝかい。

銀次郎。かしこまりました。ぢやあ太夫、行つて參ります。

有馬屋。人力で行つておいで、九代目さんへもちやんと人力を用意するんだぜ。

銀次郎。かしこまりました。ぢやあ、太夫。一寸行つて參ります。

田之助(うめくやうに)うゝむ。

(田之助、床の中でもがいてゐる)

おくに。太夫さん、お前苦しくはないかい。
田之助（低い聲でうめくやうに）話し掛けて呉れるな。おいらあ死んだ眞似をしてるんだ。
――時間の經過を示すために、カーテンを一時下してすぐ上げる――
前より一時間位經つてゐる。田之助ふとんを被つたまゝでゐる。おくに、有馬屋、善孝など稍々退屈したらしく座つてゐる。
おくに。お退屈のやうでございますから、一口差し上げませうか。こんな病人の前ではおいしくもムいませんでせうが。
有馬屋。そんな事もありませんが、今夜は御遠慮しませう。
善孝。どうしたんでございませう。使ひの銀次郎さんは遲ふございますね。
有馬屋。もう新富座はとつくにかぶつてゐるのだから、堀越さんはうちにゐる筈だがな。
善孝。（一寸田之助の方を見乍ら）うまく引つぱり出されて來るといゝのでございますがね。
有馬屋。あはゝはそうだな、うまく引つ張り出されて來るといゝんだがな。（一座しばらく無言。やがて襖や障子の開く音がして、銀次郎、あはたゞしく歸つて來る）
有馬屋。おゝ銀次郎か、行つて來たか。
銀次郎。行つて參りました。
有馬屋。どうだ、堀越は居たか。
銀次郎。それが殘念ながら御他出で御さいました

有馬屋。こいつあ、殘念だが仕方が無え。おい太夫さん、太夫さん――――。按配よく寢たやうだね、起すのは止さうか。

おくに。でも眼が醒めて怒るといけませんから起しませう。ねえ太夫さん、太夫さん。

（おくに、ふとんに近よる。）

有馬屋。あんなに、おこつてゐながら寢るとは面白い。矢つ張り名人肌だな。そこが太夫の身上だ。

（おくに呼びつゞける）

おくに。太夫さん、太夫さん、もし、太夫さん。

善孝。ひどく寢込んでしまつたもんですね。

おくに。（急に悲鳴をあげる）あ――。あゝつ――、

有馬屋。どうしたんだ、どうしたんだ。

おくに。（おろ〳〵聲で）旦那いけません、冷たくなつてゐます。

有馬屋。なんだと。

善孝。何んですつて。

（みんな田之助に近よる）

おくに。どうしませう。どうしませう。もうすつかり冷たくなつてゐますよ。

有馬屋。なるほど、こいつあいけねえ。さつき苦しがつた時に息を引き取つたんだな。

善孝。とんだことになりましたな。濟みません。濟みません。太夫濟みません（死屍に向つて手をつく）

おくに。太夫さん、太夫さん、太夫さん。

（泣く）

有馬屋。可哀想に。あんな思ひをさせ乍ら殺したくはなかつたなあ。

善孝。済みません。みんな私が至らないからです。

有馬屋。いやあ、こんなことが無くつても長くは無い人だ。みんな此の人の生れつきがそうなつてゐるんだ。おい銀次郎、こん度は本當に方々へ通知して來い。紀伊國屋さん、三河屋さん、音羽屋さん、橘屋さん。それから成田屋さんへもやつぱり、行つて來た方がいゝだらう。

（おくに、はげしく泣く）

——幕——

編輯だより

◇『改造』の讀者は我國民の精鋭である。我々は燃ゆるが如き理想に充ち、ハチ切れるやうな勇氣を内に藏して新春を迎へる。十年ののち、我が東洋、我日本を背負つて立つものは我が親愛なる讀者であらうことを期待してゐる。そして全人道の勇敢なる闘士が我々讀者の兄弟から出現することを鶴首してゐる。

◇大正十四年は國民多年の翹望であつた「普選」が實施された。三時間ではあつたが無産政黨「農民勞働黨」も成立した。しかし稀代の惡法であると稱せられた「治安維持法」も成立した。

◇本黨と政友とは野合の醜態がある。ドッチにしてもたいしたことはないが、彼等の解散を恐るゝ心理は驚くべきものがある。しかし畢竟は解散だらう。でなくてはならぬから。

◇秀英舍、共同印刷工の勞働爭議のため、發行がすこし延期され、尚、活字が不齊一であることを筆者と讀者に深く御詫びします。

◇しかし、内容は空前の充實振を示しておることが嬉しい。論壇の權威河上博士が久方振りの雄篇といひ、末弘博士の力作といひ、山内氏、猪俣氏の勞作といひ新春論壇に一大光彩を添へるものだ。又、堺氏の名文、杉村氏の長大篇、阿部、幸田氏の隨想も他誌に見られぬ特彩燦々たる名作だ。

◇創作欄も空前の出來榮えで、全文壇の大作名篇一堂に會し、此欄だけで四百數十頁に達する一大盛觀を呈した。本誌は本年に於て内容、形式兩つながら改革したいと思つてゐる。本號で發表する考であつたが、暫く沈默する。

◇「社會科學」新年號は既報の如く「マアシヤル」研究號としました。現代經濟組織を知らんとする人は勿論、マルクス學徒と雖、必讀すべき文獻だと思ひます。

◇「自然科學」も漸く創刊號が出ました。いろ〳〵の事情で發刊が遅れたことを筆者と讀者に謝します。

◇本社出版部に於て自然科學を擔當する編者一人を採用します。志望者は科學の素養と、趣味がある方を要します。一月十五日迄に履歴書を送つて下さい。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共郵税不用
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵税不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾四年十二月廿日　印刷納本
大正拾五年一月一日　發行
(特價壹圓九十錢)
東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行人 印刷人　平田貫一郎
東京府牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍
東京芝區愛宕下一ノ一
發行所　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

里見弴著

（小村雪岱装幀）

定價貳圓參拾錢
送料廿二錢

縁談窶

煩瑣複雑を極めた現代生活には疲れや倦怠が色濃く附纒ふ。里見氏の鋭犀な眼は世人が無意識裡に看過する微妙な疲れや倦怠を、極めて溫く、美しいものとして見出し、それを氏獨得の世話にくだけた筆で描き出した十數篇の小說の集成である。大まかな筋だけで面白がらせの小說が多い今日、如何に本書が再讀三讀猶盡きせぬ滾々たる興味と潤ひと慈味に滿てることか！　げに本書は人生大沙漠に横はるオアシス。一本を具へて生くる日の息ひとせよ。

發行所　東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

謹賀新年

兩角製本印刷株式會社

東京市芝區愛宕下町三ノ四

電話高輪五六五七番

谷崎潤一郎著

鮫人

定價壹圓八拾錢
送料廿二錢

妖艶なること毒草の如く、怪奇なること人魚の如き一女性を拉し來たつて、之に絡まる變轉極まりなき人事の往來を描出し、神人と獸人の葛籐を現出したる一大長篇。取材の奇、構想の大、描寫の妙、之に加ふるに文章の秀、玆に到つて全く神技に庶幾しと云ふべし。氏の藝術心境を愛する者は云はずもがな苟くも氏が藝術を是非せんとする者、此の一大篇を逸脫して語を爲し得べからず、谷崎氏の長編小說として嘖々の好評ありし此著は新春第一の讀物。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

謹賀新年

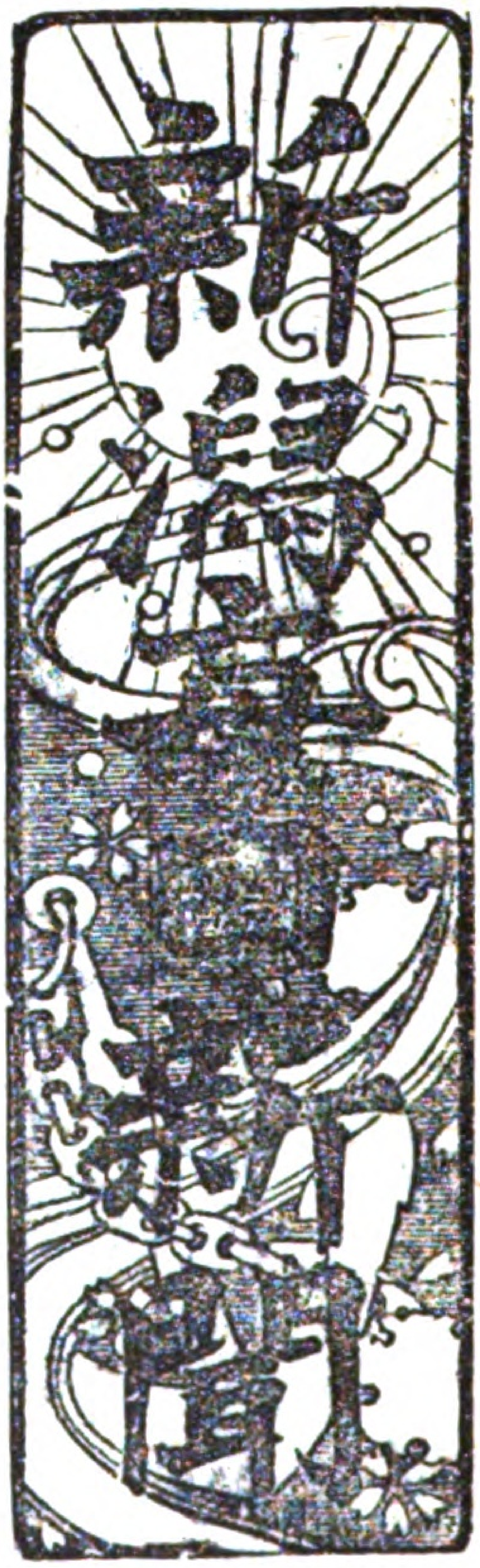
大正十五年一月元旦

長谷部製本所

東京市芝區三田四國町二ノ四號

電話高輪二八五二番

長谷部圭一


新潟新聞


遼東新報

謹賀新年

東京本店
東京市神田區錦町一丁目
電話大手 五〇九番、六〇三四番
六一〇八番、六八四三番
長六〇三二番、

大阪支店
大阪市東區瓦町二丁目
電話本局 長六五五番、六五六番
六五七番、六五八番

神戸支店
神戸市榮町通六丁目
電話元町長二六六番、一六七番

株式會社 博進社洋紙店

名古屋支店
名古屋西區玉屋町二丁目
電話東長二八〇〇番、一八〇一番

福岡支店
福岡市博多町行町
電話特長一九番

門司出張所
門司市仲町二丁目
電話長三三五番

賀正

改暦に際し大方愈々御繁榮の段奉賀上候陳ば弊社毎々御引立を蒙り御厚情難有奉謝候就ては本年も格別の努力を以て鋭意御便宜御取計申上度と存候間何卒倍舊の御愛顧賜度偏に奉懇願候

丙寅元旦

東京印刷株式會社

麴町出張所
東京市麴町區紀尾井町三番地
電話四谷 五二七二
七〇三二

本社
東京市日本橋區兜町二番地
電話浪花 五〇五五
五〇五六
五九六八
五九六九

分社
東京市深川區東大工町四十八番地
電話墨田 四五
五〇七四

新聞通信及廣告代理業として
世界的に知られたる大通信社

電通

私設專用電話（東京福岡間）

内外支局

大阪、名古屋、京都、神戸、岡山、廣島、下關、門司
福岡、佐世保、長崎、佐賀、大分、金澤、長野、仙臺
青森、函館、京城、釜山、大連、奉天、臺北、北京
上海、天津、漢口、廣東、青島、紐育、倫敦

電話

牛込 一二七
同 二九八三
同 三〇三三
同 三〇四七
同 三五三〇
同 四九〇四
同 三六二〇

牛込 五七九〇
同 七〇〇一
同 七〇一二
青山 三〇二八

專用電話 一番 二番 三番 四番 五番

東京丸之内
日本電報通信社
振替貯金口座東京一四四三番

改造社出版圖書目錄

（大正十四年十月現在）

(1) 經濟及社會

著（譯）者名	書名	内容一班	版數	型頁數	定價送料
法學博士 穂積重遠著	離婚制度の研究	○離縁狀と縁切寺（縁切寺滿德寺○クリスト敎の婚姻非解消主義○イギリス其他各國の離婚制度の研究	新刊	菊上 九四〇頁	一〇・〇〇円 内・三六
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	（一）家族制度論○家族制度の性質と機能○外五項（二）婦人問題○女子勞働問題等を檢討す	7版	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
京大敎授 宮本英雄著	婚姻の基調	婚姻法の將來○大婚間の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻等結婚に關する研究	5版	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田徳三著	社會政策と階級鬪爭	（一）社會政策序論○「社會」の發見○外三項（二）階級鬪爭と其當事者等其他の深刻なる研究	30版	四六上 五七四	三・〇〇 ・二四
法學博士 福田徳三著	社會運動と勞銀制度	（一）社會運動の理論的根據（二）勞働爭議の意義及種類（三）勞銀制度を博士一流に檢討す	15版	四六上 四二〇	二・五〇 ・二〇
法學博士 福田徳三著	ボルシェヴヰズム研究	○マルキシズムとしてのボルシェヴヰズム○レニン國家論○ボルシェヴヰズム○「資本主義への降伏」等	10版	四六上 三九四	二・九〇 ・二二
慶大敎授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	○緒論○ロオドベルトス研究○マルクス研究○雜錄（三章）○追補河上博士との論戰記錄	8版	菊上 四三三	三・二〇 ・二八
商大敎授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の効力等勞働法概論	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
ジノヴィエフ原著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合世界的名文獻の翻譯	4版	四六並 一六四	一・九〇 ・一四
ニコライ・レーニン原著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシェヰキーの成功の一根本條件○ボリシェヰーズム發達の諸期等	4版	四六並 二二四	一・二〇 ・一六

著者	書名	内容	版	判型・頁數	定價・送料
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度の社會○莊園制度の社會○分權的封建制度の社會○郡縣制度の社會等	24版	菊上 二九六	二・五〇 ・二四
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分裂○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の縱論	14版	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	21版	四六上 四〇八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	嘘の効用	○嘘の效用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智慧に捉はれた現代の法律學○其他八項	41版	四六上 四四四	二・六〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	新法學の權威が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	新刊	四六上 四二二	二・五〇 ・二二
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の囘顧○世界的破綻○歐洲再生の力○佛國、一般財政經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務等	4版	四六並 三四〇	一・三〇 ・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	近時澎湃たる社會科學問題に關し政府者に對し巨砲を放つ。學生諸君は本問題の內容發展を本書で知れ	14版	四六並 二六〇	一・三〇 ・一二
ウンターマン著 森宰一譯	哲學思想の史的考察	○著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	4版	菊上 三四三	二・〇〇 ・二二
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	現代のブルジョア哲學に對し無產哲學の新提唱新時代學徒の必讀すべき文獻	5版	四六上 三八八	二・五〇 ・二二
賀川豊彦著	生存競爭の哲學	生存競爭の原理を闡明し生存反動の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に證す	12版	四六上	二・〇〇 ・二〇
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	(一)階級篇○階級の本質○マルクス的階級概念外一篇(二)第三史觀篇○經濟史觀より第三史觀まで等	5版	菊上 三四四	二・八〇 ・二四
森戸辰男著	思想と闘爭	○震災と主義者と反動勢力○國粹主義者と政治的殺人○大杉榮君の追憶○外四項	4版	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇
細井和喜藏著	女工哀史	我國の工場及女工生活を知る世界的勞働記錄十五ヶ年の氏の血と肉とから成る本書を國民は一讀せよ	10版	四六並 四四八	二・〇〇 ・二〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○革命の文學的同伴者○アレクサンドル・ブロック○未來派○詩の形○外四項	新刊	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇

著者	書名	内容	版	判・頁	定價・送料
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	8版	菊上 三四三	二・五〇 ・二六
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	○農村問題解決の鍵鑰○小作爭議と農村破壞○外四十一項、農村問題を知らんとする人の必讀の書	5版	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	○經濟組織の改造と政治の革新○政治的議會より經濟的議會へ○產業資金の供給○外九項	5版	四六上 三九四	二・五〇 ・二二
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	○緒言○基礎的研究の必要及び其綱領○農村問題とは何ぞや○村落の研究○農家經濟の研究等	新刊	四六上 二一八	一・五〇 ・一八
マーシャル著 慶大教授 大塚金之助譯	マーシャル經濟學原理（分册三）	現代の經濟學書中、此書程、學としての生命と光の鮮かなるものはない。本篇は主として生產を解く。	新刊	菊上 四九八	三・五〇 ・二六
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	マーシャル經濟學原理（分册四）	譯者は、晩年のマーシャルに親炙したる人、原理に流れつゝある血を其儘移植したる名譯。	近刊	菊上 五一〇	三・七〇 ・二八
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	近刊	四六上	價未定
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 二三三	一・五〇 ・一八
室伏高信著	印象と傾向	著者が歐米漫遊中、彼地の文豪、政治家、社會運動家、哲學者、科學者に會見せし趣味ある印象記。	4版	四六上 四三〇	二・〇〇 ・二〇
ロマン・ローラン著 大澤章譯	先立ちて來る者	深遠たる思想と熱意ある筆致を以て世界の思想界に牢乎たる位置を占むるローランの「先驅者」の翻譯。	新刊	四六並 二九六	一・五〇 ・一六

(2) 政治及法律

著者	書名	内容	版	判・頁	定價・送料
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	11版	四六上 四一八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	○法窓閑話○誤判賠償の根本原理○軍法會議廢止論○小作人と土地所有權○法律小話（十二話）（外二篇	新刊	四六上 四三三	二・五〇 ・二二
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	8版	菊上 三四三	二・五〇 ・二六

著者	書名	内容	版	判・頁	定價・送料
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念○勞働法の研究方法○勞働法制の變遷○勞働法の理想○外六章	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	(一)現代に於ける社會思想及び政治事實の進展(二)現代日本の政治過程(三)多元的國家觀の法理	4版	四六上 三五四	二・五〇 ・二二
法學博士 森莊三郎著	法制講話	○總論○親族法及び相續法○皇室法○憲法○全國の中學師範女學校の敎科書、參考書としての最良書	4版	四六上 四五四	二・五〇 ・二二
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	近刊	四六上	價未定
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	○婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚の防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻	5版	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 三三三	一・五〇 ・一八
北一輝著	日本改造法案大綱	○緒言○國民の大權○私有財產制度○土地處分三則○大資本の國家統一○勞働者の權利○外三章	4版	菊上 一三八	一・五〇 ・一八
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の苦悶○世界的破綻○歐州再生の力○佛國一般經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務○外三章	4版	四六並 二四〇	一・三〇 ・一六
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエキキーの成功の一根本條件○ボリシエキズム發達の諸期○外五章	4版	四六並 二二四	一・二〇 ・一六
ヂー・ジノヴイエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	(一)組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動(二)勞働組合——刻下最必要の一文献	4版	四六並 一六四	・九〇 ・一四
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	○カントの平和論○カントと政治○思想問題と哲學的精神等——カント研究者に必要の一書	7版	四六上 二四八	一・五〇 ・一八
阪內務事務官 三宅司法書記官著	普通選擧法要綱	普通選擧法に對する尤も信賴すべき當局者の釋義。各府縣警察署にては皆本書を參考として購買した	10版	菊半截 一八四	・六〇 ・一四

(3) 哲學及宗教

著者	書名	内容	版	判・頁	定價・送料
文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	一般心理學を體得せんと欲する學徒のために解り易く書かれた我國で心理學の最良書	30版	四六上 三四八	四・二〇 ・二四

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	(一)序論(二)本論民族心理學(三)別論文化と歴史○文化の領域(文化の將來(四)附錄	7版	四六上 三一六	三・五〇 ・二四
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歷史哲學	○リッケルトは現代哲學の巨星、氏の哲學を尤も解り易く釋いた一書米田博士の懇切の釋義亦尊ぶべし	8版	四六上 六六六	四・七〇 ・二六
板垣鷹穗著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歷史哲學	○歷史實在の意味○歷史哲學の概念と歷史○カントの批判哲學と科學方法論○外三章	5版	四六上 三二八	一・五〇 ・一八
帝大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	○序說()本篇價値と貨幣○貨幣と實體價値()目的系列に於ける貨幣○附錄著作年表參考書	改版	四六上 四四八	三・〇〇 ・二〇
廣島高師教授 勝部謙造著	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	○傳記及び重なる著作○ディルタイの哲學的立場○精神科學論()世界觀說○藝術論○結語	8版	四六上 二八四	一・八〇 ・二〇
リッケルト原著 小川義章譯	生の哲學	理想の魂なき生の偶像を禮讚するの愚を悟り眞の生の意義を闡明せるもの新理想の巨ゲたる著者の傑作	5版	菊上 三四六	二・八〇 ・二四
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	()藝術的理念()藝術的自然○藝術家○藝術作品(觀照ー藝術の進展性を新鋭の氏が熱烈に論究す	5版	菊上 三四四	二・七〇 ・二四
佐藤繁彥著	體驗宗教の研究	(一)序論○體驗宗教の意義(二)本論○カント、シュライエルマッハー、ルッターの宗教(三)結論	4版	四六上 三三六	二・〇〇 ・二〇
スティルネル著 辻潤譯	自我經	(一)人間篇○人生○舊時代と新時代の人々○古代人○近代人自由人(二)自我篇()所有○所有人唯一者	8版	四六上 六六八	二・八〇 ・二〇
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	()物理學と認識()文藝上の描寫論と科學○物理學上の認識の問題()絕對運動論○外四篇	6版	四六上 三三四	一・五〇 ・一八
東洋大學教授 關寛之著	學校兒童心理學	○學齡兒童を研究の對象として實驗的にまた演繹的にその心理狀態を考究したる敎育的心理學である。	3版	四六上 四二二	二・七〇 ・二〇
文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	人間力の智能方面を、博士獨自の廣汎にして精緻なる立場より研究したるもの。	近刊	四六上	價未定
ヨゼフ・ディツゲン著 山川均譯	無産階級の哲學	○ディツゲンの為人と其哲學()哲學の實果○一勞働者の觀たる人間の腦髓の働きの性質	5版	四六上、三六八	二・五〇 ・二〇
ウンターマン著 森宰一譯	哲學思想の史的考察	原著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	3版	菊上 三四二	二・〇〇 ・二〇

(4) 文學

著者	書名	内容	版	體裁・頁數	定價・送料
室伏高信著	靈の王國	獨逸の政治家ラテナウの思想體系を傳へたもの人の心の崇高なものを抽出し靈の王國を建設せよと高唱す	5版	四六上	一・五〇 ・一八
日本聖公會編	鮮血遺書	三百年前キリシタンを信奉して長崎立山にて虐殺されし二十六人の殉教記錄、言々これ血涙記	近刊	四六上	價未定
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	○藝術的理念○藝術的自然○藝術家○藝術作品○觀照○藝術の進展性―植田氏は藝術哲學の權威	5版	菊上 三四四	二・七〇 ・二四
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徴	白村の唯一といつてもよい系統ある藝術を論じたもので千古の名文、情熱に富んだ立派な文學概論だ。	50版	四六上 二二四	一・八〇 ・二〇
吉江喬松著	近代文明と藝術	○近代思想と文藝○現代日本文明と藝術○大自然と文藝等を氏の流麗な文章で述ぶ。	5版	四六上 三三三	二・〇〇 ・二〇
里見弴著	文藝管見	○自序○自分自身の紹介○藝術の分野○文藝概觀○内容と表現等、文藝に志す人の必讀の良書	最新	四六上 一九八	一・二〇 ・一六
レオン・トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○革命の文學的同伴者○未來派○詩の形式派とマルクス主義等	新刊	四六上 三五四	二・〇〇 ・二〇
帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	○若きゴーホ○ゴーホの藝術○フーゴー・ヲルフの傳○晩年のロダン○美の問題について等	6版	四六上 四三三	二・二〇 ・二〇
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	露國現代の思潮文學を解剖した我國での唯一の大文獻、近代の露國文學を知る人の第一の參考書。	4版	四六上 七八六	四・八〇 ・三〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	○近代の戀愛觀(十三項)○再び戀愛を說く(七項)○三度戀愛に就て言ふ○結婚式を評す等實行日本一	120版	四六上 三七〇	二・五〇 ・二〇
理學博士 石原純著	戀愛價値論	○戀愛價値論○戀愛と道德○愛の一つの相としての戀愛の本質○戀愛と生活○現代女性の歩むべき道	7版	四六上 二八二	一・六〇 ・一八
親佛文學會編	ゆかり	クローデル大使を送る爲めに佛蘭西に關係ある文豪詩人畫家が自分の最もいい作を集めた趣味ある著書	新刊	四六上 四四六	上三・六〇 二・二〇 特六・〇〇

(7) 隨筆

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	○北郊雜記（十三項）○思潮雜記（二十五項）○雜纂（十一項）	18版	菊半上 三〇三	一・九〇 ・一八
倉田百三著	超克	○善と福との一致に就いて○人間主義と超克主義○卑しむべきものに就いて○心なき業に就いて等	34版	四六上 三九二	二・二〇 ・二〇
賀川豊彦著	星より星への通路	○星より星への通路○デオニソスの誕生○混迷の巷より	49版	四六上 三七八	二・〇〇 ・二〇
若山牧水著	樹木と其の葉	○氏の酒脫な旅行記、感想、歌道感、人生感、自然感を集めた面白く讀へらるる一書	5版	四六上 三六〇	二・〇〇 ・二〇
長谷川如是閑著	改造社隨筆叢書第一篇 犬・猫・人間	○ピヨトルの猫と私の猫○亡友四匹○猛犬ジヤツクの話○其他犬、猫、人間、家に關する隨筆	17版	四六並 四〇三	一・八〇 ・一六
堺利彦著	改造社隨筆叢書第二篇 野外劇の一幕	○野外劇の一幕○獄中を顧みつゝ○出獄後の世の中○過去の夢、未來の夢、現存の夢○外數項	5版	四六並 二六六	一・五〇 ・一六
中澤臨川著	改造社隨筆叢書第三篇 嵐の前	○嵐の前○余の態度○新藝術觀○思想藝術の超然性○態能のさまぐ○庭の花等	18版	四六上 二三四	一・五〇 ・一六
高濱虛子著	改造社隨筆叢書第四篇 朝の庭	○所謂新傾向○雜感○二葉亭主人の俳句の草稿を見る○十九日間○机上觀能○螢○外二十五項	5版	四六並 三〇五	一・七〇 ・一六
武者小路實篤著	改造社隨筆叢書第五篇 筆の向くまゝ	○アンリ・ルーソーの畫を見て○詩十二○詩と感想○雜感○舞臺監督に就て○時事雜感その他	新刊	四六並 二〇四	一・二〇 ・一四
河東碧梧桐著	改造社隨筆叢書第六篇 二重生活	○肉體美○薔薇とコクリコ○縱の橫○外的二重生活○內的二重生活○縱斷的都市○外十數項	新刊	四六並 三二〇	一・二〇 ・一六
文學博士 新村出著	南蠻更紗	○雪のサンタマリヤ○吉利支丹文學斷片○退主聖範の飜譯本○切支丹宗の遺物○外三十二項	15版	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
野口米次郎著	先驅者の言葉	○苦言○英雄崇拜の提唱○無用の長物○美感の凋落○單純性○世界心○近代生活○隅田川外十一項	4版	四六上 三二〇	一・八〇 ・一六
野口米次郎著	坐る人間の評論	○母性禮讃○重大な結果○米國人○英國人○メレヂスへ行け○詩に於ける想像の力○外數項	最新	四六上 三二六	二・〇〇 ・一八

文學博士 幸田露伴著	幽秘記	○運命○眞眞○師師○樓船斷橋○水殿雲廊○共命鳥○一枝花○泥人○玉主○碧梧紅葉○狂濤艷魂外數章	最新	菊上 三六八	二・五〇 ・二四

(8) 美術

文學博士 瀧精一著	文人畫概論	○文人畫の起源○文人畫の流派化○文人畫の原理○文、畫の原理○文人畫の精華○將來の文人畫等	5版	菊上二	二・〇〇 ・二〇
板垣鷹穗著	美術史論集 表現と背景	○ギリシャ思潮の推移と肖像の變遷外四篇（附圖四十葉）	3版	菊上 一六八	三・八〇 ・二〇
岸田劉生著	圖畫敎育論	（一）圖畫敎育私見（二）我子へ圖畫敎育（附錄）慶應義塾幼稚舎に於ける圖畫敎育（附圖五十四）	4版	菊上 三一八	三・五〇 ・二二
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	○レオナルドに逢ふ日○悲しき昨○緑色のショパン○本寺の幽影○スペインの誘惑○窓の少女等	6版	四六上 三一四	一・五〇 ・一八
木下杢太郎著	支那南北記	透徹したる美術眼と之を表現するに適しい才筆を載せて支那及び朝鮮全土の古趾名蹟を行脚したる記録	近刊	四六上	價未定

(9) 歷史及傳記

改造社編	大正大震火災誌	其内容の豐富なる其記述の正確なる其寫眞の鮮明なる其他凡ゆる點に於て類書中の白眉と推賞定評あり	3版	四六倍 八六四	一五・〇〇 ・四五
ピシャラ・ナハス著 高瀨毅譯	ツタンカーメンの生涯と時代	○埃及小史○埃及の村落○埃及の發掘○ツタンカーメンの王朝○ツタンカーメンの生涯外三章	4版	四六上 一六三	一・八〇 ・一六
村松梢風著	近世名匠列傳	○柴田是眞○島村俊明○狩野芳崖○木内喜八○橋本雅邦○竹内久一○森寛齋○旭玉山等	4版	四六上 三六六	二・三〇 ・二〇
山川均著	改版 レーニンとトロツキー	○ニコライ・レーニン○レーニンの生涯と事業○レオン・トロツキイ○印象と批評	11版	四六上 二六八	一・五〇 ・一八
大杉榮著	自叙傳	○最初の思出○少年時代○不良少年○幼年學校時代○新生活○母の憶ひ出○獄中生活○葉山事件	24版	四六上 三四四	二・〇〇 ・一八
片山潛著	自傳	勞農露國にて國賓として待遇されつゝある我國無產階級解放運動の先達たる片山翁の自傳新人の好讀物	版	四六上	一・八〇 ・一八

幸田露伴著

蒲生氏郷 平將門

定價二圓三十錢
送料二十二錢

露伴道人最近の名作として囂々との盛名ある「蒲生氏郷」と「平將門」を錄す。文豪の見たる叛將と戰國の一雄豪の面目髣髴たるものがある。新春の讀物として絶好の一書。

幸田露伴著

幽秘記（四版）

價 二・五〇
送料 ・二四

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



初春の御慶を申上げます
……今年も御買物は三越呉服店へ
謹んで新年の御祝詞を申上げます。昨年中は一方ならぬ御引立を蒙り、有難く御禮申上げます。今年も相變らず御買物は三越こ御定めの程、偏に御願ひ申上ます
一月の三越
◆呉服格安反物賣出し……(四日より十五日まで)
◆新設計「子供の部屋」丼に子供用家具陳列會……(五日より二十日まで)
◆石橋和訓氏日本畫展覧會……(七日より十二日まで)
◆日本漫畫會第三回展覧會……(七日より十五日まで)
◆羊毛工業會主催モスリン應用製品陳列會……(七日より十五日まで)
◆地方よりの御注文は當店通信販賣係へ御用命を願上げます
東京
三越呉服店

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

株式會社秀英舍印製

第八巻第一號 一月號 定價金壹圓九拾錢